

中央自動車道長野線  
埋蔵文化財発掘調査報告書15

— 長野市内その3 —

**石川条里遺跡**

**第2分冊**

1997

日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会  
(助)長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線  
埋蔵文化財発掘調査報告書15

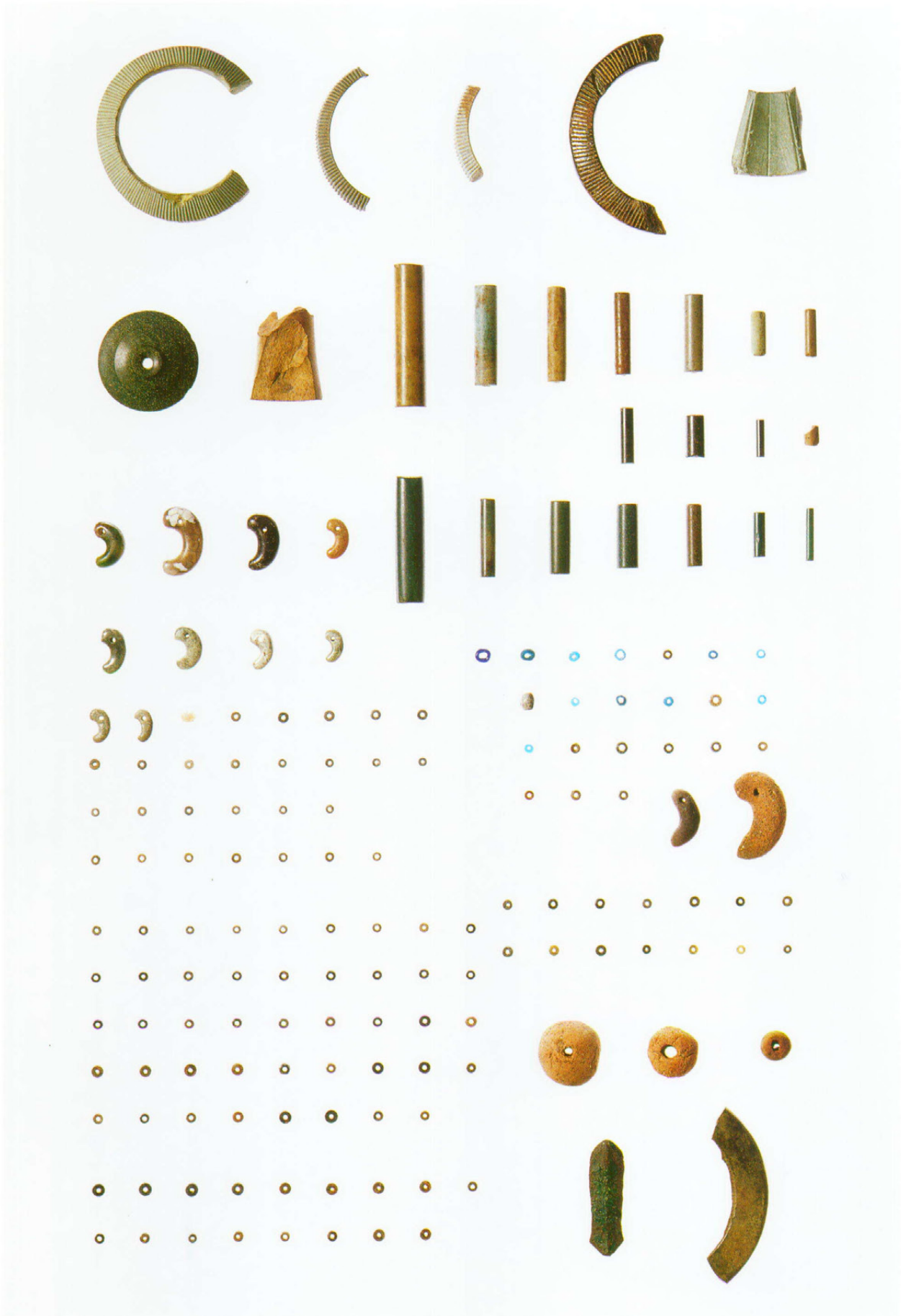
— 長野市内その3 —

**石川条里遺跡**

**第2分冊**

1997

日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会  
(財)長野県埋蔵文化財センター



石川条里遺跡微高地域出土玉類・石製腕飾類他

## 例 言

- ・本書は中央自動車道長野線工事に関わる長野県長野市石川条里遺跡の発掘調査報告書の第2分冊である。本分冊では微高地域の古墳時代遺構・遺物を扱う。全体の調査経過、発掘方法、土層、あるいは微高地の古墳時代遺構と同時期の水田遺構については第1分冊、微高地出土の古墳時代木製品の詳細は第3分冊を参照されたい。なお、本書では微高地域に関わる科学分析を掲載しているが、一部は微高地の中世遺構出土のものも含まれている点は注意されたい。
- ・本報告の作成以前に遺跡について公表したものがあがるが、本報告書をもって最終的な報告とする。
- ・本書の執筆は第1章4節、第3章1・6節、第5章が白居直之、それ以外は市川隆之が担当し、編集は調査第1課長百瀬長秀の指導の元に白居と市川があたった。
- ・本書に掲載した図版の縮尺は各図に掲載したが、概略は以下の通りである。  
遺構－土坑 1:20、溝跡断面 1:60 遺構割り付け図 1:100  
遺物－土器 1:4、玉類 1:1、石釧・車輪石・紡錘車形石製品・筒形石製品・銅鏡・銅鏃 1:2  
土製模造具・ミニチュア土器・土錘・不明粘土塊・羽口・骨角未製品 1:2、骨角器 1:1  
支脚 1:4、砥石・石製品 1:3
- ・掲載図版に使用したスクリーントーンは基本的に第1分冊に準ずるが、必要に応じて例示した。
- ・発掘調査から本書の作成までには関係各位に様々な面で助言や支援を受けた。特に本書の作成では都出比呂志氏、加納俊介氏、赤塚次郎氏、比田井克仁氏の助言を賜ったことを記して感謝の意を表したい。
- ・発掘調査の記録類、遺物に関しては長野県立歴史館に保管されている。



# 本文目次

## 例 言 目 次

### 第1章 序 言

第1節 遺跡の概要	1
第2節 調査と整理の概要	1
1 調査の経過と調査方法	
(1) 試掘調査 (2) 昭和63年度の調査と冬期整理 (3) 平成元年度の調査と冬期整理	
(4) 平成3年度の調査	
2 整理の概要	
(1) 整理の経過 (2) 遺構の整理方法 (3) 遺物の整理方法	
第3節 地形と土層	7
1 地形環境	
2 土層	
第4節 周辺遺跡の概要と善光寺平南部の空間構造	10
1 周辺遺跡の概要	
(1) 千曲川左岸の主要遺跡概要 (2) 千曲川右岸の主要遺跡概要	
(3) 4～5世紀代の主要古墳の概要 (4) 窯跡	
2 大溝区画特殊遺構群を取り巻く空間構造	
(1) 居住域の様相 (2) 古墳の変遷 (3) 遺跡景観 (4) 地域集団と領域	

### 第2章 遺 構

第1節 遺構の概要と本報告の扱い	26
1 遺構の概要	
2 遺構の掲載方法	
(1) 微高地域の遺構の区分 (2) 遺構の時期決定と遺構の種類	
3 土器出土に関する計測の記述方法	
(1) 土器の遺存度計測 (2) 遺存度区分	
第2節 微高地西側低地境の遺構	40
1 微高地西側低地境の遺構概要	
2 微高地西縁辺部の遺構	
(1) 溝跡 S D1053 S D1073 S D1074	
(2) 遺物集中 S Q1002 S Q1005	
3 微高地南西縁辺部の遺構	
(1) 溝跡 S D1058	
(2) 遺物集中 S Q1004	
第3節 微高地中央部の遺構	52

1	微高地中央部の遺構概要	52
2	土坑	52
(1)	土坑の概要	52
(2)	井戸跡	66
	S K1022 S K1023 S K1025 S K1033 S K2057 S K2063 S K2172 S K2185	
	S K2207 S K2297 S K2313 S K2436 S K2442 S K2473 S K2480 S K2492	
	S K2561 S K2648 S K2746 S K2756 S K2757 S K2759 S K2827	
(3)	柱穴跡	92
ア	建物跡・柵列跡	100
	S T2009 S A2007・2008 S T2010 S T2011 S T2012 S T2013 S T2014	
	S T2015 S A2009 S A2010 S A2011 S A2012 S A2013	
イ	柱穴跡の可能性のある土坑	113
A	S T2009、S A2007・2008周辺の柱穴跡の可能性のある土坑	114
	S K2066 S K2067 S K2076 S K2077 S K2078 S K2085 S K2127 S K2128	
	S K2129 S K2151 S K2164 S K2171 S K2173 S K2490 S K2584	
B	その他の柱穴跡と思われる土坑	120
	S K1021 S K1042 S K1060 S K1067 S K2010 S K2013 S K2020 S K2031	
	S K2105 S K2169 S K2178 S K2228 S K2246 S K2285 S K2348 S K2351	
	S K2367 S K2376 S K2377 S K2389 S K2414 S K2421 S K2429 S K2430	
	S K2448 S K2478 S K2622 S K2749 S K2750 S K2753 S K2755 S K2828	
	S K2833 S K2863 S K2870	
(4)	その他の土坑	128
	S K1019 S K1031 S K1032 S K1034 S K1035 S K1037 S K1041 S K1046	
	S K1050 S K1055 S K1056 S K2003 S K2004 S K2005 S K2014 S K2016	
	S K2017 S K2018 S K2019 S K2023 S K2025 S K2026 S K2027 S K2030	
	S K2032 S K2035 S K2039 S K2047 S K2048 S K2049 S K2052 S K2053	
	S K2054 S K2056 S K2058 S K2060 S K2061 S K2079 S K2086 S K2098	
	S K2101 S K2102 S K2103 S K2104 S K2108 S K2112 S K2113 S K2119	
	S K2120 S K2121 S K2123 S K2126 S K2148 S K2152 S K2153 S K2154	
	S K2156 S K2167 S K2170 S K2182 S K2183 S K2184 S K2187 S K2188	
	S K2189 S K2192 S K2194 S K2195 S K2196 S K2197 S K2198 S K2199	
	S K2201 S K2202 S K2203 S K2208 S K2209 S K2210 S K2212 S K2251	
	S K2255 S K2256 S K2258 S K2259 S K2268 S K2280 S K2282 S K2287	
	S K2290 S K2291 S K2298 S K2299 S K2302 S K2311 S K2312 S K2317	
	S K2322 S K2323 S K2325 S K2330 S K2331 S K2333 S K2339 S K2340	
	S K2342 S K2343 S K2345 S K2346 S K2357 S K2360 S K2361 S K2363	
	S K2374 S K2378 S K2382 S K2386 S K2387 S K2390 S K2401 S K2403	
	S K2406 S K2410 S K2413 S K2422 S K2432 S K2439 S K2440 S K2444	
	S K2445 S K2446 S K2447 S K2449 S K2482 S K2512 S K2608 S K2744	
	S K2745 S K2747 S K2748 S K2751 S K2758 S K2831 S K2832 S K2843	

	S K2865 S K2868 S K2871 S K2874 S K2878 S K2879	
3	溝跡	213
	S D2014 S D2015 S D1059 S D1060・1061 S D2022 S D1007 S D1016	
4	遺物集中	254
	S Q2001 S Q2002 S Q2003 S Q2004 S Q2005 S Q2006 S Q2007 S Q2008	
	S Q2009 S Q2010 S Q2011 S Q2012 S Q2013 S Q2014 S Q2015 S Q2017	
	S Q2020 S K2286 S K2335~2337 S K2362 S K2373 S Q2016	
5	焼土跡	271
	S F2001 S F2002 S F2003 S F2004 S F2007	
6	性格不明の遺構	272
	S X1001 S X2002	
<b>第3章 遺物</b>		
第1節	古墳時代前期の土器群の分類	275
第2節	石製腕飾類・玉類・銅鏃・銅鏡他	320
	1 車輪石 2 石釧 3 筒形石製品? 4 紡錘車形石製品 5 勾玉 6 管玉	
	7 白玉 8 棗玉 9 ガラス小玉 10 算盤玉 11 銅鏡 12 銅鏃 13ベンガラ	
第3節	土製品	333
1	ミニチュア土器 2 土製模造具 3 土製紡錘車 4 連結小型丸底土器 5 羽口	
	6 漆付着土器 7 支脚 8 土錘 9 粘土塊	
第4節	石製品	343
	1 砥石 2 使用・加工痕を有する礫	
第5節	獣骨・骨角器	346
	1 獣骨 2 骨角未製品 3 骨角器	
第6節	木製品	351
	1 出土状況の概要 2 まとめ	
<b>第4章 考察</b>		
第1節	遺跡の構造	360
第2節	本遺跡の諸様相のまとめ	365
第3節	遺跡の性格	375
<b>第5章 結語</b>		
<b>付章</b>		
第1節	ベンガラ・漆の同定と羽口の分析	387
第2節	石川条里遺跡出土種実遺体の同定	393
第3節	石川条里(微高地)遺跡(長野市)出土の古墳時代ならびに中世の人骨と獣骨	402
第4節	石川条里遺跡出土胎土分析	418
遺物実測図・土坑別土器遺存度グラフ・遺構割付・土器観察表・土坑一覧表・写真図版		

# 第1章 序 言

## 第1節 遺跡の概要

石川条里遺跡は長野県北部の長野市南部に所在し、中央自動車道長野線工事に伴って昭和63年度～平成3年度にわたって調査された。遺跡は千曲川左岸の後背低地に立地し、その名称は地表面の条里的地割に因んだものであるが、弥生時代から古墳時代前半にかけて県内でも中核的な位置を占める当地域にあって、それを支えた重要な水田遺跡と捉えられていた。しかし、今回の発掘では南部を中心に小微高地がいくつか検出され、比較的広範囲に調査された調査域中央部の小微高地は縄文時代、古墳時代、中世の3時期を中心とした遺構が確認された。なかでも古墳時代の遺構は大量の土器・炭化物を含む土坑群を幅10～13mの溝が囲う特異な配置となり、石釧・車輪石・銅鏡・銅鏃・各種玉類など古墳に埋納されるような遺物も出土したことから特殊な遺跡であることが明らかになった。遺跡周辺は長野県下でも比較的古い前方後円墳が密集する地帯でもあり、本遺跡はその内容からも前方後円墳を築造した首長層との関連をもつと思われる。そうした特殊性や出土遺物の膨大さから小微高地域の古墳時代遺構群は、石川条里遺跡の他時代の遺構・遺物や古墳時代の水田遺構とは別に扱う必要があると考え、第2分冊をこの小微高地域の古墳時代の遺構に当てることにした。なお、石川条里遺跡全体の調査概要、同時期の低地域水田遺構に関しては第1分冊、小微高地域で出土した木製品類は第3分冊に掲載しているので別途参照されたい。

## 第2節 調査と整理の概要

### 1 調査の経過と調査方法

調査以前では小微高地域の古墳時代遺構はまったく予想されておらず、しかも未経験の遺構であったことから調査所見の蓄積と共に調査方法が変化していった経緯がある。概略の調査経過を述べておくと、昭和62年度に調査対象範囲内で長野県教育委員会文化課（現文化財保護課）の試掘が行われ、それを受けて昭和63年度から平成元年度にかけて本格的な調査が実施された。その後、小微高地域では平成3年度に残件となっていた市道と高速道路交差点部を追加調査し、すべての調査を終了している。整理作業は平成3年度の後半から本格的に開始され、平成9年度に本分冊を刊行して終了している。以下に年次をおって古墳時代遺構の調査方法の概略を記す。

#### (1) 試掘調査（昭和62年度）

調査に先立つ昭和62年度、高速道路予定地内で長野県教育委員会文化課（現文化財保護課）による試掘が実施された。この時点では未買収地もあって広範囲の試掘調査はできていなかったが、小微高地域では⑧-2区にあたる地点で試掘が行われた。その結果、縄文時代の遺構は確認されたが、試掘範囲が狭かったこともあり、古墳時代の遺構についての情報は得られていなかった。



## (2) 昭和63年度(1988)の調査と冬期整理

前年度の試掘調査は試掘可能な地点の制約があって情報量は少なかったが、それまでの周辺調査から調査域内の大半は水田遺跡であろうと予想し、調査準備が進められていった。しかし、この年は工事が本格的に開始されていなかったものの、未買収地が残存し、機材・排土輸送道路などの条件整備に手間取ったことから本格的な調査着手は初夏ごろとなった。そして、情報不足は、調査開始の際に調査地区周囲に設定した排水トレンチの情報で補いながら調査を展開していくことにした。こうして⑤-1区から調査が着手されたが、トレンチで土坑(後のS K1019)が検出されると共に、従来の所見から存在が予想されていた平安時代の洪水砂層が確認できなかった。このことから調査地は微高地の可能性があると思われ、調査地区周囲のトレンチ掘削を中断して面的に表土を剥いで遺構を検出する調査方法に変更した。そして、順次遺構を検出していくなかで中世の堀やS K1022・1023のような古墳時代の土器を多量に出土する土坑、木製品を含む大規模な溝跡(S D1016)が存在することが判明した。こうして、多数の居住遺構も検出されたことから調査計画の大幅な見直しが必要となった。そこで、工事工程との調整が計られ、微高地域では⑤-1区に加えて⑤-2・⑧-1・⑧-2区も新たな調査班を編成すると共に、県教育委員会文化課(現文化財保護課)の応援も得ることになった。また、一方で微高地以外の低地域を含む全域に試掘坑を開けてプラントオパール分析を実施し、遺跡全体像を把握する調査も並行された。こうした新たな展開によって、⑤-1区で検出された大溝(S D1016)が東側の⑤-2区、南側の⑧-1区にも確認され、遺跡周囲が大溝で取り巻かれている可能性が知られた。さらに⑤-2区ではS D1016の外側に非常に規模の大きな土器集中が存在することも判明した。なお、⑧-1区では重機による表土剥ぎの際に焼土ブロックや土器の集中が検出されたので、他の調査地区よりもやや高い調査面で遺構を検出した。そのため、第1面から1枚下の土層で行った見逃し遺構確認の第2面で土坑がかなり検出され、上面で検出された土坑の認定にやや不安を残すことになった。また、特殊な遺跡であることが明らかになるとともに、新聞紙上でも取り上げられ、調査成果を公表すべく夏と初冬の2回にわたり現地説明会を実施した。以上のように初年度は予想もしていなかった特殊遺構の検出によって調査計画の大幅な見直しや調査体制の再編成を行ったが、12月には調査を終了した。

初年度古墳時代遺構の調査方法は土坑の場合、1/10の縮尺で遺物出土状況図を作成しながら遺物を取り上げる方法を取った。S D1016は規模からも人力ですべて掘り出すことは難しいと判断されたので、木製品の出土する土層までは重機で掘削し、あとは人力で精査していくことにした。また、遺物の取り上げ方法に関して、木製品は空撮後に簡単なスケッチに番号を記入し、土器等の目立つ遺物は点で図化しながら取り上げた。しかし、時間の経過と共に存在が確認されながらも詳細な様相がつかめない縄文時代の遺構は大きな不安材料となってきたため、上面の調査方法を合理化する努力が模索されるようになり、遺物出土状況の図化に写真実測を導入するとともに、取り上げ番号や遺物の出土レベルの記録は別にポラロイド写真に直接記入していく方法にかえた。この方法はいくつかの土坑とS D1016の木製品に関して実施している。⑤-2区のS D1016に関しては木製遺物のみこの記録方法を採用したが、土器については時間的な制約から出土状況の記録を取らずに取り上げた。また、各調査地区ごとに進行状況にずれ生じてくるようになったことから同一調査面での全体の写真撮影は困難となり、途中から空撮を導入して写真を合成できるようにした。

この年の冬期整理では遺構整理と木製品整理を行ったが、併せて初年度の調査所見のまとめと来年度以降の調査課題を話し合う検討会が内部で行われた。その概要は以下のとおりである。

- ①本遺跡で検出された土坑は大量の炭化物と土器出土が特長的に見られ、焼却を伴う廃棄遺構と思われた。しかし、子細にみると土器の廃棄の仕方は多様で、破片のみ、略完形・破片出土、完形の単体出土など

のようにいくつか類型としてまとまる可能性も指摘される。これが時期差なのか行為の違いなのかは整理段階での土器の検討に委ねることにした。また、土坑内の炭層や焼土層からは何らかの火を伴った行為の存在が推測されるが、土器の廃棄と共に遺跡内のどこで火を使用する行為が行われたかの解明は次年度の調査課題とされた。さらに、土坑からは玉類が出土しているため次年度では土坑埋土のふるいによる選別を行うべきであることを確認した。

- ②古墳時代の大溝 S D 1016 が土坑分布域を取り囲むとみられたが、この大溝内から炭層や炭化した木材が多量に確認され、しかも炭層は部分的に数枚確認できた。この大溝内の炭層は土坑内の炭層と類似した行為の存在を想定させるものの、規模や溝と土坑の遺構種の違いに関連して、火を伴う廃棄行為の契機や時期、行為の内容の違いが問題とされた。そして、時期差を解明するために S D 1016 内の炭層前後の土器を層別に採取することや、炭層の枚数と範囲を確認する作業を行う必要があると指摘された。さらに S D 1016 は人工の溝と思われるが、その掘削土の処理方法が明らかでなく、整地に使用されている可能性も想定して調査区周囲の土層図を作成することを確認した。
- ③遺跡全体の評価については、石釧・鏡・銅鏃のように古墳へ埋納されるような遺物が出土することから、古墳へ埋葬されるような人物が関わった遺跡であることが調査担当者内部ではほぼ共通した認識となった。しかし、遺跡での具体的な活動を描き出すとなるとどのように捉えて良いか非常に困惑した。そのなかで、規模が小さいことからより個別的な契機で形成されたと思われる土坑への廃棄行為と、規模が大きく遺跡全体に関わる溝（S D 1016）と遺物集中（S Q 2016）への廃棄行為の2種が大きな鍵を握るであろうと推測された。土坑については、奈良県纏向遺跡の土坑との類似から農業祭祀に関わる所産ではないかとする意見が提起された。さらに、農業祭祀とするなら1年を1サイクルであると考えられたが、実際の土器型式からみた時間幅では土坑数が多すぎるので、1年に1回ではなく1年に複数回の行為が存在する可能性も想定された。そこで、土器廃棄を伴う行為の季節性を解明する方法を模索することも次年度以後の課題として挙げられた。また、一方の S D 1016 については木製品・建築材の廃棄、さらに炭層の形成については遺跡廃絶時の所産と考え、しかも溝内の出土に限定される特殊な石製腕飾類、鏡・銅鏃から首長層の関わりを想定すると、葬送（首長交代祭祀）に関わる行為も行われているとする意見も出された。以上のように本遺跡では2種の廃棄行為が土坑と溝跡・遺物集中という別種の遺構でそれぞれ行われた祭祀場ではないかとの意見にまとまってきた。そして、次年度以後はさらにこれを検証するための諸課題がまとめられたのである。

### (3) 平成元年度（1989）の調査と冬期整理

この年には本格的な高速道路の工事が開始され、調査と工事が平行することになった。しかし、前年度の調査によってある程度全体像が予想できており、微高地域の⑦区・⑩区の2地区を中心に微高地縁辺の⑤-3区と⑩-2区、さらに県道下の一部を対象として調査体制が組まれた。なお、この年には北側隣接地で圃場整備事業に伴う長野市教育委員会によるトレンチ調査が実施され、古墳時代の S D 1016 の北辺の位置が明らかになることが期待されたが、数本のトレンチが設定されたものの、北辺は検出されなかった。

土坑の調査方法は玉類の採取を目的として埋土ふるい選別を追加した以外は、基本的には前年度と同様であった。土坑埋土のふるい選別には稲の種苗選別用のカゴと砂利等選別用の振動機械・小型ポンプが準備され、土坑の埋土はそのままでは細かく砕けないため土嚢袋に採取し、しばらく水に漬けて柔らかくした後小型ポンプで水を掛けながら自動振動フルイで土分を溶かして玉類を採取する方法を取った。その結果、すべてではないが、いくつかの土坑で白玉が検出され、肉眼では識別できなかった各種の種子類、さらに小型の骨鏃も得られた。季節性の解明については花粉分析と出土種子から類推する方法を取ったが、

種子分析からは秋に収穫できる種子が多いものの、果肉がついたままではないので断定までには至らなかった。また、土坑に廃棄された炭の生成場所については⑩-1区のS K2874において土坑埋土の炭化物層が土坑の外部へ続いていく状況が確認され、さらに土坑脇で焼土が検出されたことから土坑の脇で火を焚いている可能性が想定された。また、この土坑外へ続く炭化物層から部分的に旧地表面が残存し、それは遺構検出面から15cmほど上部であることが判明した。

S D1016に関しては基本的な手順は前年度と同様であったが、主な土器は図記録に残し、それ以外は2m四方のグリッドごとに採取することにした。このS D1016調査では炭層の範囲の確認とその前後での層別土器採取、溝への土器廃棄地点の特定が課題とされていたが、調査範囲では主な炭化物層は一枚で、複数認められる場合でも土器や炭化物を伴う例が判然としなかったため、炭化物廃棄が複数回に及ぶと断定できなかった。土器の層位的な採取については、⑦-2区ではS D1016埋土の土層の広がりや対応関係がうまく把握できず、層位別に採取できなかったが、⑩-1区では一定の成果が挙げられた。また、S D1016掘削土の処理方法についてはS D1016区画の内部で盛り土と特定できる土層は確認されず、調査域外の別の場所に搬出された可能性も想定された。

前年度の課題は十分明らかにできなかったが、新たに判明したこともある。まず、S D1016区画範囲の全体形は東辺の⑩区では北側が円形、南側が方形で、見方によっては前方後円墳形にも見えるが、西辺にあたる⑤-1～⑦区では直線的で直角に曲がるのが判明した。しかし、全体の形をどのようにみるかは調査中では結論が出せなかった。なお、S D1016には古墳時代の豪族館のようにいくつか台状の突出部が存在することも確認できた。また、前年度の調査では⑧-1区で漆付着小型丸底土器の出土が知られていたが、⑦-2区では羽口も数点出土し、この遺跡で手工業生産が行われている可能性も窺えるようになった。このことから、単純に祭祀遺跡とはできないとする意見も調査班内部で出された。新たに石釧2点と車輪石が出土したが、1点の滑石製石釧は土坑出土とS D1016出土品が接合する事実が明らかになった。

この年は工事期限や次の遺跡調査への展開の関係で8月前後に調査を終了した。また、他遺跡調査が1月に突出した上に次年度の調査準備もあったため、冬期の内部検討は十分行われなかった。

#### (4) 平成3年度の調査

この年は残件であった微高地東端部の高速道路と交差する市道下部分のみ調査された。ここでは狭い調査地区内に中世の堀がかかって古墳時代の遺構は検出されなかった。これをもって、高速道路地点の石川条里遺跡微高地域の調査は終了した。そして、この年から本格的な整理作業が着手された。

## 2 整理の概要

報告書刊行へむけて整理作業が本格化したのは平成3年度の後半からで、本報告書刊行の平成9年度まで継続した。整理作業の大半は膨大な古墳時代の土器を中心とした遺物整理に費やされているが、以下には整理の流れと種別の遺物整理方法にわけて記述する。

#### (1) 整理の経過

整理作業は調査実施年の冬期に行う仮整理の冬期整理と、報告書刊行と収納へむけての整理の2段階にわけて進められた。報告書刊行へむけた整理作業は平成3年度から始まり、まず、脆弱な土器の樹脂(ボンコート)含浸による補強と土器の注記を中心に進め、一方で実測用土器の選別と遺構整理、写真の台帳の作成を行った。平成4年度は前年度からの樹脂含浸を継続すると共に、秋頃から整理作業を拡大して、土器の注記作業・土器の計測・接合作業に着手し、合わせて復元作業も本格化した。また、骨や種子類の

選別と台帳付けを行った。平成5年度は接合作業と土器の計測、復元作業を行うと共に、後半から土器実測に移行した。この間に遺構の整理にも着手したが、継続的に整理するところまでは至っていない。平成6年度は土器実測を中心とし、写実実測も導入して3月まで継続した。平成7年度は遺構の整理に主体を置き、報告書へむけての図版作成と写真の焼き付け、遺物の写真撮影を中心に進められた。平成8年度はトレースと図版作成、原稿執筆を進め、第1分冊・第3分冊を刊行、さらに平成9年度は第2分冊の刊行に至った。

## (2) 遺構の整理方法

発掘調査から報告書の刊行までの時間的間隔が空いたことや、担当者の異動が予想されたために冬期整理と報告書刊行へむけての2段階の整理を行った。その概要は以下のとおりである。

### ア 冬期整理

調査時に取られた記録は写実実測図、あるいは手測図、ポラロイド写真など多様で、特に遺物出土状況の記録類は多岐にわたった。また、写実実測と併用したポラロイド写真など長期保存の効かない記録類もあるため、これらの記録類の矛盾や記載を調整・総合化してトレーシングペーパーに写し取った2次原図を作成し、所見を記述したカードを添付した「遺構カード」にまとめた。これ以外に写真のアルバムに遺跡名や撮影遺構や方向を記入する作業を行った。

### イ 報告書作成へむけての整理

冬期整理で作成された遺構カードにもとづき、遺構番号を整理し直し、あらためて写真類と2次原図のトレースコピーを添付したカードを作成した。このカードは個別遺構ごとにあらゆる記録をまとめたもので各遺構の資料が一目でわかる利点があったが、作成に手間がかかる問題点も残された。これらの記録類と遺物台帳をもとに個別遺構の時期決定を行い、時代ごとに個別遺構図の掲載方法や掲載図を決めると共に全体図を作成した。また、調査記録類から必要に応じて新たな作業図を作成した。この遺構整理のなかで最大の問題は遺構時期と種類の認定であった。仔細は後述する。

## (3) 遺物の整理方法

取り上げられた遺物のなかで骨・種子・金属製品・木製遺物・玉類については調査時から選別されていたが、それ以外の遺物は一括して取り上げられており、これらの遺物は洗浄、注記を経て種類別に振り分けられた。以下に種別に記述する。

### ア 土器

土器の整理は以下の手順によっているが、作業内容についていくつか補足しておく。

洗浄→ボンコート含浸→注記→遺構別出土土器袋数の確認→接合作業→計測1→実測用土器選別→(復元)→実測→復元→計測2→写真撮影→収納(→トレース・図版作成、写真図版作成)

#### A ボンコート含浸

本遺跡出土土器が非常に脆弱で表面の痛みが著しく、整理作業中でも磨滅してしまうことが予想されたため、当時の保存処理担当の白沢勝彦氏の助言に従い樹脂で固めることにした。具体的な方法としてはボンコートの水溶液に土器を浸し、十分含浸したところで表面を水洗い処理した。これにより、表面がかなり硬化して土器も扱い易くなった。しかし、土器の重量は前よりも増しており、本報告で使用する土器重量とはボンコート含浸後の重量であることは注意されたい。

#### B 遺構別出土土器の確認

取り上げた土器の存否をチェックするための作業であったが、この作業ではいくつか図面に記載されな



がらも不明となった土器、図の記載よりも大量の土器が存在しているものがみられた。これは土器取り上げ袋の記載の混乱と土器洗浄段階での混乱で生じたと思われた。できるだけ、本来の遺構を明らかにするようにつとめたが、混乱を解決しきれなかったところもある。

### C 接合作業

基本的に出土遺構ごとに接合作業を行い、遺構間の接合作業は実施していない。これは出土土器量が膨大すぎて時間的な制約からも接合関係を見切れないと判断したことが主な理由である。なお、遺構種ごとの接合作業は、土坑では各土坑ごとに接合作業を実施し、S D1016・S Q2016のような大規模な遺構は調査で使用した2 mの調査グリッドごとに接合を行い、その後器種別に分類して、8 m四方の中地区、さらに隣接する中地区間で接合をみた。このように数段階にわけて徐々に範囲を広げて接合作業を繰り返したが、S D1016・S Q2016に関しては特定器種に絞っても量が膨大であるため、接合が十分とは言い切れないところがある。

### D 計測1

これは調査時に土坑毎に出土土器量・器種組成が異なる傾向が窺えていたので、土坑毎の出土土器量・器種別出土量を数値的に示すことを目的とした作業であった。具体的には土坑ごとに接合作業を行い、器種別・全体の土器重量と破片数、接合後の破片数・口縁部破片数・底部破片数、さらに肉眼観察に基づいて同一個体と思われる土器をまとめて推定個体数を出してみたものである。なお、破片数は調査以後に割れたと思われる破片も接合しない限りは1点として計測している。このなかで、土坑全体の重量・破片数については大きな誤差はないものと思われるが、その他の計測方法はいくつか信頼度に不安を残している。まず、個体数の推定に関しては土器の出土量が少ないほど信頼度は高いが、土器の出土量が多いほどその数値には不安が残る。また、器種の認定に関してはできるだけ小破片も含めて計測しようと考えたが、小破片は器種認定が曖昧となる傾向があった。また、計測2とは計測時期が異なっているため器種ごとの個体数が一致しないことや、厳密な器種分類はこの計測作業の後に行われたこともあって器種の分類の認識が異なる問題も生じた。結果的に計測1の信頼度が低いものとなり、特に器種ごとの組成についてはあまり信頼が置けなくなったため、本報告では割愛した。

### E 実測

実測個体は基本的に1/8以上の大型の破片で実測可能と思われたもの、あるいは特徴的と思われる破片を選別した。報告書では紙幅の関係からS D1016・S Q2016の土器実測図の一部を割愛した。また、実測の基本的な考え方として土器の観察表の掲載も限界があるので、できるだけ土器の調整の方法などの情報は図に盛り込むようにした。しかし、古墳時代の土器に不慣れなことや、大量の土器を処理しなければならない状況から、十分な観察が行えず、見誤りもいくつかあると思われる。

### F 計測2

調査で土坑ごとに土器の遺存状態が異なる所見を受けて土器の残り具合を計測した作業である。詳細は後述するが、その方法は口縁部破片を抜き出して円を8分割したなかでどのくらい残っているかを計測したものである。この方法は小林謙一氏（註）が近世の遺跡で行った手法を参考にしたことを申し述べておく。なお、口縁部の残り具合を本報告では「遺存度」と表現し、これらのデータから土器の遺存度のあり方を4つの型に分類したものを遺存度区分0・A～Cと呼称した。

註 小林謙一 1986 「2節2. 瓦質・土師質土器」『郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会

### イ 土製品

土製品には支脚・羽口・模造具・ミニチュア・焼粘土塊などがある。これらの土製品は土器同様にボン

コートを含浸した後、注記作業や接合作業中に選別し、種類別に番号を付した。そして図化・写真撮影を行った。これらの土製品は形態的な特長から帰属時期が判断できるため、古代以後の遺構から出土したものでも古墳時代の所産と判断できたものは本報告で扱うこととした。

#### ウ 種子・骨類

出土した種子には炭化したものと、そうでないものがある。遺構精査時に肉眼で識別したが、一部には玉を探すためのフルイ選別作業での残存物から整理段階で選別したもの、土壌サンプルで採取したものもある。採取方法はかならずしも均一でないため、かなり疎密を生じている。特に肉眼観察で識別できた大形の種子が中心に採取されている点や、採取方法が異なるため個別遺構で種子の有無や種類別の数量を均等に比較できない面がある点は注意されたい。採取された種子はホウ酸水溶液で仮保存したが、しばらく整理が着手されなかったことなどから乾燥してしまったものもかなりある。これらの種子は整理段階で台帳を作成し、資料数の把握に努めた。また、出土種子の多くが本遺跡内へ搬入されたものが多いと考え、種子の種類、可食性と収穫時期についての分析を依頼した。なお、モモ核に関しては一部サイズの計測を実施し、それ以外の種子の種類別数量の計測はサンプルの方法が一定しないため、かなり偶然性に左右されていると考えて実施しなかった。

骨類は小片なら樹脂を含浸して固めて取り上げたが、比較的大形のものにはウレタンで周囲を固めて取り上げて、整理時に解体した。しかし、ウレタン解体はかなり時間を経て実施されたため乾燥で傷みが著しく旧状も窺えないほど破損していたものもかなりある。そのため、写真記録や図化記録はあるが、遺物自体が小片しか残存しないものもある。また、整理でかなり小型の骨鏃が存在することも判明したが、破損が著しく、形状の詳細を明らかにできなかったものが多い。骨類は種類と部位、加工の有無の鑑定を依頼し、加工の確認できた骨類に関しては実測と写真撮影を実施した。これらの骨も採取条件が一定ではないため、出土遺構と種類を表にまとめ、遺構ごとの統計処理は実施しなかった。

#### エ 石製品

石製品には砥石、玉類、加工痕・使用痕を有する石がある。これらの石製品の一部は調査時にすでに選別されていたが、整理では注記・接合作業中に選別されたものを含めて台帳に付け直した。なお、これらの石製品の帰属時期の判断に関して、玉類は基本的に古墳時代の所産と断定されたが、砥石、加工・使用痕がある石製品に関しては古墳時代と判断された遺構から出土したもののみを扱うことにした。したがって、玉類を除く石製品に関しては古代以後の遺構に混入したり、検出面出土としたなかに古墳時代の所産が含まれている可能性もある。また、加工痕や使用痕が観察された石が認められたが、これらは整理段階で選別され、遺跡での観察で選別採取されたものではない。したがって、採取できたのは遺跡内で出土したものの極一部である点は注意されたい。

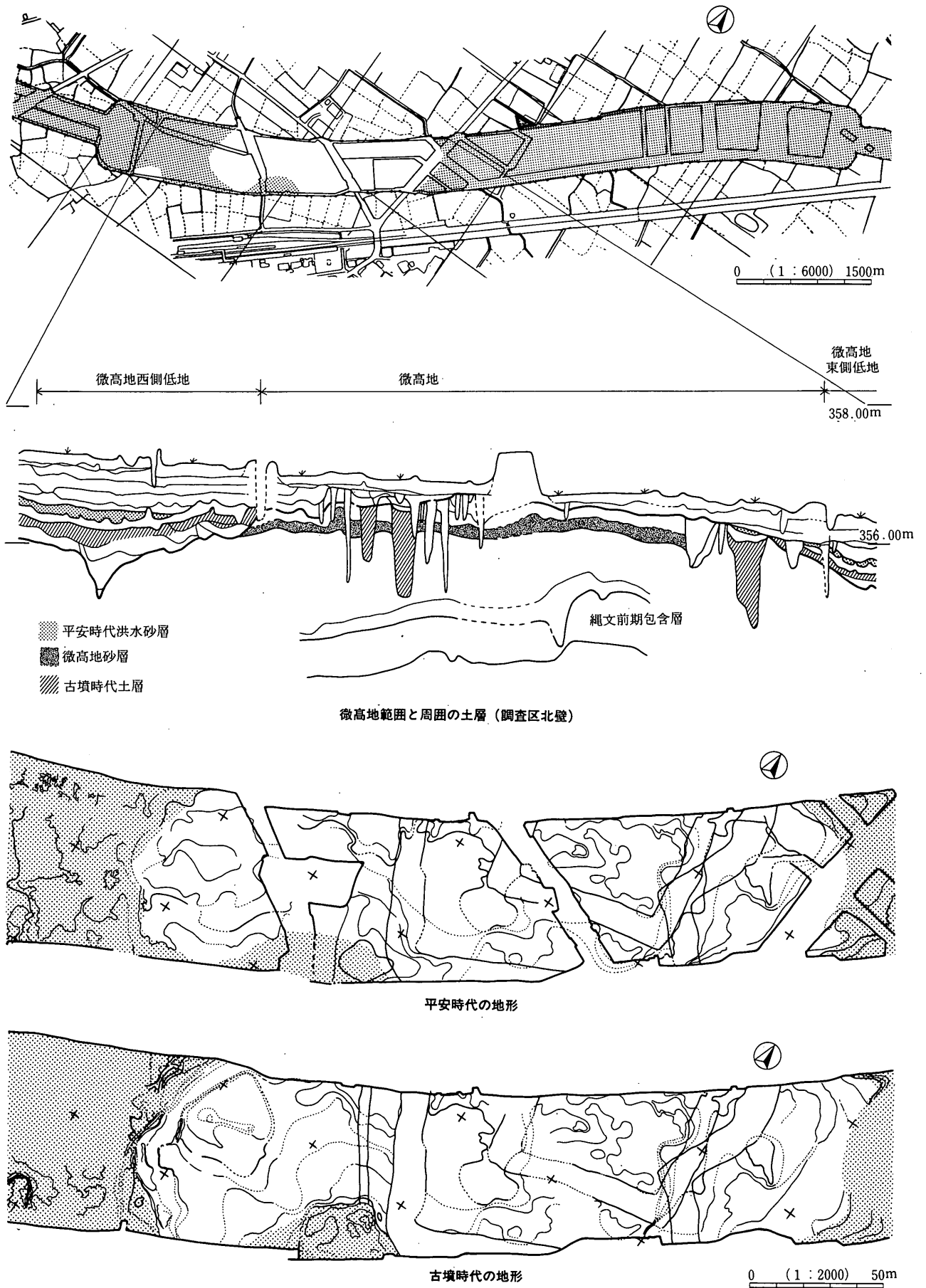
#### オ 木製遺物

第3分冊を参照されたい。

## 第3節 地形と土層

### 1 地形環境

石川条里遺跡は巨視的にみると後背低地に立地するが、微視的にみると聖川以南では大きく2つの地形環境に区分できる。すなわち、石川条里遺跡の所在する後背低地全体は南西から北東方向へ緩やかに傾斜するなかで、調査域中央の微高地を境として西・南側は小規模な微高地と谷状の低地が入り組む地形、東



第1図 微高地範囲と周囲の土層

側は広域な低地が広がる。この地形環境が形成された過程は明らかでないが、基本土層の土質から千曲川の堆積作用によるものと思われる。特に石川条里遺跡の南西部は千曲川が善光寺平に入って大きく北東へカーブする攻撃面に近いため、この部分は氾濫が起りやすく小規模な微高地と谷状低地が入り組む地形が形成されたと考えられる。また、塩崎地区南部は西側山地との距離が短く、より自然堤防と山地が近接するが、下流へいく程千曲川と山地の距離が離れて広大な低地が形成されたとと思われる。この作用によって後背低地内でも南西側が高く、北東が低くなる地形が形作られていると思われる。

本報告書で扱う調査域中央の微高地はこの後背低地内の地形変換点に当たる。この微高地の形成された時期については詳細を明らかにできなかったが、微高地の第1面で検出された遺物は弥生時代中期以後のものが認められ、さらにこの微高地の地表面下約2.5mのところでは縄文時代前期初頭の遺構群が検出されているので、少なくとも縄文前期初頭～弥生後期以前と見られる。そして、弥生時代からは低地の埋没が進行し、微高地と低地の比高差が減少していき、中世以後はさらに用水の構築などによって山手からの堆積土が増加して西側の山手側が高く東が低い傾斜地形となったようである。さらに近世末期以後の用水の発達でこの傾向は加速され、やがて微高地域の水田化がかなり進展したと思われる。明治時代の公図では微高地の東側の一部に畑が残るのみで、微高地西側のほとんどは水田化されているのもこうした経過によると思われる。さらに、明治時代以後には水田化が進められ、調査前の現景観では微高地の存在がほとんどわからなくなっていた。なお、弥生時代以後、微高地と低地の比高差が減少するために、時代を追って微高地縁辺へ水田域が拡大し、合わせて微高地境に構築された溝は微高地高台側へ移動してくる現象が認められる。また、古代以後の水田1枚の面積が時代をおって拡大していくのも低地埋没による平坦化の進展が一因と考えられる。

以上の様相のなかで注意したいのは本微高地域が石川条里遺跡後背低地南西部の谷状低地に挟まれた小規模な微高地の一つで低地に区切られて独立していることと、石川条里遺跡の聖川以南の後背低地を2分する地形変換点にあたる点である。さらに、この場所が千曲川沿岸の大きな自然堤防と山手の緩斜面の間にあたる点も注意される。なお、微高地の範囲は第1図に掲載したが、全体の形は南西部の一部がえぐり込む紡錘形を呈し、西側は狭いながらも標高がもっとも高く、東側へ向かって緩やかに傾斜している。古墳時代の特殊な遺構が検出された部分は中央から東よりの微高地内でもっとも広い平坦地である。

## 2 土層

石川条里遺跡の土層の概要はすでに第1分冊で述べてあるので、ここでは微高地の土層と遺構検出面、および低地境を中心とした低地域の土層の関係について触れておく。

先述したように本微高地は形成過程や形成時期は不明ながら、弥生時代中期までに原形ができ上がり、以後はほぼ安定していたと見られる。遺構の検出面はV層の上面にあたるが、それより下は大きく3グループに区分される。ひとつはV層とされた褐色～灰褐色シルト層と砂層である。この2つの層は本来類似した契機に堆積したものと思われ、西側では上層のシルト質土と下層の砂層に分離して認められるが、砂層は東側へいくほどシルト化して上層との区分が難しくなる。この砂層上面が第1面の見逃し遺構を確認した第2面であり、また、西側低地境ではこの砂層が切れていることから低地境識別の鍵層とした。この下にはVI層とされた黒色・灰色・白色の薄い粘土の互層があり、上面の黒色～黒褐色の粘土層のみ比較的厚く広域に見られるが、それ以外は層の広がり自体が狭く、途中で途切れたり、間に部分的な別の色調の粘土層をはさみ込むなど遺跡全域での対比は難しい。しかし、何れも固く締まった粘土層であり、多少の凹凸は認められるがほぼ平行して堆積していることから、安定した環境下で形成された土層と思われる。この下が再びシルト質土となるVII層であり、ここが縄文遺構調査面にあたる。このVII層は地表面から



約2.5mの深さにあり、当時も微高地となっていたと見られるが、弥生時代以後の遺構が検出された面とは厚い堆積土で隔絶されている上に、微高地の最も高い地点や微高地範囲は異なる。従って、古墳時代の遺構が検出された微高地と縄文時代の微高地は別の契機にできたものと考えられる。

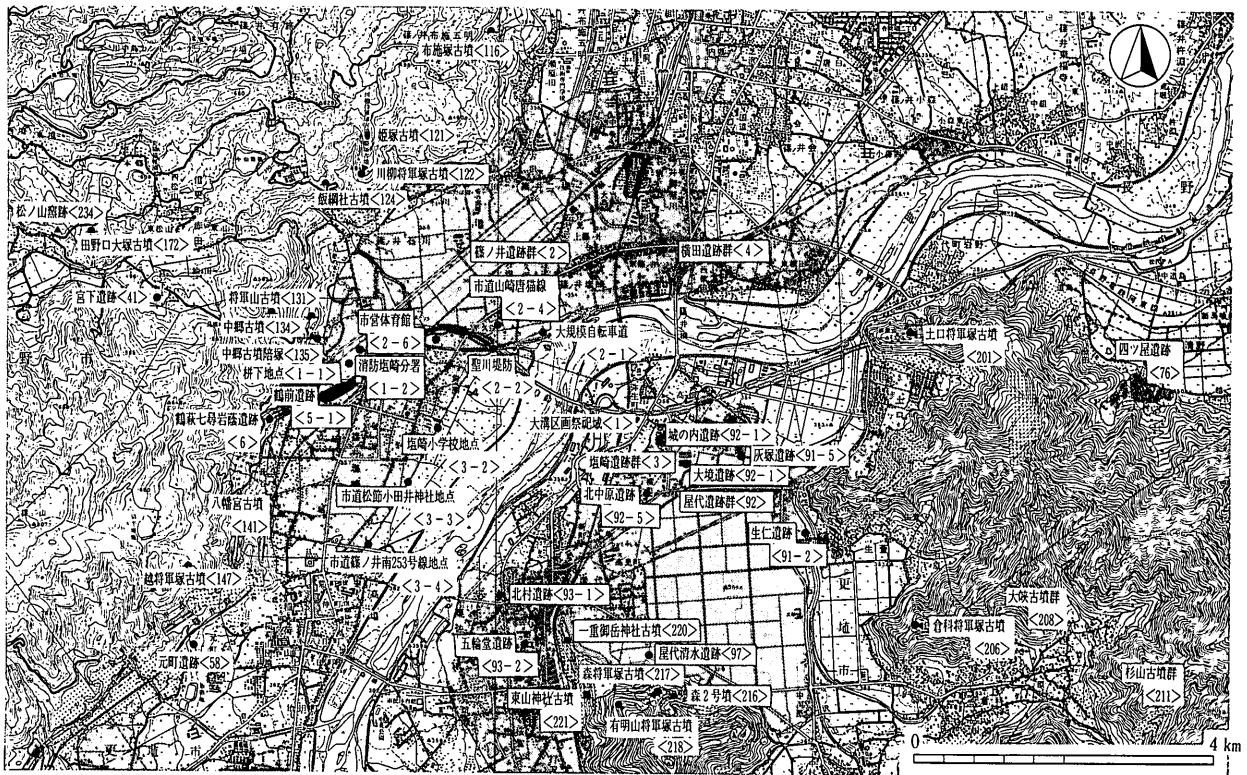
微高地中央部の遺構検出面以上の土層は近世以後の耕作や水田化に伴う地形改変によって調査地区ごとに様相が異なり、厳密な対比はできていない。そのために、ほぼ遺跡内で共通するV層が検出面となり、ここで古墳時代から近世にいたる遺構が検出されることになった。しかし、地区ごとに上層の様相が異なったことから、基本的に古墳時代以後では純粋な堆積層は残存しないと考えられていたが、平成元年度の最終段階で⑩-1区では古墳時代の旧地表面と特定できる所見が得られた。それは⑩-1区調査区壁にかかって検出されたS K2874の埋土内の炭化物層がそのまま土坑外へ広がる様相から推測されたものである。このことから、遺構検出面は旧地面から約10～15cmほど掘削した地点にあたることが判明した。また、S D1016の東外側に位置するS Q2016は大量の土器が廃棄された遺物集中であるが、土器・炭化物包含層下の灰褐色土が土器の廃棄が行われる以前の旧地表面であると考えられるにいたった。このように部分的ながら古墳時代の旧地表面が確認されたことから、古墳時代の遺跡廃絶以後にも洪水土の堆積が想定され、本来は古代・中世の遺構検出面とは検出面が異なることが考えられる。ただし、この古墳時代以後の堆積土については⑩-1区以外の他の調査地区との対比は難しく、基本土層として把握はできなかった。なお、古墳時代～古代の堆積土と把握された土層にはS D1007・1016埋土上層にみられた灰白色、あるいは褐灰色土がある。これは溝跡廃絶以後に堆積したもので、上面には平安時代の水田層と対比される暗褐色の粘土層が載る。また、類似した褐灰色土層が近接した低地境南西縁辺部でもみられ、直接対比はできなかったが、比較的広域に堆積土がもたらされている可能性が想定できる。しかし、低地域では洪水層が水田耕作で鋤込まれて純粋な堆積土としては残存しない。

なお、低地域では平安時代の埋没水田耕作関連の土層下に位置する褐灰色を基調とする土層が古墳時代の所産と考えられ、微高地の西・東低地のいずれにも分布する。両地点の土層は概略対比可能であるが、一方で古墳時代内に洪水土が複数回にわたる可能性を示す所見がある。微高地西側低地境を例にとると、西側低地⑥区で古墳時代と把握された土層は低地境⑦-1区にも連続し、同層中ではS Q1004・1005が検出されている。ただし、⑥区では粘土層1枚とされたが、⑦-1区はしまりのないシルトに近い土質であり、さらに間に薄い炭化物層が確認されている。このことは⑥区では水田耕作によって鋤込まれたが、⑦-1区ではあまり水田耕作が及ばなかったために堆積土が残存したと考え、ここでは炭化物層を挟む最低上下2枚の堆積土があったことになる。さらに、S D1007やS D1016出土土器とS Q1004・1005出土土器はあまり時間差が認められないものの、S D1007・1016埋土上部には溝跡廃絶後の灰白色、褐灰色土の堆積が認められており、土器を基準とすると、微高地域での特殊な遺構群の形成時期を挟んで前後最低2回の洪水があったと推測される。微高地東側低地も同様に褐灰色粘土が見られるが、平安時代水田層との間に泥炭層が入り込み、褐灰色粘土層自体がより細分される違いがある。

## 第4節 周辺遺跡の概要と善光寺平南部の空間構造

### 1 周辺遺跡の概要

本遺跡周辺の主要遺跡分布状況及び歴史的環境については既に本書第1分冊第2章第2節において概要を述べているので、ここでは本遺跡の中央微高地検出遺構（以後「大溝区画特殊遺構群」と呼称する）と出土遺物の前後の時期にあたる遺跡・遺物を取りあげて概要を述べることとする。なお本項に用いる遺跡



第2図 周辺遺跡分布図

番号は第1分冊第8図に用いた記号と同一である。

(1) 千曲川左岸の主要遺跡概要

ア 特殊遺跡

石川条里遺跡 <sup>クネシタ</sup> 枅下地点 <1-1> (長野市教委1992)

大溝区画特殊遺構群域から北へ約100mほどの地点に位置する。西縁丘陵からの縁辺微高地上に立地し、低湿地との境界部が発掘調査された。微高地は一辺60m強の方形状となり部分的に段築していた。遺構は掘立柱建物址と推定される柱穴列1棟、12基の土坑・小穴、幅2.4m、長さ16mにわたる集石帯が検出された。遺物は微高地から低地への落ち込み域から石釧1点を含む石器・土師器・須恵器・木材などが多量に出土したほか、2基の土坑からは土師器が複数出土した。遺物は大溝区画特殊遺構群出土遺物と同様の土師器が多数含まれるが、形態・組成から後続する時期に該当するものとして捉えた。(註1)

イ 集落遺跡

篠ノ井遺跡群 <2>

千曲川左岸の大規模な自然堤防上に立地する。左岸自然堤防上には上流から八幡遺跡群、塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群、横田遺跡群が連続しており、これら遺跡群からは縄文時代晩期から近世までの遺構が密集し遺跡の性格も同一である。篠ノ井遺跡群は千曲川の支流である聖川と岡田川にはさまれた地区を指す。  
・高速道地点 <2-0> (長野県埋文センター1997)

検出された遺構は竪穴住居152軒、掘立柱建物17棟、溝30条、井戸14基を含む土坑656基、方形周溝墓13基などである。遺構の重複が激しいため出土遺物の帰属遺構が明確でないものもあるが、出土遺物の時期は大溝区画特殊遺構群以前から存続時期古相までの土器組成である。報告では2期を設定している(報文では5期…住居31軒・掘立17棟、6期…住居29軒)が、該期において掘立柱建物をともなう一般大規模集落が検出された例は中部高地域では初めてである。竪穴住居の規模は5期とされたものが8.1×7.8mの大

形、5.2×4.8mの中形、3.8×3.7mの小形、一辺3.7m以下の極小形に分類され、形状は方形であり、6期とされたものが5.3×5.0mの中形/4.4×4.1の小形に分類され、形状は方形である。掘立柱建物17棟の規模は以下の通りであり、大形建物でも5.1×3.65mで、ほとんどが小規模な建物址である。〈S T 6001…2.35×0.95m(2×1間)、S T 6002…4.1×3.5m(2×1間)、S T 6003…3.1×2.1m(1×1間)、S T 6005…3.15×2.7m(2×1間)、S T 6006…5.1×3.65m(3×1間)、S T 6009…3.25×2.2m(2×1間)、S T 6010…4.5×3.7m(3×2間)、S T 6011…3.6×4.2m(2×1間)、S T 6012…3.5×4.2m(2×1間)、S T 6013…3.95×1.25m(1×1間)、S T 6015…3.5×3.5m(2×1間)、S T 6016…3.9×3.15m(2×1間)、S T 7022…2.5×2.4m(2×2間)、S T 7031…1.9×1.6m(2×2間)〉(註2)

特殊遺物としては周溝墓SM7006から変形獣文鏡、勾玉など、SM7016からは珠文鏡、琥珀玉などが副葬され、S B 7250からは重圈文鏡が出土した。また井戸S K 6202からは木製高杯、黒漆塗の器台(?)が出土している。

・大規模自転車道地点〈2-1〉(長野市教委1980)

周溝墓1基、竪穴住居6軒が検出された。出土遺物は複数の土師器があり、大溝区画祭祀域の古相と同時期と捉えられる。竪穴住居の規模・形状は以下の通りである。〈14住…一辺4.25mの方形、15住…短辺4.7mの長方形、26住…短辺2.35mの方形、29住…4.45×3.9mの隅丸長方形、21・30住不明〉

・聖川堤防地点〈2-2〉(長野市教委1992)

古墳時代前期の周溝墓5基、大溝4条、竪穴住居14軒、掘立柱建物5棟、土坑7基などが検出された。周溝墓5基の中には前方後方型周溝墓が3基含まれ、S D Z 10から大溝区画特殊遺構群と同時期の遺物が収集されている。竪穴住居・溝・掘立柱建物などの時期については、全ての遺構の出土遺物が公開されているわけではないため不明であるが、大溝区画特殊遺構群に先行する時期から同時期(S B 118)に帰属する遺物がある。土坑には勾玉・管玉・人骨を出土した墓坑とされるものや、井戸とされる性格のものを含んでいるが、時期・性格については不明である。出土遺物では土器・玉類の他に砥石、軽石・紡錘車がある。竪穴住居・掘立柱建物の規模は以下の通りである。竪穴住居〈67住…6.2×5.6mの方形、70住…4.6×4.5mの方形、71住…2.8×2.7mの方形、87住…4.1×3.3mの長方形、88住…3.5×3.3mの方形、118住…5.4×-の方形〉掘立柱建物〈3.3×3.3m(2×2間・総柱)、4.3×4.3m(2×3間)、3.9×3.3m(1×2間・棟持柱)、4.9×3.1m(1×3間)、8.5×6.0m(3×4間・棟持柱)〉

・市道山崎唐猫線地点〈2-4〉(長野市教委1989)

古墳前期の竪穴住居5軒が検出されている。住居規模・形状の全容は不明で、出土遺物も断片的であるので時期を確定する資料に乏しいが、大溝区画特殊遺構群以前の住居と考えられる。竪穴住居の規模・形態は以下の通りに推定されている。〈11住…一辺8.5m前後の隅丸方形、12住…一辺6m前後の隅丸方形、13・14住…一辺5m前後の隅丸方形、15住…一辺6m前後の隅丸方形あるいは隅丸長方形〉

・長野市宮塩崎体育館地点〈2-6〉(長野市教委1990)

竪穴住居1軒、溝3条、掘立柱建物1棟が検出された。掘立柱建物は8.7×4.4mで、棟持柱をもつ2×3(一辺は4)間の大型建物となる。出土遺物は溝内から土師器・管玉、柱穴から土師器が収集されている。区画特殊遺構群出土土師器と同形態の小形丸底・高杯が出土しているが、全体的な様相は区画特殊遺構群直前の時期が与えられる。

・塩崎遺跡群〈3〉

千曲川左岸の自然堤防上に立地する遺跡群の上流部にあたる。

・市道松節一小田井神社地点遺跡一〈3-3〉(長野市教委1986)

古墳前期初頭・後半の竪穴住居が19軒、溝2条、土坑2基が検出された。弥生中期から平安までの遺構

の重複が激しく住居形態、帰属遺物などが明確でない点もあるが、掲載された土器からは116・124住が区画特殊遺構群以前の前期初頭に帰属し、他の住居は直後の時期が与えられる。住居内からの特殊遺物として48住からは直径6.7cmの白銅製内行花文鏡が、58住からは管玉が出土した。竪穴住居の規模・形状は以下の通りである。〈9住…6.2×4.4mの隅丸長方形、13住…5×4mの方形、14住…長辺5.6mの長方形、20住…一辺5.1mの方形、48住…3.8×3.7の隅丸方形、52住…一辺3.3mの方形、58住…一辺5.4mの隅丸方形、114住…6.55×6.3mの長方形、115住…一辺6.1mの方形、116住…一辺6.1mの方形、150住…一辺5.1mの隅丸方形、2・86・90・124・130住…隅丸方形、0・35・143住…不明〉

・市道篠ノ井南253号線地点（長野市教委1991）

古墳前期初頭から前半に帰属する溝状遺構1条と方形周溝墓2基、区画特殊遺構群に後続する時期の土師器を出土した竪穴住居2軒が検出された。住居は大部分が後世の遺構によって削平され形態・規模は不明である。

・鶴前遺跡〈5〉（長野県埋文センター1994）

古墳前期初頭から前半の竪穴住居が検出され、前期前半の竪穴住居が2軒あり、中期の遺物散布域が1箇所検出された。区画特殊遺構群を前後する時期にあたる。〈68住…長辺4.3mの隅丸長方形〉

・元町遺跡〈58〉（更埴市史1994）

ヒスイ製の丁字頭の勾玉1点が、採集されている。

・峯遺跡（更埴市教委1988・90）（第2図上になし第1分冊参照）

古墳前期後半から中期の竪穴住居と土坑が各1基検出された。住居（88'）は方形で5.8×5.3mの規模をもち、出土土師器は大溝区画特殊遺構群と同時期である。土坑（90'）は土師器とそれを覆う状況で礫が出土し祭祀土坑的であった。大溝区画特殊遺構群に後続する時期が与えられる。

・外西川原遺跡（更埴市教委1990）（第2図上になし第1分冊参照）

古墳前期初頭から後半の竪穴住居が検出され、出土土師器から5住が大溝区画特殊遺構群とほぼ同時期に、20住が後続する時期となる。住居の規模・形状は不明。

#### ウ 生産遺跡

・石川条里遺跡（本書第1分冊参照）

弥生時代中期に水田跡としての初現が認められ、弥生後期には広域な低地に水田が展開している。本遺跡からは幅3.5～4m、深さ0.6～0.8mの規模をもつ溝が東西270mにわたって検出されたのをはじめ大区画となる畦畔（杭列畦畔を含む）が複数検出されている。出土遺物は土師器、玉類のほか鳥型木製品等の祭祀具、剣鞘・弓などの武具、農具、建築材などの木製品が多量にある。

## (2) 千曲川右岸の主要遺跡概要

### ア 特殊遺跡

生仁遺跡〈91-2〉（更埴市教委1969・89）

調査面積の制約のため検出遺構の全容が確認できるものは少ないが、古墳時代中期（TK73以降）の竪穴住居が22軒検出されている。遺構出土土器が全て公開されていないため不明な点もあるが、区画祭祀域に後続する時期の集落と捉えられる。また4×1.5mの範囲に古墳後期初頭の土器と獣骨が散在した箇所（1号祭祀遺構）があり、異なる地点の幅2.4mの溝内からは石釧が出土しているが、溝の性格は不明である。石釧の出土と低地と丘陵との境界にあたる遺跡立地をもって特殊遺跡とした。

四ツ屋遺跡〈76〉（更級埴科地方誌1978）

円筒形埴輪列が弧を描いて検出され（60'）、更に幅1.5mの周溝が20mにわたって円形に巡らされている

ことが確認された(72')。埴輪列内側からは土師器、須恵器が出土した。須恵器はTK216の時期が比定されている(木下亘1992)

#### イ 集落遺跡

四ツ屋遺跡 <76> (更級埴科地方誌1978)

古墳前期初頭ないしは弥生終末期の土器が竪穴住居、溝から出土している。調査資料ではないが本遺跡からは小形丸底土器をはじめ器台、二重口縁壺などが多数収集されている。区画特殊遺構群存続時期を前後して継続的に集落が営まれていた遺跡と思われる。

・灰塚遺跡 <91-5> (更埴市教委1970)

古墳前期の竪穴住居1軒が検出され、出土した土師器は大溝区画特殊遺構群直前の時期にあたる。住居の規模・形態は一辺5.6mの方形である。

・大境遺跡 <92-1> (更埴市教委1994)

古墳前期初頭から中期の竪穴住居が3軒検出されている。出土土師器から8住が大溝区画特殊遺構群と同時期であり7住が後続する時期の住居である。8住の規模・形状は5.5×5.2mの隅丸方形である。

・城ノ内遺跡 <92-2> (更埴市教委1961・88・91)

古墳前期後半から中期の竪穴住居が7軒(61'4軒、88'1軒、91'2軒)と祭祀的な竪穴状遺構が1基検出されている。遺構は大溝区画特殊遺構群に後続する時期である。住居の規模は全て5~7mで形状は方形である。<3住(91')一辺6.3mの方形、2住(91')一辺7m前後の方形>

・北中原遺跡 <92-5> (更埴市教委1987)

検出された遺構はないが古墳前期の土師器とヒスイ製の勾玉が平安水田下層の土層から出土した。

・北村遺跡 <93-1> (更埴市教委1990)

古墳前期後半の竪穴住居1軒が検出され、出土した土師器の組成は大溝区画特殊遺構群と同一である。住居の規模・形状は不明。

・五輪堂遺跡 <93-2> (更埴市教委1981・82・87・90)

古墳前期前半と後半の竪穴住居が各2軒、土坑1基が検出されている。出土土師器は大溝区画特殊遺構群直前の組成と後続する組成を示している。前期前半の住居の規模・形状は14住(82')4.8×5.5mの不正方形、5住(90')4.8×4.6mの方形である。

・屋代清水遺跡 <97> (更埴市教委1992)

古墳中期の竪穴住居12軒、掘立柱建物13棟、土坑23基、溝2条、祭祀遺構1基が検出されている。土坑には炭化物を含んだ埋土と複数の土器が伴うものがあつた。出土遺物は土師器の他に各種玉類、金属器がある。報文では遺構の時期差は微妙ながら少なくとも3時期に区分されるとしている。大溝区画特殊遺構群に後続する時期の集落である。住居は3.5~6.5mの規模の中形方形で、個々の規模・形状は以下の通りである。<4住…5.8×6.7mの方形、5住…5.3×4.7mの隅丸方形、6住…4.3×4.35mの方形、7住…6.55×6.1mの方形、8住…6.05×6.5mの方形、9住…3.9×3.9mの方形、12住…4.2×4.65mの方形、14住…3.5×3.2mの方形、15A住…5.2×6.1mの方形、15B住…6.4×6.9mの方形、10・16・17住不明> 掘立柱建物17棟の規模は以下の通りである。<1号…3.9×4.45m(1×3間)、2号…3.7×4.05m(1×2間)、3号…3.55×3.95m(2×2間)、4号…3.55×3.50m(2×2間)、5号…4.9×6.65m(1×4間)、6号…5.2×6.60m(1×4間)、7号…4.3×5.8m(1×3間)、8号…4.0×4.55m(1×3間)、9号…4.6×4.85m(1×3間)、9B号…3.85×4.75m(2×3間)、10号…3.6×3.6m(2×2間)、11号…3.6×3.5m(2×2間)、12号…4.3×6.65m(2×3間・総柱)、14号…3.6×3.6m(1×1間)>

#### ウ 生産遺跡

・更埴条里遺跡（長野県埋文センター1992・93・94）

現在報告書作成作業中のため詳細については不明であるが、森將軍塚古墳が位置する有明山寄りの調査域から複数の畦畔と水田面が検出され、屋代遺跡群が位置する自然堤防までの低地からも複数条の疑似畦畔が確認されている。

(3) 4～5世紀代の主要古墳の概要

・布施塚1号古墳〈116〉（長野市教委1996 蒲原ほか1979）

標高429m、善光寺平西縁の低位丘上の俗称代官山の孤立山塊に立地する。3基の円墳からなる布施塚古墳群の1基である。数度にわたる盗掘、掘削等により主体部、墳形は不明な点が多いが、墳径20m、木棺直葬の主体部が想定された。主体部（盗掘坑）からは管玉、ガラス小玉が出土した。5世紀後半に比定されている。

・姫塚古墳〈121〉（岩崎1982）

湯ノ入山の尾根中腹に立地する全長32mの前方後方墳である。後方部幅17m、同長19.5m、前方部幅7.6mで、後方部の高さ3.5m、前方部の高さ1.5m内外の規模であるが、未調査であるため年代的な決め手はなく川柳將軍塚古墳に先行する時期の古墳か後続する古墳であるか不明である。

・川柳將軍塚古墳〈122〉（岩崎1982、森本1929）

標高470m、姫塚古墳下の湯ノ入山の尾根先端に立地する前方後円墳である。主軸方向N31°Eで全長93m、後円部径45m、前方部幅26mの規模をもち、丘尾切断により墳丘を作りだしている。江戸時代に盗掘され、その所見（1800年）から主体部は長さ5.4～7.2m、幅1.8m程の竪穴式石室が想定される。副葬品は伝世品として数多くの銅鏡や玉類が伝えられているが、その中から異体字日月銘内行花文鏡・振文鏡など銅鏡5面、筒形銅器、琴柱形石製品、石突形石製品、勾玉、管玉、ガラス小玉、琥珀玉、車輪石、銅鏃などが帰属されると考えられている。古式を保つ古墳として千曲川を隔てて対峙する森將軍塚古墳と近い年代が与えられ4世紀後葉から下降しても5世紀初頭とされている。

・飯綱社古墳〈124〉（桐原・松尾1984）

川柳將軍塚古墳南西の沢を隔てた尾根上に位置するが、現在は削平されて痕跡を留めていない。直径16.5m、高さ1.5mの円墳とされ、主体部は明治時代の記録より組合式箱式石棺が推察されているが確証はない。古墳出土遺物として記録とともに多数保管されていた。遺物には小形仿製鏡2面、管玉・勾玉・ガラス小玉複数の他に鉄剣・鉄刀・鉄鏃と輪鏝を含む馬具がある。本古墳は馬具を除く出土遺物の組成から5世紀後半とされる。

・將軍山古墳〈132〉（丸山1976）

標高484.7m、薬師山山頂に立地する円墳である。直径32m、高さ3.9mの規模をもつ。主体部、遺物は確認されていないが5世紀代の古墳とされる。

・中郷古墳〈134〉（岩崎1982、蒲原ほか1979）

標高395m、沖積地に広がる水田面との比高差は35mであり、前方後円墳のなかでは最も低位の台地上に立地する。全長53m、後円部径30m、同高4.5m、前方部幅24m、同高3.5mの規模と推定されている。墳丘斜面には小礫が散在し、葺石と考えられる。未調査であり、伝世された副葬品もないため年代的な決め手はない。墳形と立地から5世紀代と推定されている。

・越將軍塚古墳〈147〉（矢口1982）

標高490m、篠山山腹山頂に立地する円墳である。直径33m、高さ6.7mで墳丘傾斜面裾から幅5.4mの周溝が検出された。主体部は長さ6.2m、幅1.2～1.45m、最深高1.5mの規模の竪穴式石室で主軸方向はN36

°Eである。盗掘により発掘調査(78')によって得られた遺物は少ないが、副葬品として主体部から滑石製小玉13点と鉄片、墳丘・周溝から埴輪・土師器が出土した。また篠山古墳出土とされていた内行花文鏡が本古墳に帰属する可能性が高いとされる。5世紀後半の古墳である。

・八幡宮古墳 <141> (松尾1987 丸山1976)

善光寺平西縁の台地上に立地し、現在は墳頂が削平されている。直径17m、高さ5.2mの円墳で、主体部は竪穴式石室であったとされている。出土遺物は振文鏡1面、管玉・ガラス小玉多数と鉄剣2点があり、これらから本古墳は5世紀代と考えられる。

・田野口大塚古墳 <172> (山田ほか1987)

標高572m、善光寺平西縁山麓に位置し、聖川によって開析された盆地を望む山頂に立地する前方後方墳である。主軸方向はN42°Eで、全長40.5m、後方部幅28.5m、同長27m、前方部幅15.5m、同長13.5mの規模をもつ。主体部は盗掘坑から竪穴式石室と推測されるが、遺物は確認されていない。本古墳の年代は不確定であるが古式の形態である。

・土口将軍塚古墳 <201> (岩崎1982、長野市教育委員会1987)

標高450m、薬師山の西側に突出する尾根上に立地する前方後円墳である。主軸方向はN87°Eで、全長67.7m、後円部径40.5m、同高8.1m、前方部幅30.5m、同高3.9mの規模をもち段築成されている。主体部は一部盗掘坑により破壊を受けていたが南北に2基並列の竪穴式石室が検出された。北石室の幅は0.55mで鉄鏃、ガラス小玉、短甲片が出土し、南石室は幅0.65mでガラス玉が出土している。墳丘には叩き技法による円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が多数出土した他、高杯を主とする土師器が複数収集された。5世紀前半の年代が与えられている。

・倉科将軍塚古墳 <206> (岩崎1982)

標高549m、北山の尾根上に立地し、丘尾切断によって築造された前方後円墳である。主軸方向E20.5°Sで全長73m、後円部径35m、前方部幅36mの規模をもつ。主体部は盗掘坑の大きさから6m以上の竪穴式石室が想定され、墳丘には葺石、円筒埴輪が巡らされていた可能性が高い。墳丘から円筒埴輪片が収集され、墳形とあわせて5世紀代の古墳と考えられている。

・森将軍塚古墳 <217> (岩崎1982、更埴市教委1992)

標高485m、有明山尾根上の屈折部に立地する。県内最大の前方後円墳で最大長99m、後円部長径55m、同短径44m、同高10m、前方部長41m、同幅30m、同高4.5mの規模をもつ。主体部は2段墓壇の竪穴式石室で、N53°24'Eに主軸をとり、全長7.66m北壁幅1.95m、南壁幅2.15mの規模である。主体部からは「天王」「日月」の字句を配する三角縁神獸鏡片や丁字頭勾玉、管玉、鉄剣、鉄刀、銅鏃などの他に土師器数片が出土した。墳頂部には円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が樹立され、テラス、墳裾には各種の埴輪が配列された状況であった。また墳裾には小型埋葬施群が取り巻き土師器片も複数収集された。出土遺物の組成等から県内最古の前方後円墳である4世紀後半とされる。

#### (4) 窯跡 (6世紀初頭)

##### 234 松ノ山窯跡 (笹沢ほか1974)

聖川の支流に南面するなだらかな丘陵斜面に立地する。出土遺物は須恵器と窯滓で完形の甕4点などを含んでいる。松ノ山窯跡からの出土須恵器は高蔵47号窯址(TK47)のものと同通点が多く、ほぼ同時期に比定されている。本項目で扱っている時期に後続する遺跡であるが、県内最古の窯跡となり本址を取り巻く手工業生産域を推測する意味で取りあげた。



註

註1 柵下地点の遺構に関して担当者である飯島哲也氏は「居住域」と解釈し、祭祀的な色彩が強い遺物と周辺古墳の分布状況から『古墳造営に何らかの形でかかわる「居住域」』とした見解を示した。

註2 掘立柱建物については古墳前期に帰属する遺構であることは確実であるが5期と6期のいずれに属するのかは微妙である。

参考・引用文献

- 1 岩崎卓也 : 1982『川柳將軍塚古墳・姫塚古墳』「長野県史考古資料編全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)」長野県史刊行会編  
 : 1982『倉科將軍塚古墳』同上文献  
 : 1982『土口將軍塚古墳』 同上文献
- 2 蒲原宏行・高崎光司・滝沢雄一: 1979『善光寺平南部における古墳実測調査』「信濃」III-31-12  
 木下亘: 1992『長野県下出土の古式須恵器概観—北信・東信地域の資料を中心として—』文□第8章考察  
 桐原健・松尾昌彦 : 1984『長野県飯綱社古墳の出土遺物』「信濃」III-36-4  
 更埴市教育委員会 : 1961『城ノ内—信州千曲川左岸の土師式集落の研究』  
 更埴市教育委員会 : 1969『生仁』  
 更埴市教育委員会 : 1970『下条・灰塚 —長野県更埴市の古代集落遺跡発掘調査報告書—』  
 更埴市教育委員会 : 1981『更埴市粟佐遺跡群 五輪堂遺跡』  
 更埴市教育委員会 : 1982『更埴市粟佐遺跡群 五輪堂遺跡II』  
 更埴市教育委員会 : 1987『屋代遺跡群北中原遺跡 —市営住宅屋代団地建設に伴う発掘調査報告書—』  
 更埴市教育委員会 : 1987『長野県更埴市粟佐遺跡群 五輪堂遺跡IV』  
 更埴市教育委員会 : 1988『宮川遺跡 峯遺跡』  
 更埴市教育委員会 : 1988『城ノ内遺跡II 大境遺跡III』  
 更埴市教育委員会 : 1990『平成元年 更埴市埋蔵文化財調査報告書』  
 更埴市教育委員会 : 1991『城ノ内遺跡III 荒井遺跡II』  
 更埴市教育委員会 : 1992『史跡 森將軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』  
 更埴市教育委員会 : 1992『屋代清水遺跡—県立歴史館建設に伴う発掘調査報告書』  
 更埴市教育委員会 : 1992『更埴市 生仁遺跡III—県営雨宮地区湛水防除事業に伴う発掘調査報告書』  
 更埴市教育委員会 : 1994『長野県更埴市屋代遺跡群 大境遺跡IV・V』  
 更埴市史編纂委員会: 1994『更埴市史 第1巻 古代・中世編』  
 笹沢浩・原田勝美: 1974『長野県下出土の須恵器(上・下)』「信濃」III-26-9・10  
 更級埴科地方誌刊行会編: 1978『更級埴科地方誌 第2巻 原始古代中世編』  
 長野市・更埴市教育委員会 : 1987『土口將軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』  
 長野市教育委員会 : 1986『塩崎遺跡群IV—市道松節—小田井神社地点遺跡—』  
 長野市教育委員会 : 1989『篠ノ井遺跡群II—市道山崎唐猫線地点—』  
 長野市教育委員会 : 1990『篠ノ井遺跡群III—中部電力北信坂城線鉄塔・長野市営塩崎体育館地点—』  
 長野市教育委員会 : 1991『塩崎遺跡群(6) 石川条里遺跡(5)』  
 長野市教育委員会 : 1992『篠ノ井遺跡群(4) —聖川堤防地点—』  
 長野市教育委員会 : 1992『石川条里遺跡(6) 篠ノ井西部地区県営圃場整備事業に伴う発掘報告書』  
 長野市教育委員会 : 1996『布施塚1号古墳・2号古墳—篠ノ井瀬原田地区都市対策砂防事業地—』  
 (財)長野県埋蔵文化財センター: 1991『長野県埋蔵文化財センター年報8』  
 (財)長野県埋蔵文化財センター: 1992『長野県埋蔵文化財センター年報9』  
 (財)長野県埋蔵文化財センター: 1993『長野県埋蔵文化財センター年報10』  
 (財)長野県埋蔵文化財センター: 1994『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14—長野市内その2—鶴前遺跡』

- 〔長野県埋蔵文化財センター：1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16－長野市内その4－篠ノ井遺跡群〕  
松尾昌彦：1987『長野県における古墳編年基礎資料（一）－中期古墳資料』 「信濃」III-39-3  
丸山敏一郎：1976『善光寺平南域の古墳立地について－資料提示と分析』 「信濃」III-28-4  
森本六爾：1929『川柳將軍塚古墳の研究』  
山田昌久・矢中 隆：1987『長野市田野口大塚古墳の測量調査』 「信濃」III-39-4

## 2 大溝区画特殊遺構群を取り巻く空間構造

### (1) 居住域の様相

前項に列挙した遺跡が大溝区画特殊遺構群を前後する時期の主要遺跡であるが、この状況から古墳を除く遺跡の展開状況について千曲川左岸域と右岸域に分けて整理する。

千曲川左岸の弥生後期の集落は、自然堤防上の篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群に密集しながらも西山麓斜面の鶴前遺跡、石川条里遺跡にも存在し、分布は後背湿地を取り巻いて点在する状況にある。ただし自然堤防上の篠ノ井遺跡では環濠集落となり大規模な墓域が形成され拠点集落となっている。古墳前期前半は山麓斜面や微高地に住居が散在しているが、集落はほぼ自然堤防上に集中し、更に前期後半までには自然堤防上以外からは集落が消滅する。該期の集落は篠ノ井・塩崎遺跡群に偏在し、篠ノ井遺跡群の聖川堤防地点・高速道地点の低地寄りでは掘立柱建物を主体とする集落が検出されている。篠ノ井遺跡群と塩崎遺跡群（松節－小田井神社地点）では集落規模に違いがあり、若干の時期差も考慮されるが現時点で集落占地の移動があったかは言及できない。集落が自然堤防上に集約された古墳前期後半には西山麓に川柳將軍塚が築造され、山麓から後背湿地にいたる縁辺・微高地には居住集落とは異質な併下地点、大溝区画特殊遺構群が構築されている。このことは空間利用の上で注目される画期となる。水田跡の様相は石川条里遺跡において（本書第1分冊参照）、弥生後期から古墳前期前半と古墳前期後半ないしは中期前半の2時期にわたる様相が明らかとなっている。水田域はすでに弥生後期には後背湿地広域に展開し、古墳前期前半まで継続している。この時期の水田形態は自然地形に合わせた中・小畦畔からなる水田区画をとり、主要畦畔には木材を多量に用いて補強されていた。古墳前期前半で一時的な断絶の後、前期後半にはほぼ同一位置の堆積土壌上に水田が展開している。水田形態は自然地形を活用しながらも、大畦畔による大区画を基軸とした企画性のある区画であった。この大畦畔の区画敷設は水田経営上の画期と見ることができる。左岸域では古墳中期中頃を境とし塩崎遺跡群の一部を除き集落・水田ともに明確な遺構が検出されず、時間的な断然を見る。自然堤防上に集落が登場するのは6世紀後半からである。

千曲川対岸の右岸では弥生後期から古墳前期前半まではほぼ左岸と同一の遺跡分布の状況となる。弥生後期の集落は自然堤防上の屋代遺跡群と粟佐遺跡群、山麓寄りの生仁遺跡などに集落が散在し、更埴条里遺跡の位置する後背湿地を取り巻いて遺跡が分布している。古墳前期にいたると自然堤防上の城ノ内遺跡や五輪堂遺跡などに集約されていくが、遺構密度は稀薄で左岸で見られた弥生後期の環濠集落や大規模な墓域は未検出であり、住居検出状況も単独である。古墳前期後半から中期にかけての集落は自然堤防上の屋代遺跡群の城ノ内遺跡や高速道地点、森將軍塚古墳直下の山裾に屋代清水遺跡がある。左岸とは対照的に中期の集落は山麓縁辺に拡大し、城ノ内遺跡周辺には大規模な集落が想定される。また未公表ではあるが屋代遺跡群高速道地点（長野埋文センター1992）には長辺8mの大型住居など複数の竪穴住居が検出されている。屋代清水遺跡は掘立柱建物と同質規模の竪穴住居が群在する集落である。水田跡の様相は必ずしも明確ではないが、更埴条里遺跡が石川条里遺跡と同様の水田形態であったものと思われる。

## (2) 古墳の変遷

左岸域の古墳は大溝区画特殊遺構群から約1.8km真北の山頂に4世紀後半の前方後円墳である川柳將軍塚が位置する。この山頂からは左岸の低地ばかりでなく右岸一帯まで眺望できる地である。同一尾根上に前方後方墳の姫塚古墳が位置し、川柳將軍塚に先行する時期が想定されているが後続するとの見解もある。左岸域では川柳將軍塚以後の古墳は時期的に隔たりがあり、川柳將軍塚から南へ約1.5km、大溝区画特殊遺構群から北西へ約0.5kmに5世紀後半とされる前方後円墳として中郷古墳があり、四宮將軍山古墳や越將軍塚古墳、飯綱社古墳、赤田大塚古墳などの円墳が中期古墳として点在する。後期古墳はこれら前・中期古墳を中核として古墳群が形成され、古墳群の分布範囲は地域の特定集団の墓域となったと見ることができると。一方右岸域の古墳は川柳將軍塚と対峙する山頂に森將軍塚古墳があり、以後大型前方後円墳は各尾根に5世紀前半の土口將軍塚、5世紀後半の倉科將軍塚、6世紀前半の有明山將軍塚と連続して変遷している。後期群集墳は右岸域でも左岸同様にこれら大型古墳を中核に形成されている。

岩崎卓也は左岸と右岸の大型前方後円墳の分布状況と時期差から千曲川を挟んだ両岸が一体となった地域圏と捉え、姫塚古墳（左岸）→森將軍塚古墳（右岸）→川柳將軍塚古墳（左岸）→土口將軍塚古墳（右岸）→倉科將軍塚古墳（右岸）→中郷古墳（左岸）→有明山將軍塚古墳（右岸）という首長系列が存在したと理解した（註1 岩崎1989）。このなかで中郷古墳の年代に関しては墳形と主体部構造の推測から5世紀前半から中葉に位置付くとする見解もある（註2 小林1997）。

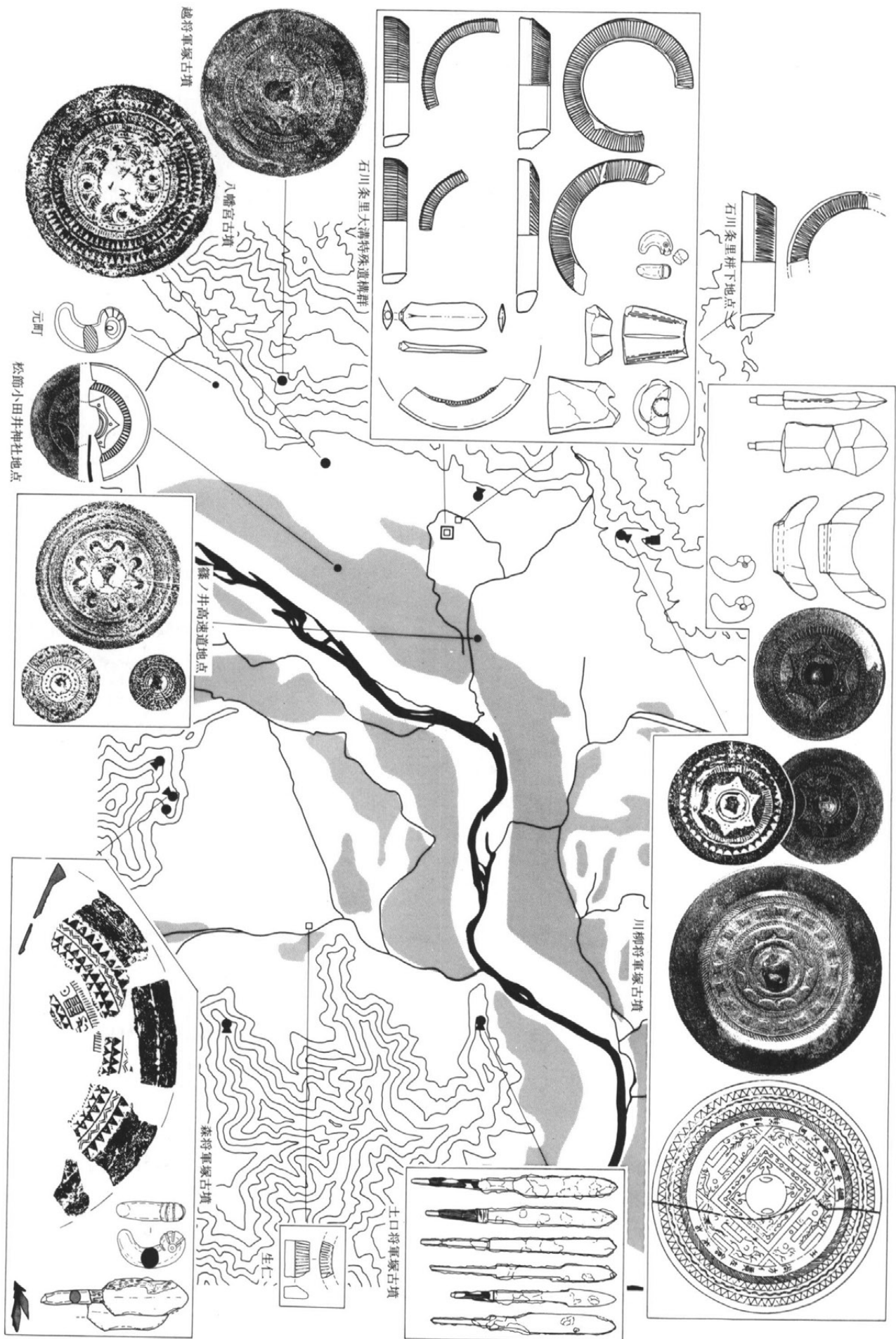
## (3) 遺跡景観

古墳時代の善光寺平南部域の生活空間（域）については、遺跡の分布状況から自然堤防上に集落（生活域）、後背湿地に水田（生産域）、低地を取り巻く山麓に古墳（墓域）という構造からなることが指摘されている（宮下1985）。この空間構成の状況の時期変遷を弥生後期からたどると、山麓・自然堤防上に生活域とその隣接地に墓域を形成し後背湿地に生産域が営まれる弥生後期の段階。山麓・小微高地の生活域が縮小し、自然堤防上の集落隣接地に区画された墓域や特殊形態の周溝墓と山麓に古墳が築かれる古墳前期前半までの段階（註3）。生活域が山麓沿いや低地の小微高地から消滅し、自然堤防上に集約され地域を見渡す山麓上に古墳が築造される古墳前期後半段階と変遷する。この空間構成に祭祀・特殊遺物の出土状況を擦り合わせると、弥生時代は自然堤防上の集落から銅銚と滑石製模造銚（松節遺跡）、山麓縁辺の集落からト占骨（生仁・四つ屋遺跡）が出土するなど生活域と一体化した場所が祭祀域となっている。これに対し大溝区画特殊遺構群の前後の時期は、本遺跡に代表されるごとく後背湿地と山麓の境界部にのみ祭祀遺物・遺構が限定されている。この段階では、弥生以来の祭祀は生活祭祀として集落で継続されていったものと思われるが、この祭祀とは次元の異なるタイプの祭祀が出現したと理解できる。先の宮下による生活空間に祭祀域を加えたものが該期の景観となる。これらは『水』を媒介として線で結ばれる構成を示している。（註4）

## (4) 地域集団と領域

善光寺平南部域は複数の古墳、集落遺跡が分布する集約された地域として集団構成の検討が行われている。これらには岩崎卓也、土屋積、森嶋稔などの論考があり、主として古墳とその周囲に形成された古墳群の状況から首長と集団の性格を考察している。本項ではこれらの論考を踏まえ地域集団の性格と領域について若干の検討を試みることにする。

岩崎卓也は前方後円墳の分布状況から考察した首長系列の変遷の背後に政治圏を想定した。これは善光寺平南部域の前方後円墳を1世代に1基の首長墓として時期変遷と擦り合わせると、千曲川を境として東



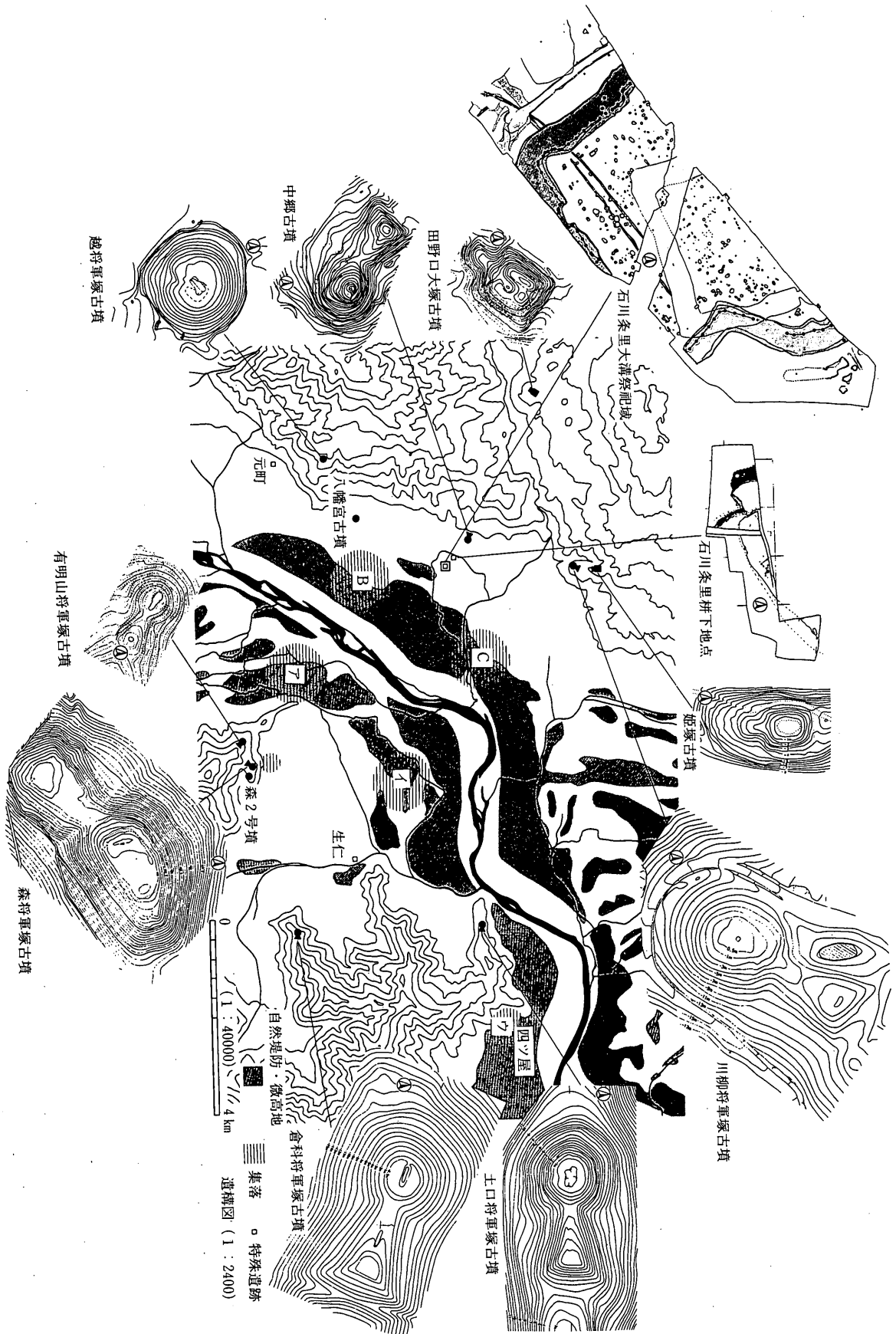
第3図 銅鏡・石劔他特殊遺物分布図 (遺物約1:3)

西に2つの政治圏があったとするより、川を挟んで1つの政治圏とみなすことが妥当であるとした(岩崎1989)。またこの政治圏は善光寺平のいくつかの政治圏の中では中心的存在であった可能性が高いとしている(註5 岩崎1996a)。この善光寺平南部域は古墳の動態から、首長権(盟主権・首長位)が特定政治集団の世襲ではなくいくつもの集団間を移動したと解釈し(岩崎1996b)、森將軍塚古墳を取り巻く小型埋葬施設から古墳に葬られた古墳前期の首長層の性格について『民衆と隔絶するまでには至っていなかった』とし『首長たちは階級的には未成熟で、未だ首長制的段階にあった』との見解をだしている。さらに小埋葬施設群の配列が前方後円墳の墳形に沿って構築されていることから、これらの被葬者は古墳の被葬者と出自を同じくする集団員であったと推測した。(岩崎1990)

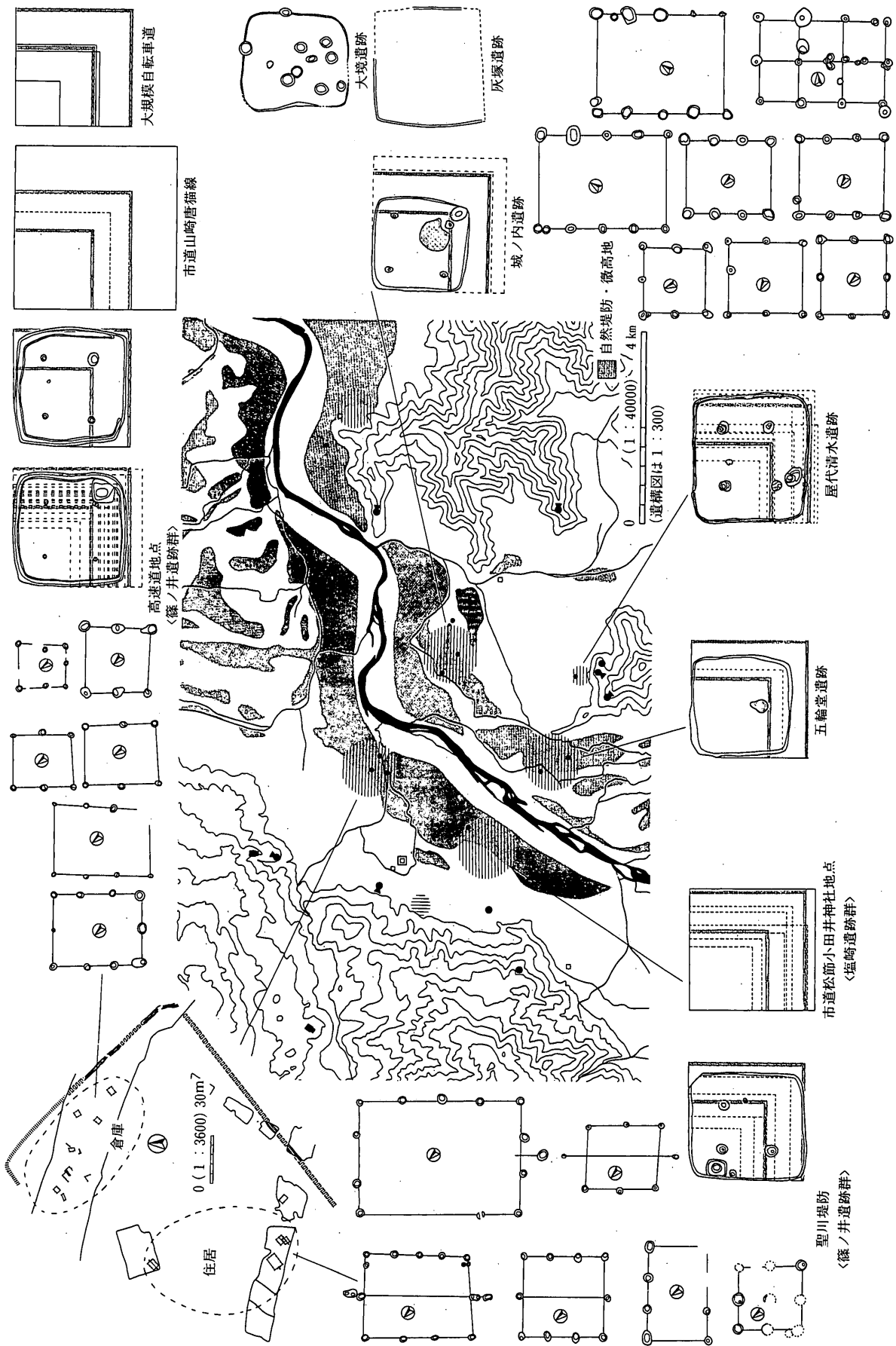
土屋積は、岩崎の論をうけて首長権を継承した近隣地域を『善光寺平南部域連合体』とし、この地域では首長権が世襲制でないことを強調した(土屋1994)。また森將軍塚古墳の築造期を「地域(連合体)を代表する形での中央との最初の政治的同盟の設立」段階と位置付けた。連合体を形成した1同族集団に関しては森將軍塚古墳と古墳群、小型埋葬施設群の動態を検討する中で「首長同族集団」内部の自立化についての画期を見いだした(土屋1992)。これによると首長同族集団内部の「首長近縁小集団」が前方後円墳の被葬者でありながらも他の「内部小集団」とは階層的には未分化している段階を経て「近縁小集団の特定個人」が他集団と隔絶され世襲へと移行しする状況が森2号墳築造期(5世紀中葉)に見られるとした。つまり首長権は地域連合体として各「首長同族集団」間を移動しながらも、集団内部では特定個人の自立化が図られていたことになる。そしてこの特定集団の階層分化が明確化する段階が地域首長墓が消滅した群集墳形成期である。土屋は「首長同族集団」の集落に関していくつかの単位集団の集合体としての遺跡群がこれにあたる見通しを立てている(土屋1994)。

森嶋稔はシナノという広域圏を取り上げ前方後円墳の動態から王権の移動を推測し、これらに単位エリアが求められている。首長の性格については『森將軍塚古墳の被葬者は、最初の在地的畿内系首長』とだけ述べられているが、畿内と直結し階級的に民衆の上位にたつ首長というニュアンスが含まれている(森嶋1994)。

集落遺跡の分布状況から首長同族集団の状況を検証することとする。まず該期の集落分布から集団としてのまとまりがあるか否かをまとめてみる。逆説的ではあるがいくつかの集団領域の想定に際して律令期の郡・郷の範囲から類推することとする。『和名類聚抄』の信濃郷には伊那郡以下10郡が記載され、本地域にかかわる更級郡には『麻統・村上・當信・小谷・更級・清水・斗女・池郷・氷鉦』の9郷が、埴科郡に『倉科・磯部・船山・大穴・屋代・英多・坂城』の7郷がある。これらの16郷がどの地域を指すものかは、郷が戸数を単位として付されているため限定的に求めることはできないが、千曲川を境とし更級郡(左岸域)と埴科郡(右岸域)とに区分され、郷の比定地域が推測されている。本遺跡周辺及び右岸の更埴市域に該当する郷は、更級郡の當信・小谷・更級・清水の内の3郷、埴科郡の倉科・船山・大穴・屋代・英多5郷である(註6・7)。後期群集墳の分布から郷の前身となる集団の領域範囲を類推することも可能であるが、古墳前期を前後する時期の集落遺跡の分布のあり方から複数集団の地域限定を試みた。古墳前期・中期の集落は、先にも述べたが左岸は自然堤防上に集中し、右岸は主体を自然堤防上に置きながらも中期には山麓にも展開している。左岸の集団域は本遺跡と古墳の分布を念頭に入れて、上流域から峯遺跡・外西川原遺跡のある八幡遺跡群(A)、松節-小田井神社地点を中心とする塩崎遺跡群(B)、高速道地点・聖川堤防地点を中心とした篠ノ井遺跡群(C)に3つのまとまりがあり、右岸沿いには五輪堂・北村遺跡を中心とする粟佐遺跡群(ア)、城内・大境・灰塚遺跡、高速道地点を中心とした屋代遺跡群(イ)、四ツ屋遺跡のある松代周辺(ウ)、遺構は未検出であるが法正寺・八王遺跡のある寂蒔遺跡群(エ)に4つのまとまりがある。埴科郡5郷のうち倉科郷に比定されている倉科、森地籍には今のところ集落が想定でき



第4図 古墳・集落特殊遺跡分布図



第5図 集落遺跡遺構概要 竪穴住居の規模と掘立柱建物の規模



る遺構・遺物はないが、他はほぼ郷の比定地域と重なる。つまり左岸3集団、右岸4集団が古墳中期まで古墳築造にかかわった「首長同族集団」として浮かび上がる。

では集落内構造はどうであろうか。現時点で古墳築造期を前後する時期の集落構造は必ずしも明確ではなく、各地で発見されている豪族居館は未検出であるが、弥生終末期（庄内期）からの集落変遷の状況は他地域と変わらない。各集落遺跡は竪穴住居から構成され、方形プランをもつ竪穴住居の規模は3m以下の小型住居、6m以上の大型住居とその中間の住居群に分類される。住居規模が一般成員の階層制を直接的に表すものではないが竪穴住居の同一プランでの多様性は機能（役割）の分化を示している。このいくつかの「首長同族集団」とした集落のなかで篠ノ井遺跡群（C）について見ることにする。篠ノ井遺跡群は弥生後期に環濠集落を形成した居住域である。環濠集落以後もほぼ4世紀後半ないしは末頃まで集落が営まれている。4世紀中頃には前方後方型周溝墓があり、複数の玉類を副葬した木棺墓が検出されている。また4世紀中頃～後半の集落はL字形に曲がった溝に区画された内部から主軸方向を同一にする掘立柱建物群が23棟検出されている。この掘立柱建物は長軸4m前後の規模が集中する一群とやや離れた場所に棟持柱をもつ長軸8m以上の大型建物が2～3棟ある。前者の建物群を倉庫、後者を居住とすると、竪穴住居と掘立柱建物で構成される篠ノ井遺跡の集団内部には居住施設と空間を異にする集団が存在したことになる。更に竪穴住居の規模も2～3種に分離され、この竪穴住居の規模の相違は弥生後期以来の系統的なものと解釈できるが、掘立柱建物にみる状況は集団内部の1小集団が他集団とは隔絶した居住形態を有した可能性がある。このことは先の岩崎・土屋の解釈と異なり、階層的に分離した首長が存在したことを意味する。

本地域の古墳前期集落遺跡で篠ノ井遺跡同様の状況は他の遺跡では見られないが、右岸では遺構密集度からみて屋代遺跡群（イ）が同一の集落形態となる可能性が強い。とするといくつかの「首長同族集団」の中には他の集団より突出した「連合体主導集団」があったものと考えられ、内部構造は先進的な階層分化がなされていたものと考えられる。つまり本地域は左岸に篠ノ井遺跡群、右岸に屋代遺跡群という「主導集団」が対峙し「連合帯」を形成していたことになり、それらは互いに広大な生産域をもち地域の数集団をかかえている。はたして岩崎、土屋などが提唱している「首長権の移動」が地域内部の未熟な首長層間で2世紀にわたり行われていたか疑念が残る。この疑念を解くとすれば左岸と右岸は別の連合帯と見るか、第3者の強力な介入が付加されたと考えたい。

いずれにしても石川条里遺跡大溝区画の特殊遺構群はこの「連合体主導集団」の首長による産物と考えられ、数十年間祭祀域として維持されていた。また祭祀遺物となる石製品、金属器などは川柳將軍塚古墳出土品に近似していることから、祭祀の帰結が川柳將軍塚古墳と深くかかわっていたことを示している。

註

註1 善光寺平南部域の古墳の変遷（岩崎卓也：1989）は以下の表のごとく整理された。

	350年	400年	450年	500年
千曲川左岸	姫塚古墳	川柳將軍塚古墳		中郷古墳
千曲川右岸	森將軍塚古墳	土口將軍塚古墳	倉科將軍塚古墳	有明山將軍塚古墳

註2 古墳立地が低地にあることや墳丘から埴輪が収集されていないことなどから5世紀後半と位置付けているが5世紀前半の可能性も残されている。

註3 西山克己は集落の隣接地に墓域、周辺に水田、尾根上に大型古墳がある古墳前期の景観を「篠ノ井タイプ」として位置付けた。(西山1993)

註4 宮下健司は水を媒介としたこの空間構造は古代まで引き継がれたものと指摘している(宮下1989)

註5 善光寺平には北東域にも4世紀代の前方後円墳として大屋山・和田東山古墳などがあり、古墳群を形成している。和田東山古墳の場合周辺古墳の分布から首長系列が類推できる可能性もあり、北東域にも1政治圏が想定できる。岩崎は今のところ古墳の規模から森將軍塚古墳のある南部域を善光寺平の中心地と考えている。

註6 森嶋稔は『更埴市史第1巻 第3編古代』1994において更級郡の當信郷を大岡・新町一帯、小谷郷を八幡・桑原・稻荷山・長谷一帯、更級郷を塩崎一帯もしくは戸倉・更級一帯、清水郷を信田一帯とし埴科郡の倉科郷を森・倉科・生萱一帯、磯部郷を戸倉もしくは岩野一帯、船山郷を埴生一帯大穴郷を屋代東北部・雨宮一帯、屋代郷を屋代南西部・粟佐一帯、英多郷を松代一帯に比定している。

黒坂周平は『長野県史 通史編 第1巻原始・古代 第3章』1989において小谷郷を八幡・桑原・稻荷山の地域、更級郷を戸倉町西部から更埴市西部の一帯、清水郷を信更町、信州新町一帯もしくは信田から篠ノ井石川周辺、埴科郡の倉科郷を倉科一帯、磯部郷を戸倉、船山郷を埴生、大穴郷を生仁・生萱・土口一帯、屋代郷を雨宮周辺一帯、英多郷を松代町一帯に比定している。

註7 郷の推定地に関しては長野県立歴史館専門主事傳田伊史氏の教授を得た。

#### 参考文献

岩崎卓也：1989 『長野県史 通史編 第1巻原始・古代 第2章 第2節古代社会の基礎』長野県史刊行会編

岩崎卓也：1990 『古墳の時代』教育社歴史新書46

岩崎卓也：1996 a 『古墳時代のシナノクニ』「シナノクニから科野・信濃国へ」更埴市教育委員会

岩崎卓也：1996 b 『古墳と家族・親族』「考古学による日本歴史15 家族と住まい」雄山閣

小林秀夫：1997 『千曲川流域における古墳の動向－5世紀の古墳を中心として－』長野県考古学会誌82長野県考古学会

土屋 積：1992 『森將軍塚古墳の墓域構成について』「史跡森將軍塚古墳 第8章 第4節」更埴市教育委員会

土屋 積：1994 『森將軍塚古墳の周辺』「日本と世界の考古学 岩崎卓也先生退官記念論文集」雄山閣

西山克己：1993 『信州における墳墓の概観と墓域景観』「長野県考古学会誌－古墳時代特集」69・70

広瀬和雄：1989 『古墳前期の集落』

宮下健司：1985 『長野県石川条里周辺における原始・古代の空間構造』「信濃」III-37-9

森嶋 稔：1994 『更埴市史 第1巻 古代・中世 第2編考古』

## 第2章 遺 構

### 第1節 遺構の概要と本報告の扱い

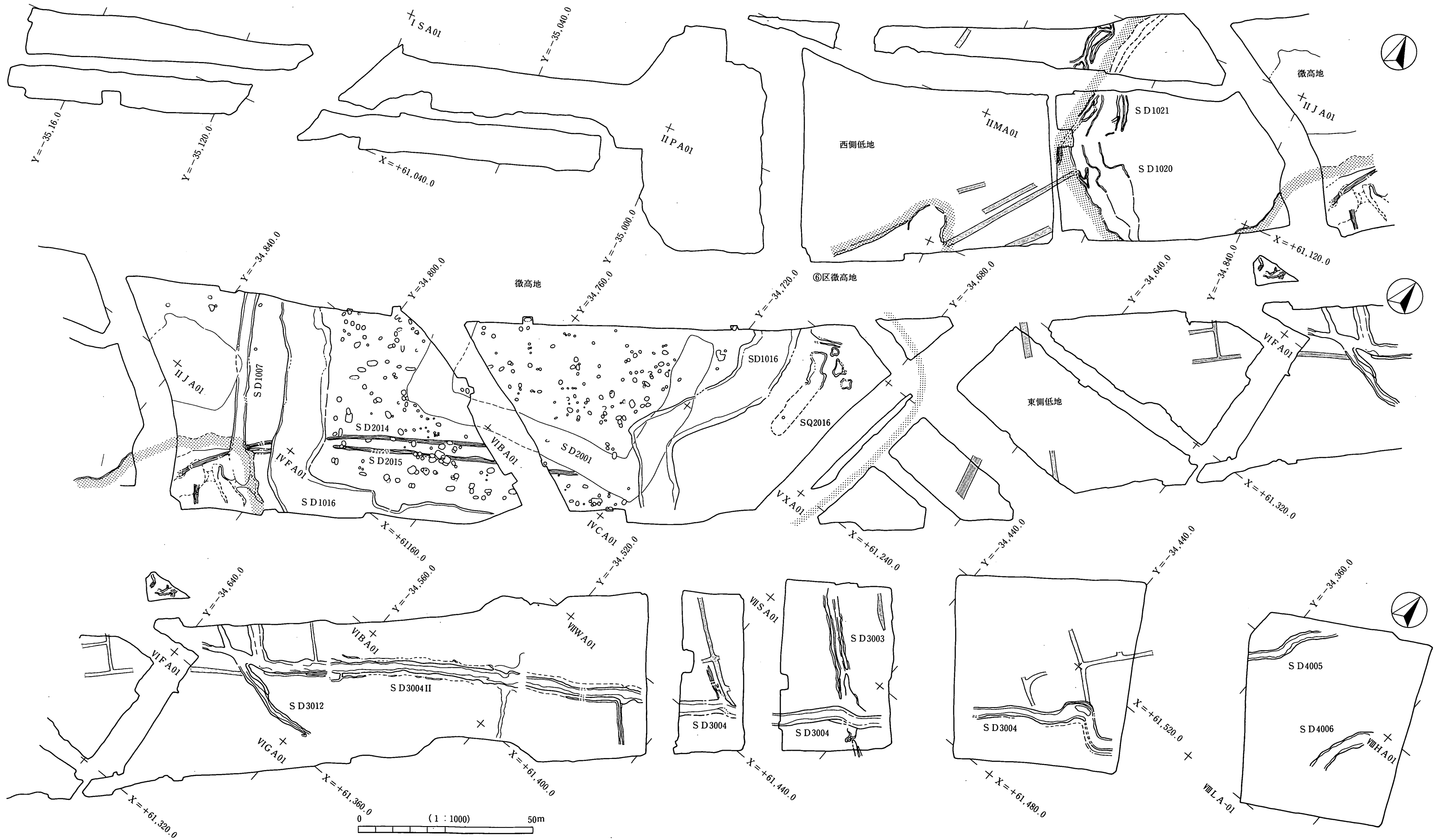
#### 1 遺構の概要

古墳時代の遺構は現地表面下約50cmの第1面で弥生～近世の遺構と共に検出された。遺構や遺物から微高地域で弥生時代以後に居住地として利用されたのは古墳時代と中世の2時期のみで、他の時代は耕地・墓などの利用と思われた。この古墳時代と中世は、全く異なった時期ながら共通する点がいくつかある。一つには中世が館、古墳時代は竪穴住居跡が皆無で多数の土坑群を大溝が取り囲む特殊な遺構配置になるように一般的な集落遺跡ではない点である。中世は若干問題があるが、その出現・廃絶が唐突的と感じられる点も類似する。このように本微高地は通常の集落が営まれない、あるいは不適切な場所と考えられ、居住関係の遺構が営まれる場合には何らかの特殊な事情があったとみられる。その場合、本微高地が後背低地内の地形変換点にあたることや、低地内に立地する小微高地で山手の緩斜面と自然堤防とは隔絶しながらも中間に位置する立地条件が関連するのかもしれない。

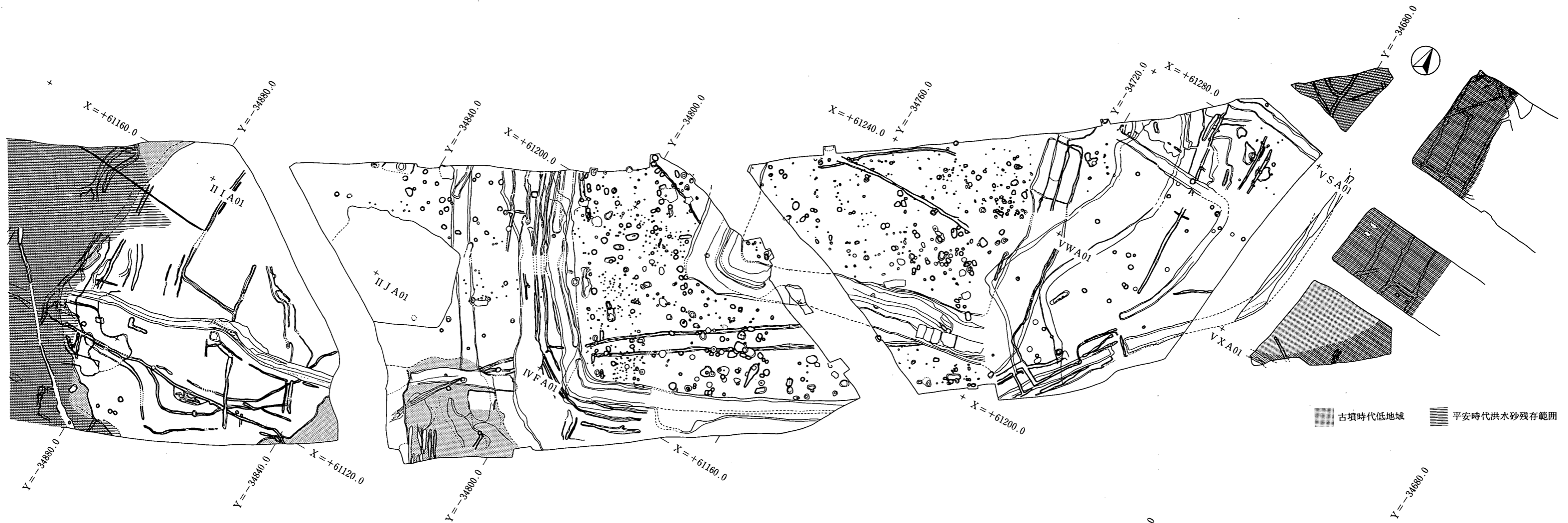
微高地の古墳時代の遺構は立地場所と分布によって中央部の微高地上の平坦地にある遺構と低地境の遺構に大別される。この両者は近接する部分もあるが、基本的に空白地帯をおいて離れているので本報告でも区分して扱うことにした。なお、微高地周辺ではほぼ重複する年代の水田遺構が検出されているが、これについては第1分冊に掲載した。

微高地中央部の遺構は土坑群を幅10～13mの大溝（SD1016）が取り巻き、その西外側に平行する溝跡（SD1007）、東外側には遺物集中（SQ2016）が配される。遺構は極めて統一的な計画によって配置されていると感じられる。この大溝で区画された内部が本遺跡で最も中核的な場所とみられ、ここで検出された土坑が本遺跡で行われた行為を具体的に表現する遺構と考えられる。この土坑群の性格については祭祀行為に関連する廃棄土坑と井戸跡・柱穴跡などの複数種類が含まれる2つの可能性が想定された。前者は土坑埋土の炭化物・土器の出土から類推され、後者は形態から類推されたものである。土坑のあり方は単純な性格として割り切れない複雑な様相があるかもしれないが、ここでは基本的に井戸跡や柱跡などの数種類に分類できる可能性があると考えて記述した。また、微高地中央部では総重量約3tの土器が得られたが、他には各種玉類・石製腕飾類・筒形石製品・紡錘車形石製品・銅鏃・銅鏡などの古墳に埋納されるような特殊遺物、羽口・漆付着土器・骨未製品などの手工業関連遺物、各種獣骨・種子、各種木製品・割材など多岐にわたる遺物が出土した。このなかで、石製腕飾類を初めとする特殊品は本遺跡にかかわる社会階層を示唆するものと考えられる。

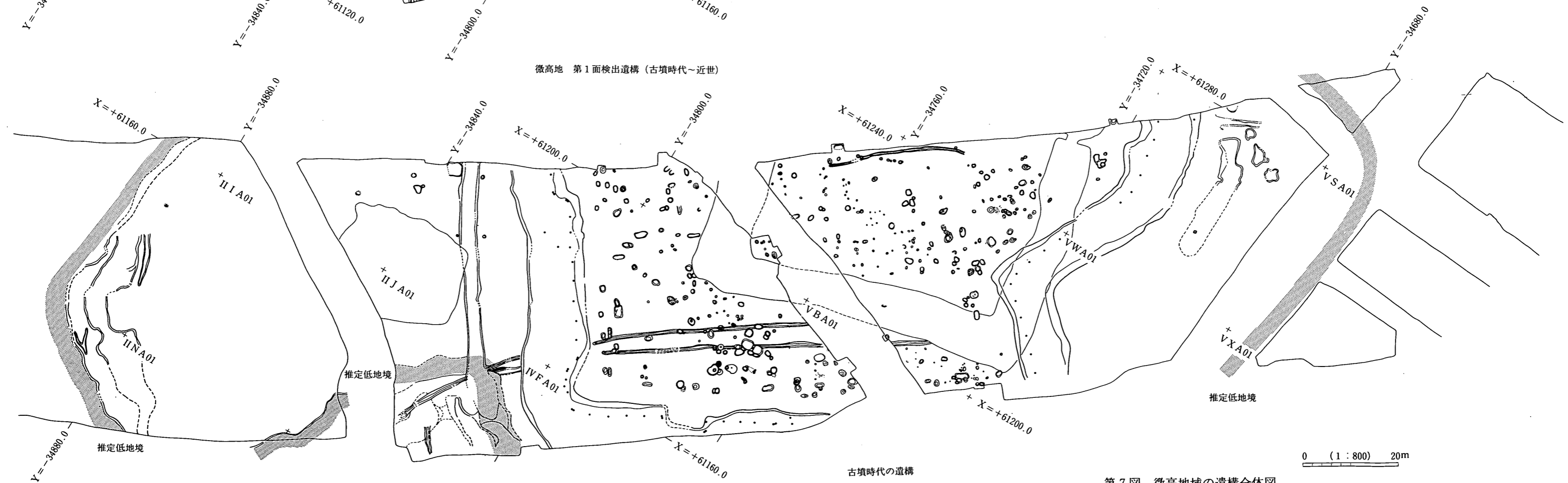
低地境の遺構は微高地西側境で検出された。本微高地周囲の低地境は東側・西側の2か所存在するが、東側については低地境部分が現道路と重複し、この道路下には大規模な水道管などの埋設物があることから調査が実施できなかった。微高地西側境はさらに④・⑦-1区の西側縁辺部、⑦-1・⑦-2区の西南縁辺部の2か所に分離しているが、前者からは微高地縁辺をめぐる溝跡と遺物集中、⑥区の微高地から西側低地を横断する杭列、後者からは遺物集中を中心に微高地中央部から連続する溝跡が数条が検出された。遺物



第6図 古墳時代の遺構全体図



微高地 第1面検出遺構 (古墳時代~近世)



第7図 微高地地域の遺構全体図

集中は両者に共通して認められており、低地境を巡って配置される低地境に固有の遺構と考えられた。

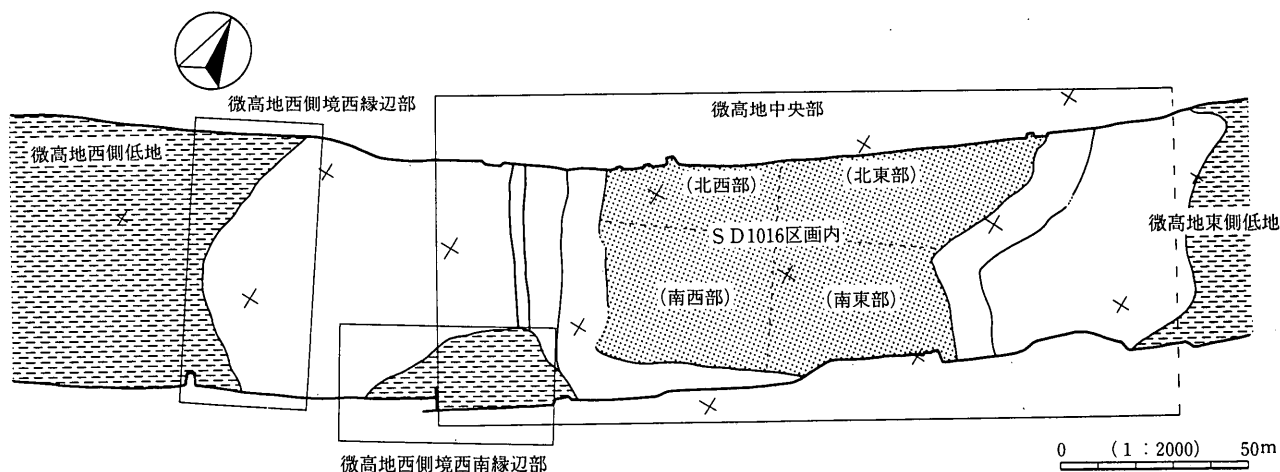
微高地中央部の遺構と低地境の遺構の関連については分布や遺構立地場所、検出された遺構の種類からみれば、別の契機による所産と思われたが、出土土器からはほぼ近似した年代の所産であるので何らかの関連もあると思われた。したがって、本遺跡で検出された特殊な遺構群がSD1016で囲まれた微高地中央部の遺構群に限定されず、周辺の微高地境も含めた範囲として捉えられる可能性もある。

## 2 遺構の掲載方法

### (1) 微高地域の遺構の区分 (第8図)

本分冊は調査域のほぼ中央で検出された微高地の古墳時代遺構を扱うものである。ここで検出された遺構は大きく「微高地西側低地境の遺構」と「微高地中央部の遺構」に分けて捉えられる。両者は関連性も想定できるが、遺構の種類・構成・立地場所や調査状況の違いから分けて記述する。なお、西側低地境はさらに「微高地西縁辺部」と「微高地西南縁辺部」に区分し、微高地中央部の遺構でSD1016の囲む範囲内を「SD1016区画内」として記述し、内部をほぼ4分割して遺構の位置を表現している。また、この微高地域で検出された古墳時代の遺構群は「大溝区画特殊遺構群」と総称した。

微高地と低地境の遺構を区分したが、厳密に分けられなかったところもある。特に問題になるのは微高地境と低地境水田遺構と関連する遺構、微高地境と微高地中央部に関連する遺構の扱いである。前者の場合では厳密な性格の規定に基づくものではないが、杭列など直接水田遺構と関連すると見られる遺構は第1分冊に掲載した。後者では微高地中央部から連続する溝跡などが問題になるが、遺構の主体があるほうへ帰属させて扱うことにしている。



第8図 本報告での記述の区分

### (2) 遺構の時期決定と遺構の種類

微高地域では同一検出面で弥生時代から近世にいたるさまざまな遺構を調査した。そのため、整理では遺構の時期と種類をどのように区分するかが大きな問題であった。個別にみれば、必ずしも明快に時期や遺構種類について断定できなかったものも多い。そこで、以下には本報告で取り扱った遺構の時期決定の方法と種類の区分について基本的な考え方と問題点の概略を触れておくことにしたい。

#### ア 遺構の時期決定

微高地中央部では弥生時代以後の遺構が同一調査面で検出され、検出面では時期区別ができない。その

ため、土器等より判断せざるをえなかった。しかし、かならずしも豊富な遺物にめぐまれているわけでもなく、多様な観点を総合することになった。したがって、本報告で扱う遺構も古墳時代とは断定できないがその可能性のある遺構までが含まれる点は注意されたい。

古墳時代の遺構を抜き出すにあたって、以下のような観点に着目した。これらは逆にいえば、古墳時代の遺構の特長と捉えられるものである。しかし、各観点で挙げた要素は一定の傾向のなかで見られることで、絶対的な基準が設定できるものではない。したがって、あくまでも判断はこれらの観点での傾向を比較した上で感覚的に行ったことは断っておきたい。

#### A 出土土器

考古学的な時間の物差しとしては出土土器が重要な位置を占める。今回の遺構時期決定、特に土坑の時期決定でも最も重視した要素である。しかし、出土土器の年代を明らかにできても遺構との関係が問題になるため、ここでは遺構と土器の関係について土器の出土量と土器の残り具合（遺存度）という2つの観点でみることにした。これは土器の出土量が多く、残り具合の良好な土器が出土したほうが遺構へ土器が直接廃棄されるなど、関連性がより高いと考えたことがある。詳細は土器の出土状態のところで後述する。

#### B 埋土

埋土の色調・土質と、炭化物層の有無の2点を基準として時期判断した。まず、埋土の色調・土質であるが、地形と土層のところで述べたように古墳時代の基本土層は多くの場合は褐灰色、もしくは灰白色である。水田域では粘土質が強くなる傾向があるが、低地域ではシルト質に近い土質となる。このことから灰褐色もしくは灰白色の埋土をもつ遺構は古墳時代の可能性が高いと考えた。また、一方で中世以後の井戸跡では灰色の強い砂を多く含む埋土を特長とし、調査の検出段階でもそれと判断できるものであったため、これらの埋土の土坑は中世の所産として除外することができた。しかし、今回の調査は複数調査地区の調査が同時進行し、しかも各調査地区では多くの遺構調査担当者が分散して調査に当たったため、必ずしも統一した観点で土質の記載がなされていない場合が多い。また、各調査地区ごとに埋土の色調を比較してみると、微高地の低地寄りほど暗褐色土、もしくは黒褐色土と記載される傾向が全般的に認められた。これは調査記録者の認識の違いというよりも土中の金属イオンによる影響と見られ、この傾向は中世の土坑でも認められている。従って、必ずしも埋土の記載のみから断定することはできず、低地よりではあくまでも補助材料としか扱えなかった。

次に炭化物層である。出土遺物が大量に認められる土坑では大量の炭化物を含む場合や炭化物層が確認できる場合が多かった。このことは規模の大きな遺物集中S Q 2016、あるいはS D 1007やS D 1016でも同様であり、何らかの火を用いた行為が遺跡全体に共通して見られると考えられた。その一方で中世の井戸跡や溝内では炭化物層があまり顕著な存在とは見られなかったことから、大量の炭化物が含まれたり、層をなしている場合においては古墳時代の所産の可能性が高いと考えた。しかし、これも絶対的なものではなく、炭化物が顕著に認められないが、古墳時代と考え得る遺構も確実に存在する。従って、時代推定の有力な根拠ではあるが、古墳時代の遺構すべてに適用できるものではないと思われた。

#### C 遺構の形態

次に遺構の形態であるが、上記の要素の比較から古墳時代の所産と判断される遺構と規模、形態が類似する場合に古墳時代と考えたものがある。特に時代ごとに遺構の主軸方向が変化するとみられたので、微高地域においては時期判断の有効な基準になると考えた。この観点から古墳時代と認定した遺構には土坑や溝跡の一部、建物跡とそれを構成する柱穴跡がある。特に、建物跡は炭化物が顕著でなかったり、出土遺物も少ないなど時期決定が非常に難しい面があるため、配置の主軸方向から古墳時代と判断した遺構が多い。



#### D 切り合い

上記のような様相が見られなくとも、古墳時代と特定できる遺構に切られ、古墳時代の土器を出土している場合は古墳時代の可能性があると扱った。しかし、この判断で最も重要なのは切り合い所見の正しさである。この点では土器からみた遺構の時期区分と切り合いの所見が矛盾する場合もあって、不安を残すところがある。土器以外の調査所見に矛盾がないと思われる場合では切り合いから古墳時代の遺構と判断した。

#### E 遺構の配置場所

古墳時代の遺構は統一的な計画で配置されていると感じられた。そのため、溝跡のなかには配置関係から時期が推測できるものがある。微高地で検出された古墳時代と判断した溝跡には大きく2つの計画性で作られているものが認められる。ひとつは微高地の特殊な遺構群を構成するS D1016とS D1007であり、もうひとつは切り合いなどから先行する可能性が想定できるS D1058～1061・2022・2014・2015である。このなかで、後者のグループの溝跡となるS D2022は出土遺物が見られなかったが、他の溝跡と類似した走行方向となるためここに含めた。

以上が古墳時代の時期認定の観点である。もちろん、判断に当たっては上記の様相を古墳時代遺構の諸特長として捉えたが、一方で他の時代の遺構の特長が見られない点も判断材料としている。しかし、再三述べるように諸特長と捉えた様相が矛盾する場合も多々見られ、かならずしもひとつのみで絶対的な判断基準とはできないものも多い。そうした場合は複数の観点に照らして総合的に判断を加えている。

#### イ 遺構の種類

次に遺構の認定と種類について述べる。調査では検出された状態から土坑（SK）、溝跡（SD）、遺物集中（SQ）、焼土跡（SF）、性格不明遺構（SX）などに区分した。基本的には形態的な特長を捉えて区分した実質的な遺構の分類でもあるが、実際には割り切れないところがある。特に遺構の分類は性格を規定したものではないために、別の遺構種記号が冠されながらも類似した性格と考えられるものや、遺構自体の認定にも疑問が残るものもある。本来ならば、調査段階とは別に性格別に区分すべきところ（例えば土坑も井戸跡・柱穴跡・掘立柱建物跡・柵列跡・廃棄土坑など）ではあるが、後述するように調査ミスの有無の検証や、遺構種の認定と区分が断定的なものとして扱うことができなかつたため、基本的に調査での区分を踏襲するものとした。しかし、調査段階で所見の過ちを修正したもの（例えば、SKとされたが、実際には遺物集中であったものなど）があり、さらに土坑は一括したなかで井戸・柱穴（建物・柵列跡）・その他の土坑に区分して扱った。土坑を数種類に分離した理由と種類の認定やそれに関する問題点については土坑の項で述べているが、このような記述方法は誤解を招き易いと思われるが、あくまでも現時点での1つの可能性に基づいて記述することによる。

以下には遺構の種類の概略説明と、遺構の整理で問題となった点を挙げておく。詳細は個別遺構のところを参照されたい。

#### A 土坑跡（SK）

円形、楕円形、あるいは方形の掘り込み遺構である。整理段階での土坑認定の問題は3つあった。それは遺構かどうか、遺構と認めた上で土坑と認定できるか、土坑と認めた上で性格別に分離できるかどうかの問題である。1番目の問題では検出面では何らかの掘り込み遺構とされたが、出土遺物も少なく、浅過ぎて土坑とは認めがたいもの、あるいは平面形が不整形で底面の凹凸が著しいために攪乱・くぼ地地形・草木の根痕・後代の耕作などによる疑似的な掘り込みではないかと迷ったものがある。一目で遺構でないと判断できたものは基本的に除いたが、判断のできないものは遺構の可能性があると考えて加えた。2番目の問題になったのは大量の土器、あるいは炭化物・焼土が検出されて遺構であると判断されたが、

浅過ぎて土坑なのか疑問が残るものである。調査地区でいえば⑤-1区・⑧-1・-2区で検出された土坑の一部が該当する。⑧-2区では遺物集中・炭化物集中の可能性のあるものは調査段階で注記・所見の修正が行われたが、他地区では行われず、どちらとも判断がつかないものが多い。特に⑧-1区は重機による表土掘削段階で焼土や炭化物、土器が多く検出されたことから、検出面が比較的高めに設定されたことがあり、実際には遺物集中としたほうが良いものも認められる。このことは⑩-1区の所見から検出面が古墳時代旧地表面に近い可能性が指摘されたことに関連し、このような遺構が検出されることになったと思われる。しかし、整理段階では掘り込みの有無については十分に検証することができなかつたので、掘り込みがあると記録されたものは浅くとも基本的には土坑として扱った。三番目の問題であるが、これは調査時には土坑はすべて類似した廃棄土坑であろうと思われたが、整理時には土坑には井戸跡や柱穴跡などが含まれる可能性も想定されたことがある。本報告では後者の可能性に立って記載したが、このような検討の経過や認定の基準、あるいは付随する問題は土坑の項で記述したので省略する。

#### B 溝跡 (SD)

細長い掘り込みである。今回の調査のなかでは、すべての溝跡が規模の大きいもののみであり、他の種類の遺構との混乱は少ない。

#### C 遺物集中 (SQ)

掘り込みが確認できなかったものの、遺物や炭化物が散布する状態で検出されたものである。この遺構は特殊な遺物出土状態と認められたもので、遺構の性格を規定していない。しかも、構造や範囲が把握できたものはわずかしがなく、上述した土坑認定上の3つの問題がここにも認められる。特に第1番目の遺構かどうかの問題がかかわる。検出された遺物集中には炭化物集中や、土器の集中及び、両者が近接して検出されたものがあり、規模や範囲の捉え方も多様である。このなかで、SQ2016や低地境のSQ1004・1005は炭化物・焼土を伴っていることや遺存度の高い土器が比較的多く含まれることから何らかの活動によってできた遺構で、検出土層からも古墳時代と特定できる。他の遺物集中は規模が小さく、しかもほとんどが微高地中央部で検出されたため、古墳時代以後の耕作などによって土坑埋土内の土器の一部が移動して結果的に生成された遺物集中なのか、調査ミスで土坑を誤認した遺物集中なのか判断としないものもある。また、2番目の問題に関し、掘り込みが浅い土坑や炭化物集中、あるいは焼土を伴う遺物集中は焼土跡(SF)との区別が必ずしも厳密でない。さらに、逆に土坑の底部の残存を遺物集中と誤認した可能性の遺構もある。この遺物集中の認定は調査時の所見によっており、整理では周囲の土器出土との対比のなかで認定の妥当性を検証することはほとんど不可能であった。したがって、遺物集中は何らかの遺構として認められる可能性をもちつつも、認定の妥当性については問題を残すと理解されたい。なお、遺構の範囲や単位の問題であるが、今回の調査で認定された遺物集中には単独の土器出土の場合、複数の土器出土の場合、あるいは複数の土器集中を総括して認定した場合など多種のケースがある。その範囲の認定は掘り込みを伴わないことから曖昧であり、単位の把握の仕方や他の遺構との関係の認定でも問題を生じている。これは調査時の遺物集中の認定にあたっては単位の把握までは注意されていないことや、範囲認定の曖昧さから生じたものである。さらに、1つの遺物集中でも複数行為の集積が想定できる場合がある。特に、規模が大きな場合は単一の契機ではなく、複数・あるいは反復される行為の集積を反映しているのかもしれない。

#### D 焼土跡 (SF)

掘り込みの確認できない焼土跡と認定された遺構である。遺跡内では非常に少なく、単独で存在するものだけを認定し、遺構内で検出された場合には遺構に帰属させて捉えている。後者の例としてはSQ2016、SD1016、土坑の一部に焼土が検出されたものがある。また、遺物集中としたなかにも焼土跡が含まれる

ものもある。

#### E 性格不明遺構 (SX)

性格不明の掘り込みのある遺構である。他の遺構は基本的に検出された状態で識別されているが、これのみは検出された状態に一定の基本形はなく、性格が不明な遺構に対して調査途中で振られたものもある。遺跡内の古墳時代遺構では2基あり、一つは縦穴状のSX1001、もう一つは凹地地形の可能性もあるSX2002である。SX1001の場合は検出状態からすればSB(縦穴住居跡)となるが、精査でも縦穴住居跡とは認めがたく、SXとされた。

### 3 土器出土に関する計測の記述方法

#### (1) 土器の遺存度計測

第1章 第2節 (3)アのところで述べたように、今回の報告では土坑を中心として出土土器の遺存度を計測してみた。その目的は調査段階から指摘されていた土坑ごとの土器遺存状態の違いを具体的に示すことと、土器の残り具合から土器の廃棄状態を考えることであった。土器遺存状態の計測での仮説は、土器遺存度が高いほど土坑へ直接廃棄・もしくは埋納された可能性が高いとするものである。しかし、その資料化の方法については考えあぐねたが、中世・近世遺跡での土器量を口縁部の遺存累計として計測する方法の応用として東京都港区郵政省飯倉分館の調査で小林謙一氏が土器の種類ごとの遺存の違いから廃棄過程の違いを導き出された方法(註)があることを知った。そこで、この方法を応用し、以下のような方法で計測することにした。

まず、1cm間隔の同心円と中心を通る8分割した線を加えたチャートを作成し、各遺構から出土した口縁部破片をチャートに当てて、8分割のいくつ遺存するかを個々に計測した。これを遺存度として表現することにした。そして、口縁部の8分割した遺存度別の破片数を遺構ごとに集計し(例えば、1/8の遺存の破片がいくつ、2/8の遺存破片がいくつあるなど)、あわせて遺構で計測した口縁部破片数のなかでの比率を算出した(計測した口縁部破片数全体のなかで1/8の破片が何%、2/8の破片が何%といったように)。8分割の遺存度の計測は切り上げで計測し、1/8以下の場合も1/8とし、直接接合しないが胎土や調整方法の類似などから同一個体と思われるものは並列して1破片として計測した。これらの計測によって作成したグラフの形から数種類に分類し、0・A～Cの4つの型を設定した。これを「口縁部遺存度区分」と表現している。なお、口縁部を選択した理由は計測のしやすさと破損しやすい部位であることによる。基本的に端部まで遺存する口縁部を選択したが、口縁端部がわずかに欠損すると思われたものは計測に含め、斜めに破損している場合は口縁部のもっとも遺存する部分で計測している。また、有段口縁の頸部の遺存個体では頸部上端で計測したものがある。破片が小さいほど不明、あるいは誤認も多いことは断わっておく。なお、この作業にあたっては、遺構の遺存状況、あるいは調査での土器採取の仕方、あるいは土器接合作業の達成度などの条件によっては得られる計測値の誤差が異なる可能性があるので以下に簡単に触れておく。

#### ・遺構の遺存状況

後代の遺構や耕作によって破壊されている場合では、調査で得られた土器が本来存在したであろう一部しか残存しないと考えられ、残りが悪い遺構での計測結果はあまり信頼が置けないことになる。遺跡内での削平の受け方には検出面までの掘削や後代の耕作による層的な削平と、他時代の遺構による面的な削平がある。前者については検出面が旧地表面に近い存在とみられることから、計測上に強く影響を与えるような削平は受けていないと考えられるが、⑧-1区の2400番台の遺構については第2面で検出されたため、一部には計測に影響がでている可能性がある。これらの問題となる土坑では遺存度が良好な部類に区分で

きるものや、土器出土量が少なく遺存状態が不良な部類に区分されたものは、上部が削平されても量的な問題を除くと変更はないとみられるが、中型破片のみを出土したと区分される場合は影響を受けている可能性があり、そうした可能性を指摘できる土坑にはS K2404・2430・2436・2442・2608がある。

次に面的な切り合いであるが、基本的に他の遺構で大きく削平される遺構はあまりないが、一部には8割以上が削られている、あるいは削られている規模が断定できない遺構がある。これらも上記のように遺存状態が良好な部類に分類されたものや、残された土器出土状態から土器出土量自体が少ないものが多く、削平を受けたとしても遺存度の区分に影響を受けているケースは少ないと思われた。

上記のように、一部の土坑で上面が削平されたり、他の遺構に切られるものがあるが、遺存度の区分に大きく影響するものは少ないと思われる。しかし、切り合う遺構間の接合作業は実施していないため、どの程度の誤差をもつものかは不明であり、また、量的な問題はまったく明らかにしえなかった。

・廃棄時、使用時の欠損

土器には口縁部がごく一部欠損しているものや頸部以下は完形・略完形ながら口縁部がすべて欠損するものがある。当然、使用に支障がなければ使用され続ける可能性も想定されるので、かならずしも口縁部の欠損が廃棄以後であった確証はない。また、逆に口縁部が完存しながらも口縁以下の胴部がすべて欠損する場合もあるので口縁部の遺存の様相が直ちに廃棄の類型に直結しない場合も考えられる。しかし、そのような遺存状況を示す遺物は少ない点から検討の上では無視することにした。

・調査上の問題

調査上の問題としては土坑が間違いなく掘られているか、あるいは出土土器がすべて採取されたかの問題がある。前者の問題は後時代の遺物が混在しており、切りあいを見逃した可能性が指摘できるものもあるが、基本的には調査結果を前提とせざるを得ない。後者の問題は調査2年目ではフルイによる玉探しをおこなった際に土器片も採取されており、肉眼で採取する場合は見逃しがあることは確実である。また、このことは取り上げ時と思われる比較的新しい破損面が認められる略完形品の存在からも追認できる。しかし、フルイで追加されたものが小破片であることから、別個体である場合は1/8以下のものが増加し、同一個体の場合も大型破片でみた場合と大差なく、ある程度幅を持たせたなかで検討する限りでは大きな影響はないと推測した。

・接合作業

計測においては同一個体と思われるものは並列して計測している。同一個体とする場合は判断が主観的で誤差を生じやすいが、接合した場合には信憑性が高くなり、計測上の信頼度が異なることになる。この接合作業においては達成度や、接合作業の方法が問題になるが、今回の場合では個別遺構ごとにかなり時間をかけて接合をみた。もちろん、それは完全とは断言できず、土器出土量が多ければ多いほど誤認も生じやすいことは想像されるが、土器出土重量が多いものほど遺存度の区分は遺存良好な部類に分類される傾向が指摘できているので、概略の傾向を把握する上では大きな影響はないと考えた。しかし、一方で遺構間の接合は時間的な制約もあって実施していないが、目立った一部の遺物で遺構間で接合するものも認められている。遺構間接合を行うことで土坑出土土器の別のあり方が浮かんでくる可能性もあるが、ここでは十分明らかにすることはできなかった。

以上、列挙した諸条件からは厳密な区分として扱うことは難しいが、概略の傾向として扱う範囲では有効ではないかと考えた。

註 小林謙一 1986 「第2節 2 瓦質・土師質土器」『郵政省飲倉文官構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会

## (2) 遺存度区分 (第9図)

上記のような計測方法で得られた数値は、母数の多寡によって評価の信頼度が異なり、資料数が少ないほど評価が難しくなることが予想される。しかし、資料の実数で比較すると逆に遺存度の区分はより複雑化してしまう。ここではより単純化できるほうが扱い易いと考え、個別遺構ごとの遺存度を百分率でグラフ化して、そのグラフの形で区分してみようと考えた。実際の資料数と誤差を生じる範囲について何らかの係数として提示できれば、より解釈の便を計れるかもしれないが、ここでは具体的に遺跡で得られる諸条件からも必ずしも厳密な比較はできず、しかも「誤差」とするもの自体を遺跡の実態のなかでどのように考えて良いものかわからなかった。そのため、資料の評価にあたっての信頼度がどの程度なのか明示できない中途半端な提示の仕方になってしまったことは断っておきたい。なお、このような方法によって土坑を中心に得られた資料を比較し、以下のような分類が設定できるのではないかと考えた。

## ア 遺存度区分の分類

前項で述べたような方法で作成した土坑別のグラフを全部重ねると遺存度別比率のありかたにバラツキがあるものの、概ね1/8遺存の破片比率が最も高く、5/8遺存破片比率が最も低く、再び8/8遺存へ向かって比率が増加する「逆J字」型のグラフになることが看取される。しかも数的に口縁部1/8～3/8遺存までしか見られない土坑も多いと看取されたことから3/8と5/8遺存が変換点になると捉えられた。このことから1/8～3/8、4/8～5/8、6/8～8/8遺存のランクに区分できると考え、どのランクまでの破片が含まれるかによってA～Cに区分し、さらに口縁部のない0を加えて4種類に大別してみた。

0：口縁部の破片が見られないもの

A：1/8～3/8遺存の口縁部破片しかないもの

B：1/8～5/8遺存の口縁部破片まで含まれるもの

C：1/8～6/8以上遺存の口縁部破片まで認められるもの、もしくは6/8以上の破片しかないもの

この分類の解釈の仮説は破片が小さいほど直接廃棄された可能性が低く、混入の可能性が高いとするもので、1/8～3/8遺存破片で占められるAは直接的な廃棄の所産ではない2次的な混入、4/8～5/8遺存破片の中型破片まで含まれるBは全くの2次的に遺構へ混入したもの、もしくは土坑近辺での廃棄や破損品を2次的に片付けたもの、6/8以後の遺存破片が含まれるCは略完形から完形品と呼び得る個体が見られることから直接的な廃棄・埋納を想定した。ただし、各土坑は単純に一つの契機に入った土器で占められているばかりでなく、さまざまな原因で入る土器が複合していることは遺存度の高い破片が含まれるグラフでも1/8遺存破片が含まれることから読み取れる。さらに上記のグラフのあり方から以下のように細分してみた。

A：(細分せず)

B1：1/8～5/8まで破片が認められるが、途中の欠落する遺存度があるもの

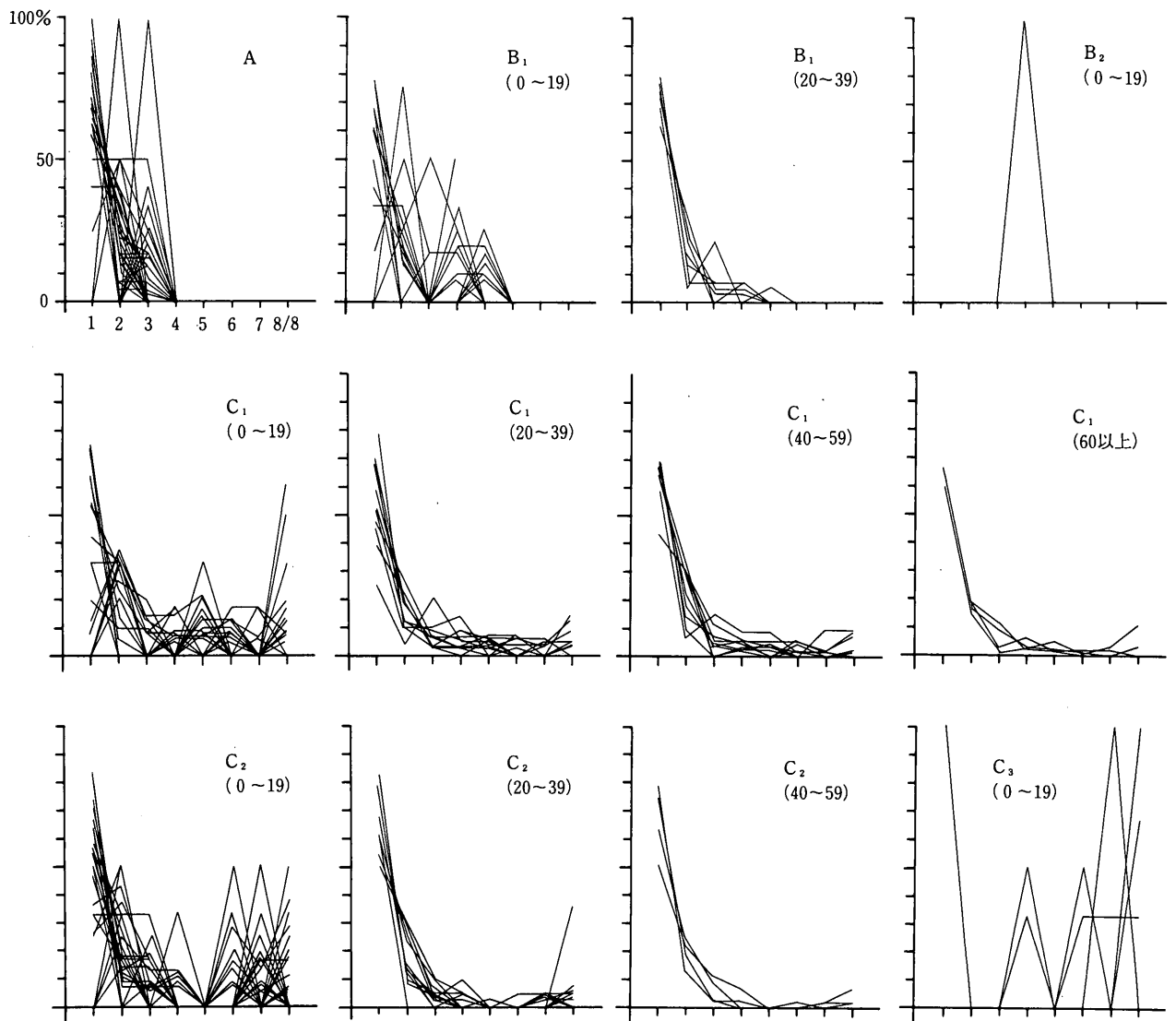
2：1/8～5/8まで破片が認められ、遺存度が大きくなるにしたがって破片数が減少するもの

C1：1/8～8/8までの間のほぼ全遺存度に破片があり、遺存度が大きくなるにしたがって破片数が減少、もしくは数に変化のないもの

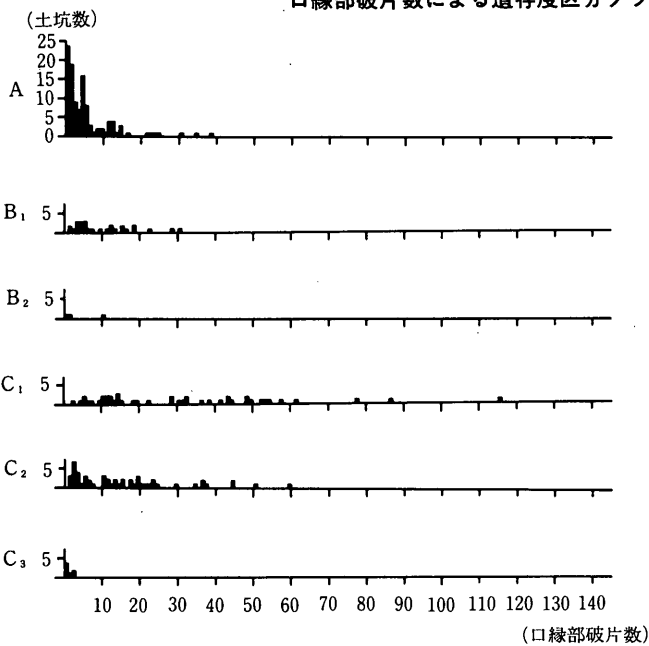
2：1/8～8/8までであるが途中連続する2つの遺存度の項に全く破片がないもの

3：8/8のみで占められるもの

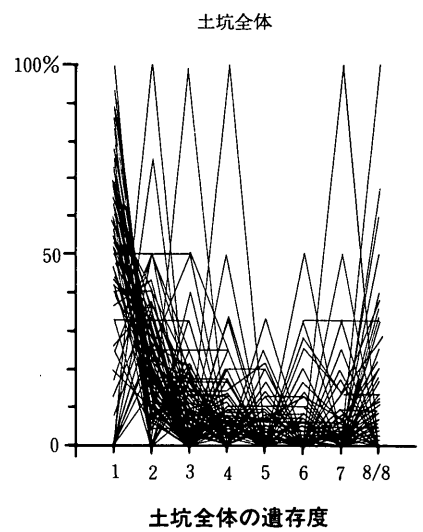
この細分は感覚的に区分したものなので、必ずしも妥当とはいえないところがあるが、基本的には口縁部の遺存度で0、A～Cごとに、遺存度の欠落する状況で細分したものである。これはC3のように完存品のみが出土する場合と、C1のように完存品の他に1/8遺存の小破片も多い場合では遺構内への土器の入り方が異なるのではないかと想定したことによる。具体的にはC3は埋納に近いもの、C1は土坑周辺で



口縁部破片数による遺存度区分グラフ ( ) 内は口縁部破片数



口縁部遺存度区分別口縁破片数



第9図 土坑出土土器遺存度区分と口縁部破片数グラフ

炭化物が生成された後に土坑内へ廃棄されていることを想定して、周辺からの混入や破損した破片を廃棄するものと直接的な廃棄が複合した様相といったようにである。つまり、途中で欠落する遺存度が認められる場合は土器が遺構内へ入る契機が混入と廃棄に分離できる可能性が高く、連続するものほど同じ廃棄経過のなかで小破片から大型破片、あるいは完存品も含まれるような廃棄のされ方があったのではないかと考えたのである。しかし、こうした様相を発生させる要因は多様な経過があったと推定でき、例えば、本遺跡での廃棄のされ方の特性かもしれないが、土器出土量が少ない場合にはC2・C3などの途中欠落する破片がみられる区分の型を発生しやすいとも考えられ、単純な解釈はできない可能性も想定される。したがって、ここでは廃棄状態はさらに細分できる可能性を指摘しつつも、具体的な解釈を加えることはせず、補助的に扱うことにした。遺跡内での出土量などの様相を加味して新たな区分として位置付けなおせば、より土器の出土状態の解釈で効力を発揮する可能性もあると思われるが、今回は十分検討できなかった。

#### イ 遺存度区分と出土量

上記の遺存度区分と土器の出土量は一定の相関関係がみられるので、土坑の例を取り上げてみて遺存度区分の意味について若干触れておきたい。まず、口縁部の資料数との比較でみると、Aは資料数20片以内の場合が多く、特に10片以内が主体的である。このことからAはやはり混入の可能性高いと思われる。BはAと類似した資料数となり、近似したグループとみたほうが良いのかも知れない。なお、B1よりB2のほうが資料数が少なく、B2は資料数の少なさから遺存度の欠落する部分が生じたもので、廃棄の実態によるとは断定できない可能性もある。これに対してC1・C2は全体的にバラつくものの、相対的にA・Bより資料数が多い傾向があり、土器出土量が多い場合では遺存度の高い破片が含まれる傾向が指摘できる。ただし、C3のみは資料数が10片以下であり、この例から資料数が少なくとも遺存度の高い場合があることを示す。また、途中欠落する遺存度があるとして区別したC2はC1とほぼ重複した範囲に分布するが、C2のほうが若干資料数の少ないほうに集中している。C2は中型破片を欠落させる傾向を持ちながらも特定の遺存度を欠落するものではない点と、C2・C1共に破片数が多いため相対的にAやBに比べて1/8～3/8の破片数も多い点は注意され、前者の様相からはC2も土器の入り方は多様で、特定の廃棄行為のあり方を示すものではないかもしれない。後者からは混入品が多い場所的な要因、あるいは開口していた時間が長いこと、さらに、破損した土器も廃棄される可能性などが考えられる。これらの解釈はいずれとも断定できなかったので、C1・C2共に完存品それ以外の破片の入り方については解釈をくわえることはできなかった。C2はC1よりも土器の出土量が少ないほうに集中する傾向をもつ点を重視すれば、B類と同様に小破片が入る確率の少なさを反映した可能性も残される。

なお、上記に述べた傾向は土器重量でも同様である。すなわち、全体的な傾向として重量が多いほど遺存度の高い区分のもので占められる傾向がある。1000g以下では圧倒的にA・0で占められ、2000g代でA・Cが同数、3000g代で逆転し、5000g代では1例のみAで残りはCで占められる。それ以上はほぼCで占められるのである。しかし、重量が少なくともCは存在し、重量が多い部類でもわずかながらAが存在する。必ずしも一定の重量で遺存度が区分されるものでもない。また、C2は1000g代から5000g代に集中部分があるが、C1は4000g代から7000g代に中心があり、両者は若干の重量分布範囲のずれがあるが、ほぼ重複した範囲にある点は口縁部の資料数の比較と同じである。

以上では厳密に区分できないが、土器出土量と遺存度の関係は一定の相関傾向が指摘できる。しかし、その区分は単純な廃棄の型として認定することができず、その解釈も明らかにしきれないところがある。

ここでは細分化できる可能性を残しつつも、0、A～Cの区分がある程度の土器廃棄の解釈に有効性をもちつつも、遺跡内の遺構への土器の入り方は多様であることを確認するにとどめる。



## 第2節 微高地西側低地境の遺構

### 1 微高地西側低地境の遺構概要（第10図）

地形環境のところでみたように本微高地を境として西側は小規模な微高地と谷状の低地が入り組む地形となっており、低地自体が東側低地よりも若干高い。本微高地の西側低地境はこうした谷状低地に面し、その対岸には⑥区の微高地や調査区南側の微高地が対峙している。この微高地西側境の調査は初年度④区で北側が調査され、次年度に⑦-1、⑦-2区で南部が調査された。④区では基本土層の捉え方や位置づけについて未確定部分があったため、その境のラインや帰属する遺構については明瞭に捉えられていなかったが、翌年の⑦-1、⑦-2区では調査面積が広範囲であったこともあり、具体的な様相が把握できた。しかし、⑦-1区東端から⑦-2区南西部の低地境については調査で確定しきれなかったところがあり、一部は溝跡と誤認されていたところもある。これらの誤認や所見の食い違いなどは整理段階であらためて検討しなおし、低地境のラインを確定した。

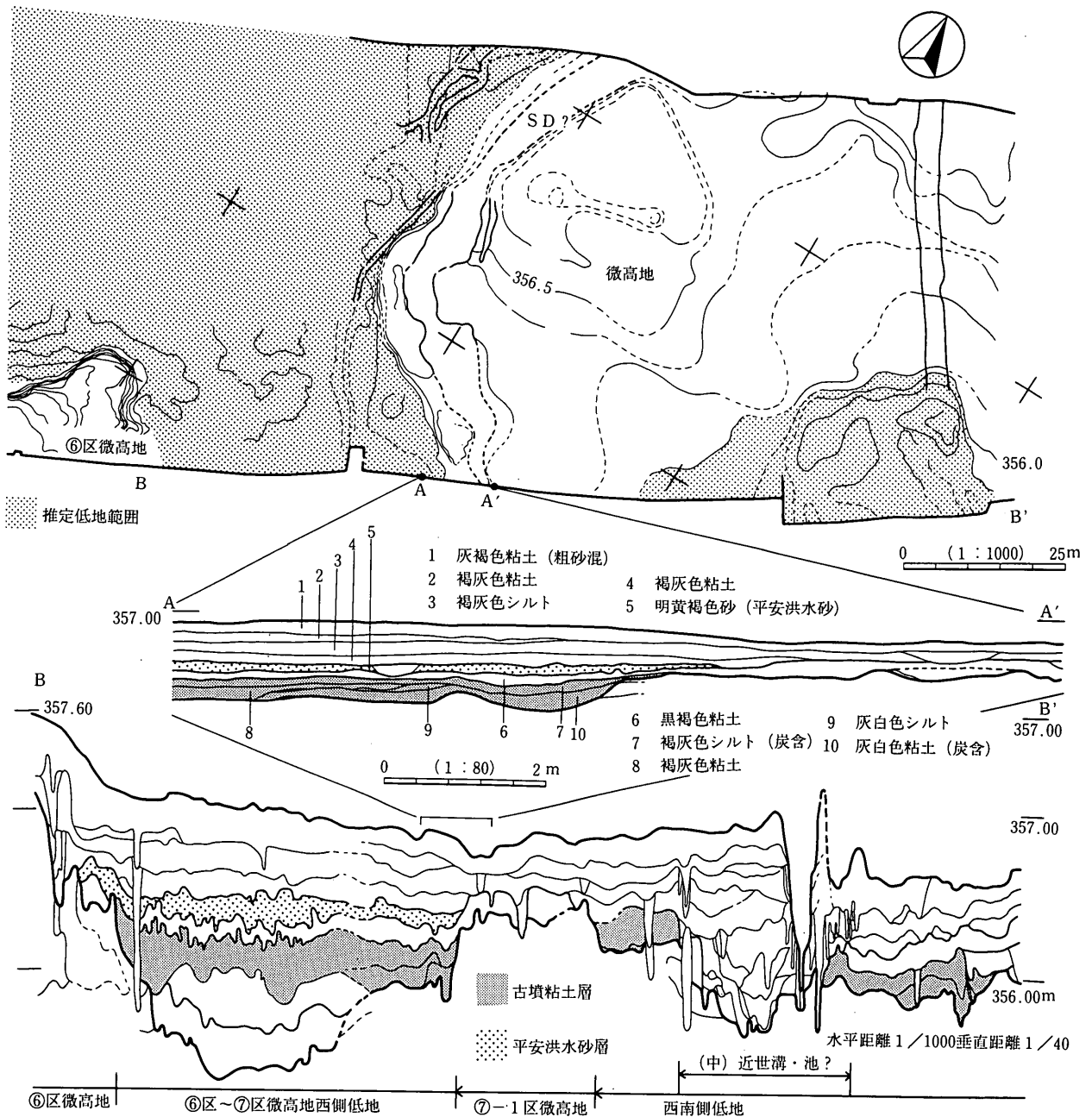
上記のような経過によって認定された微高地西側低地境は④区北東端から⑦-1区西端へ連続した後、⑦-1区で鈍角ぎみに緩やかに屈曲し、⑦-1区南西部の調査区外へ一旦抜ける。そして⑦-1区東南端から再び調査区内に入り、⑦-2区南西部へ連続し、S D 1016の脇で再び調査区南へ抜ける。このように微高地西側低地境のラインは調査区内では④区～⑦-1区南西部と、⑦-1区南東～⑦-2区南西部に分離して捉えることができ、ここでは前者を微高地西側低地境西縁辺部、後者を微高地西側低地境南西縁辺部として2地点に区分して記述する。この2地点は本来連続するものであって、検出された遺構にも類似した様相が認められている。しかし、一方では南西縁辺部は微高地中央部の遺構群に近接しているため、微高地中央部との遺構の関連が見られるなどの差異もある。

微高地西側低地境の土層については第1分冊に述べられているので、ここでは低地の⑥区と微高地にかかる⑦-1区の古墳時代の土層について若干補足説明を加える。微高地の西側低地にあたる⑥区では平安時代の埋没水田の耕作土下に⑥区9・10層とされた2枚の粘土層が存在し、9層が暗褐色粘土層で古墳時代の水田層にあたりと捉えられている。この9層を⑦-1区で平安時代埋没水田層を基準とした層順から対比させると平安時代埋没水田耕作土下に位置する褐灰色シルト質土が該当し、出土土器からもほぼこの対比は妥当と思われる。しかし、隣接した地区ながらこの古墳時代の土層は⑥区と⑦-1区では若干異なる様相が看取されている。それは調査者の観察観点の違いによって生じているのではなく、立地環境に規定されたと思われるところがある。例えば、⑦-1区では同層中に薄い炭層が確認され、土質もやや粘性が弱いだが、⑥区では粘性の強い土質で炭化物層は認められていない。これは水田耕作の状況で起こった差ではないかと思われ、⑥区は連続的な水田耕作されたため比較的均質の粘性の強い土となり、⑦-1区の微高地境周辺は直接水田耕作が及ぶことが少なかったために、炭化物層が残存し、しかも土質も洪水性堆積物に近い状態で残存したのではないかと思われる。なお、⑦-1区で確認された褐灰色土は南西縁辺部やS D 1016埋土中に類似層が確認されており、平安時代の水田耕作層を基準とした層順と色調の比較からは類似時期の所産と捉えられる。しかし、詳細にみると若干の時間差を窺わせる様相がある。すなわち、⑦-1区西縁辺部では褐灰色土中で炭化物層や土器集中が検出され、S D 1016埋土で対比される土層はS D 1016廃絶後の所産と捉えられたが、前者の土器集中とS D 1016の出土土器には大きな時間差は認めがたい。従って、土器集中とS D 1016出土土器を同時基準とすると、少なくともその前後2回にわたって洪水性の堆積物があったことが想定される。そして、低地では連続して耕作されたために堆積状態のまま残存しなかったとも思

われる。なお、この推測は低地境周辺で看取された状況を元に概念的に推測したもので、遺跡全体のなかで検討されたものではない。

## 2 微高地西縁辺部の遺構

この部分は⑥区の谷状低地に面し、⑥区の低地から低地境で急速に立ち上がる。この境ラインは微高地の基盤となる砂層が途切れることから比較的明瞭に認定することができるが、部分的に砂層上部から低地部を覆う土層が載るため認定が微妙なところもある。また、④区ではその境ラインが平面的におさえられず、具体的なラインは調査区周囲の土層図をもとに直線的につないで認定したが、中間の様相は不明瞭なところがある。⑦-1区での調査方法は第1面にあたる平安時代の耕作土上面調査終了後に微高地では砂層上面、低地では古墳時代の水田層を露呈させ、低地側のみ検出された遺物集中を調査しながら掘り



第10図 微高地西側低地境の土層と地形

下げる手順で進めた。しかし、古墳時代の水田耕作土相当層中の炭化物の広がりを確認できておらず、炭化物層前後での遺物の層別取り上げも行わなかった。

この低地境で検出された遺構は遺物集中、⑥区微高地との中間の谷状低地を横断する杭列の一部、溝跡がある。これらの遺構は微高地中央の遺構群とは距離的に離れることや水田域にかかることから水田域の遺構として捉えられる可能性もあるが、対岸の⑥区微高地境では類似した遺構は一切検出しておらず、また、出土遺物から微高地中央部の遺構群とはほぼ近似した時期の所産と捉えられたことから、微高地中央の遺構群と関連があると考えた。さらに、後述するようにS D 1016で囲まれた特殊な遺構群からの通路の延長先はこの西縁辺部の遺構群と重なることが予想され、⑥区と⑦-1区間の低地を横断する杭列は注目される。このような様相からすれば、低地境の遺構群が単純に水田域との関連のみで構築されたとは言えず、微高地中央部・水田域両者と関連する境界域固有の遺構群として捉えられる可能性がある。

以下には個別の遺構について報告するが、杭列に関しては第1分冊の古墳時代水田のところで扱っているのでここでは省略した。

### (1) 溝跡

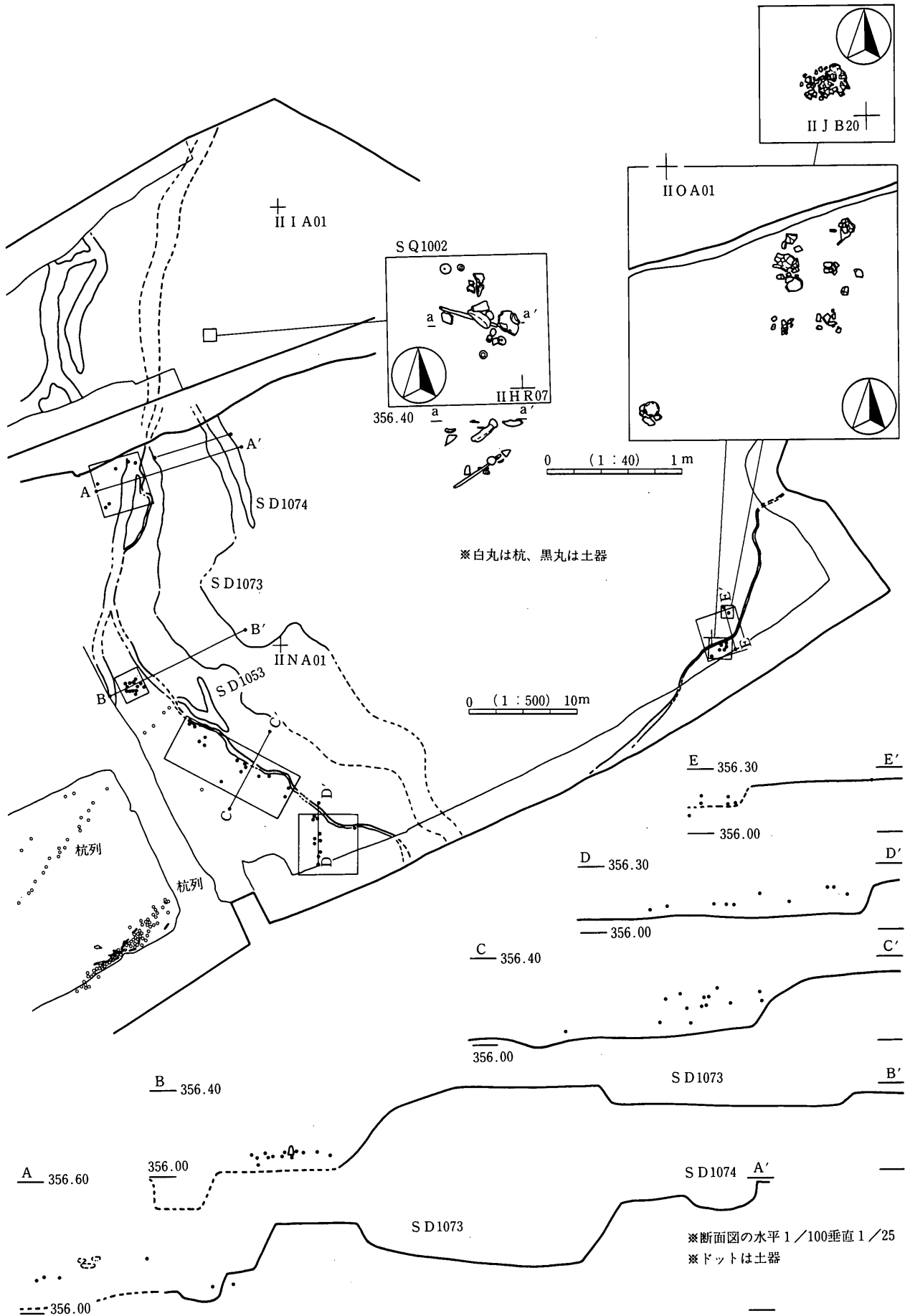
西縁辺部ではS D 1053・1073・1074の3本の溝跡が検出された。S D 1073・1074は低地境にほど近い微高地上に立地し、ほぼ等高線に沿って並列する溝跡で、S D 1053は微高地端部に位置する「Y」字状の疑似畦畔の可能性のある浅い溝跡である。S D 1053は疑似畦畔とすると、この部分まで水田域が及んでいたことになり、先に炭化物層の残存や土質から低地境はあまり耕作が及ばなかったとする所見とは矛盾する。S D 1053が古墳時代の所産でないとすると矛盾はなくなるが、検出面と溝跡の走行方向から古墳時代の可能性があるのでここに含めた。さらに、S D 1053が疑似畦畔とするとS D 1073・1074は微高地境に位置し、S Q 1005は水田域内の遺構ということになるが、S D 1053の性格も確定しきれていないところもあり、詳細は不明である。なお、この西側縁辺部の低地内水田層最下部で検出されたS D 1020・1021は走行方向や位置がS D 1073・1074と類似する。S D 1020・1021・1053・1073・1074の底面標高をくらべると、S D 1020・1021、S D 1053、S D 1073・1074の順に高くなる。これらの溝跡の性格はすべて同じとはできないが、相対的な時間差でみると時期をおって溝跡が微高地よりに移動してくる傾向が窺え、これは低地の埋没が進み、併せて微高地縁辺部の範囲が減少することに関連するものと思われる。

#### S D 1053 ⑦-1区 IIMP02～MR04 (第11図)

微高地西側縁辺部の微高地際に位置し、平安耕作土を除去した微高地基盤の黒褐色粘土層上面で検出した。検出時の状態は周囲の土と類似しながらも、白色粘土の混入する埋土が帯状に検出され、その範囲は曖昧である。形状は北西-南東方向に走る長さ約6.6mの短い溝と西北西方向の長さ約4.5mの溝が接続した「Y」字状である。幅はほぼ一定して約60cm前後を測る。断面は浅い窪み状で検出面から最深部でも約10cmと浅い。埋土は黒褐色粘土に白色の粘土ブロックが混入する単層で、遺物はない。本溝跡は形状から耕作にかかわる遺構、もしくは疑似畦畔の可能性はあるが、疑似畦畔とすると古墳時代の低地境周辺の土層所見と矛盾する。そのため、古墳時代ではない可能性もあるが、走行方向などからは古墳時代の可能性も残るのでここに掲載した。

#### S D 1073 ⑦-1区 IIHO15～NA08 (第11図)

微高地西側縁辺の微高地上に位置する。調査時には④区のS D 1020の延長先の溝跡としたが、整理段階で照合したところ溝跡の底面標高や位置が若干ずれることから別の溝跡としてS D 1073に変更した。調査されたのは⑦-1区のみで、北端の延長先は④区では調査されていない。また、南端は⑦-1区南よりで浅く消えてしまうが、これは重機による掘削が深過ぎたためと思われ、その南延長先の⑦-1区調査区南壁の土



第11図 微高地西側低地境西部の主要遺構

層図では対応すると思われる浅い掘り込みが確認できる。しかし、この掘り込みもかなり浅く、上面では S D1034・1038、南端では古代の水田跡が検出されていることから古代において低地埋没により古代の水田域が拡大し、本溝跡の上面もかなり削平されている可能性がある。検出は微高地の見逃し遺構確認調査にあたる第2面の微高地基盤の砂層上面であり、この調査面で切りあう遺構は検出されていないが、上面検出の古代 S D1034・1038、中世の S K1135・1136、近世の S D1022・1048・1049・1050に切られている。また、北東側に平行する細い S D1074がある。本溝跡は微高地境のラインに沿ってほぼ平行して大きくカーブするように走り、調査区内では約31mを確認した。全体的に幅広ながら浅く、南部では一部括れるように細くなっているところがある。底面は平坦ながら地形に沿って緩やかに傾斜し、断面形は壁の立ち上がりが緩やかな逆台形となる。検出面からの深さは深い北部で32cmほどである。埋土は上部の褐灰色粘土と灰黄褐色シルトの2層に分層された。この埋土は低地域の古墳時代水田層、もしくは微高地縁辺で検出された洪水土に対応すると見られる。出土遺物は非常にわずかであるが、土師器の破片が若干採取されている。本溝跡の位置は微高地境にあたるが、古墳時代前期末段階ではかなり低地の埋没も進行しており、水田面との高低差はあまりなかった可能性もある。性格は用水か、区画施設の溝と思われるが、明確なところは不明である。また、括れる部分は⑥区の谷状低地を横断する杭列の延長先にあることからこの部分が通路になっていた可能性が想定される。

#### S D1074 ⑦-1区 IIHQ15～HS19 (第11図)

S D1073に隣接する溝跡である。この溝跡も調査時には④区 S D1021の延長部と捉えられたが、整理段階での照合によって底面標高が異なることや、位置がずれること、さらに立地場所が低地ではなく微高地上である点から別の溝と考えて整理段階で S D1074に変更した。本溝跡の北側は④区へ連続するが、④区では対応する溝跡が調査されていない。また、南端は近世末期の微高地水田化の際に削平されている可能性があり、近世の用水 S D1022周辺で消える。調査区内で確認できた長さは約10mである。断面形は浅い逆台形で、検出面からの深さは14cmである。埋土は S D1073の2層と同じで褐灰色シルトである。出土遺物はわずかな土師器破片が得られたに過ぎない。本溝跡は走行方向や配置位置から S D1073とほぼ近似時期の所産で関連する溝跡と思われる。また、S D1073と平行して構築されている理由については明らかにできなかったが、この溝は検出面の標高からすると明らかに水田域よりも高い場所に構築されているもので、用水とは考えにくい。

### (2) 遺物集中

この低地境では遺物集中とされた遺構は2つある。ひとつは S Q1002とした微高地上にある小規模な遺物集中で、もうひとつは低地境にある S Q1005とした比較的広範囲にわたるものである。

#### S Q1002 ④区 IIHR05 (第11図)

④区の微高地上に位置する。調査では平安時代耕作土中から高坏破片が多くみられ、小規模な試掘溝を入れたところ、新たに多数の土器片が出土したものの、土坑等の落ち込みが確認できなかったので遺物集中として扱った。遺物はほぼ1m四方の範囲に大型の土師器破片や礫、さらに木材が集中的に出土した。しかし、遺物は西側に傾斜し、検出面から65cm下まで認められているので単なる遺物集中ではなく、掘り込みを伴う遺構か、低地境の傾斜地に立地した可能性が想定される。

#### S Q1005 ⑦-1区 IIHL13～NE09 (第12図、P L40)

⑦-1区の微高地西側縁辺部先端の低地内に位置する。調査では平安時代の水田耕作土を除去したところで古墳時代の土師器破片が多数検出され、土器を残しながら掘り下げた結果、微高地の縁辺部に沿った数地点で略完形、大型破片、破片集中出土が認められた。調査では一括して S Q1005としたが、実際にはよ

り下位の小規模な単位に分けられる可能性が高い。土器の分布は微高地西側縁辺部に点在してみられるが、やや南西部側に偏在する傾向がある。なかでも南西部ではほぼ完形の甕・壺が押しつぶされたような状態で出土したのがあり、さらにそれが南へ直線的に列状に配置するように認められる。それ以外の地点では破片の集中、もしくは大型破片の出土である。出土層位は先にも述べたように褐灰色シルト層中で、部分的に確認された薄い炭層より上部での出土が多い傾向がある。しかも、一部は平安時代の水田耕作土下面に達する。出土土器は微高地中央部の遺構群と類似時期の所産と推定されるが、器種は壺や甕が主体的で、小型丸底土器や高坏は少ない傾向がある。また、部分的に礫も検出されている。なお、次に述べる微高地西側低地境南西でも類似した土器集中が検出されており、同様の性格と思われる。

### 3 微高地南西縁辺部の遺構

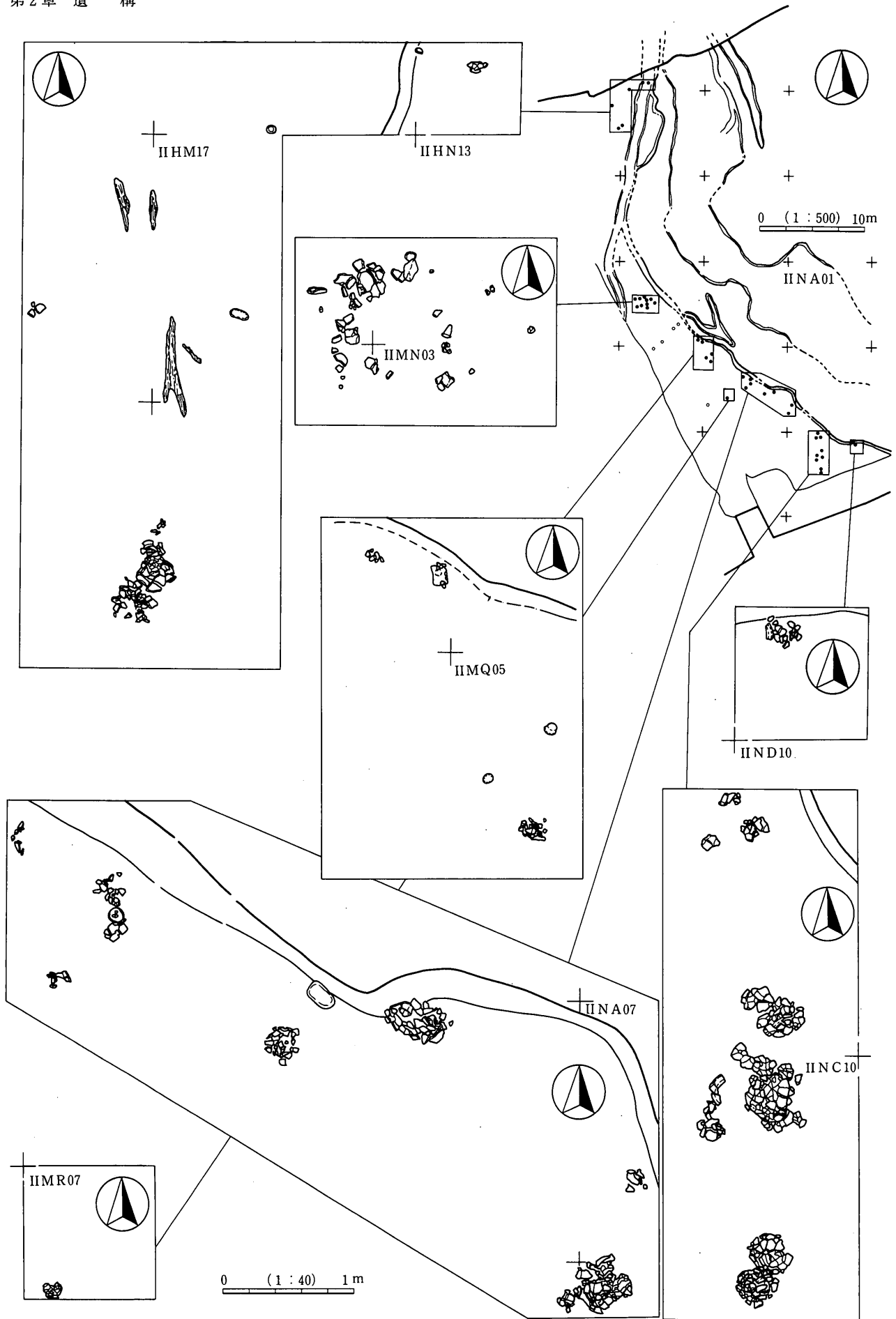
微高地西側境は⑦-1区の南西部から一旦跡調査区外へ抜けた後、再び⑦-1区南東部から調査区内に入り、緩やかな微高地をえぐり込むようなカーブを描きながら⑦-2区のS D 1016脇まで続く。この⑦-1区南東部から⑦-2区南西部に続く低地境部分を微高地西境西南縁辺部とした。この西南縁辺部は⑦-1、⑦-2区に分割調査されたが、調査区境には現在の用水があり、この用水周辺では中世～近世の改変が著しく、基本土層も部分的にしか残存しない状況であった。また、基本土層の鍵層となる平安時代の洪水砂層も後代の耕作で削平されて残存しないなどの状況から低地との認定やその範囲の確定が遅れた。そのため、一部の低地境のラインは溝跡と誤認されて調査されたところがある。整理段階ではこれらの調査所見をもとに、矛盾する所見や個別遺構の所見を合わせながら、低地境のラインを確定した。なお、基本土層は微高地西縁辺部と同様に、薄い炭化物層を挟んで褐灰色～灰白色のシルトが上下2層に分層される。ただし、この様相はもっとも低地よりの調査区南壁で確認されたものであり、微高地よりの土層が薄くなる部分の様相は子細不明である。また、ここではS D 1007・1058～1061、S Q 1004が重複するが、これらの遺構は平安時代の耕作土下～古墳時代の土層内で検出されたものの、古墳時代の2枚の土層のどれに対応するのかは記録ミスで不明である。以下には個別遺構について説明を加える。

#### (1) 溝跡

低地境南西縁辺部にはS D 1007、S D 1058～1061がある。このなかでS D 1007、1059～1061は微高地から連続する溝跡で、この低地境に固有の遺構ではない。特にS D 1007はS D 1016同様に微高地中央部の特殊な遺構群を構成し、低地域まで延長されていたかは不明である。また、S D 1059～1061も微高地上にあるS D 2014・2015に関連する溝跡と思われるが、S D 2014・2015は土坑との切り合い関係から微高地上の特殊な遺構群に先行する所産であると捉えられる。このことはS D 1059～1061がS D 1007・1016に切られる所見からも追認できる。S D 1058はS D 1059～1061に同様にS Q 1004調査後に検出され、上面にはS Q 1004の土器が載っていることからS Q 1004に先行すると推測される。さらに、S D 1059に直交するようにも看取され、S D 1059～1061に関連する可能性もあるが、断定はできなかった。以上のように、西南縁辺部低地境で検出された溝跡もほとんどが微高地上から連続して一部が低地部にかかるものである。そのなかでS D 1058のみが低地境部に位置することから、ここではS D 1058のみを扱い、S D 1059～1061は微高地中央部の遺構に含めることにした。

#### S D 1058 ⑦-2区 IIJM12～JO15 (第13図)

西側低地境南西縁辺部で検出された溝跡で、地形の傾斜方向に沿った走行方向である。遺物集中S Q 1004除去後に検出され、このS Q 1004に関連すると思われる土器が埋土上面の一部にかかって検出されているのでS Q 1004に先行すると捉えた。溝の北端はS Q 1004にかかる周辺まで確認されたが、南端は調査区外



第12図 微高地西側低地境 S Q1005

へ連続するため未確認である。調査区内では約6.2mを確認した。幅は微高地よりが約1.3m、南端は約0.4mである。断面形は浅く上部が広がるU字状となり、検出面からの深さは20cm前後を測る。本溝の北端部での断面観察では上部が暗褐色土で覆われ、溝の埋土は黒褐色土である。この埋土はS D1059～1061と類似するが、低地境で認められた古墳時代の土層とは色調が異なる。これは土層断面図が作成されたのが微高地よりの地点であったために、土中の金属イオンの浸透の影響によるものと思われる。出土遺物はS Q1004からの混入の可能性もあるが、古墳時代の土師器3995gが得られている。溝の性格は走行方向や位置から用水ではないと思われるが、具体的な性格は明らかにしえなかった。なお、位置的にはS D1059と直交し、関連する可能性もある。

## (2) 遺物集中

南西縁辺部で検出された遺物集中は大きくは2か所に分けられる。ひとつは⑦-1区で検出された小規模なもので、もう一つは⑦-2区で検出された広範囲にわたるものである。整理ではこれらの遺物集中をS Q1004と一括した。土器出土状態は⑦-1区と⑦-2区で異なり、相対的に⑦-2区のほうが土器量が多く玉類や石釧などの特殊な遺物も出土するなど、微高地中央部の遺構に関連した様相がある。

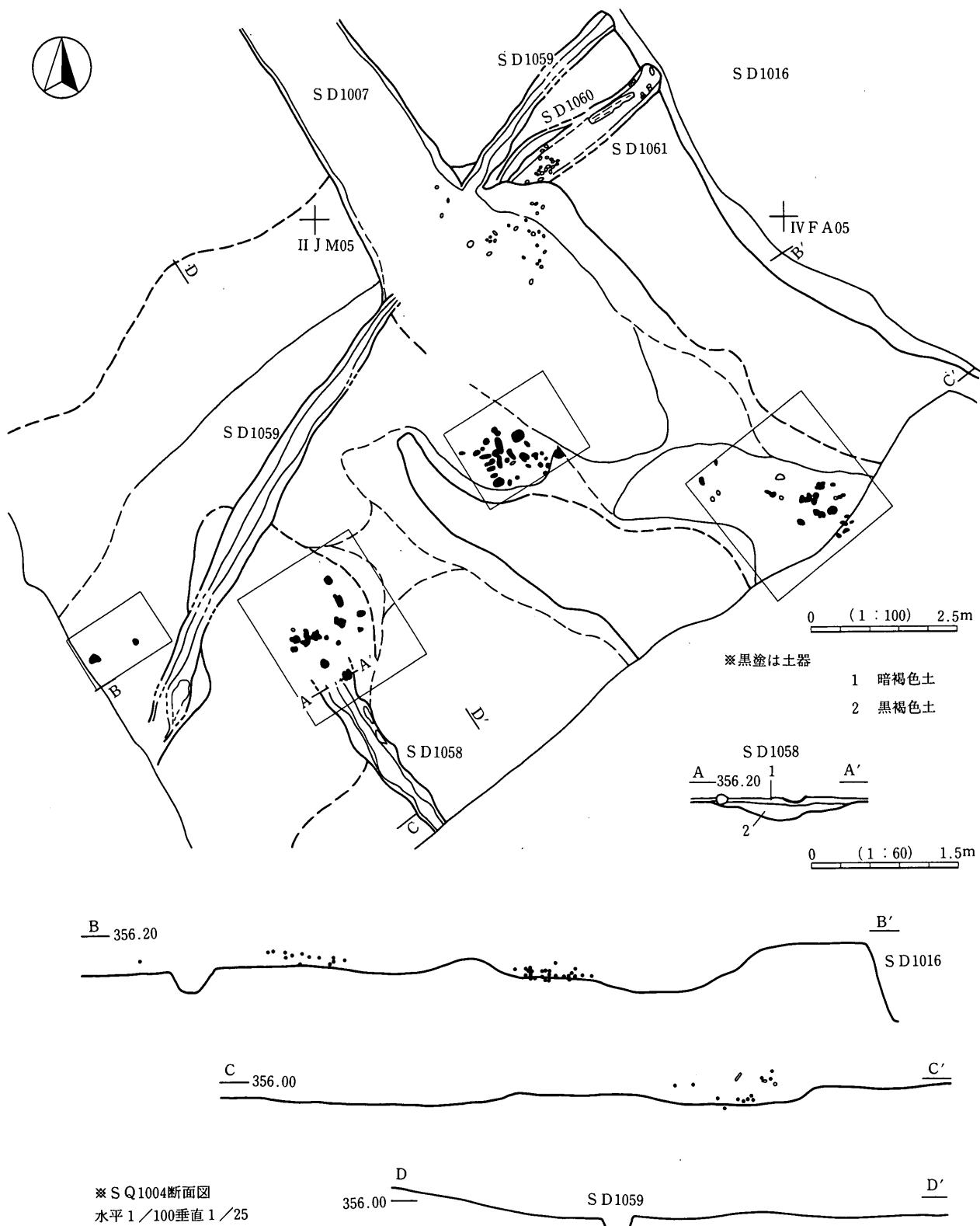
### S Q1004 ⑦-2区 IIJ12～FB09 (第13～16図、P L41)

微高地西側低地境の南西縁辺部で検出された遺物集中をS Q1004と一括した。調査は⑦-1区、⑦-2区に分割して実施されたが、それぞれに検出・調査状況が異なる。すなわち、⑦-1区では低地境がS D1055と誤認されたため遺物の多くが一括で取り上げられ、一部のみが比較的集中する地点として認められた。これに対し、⑦-2区では検出当初より多数の土器が出土すると予想されたため、調査の2m四方のグリッドごとに土器を取り上げる方法を行い、合わせて目立った土器出土状態の図記録を作成した。このように調査状況が異なるため、調査区別に記述することにしたい。なお、これらの遺物検出層位は低地域の古墳時代水田相当層にあたる褐灰色のシルト質土であるが、微高地よりでは色調が一部暗褐色ぎみになる。また、部分的に炭化物を含むと認められたが、この土層とS Q1004との関連は明らかにできなかった。

まず、⑦-1区であるが、ここでは1か所のみ土器集中が検出され、他は遺物が散在的にしか検出されていない。この集中地点は破片が集中するものであったが、検出層位が浅いこともあり後代の耕作の影響を受けている可能性がある。土器の遺存状態も不良で摩滅するものも多い。これに対して⑦-2区は比較的広範囲に渡って遺物が出土している。まず、グリッド別土器出土重量をグラフ(第15図)にしてみると0～50gしかみられないグリッドが圧倒的に多く、50～1000gは少量ながら一定量みられ、1000g以上となると散在的で、2500g以上は非常に少ない。ここでは便宜的に0～500g、550～1000g、1050～2050g、2500g以上に区分して平面分布をみると(第15図)、微高地の落ち際には1000g以下のグリッドが多く、やや離れた地点とS D1007の延長先部分では1050～2050gあるいはそれ以上の土器出土が見られる。また、1050～2050gとそれ以上の出土が認められるグリッドはほぼ精査中に大型破片の集中が認められた部分と一致している。なお、この範囲のなかで5000g以上と突出した量の土器が認められているのはS D1007先端のややカーブする西脇部分である。この部分はS D1007内なのか、S D1007が終結した先なのか判断できなかったが、この集中地点ではガラス小玉や石釧が出土している点は注意される。なお、他には管玉が1点あるが、微高地からやや離れた土器出土が希薄な場所で出土している。

次に、グリッド別に口縁部の残り具合を8分割したなかでどの位残っているかを口縁部遺存度区分として計測してみた結果について触れる。これは遺存度が高いほど完形・あるいは略完形で廃棄された可能性が高いと考えたもので、土器の残り具合から廃棄の場所や廃棄の所産の有無が想定できるのではないかと考えたことがある。この口縁部遺存度をみると口縁部1/8以下の破片しかみられないグリッドが圧倒的であ



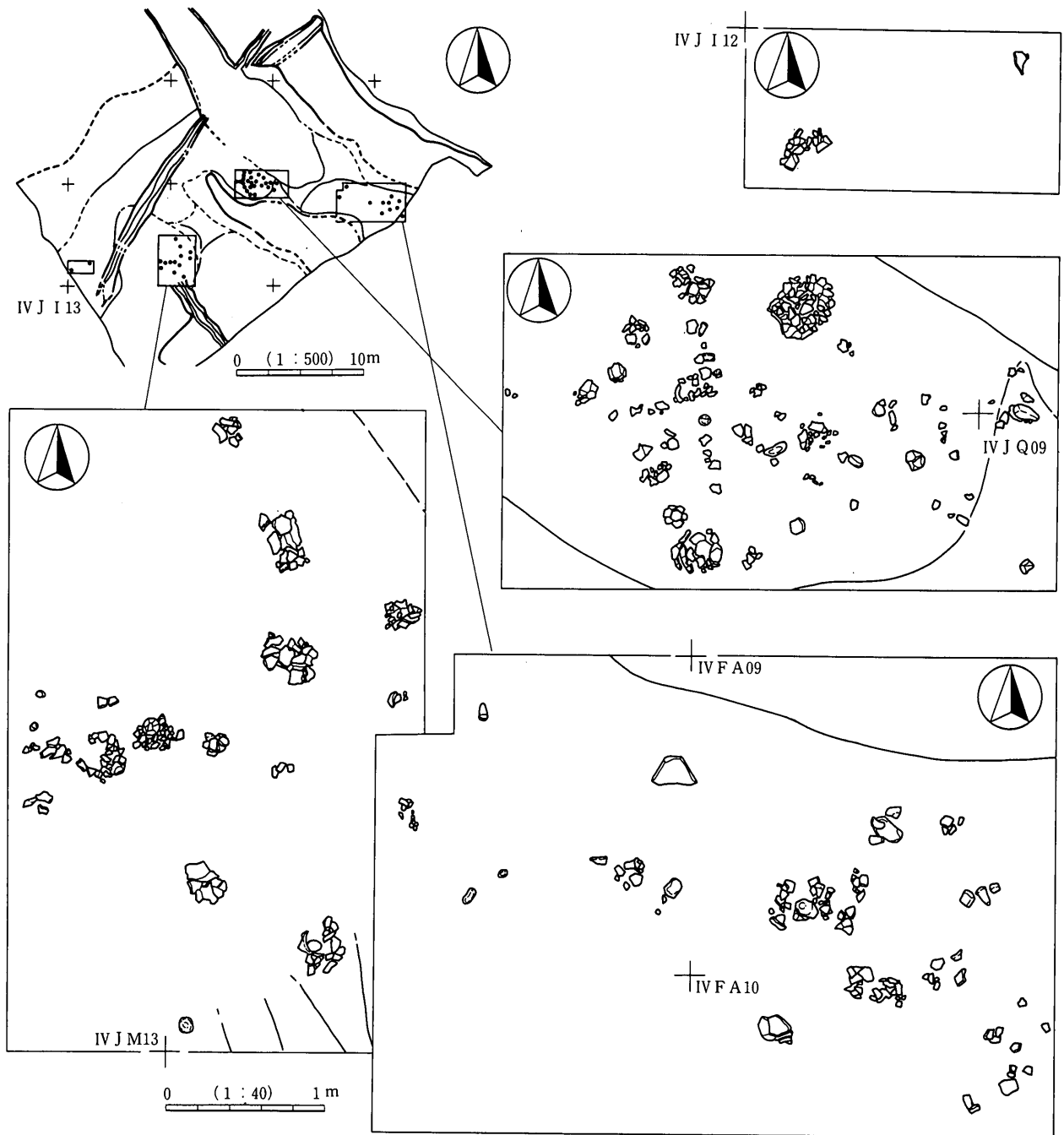


第13図 S Q 1004

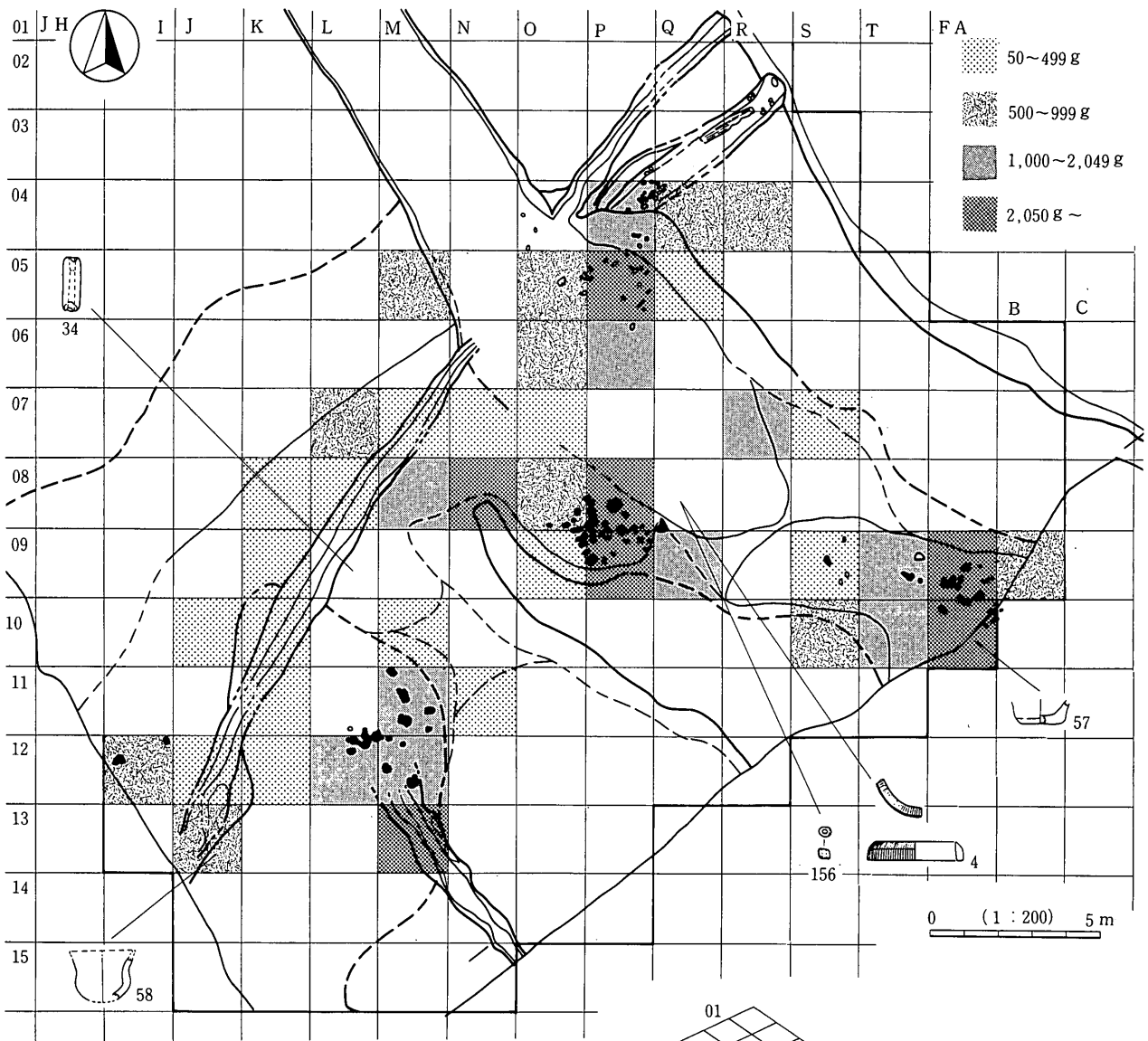
り、6/8以上遺存する破片が見られたところは4グリッドしかない。しかも3グリッドはほぼ土器出土重量の突出する部分と重複している。このことからすると、先にみた1050~2050gとそれ以上の土器出土が認められる地点は土器廃棄、あるいは何らかの遺棄行為の所産である可能性が高いと思われる。その行為の内容や性格は明らかでないが、この地点のみ玉類の出土がみられる点は他の低地境で検出された土器集中

とは性格を異にする可能性もある。また、低地落ち際の少量の土器出土しかみられない場所は微高地からの混入の可能性が高いと見られる。

以上からはS Q1004は低地境に土器が廃棄・遺棄された遺構であり、回数は多くないものの、複数契機によると思われる。この点は⑦-1区の土器集中地点と類似するのかもしれない。しかし、玉類の出土、土器重量の多さでは他の低地境の遺物集中と異なる様相もあり、特に石釧の出土は明らかに微高地中央部の遺構との関連を示すものである。このことから本遺構は低地境の土器廃棄・遺棄と微高地中央部の遺構群に関連する2つのあり方が重複すると考えられる。

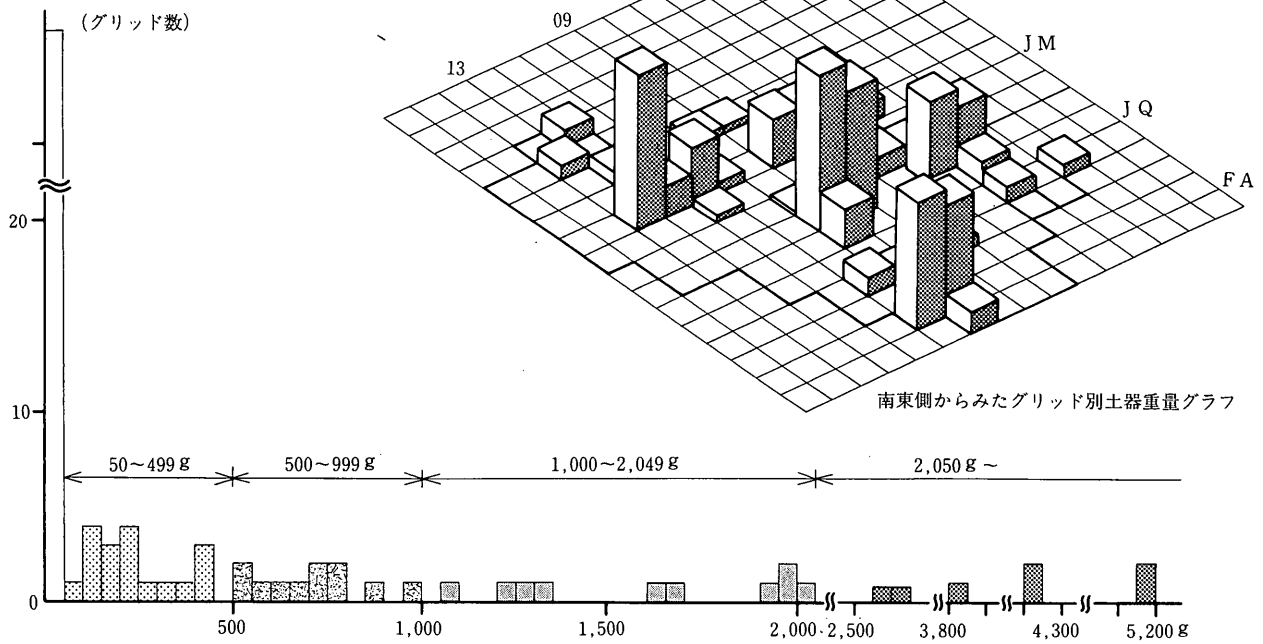


第14図 微高地西側境南西縁辺部S Q1004土器出土状況



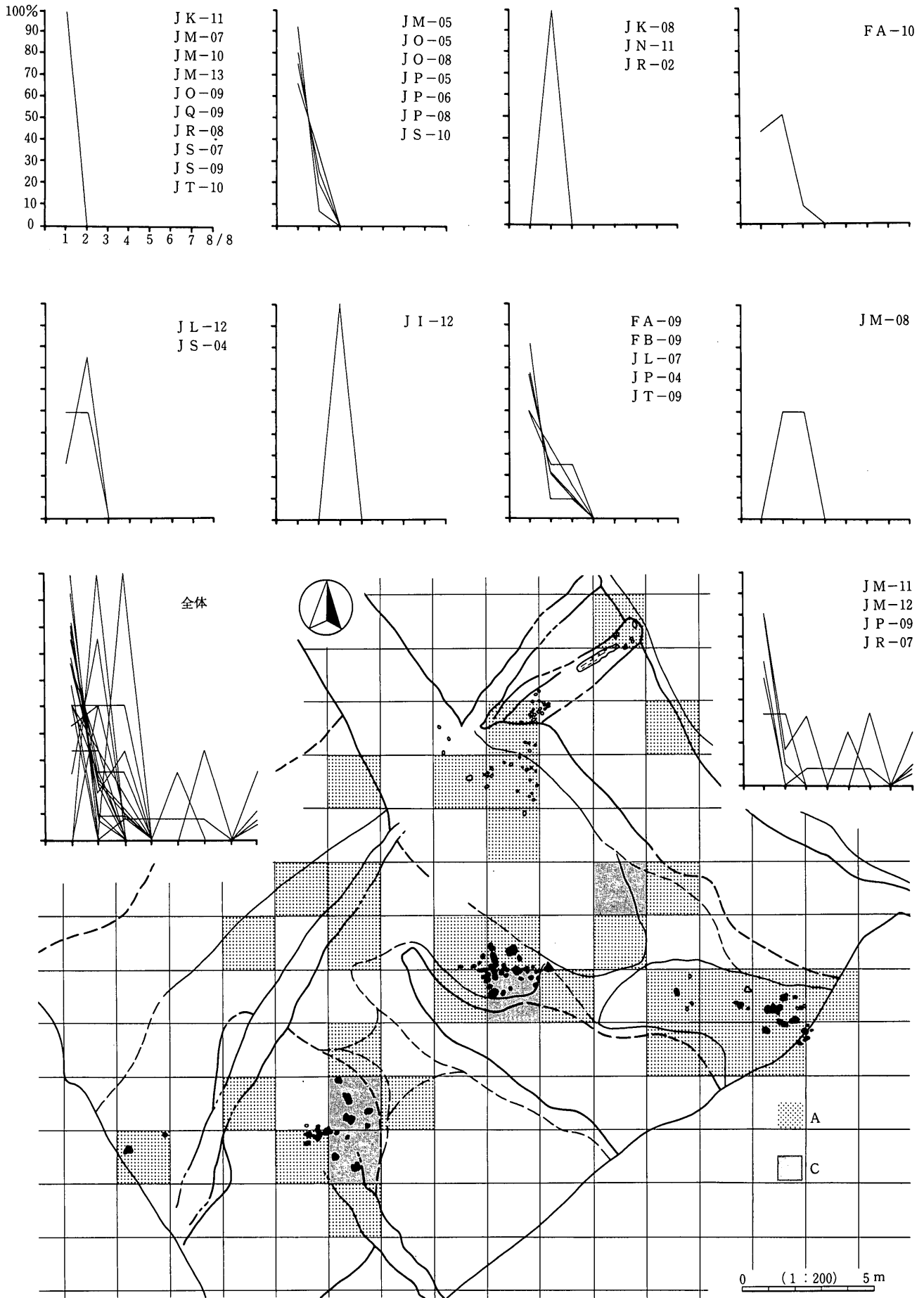
グリッド別出土土器重量分布

(グリッド数)



南東側からみたグリッド別土器重量グラフ

第15図 S Q 1004グリッド別土器重量とグリッド数グラフ



第16図 SQ1004グリッド別口縁遺存度分布

### 第3節 微高地中央部の遺構

#### 1 微高地中央部の遺構概要

微高地東側の広い平坦地で検出された遺構群を扱う。ここには先行すると思われるSD2014・2015、SD1059～1061（SD2022）などの溝跡群と、後出すると思われるSD1016の区画を伴う遺構群の2時期に大別される可能性がある。これは溝跡間の切り合い所見から推測したが、各遺構からの出土遺物に問題を残すため先行する遺構群の年代は不確定なところがある。しかし、前者は微高地縁辺から西南低地境にかかって構築されているのに対し、後者は微高地の平坦面を中心に分布する違いや、検出された遺構種の違いが看取されるので土地利用状況が根本的に異なるものと考えられよう。

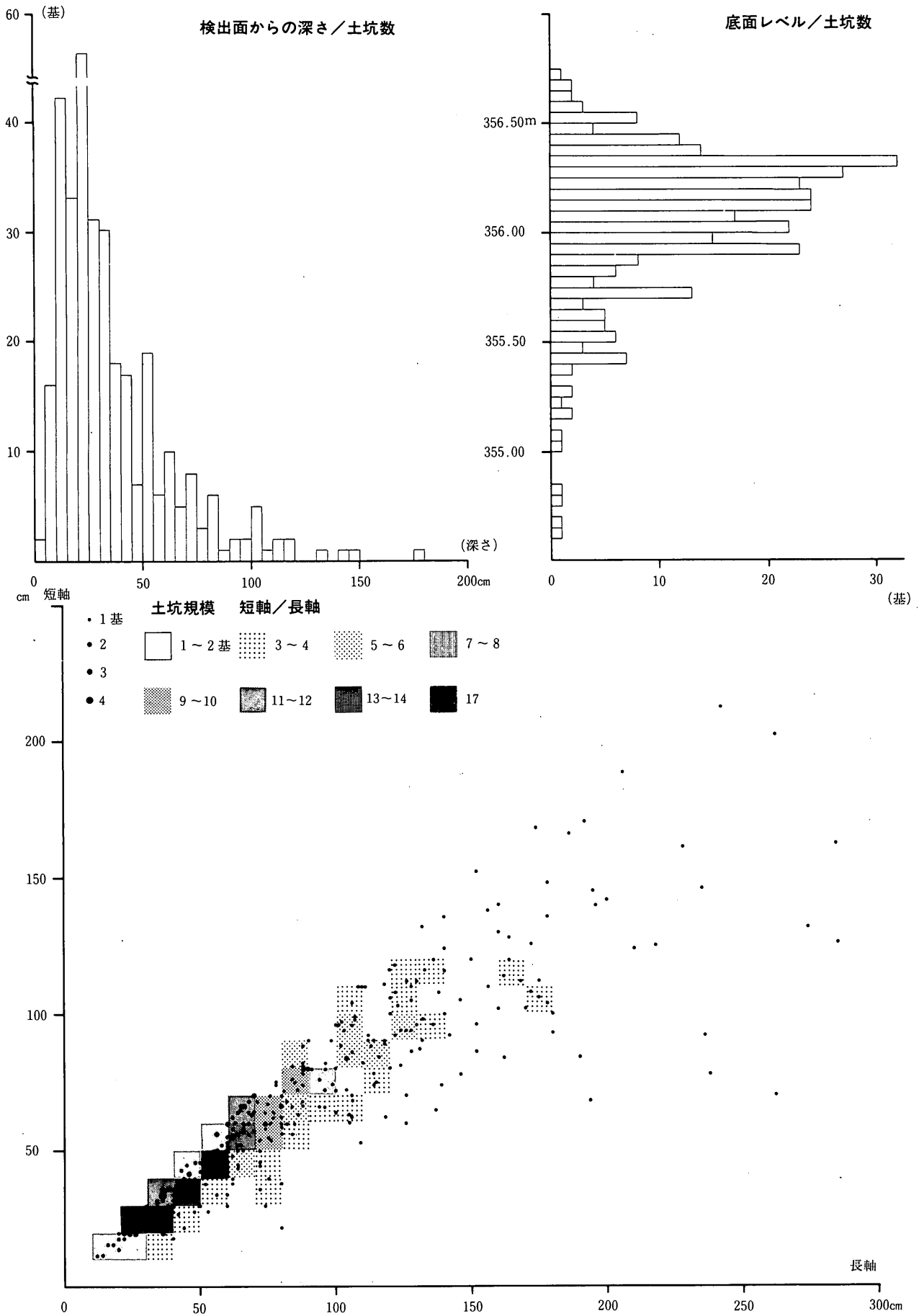
この微高地中央部の遺構群で注目されたのはSD1016の区画を伴う遺構群である。ここで検出された遺構には炭化物や土器が顕著に認められた土坑群、それを取り巻く大溝や遺物集中がある。土坑は当地域では類例のあまり知られていないものであり、竪穴住居がまったく認められない点からも極めて特異な遺跡と捉えられた。しかも、これらの土坑群周囲を大溝（SD1016）が取り囲み、SD1016の東外側にはSQ2016、西側にはSD1016と平行するSD1007があるように計画的に遺構が配置されている様相も看取された。以下に遺構種ごとに説明を加える。

#### 2 土坑

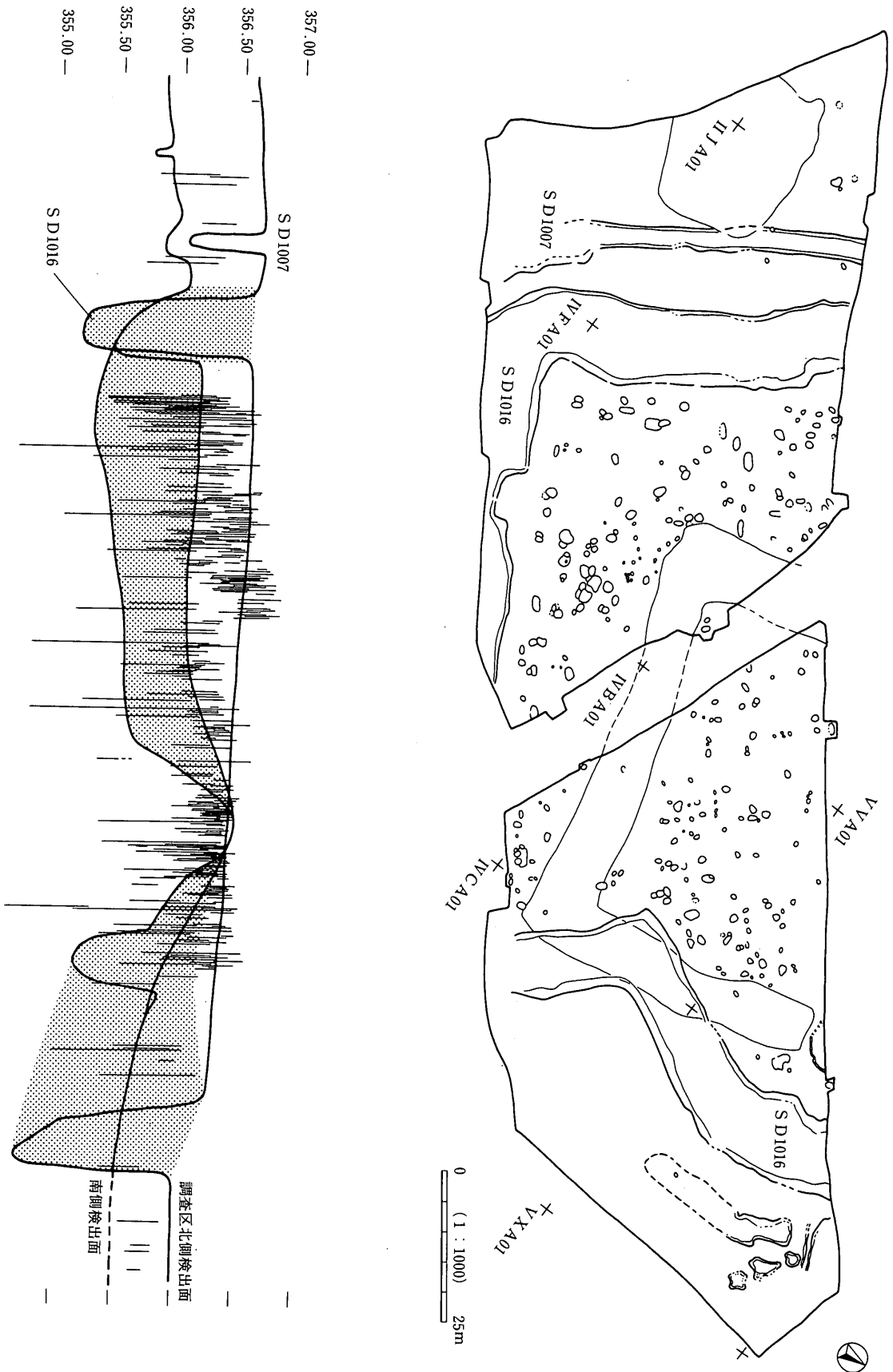
##### (1) 土坑の概要

SD1016区画内では大量の炭化物・土師器を含む土坑が多数検出された。これらの土坑は遺跡を構成する中核的な存在で、遺跡で行われた活動を具体的に表現すると共に、当地域ではほとんど類例の知られていないことから本遺跡の特殊性を示すと思われた。しかし、後述するように土坑の性格と種類の認定について断定的な結論を得るまでにはいたっていない。ここでは土坑を一括して概観した後に、数種類に区分して個別の土坑を記述することにした。以下には土坑の概要から述べる。

土坑の形態は多様であるが、平面形は比較的定形的な形態として長楕円・円形と僅かな方形に近いものが認められる。平面形を短軸／長軸の比率で見ると、1：1.1がもっとも多く、短軸／長軸の比率が大きくなるほど土坑数は少ない。長楕円傾向を示すものから配列すると、SK2030の1：3.8を最大として、SK2412の1：3.5、SK2747の1：3.0、SK2744の1：2.8、SK2039・2259の1：2.5、SK2208の1：2.3、SK1023・2048・2203の1：2.1、SK2004・2035・2161・2314・2444・2608・2831の1：2.0と続く。それ以後は1.6と1.4で土坑数を飛躍的に増加させ、1：1.1のピークへ続く。このような傾斜グラフとなるため、感覚的には長楕円形の土坑は認められるが、短軸／長軸比率によって明確なグループとして抽出することは難しい。これ以外は不整形なものとなるが、一部は掘り込みが浅く、土坑と認定できるか不安を残すものが含まれる。平面規模は長軸／短軸規模グラフを作成してみると、長軸規模で最小は20cm、最大で280cm前後までが認められる。このグラフではあらゆる規模のものがみられ、しかも規模が大きくなるほど分布が散漫になる。特定の規模グループを認定することは難しいが、一定の範囲に集中する傾向も認められる。先の長軸／短軸グラフで10cm単位で区切って土坑数をみた場合では、長軸40～80cm－短軸30～70cmの範囲と、次いで長軸80～140cm－短軸70～110cmの範囲が密度が高い。そして、長軸180cmまでは散在的、それ以上は分布が粗い。また、最も密度の高い長軸80～140cm－短軸30～70cmの範囲では長軸と短軸が近似した数値を示す＝円形・方形となるものが多いが、それに続く長軸80～140cm－短軸70～110cmの範囲では



第17図 土坑規模と深さグラフ



第18図 調査域縦断面と土坑の深度 (スクリーンは S D1016)

楕円形傾向を示すものが認められるようになる。長軸／短軸の比率のみでは一定の平面形を示すグループを識別できなかったが、この傾向からは土坑の平面形態と規模には漠然としながらも一定の関係が存在し、土坑は形態的に作り分けられていた可能性が想定できる。

土坑の深さは検出面からの深度でみると10～180cmまでである。検出面からの深さ／土坑数をグラフにしてみると深さ20～30cmまでのものが最も多く、深さを増すにしたがって土坑数を減少していく傾向が認められる。ただし、グラフは単純な傾斜を示すのではなく、80cm前後で一旦落ち込んで再び土坑数が増加する。したがって、80cm前後が土坑が作り分けされたひとつの目安とみられる可能性がある。なお、見逃し遺構確認の第2面で検出した土坑は第1面から深さに復元して比較したが、一部の調査地区では第1面の設定が高すぎた疑いがあり、単純に他地区と比較できないところがある。⑧-1区の第2面検出の2400番台の土坑が該当するが、これらは第2面での深さしか提示できなかった。

土坑出土遺物は多岐に渡り、土師器、土製品(ミニチュア土器、土錘、支脚、羽口、不明土製品)、玉類(管玉、勾玉、白玉、紡錘車形石製品、石釧)、石製品(砥石、使用痕を有する礫)、木製品(鋤、梯子、剣鞘)、骨角器(骨鏃)、獣骨、種子、調整痕を持たない割材、自然礫などがある。ただし、遺物種類別にみると土坑に偏在するものと、逆に土坑での出土が稀なものがある。土坑からの出土が少ないのはミニチュア土器、土製模造具、紡錘車形石製品、石釧である。前2者は土坑よりもS D 1016やS Q 2016出土が圧倒的に多く、石釧は土坑で1点のみ出土したが、これはS D 1016出土品と接合した。石製腕飾類はS D 1016からの出土が多いことを考えれば、土坑出土の1点は土坑へ廃棄されたというより混入と考えたほうが妥当と思われる。ちなみに、1点のみの出土ながら土坑には見られない遺物として銅鏃・銅鏡、S Q 2016で出土した筒形石製品がある。なお、土坑から出土した玉類には紡錘車形石製品1点、勾玉2点、管玉・白玉若干があるが、土坑すべてで出土したわけではなく、管玉と白玉は散在的に出土し、ひとつの土坑で複数出土は稀であった。

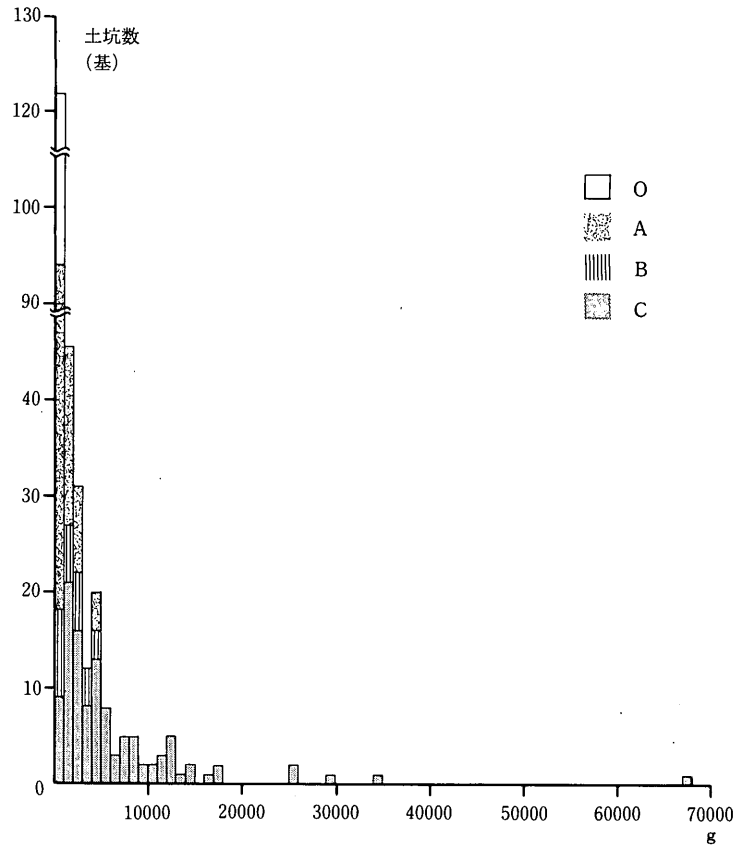
一方で、土坑出土に限定される遺物としては木製品の梯子・剣鞘がある。剣鞘は1例のみなので何ともいえないが、梯子は複数出土し、一部は壁に立て掛けられた状態であった。このことから土坑に設置された施設の一部とみられる。また、土坑出土に限定されないが、特定場所に出土が偏る遺物がある。例として羽口や漆付着土器がある。これらは手工業生産関連遺物として括れると思われるが、S D 1016区画内の南西部に集中する傾向があり、周辺のS D 1016内からも多数出土している。なお、玉類、骨片(骨鏃含む)、種子に関しては2年次調査域に所在する土坑出土が多いが、これは埋土をふるいにかけて採取につとめた調査方法によるもので、遺跡内の偏在の実態を示すものではない。

この土坑出土遺物でいくつか注意される点がある。ひとつには多様な種子、あるいは獣骨が出土したことである。これらをもって直ちに食料の残滓の廃棄、あるいは祭祀で供えられた食物の廃棄とは断ずることができないが、こうした食料に関連した遺物が存在することからは遺跡内へ食物が搬入され、あるいは調理が行われたことを示すと思われる。採取条件からも量的な問題は明らかにできなかったが、土坑出土の骨類は焼けたものが多い点は注意される。二つ目には土坑は個々にみた場合、遺物の種類や量が異なっている点である。これは場所によって偏在する遺物があることも含めて、土坑へ廃棄される器物の種類や数量がすべて規則的なものではないと思われる。このことは出土土器を取り上げて比較すると明瞭に看取される。このことについては後ほど触れる。

次に土坑で特徴的に認められた土器と炭化物の出土を取り上げてみたい。この2者は調査段階から注目されていたように、土坑の性格を考える上で重要な要素になると思われる。土器については調査段階の土坑毎に土器量や遺存度が異なるという所見を受けて、整理で土器量と遺存度を計測してみることにした。具体的には土坑ごとに重量や破片数、部位別の個体識別などの土器量を測る計測と、口縁部の8分割内で

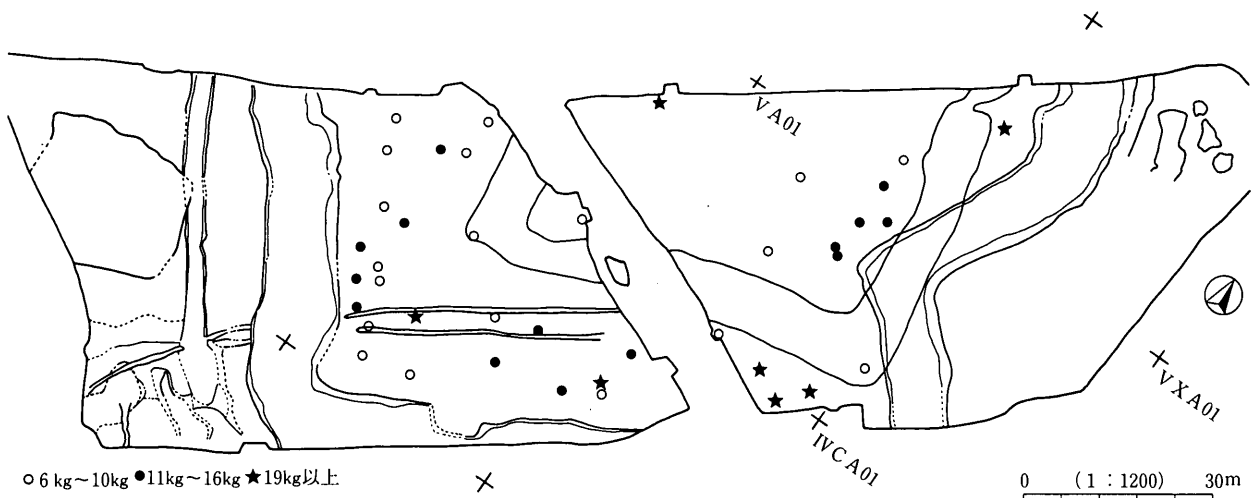


の遺存度を計測する作業を行った。これらの計測は厳密なものとはいえ、しかも他遺跡と比較しにくい面もあるが、概略では以下のような傾向が窺えた。まず、土器の出土量は最も誤差の少ないと思われる重量を取り上げ、1000g単位で出土土器重量と土坑数の関係をグラフ化してみた(第19図)。土坑の土器出土重量は最低で(0~)1000g以下、最大で67635gまで見られるが、1000g以下が最も多く、重量を増すに従って土坑数が減少する傾向がみられる。ただし、単純な減少傾斜を示すのではなく、2000g代までは急速に減少し、4000g代から減少率がやや緩やかになり、9000g代までは漸移的に減少する。再び10000g代から僅かに土坑数の増加が見られ、12000g代をピークとして18000gまで再び減少傾向をたどる。それ以上は散在的で土坑数も僅かとなり、最大の土器出土量を誇るSK2207のみが



第19図 土坑数/出土土器重量グラフ

他の土坑と離れて単独で分布する。このグラフでは1000gを単位としたため、子細な差異は看取されにくいですが、1000g以下の土坑がほとんどを占めていることがわかる。しかも、遺構内の遺物の残り具合や採取条件にもよるが、特定の重量に集中する傾向は看取されにくいので、土坑へは一定数量の土器が廃棄されたのではないと思われる。ただし、重量は器種別に比較しているわけではないので破片数や個体数が同じでも器種の組成の違いに起因する差異はグラフ上ではわからない。また、土坑出土品を一括しているため、2次的廃棄や混入したものの識別はできていない問題点はある。ちなみに先の土器出土重量グラフで傾斜の減少が緩やかになる3000g代、一旦土坑数を減少させる9000g代、分布がまばらになる17000g代を目安



第20図 土器を6kg以上出土した土坑分布

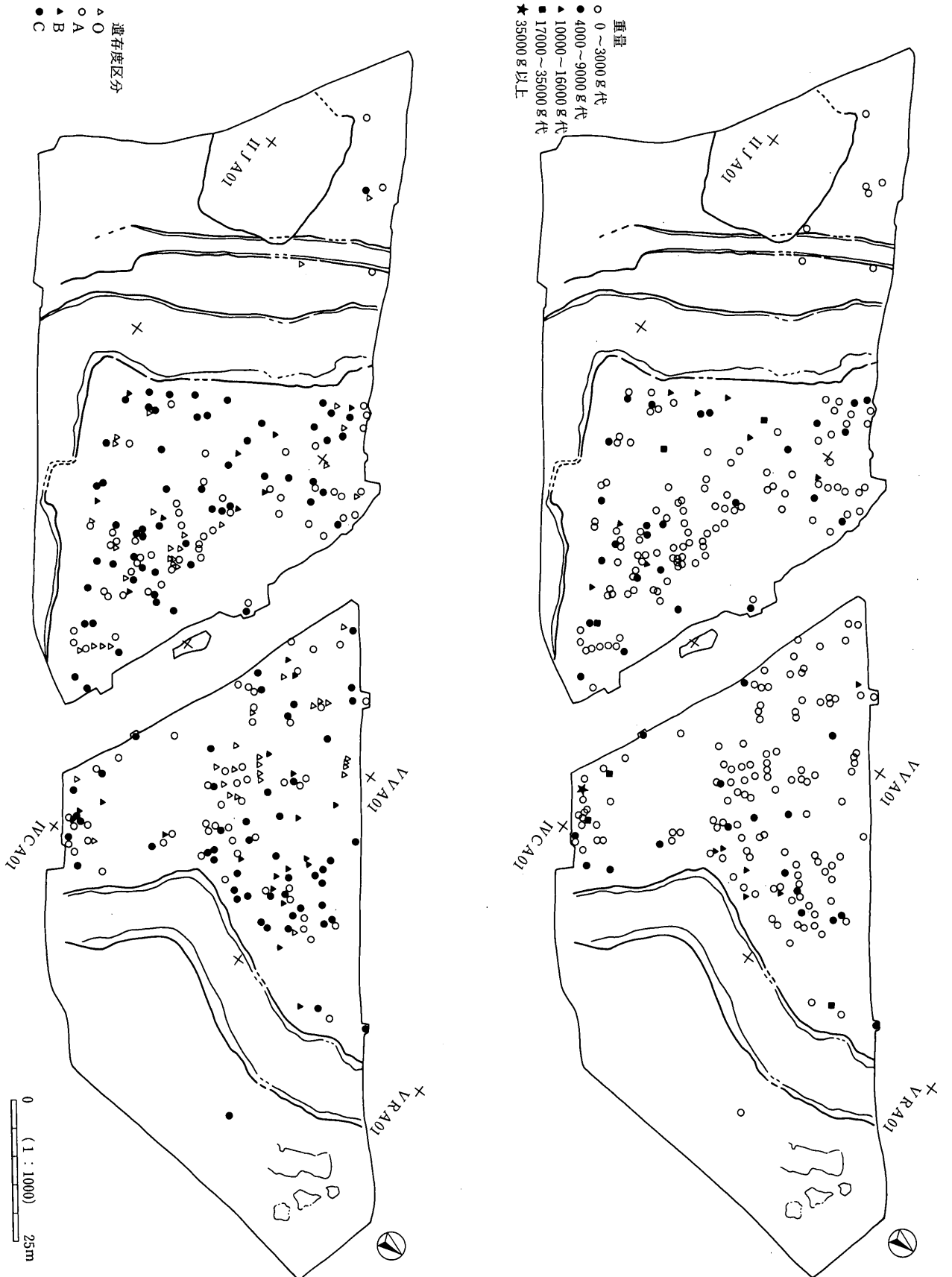
として、0～3000g代、4000～9000g代、10000～16000g代、19000～35000g代、それ以上に区切って出土土器重量の土坑分布図と、6kg以上の土器出土土坑分布図を掲載しておいた。(第21図)

土器の遺存状態は土坑毎に土器口縁部を取り上げ、8分割したチャートに当てて口縁部の残り具合を計測して遺存度区分0～Cの4つの型に分類した。すなわち、口縁部破片がないものを0、口縁部1/8～3/8遺存の小破片のみの場合をA、1/8～5/8遺存の中型破片まで見られる場合をB、1/8～6/8以上までの略完形・完形が見られる場合をCとした。そして、0・Aの場合は小破片のみの混入の可能性が高く、Bはもっとも発生しにくい中型破片を含むので土坑に近接した場所で発生した破片の混入もしくは破片の廃棄、Cは略完形・完形を含み、近似場所で発生した破片を漏れなく廃棄したか、土坑への直接的な廃棄や埋納と仮定した。Aに該当する土坑は約99基、Bは28基、Cは107基あり、その他は口縁部破片が含まれないか土師器の出土がないものである。Bは極端に少ないが、遺存度区分Cの土坑でも4/8・5/8破片は少ないグラフとなることが看取され、無作為な条件下でも起こる土器破片発生率に起因するものであって、遺跡での人間の廃棄活動のあり方を直接反映していない可能性もある。しかし、明らかにAとCが多い傾向は間違いなく、少なくとも混入と意図された廃棄の土坑が存在する可能性は窺える。

土器重量と口縁部遺存状態の関係をみると、出土土器重量が少ないほど口縁部遺存度の低いAが多く、重量を増すにしたがって遺存度の高い土器を含むCで占められる傾向がある。特に1000g以下では圧倒的にAが多く、2000g代ではAとCがほぼ同じ数あり、3000g代で逆転する。そして5000g代以上では僅かにAがあるがほぼCで占められる。したがって、土器の出土重量と遺存度には一定の関係が傾向として認められる。しかし、3000g以下でもCの土坑が存在し、同様に3000g以上であってもAの土坑は存在する。これは小型で比較的遺存状態が良好となる傾向がみられる小型丸底土器が含まれてCに区分されたが、小破片が主体的でAのバリエーション、あるいは誤差の範囲で捉えるべきだと思われるものや、一方で出土土器重量は少ないものの確実に完形土器が埋納、あるいは遺棄されたと思われる場合もあり、その様相は複雑である。したがって、出土土器が少なければ、土器遺存度区分のみから土器が直接的に遺棄・廃棄されたと断定できない場合がある。なお、重量別に土器の遺存状態区分をみると、BはAと類似した分布を示しており、A同様に混入として捉えられるのかもしれない。このような解釈や認定上の問題があるが、後ほど述べる遺構種類に分けた場合の内訳を示すとCは107基(井戸15基、柱穴20基、その他の土坑72基)、B28基(井戸5基、柱穴10基、その他の土坑13基)、A99基(井戸3基、柱穴36基、その他の土坑60基)で残りが0である。井戸はC、柱穴はA・0が多い傾向は認められるが、先に述べたように土坑種ごとに一定の傾向を指摘することは難しく、井戸・柱穴跡共にC～A、あるいは0もある。

これらの土坑別の土器のあり方の区分は整理段階での検討結果によるものである。整理作業で完形品と認められても、出土時には破片であったり、破損が認められない場合まで多様なものがある。この点については土器と炭化物の出土状態のところで触れる。

次に炭化物についてみておきたい。炭化物は土坑のみならず、遺跡内各所で認められており、本遺跡に普遍的な存在である。しかし、検出される遺構種や規模は多様で、炭化物層の形成された契機や形成のされかたも単一ではないと考えられる。土坑の場合は規模が小さいことを特長とし、調査では土坑1つで炭化物が生成される行為が完結していると想定された。また、大概の土坑では内部で火が焚かれた痕跡は確認できず、炭化物が生成された場所について具体的に推測できた例は少ないが、⑩-1区SK2874の脇で焼土跡が検出されたことから土坑脇で焼却行為が行われているのではないかと推測された。これは大量の炭化物が検出されたSK1022・2473・2492・2756では土坑内の施設として設置されたと思われる梯子が焼けていなかったことや、埋土の一部では下部に炭化物、その上部に焼土が顕著に見られるという逆転した堆積を示す土坑も認められたことも傍証として挙げられる。一方で、土坑内で火が焚かれた可能性



第21図 土坑出土土器重量・遺存度区分別分布図

が想定される例もわずかにある。例としてS K2746が挙げられ、ここでは壁の一部が赤化していることが観察された。ただし、土坑内で直接火が焚かれた可能性が推測できたものはこれ1基のみである。従って、基本的に炭化物が生成される行為は基本的に1つの土坑で1回であり、炭化物は土坑の脇で火が焚かれて生成され、その後土坑内へ廃棄された場合が多いと推測される。土坑内の炭化物のあり方は、調査記録で炭化物層、炭化物が混じる、炭化物が主体との数種類の記述がある。これは調査者の主観的な観察結果や表現方法の違いばかりでなく、写真記録などからも炭化物の含まれ方に違いがあると窺える。もちろん、単純に調査の記述の違いを実質的な違いとして断定できないが、生成のされ方や土坑内への入り方の違いに起因して数種類に分類できると思われる。この分類については次に述べる。

上述したような土器出土状態と炭化物の入り方の関係をまとめておきたい。調査時の記録は調査者の観測の違いや調査記録の精粗があるため、均等に比較することは難しいが、調査所見と記録類を元に土器の出土状態と炭化物層のあり方を類型化し、層順からみた前後関係として模式的に比較してみることにした。まず、炭化物のあり方は薄い炭層、焼土ブロックも含む大量に炭化物が含まれる層、炭化物が若干目立つものに区分し、それぞれC1、C2、C3と表現した。次に土器の出土状態では破片出土をP1、小破片も含む大型破片・略完形・完形の出土をP2、完形が単独あるいは複数で目立つものをP3とした。さらに炭化物・土器を含まないか、あまり顕著でないと思われる土層を○で表現し、灰はAS、焼土F、焼土ブロックFB、目立った礫はSとした。さらに類型化した出土状態を層順からみた時間差として(古) > (新)、同時の可能性や判断がつかない場合は(古) ≥ (新)、同時と見られる場合は=として図式化してみた。なお、P2・P3が土器出土が顕著な場合、C2が炭化物が顕著な場合と捉えている。

上記の方法で土坑ごとの炭化物と土器の入り方を分けると大きく7種類に区分できると思われた。①顕著な土器と炭化物出土がほぼ前後か同時に見られる場合、②炭化物のみが顕著な場合、③土器のみが顕著な場合、④炭化物と土器の出土の間に間層が認められる場合、⑤土器が間層をもって出土する場合、⑥薄い炭化物層が認められる場合、⑦土器も炭化物も顕著でない場合である。さらに、前3者では土坑底面上もしくは単層でみられる場合(a)と、埋土中で見られる場合(b)があり、④・⑤は例が少ないため一括したが、底面上の状態では①～③に対比しうる。このように土坑では炭化物と土器のあり方は多様である。もちろん、これは感覚的に分けた限界があり、あまり厳密なものではない。特に、遺構の遺存状況に左右され、第2面検出で上面が削平されている場合は炭化物層の有無の確認が確実でない場合もありうる。しかも、個別の様相を主観的に類型化した上に、各土坑でみられる類似した炭化物や土器の出土状態も土坑内の堆積順序で見直すと違った解釈となる場合がある。したがって、上記の分類に一定の解釈を加えることは慎重にならざるを得ないが、概略では①では炭化物廃棄と前後して土器が廃棄された例、②は炭化物のみが廃棄された例、③が土器の埋納もしくは土器のみが廃棄された例と思われる。④は土器の廃棄と炭化物の廃棄に時間差をもつ可能性がある例、⑤が土器廃棄あるいは混入が2時期に渡るとされるもので、底面上では①と③の例ながら、上部では土器のみの出土である。数が少なく、井戸跡のような深い土坑に多いことから、上部の土器は埋没後のくぼ地に入った例と思われる。なお、④・⑤に区分したものの、上部の土器を小破片とみるか大形破片とみるか迷ったものがある。前者なら混入の可能性が高く、①～③のいずれかに帰属することになる。⑥は①～③に区分したものと併せて認められる例があり、一部には複数認められるものがある。しかも埋土上部に認められるものが多いことから、基本的には薄い炭化物層は混入と捉えられると思われた。なお、薄い炭化物層でも前後して焼土が認められる例もあって、一部は①に区分したものがある。⑦が土坑内の炭化物も土器も混入と思われる例である。この内、④と⑤の例は類例が少なく、あまり普遍的な存在ではない。しかも土器出土状態の区分では小破片出土とみるか、大型破片出土とみるか判断に迷ったものがある。したがって、一応分類したものの、本来は(①)②か③

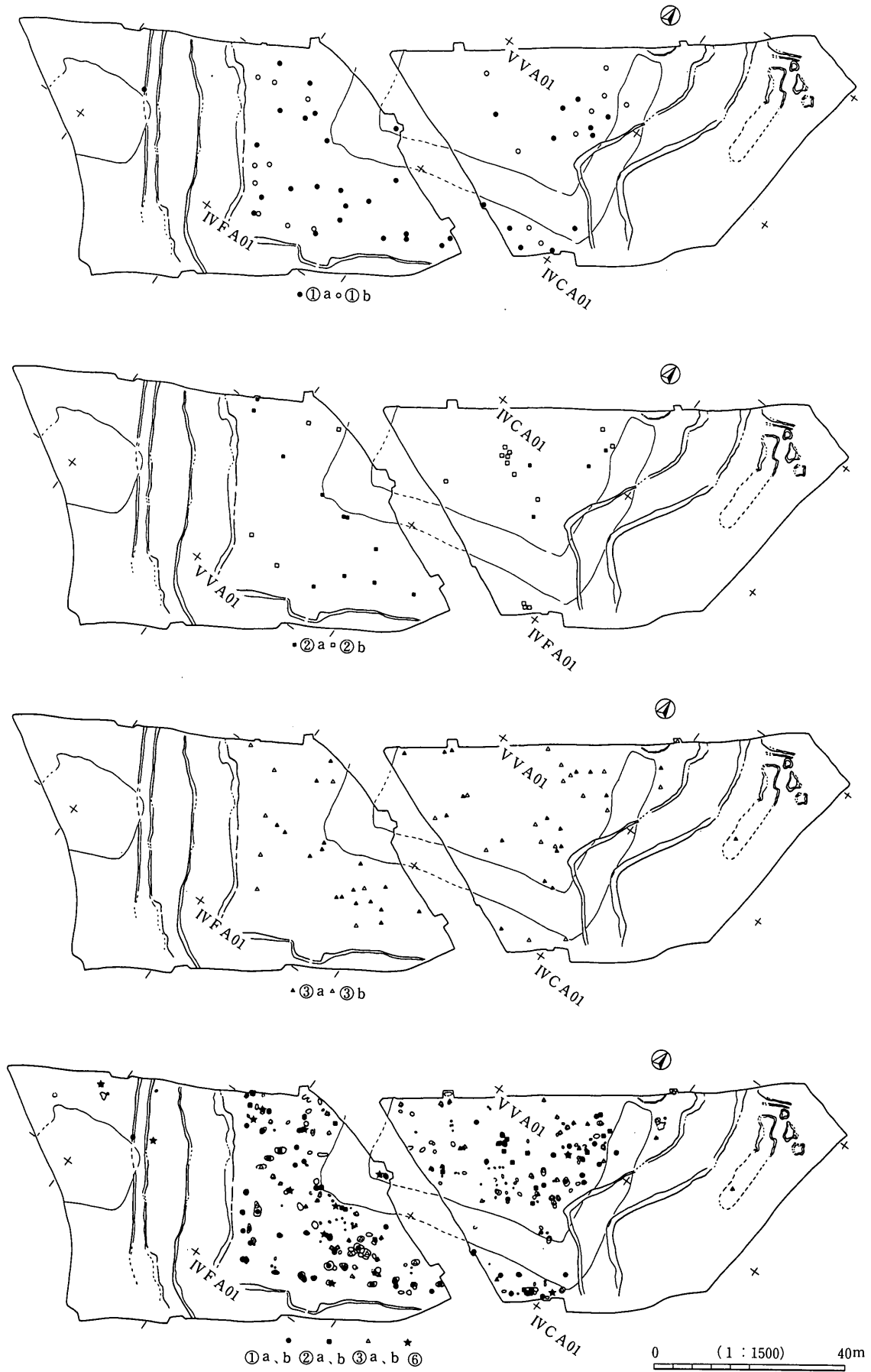
に帰属する可能性がある。また、⑥は②と炭化物の出土状況の様相が大きく異なることや、薄い炭化物は埋土中で認められる例が多いことから直接的な廃棄ではなく、2次的な混入に近いのではないかと考えた。こうした観点から③や⑤において薄い炭化物層が認められる例も、混入と考えた。これらの内訳を示すと以下ようになる。

①炭化物と土器出土53基 (a 底面上35基、b 埋土中18基)、②炭化物が顕著な場合は34基 (a 底面上・単層で顕著な場合16基、b 埋土中もしくは上部で顕著なもの18基)、③土器のみが顕著な場合は55基 (a 底面上・単層30基、b 埋土中25基)、④間層をはさむもの4基、⑤土器が間層を挟むもの6基、⑥薄い炭化物層のみの場合22基、⑦土器も炭化物も顕著でないもの多数である。

この様相からいくつか指摘できることがある。まず、炭化物と土器の大量出土は必ずしもセットで見られるわけではなく、多様なあり方が認められる。このことから、単純に土坑では類似行為が行われていない可能性が考えられるが、少なくとも廃棄からみると土器と炭化物が顕著、炭化物のみが顕著、土器のみが顕著、土器も炭化物も顕著でない4種類に分類できる可能性がある。このなかで、炭化物も土器も顕著でない場合が最も多いが、炭化物・土器が顕著、あるいは土器のみが顕著な例がほぼ類似した50例前後あり、30例強の炭化物のみが顕著な例と続く。これらの多様な廃棄行為の種類を遺構種別にみると、井戸跡では圧倒的に土器・炭化物が顕著な例と土器のみが顕著な例が多い。柱穴跡では炭化物も土器も顕著でない・薄い炭化物層が認められる例が多く、炭化物のみ・土器のみの例が続くが、いずれも埋土中の例が多い点は注意される。やはり、混入やくぼ地として残存した跡を2次利用した可能性が高いのだろうか。その他の土坑では単一の性格ではないため、単純な比較はできないが、全体の傾向をそのまま反映させたものとなっている。これらの比較からは土坑種類ごとに一定の傾向は認められるが、一方で同じ遺構種内で多様なあり方が認められると共に、遺構種を越えて類似した土器・炭化物の出土状態が確認できる点は注意される。

また、深い土坑で比較的多くの土器が出土していると認められた場合 (P2・P3) は一定の層位に集中する傾向が認められる。しかも炭化物が合わせて検出される①の場合では炭化物と近接した層位もしくは炭化物層に含まれる例が多い。したがって、炭化物や土器はほぼ近接時期に土坑内に入ったと思われる。さらに、土器集中出土部より上層でも顕著に土器出土がみとめられる例が少ないことから、土坑への土器廃棄は比較的限定された時期の所産であると思われる。そうしたことは土坑の性格を考える上で重要な意味をもつと思われる。つまり、土坑への土器廃棄は1回の所産が多いと考えられ、埋土中に散在的に土器が出土するものではないことから開口したままで、恒常的に土器が入る状況は少なかったのではないかとと思われる。さらに④・⑤の例の少なさからも最終的に人為的に埋め戻される可能性が想定できるかもしれない。埋め戻しの有無の問題は調査でも注意され、調査の重要な観点とされた。ただし、調査では明確なブロック土の堆積と認められた例はあまりなく、ブロック土が確認された場合でも小ブロックがわずかに含まれる例が多い。しかし、炭化物の上に焼土ブロックが入るという通常焼却で想定される順序と逆転した層順が認められたり、焼土ブロックが含まれる、あるいは礫が多数投げこまれたような状態で出土しているなどの状況が確認されており、埋め戻し行為があった可能性は高い。もちろん、検出された土坑すべてが埋め戻し行為を伴うとは断言できない。また、埋め戻されたとしても完全に埋没しきってなかったとみられ、埋土上部に薄い炭化物層や土器が認められるように、くぼ地として残存したものが多いと考えられる。古墳時代の土坑同士の切り合いが少ない点も、前に掘った土坑がくぼ地として残存して識別できたことによるのではないかとと思われる。なお、土坑の構築順序に関し、調査ではS D1016寄りから内部への順序を推定したが、土器からは必ずしも推測されたような変化ではないと考えられた。

また、これらの炭化物・土器の出土状態の違いの理由は判然としないが、井戸跡では出土状況の違いが



第22図 土坑内炭化物・土器出土状況分類別分布

分布を異にする興味深い所見が得られている。詳細は井戸跡の項を参照していただきたいが、このことから炭化物・土器の出土状態の違いは遺構種に付随するものではなく、遺構の所在する場所の利用状況の違い、あるいは空間の機能差や遺構構築者のあり方が影響している面があると思われる。この点に着目し、上記の区分を分布の上で比較してみた。まず、炭化物と土器が顕著な場合はS D 1016縁辺に沿って分布するものが多く、特に西・南辺脇で集中的に見られる。内部では散在的な傾向を示すが、S D 1016区画内を4分割するライン上に散在しながら分布するようにみえるものもある。なお、北東部に少ない点では井戸跡に通じるものと見られる。炭化物が顕著な例では遺跡全体に散在するが内部に散在的にみられるものと、S D 1016縁辺に分布するものがあるようである。後者の場合は上記の炭化物と土器が顕著に見られる場合と重複するため、混入や焼却に関連する遺構となるのであろうか。これに対して土器のみが顕著に認められる場合は上記の二つよりも明らかに内部に分布するものが多い。したがって、炭化物・土器の出土状態の区分は遺構種に固有というより、分布する場所的な関係による面が強いと思われる。特に炭化物と土器が顕著な土坑はS D 1016の脇に多く、中央部に少ない点からはS D 1016区画内の中心的な祭祀遺構とはいえ、脇に設けられた片づけの遺構としたほうが良いのかもしれない。しかし、すべてが厳密に分離していない点や、遺構種ごとに分布状況が異なる様相も含めて考慮すべきところがあり、さまざまな様相が複合していると思われる。

なお、土坑出土土器の器種組成について触れておく。土坑出土土器すべてが一括資料として扱えるわけではないが、概略では次のような傾向が指摘できる。まず、全体の器種別出土量を多いほうからみると、甕・高坏・壺・小型丸底土器・小型壺・器台・鉢の順となる。さらに、器種ごとに1つの土坑から出土した1/8以上の遺存を示す個体数を比較すると、3つの器種グループに分けられる。それは、ひとつの土坑から複数個体が出土し、しかもその数量がバラつく甕・高坏(1土坑の最大出土数は甕23、高坏22)、ひとつの土坑からの出土数量が少なく出土土坑間に差がない小型壺・小型丸底土器・鉢・器台(最大出土数は小型壺7、小型丸底7、鉢3、器台6)、中間的な様相を示す壺(最大出土数は34ながら、数グループに細分される)の3種のあり方が認められる。出土が普遍的で量的に多い高坏・甕は土坑へ土器が廃棄されるような活動、あるいは土坑周辺で行われた活動において比較的通有に使用された器種と考えられ、一方で出土量が少ない小型壺・小型丸底土器・鉢・器台は使用が限定、あるいは余り普遍的な使用(時期的なもの)ではない器種と考えられる。特に小型丸底土器は遺跡全体では甕について出土量の多い器種と認められるが、土坑からの出土数は意外と少ない。このことは土坑へは余り入らない=土坑周辺では使用されないと考えられ、小型丸底土器は他器種とは使い分けされていたことを示すと考えられる。また、壺は最大34個出土した土坑があるが、34・20個が1基づつ、10~13個が6基、あとは7個以下の3グループに分けられる。壺はこのあり方から、一部に集中的に入るあり方と小型壺・小型丸底土器・鉢類などと類似したあり方が重複した様相を示すと思われる。次に土坑種類ごとに出土器種の傾向をみると、井戸跡では壺と甕の出土数量が多いものがあり、高坏・小型丸底・鉢・器台は少ない傾向がある。なお、上記の壺が集中的に検出された例は井戸跡が多く、井戸跡という遺構種に固有の用法によるものと思われる。一方でその他とした土坑では逆の傾向がみられ、高坏・小型丸底・鉢・器台の出土のほうが多いものがある。したがって、土坑種ごとに一定の傾向がみられるとできるが、井戸跡でも子細にみると出土器種組成の傾向が異なり、同種の土坑であっても全く同じ器種組成を示すとは限らない。また、同じ土器・炭化物のあり方とみられる土坑でも器種の組成は多様である。ただし、土器・炭化物のあり方の区分で①と③では器種の種類が多い傾向があり、さらに①ではaよりbのほうがより豊富な器種を多く含む傾向が認められる。特に高坏はbのほうが数量が多い傾向はあるが、厳密にはすべての①bにおいて認められるものでもない。そして他の④⑤を除く②・⑥・⑦では出土器種にバラつきが多く、量的にも一定の傾向は看取されにくい。

以上の土器組成をまとめると、土坑出土土器では甕・高坏が比較的普遍的にみられたが、これは遺跡全体と共通する傾向であり、小型丸底土器の出土が少ない点に土坑出土土器組成の特長が認められると思われる。さらに土坑内で出土した土器の組成は多様ながら土坑種類、あるいは土器・炭化物の出土状況の区分ごとに器種の偏在傾向が認められたが、一方では同種の遺構内、あるいは同じ土器・炭化物出土状態を示す土坑間でも多様な器種組成のあり方は認められ一律に括ることが難しい面もある。この様相を評価することは難しいが、多様性からは土器の器種や量が厳密に規定された単一行為に付随して土坑へ土器が廃棄されたものではないと思われる。つまり、多様な活動によって生じた土器が結果的に類似した廃棄状態を示したものと考えられ、そのなかで一定の傾向も看取される場合もあることから遺構種、あるいは特定の使用状況に結びついた数種類の土器使用方法があると考えられる。この問題はより細分化した器種組成として検討する必要があるが、十分な検討を加えられなかったので、ここでは複数種類の行為に付随して廃棄が行われている可能性を指摘するにとどめる。

最後に土坑の分布状況について触れておく。遺跡全体のなかでは土坑がほぼS D 1016区画内に分布する特徴があり、S D 1016区画外の土坑は非常に少ない。このS D 1016区画内での土坑のあり方は調査時にはランダムで規則性はないと思われていたが、整理段階で遺跡全体を見直すと長楕円形の土坑はS D 1016の西・南辺に平行もしくは直交する方向に主軸方向をとって構築されているものが多く、土坑の種類別分布でも規則性があるように看取された。詳細は後述するが、本遺跡の土坑を井戸跡・柱穴跡に区分した場合、井戸跡はS D 1016の脇にほぼ一定間隔で配置され、柱穴跡はその内側、その他の土坑は井戸跡と分布が重なるものと内側に分布する2者がある。また、柱穴跡の内、建物跡と認定されたものは遺跡の東部、あるいは南西部に多い。以上のことから土坑はある程度規則的に配置されると考えられる。特に種類別に分布傾向が異なるところは、遺跡全体の空間利用状況を反映している可能性がある。

以上が土坑の概況であるが、次には土坑の性格についての所見をまとめておきたい。この土坑の性格については調査段階と整理段階で大きく2つの可能性が想定された。ひとつは調査段階を中心とする想定で、炭化物と土器の大量出土から土坑が祭祀行為に付随する廃棄土坑であろうとするものである。これは形状・規模に関係なく、大量の土器や炭化物が検出されたことによるもので、土坑毎に土器や炭化物の出土状況に若干の差異が認められたことも、廃棄行為の内容の違いと推測された。

もう一つは整理段階を中心して想定されたもので、土坑には井戸跡、柱穴跡など多様な種類があると考えられるものである。この想定からは遺跡内が単一の祭祀空間ではなく、多様な活動が行われる空間と考えられる。先に挙げた建物遺構の存在や手工業生産などの活動の説明はつけやすくなる長所があったが、一方で遺跡全体の性格が不明瞭となり、しかも土坑の形態・規模に関係なく、類似した炭化物・土器のあり方が認められる理由については土坑構築と廃棄行為を別に考えなくてはならない問題を生じた。さらに、井戸跡や柱穴跡が識別できたかわりに、逆に廃棄土坑の規定が難しくなり、調査段階で想定された特殊な廃棄土坑は相対的に数が減少することになった。この想定には北陸地方の集落遺跡で検出されている土坑に土器を多出するものがあり、井戸・廃棄土坑・墓壇などに区分できる可能性が指摘されていることが念頭にあった。特に土器を大量に含む土坑が集落遺跡内でも認められている点で、当地域内では類例の知られない遺構ながら、特定の祭祀行為に付随する遺構と限定することに疑問を生じていたことがある。

上述した2つの解釈は、想定した段階での遺跡内、他遺跡の類例の情報の違いを反映している点は注意される。整理段階のほうが類例も増加して情報量も多いが、両者の見解を単純に2者択一的に断ずることができないところもある。すなわち、後者の多様な土坑を認める場合では形態的な特徴から井戸跡・柱穴跡などを識別したものであるが、調査時の廃棄土坑とする想定は大量の土器・炭化物出土などの埋土・遺物の出土状況に着目したものであり、両者の根拠は同一ではない。これは土器・炭化物の廃棄を伴う行為



に付随して土坑が構築されているか、土器・炭化物の廃棄は土坑構築と必ずしも一致しないと捉えるかの違いでもある。しかし、一見類似した廃棄行為にみえながらも内容的には異なる可能性もあり、しかも、廃棄行為と土坑構築の時間差の問題は明らかにできないので、いずれの解釈が妥当なのか結論は出せなかった。

このように土坑の捉え方については断定的な結論が得られておらず、二者択一的な解釈以外の可能性もあるが、形態的に数種類分類できそうであること、遺跡全体を考えた場合に建築部材、あるいは手工業生産関連遺物の出土などから多様な活動が想定されることを考え合わせ、土坑が複数種類に分離できる可能性に立脚して報告することにした。次に土坑の種類認定と識別方法の問題に触れておく。

まず、土坑種類であるが、土坑の種類は発掘調査で得られた情報自体から設定したものではなく、従来知られていた考古学的な知見に照らし合わせて想定した。これは土坑の性格を遺跡内だけの情報からは確定しきれなかったことによる。したがって、類例が知られる井戸跡・柱穴跡のみ識別され、あとはその他の土坑として一括する結果となった。ただし、識別した井戸跡・柱穴跡も本遺跡内に特有の使用方法を踏まえて定義したのではなく、その範疇も広義的な集落遺跡を含めた知見のなかで捉えられる認識レベルを越えていない。例えば、井戸跡も水を得るための遺構と考えられるものの、集落遺跡でも認められる生活用の井戸と同じなのか、従来指摘されるような湧水点祭祀に伴う特殊な井戸跡なのかは特定していない。通常集落遺跡で見られる場合とは異なる使用方法を想定することで、遺構種類を越えて類似した土器・炭化物出土状況が認められる点も説明できる可能性はあるが、同じ井戸跡と捉えた遺構でも土器の出土状態は多様であり、厳密な規定を行うことはできなかった。

また、井戸跡・柱穴跡以外の土坑はその他の土坑として一括して扱ったが、これは土坑種類設定に集落遺跡を参考としたために類例の乏しい土坑、あるいは性格の認識が共通理解となっていない土坑は区分できず、遺跡内の様相からも性格を特定できなかったことによる。他遺跡では土器を大量に含む土坑を廃棄土坑と報告する例があり、本遺跡でも該当する可能性がある土坑もある。しかし、相対的に土器量が多いと認められても、土坑別出土土器重量グラフ上では明確な区分が難しく、どこまでが廃棄土坑なのか基準を設定できなかった。しかも出土土器重量と遺存度は一定の相関関係は認められながらも、具体的な区分が難しく炭化物と土器の関係も多様であること、さらに井戸跡・柱穴跡と思われる土坑でも大量の土器出土が認められる場合もあって、その判断は難しいと考えられたこともある。

上記のような考えによって土坑は井戸跡、柱穴跡、その他の土坑の3種に区分したが、次には井戸・柱穴跡識別の具体的基準の概略を述べておく。まず、井戸跡が存在するとした根拠は、先に述べた検出面からの深さ／土坑数のグラフにおいて深さ80cmを境として土坑数が一旦落ち込み、再び土坑数を増加させていることが看取されたことを基準としている。このことから80cm以上の深さを必要とした土坑が存在すると推測され、梯子を出土した土坑がいずれも検出面からの深さ80cm以上であったことから追認できると考えた。しかも、集落遺跡などで知られていた井戸跡と形状が類似することから、本遺跡の場合も井戸跡と認定した。柱穴跡は基本的に複数で建物跡や柵列跡を構成すると想定し、土坑配列を検討した結果、建物跡や柵列跡の可能性のある遺構が抽出できたので柱穴跡（建物跡・柵列跡）は確実に存在すると判断された。さらに、構築物を構成すると認定できた土坑から規模的な傾向を導きだし、その規模に一致する土坑も柱穴跡の可能性があると考えることにした。このように、上記の2種の遺構は土坑の形態的な特徴から識別したのである。

なお、土坑の調査方法について付記しておく。調査時に未経験の遺構であったために調査方法については観点が定まらないまま進められた。しかも複数調査担当者によって、さまざまな調査状況のなかで調査されたために、必ずしも調査や記録方法が統一的でないところがある。まず、検出面であるが、2年次調

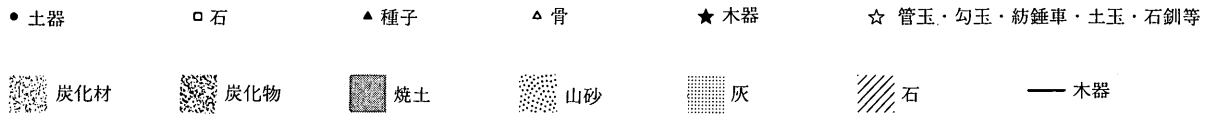
査の⑩-1区のS K2874では土坑内の炭化物層が土坑外へ連続している状況が確認され、部分的にしろ古墳時代の地表面が残存していた可能性が窺えた。⑩-1区での検出面は旧地表面と推測されるところから約15cm前後の深さであることが知られたが、他地区では基本土層の対比が不十分で対応する土層を特定できていない。しかし、隣接する⑧-2区で多くの炭化物集中・遺物集中が検出されたことから前年度の調査面の層位にほぼ対応すると思われる。ただし、⑧-1区では他の調査地区よりも検出面が高く設定されたがために、逆に第1面検出の土坑認定に不安を残す。例えばSD1016寄りでは第2面で古墳時代の見逃し遺構ばかりでなく、中世井戸跡も検出されていること、第1面検出の土坑には浅く大きな土坑がみられ、しかも⑧-1区のみ多数の古墳時代土坑の切り合いがある特異な様相が認められている点がある。整理段階ではこれらの土坑の検討に苦慮したが、基本的に判断がつかなかった土坑はそのまま扱うことにした。また、第1面の調査終了後に第2面で見逃し遺構の有無を確認したが、浅い土坑については見逃している可能性がある。なお、⑤-1区所在の1060番以後の土坑、⑧-1区の2400番台の土坑は見逃し遺構確認の第2面で検出されたものである。

次に土坑埋土の記録であるが、埋土の分層・記録は遺構ごとに調査担当者によって行われたため、統一的に把握できておらず、その記載も対比が難しいところがある。さらに、土中の金属イオンの作用によると思われる微高地中央部と低地よりでの埋土色調の違いも対比を難しくしている。ただし、中世井戸のみは明らかに砂質で異なるため、検出時でも古墳時代の土坑との識別が可能であった。

出土遺物は基本的に肉眼によって識別できた遺物のなかで目立つ遺物をできるだけ記録に残したが、具体的な図化記録を行う遺物の選択は調査状況や調査担当者の判断にゆだねられていた。そのため、均一な基準で調査記録が作成されていないところがあり、⑧-1区の見逃し遺構確認面で検出された土坑は調査期間との関係で土器出土状況の記録が省略されたものがいくつかある。また、出土遺物の標高の記録についても調査担当者で異なり、平面図に土器が記載されながらも、標高の記録がないものもある。そのため、整理段階で作成した垂直分布図では必ずしも平面の出土分布と一致しないものがあることは注意されたい。なお、遺物の採取方法については初年度は肉眼観察で識別できたもののみ採取されたが、2年次に玉類の採取を目的として土坑埋土をふるいかける作業を行った。その結果、白玉や小型の勾玉の他に小型の骨鏃や獣骨、種子が採取されることになり、初年度の調査では小型の玉類や微細な遺物は見逃されている可能性が高いと思われた。

最後に、本報告書での土坑掲載方法であるが、土坑は井戸跡、柱穴跡、その他の土坑に区分して掲載したが、必ずしも厳密に区分できているわけではなく、扱いが微妙なものもある。これらの扱いが微妙なものについてはその他の土坑に含めている。次に図の掲載方法であるが、土器を初めとする遺物の出土状態と炭化物の含まれ方を示すことに重点をおき、個別の土坑実測図は出土遺物の多い土坑を中心に平面の遺物出土状況と断面図、必要に応じて遺物出土状況の垂直分布図を掲載した。そして、炭化物が多く含まれると記述された土層や炭層は土層図内にスクリーントーンを貼り込んでいる。しかし、先に述べたように炭の含まれ方の多い・少ないは調査者の観察を整理で間接的に判断したものである。そのため、炭化物が含まれていても特別多いと記述されていなかったものは抽出せず、さらに、個別土坑内で相対的に炭化物が含まれる量が多い層があっても大量ではない場合はスクリーントーンを貼り込んでいない。遺物出土の平面分布図は土器出土量が多い土坑では数枚に分割して掲載したが、調査時の記録を基調として作成したため、必ずしも層別になっていない点は注意されたい。特に調査では埋土を通して目立った遺物を図化したものの、遺物が多く出土すると認められた部分のみを重点的に作図している可能性もある。そうした場合、遺物垂直分布図は遺物出土平面図から作成したものであるため特定の高さに集中すると見られても、実際には前後して破片が散在している部分が抜けていることは十分考えられる。整理段階では検証できな

いのでそのまま掲載したが、いずれにしろ、図化された周囲は埋土内で集中していた部分であることはほぼ間違いのないと思われる。また、調査では遺物出土標高の計測方法が異なり、土器1点ごとに標高を計測した場合もあれば、集中する土器をまとめて1点のみ記録されている場合もある。したがって、平面図と垂直分布図では表現された遺物が対応しない場合もある。さらに、棒状の木材が出土していても、標高の記録が1点しかない場合には★で表現せざるをえず、両端の記録がある場合では線で表現している。この点は不統一なまま掲載しているのでやや混乱するかもしれないので注意されたい。なお、垂直分布の記号の表記は以下の通りである。

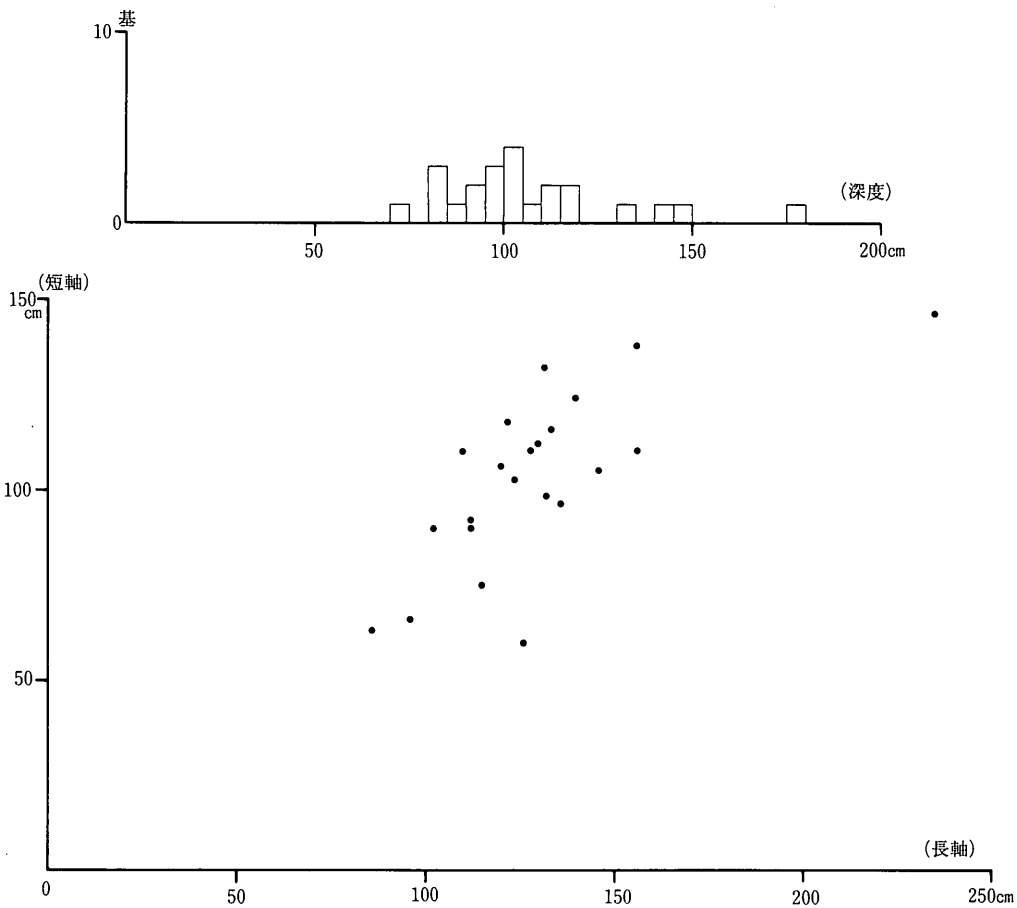


第23図 垂直分布凡例

(2) 井戸跡

調査時には土坑の多くは廃棄土坑と考えたこともあり、積極的に井戸跡とは認定しなかった。しかし、S K 2057・S K 2648のように深い円筒形の土坑もあり、遺跡内には井戸跡がいくつか存在する可能性が想定された。そこで、井戸跡ならば掘削深度に一定の傾向がみられると仮定し、土坑の掘削深度／土坑数のグラフを作成してみた。このグラフでは検出面からの深さ80cm前後で一旦土坑数が減少するが、それ以上の深さで土坑数が再び増加することが看取された。さらに、S K 1022・2436・2473・2492では梯子が検出されたが、これらは梯子を設置する深さを必要とした土坑と思われた。しかも、最も浅いS K 2756が検出面からの深さ80cmを測り、この数値は先にみた掘削深度別土坑数グラフの変換点の数値と一致する。したがって、検出面からの深さ80cm以上に意図的に構築される土坑があると認められ、形態的な特長から井戸跡と推測した。もちろん、検出面の深さや、構築された場所によって井戸跡の深さが異なることが予想されるが、本遺跡における井戸跡と認定できる土坑の最低基準として設定できるものと考えた。この基準によって井戸跡と認定される土坑はS K 1022・1023・1025・1033・2057・2063・2172・2185・2207・2297・2313・2436・2442・2473・2480・2492・2561・2648・2746・2756・2757・2759・2827の合計23基である。このなかでS K 2480は時期認定に不安があり、古墳時代ではない可能性もある。また、検出面からの深さは80cmに満たないが、第2面検出であることを考え、井戸跡の可能性のあるものとして加えている。上記に列挙した土坑以外で、形態的に類似するものの掘削深度が80cm弱であることや、一部トレンチで破壊されて全体の形状が不明なため井戸跡と認定するのに迷った土坑としてS K 2346・2482・2745などがある。さらに、⑧-1区第2面検出のS K 2440・2445・2447・2449は第1面からの深さで80cmを越えるとみられるが、周辺の第1面は中世井戸跡もかなり見逃されており、第1面の高さに不安が残ることや、土坑自体の時期認定に不安があるため、古墳時代の井戸跡と断定しなかった。

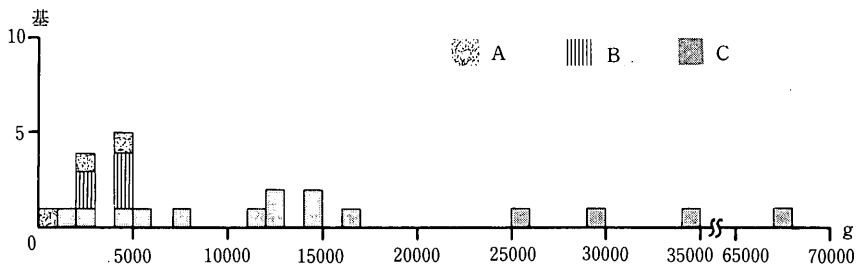
これらの井戸跡と認定した土坑は他の土坑より深いという共通点があるが、形態や遺物出土状況は多様である。平面形でみると、楕円形はS K 1022・1023・1025・2207・2746・2756・2757・2759・2827、円形はS K 1033・2057・2172・2297・2313・2436・2442・2480・2561・2648がある。これ以外で上面が方形・楕円形で一旦浅い底面を形成し、その一部が円筒形や楕円形に2段に落ち込む形態としてS K 2063 B・2185・2492がある。それ以外は形状の子細は不明である。平面形の規模はS K 2313の長軸86cm—短軸63cmを最小とし、最大はS K 2063 Bの長軸235cm—短軸146cmであるが、長軸100～150cm—短軸60～140cm前後が



第24図 井戸跡の掘削深度・規模グラフ

主体となる。なお、上部が浅く広くなる場合も、井戸本体は直径1m前後である。したがって、井戸本体で比較すると主体的な規模の範囲に納まる。深さは上述したように検出面からの深さ80cmを認定の最低ラインとしたので下限は80cmだが、最深はS K2057の深さ175cmで、最も多い深度は80~120cmである。130cm以上は数も少なく、グラフ上の分布も散漫となる。なお、⑧-1区で検出された2400番台の井戸跡は第1検出面で見逃して第2検出面で検出したものであり、本来はもっと深いと思われる。

次に遺物の出土状態であるが、そのあり方も多様である。土器を例にとると出土土器重量の最低はS K2480の440gで次はS K2185の1575g、最大はS K2207の67635gで、かなり開きがある。しかし、重量は400~5000g代(S K1022・1023・1025・2172・2185・2313・2436・2442・2473・2561・2827)、7000g代(S K1033)、10000~16000g代(S K2057・2297・2648・2746・2756・2757)、25000~34000g代(S K2063・2492・2759)、67000g代(S K2207)に区分できる。このなかでS K2480は土器出土量が極端に少ないために時期認定に不安を残すものである。また、一方の土器出土量が突出するS K2207は土器出土量が多過ぎて井戸跡なのか不安が残る。土器の口縁部遺存度区分では口縁部3/8以下しか認められないA・0はS K1022・2442?・2480、口縁部5/8までの破片が認められるBはS K1025・2172・2313・2436・2827、それ以外は口縁部6/8以上の遺存破片が認められるCである。口縁部の遺存度区分は上記の土器出土重量とほぼ一致した傾向を示し、1500~4000g代はほぼA・Bで占められるが、それ以上はCである。なお、1500~4000g代でもCが一部認められるが、これらはごく一部に口縁部の遺存状態の良好な破片、もしくは単体の略完形土器出土が認められたものである。Cの口縁部残存状態を示す場合は井戸跡への直接的な土器廃棄もしくは土器埋納だとするならば、S K1023・1033・2057・2063 B・2185・2207・2297・2473・2492・2561・2648・2746・2756・2757・2759は井戸廃絶にかかわって土器が廃棄もしくは埋納されたと考



第25図 井戸跡出土土器量/井戸数グラフ

えられる。特に S K 1033・2057・2063 B・2492では破損のほとんどみられない完形土器が出土し、S K 1023・2757・2207・2561もつぶれた状態とはいえほぼ略完形になる土器が認められた。それ以外のCの場合は破片が接合して口縁部が6/8以上になったものである。

次に、土器と炭化物出土に注目して堆積順序を模式化して比較してみた。なお、分類・記号表記は土坑概要に記した通りである。

①炭化物と土器が顕著に認められる場合

a 底面上

- C 2 ≥ P 3 > ○ (S K 2492)
- C 2 = P 2 S > P 2 S (S K 2757 ?)
- C 2 = P 2 ≥ P 2 (S K 1033)
- C 2 = P 1 ≥ C 2 = P 2 > ○ S (S K 2207)

b 埋土中

- ≥ C 2 = P 2 S > ○ S (S K 2756)

②炭化物が顕著にみられる場合

a 底面上

- C 2 > P 1 (S) > ○ (P 1) (S K 1022・2442)
- C 2 = P 1 > P 1 S (S K 1025)

③土器のみが顕著な場合

a 底面上

- P 3 > ○ ≥ P 1 S ≥ ○ (S K 2057)
- P 2 > ○ (S K 2648)

b 埋土中

- ≥ P 3 S > ○ > ○ S (S K 1023)
- ≥ P 3 > F > ○ S (S K 2561)

④炭化物と土器の間に間層がみられる場合

- C 2 > ○ > P 2 (P 1 ?) (S K 2185)

- > C 2 > ○ > P 2 S (S K 2313)

⑤土器が間層を挟んで出土する場合

- > C 1 > P 3 > ○ > C 1 > P 2 S (S K 2063 B)
- ≥ P 2 ? ≥ ○ ≥ P 2 S (S K 2297)
- ≥ C 2 = P 2 S ≥ ○ ≥ P 2 S (S K 2746)
- C 2 = P 2 > P 2 ≥ ○ ≥ P 2 (S K 2759)

⑥薄い炭化物層のみの場合

- > P 1 > C 1 > ○ S > C 1 > ○ (S K 2172)

⑦炭化物も土器も顕著でないもの

- (S K 2480)

炭化物と土器の関係不明 (C 2 F B > ○あるいはC 2 > ○)

- (S K 2827・2473・2436)

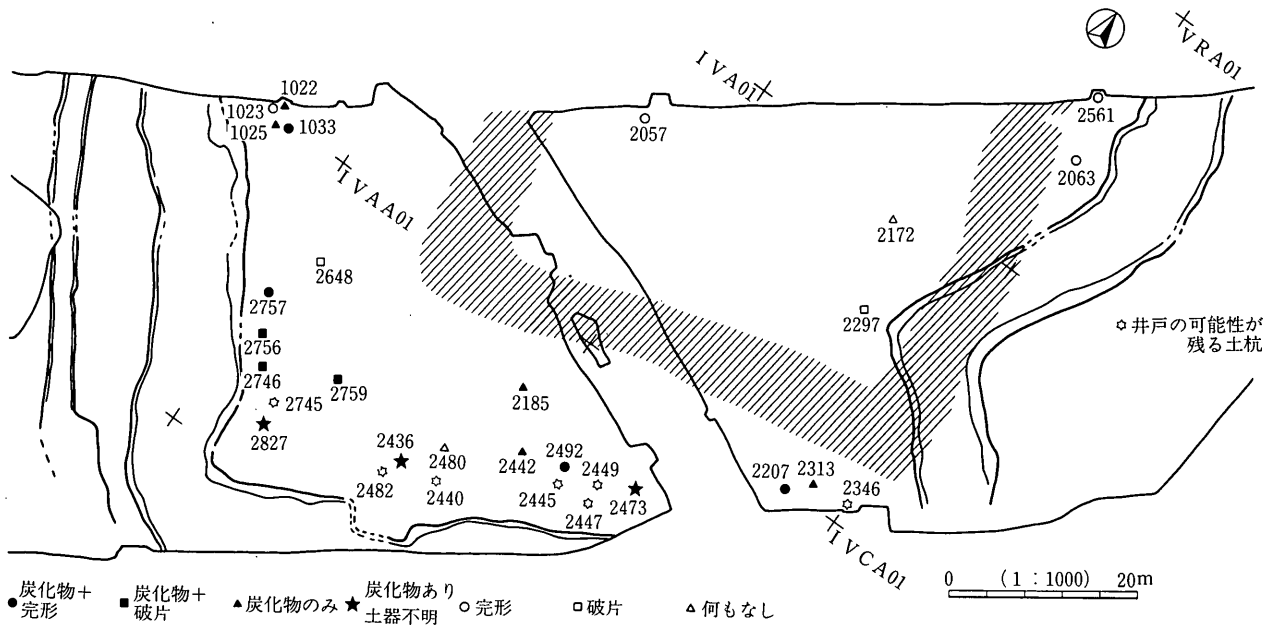
これらは調査記録から区分したものであるが、いくつか注意する点がある。ひとつは底面上に土器も炭化物も顕著でない土層を挟む場合があるが、これは底面上の土層が薄く、井戸使用中か廃絶直後の所産であると思われる。したがって、廃絶からあまり時間差はないと思われ、炭化物や土器が底面上の土層を挟む顕著にみられる場合では基本的に廃絶時の所産が多いと思われる。次に個別の分類区分解釈の留意点を述べておく。S K 2561は埋土中上部に焼土(ブロック)が入るが、これは炭化物が顕著に含まれないものであるため炭化物と土器が顕著に見られる例には加えていない。また、S K 2172と2063 Bの薄い炭化物層

は混入の可能性がある。特に、S K2172は薄い炭化物層が上部のみ複数枚認められており、井戸跡が埋没した後の所産の可能性が高いと思われる。S K2063Bは判然としないが、複数枚検出された内の一部は混入の可能性がある。しかし、炭化した材も出土しているので、周辺で火が焚かれている可能性は残る。ここでは埋土中に顕著な炭化物がみられなかったので土器廃棄に分類した。S K2185は上層の土器をP1かP2に区分すべきか迷ったものであり、上部の土器は混入の可能性もある。これはS K2313も同様である。したがって、これらの例は炭化物が顕著にみられる場合として扱った。S K2746は間層を挟んで土器が出土したとみられるが、あまり上下層間には時間差はないかもしれない。S K2759はほぼ3つの土器が集中的に出土する部分が見られるが、下部の2つは同一の可能性もある。なお、④の例は廃絶時は②のグループと同じであり、上層は別契機の所産とできるかもしれない。⑤の例も同様に廃絶時は①・③ながら、後で土器のみが廃棄・混入した可能性がある。

炭化物が顕著ながら土器出土状態が不明な3例を除いて、廃絶直後の様相を示すと思われる底面上および下部の炭化物・土器出土状態からは概略4種想定される。すなわち、廃絶に際して炭化物と土器が廃棄される場合7基(S K1033・2207・2492・2746・2756・2757・2759)、炭化物のみの場合5基(S K1022・1025・2185・2313・2442)、土器のみの場合6基(S K1023・2057・2297・2561・2648・2063B)、炭化物・土器廃棄は見られない場合2基(S K2172・2480)である。このなかで炭化物が認められる例は圧倒的に多く、土器出土状態が不明な例も炭化物は認められているのでこれらを合計すると約7割の井戸跡で顕著な炭化物廃棄が見られることになる。ただし、炭化物出土と併せて、顕著な土器出土がみられる場合と炭化物のみの場合があり、土器も破片多数出土と完形土器出土の場合がある。つまり、炭化物の廃棄はより共通した傾向と認められるが、それ以外の様相は多様であって、土器廃棄と炭化物廃棄が必ずしもセットになる行為とはいえない。さらに、完形土器出土・破片土器出土の2者が炭化物層の有無に関連しないで認められることもある。しかし、上記に区分したなかで共通した土器・炭化物出土状態が認められることは、何らかの共通した行為の存在を思わせるが、井戸跡に結びついた行為なのかは断定できなかった。なお、上記の廃絶時の様相の違いは平面分布と合わせると興味深い様相が知られた。

最後に井戸跡の分布状況であるが、井戸跡と認定した土坑の分布から2つの特長なことが知られる。一つには遺跡内に不規則に分布するのではなく、一定の配置の規則性が認められることである。井戸跡はすべてS D1016区画内にあり、しかも多くがS D1016の各辺の岸脇周辺に並列して分布する。ただし、子細にみるとS D1016岸際にあるものとやや内側に入ったところにあるものの2種があるようである。二つ目は分布をみるとS D1016南辺と西辺側の井戸跡の密度が高く、東側はあまり数は多くない偏在する様相がみられる。次に上記でみた井戸の諸特徴を分布からみてみたい。

形態的な特徴では西辺北側に楕円形の井戸S K1022・1023・1025が近接して分布し、上面が広く構築されて一旦底面を形成しながらさらに円筒形・方形に掘り込まれる井戸跡は、南辺中央部と東辺北部にある。それ以外はあまり規則性は看取されにくい。次に深さであるが、数の少ない検出面からの深さ130cm以上に限定してみるとS K2057・2172・2492・2648がS D1016各辺の中央近くに位置し、S D1016区画内を4分割するライン上に対峙して位置するようにもみえる。第2面で検出されたS K2442・2473も本来は深さ130cm以上とすると、このなかでも南辺中央部にやや深い井戸が集中するようである。他の深さ80~120cmの井戸跡は各所に散在する。また、先にみた井戸廃絶過程の違いを分布上でみると興味深いことが知られる。まず、土器と炭化物が廃棄される例は南・西辺南部に集中し、炭化物のみが顕著に見られるものもここに重なる。一方で土器のみが顕著な場合は西辺北側からS D1016区画内の北半分集中する。また、薄い炭化物が認められた土坑も1例のみながらここに重なる。つまり、土器廃棄は遺跡内各所で認められるが、炭化物の廃棄が顕著でない東・北側と炭化物の廃棄が顕著な西・南に2分されることが知られる。さらに

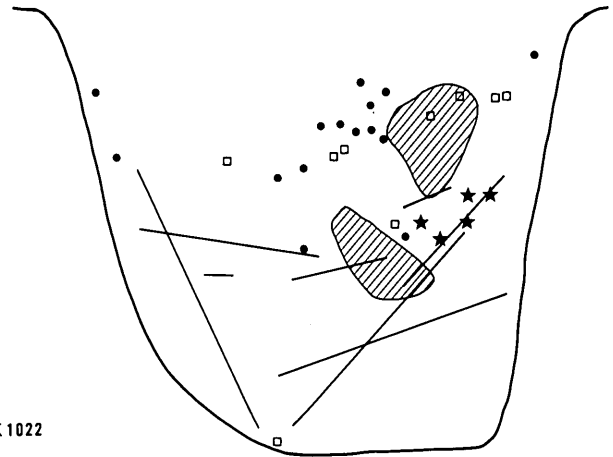
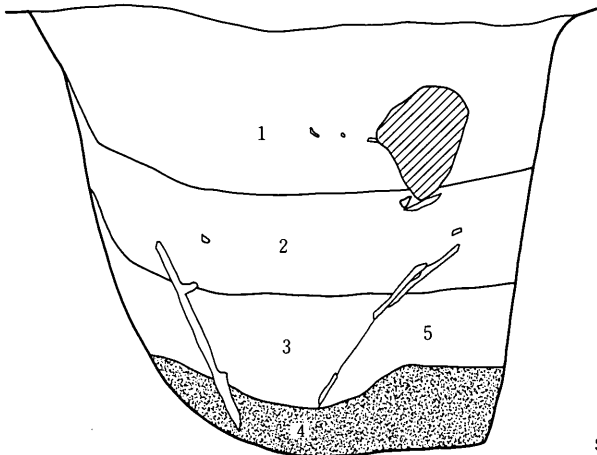
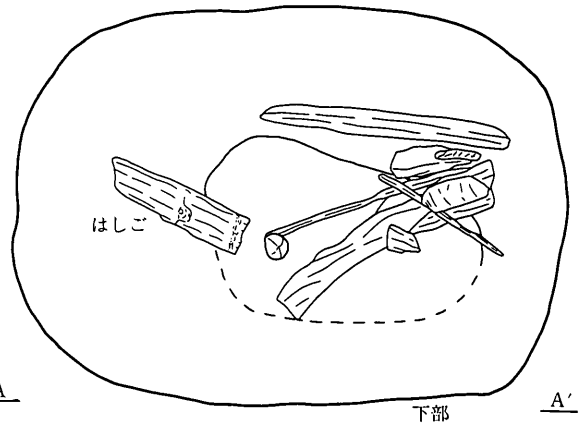
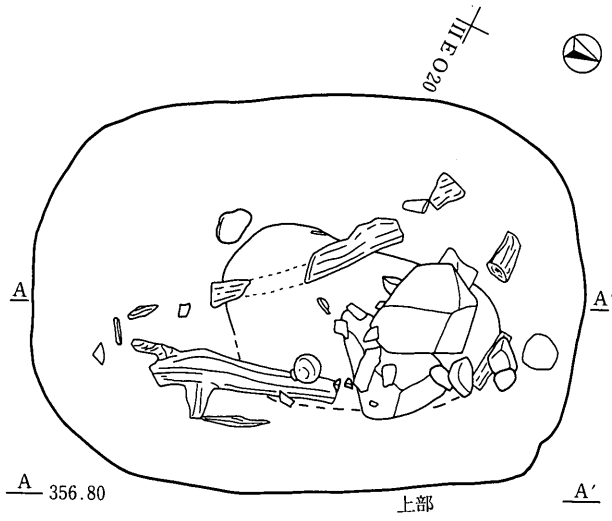


第26図 井戸跡と思われる土杭の分布

土器のみが廃棄される例はSD1016区画内の北半分に集中し、一方で炭化物と土器の廃棄・炭化物の廃棄が顕著な例はSD1016区画内の南半分に集中する。この炭化物廃棄の有無、土器のみが顕著に廃棄される例の2種の分布状況からはSD1016区画内が複数の空間に分けられる可能性があることが指摘できる。もちろん、これは傾向として把握できることで、なかには異質な存在もある。例えば、炭化物も土器も顕著でないSK2480は炭化物が顕著な井戸跡が分布するなかに1例のみ単独で存在する。SK2480の場合、帰属時期の認定に問題があるため、やはり問題が残る。SK2063Bについては炭化物が廃棄されてはいなかったが、周囲で火が焚かれているとすると若干異なる様相となる。いずれにしろ、この偏在のあり方はSD1016の空間内が均質の空間ではなかったことを示すと思われる。ちなみに梯子の出土が認められたのは西・南辺に所在する井戸跡からのみである。これも、SD1016区画内の空間の機能差を示すかもしれない。

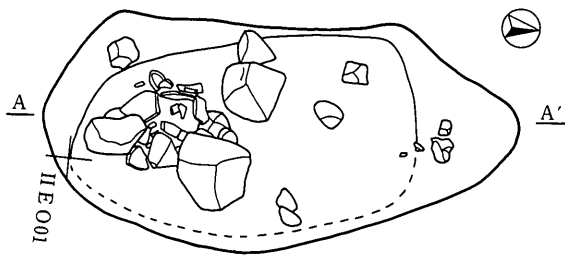
また、炭化物が顕著に認められるSK1022・1025、炭化物と破片土器を出土したSK2746・2756・2759、炭化物のみが顕著なSK2185・2442は近接して存在する。このことから炭化物が顕著に含まれる場合は井戸の構築が継続的、あるいは数多く構築された可能性が想定され、類似した廃絶過程をたどることからも利用方法、使用者の共通性があるのかもしれない。しかし、炭化物が顕著でないSK1023は、炭化物が顕著なSK1022・1025と近接して位置する問題もあり、上記のことは全般的な傾向として把握できるものの、厳密には断定することはできない。なお、このような遺跡内の地点ごとに井戸跡の廃絶過程が異なる理由について憶測を述べるならば、空間利用のあり方や井戸使用者の違い、異なる廃絶過程の井戸跡が近接する場合は時間差が想定できるかもしれない。特に、井戸跡の密度が高い場所に炭化物が顕著にみとめられるものが多い傾向があることは頻りに焼却行為を伴う井戸の構築-廃絶が繰り返されたことによると思われる。井戸が長期にわたり維持されずに、井戸使用が比較的短く、頻りに構築と廃絶を繰り返すような場所であったのかもしれない。

上記のような井戸分布状況からは次のようなことが想定できるとと思われる。まず、井戸跡の配置に一定の規則性が看取されることからSD1016区画内全体が統一的な計画で構成されていることが知られる。さらに、SD1016区画内の各所に井戸が存在することから井戸利用者は複数存在すると想定される。一方で、



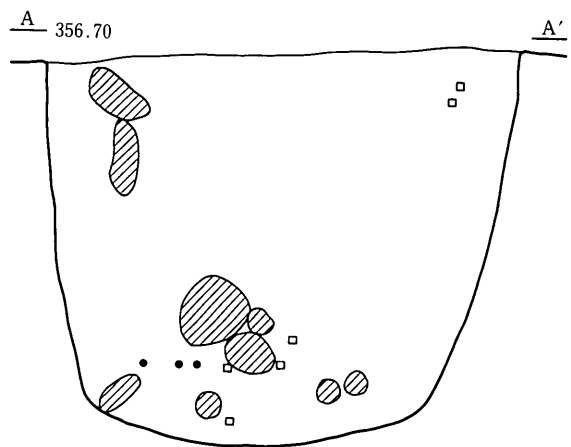
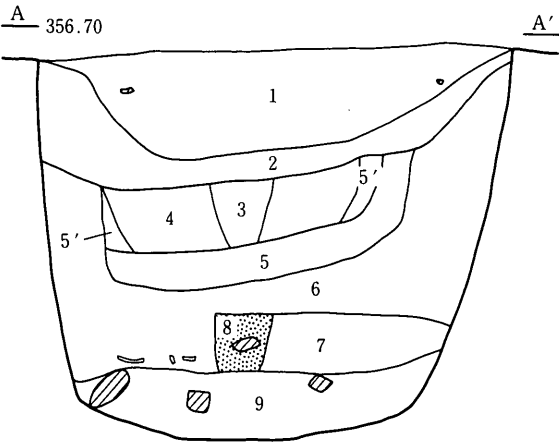
S K1022

- .1 黒褐色粘性土 (ブロック混) 3 黄灰色土 5 暗灰黄色土  
2 褐灰色土 4 炭層



- 1 黒褐色土 7 黄灰色粘土  
2 黒褐色土 (やや砂質) 8 黄褐色土 (山土ブロック?)  
3 にぶい黄褐色土 9 黒褐色粘性土  
4 灰黄褐色土  
5 褐灰色土  
5' 5層に炭粒混  
6 褐灰色土

0 (1:20) 50cm



S K1023

第27図 S K1022・1023



偏在する様相からはS D1016区画内の空間利用の違いが表現されていると思われる。特に西・南辺での井戸数が多い様相はこの部分での継続的な使用、あるいは使用者が多いことを示す可能性もある。さらに、廃絶過程の違いが分布の上で一定の傾向を示すことから使用方法、あるいは使用者の違い、S D1016区画内での機能差を示す可能性がある。具体的な背景については明らかにできなかったが、いずれにしろ、S D1016区画内は統一的な計画性で構成されながらも、内部は機能的に異なっていた可能性は指摘できると思われる。

以下には個別の井戸跡について記述するが、S K2063は複数の土坑が切り合う可能性があるものである。ここで両者の関連についても触れるために一括して記述している点は注意されたい。

#### S K1022 ⑤-1区 IIIYO19・20 (第27図、P L 3)

S D1016区画内の北西部、S D1016西辺近くに位置する。平面形は長軸146cm、短軸105cmの楕円形で、長軸はほぼS D1016と平行する。断面形はU字状を呈して検出面からの深さは112cmを測る。埋土は6層に分層され、底面上に厚い粘土混じりの炭層、その上に暗灰黄色～褐色のシルト質土、最上層には暗褐色粘性土が入る。なお、本土坑の南壁際に梯子が立て掛けられたように出土し、反対側の北壁際には斜めに入る棒状の材が出土した。また、1層の下部から2層にかけては比較的大きめの礫が数個検出された。出土遺物は2625gの土師器破片が得られたが、口縁部の遺存度区分はAである。出土層位は炭化物を多く含む土層以上で散在的に出土している。本土坑は井戸跡と思われ、梯子は使用時のものと思われる。また、廃絶に際しては炭が多量に廃棄され、埋土中位の礫出土からも人為的に埋められている可能性がある。周辺では類似した形態のS K1023・1025と近接している。

#### S K1023 ⑤-1区 IIIYO20・YP20 (第27図、P L 3)

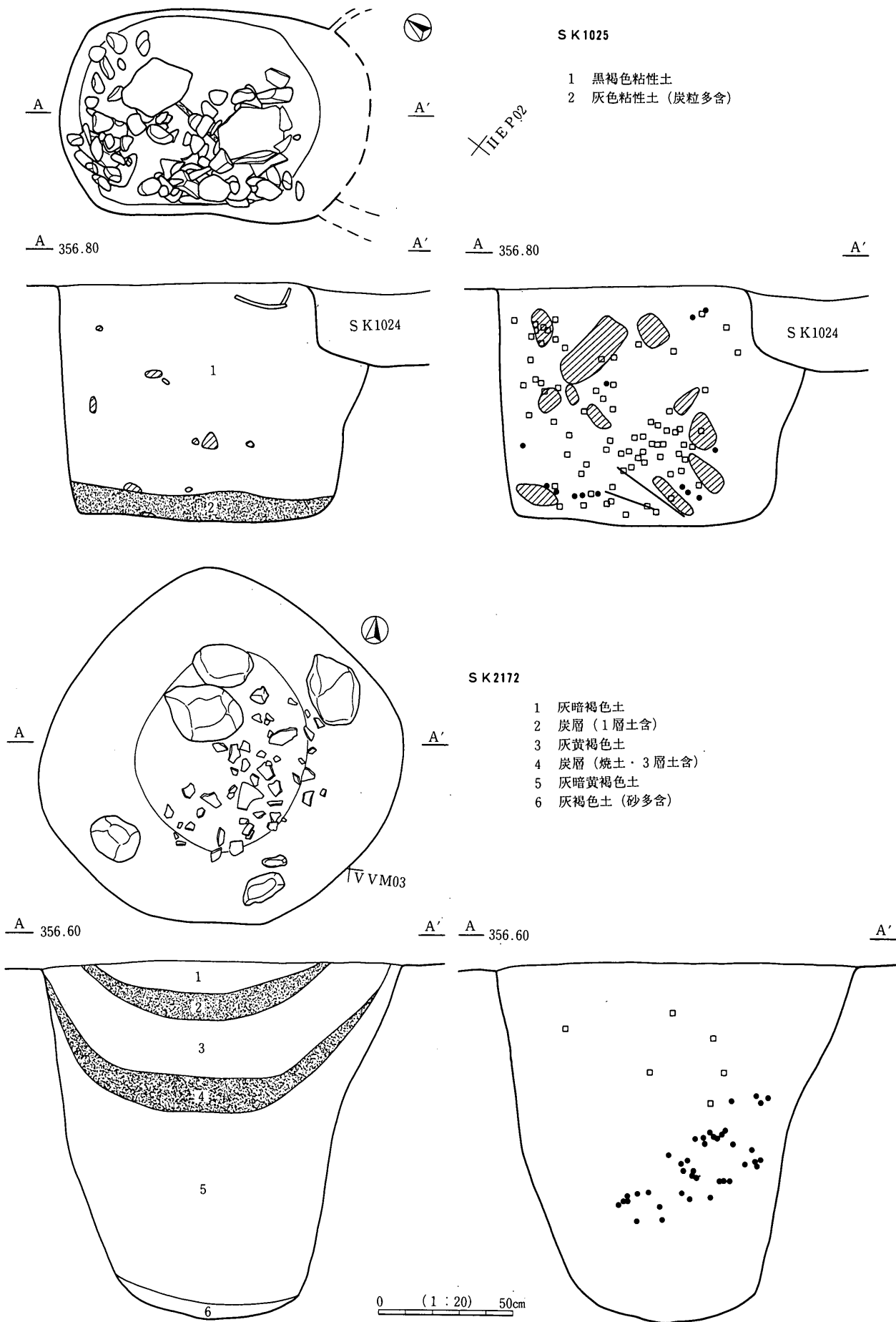
S K1022に隣接して位置し、形状も類似する。平面形は長軸126cm、短軸60cmの楕円形の平面形で、断面形は底面がやや平坦となるU字状を呈する。埋土は9層に分層され、底面上に9層の黒褐色粘土層、その上部に山土と思われる遺跡内では見られない黄褐色粘土・黄灰色粘土の8・7層があり、その上部は3～6層のにぶい黄褐色～褐灰色土、最上部に1・2層の黒褐色土が入る。このなかで、9層と6層下部にかけてと上部1・2層の一部で礫が集中的に出土し、6層と7・8層境で植物遺体が薄く密集していた。植物遺体層周辺では礫と破損した略完形の土師器甕が出土し、5層下部より砥石が出土した。出土遺物は土師器4365gと泥岩製砥石1点があり、土器の口縁部遺存度区分はCである。ただし、Cとなるものは甕のみである。本土坑も掘削深度やS K1022との形状の類似から井戸跡と思われる。しかし、S K1022・1025とは炭層が見られない違いがある。

#### S K1025 ⑤-1区 IIEP01 (第28図、P L 3)

S K1022・1023の南に隣接して位置し、南側はS K1024に切られる。平面形は長軸115cm、短軸75cmのやや方形に近い楕円形で、S K1022・1023と類似する。断面形は壁がほぼ垂直で底面が平坦な箱形を呈し、検出面からの深さは87cmを測る。埋土は大きく2層に分層され、底面上に炭を多量に混入する灰色粘土が薄く入り、その上の大部分は黒褐色粘土である。土師器は破片が上層で出土し、1層中では拳大を中心とする礫が多数検出された。また、2層では少量の木材片と土師器破片が出土している。出土遺物は土師器が重量4355gとミニチュア土器がある。土器の遺存状態の区分はBである。このことから直接本井戸跡へ廃棄された土器は少ないと考えられる。本土坑は埋土中の礫の多さからも人為的に埋め戻されたと思われる。近接したS K1022・1025とは形態が類似する。

#### S K1033 ⑤-1区 IIIYR20 (第29・30図、P L 3)

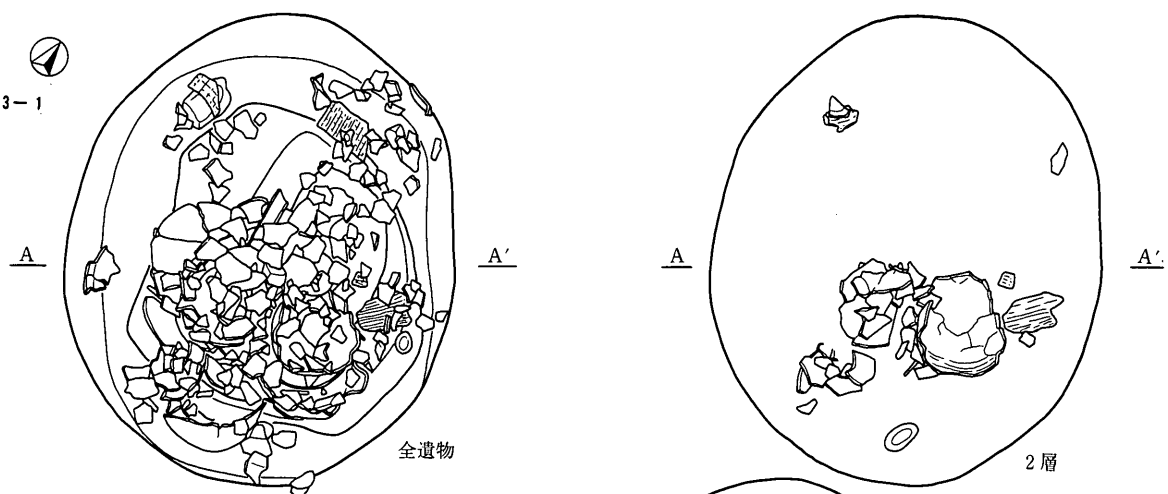
S D1016区画内西側に位置する。平面形は123～103cmの円形を呈し、断面形は上部50cmほど垂直に落ち込み、一旦平坦な底面を作りだした後に中央東より部分がさらに30cmほど落ち込む。検出面から最深部ま



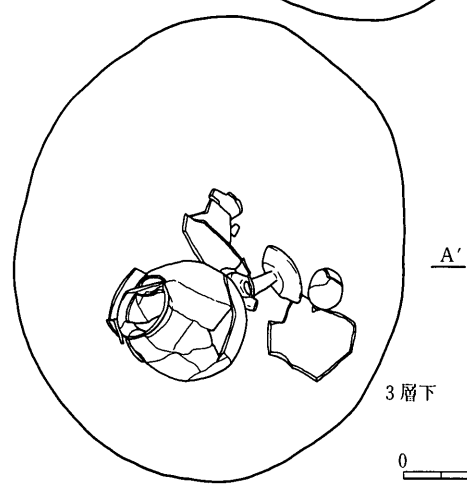
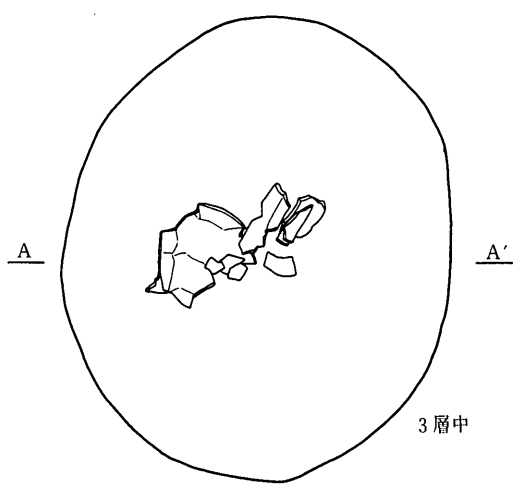
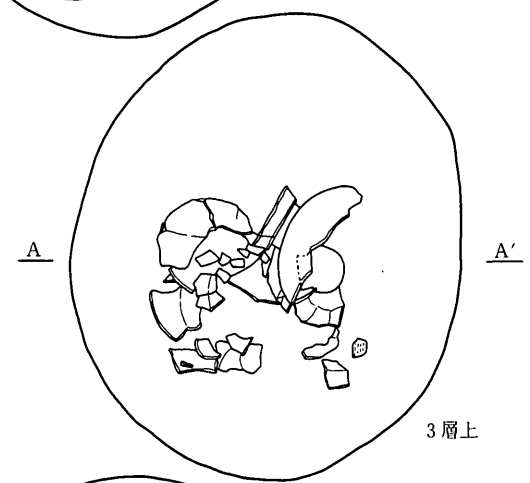
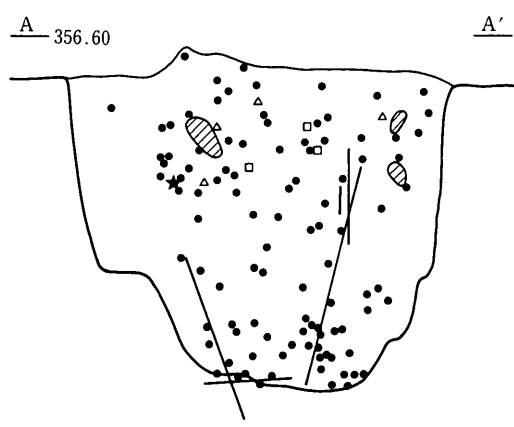
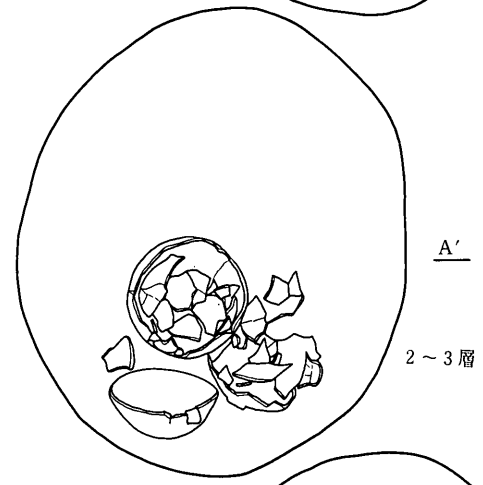
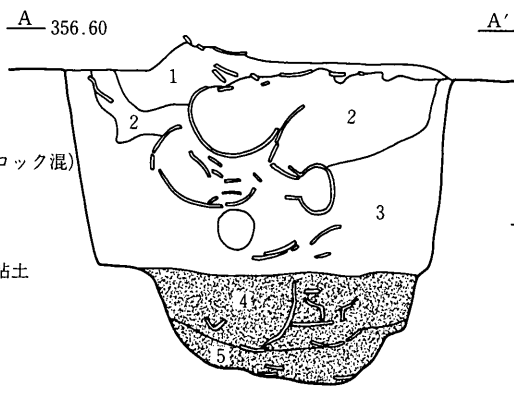
第28図 S K1025・2172

SK1033-1

HEROI

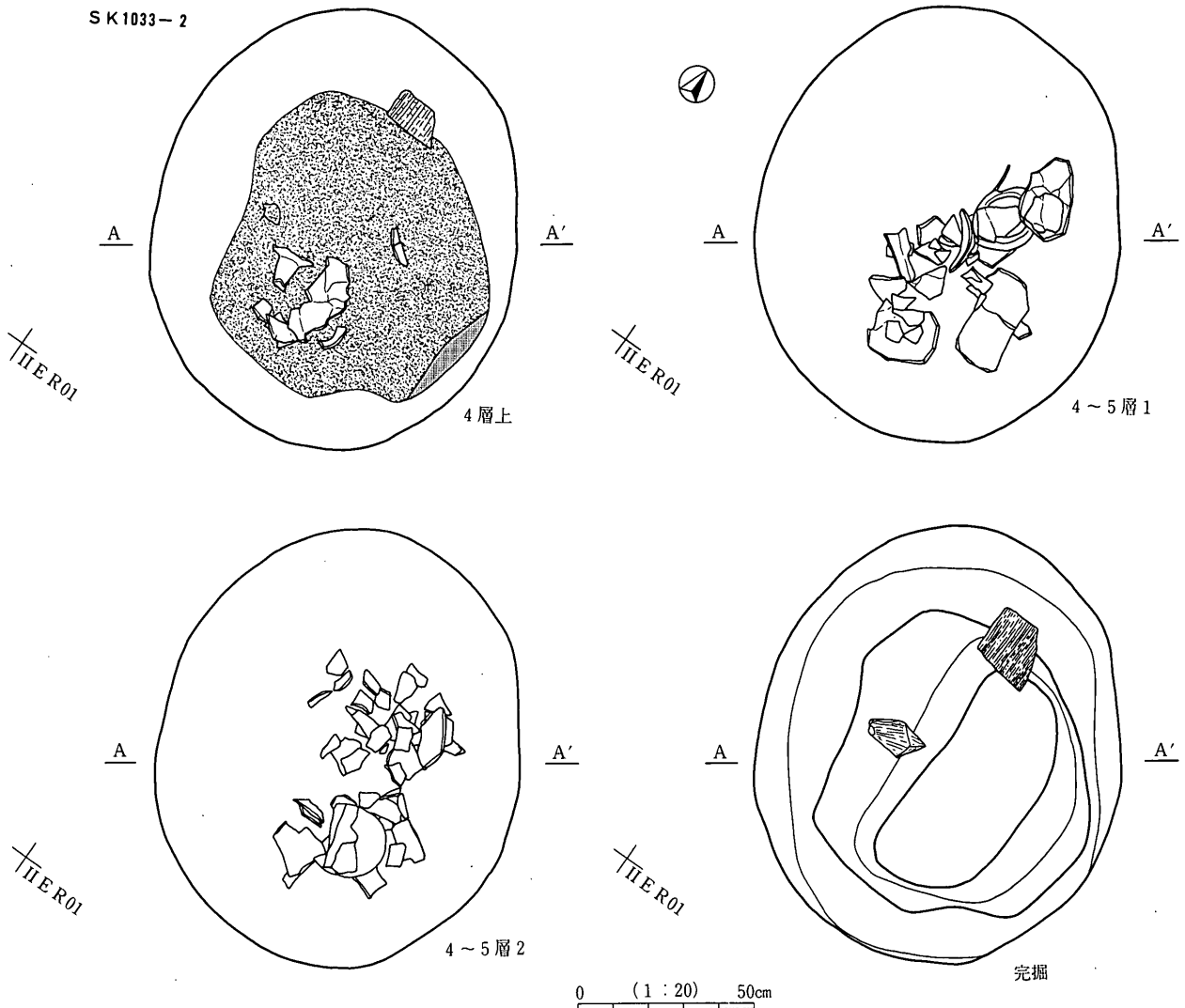


- 1 褐灰色土  
(黄褐色土小ブロック混)
- 2 褐灰色土
- 3 褐灰色土
- 4 炭化物
- 5 黒褐色炭化物混粘土



0 (1:20) 50cm

第29図 SK1033-1

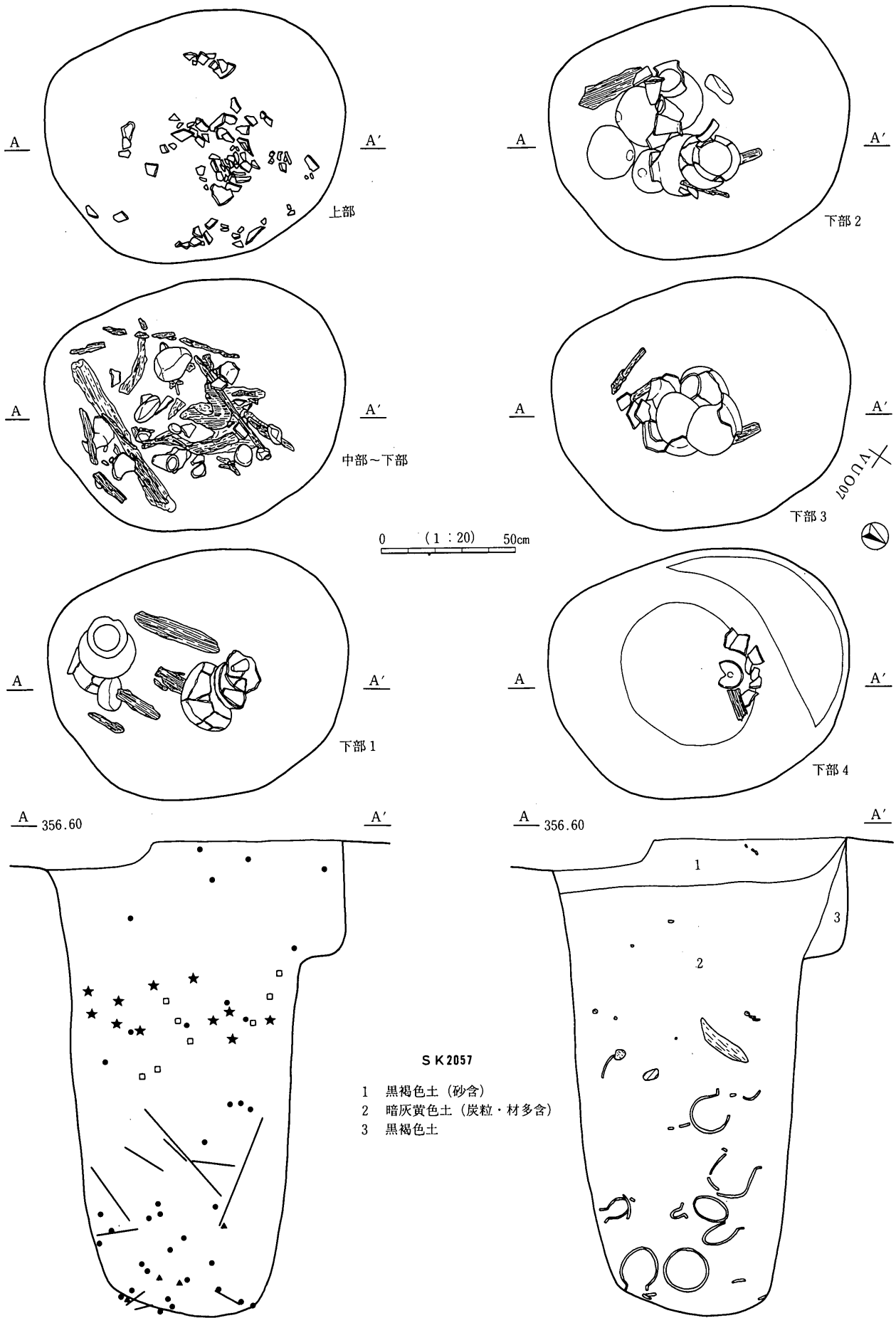


第30図 SK1033-2

での深さは約80cmを測る。埋土は5層に分層され、平坦面を作り出された底面から落ち込む部分の底面上に炭化物を多量に含む黒褐色土、その上に炭層が形成されている。それ以上は褐灰色土を基調として炭化物等の含まれ方により3つに分層されているが、土器の含まれ方には大きな違いが見られないのであまり堆積時間差はないと思われる。遺物は土師器・材・焼骨片（種・部位不明）がある。土師器は完形品が1～5層を通して多数検出され、総重量は約10838gである。また、底面上では炭化した板材と杭状の材が検出されている。廃棄の経過は最初に炭化物が廃棄され、続いて土器が廃棄されたと思われる。なお、底面で材の性格は明らかにできなかった。

**SK2057** ⑤-2区 VU006・07（第31図、PL7）

SD1016区画内の中央北側に位置する。平面形は長軸112cm、短軸90cmのやや楕円気味の円形を呈する。北西側の検出面から44cmほどのところが小規模なテラス状となるが、それ以下は円筒形に落ち込む。検出面から底面までの深さは175cmを測る。埋土は3層に分層され、テラス部分の壁際に黒褐色土、上層に暗灰黄色土が入り、それ以外の大部分は小炭化物粒を含む黒褐色土で占められる。遺物は土器の他に材・種子（モモ核9点）がある。土器は総重量16285gを量り、口縁部遺存度区分はCである。特に底面近く2層下



第31図 S K 2057

部では完形の甕多数が積み重なるように出土して注目される。しかし、埋土中位以上では材と土師器破片が若干出土しているのみである。本跡は形状から井戸と考えられ、底面付近で重なって出土した完形の甕多数は井戸廃絶に関わり意図的に入れられたと思われる。

#### S K 2063 ⑤-2区 VUS10 (第32・33図、P L 7)

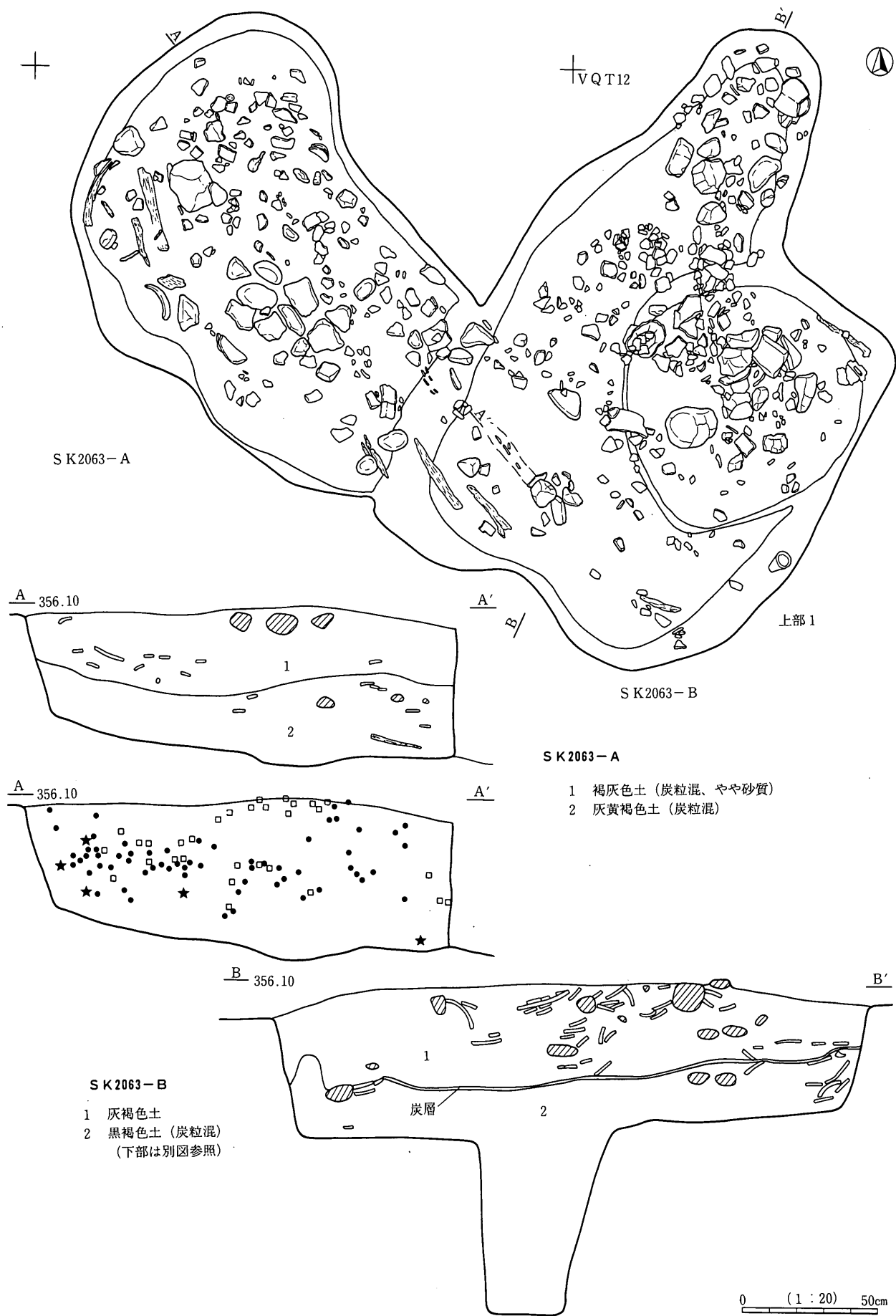
S D 1016区画内の北東部に位置する。調査時にはL字状の土坑として検出されたことから2基の土坑が重複する可能性が考えられ、西側に突出する部分をS K 2063A、東側部分をS K 2063Bとされた。検出順序は最初にS K 2063Bが検出され、調査を進める内にS K 2063Aの存在が判明した。両者の切り合い関係は明らかにできなかったが、A・Bは形状が異なってBが井戸跡と捉えられることや、底面の標高差が認められることから切り合いの可能性はある。しかし、遺物は一括で取り上げられたものもあって整理段階では両者の遺物を合わせて扱ってしまった。

S K 2063AはS K 2063Bの南西部に接し、確認できる範囲で長軸172cm、短軸126cmの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は南側へ緩やかに傾斜し、検出面から底面までの深さは南部で58cm、東側で38cmを測る。埋土は2層に分層され、上層には炭化物を含む褐灰色土、下層には灰黄褐色土が入る。遺物は土師器の破片多数と材・種子(モモ核1点)が出土している。土器は1～2層に礫多数と共に出土しているが、小破片であり接合していない。

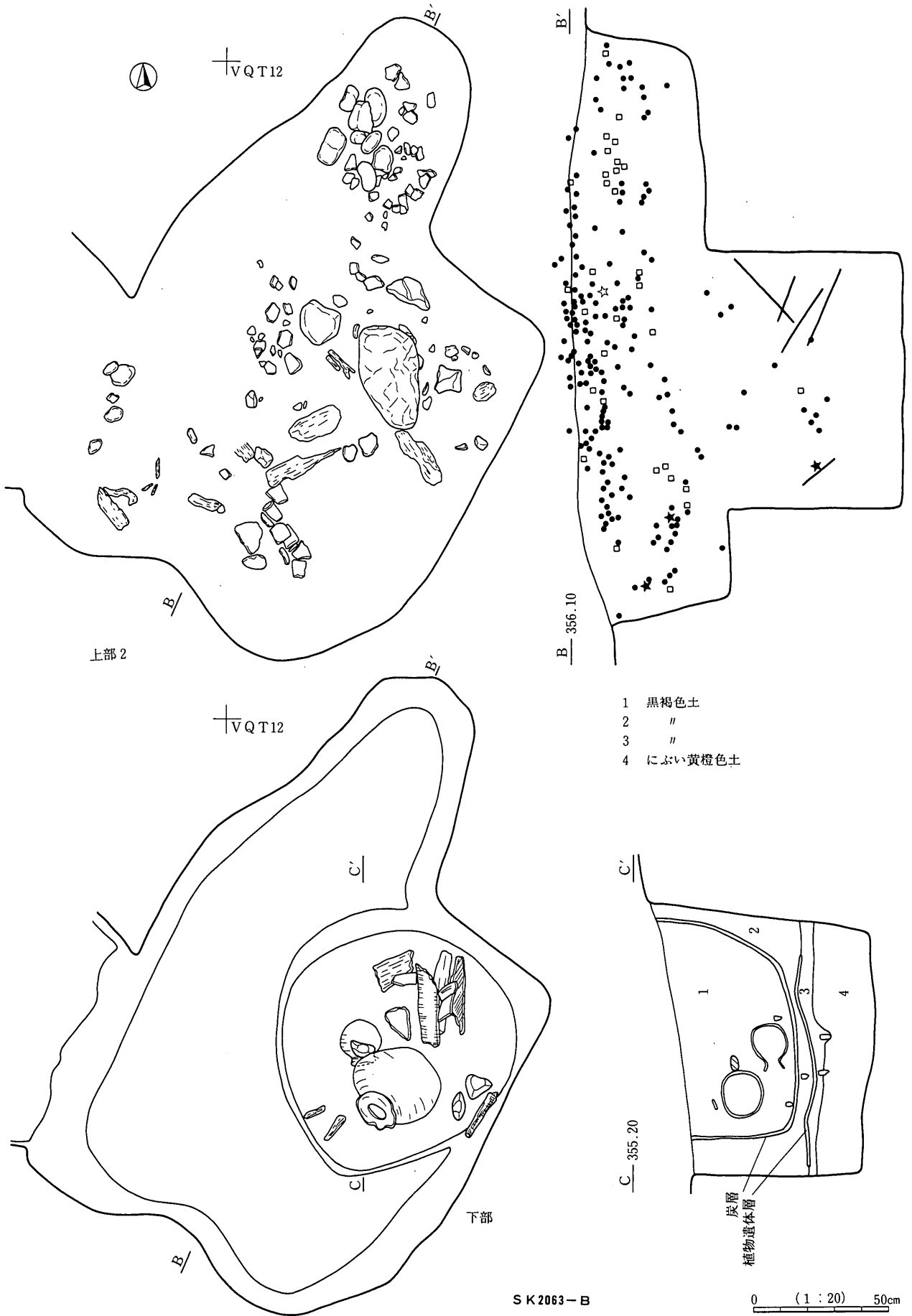
S K 2063BはS K 2063A東側に長軸を直交させる方向で接続するように位置し、平面形は150～170cmの方形を基本として北西部が舌状に突出する形態となる。最長部は長軸235cm、短軸は146cmを測る。検出面から64cmほど掘り込まれたところで一旦底面を作りだし、北東部が直径90～115cmで深さ64cmの円筒形に掘り込まれる。この円筒形の掘り込み部分の底面から検出面までの深さは合計110cmを測る。埋土は円筒形掘り込み内の最下層に遺物をほとんど含まない黄褐色粘性土が平均的な層厚で堆積し、その上部に薄い7層のふい黄橙色粘性土が入り込む。この黄橙色粘性土中では半分炭化した材が数点出土し、その上には薄い植物遺体層の6層が載る。6層の上には壁際に厚く、土坑中央部に薄くなる黒褐色土の5層があり、さらに5層上面にも薄い炭層4層が見られる。その上には完形土器や杭を含む黒褐色土である3層となる。この3層はS K 2063B全体の下層に見られる土層と色調は類似するが、円筒形の落ち込み上部には人頭大の巨礫が検出されており、円筒形部分上層とS K 2063Bとした部分の下層との間に層理面が存在する可能性もある。しかし、相互の関連については調査では直接確認できていないため、ここでは土層の類似から同一層の可能性があると考えた。この3層は炭化物粒や土師器の破片・礫・材を含み、上面はほぼ水平に堆積する。上部にはさらに薄い炭層の2層が見られる。最上層は大量の土器片・礫を含む灰褐色土であり、この土層はS K 2063Aと類似する。

出土遺物はS K 2063全体で総重量25335gの土師器、材や管玉1点、ミニチュア土器1点、焼けた獣骨小片(種・部位不明)、加工痕のある鹿角片などが出土している。土器の口縁部遺存度区分は6/8以上のものも含むCであるが、6/8以上の個体はS K 2063Bの円筒形掘り込み内出土のもののみで、大部分は3/8以下の小破片であり接合しなかった。また、材は円筒形部分で杭状に縦に入って検出されたが、加工材ではなく、部分的に炭化する材が含まれる。管玉は上層から出土した。

以上のようにA・Bの関係について確定しきれなかったところが残るが、底面の標高差からすると2基の土坑が切りあう可能性が高い。また、S K 2063Bでも円筒形部分と上部の浅く広い部分が当初より構築されたものか明確ではないが、少なくともS K 2063Bは井戸として利用された段階と上層の廃棄場として利用される2段階があったと想定される。また、廃絶に際して大量の炭化物廃棄はなかったと捉え、薄い炭層は混入の所産であろうと考えた。しかし、半分焼けた材が出土していることから周辺で火が焚かれた可能性は高いと思われる。なお、S K 2063Bからは中世のカワラケも出土しているが、混入であろう。



第32図 SK2063-1



第33図 S K 2063 - 2



**S K 2172** ⑤-2区 VVL02 (第28図)

S D 1016区画内北東部の掘立柱建物跡の南西に S Q 2017と隣接して位置する。平面形は直径132cmの不整円形を呈し、やや上部が開く筒形の土坑である。検出面から底面までは132cmを測る。埋土は6層に分層され、底面上には6層の薄い灰褐色土、下半には5層の厚い灰暗黄褐色土、上部には4層の薄い炭化物層、3層の灰黄褐色土、2層の炭化物層、1層の灰黄褐色土が互層に堆積している。5層上部から土師器の破片が出土し、3層を中心として礫数点が検出されている。廃絶直後では土器・炭化物の投棄などは行われていないと思われ、上部にみられる薄い炭化物層は混入の可能性が高いと思われる。出土遺物は重量4075gの土師器や骨鏃と思われる加工品がある。土師器は小破片であり、口縁部の遺存度区分はBである。本土坑跡は形状からは井戸と思われ、埋土の炭化物は廃絶後の凹地に入ったものと思われる。

**S K 2185** ⑧-1区 IVAS06 (第34図)

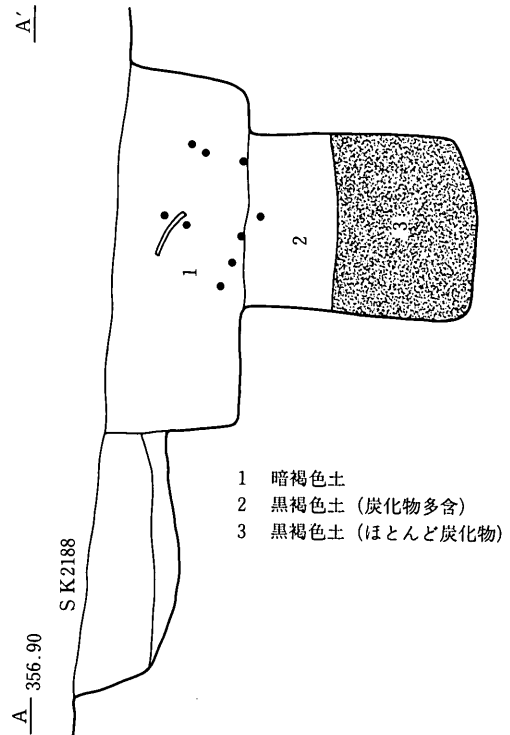
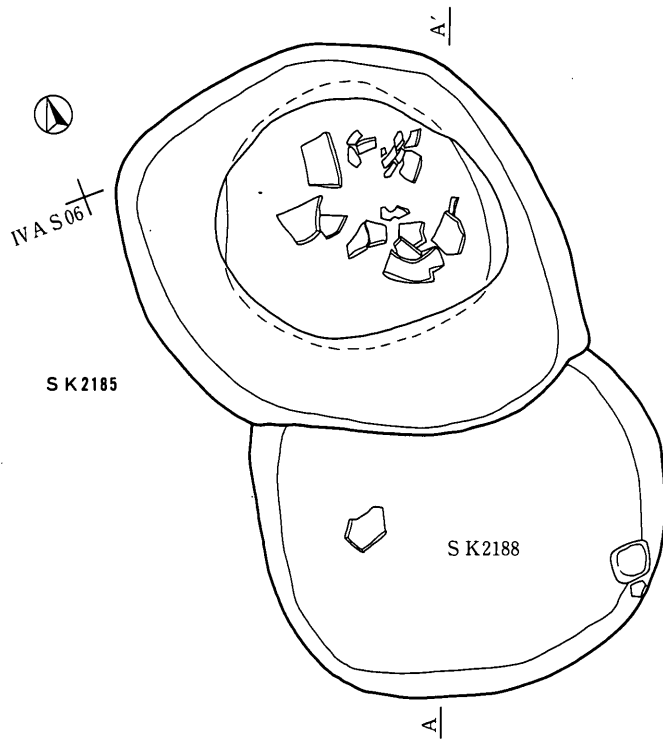
S D 1016区画内南西部の中央よりに位置し、北側の S K 2188を切っている。本跡は当初浅いと思われたが、見逃し遺構確認の第2面で重複位置に S K 2370が検出された。この S K 2370が上面の S K 2185の土器出土範囲とほぼ一致することから整理段階で同一の遺構と認定し、S K 2185に統一した。平面形は直径110cm前後の不整円形を呈し、検出面から深さは36cmで一旦底面を形成する。そして、中央部が直径70~72cmの円筒形状に落ち込み、検出面から底面までは98cmを測る。埋土は3層に分けられ、上部の底面を形成するところまでは暗褐色土、円筒形の落ち込み上部が炭化物を大量に含む黒褐色土、下部が焼土を含む炭層である。出土遺物は1310gの土師器が得られ、1層中位を中心として破片が散在した状態で検出された。しかし、接合作業の結果、これらの破片はほぼ1個体の壺の破片であることが判明し、口縁部の遺存状態の区分は6/8遺存を含むCとなった。また、底面近くの炭層内では材が出土している。したがって井戸廃絶後に大量の炭化物が投棄され、その後、上面に大型の壺破片が入ったとみられる。ただし、この壺が井戸へ直接廃棄された所産かは明らかでない。

**S K 2207** ⑧-2区 IVBO01 (第34図、P L 12)

S D 1016区画内の南西部に位置する。平面形は長軸128cm、短軸100cmの楕円形で、逆台形の断面形を呈して検出面から底面まで105cmを測る。埋土は3層に分層され、最下部に炭化物を大量に含む黒褐色土、中位に炭化物・焼土粒を混入する暗褐色土、上部には炭化物・焼土粒を若干含む暗褐色土がある。遺物は67635gの土師器が得られ、口縁部遺存度区分はCである。土器は3層で破片、2層で破片や略完形品が密集し、1層は大礫を含むが土器は破片で少量である。また、3層からはガラス小玉、ベンガラが出土している。本土坑は形状や規模から井戸と推測したが、出土土器は他の井戸を圧倒する膨大なものであるため、井戸として限定して捉えられるか不安がある。大量の炭化物・土器は廃棄の所産と推測され、炭化物の含まれからは2・3層はあまり時間差がないと思われるので炭化物層、続いて土器廃棄が近接して行われたと思われる。さらに、土器の廃棄は土器の遺存状態からも単一の契機と思われる。

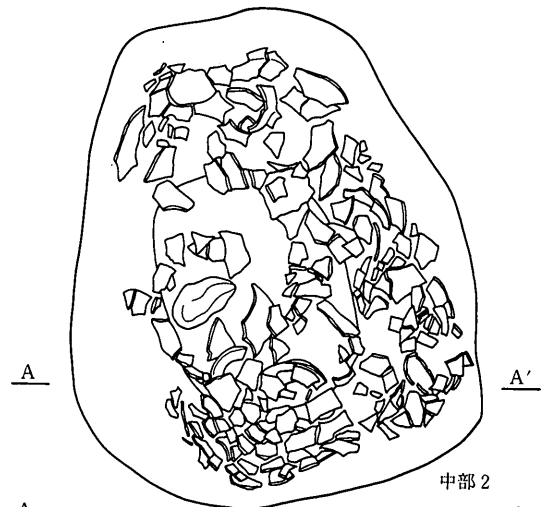
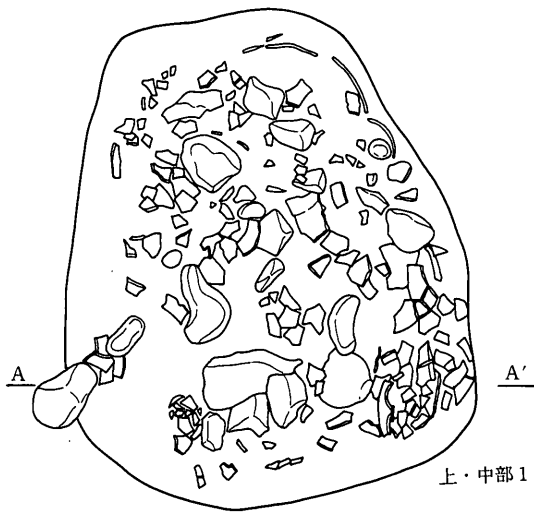
**S K 2297** ⑧-2区 VVN08・VN09 (第35図、P L 14)

S D 1016区画内の南東部東よりに位置し、南側の S K 2298と北側の S K 2299を切り、S K 2306に切られる。また、埋土上層で入子状に検出された S K 2296は埋土差が明瞭であったが、本土坑埋土の一部と思われる。平面形は長軸130cm、短軸112cmの円形に近い楕円形を呈し、底面は平坦で検出面から深さ118cmを測る。埋土はややよごれたにぶい黄褐色土の単層で、炭化物を多く含むが、炭化物層と捉えられるほどのものではない。出土遺物は15535gの土師器があり、埋土下部に大型破片、上部に人頭大の礫多数と破片が混在して出土した。土器の口縁部遺存度区分はCである。本土坑では明瞭の炭化物層は捉えられておらず、廃絶に際して炭化物の廃棄は行われていないと思われる。土器は下部と上部に分離して出土しており、上面出土土器は窪地として残存した部分に入ったか、埋め戻しの最後に入った土器と思われる。



- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土 (炭化物多含)
- 3 黒褐色土 (ほとんど炭化物)

0 (1:20) 50cm



IVB Q02

SK2207

上・中部1

中部2

A 356.60

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 (炭化物・焼土粒混)
- 3 黒褐色土 (ほとんど炭化物)

第34図 SK2185・2207

**S K 2313** ㊸-2区 VVR20 (第35図)

S D 1016区画内南東部の南東隅に位置し、S K 2345・2208を切る。平面形は長軸86cm、短軸63cmの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直で底面は平坦となり、検出面から底面までの深さは100cmである。埋土は4層に分層され、底面上には厚さ10cm前後の4層の灰褐色土層があり、その上にほとんどが炭化物で占められる3層の黒褐色土が厚くみられる。この上面の中位には炭化物や焼土粒を混入する2層の褐色土、最上層には1層の薄い暗褐色土があり、礫が若干含まれる。出土遺物は土師器2980g、ミニチュア土器1点がある。土師器は2層から1層にかけて出土し、比較的大型破片も見られたが、量的には少なく、口縁部遺存度区分も5/8以下のものしかみられないBである。したがって、井戸廃絶に際して炭化物が入れられたが、大量の土器の廃棄は伴わないと思われる。

**S K 2436** ㊸-1区 IVAO14・15 (第36図、P L 16)

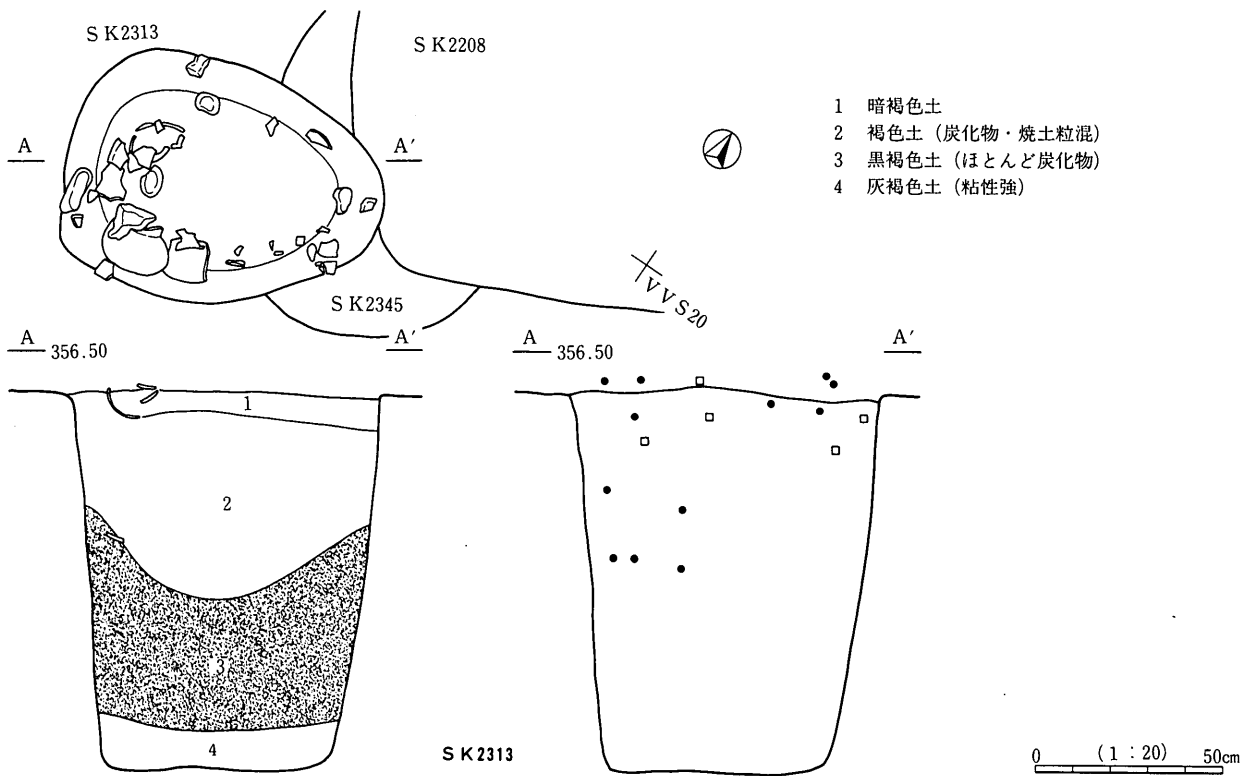
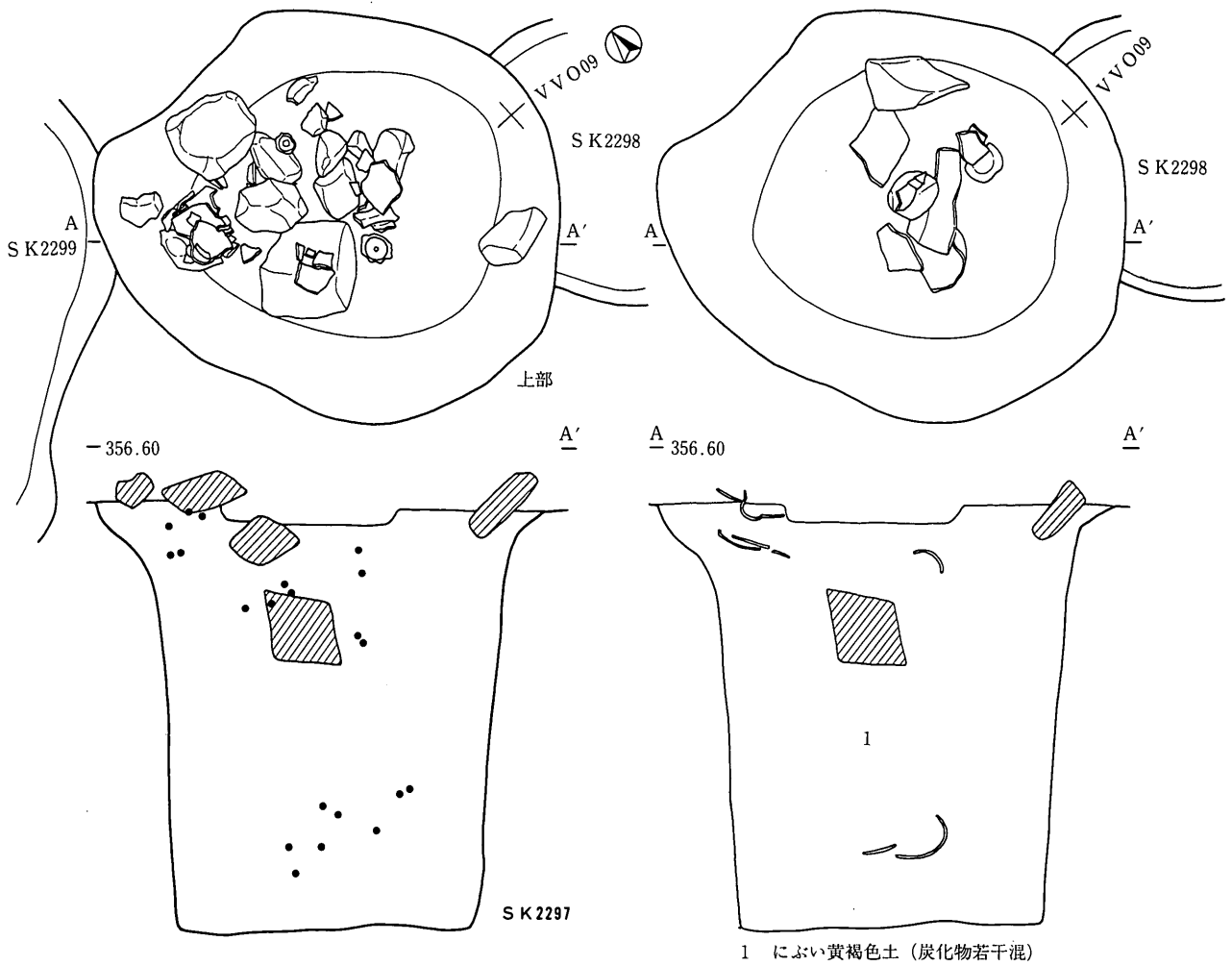
S D 1016区画内の南西部の南よりに位置し、第1面で見逃して第2面で検出した。平面形は124~140cmを測る隅丸方形を呈し、断面形は上部が広がる逆台形を呈する。第2検出面からの深さは118cmを測るが、本来は146cmと推測される。埋土は4層に分層され、最上面で検出された本土坑と入れ子になるS K 2437は本土坑埋土の一部を誤認したものと思われる。底面上には4層の灰黄褐色土、その上に3層の黒色土があり、中位以上の大部分を占める2層の暗褐色土、最上部にS K 2437とされた薄い1層の暗褐色土がみられる。出土遺物には土師器破片約4140gと梯子がある。土師器は出土状況の記録がないため、詳細は不明であるが、ほとんどが破片であり、口縁部遺存度区分もBである。梯子は東壁に立て掛けられた状態で出土し、下端は底面に接する。この梯子は部分的に炭化しており、梯子背後には炭化物が密集した状況で出土している。また、2層下部では人頭大の礫が一つ検出されている。本遺構は形状や梯子の出土から井戸と思われる。梯子は水を汲み出すために設置された使用時のものと思われるが、部分的に炭化しており、その炭化契機については不明である。

**S K 2442** ㊸-1区 IVBA09 (第36図)

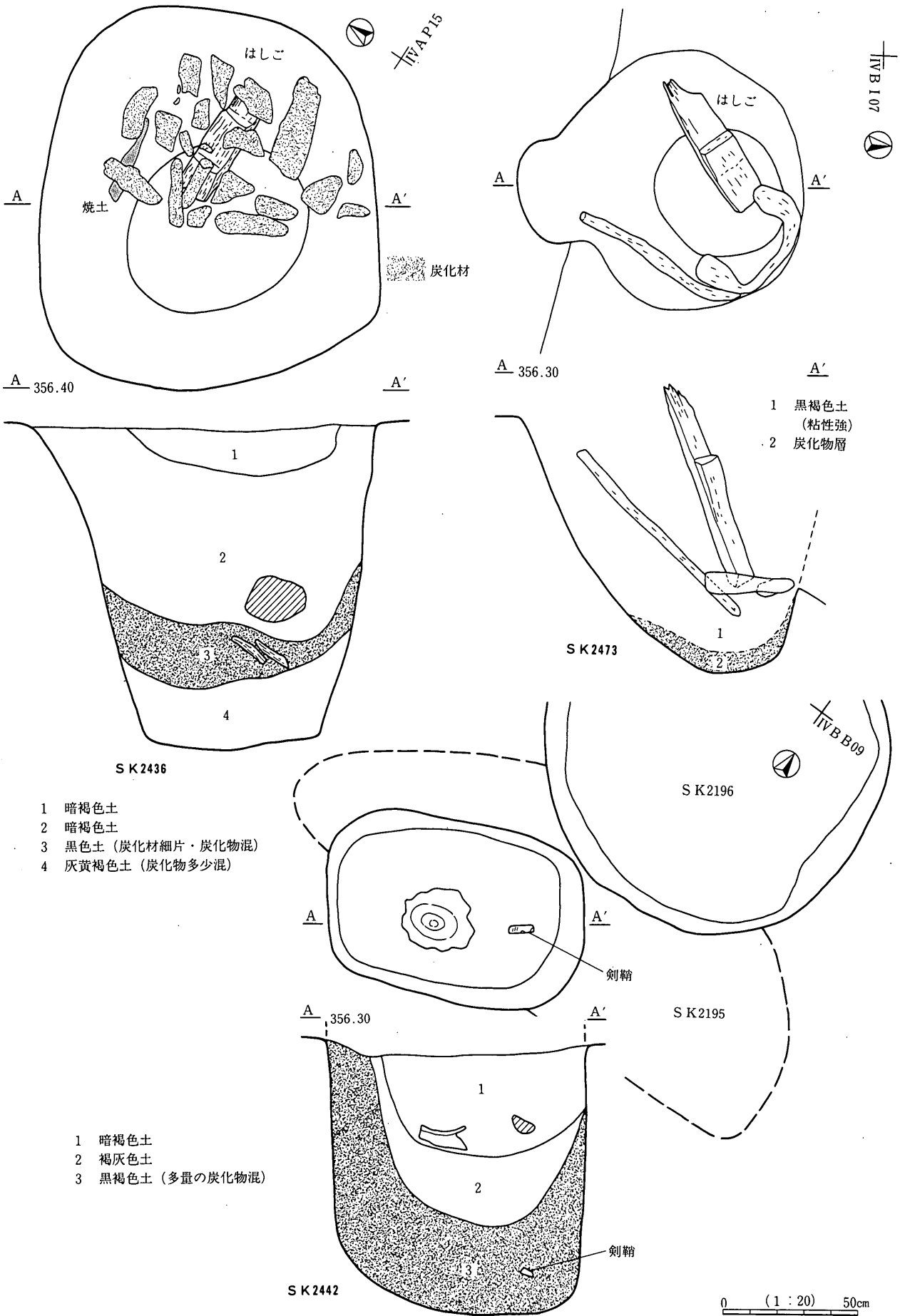
S D 1016区画内の南西部に位置する。本跡は第2面で検出されたが、第1面のS K 2369は同一遺構である。これは試掘トレンチでS K 2369は非常に深いと思われたので、後に断ち割り調査を行う予定にしたが、第2面で再検出された際に新たにS K 2442として別番号が振られてしまったものである。ここでは精査を実施した時点でのS K 2442を生かし、S K 2369を欠番にした。また、上面ではS K 2195と重複するが、S K 2195との関係が明らかでないため、別の土坑として扱うことにした。平面形は長軸96cm、短軸66cmの隅丸長方形を呈し、断面形は底面から壁の立ち上がりが緩やかなU字状となる。第2検出面から底面までの深さは100cmを測るが、第1面からは132cm前後と推測される。埋土は3層に分けられ、底面からみると底面・壁際に分布する材を含む炭化物層の黒褐色の3層、その上に炭化物が多く含む褐灰色の粘土質土の2層、最上部に弱粘性の暗褐色土の1層が入る。このなかで1層下部からは大型の土師器破片が得られており、また、3層からは剣の鞘が出土した。出土土師器はS K 2369とされた部分で345g、S K 2442とされた部分で2280gの合計2625gあるが、小破片が多く口縁部の遺存度区分は3/8以下の遺存で占められるAである。本跡は廃絶後に大量の炭化物のみの廃棄があったと思われる。なお、本土坑を通るS D 1016南辺に直交するライン上には、形態や炭化物層のみが顕著にみられた状況が類似するS K 2185が存在する。相互に関連する可能性がある。

**S K 2473** ㊸-1区 IVBI07 (第36図、P L 16)

S D 1016区画内南東部の南西よりに位置する。第1面の遺構ながら見逃して第2面で検出したが、重機による調査区北壁トレンチ掘削で北側半分を削平してしまった。そのため、平面形や規模の詳細は不明である。確認範囲では南北102cm、東西90cmの円形を呈し、断面形は底面が北側によった筒形となると思われ



第35図 S K 2297・2313



第36図 SK2436・2442・2473

る。第2検出面からの深さは92cmを測るが、第1面からの深さは140cm前後になる可能性がある。埋土は2層に分層され、底面上に層厚10cm前後の炭層があり、その上に粘性の強い黒褐色土がある。出土遺物は土師器の破片と梯子や材がある。土師器は5355gと比較的多く、口縁部遺存度区分もCであるが、調査の時間的な制約によって出土状況図が作成されずに取り上げられたために出土層位や出土状況は不明である。梯子は西壁に立て掛けられたように出土したが、下端面は底面に近いものの、直接達していない。そのほかに棒状の材や半円形の材が出土しているが、調査後から整理期間前に所在が不明となってしまった。半円形の材は井戸枠の残骸の可能性もある。

#### S K 2480 ⑧-1区 IVAP12・AQ12 (第37図)

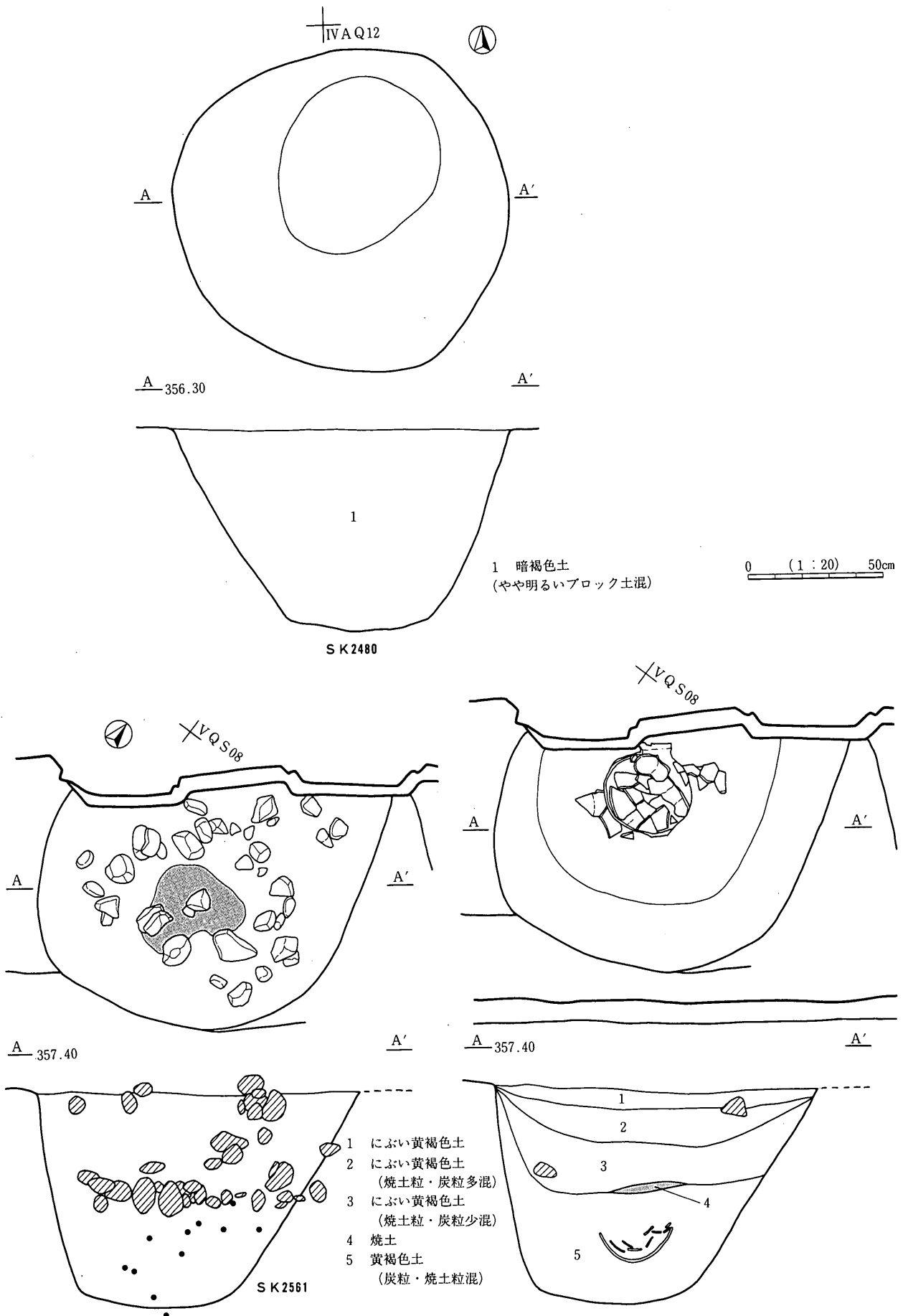
S D 1016区画内南東部の南よりに位置する。第2面で検出したが、第1面の遺構の見逃しと思われる。また、第1面では一部重複する位置にS K 2184が検出されており、検出時の所見に従えば、古墳時代のS K 2184に切られることになる。平面形は直径118～122cmの円形を呈し、断面形はU字状となる。第2検出面からの深さは73cmを測るが、第1検出面からは120cm前後と推定される。埋土は暗褐色土であるが、やや明るいブロック土が含まれる単層である。出土遺物は埋土に散在的に出土した土師器490gが見られるのみである。本土坑は形状から井戸跡と推測され、S K 2184に切られる可能性から古墳時代としたが、遺物の少なさや周辺の井戸跡では炭化物が伴う傾向が認められるなかで本例のみ炭化物が認められない異質な存在であることなどの問題が残る。

#### S K 2492 ⑧-1区 IVBD08・09 (第38図、P L 17)

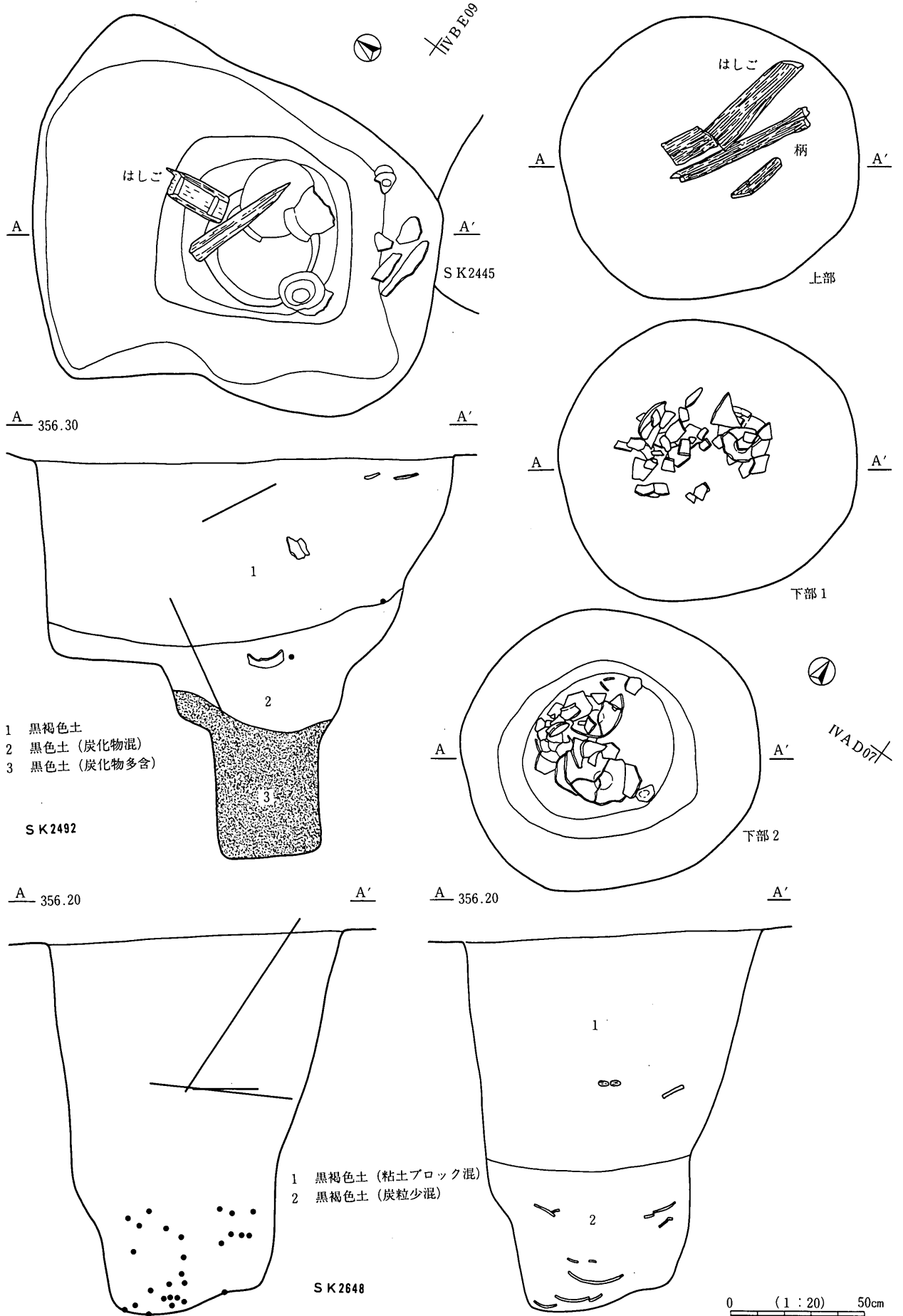
S D 1016区画内南西部に位置し、S K 2445を切る。第2面で検出したが、第1面の遺構の見逃しである。平面形は長軸156cm、短軸138cmのやや方形に近い楕円形を呈し、検出面から72cm(第1面から120cm前後)のところで一旦平坦面を作りだし、その南側よりが長軸70cm、短軸50cmほどの方形に落ち込む。さらにこの落ち込みは検出面から100cmほどのところでテラスを形成し、それ以下は直径40cmほどの円筒形に掘り込まれる。底面までの深さは第2面から148cmを測る。単純に計算すると第1面からは190cm前後であるが、この部分の第1面が高く設定されている可能性があるため、本来の深さは不明である。埋土は3層に分層され、底面の円筒形の落ち込み部分は炭化物を大量に含む粘性の強い黒色土で充填され、その上部は同じく炭化物を多く含む黒色土、最上部には黒褐色土が入る。出土遺物には29560gの土師器や梯子などの木質遺物がある。土師器は完形品や略完形品が1層の中位から2層にかけて見られているが、調査で記録されたのは極一部に過ぎず、そのほかの土師器の出土状態の詳細は不明である。口縁部遺存度区分はCである。梯子は底面の円筒形の落ち込み内で壁に立て掛けられたような状態で出土している。他には柱材と思われる材が出土している。本土坑は形状や梯子の出土からも井戸と思われ、廃絶に当たっては炭化物、続いて完形土器が入れられたと推測できる。

#### S K 2561 ⑤-2区 VQS08 (第37図)

S D 1016区画内の北東部に位置する。調査区壁際にかかって検出され、できるかぎり拡張したが、調査区周囲に打設された矢板の外へのびる部分は調査できなかった。平面の南北方向の規模は不明であるが、残存部は100cm、東西方向は116cmを測る。平面形はほぼ円形を呈すると思われる。断面形は底面から壁の立ち上がりが緩やかなU字状であり、検出面から底面の深さは80cmを測る。埋土は5層に分けられ、下から焼土・炭化物粒子を含む厚い黄褐色土の5層、その上部中央にある薄い焼土の4層、少量の炭化物・焼土を含むにぶい黄褐色土の3層、焼土・炭化物を多く含むにぶい黄褐色土の2層、焼土・炭化物を含まないにぶい黄褐色土の1層である。このなかで2層には土師器の小破片、5層には略完形の壺が出土し、3層の一部から1層までの間に多数の礫が出土した。出土した土師器は5620gある。底面近くでは略完形品も出土しているが、口縁部の残存状態が悪く土坑全体の口縁部遺存度区分はBである。本土坑は形態や深



第37図 SK 2480・2561



第38図 SK2492・2648



さから井戸跡と思われる、廃絶後に土器が1点入れられたと思われる。2層では焼土や炭化物が検出されているが、廃絶に際して炭化物を廃棄したものではなく、廃絶後のくぼ地にはいったものと思われる。

**S K 2648** ⑦-2区 IVAC07 (第38図、P L18)

S D1016区画内の南西部北寄りに位置する。平面形は直径106~120cmの円形を呈し、断面形はやや不整形ながら全体は円筒形となる。底面は西側が若干深くなり、検出面からの深さは140cmを測る。埋土は大きく2層に分けられ、下部には大型の炭化物を少量含む黒褐色土があり、上部の中位以上は粘土がブロック状に少量入る黒褐色土である。出土遺物は1層中に梯子、鋤柄や棒状の材が出土し、2層では土師器の破片が密集して出土している。土師器は14175g得られ、破片で出土したものの、接合するものが多く、口縁部遺存度区分はCとなった。本土坑では土器を中心に廃棄されたものと思われる。なお、梯子は埋土上部で裏面を上にして水平に近い状態で出土した。井戸廃絶後の廃棄と推測される。

**S K 2746** ⑦-2区 IVAD14・15 (第39図、P L19)

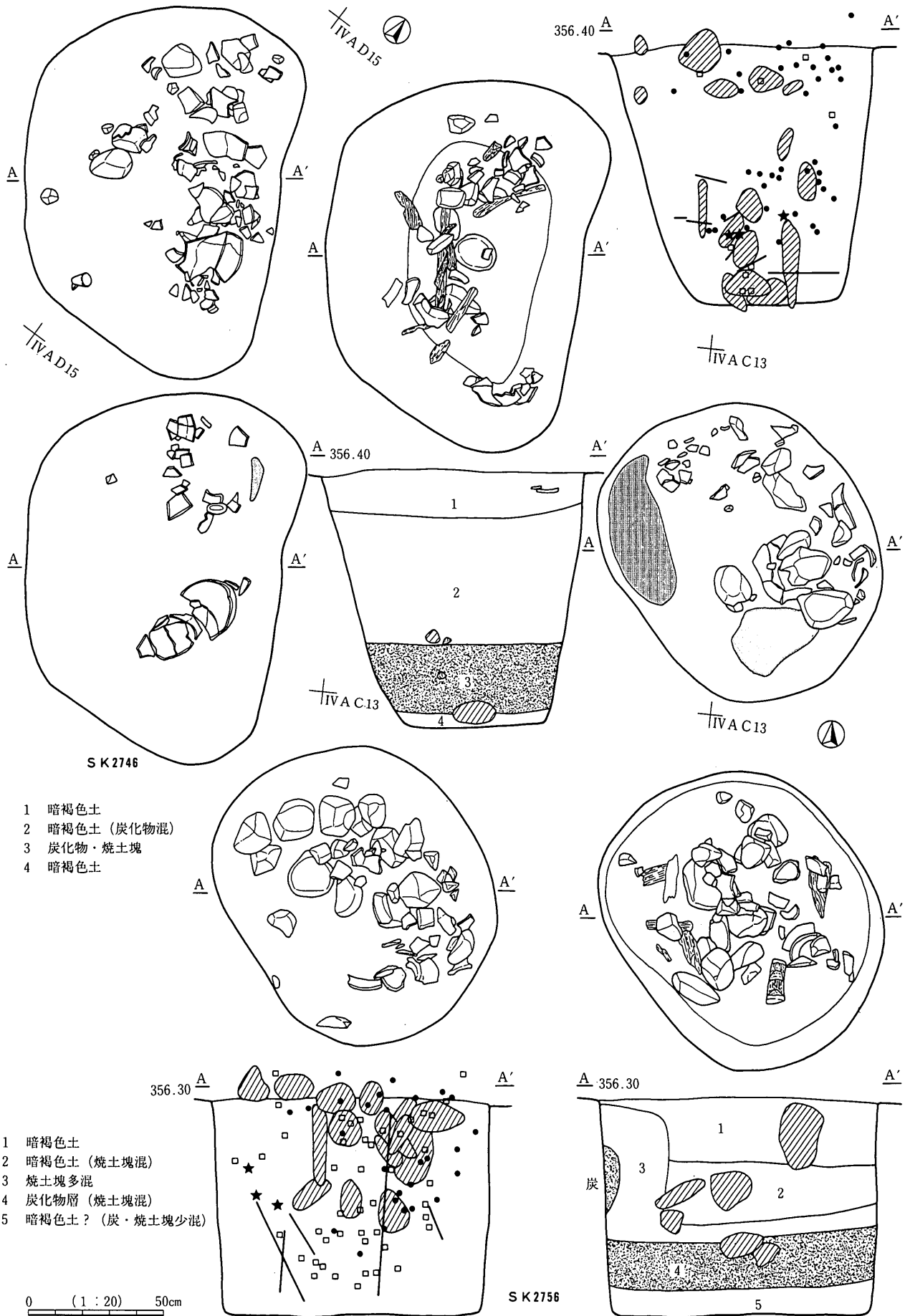
S D1016区画内の南西部の西よりに位置する。平面形は長軸132cm、短軸98cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形である。検出面から底面までの深さは95cmを測る。埋土は4層に分けられ、下から薄い粘土質土の4層、炭化物・焼土塊を多く含む黒色土?の3層、暗褐色土の2層、炭化物・焼土粒を2層よりも多く含む暗褐色土の1層である。このなかで、1~2層にかけては土師器の破片が多く出土し、特に1層に多い。また、材は3層、礫は2~3層に多い傾向がある。土師器は12185g採取され、破片が散在して出土したが、接合するものも多く、口縁部遺存度区分はCとなった。また、2層にあたる東壁は直接被熱受けて赤化していると認められ、本遺跡内で唯一土坑内で火が焚かれた可能性が推測できる例である。廃絶後に土坑内(周辺を含む?)で火が焚かれて同時に土器が廃棄され、一定の埋没後に1層の土器が入ったと思われる。土器以外の遺物には支脚破片、種子(モミ少量、モモ核8点、オニグルミ1点、メロン類1点)、焼けた獣骨細片(種・部位不明)が若干、骨鏃1点がある。

**S K 2756** ⑦-2区 IVAB13・AC13 (第39図、P L20)

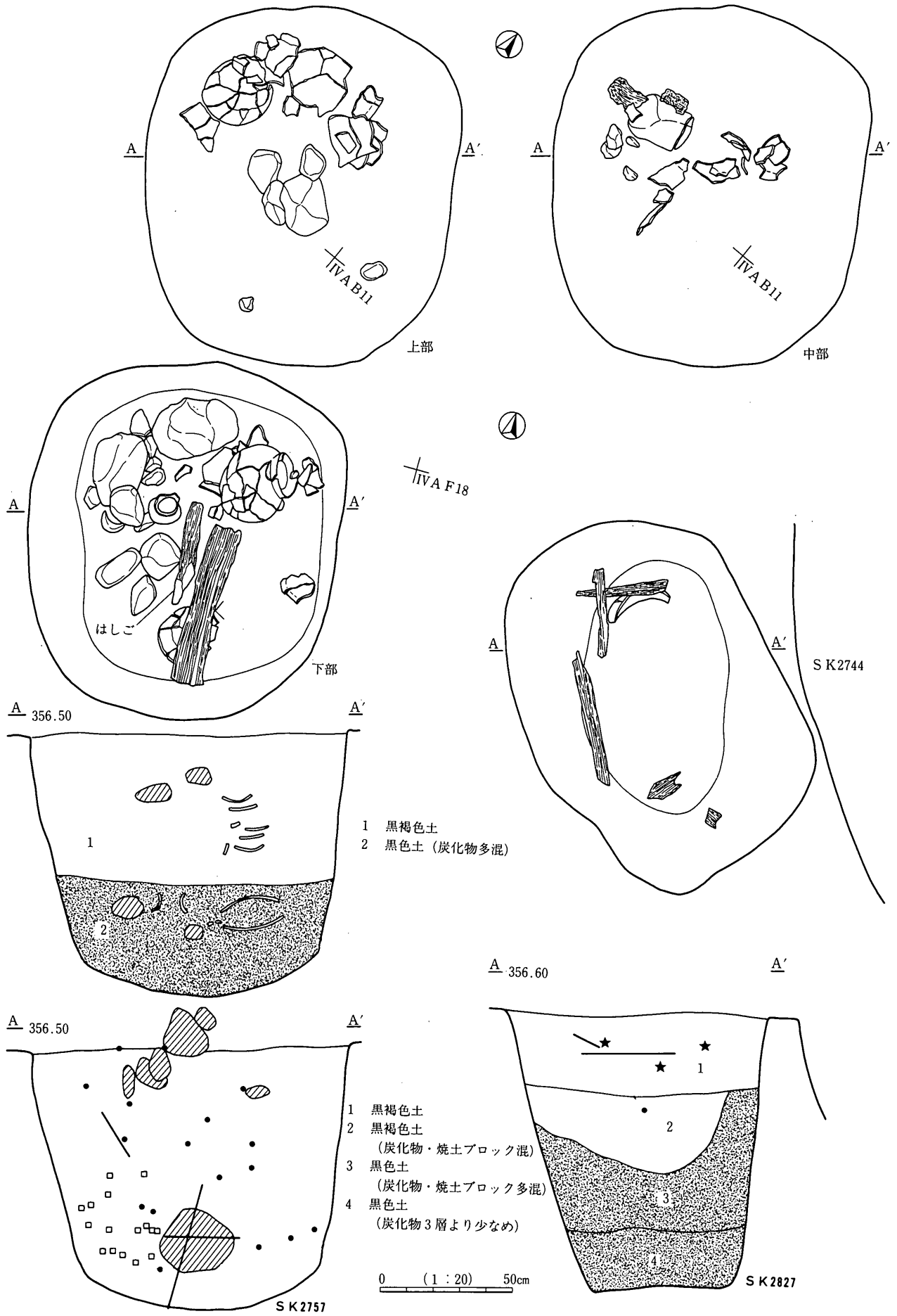
S D1016区画内の南西部、西よりに位置する。平面形は長軸112cm、短軸92cmのやや円形に近い楕円形を呈し、断面形は逆台形となる。検出面から底面までの深さは80cmを測る。埋土は5層に分けられ、下から炭化物・焼土ブロック少量混入する粘質土の5層、炭化物層の4層、壁際から4層上面にかけて堆積する焼土ブロックからなる3層、焼土ブロックを少量含む暗褐色土の2層、暗褐色土の1層がある。これらの埋土からは土師器の破片11440gと礫多数、材や梯子、焼けた獣骨細片(種・部位不明)が若干、骨鏃17点(破片)などが出土した。礫や土師器は4層の上部以上で検出されており、礫は全部で63個確認できている。梯子は南壁に立て掛けられて下端部は底面に達している。埋土中に大量の焼土や炭化物の出土が見られながらも梯子自体は炭化していない。他には垂木材片がある。廃絶の経過は炭化物に前後して土器や礫が廃棄されたと思われる、礫の含まれ方や下部に炭化物・上部に焼土ブロックが含まれる点から埋土間には時間差があまりなく、埋め戻されている可能性が高い。

**S K 2757** ⑦-2区 IVAA10・11、AB10・11 (第40図、P L20)

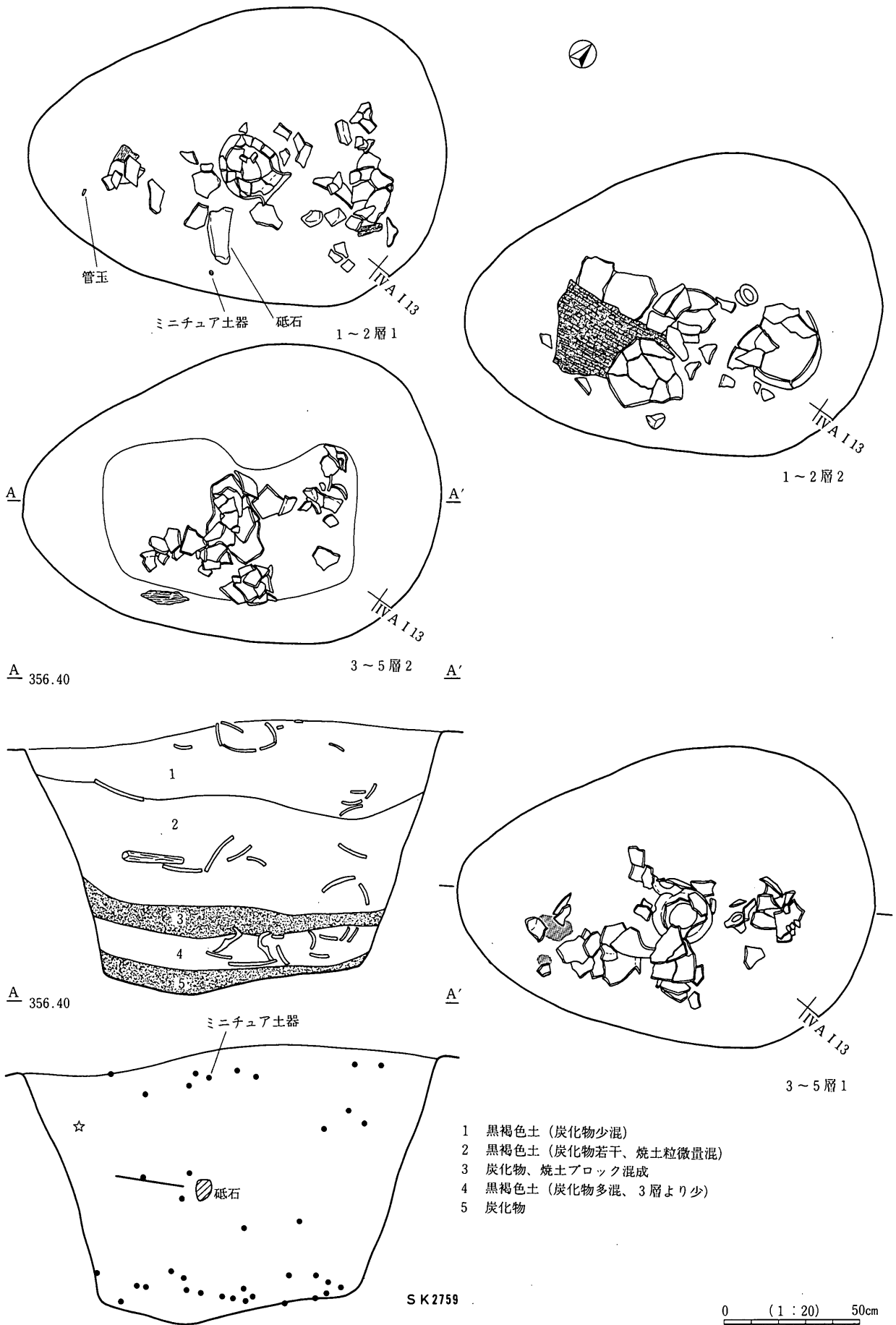
S D1016区画内の南西部の西端に位置する。平面形は長軸133cm、短軸116cmの円形に近い楕円形を呈し、断面形は底面が丸味を帯びる逆台形となる。検出面から底面までの深さは98cmを測る。埋土は上下2層にわけられ、底面直上には炭化物を大量に含む黒色土、その上には炭化物粒を少量含む黒褐色土がある。出土遺物には大量の土師器14650gや梯子、種子(モミと種不明若干)、焼けた獣骨細片(種・部位詳細不明、一部ニホンジカ末節骨片含む)、骨鏃3点、勾玉1点、凝灰岩製砥石1点がある。土師器は1~2層にわたって出土しているが、全体的に1層上部に大型破片、2層に略完形土器と礫がみられる傾向がある。これらの土器は口縁部遺存状態による区分はCである。梯子は下端が底面に達しているものの、土坑中央で斜め



第39図 S K2746・2756



第40図 SK2757・2827



第41図 S K 2759

に出土しているので使用状態のままとは考えにくい。本土坑は形態や梯子の出土からは井戸の可能性があり、廃絶以後に炭化物と前後して礫・略完形の廃棄（埋納）があったとみられる。続いて破片の廃棄が行われた可能性もあるが、散在的で一定の層位に集中せず、埋め戻しの際に入った可能性がある。

#### S K 2759 ⑦-2区 IVAH12・13（第41図、P L 21）

S D 1016区画内の南西部に位置する。平面形は長軸156cm、短軸110cmの卵型で、断面形は底面にやや凹凸がある逆台形となる。検出面から底面までの深さは94cmを測る。埋土は5層にわけられ、下から炭化物層の5層、焼土・炭化物を含む黒褐色の4層、4層よりも焼土・炭化物が多く含まれる黒褐色土の3層、黒褐色土の2層、2層より若干色調が明るい黒褐色土の1層である。出土遺物には土師器34360gとミニチュア土器1点、砥石1点、材、種子（モミ若干・メロン類1点）、焼けた獣骨細片（概略種・部位不明、一部ニホジカ角片含む）若干、骨鏃8点（破片）、白玉1点、管玉2点、凝灰岩製砥石1点がある。なお、土器の口縁部遺存度区分はCである。これらの遺物は各層で散在的に出土したが、底面の炭化物層に前後する周辺とその上部、最上部の3つの層位的な集中があるようにみられる。ただし、炭化物層前後とその上部のものは近接しており、あまり時間差はないかもしれない。廃絶以後の経過は炭化物・焼土の廃棄と共に土器破片の廃棄があり、一定の埋没の後に最上部の土器が入ったと思われる。

#### S K 2827 ⑦-2区 IVAF18（第40図、P L 21）

S D 1016区画内の南西部の南西隅にS K 2744と並列している。平面形は長軸136cm、短軸96cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは102cmを測る。埋土は4層にわけられ、下から焼土塊を含み、3層よりも炭化物が少ない黒褐色土？の4層、炭化物・焼土塊を多量に含む黒褐色土？の3層、炭化物・焼土ブロックを含む2層、炭化物粒子の少ない黒褐色土の1層である。このうち3・4層は炭化物の含まれる量で分層されている。出土遺物には材と土師器破片2070g、種子（モミ若干、モモ核9点、メロン類16点、サンショウ30点、ブドウ16点、クマズミノキ1点、ハウノキ1点など）、骨鏃17点（破片）、焼・生獣骨細片（大半は種・部位不明、一部焼けていないニホジカ歯片を含む）、小型の勾玉2点・算盤玉1点・白玉21点（他に調査時に出土土坑不明とされたが、本土坑に帰属する可能性のある白玉7点がある。）がある。土器の口縁部遺存度区分はBである。土器の出土状態の記録はないが、所見では4層から主体的に出土し、材は3層から出土したとされる。なお、材は加工されたものではなく割り材と思われる。本跡は井戸と推測され、廃絶直後に大量の炭化物が投棄されたと思われる。

### (3) 柱穴跡（掘立柱建物跡、柵列跡）

調査時に認定された古墳時代の柱穴跡、あるいは掘立柱建物跡・柵列跡はない。これは調査時には土坑のほとんどが祭祀に伴う廃棄土坑であろうと推測されたことや、調査地区が細分化された上に複数担当者が調査にあたったため土坑配列の検討が不十分だったことによる。しかも、古墳時代の所産とする判断根拠は出土土器量や炭化物層の有無に主眼が置かれたために、出土土器も少なく炭化物も顕著に認められない柱穴跡は時期不明遺構として扱われたものも多い。一方でS D 1016から建築材と思われる大量の板材が出土し、手工業関連遺物から作業場の存在が推測されるなど、竪穴住居跡は皆無ながら、建物跡が存在した可能性は問題とされていた。この柱穴跡の存否の問題は調査時には十分な検討ができないまま、整理段階へ持ち越されることになった。

整理での柱穴跡（建物跡・柵列跡）の検討にあたり、柱穴跡の時期や柱穴跡を識別する基準をどのように設定するかが問題となった。特に時期については同一面で弥生時代から近世までの遺構を検出したため、出土遺物が少ない柱穴跡は時期を決めかねるものが多い問題があった。整理ではこれらの問題を踏まえて、柱穴跡（建物跡・柵列跡）を検討する方法として以下のような手順を考えた。まず、基本的に柱穴ならば

複数が組み合って建物・柵列跡を構成すると考え、土坑の配列から構築物を構成する可能性がある柱穴列を抽出してみることにした。さらに、この微高地では時期ごとに溝の走行方向が異なることが知られたため、上記で抽出された柱列の軸方向で古墳時代の溝跡と類似した方向になるものは、出土遺物が少なくとも当該期の所産と推測できると考えた。なお、遺構の軸方向は古墳時代ならば、長楕円形土坑の長軸方向や直線的に走るS D1016西・南辺の方向からしてN-30~60°-Wかその直交方向と推測され、古代の条里施行直後ではN-2~5°-Wかその直交方向、中世の館跡の中心屋敷内なら内堀S D2001のN-10°-Wかその直交方向、中世館外掘周辺では中心部と同じ方向かS D1016跡の窪地地形に沿っている外堀に一致するN-30~40°(~60°)-Wかその直交方向と推測される。このなかで中世の外堀区画内の西側は古墳時代のS D1016跡の窪地地形に中世の外堀が一致して配されているため、結果的に古墳時代の柱列はうまく抽出できていない。

上記は柱列を構成する場合であるが、それ以外に柱列跡を構成すると認められないものの、古墳時代の柱穴跡の可能性のある土坑がある。これらは建物・柵列跡と認定される柱穴跡と類似した形状・規模の土坑、あるいは柱痕が確認された土坑で、単独でも時期を特定できるものである。これらの土坑は調査時に周囲の柱穴跡の有無の確認が不十分であることを考えると、柱穴跡ではないと言い切れないところがある。そこで、上記の何らかの構築物を構成するとみられた柱穴跡から一般的な傾向を導きだし、それに一致する土坑は柱穴跡の可能性のある土坑として扱うことにした。したがって、ここでは柵列・建物跡を構成するものと、建物跡や柵列跡と断定できないが、その柱穴跡の傾向に一致する柱穴跡の可能性のある土坑の2種類を扱う。なお、上記の方法では古墳時代と特定できず、さらに建物跡や柵列跡と認定できない場合の柱穴跡は時期不明遺構として扱わざるをえなかった。

まず、土坑の配列検討であるが、古墳時代の溝と同方向に土坑が一定間隔で直線的、あるいは方形に配列すると認められた土坑群には以下のようなものがある。ここでは帰属する土坑番号を列挙するにとどめ、各土坑群の様相の詳細は後述する。なお、下記の群は直線的に配列しないが、周辺の柱穴分布状況との比較のなかで近接して位置していたり、形態的に類似しているために関連すると思われる土坑も( )に加えた。このような扱いは混乱を招きやすいが、調査段階での柱配列の検討が不十分なことや、整理段階での検討も確定的ではないことによりこのような扱いとした。

・S D1016区画内北東部：

S T2009-S K2068・2160・2161・2162・2166・2168・2567・2593 (その他の土坑2154)

S A2007・2008-S K2606・2452・2612、2591・2609・2615

(S T2009、S A2007・2008に関連すると思われる土坑-S K2066・2067・2076・2077・2078・2127・2128・2129・2151・2164・2171・2173・2490)

・S D1016区画内北東部中央より：

S T2010-S K2084・2122・2146・2147

S T2011-S K2385・2393・2394・2395・(2397・2356・2976・2978?)

S T2012-S K2380・2381・2417・2977・2979

S T2013-S K2229・2230・2238・2239・2261・2262・2266・(2231)

S A2009-S K2137・2134・2136・2456・2455・(2135・2133・2457・2454・2461)

S A2010-S K2141・2139・2124・2125・(2143・2138・2099)

S A2011-S K2620・2234・2458・(2619・2059)

S A2013-S K2163・2265・2206・2131・2223・2222・(2224・2130)

・S D1016区画内南西部

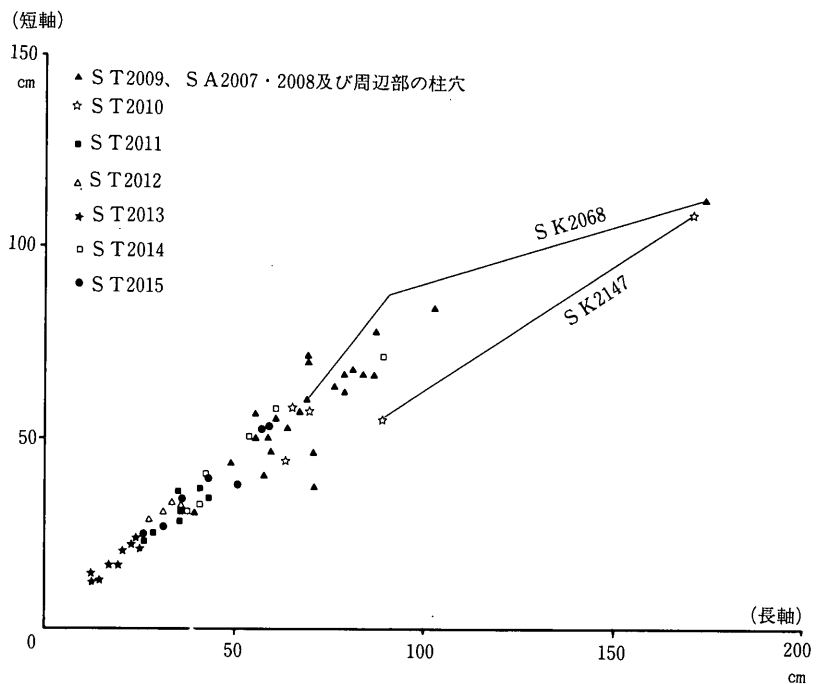
S T 2014－S K 2318・2404・2425・2426・(2324・2424・2494)

S T 2015－S K 2107・2240・2241・2364・2487・(2190・2430・2484)

・S D 1016区画内南西部中央より

S A 2012－S K 2841・2842・2837・2938・(2836・2839・2835)

上に挙げたなかで建物跡の可能性が想定されたものでも、すべての柱穴が配置想定位置に検出されているわけではなく、1辺、もしくは部分的な配列と認められたものがほとんどである。しかも、方形配列としても、柱間が開き過ぎていたり、個々の柱穴跡が浅過ぎて問題が残るものがある。次にはこれらの個別の土坑を比較して柱穴跡の傾向を導き出してみたい。まず、平面形からみると、円形、もしくは長軸があまり大きくならない楕円形を呈するものが一般的で、ごく一部に不整形なものが含まれる。特にS K 2068や2147は上



第42図 S T・S A柱穴規模グラフ

部が不整形で規模も大きい。一旦底面を形成してそれぞれ70×60cm、90×55cmの円筒形に2段に掘り込まれる。柱穴跡本体は円筒形の掘り込みが該当しよう。次に規模を比較してみると最も小さな土坑はS K 2261の14×12cmである。最大はS K 2068の175×112cm、S K 2147の172×108cmであるが、両者とも柱穴跡本体の円筒形掘り込み部分で直径90cm以内である。また、3番目に大きな104×84cmのS K 2067は配置上建物跡に関連する可能性があるとしたものの、厳密には直線的に配列しないので柱穴跡と断定するには不安を残す。それ以外の平面規模はほぼ直径80～90cm以内に納まるとみられる。なお、上記の建物・柵列跡ごとに柱穴跡の規模を比較してみると一定の傾向が窺える。S T 2009、S A 2007・2008と周辺の柱穴群の柱穴跡はいずれも規模が大きい傾向があり、その多くは直径50～90cmである。また、直径80～90cm前後のものと同径60～70cm前後のものに細分できる可能性もある。これらと規模的に類似するのはS T 2010、S T 2014の柱穴跡であるが、いずれも直径60cm前後かそれより小さいものが多い。これに対してS T 2011、S T 2012、S T 2015の柱穴跡グループは直径30～40cm内外に集中する。そして、これよりも小さく20cm前後に集中するのがS T 2013の柱穴跡グループである。つまり、直径80～90cm前後のものはほぼS T 2009、S A 2007・2008と周辺の柱穴群に見られる特殊な部類であり、一般的に平面規模が直径60～70cm前後以内のものは柱穴跡の可能性が高いと思われる。なお、規模の比較では柱痕が検出されていないものが多いことや、大量の建築材と思われる材の廃棄が認められることから建物の破壊－柱抜き取り作業が行われている可能性が高く、調査で知られた柱穴跡の規模は構築時のものではないかもしれない。したがって、柱穴の大きさ＝柱材の大きさ＝建物規模の違いと単純に図式化することはできないかもしれないが、認定基準のひとつとして設定できるとと思われる。

次に深さを比較してみる。柱穴跡の一部は見逃して第2面で検出されたため、本来の深さよりも浅いものが含まれるが、10cm前後～80cmまでとかなり幅が見られる。ただし、検出面からの深さ／土坑数グラフ

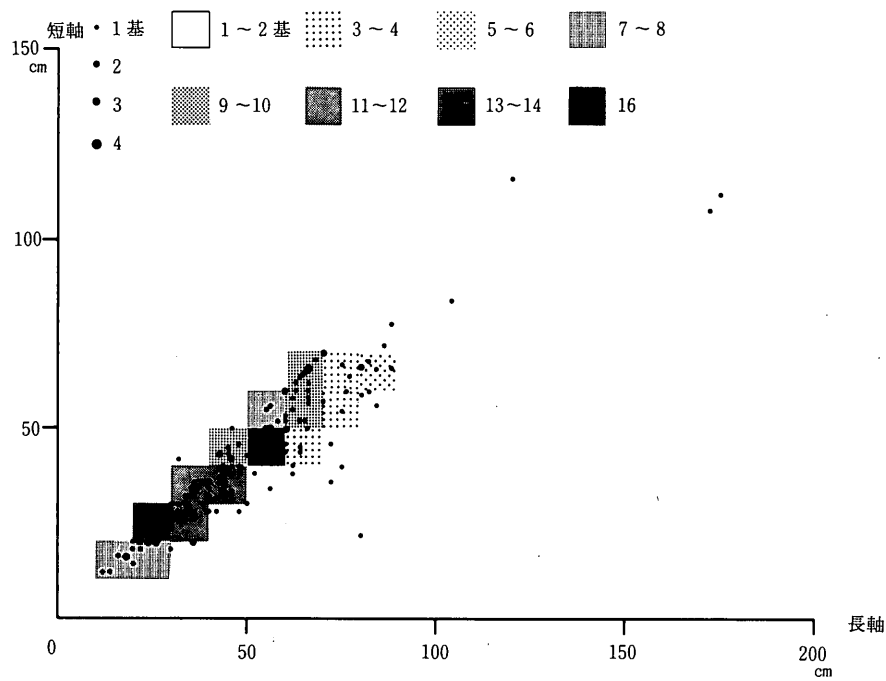
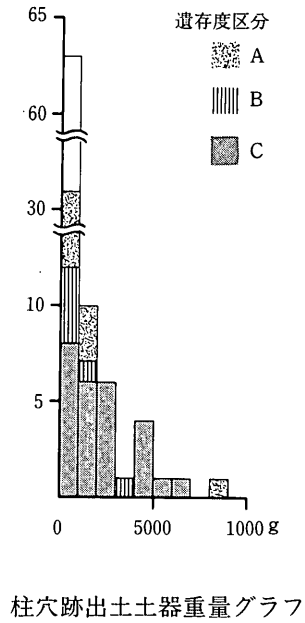
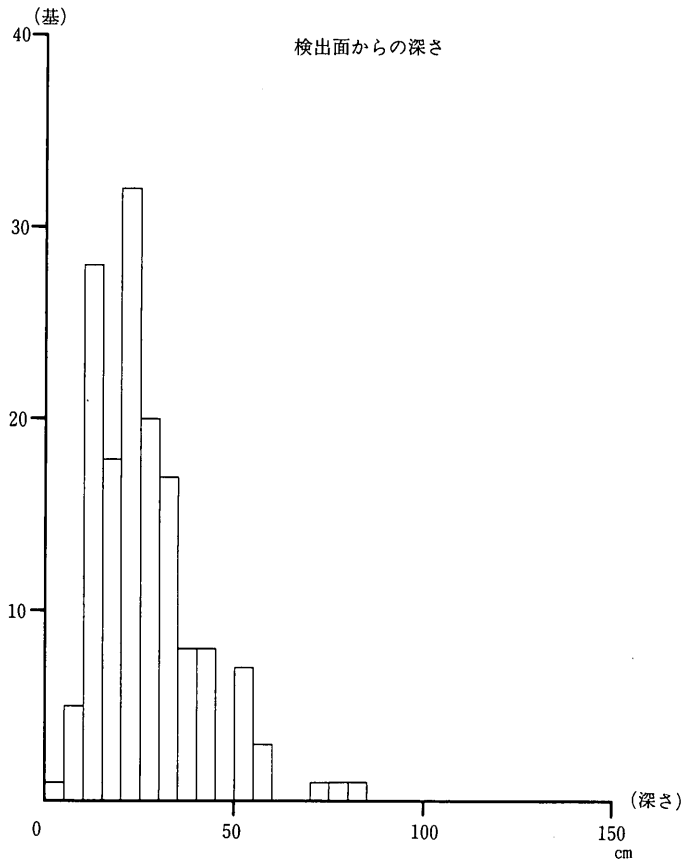
のピークは20～30cmのところであり、ここより深さを減一増させるにしたがって土坑数を減じている。このなかで深さ60cm以上の柱穴跡は非常に稀であり、グラフ上でも単独に近い分布を示し、特殊な部類と考えられる。なお、上記の建物・柵列跡ごとに深さを比較してみるとS T 2009、S A 2007・2008と周辺の柱跡群では10～80cmまでがあり、20cm後半にピークがあって50cm前後以上は分布が稀となる。他のグループでは深さがほぼ40cm以内に納まる。この検出面からの深さを平面規模と対比してみると平面規模が小さいほど柱穴跡の深さも浅くなる傾向が認められる。

以上の形態的な検討から、本遺跡では直径60～70cm前後以内で掘削深度が40cm以内の土坑が、ほぼ柱穴跡の可能性のある土坑と思われる。もちろん、ここで設定した基準はあくまでも目安でしかなく、しかも古墳時代の柱穴跡を網羅的に抽出する方法とはなり得ないものである。また、上記の建物跡・柵列跡の柱穴跡と認定した土坑でもこの基準の範囲から逸脱する例外もあるが、建物跡・柵列跡を構成しない柱穴跡を追認する作業では混乱がおきるので、柱穴規模が大きいS T 2009、S A 2007・2008周辺以外では基本的に除外して考えた。このような基準で想定される構造物と認定できなかったものの、柱穴跡の可能性のある土坑は、上記に挙げたS T 2009、S A 2007・2008周辺の柱穴跡の可能性のある土坑に加えて、S K 1021・1042・1060・1067・2010・2013・2020・2013・2076・2085・2105・2169・2178・2228・2246・2285・2348・2351・2367・2376・2377・2389・2414・2421・2429・2448・2478・2498・2584・2622・2749・2750・2753・2755・2828・2833・2863・2870が追認された。これらは単独で存在したり、内部から大量の土器が出土するなど、単純に柱穴跡とは断定できないものもあるが、繰り返し述べるようにここでは可能性のある遺構として扱うものである。

これ以外では古墳時代と断定できないが、その可能性が残るものがいくつかあるので参考に列挙しておく。S T 2015東側隣接地に集合して検出されているS K 2110～2116・2485はS T 2015に関連する可能性があり、⑧-1区南東隅のS K 2469～2472は配列のみからは中世・古墳時代と判断ができなかったものである。さらに、S D 2001南辺内側脇にあるS K 2371・2372・2379・2981も配列は確定できなかったが、古墳時代の軸方向に近い配列ともみられる。この他にはS T 2011の南側に位置するS K 2253・2354・2384は距離が離れ過ぎているため断定はできなかったが、直線的に結ぶと古墳時代のものに近い。また、⑧-2区のS D 2001南に散在する柱穴跡のS K 2202・2204・2388・2499・2501・2502・2982～2999は埋土からすると古墳時代の所産の可能性が高いが、断定はできなかった。これ以外に古墳時代と思われ、しかも平面規模は柱穴跡の基準に一致するが、浅過ぎるものや、周囲には類似した土坑が存在する可能性がほとんど想定できない場合（例えばS K 2868）は柱穴跡とはしなかった。

次には柱穴跡の可能性のある土坑の出土遺物や埋土の傾向について触れておきたい。まず、遺物は土器を中心として最大出土量はS K 2868の8265g、続いてS K 2147—6450g、S K 2067—5810g、S K 2171—4420g、S K 2068—4300g、S K 2478—4295g、S K 2129—4025g、S K 2066—3180gとなる。2000g代はS K 1055・2160・2162・2362の4基、1000g代がS K 2031・2078・2146・2166・2178・2228・2490・2615・2828の9基でそれ以外は1000g以下である。したがって、ほとんどの柱穴跡と推測される土坑からは小破片が僅か、あるいはほとんど出土していない。なお、上述した2000g以上の土器を出土した土坑のなかでS K 2068・2147は上部から出土したものがほとんどで、柱穴の廃絶後に入った土器が主体とみられる。また、1000g以上の土器を出土した土坑22基のなかでS K 2066・2067・2068・2078・2129・2147・2160・2162・2166・2171・2490・2615の12基はS T 2009、S A 2007・2008周辺の柱跡群に属している。このことは後述する炭化物や土器出土の出土状態からも同様の傾向が認められ、場所的な特徴と思われた。次に土坑ごとの土器口縁部の遺存状態をみると、口縁部が6/8以上の遺存を示す土器が含まれる遺存度区分CはS K 1055・1067・2067・2068・2078・2085・2129・2147・2160・2162・2166・2168・2171・2228・





第43図 柱穴跡の規模・深度・土器重量グラフ

2246・2363・2429・2478・2490・2615・2753の21基、BはS K2066・2178・2606・2084・2324・2173の6基で他はAや口縁部破片が見られないもの、あるいは出土土器がないものである。このうち、1000g以上の土器を出土したなかでCは16基、1000g以下で8基ある。さらにCとされたなかで完形の甕あるいは壺がほぼ単一個体で出土した例がいくつか特長的に認められ、S K2078・2129・2160?・2166・2429などがその例として挙げられる。なお、同様の例ながら周囲に柱穴状の土坑がまったくないために柱穴跡の可能性のある土坑から除外したS K2868でも略完形土器出土が見られている。また、上記のCの遺存状態を示す土坑のなかでS T2009、S A2007・2008と周辺の柱跡群に帰属するものは2067・2068・2078・2129・2160・2162・2166・2168・2171・2490・2615の11基である。以上のように土器を大量に出土する例は少ないながらも、完形土器が出土する例がある。しかもS T2009、S A2007・2008と周辺の柱跡群の柱穴跡に多い点は注意される。この略完形の甕・壺類が1個体出土する特徴的な出土状態がいくつか確認できたことは興味深く、何らかの類似した行為の存在も推測される。しかし、S T2009周囲ではその他の土坑で扱ったS K2167・2608も完形の甕1個体を出土しており、完形・略完形土器1個体が出土する例は場所的な関係によるかもしれない。このことは井戸跡でも類似例があり、柱穴跡固有の様相と断ずることが難しいと思われることからいえる。

次には土器の出土状態と遺跡内で特長的に認められている炭化物の出土状態の関連についてみる。ここでは多様な出土状況・出土状態を示すものを感覚的ながら区分して記号で表現し、その堆積順序で比較してみることにした。土器の出土状態については小片が散在的なものをP1、大型破片・破片あるいは完形土器を含んで比較的まとまって出土したものをP2、完形土器が出土する例をP3、炭化物については薄い炭層が見られるものをC1、大量の炭化物を含むものをC2、大量ではないが炭化物が含まれる場合はC3、灰層はAS、焼土はF、焼土ブロックはFB、炭化物も土器も顕著でない場合は○とした。さらに、堆積順序については同時の場合は＝、前後関係とみられる場合は下(古)>上(新)、同時か若干前後すると思われたものや、判断が難しいものは≥で表現した。この記号化して検討する方法はあくまでも感覚的にみている限界があり、しかも複数調査担当者の記録を整理段階で間接的に分類したものである。しかも、出土状態は図面記録を重視したことにより、土器の出土状態の記録がないものについては詳細を明らかにできていない限界もある。そのため、かならずしも厳密なものとして扱うことはできないが、膨大な情報を整理して相互に比較しやすくするためにこのような方法をとることにした。この比較によって以下のような種類が認められた。

#### ①炭化物と土器が顕著な土坑

土器が顕著(P2・P3)、炭化物が顕著(C2)の組み合わせが見られるものである。

##### a 底面上

C2 = P2 > ○、C2 (FB) = P2 (S K1067・2013・2160・2164) ○ > C2 ≥ P3 > ○ (S K2129)  
P2 > C2 > ○ S (S K2490)

##### b 埋土中

○ > C2 ≥ P2 (S K2067)

(C2 土器不明 (S K2863))

#### ②炭化物が顕著な土坑

炭化物が顕著(C2)のみの場合である。

##### a 底面上

C2 (FB) (S K2077・2364)

C2 = P1 (S K2425・2494)

((AS > ○ > C3 ? = P1 (S K2066))

##### b 埋土中

P1 > C2 = P1 (S K2076)

○ > C2 ? = P1 (S K2128・2377・2828)

○ > (柱痕) C2 = P1 (S K2031)

○ > C2 = P1 (S K2146)

((○&gt;C 3 (SK2122))

## ③土器のみが顕著な場合

土器が顕著 (P 2・P 3) が見られるものである。

## a 底面上

P 3 (SK2166・2429)

P 2 ≥ ○、P 2 (SK2389・2162・2228)

## b 埋土中

P 1 &gt; ○ &gt; P 2 (SK2068)

○ &gt; P 2 (SK2151・2171・2478・2615・2078)

○ ≥ P 2 ≥ ○ (SK2085)

○ ≥ P 2 (P 3 ?) (SK2246)

## ④土器と炭化物が間層をはさむ土坑

C 2 ≥ P 1 &gt; P 2 (SK2147)

## ⑥薄い炭化物層が見られる土坑

P 1 &gt; C 1 &gt; ○、P 1 &gt; C 1 (SK1055・2430・2842) ○ &gt; C 1 &gt; ○、○ &gt; C 1 (SK1060・2010)

C 1 &gt; ○ (SK2324)

○ &gt; C 1 ? &gt; P 1 (SK2414)

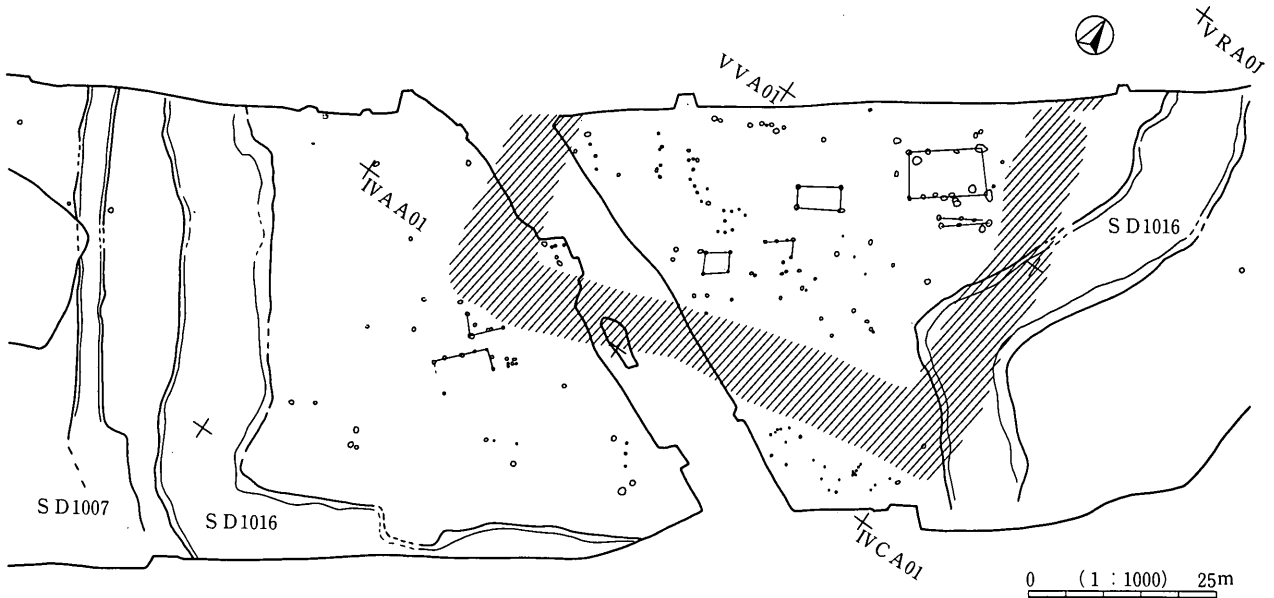
C 1 &gt; ○ &gt; C 1 (SK1021)

## ⑦土器小破片が散在的にみられる土坑

P 1、○ &gt; P 1、○ &gt; P 1 S、○ ≥ P 1 (多数)

上記に挙げたものは厳密な区分ではないが、柱穴跡では炭化物や土器出土があまり顕著でない場合が多い。薄い炭化物層が認められる場合も混入の可能性が高いと考え、さらにその数は増えると思われる。しかし、ごく一部ではあっても炭化物・土器が顕著な例、炭化物が顕著な例、土器が顕著な例など多様なものが存在し、これが柱穴跡と廃棄土坑の識別を困難にしていた理由のひとつでもあった。埋土中ならば混入や柱抜き取り後の所産と考えられなくもないが、埋土下部や単層で認められた場合は柱穴跡であるか疑問も残らないわけでもない。先に挙げた例のなかで土器と炭化物が顕著な例を取り上げてみると、① a 6基、① b 2基、② a 5基、② b 7基、③ a 5基、③ b 8基、④ 1基であるが、④のSK2147は底面上の状態は② a と同じと考えられる。これらのなかで建物跡を構成すると認定された柱穴跡は① a 1基、② a 3基、② b 1基、③ a 2基、③ b 2基、④ 1基であり、それ以外は建物跡や柵列跡が組めなかったが、柱穴跡の可能性があったものである。このなかで同じ建物跡と認定した柱穴跡を比べると一様に同じ土器や炭化物の出土状態が認められるわけではないことが知られる。また、逆にすべての建物跡で類似した炭化物や土器出土例が認められていない点からも、建物に付随した普遍的な埋納行為とも断ずることは難しい。しかし、分布状況や埋土からはいくつか解釈の可能性を示唆する状況がある。ひとつは上記の炭化物や土器が顕著なものなかでST2009、SA2007・2008及びその周辺に分布するものは15基と約半数弱に該当する点であり、これは炭化物や土器が顕著に認められる例は場所的な関係による面があると考えられる。さらに、上述したように甕・壺の完形・略完形品がほぼ一個体で出土した例としてSK2078・2129・2160?・2166・2429などがあるが、前4者はST2009もしくはその周辺の所産である。つまり、甕・壺が単一個体で特長的に見られるケースは何らかの意図された所産も含まれる可能性がある。ただし、甕・壺は埋土下部・単層で認められている例もあるが、柱を想定した場合に同時存在は考えにくく、柱を抜き取った後の2次的な所産と考えたほうが良いのかもしれない。このことは埋土中に柱痕が未確認である点も関連しよう。

また、ST2009周辺の柱穴跡の規模が他よりも大きいことに関連するが、柱の抜き取り作業が行われているとすると、2次的に入り込んだ所産も多く、それが柱穴跡ごとに埋土の状態が異なることや場所的な偏在を示すようになった遠因とも考えられなくもない。これ以外の炭化物・土器が入る要因については十分検討できなかったが、多様な要因によると思われる。しかも、上記の炭化物や土器が顕著に認められる



第44図 柱穴跡と思われる土坑と建物跡分布

柱穴跡の可能性のある土坑は普遍的な存在ではないが、建物と認定した柱穴跡でも認められることから単純に柱穴跡ではないと否定的にみることもできない。ここでは形態的・配列からみた柱穴跡の認定と、顕著な炭化物・土器が入るあり方は必ずしも一致しておらず、土器廃棄を別に捉える可能性もあることを確認しておくにとどめたい。

上述したような認定方法上に問題があるため、必ずしも柱穴跡や建物・柵列跡が厳密に識別できているとは言いがたく、その分布状況も遺跡の実態として捉えることはできないかもしれないが、概略の分布状況について触れておきたい。遺跡内での柱穴跡（建物跡・柵列跡）はS D 1016区画内に集中し、しかも東側に偏在する傾向が認められる。特に東側では比較的規模の大きなS T 2009があり、その周辺にも柱穴跡が散在するなど、ひとつのまとまりを形成する。その西側にはやや小形建物跡と思われるS T 2010～2012がある。これに対して西側では南西部中央よりでS T 2014・2015とした建物跡と推定したものがあるが、それ以外は柱穴跡の可能性のある土坑が散在するのみで具体的に想定された建物跡や柵列跡は少ない。これは繰り返し述べるように、S D 1016区画内西側では中世館外堀がS D 1016と重複して構築されていて中世と古墳時代の建物の軸方向が類似することや、中世館では西側に建物が偏在する傾向をもつため時期判断が難しい柱穴跡が多いことによる。こうした条件によってS D 1016区画内東側で判明した建物・柵列跡が多いという傾向が現れたもので、S D 1016区画内西側では柱穴跡や建物・柵列が少なくということではない。その証拠としては建物・柵列跡の認定はできなかったが、確実に古墳時代の所産と思われる柱穴跡は西側でも見つかっている。したがって、S D 1016区画内各所では複数の掘立柱建物跡・柵列跡が存在していたと思われる。その一方で場所ごとに質的な違いもみられる。特に、北東部ではS T 2009とした比較的大きな建物跡になる可能性があり、建物との認定が妥当であれば本遺跡の中核的な建物跡ではないかと考えられる。その場合、S T 2010以下の建物跡との関連が問題になるが、建物の機能差か居住者の階層差かは明確にしえなかった。なお、いくつか柵列跡とした遺構があるが、これらは規模的には建物跡の一辺と考えられるものが多い。ただ北東部にあるものはこの部分を区画する柵列跡の一部である可能性も残る。また、S D 1016の内側岸上で部分的に検出された柵列跡があるが、全周しないことや、中世館内で位置付けたほうが説明しやすい場所に認められるため中世の所産と考えた。参考に古墳時代の所産か迷ったが、最終的に中世とした柵列跡にはS T 2009東側のS A 2002、その東側S D 1016脇にあるS A 2004、S D 1016

西辺脇にあるS A1001、S A2001がある。S A2002・2004は中世館内堀の東辺入口と通路付近に所在し、S A1001・2001もずれをもつ場所が館外堀の通路想定位置に一致するためそれぞれ中世と考えた。

なお、S D1016区画外の柱穴跡に関しては数は少ないものの、その可能性があるものがいくつかある。S D1016西辺の中央部北寄りでは底面中央にも杭列が検出されているが、その西側延長先のS D1007の両脇にはS K1060・1067が対峙するように配置している。配置関係からみると両者は遺跡西側から入る通路とS D1007交差付近の施設の一部であると思われる。これに対し、S D1016東辺の東外側では柱穴跡に類するS K2868がある。しかし、周囲には類似した遺構がみあたらず、まったくの単独の存在なので柱穴跡からは除外した。また、S Q2016の下層では多数の柱穴と思われる土坑が検出されている。これらはS Q2016に関連した遺構とも思われたが、建物跡とすると条里区画方向に配列する可能性があると思われたので古代以後の所産と考えた。

以下には個別の柱穴跡について記述するが、先に述べたように建物跡・柵列跡と把握できたものと、規模からみて柱穴跡の可能性のあるものの2種があるので、この順で別々に記述したい。

#### ア 建物跡・柵列跡

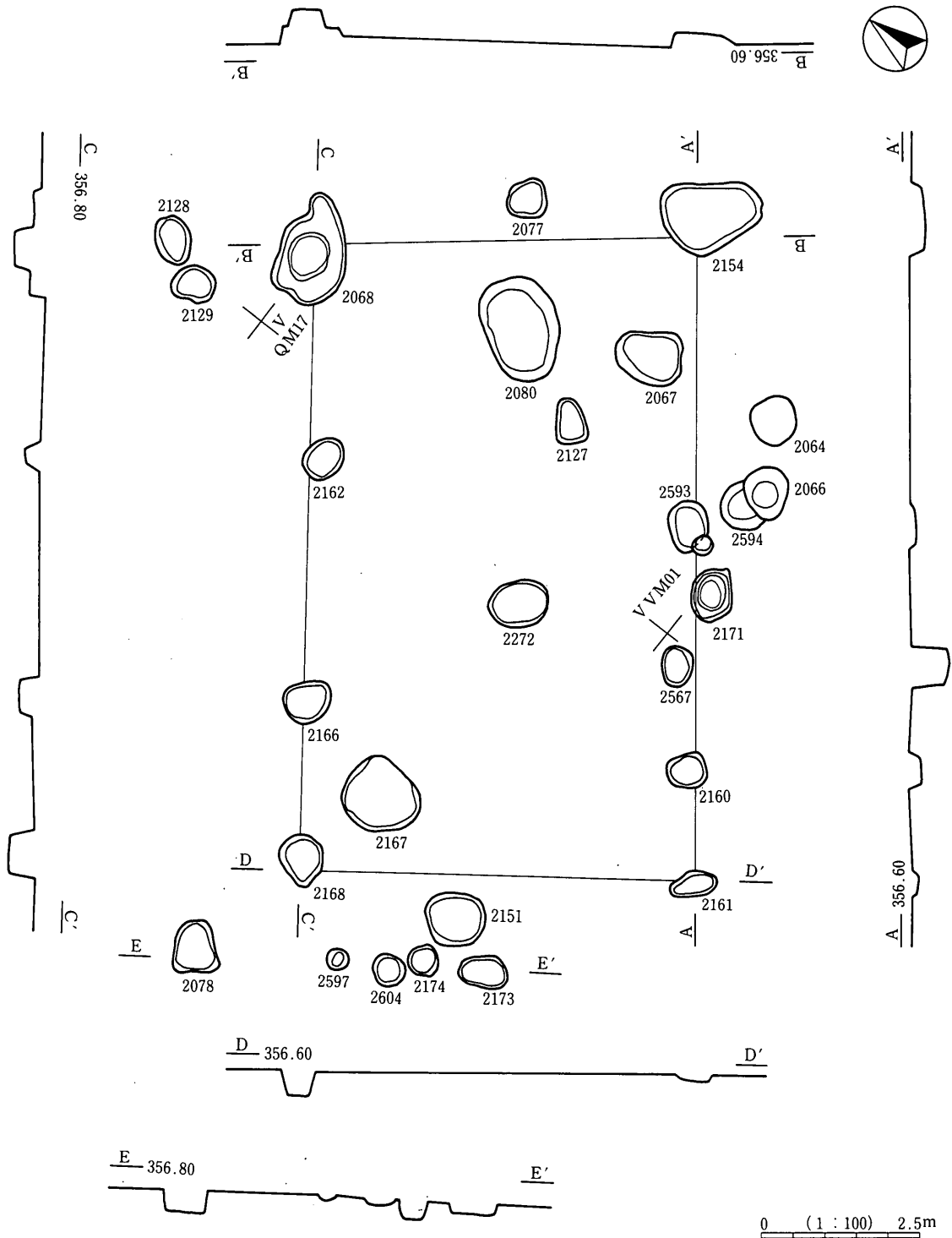
##### S T 2009 ⑤-2区 VQI20～VQP19 (第45・46図)

S D1016区画内の北東部に位置する。調査時には建物跡と認定されなかったが、整理時にS K2068・2160・2161・2162・2166・2168・2567・2593が長方形に配列すると見られたところから掘立柱建物跡と認定した。本跡周辺部の調査は初年度の秋頃着手されたが、縄文面の調査部分を優先するために一旦後送りされ、後に多数の担当者によって短期間に集中して調査された。そのため、全体の柱穴跡の配列の検討が調査段階で十分行えておらず、整理で認定した建物跡の規模や構造について確定しきれない部分が残る。また、認定した建物跡も平行する梁方向での柱穴跡の不一致、柱間寸法の不規則、一部の柱穴跡は浅過ぎて疑問が残るなどの問題がある。さらに、隣接するS A2007・2008、あるいは周辺に分布する柱穴跡の可能性のある土坑との関係についても問題を残す。

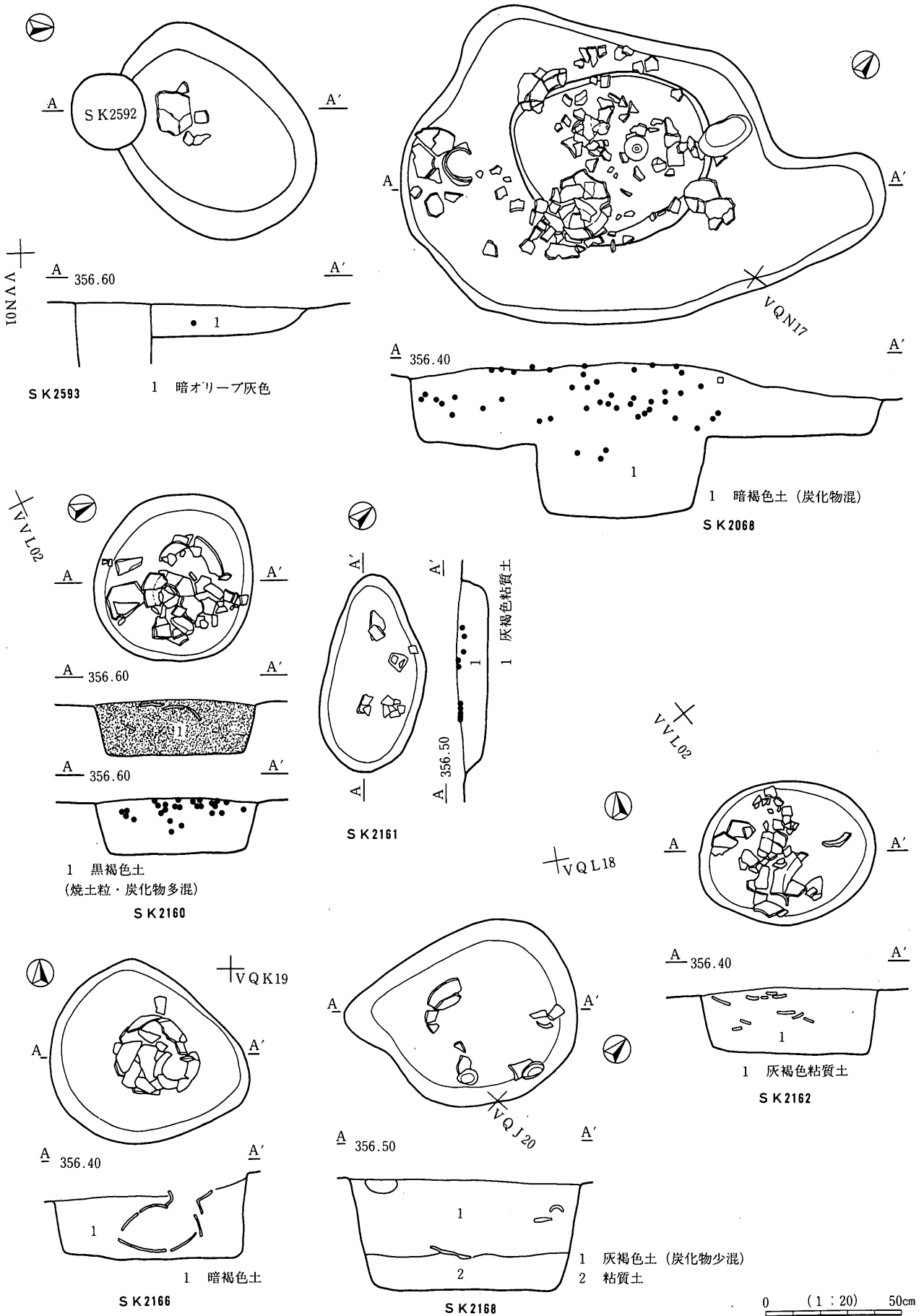
建物跡の平面形は梁行1(2)間—約6.0、桁行3(4～5)間—約10.0mの長方形で、棟方向はN-54°-Eである。柱穴跡の配置は北辺の桁行でS K2168・2166・2162・2068の4基、南辺側ではS K2161・2160・2567・2593が並列し、南東隅には柱穴跡状の土坑は検出されていないが、その他の土坑で扱った浅く大きなS K2154が位置する。また、やや位置はずれるがS K2067も関連する可能性がある。梁方向は确实なところは1間であるが、それぞれ梁方向中央部のややずれた位置にS K2173・2077がある。この2基は棟持柱の可能性もあるが、S K2077は非常に浅い炭化物集中に近い土坑と捉えられているため、積極的に認定できなかった。この配列では全体が長方形になりながらも、柱穴跡が北・南辺で対応して位置していないことや、梁方向の柱間が長過ぎるなど、建物跡と断定するには問題も残る。なお、柱間寸法は桁行北辺で西側から2.6-3.9-3.4m、南辺は西側から1.7-1.7-2.2m、S K2593-2154までは4.6mと一定していない。梁方向は上述した通りであるが、仮にS K2173・2077で2分されるとすると西側の梁行の柱間寸法は3.0-3.2m、東側は3.4-2.6mとなり、ほぼ3m前後である。

柱穴跡の平面形は円形、もしくは円形に近い楕円形であり、S K2068のように上面が不整形となるものもあるが、柱穴跡本体は円筒形である。平面規模は最大規模のS K2068を柱穴跡本体の規模で計測すると大概のものは長軸60～90cm×短軸30～70cmに納まり、平均的な規模は70×55cm前後である。この数値は柱穴跡と推測されるなかでは比較的規模の大きな部類に属する。検出面からの深さは10～56cmとかなり幅が見られ、一定の傾向を示さないが、平均的な深さは30cm前後である。なお、概略では40cmを越えるが、S K2161・2593は深さ10cm、S K2160は20cm、S K2162・2166は25cmであり、やや浅過ぎて柱穴跡と認定しよいかは不安が残る。

埋土は炭化物をあまり含まない単層のものが多く、土質は多様である。S K2068—少量の炭化物を含む暗褐色土、S K2160—炭化物と焼土を大量に含む暗褐色土、S K2161・2162—若干の炭化物を含む粘土質の灰褐色土、S K2166—粘性のある黒褐色土、S K2567—黄灰色土、S K2593—暗オリーブ灰色土である。S K2168のみ上下2層に分層され、底面上に厚さ10cm強の粘質土、その上部に若干の炭化物を含む灰褐色土がある。このなかでS K2160のみで大量の炭化物と焼土ブロックが含まれていた。柱痕が確認された土坑はひとつもない。遺物の出土状態は多様である。S K2068は底面上に小破片・中位に出土遺物をあまり含まず、上層に破片を多く含み (P 1 > O > P 2)、S K2160は炭化物と大量の土器が出土 (C 2 = P



第45図 ST2009



第46図 ST2009の柱穴跡

2) し、S K2162は大量の炭化物は含まず、土器のみがまとまって出土(P 2)、S K2166は完形土器のみが出土(P 3)、S K2168は底面直上にあまり遺物を含まず、中位以上で小破片が出土(O>P 1)、S K2161・2567・2593は小破片のみの出土(P 1)である。このなかで小破片しか出土しないP 1は混入の可能性が高いと考えられる。また、比較的土器量が多いS K2068・2168は上層からの出土が多く、略完形・完形土器が出土したS K2162・2166は土器の出土状況からすれば、土器が入った時には柱穴跡としては機能していないと思われる。従って、まとまって土器が出土した場合でも、土器が土坑内に入ったのは柱穴跡としての機能が終了した後の所産で、掘方構築時に伴う土器は少ないと思われる。また、底面付近より炭化物・土器がまとまって出土したS K2160はこれのみ取り上げると柱穴跡かどうか疑問もあるが、配置場所からは本建物跡を構成する柱穴跡とみられるので、柱穴跡を利用した廃棄の所産ではないかと考えた。

出土遺物は土師器を中心とし、少ない順にS K2161-130g、S K2567-215g、S K2593-385g、2168-590g、2166-1660g、2160-2020g、2068-4300g、2162-2080?gである。土器口縁部の遺存状態の区分では3/8以下しかないAはS K2567・2593、5/8以下までのものが認められるBは2161、それ以外は口縁部が6/8以上のものが含まれるCである。このなかでS K2166からは略完形・完形の甕が単体で出土し、S K2160も同様と思われる。また、S K2068は土器量が多いものの、そのほとんどが上層の出土で、S T2010のS K2147のあり方に近い。これ以外ではS K2068で粘板岩製砥石1点、S K2168で僅かな木片が出土している。

本跡周辺には多数の柱穴跡と思われる土坑が散在しているが、本建物跡に直接関連づけられなかった。また、建物内部には浅く大きい土坑S K2167・2272・2280などがあるが、これらの土坑とは時期差をもつ可能性はあるものの、関連は不明である。これらはS T2009周辺の柱穴跡として後述するが、建物跡の建て替えや付属する施設が存在、あるいは前後する別の建物跡が存在する可能性も残されている。この様相が明らかにできなかったところは遺跡の評価に関連することだけに、大きな悔いを残す結果となった。

以上のように本建物跡は認定自体に不安を残すが、建物跡とすると遺跡内では最大規模となる。この認定が妥当ならば、本建物の所在する周辺が遺跡内で最も中核的な場所と見られ、そのあり方は本遺跡の継続時期や構造を考える上で鍵を握ると見られる。なお、このS T2009に隣接したS D1016で板材と思われる材が集中的に出土している。

#### S A2007・2008 ⑤-2区 VVM02~VP01 (第47図、S K2606・2615-第61図)

S T2009南側に位置する柱列である。調査時にもこの周辺に柱穴状の土坑が多く分布することは気づかれていたが、具体的な構築物の認定までには至らなかった。整理段階で改めて柱穴跡の配置を検討し、S T2009と類似した方向で配列する古墳時代の土坑群から柱穴列2条を認定した。遺構記号は柵列跡S Aを用いているが、各柱列の柱穴数が少ないことなどからも建物跡の一部である可能性が高い。

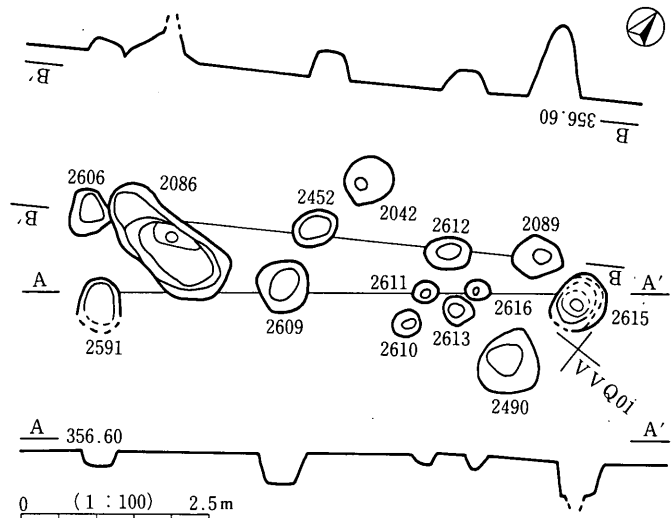
認定した柱穴列はS K2606・2452・2612からなるS A2007とS K2591・2609・2615からなるS A2008である。この周辺には類似した規模の柱穴跡と思われるS K2490もあるが、その位置付けについては明らかにできなかったため、本遺構には含めなかった。切り合いはS K2606がS K2086に接するように切れ、S K2452・2609・2612・2615がS X2002を切る。

S A2007はS K2606・2452・2612がN-58°-E方向に直線的に配列し、確認できる長さは約4.8mである。古墳時代と考えられる軸方向の配列から認定したが、同一ライン上には中世の建物跡S T2002を構成すると捉えたS K2087がある。このS K2087は埋土に多数の礫をもち、同様に礫をもつ柱穴跡が中世の館内堀と同じ方向に配列すると見られたことから中世の所産と判断したものである。しかし、S T2002は柱の配列が不規則で、柱穴跡が検出されていない部分も存在するなどの問題もあって建物認定に不安が残されている。また、やや位置はずれるが、その他の土坑と認定したS K2086の底面で検出された浅い柱穴状



の落ち込みもこのライン上に近い位置に存在している。

柱間寸法はS K2606-2452間が約3.0m、S K2452-2612間が約1.8mである。個々の柱穴跡はS K2606が56×50cmの不整形形の平面形で深さ約20cm、S K2452が60×42cmの円形の平面形で深さ約35cm、S K2612が58×40cmの円形の平面形で深さ約28cmを測る。埋土はS K2606・2612がブロック土を含む黄色灰色土の単層で、S K2606からは土器が小破片ながら集中的に出土している。S K2452は上下2層に分層され、上部には焼土・炭化物粒を含む暗褐色土、下層に焼土・炭化物粒子をあまり含まず、やや砂質になる土層が見られた。



第47図 SA2007・2008

遺物は土師器が中心でS K2606-約800g、S K2542-140g、S k2612-30gの土器が出土している。口縁部の遺存状態の区分ではS K2606がBである以外はAもしくは口縁部破片が含まれない。なお、S K2452には断面図中に縦方向の板材が記入されているが、平面図には記載されておらず、また、整理時に実物の所在がわからなくなってしまった。

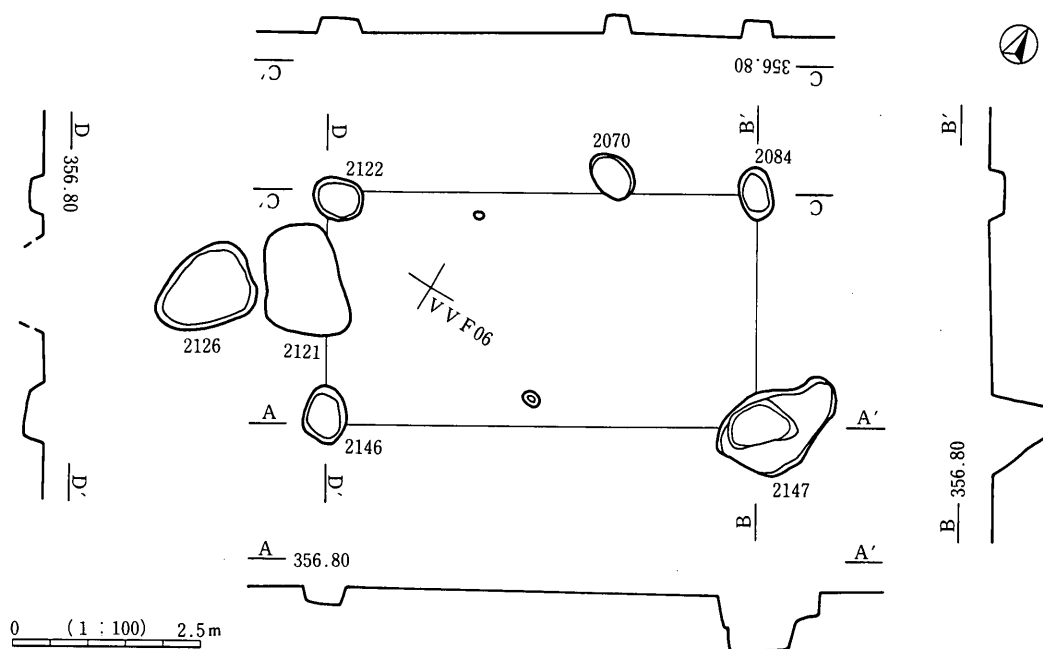
SA2008はS K2591・2609・2615がN-53°-E方向に直線的に配列し、確認できる長さは約6.5mである。ST2009棟方向と同方向の配列から認定した。また、同一ライン上にはS K2610・2611・2613・2614とした小規模な柱穴跡があるが、これらの土坑に関しては他の土坑より小規模なため本跡に含めなかった。柱間寸法はS K2591-2609間が約2.7m、S K2609-2615間が約3.8mであり、あまり規則的な配置とは言いがたい。個々の柱穴跡はS K2591が50×50cm以上で片側をトレンチで破壊されて平面形は詳細不明、深さは20cm、S K2609は70×70cmの円形の平面形で深さ約42cm、S K2615は80×66cmのやや楕円形ぎみの円形で深さは77cmを測る。断面形は逆台形を呈するが、S K2615は底面上に柱の圧痕と思われる痕跡が認められている。なお、S K2591とS K2615では検出面からの深さに大きな差が認められるため、同一の構築物を構成する柱穴跡とするには不安が残る。調査ミスの可能性も否定しきれない。埋土はS K2591・2609が黄灰色の粘性土の単層でS K2609には砂質土ブロック・わずかな焼土粒が含まれる。S K2615は上下2層に分けられ、下層には黄灰色土、上層にはS K2609埋土と類似した土層が入る。また、上層では拳大の礫と共に土師器の破片が多数混在して出土している。出土遺物は土師器の破片が中心でS K2591-460g、S K2609-760g、S K2615-1260gが得られている。口縁部の遺存状態の区分はS K2591は3/8以下の破片しか認められないA、S K2609が5/8以下まで見られるB、S K2615が6/8以上の破片が含まれるCである。S K2609に関しては遺物の出土状態の記録がないために詳細不明であるが、S K2591は小破片が散在的に出土し、S K2615は土器出土量が多いもののほとんどが上層から出土した(○>P2)。口縁部の遺存状態と出土状況からみると柱穴跡としての機能が終了した時点で混入したものと思われる。

SA2007・2008は認定に不安を残し、遺構記号は柵列を用いたものの、具体的な構築物は明らかにできなかった。しかし、両者は近接しており、規模や柱穴跡の構成は類似しているため、同様の構築物が建て替えられたものと考えられる。また、その位置的な関係からST2009とは何らかの関連をもつものと思われる。

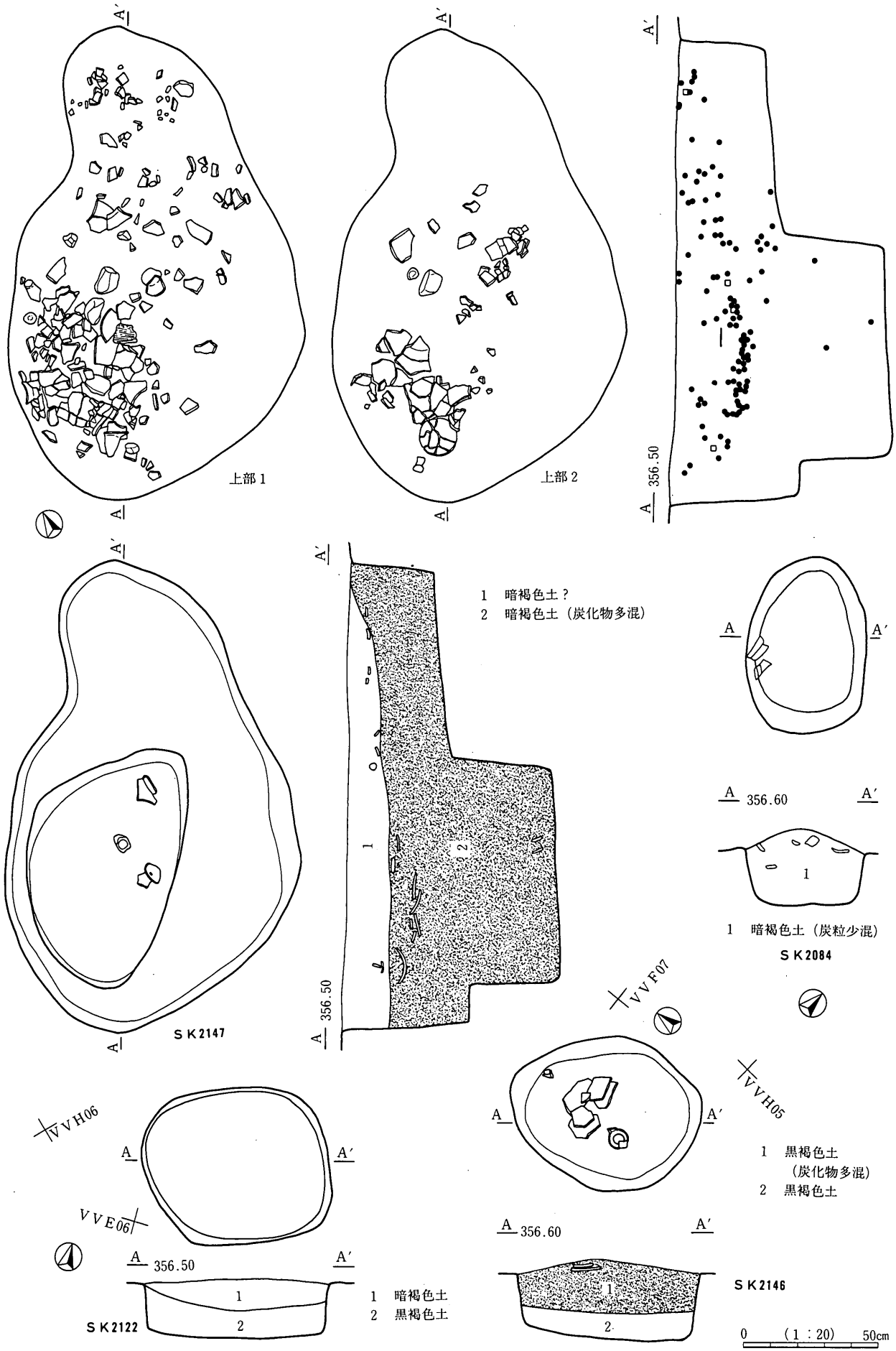
ST2010 ⑤-2区 VVE05~VH05 (第48・49図)

S D1016区画内の北東部中央よりに位置し、長方形に配列するS K2084・2122・2146・2147をもってS T2010と認定した。このS T2010の北・南辺ライン上にはそれぞれ相対してS K2601・2602とした小規模な柱穴が位置するが、規模が小さい点や、柱列ラインの内側に入ることから本建物跡には含まなかった。また、北側ライン上ではS K2070が位置しているが、出土遺物から古代の所産と捉えたので、S T2010から除外した。他の遺構との切り合いはない。

棟方向はN-67°-Eで、梁行1間約3.0m、桁行1間約5.8mの規模となる。梁方向の柱間寸法が開き過ぎているため、本来は中間にいくつか柱穴が存在していた可能性がある。個々の柱穴跡についてみるとS K2084が64×44cmのやや楕円形ぎみの円形の平面形で深さ28cm、S K2122が66×57cmの円形の平面形で深さ21cm、S K2146が70×57cmのやや楕円形ぎみの円形で深さ26cmを測る。S K2147は長軸172×短軸108cmの不整形な平面形を呈し、上部が浅く広いものの、中央部が90×55cm前後の不正楕円形で筒状に落ち込んで検出面からの深さ77cmを測る。埋土はS K2084は少量の炭化物を含む暗褐色土の単層、S K2122は上部に少量の炭化物を含む暗褐色土・下部に粘性の強い黒褐色砂質粘土、S K2146は上部に炭化物を多く含む黒褐灰色土・下部は粘性の強い黒褐色土、SK2147は上部に炭化物をあまり含まない土層・下部に炭化物を多く含む土層が認められている。出土土器重量はS K2084-395g、S K2122-25g、S K2146-1425g、S K2147-6450gで、口縁部遺存状態の区分はS K2146・2122がA、S K2084がB、2147がCである。また、堆積状況を模式的に示すとS K2084は炭化物を含む土層の上に小破片が含まれ(C 3 ≥ P 1)、S K2122は底面上に遺物も炭化物顕著でない土層があり、上部に若干炭化物が多い(O > C 3)。S K2146は底面上には炭化物も土器も余り顕著でない土層があり、上部には小破片を含む炭化物が多い土層(O > C 2 = P 1)、S K2147は底面上に小破片を含む炭化物が多い土層、上部は大量の破片が出土(C 2 ≥ P 1 > P 2)した。S K2084・2122は土器出土量が少ない一方で、S K2146・2147では土器出土量が格段に多い。しかし、S K2146では口縁部遺存状態は3/8以下しか見られない小破片のみであり、S K2147では出土土器量も多く口縁部遺存状態も6/8以上となるものがみられているが、土器の出土した場所は上部に集中する。従って、柱穴跡本来の遺物ではないと考えられ、特にS K2147の場合では形状からも柱穴廃絶後の窪地残存部



第48図 S T2010



第49図 ST2010柱穴跡

分を再利用して土器が廃棄された可能性がある。

以上のように本建物跡は柱穴跡の配置から認定し、建物の棟方向が古墳時代の所産のものに近いことや、一部ながら多数の土師器を出土した柱穴跡があることなどから古墳時代の建物跡と捉えられる。しかし、桁行方向の柱間がかなり長いという問題を残している。建物跡の性格は明らかにできなかった。

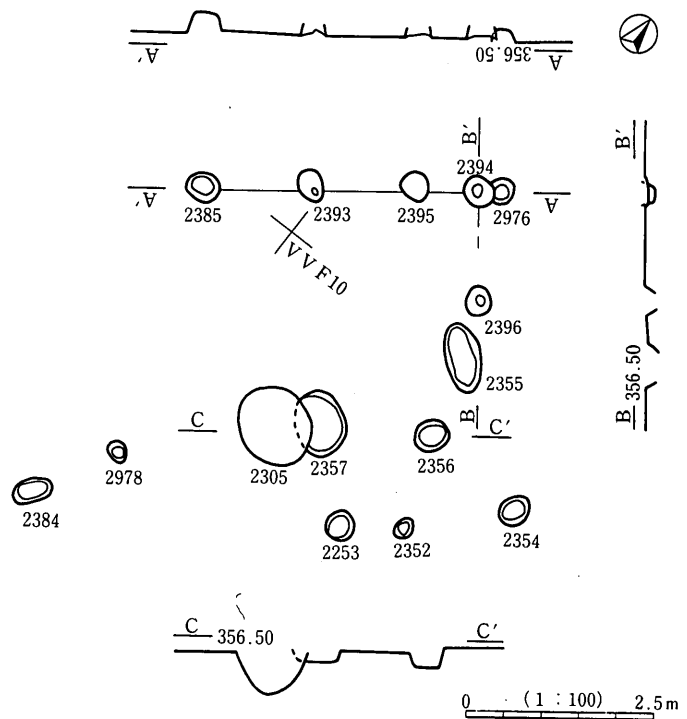
**S T 2011** ⑧-2区 VVE09~VF09 (第50図)

S D 1016区画内北東部中央より、上記のS T 2010の南西約5 mに位置する。調査時にも直線的に配列するS K 2385・2393・2394・2395・2976は何らかの構築物を構成すると見られていたが、その構造や時期は不明であった。整理段階では上記の所見を参考に、その配列方向から古墳時代の所産と推測し、南側には関連すると思われる柱穴跡が散在することから建物跡と推測してS T 2011とした。本建物跡の柱穴跡と断定できるのは桁方向に配列するS K 2385・2393・2394・2395のみである。梁方向は不明であるが、S K 2394の梁方向の柱穴はS A 2003に含めたS K 2396、S K 2355、さらにS K 2395の直交方向に位置するS K 2397のいずれかが該当するのではないかと思われる。ただし、S K 2396と2397では梁行の長さが異なるため、両者が共存する可能性はない。なお、S A 2003は整理時にS K 2599・2976・2396・2356・2352の配列からS T 2011と一部重複する位置に認定した柵列跡である。S A 2003は個別の柱穴跡自体に時代を特定する根拠はないが、位置が中世井戸跡が集中する範囲と一致していることや、柱穴列の方向が厳密には中世館内堀とは一致しないものの、近い方向となると思われたことから中世と考えた。しかし、本跡との関連においてS A 2003の柱穴跡と推測したS K 2976はS K 2395と重複しており、S A 2003直交方向にS K 2369が位置する問題などS A 2003の認定も確定しきれない部分を残す。S T 2011の柱穴跡についてはS K 2385・2393・2394・2395がほぼ直径30cm前後の円形の平面形を呈し、検出面からの深さはS K 2385で26cmを測る。それ以外の柱穴跡の断面記録・埋土の記録がなく不明である。出土遺物はまったくない。

本建物跡は規模や構造も確定できていないが、調査段階でも認定されていた配列からすると小規模な建物跡とみられる。性格は不明である。

**S T 2012** ⑧-2区 VVB13~VD12 (第51図)

S D 1016区画内北東部中央より、S T 2011南西約5 mに位置する。建物跡の認定は整理で行い、S K 2380・2381・2417・2977・2979がほぼ長方形に配列することから掘立柱建物跡とした。直接切り合う遺構はないが、建物範囲内には遺物集中としたS K 2373、さらに古墳時代の土坑と考えたS K 2382がある。S K 2382は本跡の北辺に接し、ほぼ平行した軸方向をとる長楕円形の土坑であるが、本跡との関係は明らかでない。本跡の柱穴跡の多くは⑧-1区の見逃し遺構確認のための第2検出面で検出されたものであるが、S K 2380・2381のみは第1調査面で検出されている。確認できる建物跡規模は1間×1間の東側梁行が斜めとなる長方形で北・南辺が長く、棟方向は



第50図 S T 2011

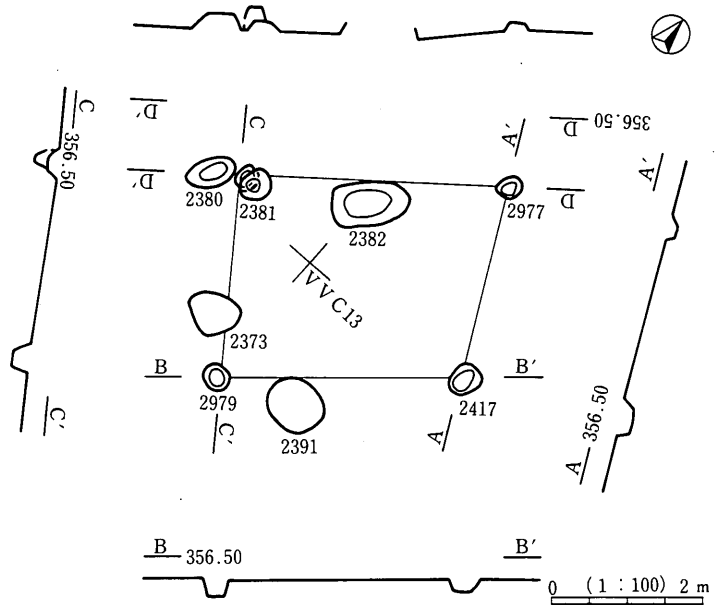
N-52°-Eで桁行約3.5m、梁行約2.4mの規模になるとみられる。関連すると思われる柱穴跡は全部で5基あるが、建物跡の範囲が上記の通りで完結するかどうかは明らかでない。また、北西部隅でSK2380・2381がほぼ近接して位置し、第2面ではSK2381と若干ずれる位置で柱穴跡が検出されている。このうち、SK2381と重複する柱穴は上面での掘り間違いの可能性が高いため、ここでは改めて遺構番号を振らなかった。柱穴跡の規模は直径20~36cmの円形を呈し、検出面からの深さは第2面検出であることから浅く、約10~24cmである。第1面で検出されたSK2380では約20cmを測り、第2面検出のものも本来は20cm前後となるとみられる。埋土は灰褐色粘質土の単層で、SK2380で20g、SK2381で10gの古墳時代土師器が出土した以外は土器の出土はなく、SK2417・2977では木片が出土している。本建物跡は柱の配列から古墳時代の所産と考えたが、性格は不明である。

**ST2013** ⑤-2区 VVA09~VC09  
(第52図)

SD1016区画内北東部中央より、ST2012北側に位置する。整理段階ではSK2229・2230・2238が直線的にしかも等間隔で配置することから何らかの構築物を構成するものと看取された。さらに、この周辺のみ柱穴跡状の土坑が分布し、なかでもSK2229・2230・2238を基軸とした場合、SK2229の直交方向にはSK2262、SK2238の直交方向の延長上にはSK2262・2239が位置することから建物跡になる可能性があると考えてST2013とした。また、周辺の柱穴跡分布状況からすると、SK2261・2231も関連すると思われる。しかし、具体的な建物規模や構造は把握できておらず、SK2238から直交方向に配列すると見られるSK2239・2266は厳密には直交せず、むしろ、SK2266からSK2239-2266と結ぶラインに直交延長上にあるSK2261と組んで重複する2棟の掘立柱建物跡と見られなくもない。1棟か2棟の重複かは判然としないが、いずれにしろ規模の小さな建物であることは間違いないと思われる。1棟ならば、総柱建物ながら、小規模な倉庫のようなものになるのであろうか。このように建物の詳細な様相は不明で、認定に不安が残るが、最も基本としたSK2229・2230・2238の軸方向はN-40°-Wとなり、古墳時代の遺構方向に近い。なお、SK2229・2230・2238の距離は約2.7mを測り、柱間寸法は1.3m強を測る。柱穴跡の規模は直径20cm前後の円形を呈し、検出面からの深さは8~19cmと浅いものが多い。埋土はいずれも黄灰色土である。出土遺物はまったくない。

**ST2014** ⑧-1区 IVAK05~AN04 (第53図)

SD1016区画内の南西部中央よりに位置する。中世の館堀SD2001の南西隅周辺に柱穴跡とみられるSK2318・2324・2404・2424・2425・2426・2494が一定範囲に分布し、なかでもSK2318・2404・2425・2426がL字状に配置すると見られたことから整理時に建物跡と認定した。調査時ではSK2318・2324は第1面、それ以外は見逃し遺構確認の第2面で検出されたため、建物跡の認定ができていなかった。本跡の北側は中世の堀SD2001によって削平され、検出できた範囲も建物跡の南西部の一部と思われる。したがって、建物跡の規模や構造は不明であるが、確認できる範囲はSK2318-2404の南西辺は1間で距

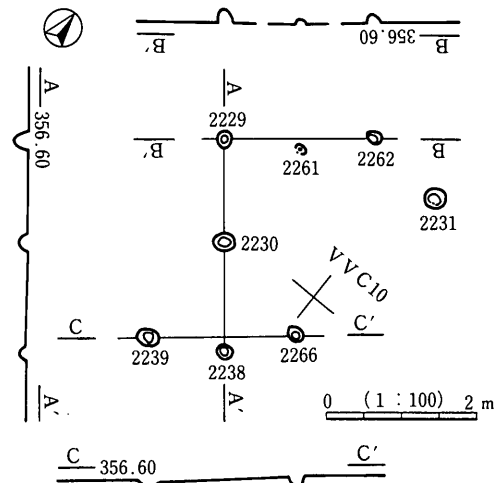


第51図 ST2012

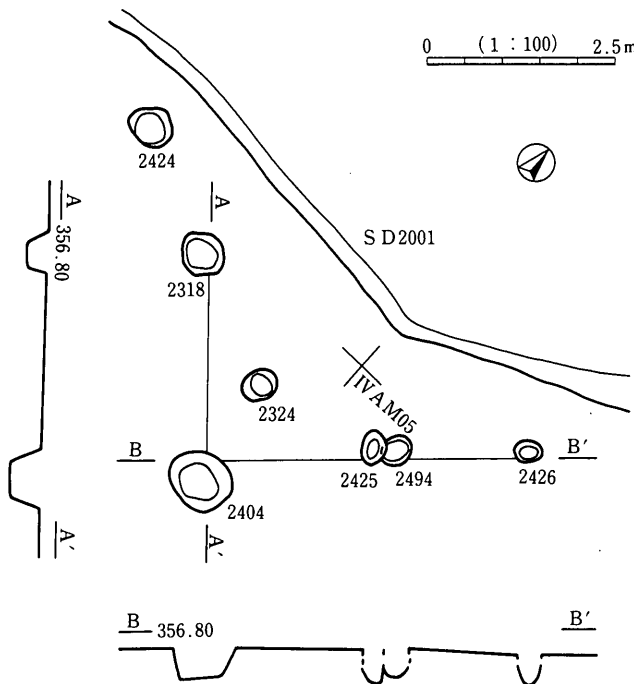
離は約2.7m、S K 2404-2426の南東辺は2間で距離は約4.6mを測る。南東辺の柱間寸法は約2.3m前後である。どちらが棟方向かは判然としないが、建物の方向はN-48°-Eか直交方向になると思われる。側柱建物になるのではないと思われるが、南東辺中央部のみS K 2425・2494が一部重複するように検出されている。個々の柱穴跡の平面形は円形で規模はS K 2404が86×72cm深さ40cmと大きい、それ以外はS K 2318が62×58cm深さ14cm、S K 2425が42×32cm深さ28cm、S K 2494が42×32cm深さ15cm、S K 2426が38×30cm深さ29cmである。ちなみに、周辺にあるS K 2324は44×40cm深さ12cm、S K 2424は55×50cm深さ28cmである。埋土はS K 2404がにぶい褐色土?とされるが、それ以外は黒褐色土を基調とし、S K 2424には褐色土ブロック、S K 2425・2494には大量の炭化物・焼土粒が含まれる。また、S K 2324では底面上で炭化物の薄い層が確認されている。出土遺物はわずかな土師器の破片があるに過ぎず、S K 2426-30g、S K 2494-90g、S K 2324-160g、S K 2318・2424-170g、S K 2425-175g、S K 2404-1700gである。口縁部の遺存状態の区分は0もしくはAである。S D 2001に切られることや建物の方向からは古墳時代の建物跡と思われるが、性格は不明である。

**S T 2015** ⑧-1区 IVAK09~AO07 (第54図)

S D 1016区画内の南西部中央よりに位置し、北側には隣接してS T 2014がある。建物跡の認定は整理段階で行い、N-44°-E方向に配列するS K 2107・2240・2241・2364・2487は何らかの構造物になると看取され、さらにS K 2364からの直交方向にはS K 2484、S K 2107直交方向にS K 2430、S K 2487直交方向

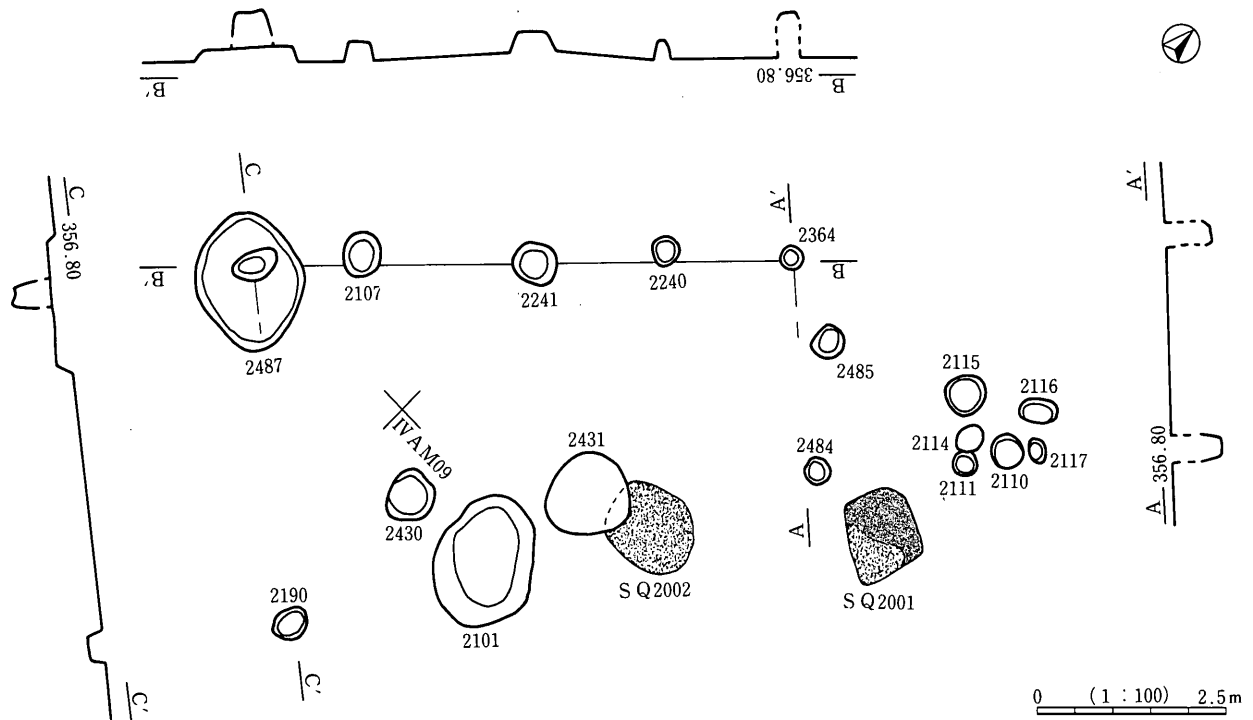


第52図 S T 2013



第53図 S T 2014

にS K 2190がそれぞれ位置することから建物跡の可能性が高いと思われた。しかし、具体的に確定できた部分はS K 2107・2240・2241・2364・2487の北側桁行に該当すると思われる部分のみで、南側の桁行はS K 2484とS K 2430を結ぶラインか、S K 2190のラインかは確定できなかった。単純に対応する柱穴跡の数からすればS K 2484とS K 2430を結ぶラインのほうが確率が高い。個々の柱穴跡ではS K 2430・2484・2487の3基が見逃し遺構確認の第2面の検出であり、他は第1調査面で検出された。切り合いはS K 2487の上面でS K 2192が検出されており、S K 2487を切る可能性がある。さらに、S K 2430がS D 2014を切っている。なお、本跡の東側隣には類似した規模の柱穴状の土坑がいくつか散在しており、関連があると思われる。このように本建物跡の規模や構造は未確定のところがある



第54図 S T 2015

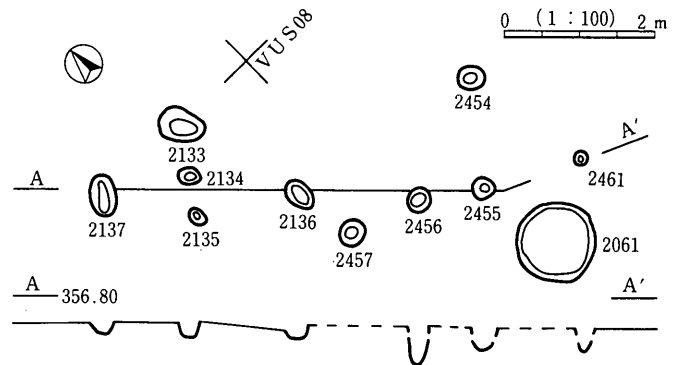
が、桁行4間約7.1m、梁行は1間となる側柱建物跡と思われる。梁行の規模は確定できていないが、S K 2190のラインとすると約4.5m、S K 2484-2430のラインでは約2.3mとなる。桁行の柱間寸法は西側から1.4、2.3、1.8、1.6mとなる。柱穴跡は平面形がほぼ円形を呈し、規模はS K 2107が60×53cmで深さ約20cm、S K 2240が36×34cmで深さ26cm、S K 2241が58×52cmで深さ28cm、S K 2364が26×24cmで深さ10cm、S K 2487が52×38cmで深さ38cmである。ちなみに関連する可能性があるS K 2190は44×40cmで深さ22cm、S K 2484は33×27cmで深さ25cm、S K 2430は78×75cmで深さ33cmとS K 2430のみがやや大きく異質な存在である。埋土はS K 2107・2190・2240・2241・2364のいずれも暗褐色土、S K 2484・2487が黒褐色土の単層である。S K 2430のみは上下2層に分層され、上層が炭化物を若干含む黒褐色土、下層が炭化物を含まない黒褐色土である。なお、S K 2190埋土中では平石の礫が検出され、S K 2430では上面に薄い炭層が認められている。出土遺物はわずかな土師器のみ出土した柱穴跡が多く、土器重量と口縁部遺存状態の区分を併記するとS K 2107-380g (A)、S K 2240-50g (0)、S K 2241-30g (0)、S K 2364-0g、S K 2487-45gであり、関連する可能性があるS K 2190-0g、S K 2484-95g、S K 2430-2110g (B 1)である。これらの様相からは出土遺物の多くが混入、もしくは廃絶後の凹地を利用した廃棄の所産と思われる。

本建物跡は規模や構造について確定しきれなかったところがあるが、想定される棟方向とS K 2192とS K 2487との関係からすると古墳時代の所産と思われ、性格不明ながら遺跡内で推測された建物跡の規模としてはS T 2009に次ぐ大きさになる。

**S A 2009** ⑤-2区 VUQ07~US09 (第55図)

S D 1016区画内の北東部中央よりに位置し、南側にはS T 2013がある。調査第1面で検出されたS K 2133~2137、見逃し遺構の確認面の第2面で検出されたS K 2454~2457、2461の小規模な柱穴跡の分布を整理段階で照し合わせたところ一定範囲に帯状に分布することが判明し、何らかの構築物を構成すると思われる。このなかで、比較的直線的に柱が通ると思われたS K 2137・2134・2136・2456・2455をもって柵列跡

とした。ただし、可能性のなかで捉えた遺構であって、必ずしも確定した遺構ではない。周辺にある柱穴跡については具体的な位置付けできなかったが、S K 2461はやや位置がずれるものの、本跡の南延長先にあることから本跡に含められるかもしれない。S K 2461を含めた場合では全長約6.6m、柱間は北から1.2、1.5、1.6、0.9、1.4mとなり、その走行方向はN-45°-Wである。柱穴跡の平面形はほぼ円形・楕円形を呈し、規模はS K 2137が56×34cmで検出面からの深さ14cm、S K 2134が24×20cmで深さ20cm、S K 2136が42×28cmで深さ14cm、S K 2456が28×26cmで深さ35cm、S K 2455が20×18cmで深さ12cm、S K 2461が18×16cmで深さ12cmである。このうち、S K 2455・2456・2461は第1面の検出面から15cm前後下げた第2面検出面なので、本来の深さはそれぞれ27cm、50cm、27cmになると思われる。埋土はかなり多様でS K 2134・2136・2461が黒褐色土、S K 2137が黄褐色土、S K 2456が灰褐色土の単層、S K 2455が上層の暗灰褐色土、下層の灰色土に分層された。埋土の色調は多様であるが、S K 2137の場合は地山の黄褐色土を含むために黄褐色にみえているものである。出土遺物は非常に少なく、S K 2136・2456・2455・2461はまったく見られず、S K 2137で5g、S K 2134で740gの土師器小片が得られたに過ぎない。

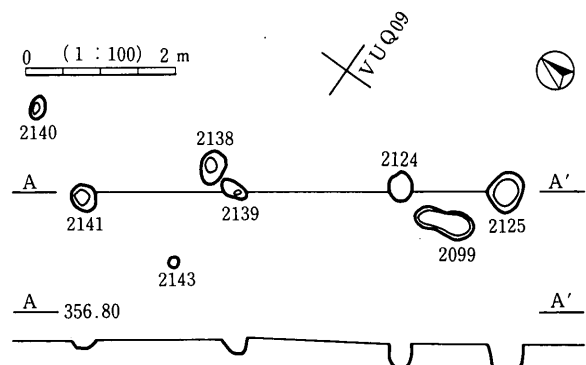


第55図 SA 2009

本跡は遺構の認定自体に不安があって確定的な遺構ではないが、配置から柵列跡と捉えた。時期の認定は走行方向がS T 2013に類似することから古墳時代の所産と考えた。軸方向がS T 2009とは厳密には一致しないが、S T 2009を中心とした部分を区画する施設の可能性がある。

#### SA 2010 ⑤-2区 VUN08~UQ10 (第56図)

S D 1016区画内北東部中央よりに位置し、東側にはS A 2009がある。整理段階ではほぼ直線的に配置するS K 2141・2139・2124・2125をもって柵列跡と認定した。周囲にはS K 2143・2138・2099があるが、これらの柱穴跡の関連については明確にはできなかった。ただし、S K 2139・2138は隣接しており、関連する可能性が高い。本柵列跡は認定に不安を残すが、全長約5.5mで走行方向はN-35°-W、柱間寸法は北側から2.1、2.2、1.2mである。個々の柱穴跡の平面形はほぼ円形を呈し、その規模はS K 2141が30×30cmで深さ12cm、S K 2139が36×20cmで深さ20cm、S K 2124が36×36cmで深さ32cm、S K 2125が46×40cmで深さ36cmである。埋土はS K 2139・2141が黒褐色土、S K 2124・2125が暗褐色土の単層である。出土遺物は非常に少なく、S K 2139で30gの土師器が得られ、S K 2141、2124、2125は出土遺物がまったくない。走行方向から古墳時代と考えたが、隣接したS A 2009とは軸方向が若干異なるため、時期差となる可能性がある。



第56図 SA 2010

#### SA 2011 ⑤-2区 VUL11~UM11 (第57図)

S D 1016区画内北東部中央より、S A 2010の西側に位置する。整理段階でS K 2620・2234・2458が直線的に並ぶと看取され、柵列跡の可能性があるとし



てS A2011とした。しかし、厳密にはS K2234が若干位置がずれ、さらに延長先にはS K2619、2170、直交方向ではS K2059があるなど、規模や帰属する柱穴跡を確定しきれないところが残る。そのため、柵列跡としたものの、建物跡になる可能性もある。特にS K2619、2170については規模などから柱穴跡とは断定しなかったが、配置関係からすると関連する可能性は高い。ここでは確実に構築物を構成する柱穴跡としてS K2620・2234・2458の3基を扱う。配列はほぼN-45°-W方向、規模は約3.6mで柱間寸法はほぼ1.8mである。柱穴跡の平面形は円形を呈し、その規模はS K2620で34×28cmで深さ16cm、S K2234は40×34cmで深さ34cm、S K2458は22×20cmで深さ14cmである。埋土はS K2234が上下2層に分層され、上層が赤黄褐色砂質シルト混じりの黄灰色土、下層が黄灰色土で上面には平石が1点検出された。S K2458は黒色土、S K2620が暗灰褐色土の単層で、埋土には統一性がない。出土遺物はS K2620で40gの土師器が出土したのみで、S K2234・2458ともに出土遺物はない。

本跡は認定に不安を残し、確定しきれた遺構ではないが、配列から構築物を構成する可能性があると考えてここで扱った。走行方向から古墳時代の所産と推定した。

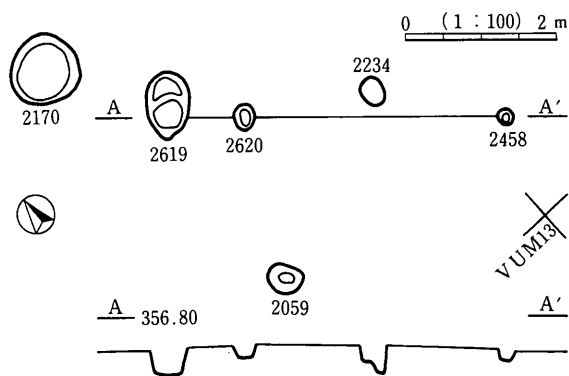
**S A 2012** ⑤-2区 VUM17~UO18 (第58図、S K2842-第65図)

S D1016区画内のほぼ中央部、調査2年次の県道下追加調査部に位置する。ここは東側が未調査部分となり、南と西側がS D2001で区切られる狭い範囲ではあるが、柱穴状の土坑がいくつか検出された。

このなかで直線的に配置するS K2841・2842・2837・2938をもって何らかの構築物を構成すると考えて整理時にS A2012とした。このなかでS K2837と2838は切り合いになり、S K2837がS K2838を切っている。また、周辺にはS K2835・2836・2839・2840などの類似形態の土坑があり、S K2835・2839は本跡に直交する方向に位置するが、関係は不明である。S A2012としたS K2841・2842・2837・2938の配列はN-45°-W方向で、確認できるところでは長さ約3.2m、柱間寸法は北から1.7、1.5mを測る。柱穴跡の平面形は円形、もしくは楕円形を呈し、規模もまちまちである。S K2841が36×34cmで深さ22cm、S K2842が75×55cmで深さ33cm、S K2837が40×32cmで深さ24cm、S K2938が28×26cmで深さ20cmを測る。埋土はS K2837が灰黄褐色土の単層、S K2838・2841がやや暗い灰黄褐色土のブロックを含む灰黄褐色土に灰黄色土の柱痕が確認され、S K2841は褐灰色土ブロックを含む灰黄褐色土で上面に薄い炭層が検出されている。出土遺物はS K2842で750gの土師器が出土したのみで、他は出土遺物がまったくない。なお、S K2842出土土器の口縁部の遺存度区分はAである。本跡は規模や構造が確定できていないため、性格は不明である。出土遺物は少ないため、出土遺物から年代を推定することはできなかったが、本跡に隣接するS D2001には土壘が付随すると推測されたことから、土壘と同時存在はありえず、中世以前の可能性が想定できることや、その走行方向から古墳時代の所産と推測した。

**S A 2013** ⑤-2区 VUQ04~VB03 (第59図)

本跡はS D1016区画内の北東部の北よりに位置する。整理時に類似した規模・形態のS K2163・2265・2206・2131・2223・2222が直線的に配列することから柵列跡と認定した。切り合いはS K2265がS D2022を切っている。同方向の延長先にあるS K2224・2130は若干位置がずれるものの、形態や規模が異なるため関連しないと思われる。また、本跡もS K2265と2206の中間が離れており、すべてが単一の遺構と認定できるか問題も残している。なお、S K2206は調査時にS K2137とされたが同一番号が他の土坑にもつけ



第57図 S A 2011

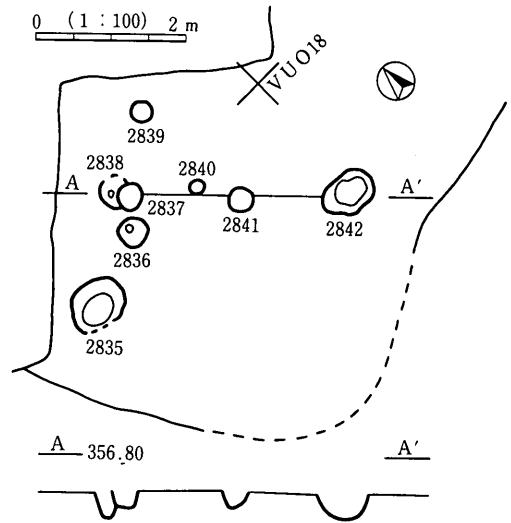
られていたため、整理段階で新たに欠番となっていたS K2206をつけた。

本跡はS K2163・2265・2206・2131・2223・2222から構成され、走行方向はN-64°-E、全長約9.5mを測る。柱間寸法は西から約0.8、4.0、1.7、1.3、1.7mとなる。柱穴跡の平面形はいずれもほぼ円形を呈し、その規模はS K2163が66×58cmで深さ52cm、S K2265が64×52cmで深さ14cm、S K2206が56×48cmで深さ16cm、S K2131が58×48cmで深さ28cm、S K2223が52×48cmで深さ30cm、S K2222が36×34cmで深さ32cmを測る。いずれも断面形は方形となる。埋土はS K2163が黒褐色土、S K2265・2206が黄褐色土、2131が暗褐色土の単層で、S K2222・2223は上層の黄灰色土と下層の黒褐色土に分層されている。なお、S K2131では埋土中で板材が出土している。

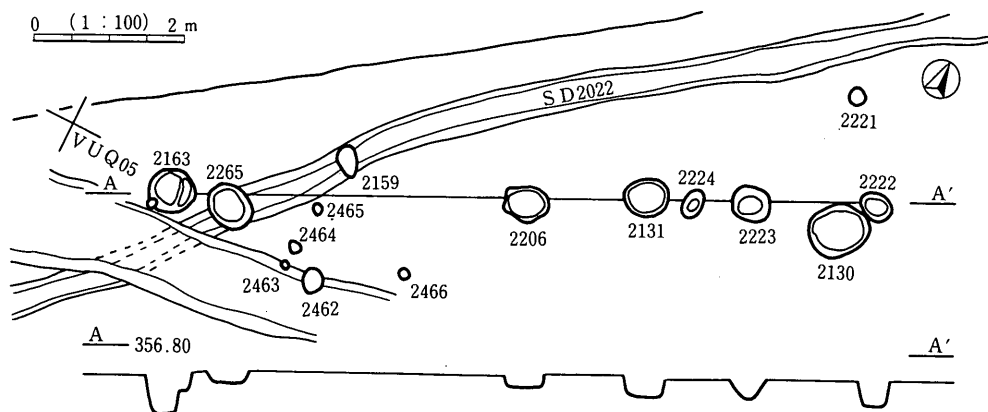
出土遺物は僅かな土師器が採取されたのみで、最大でもS K2163の土師器175g・弥生土器20gで、残りはS K2265が10g、S K2206が15g・S K2131が20g、S K2223が0g、S K2222が25gである。本跡の軸方向は古墳のものとは厳密には異なるが、他の時代の軸方向と比べたなかでは最も古墳時代の遺構方向に近いので古墳時代の所産と考えた。また、性格については不明ながらS T2009周辺を区画する施設の可能性もある。

イ 柱穴跡の可能性のある土坑

ここでは前項で掲載した以外で、具体的な建物跡や柵列跡とは認定されなかったが、古墳時代の柱穴跡の可能性のある土坑をまとめて記述する。該当する土坑はS T2009周辺のS K2127・2128・2129・2078・2151・2164・2171・2173・2066・2490・2077・2076・2067、さらに遺跡内各所で検出されたS K1021・1042・1060・1067・2010・2013・2020・2031・2076・2085・2105・2169・2178・2228・2246・2285・2348・2351・2367・2376・2377・2389・2414・2421・2429・2448・2478・2584・2622・2749・2750・2753・2755・2828・2833・2863・2870がある。これに加えてS T2015のS K2430、S A2012のS K2841もやや異質な存在なのでここであらためて扱った。これらの柱穴跡は出土遺物や埋土から古墳時代の所産と特定できたもので、柱穴跡の可能性が想定できる根拠は柱痕が確認できたこと、上記の建物跡・柵列跡を構成する柱穴跡と類似した形態・規模となる点である。しかし、必ずしも柱穴跡と断定できるものではな



第58図 SA2012



第59図 SA2013

く、周囲に類似遺構がなく、単独で存在するなど柱穴跡とするのに不安が残るものもある。ここでは、調査段階での建物・柵列跡の認定が不十分であったことを鑑み、その可能性がある遺構として加えることにした。また、一方で柱穴跡と思われるが、古墳時代と特定できない遺構は除外しており、本来存在したであろう柱穴跡の一部しか扱えていない点は注意されたい。さらに、ここでは柱穴跡の可能性がある土坑について個別的に記述するため、周囲の土坑との関係については第1面検出の遺構割付図で補っていただきたい。なお、先述したようにS T2009、S A2007・2008周辺では柱穴跡と思われるものが多く散在していたが、これらの柱穴跡のみについては上記の建物跡や柵列跡との関連も注目されるため、別にまとめて扱うことにした。

#### A S T2009、S A2007・2008周辺の柱穴跡の可能性がある土坑 (第60図)

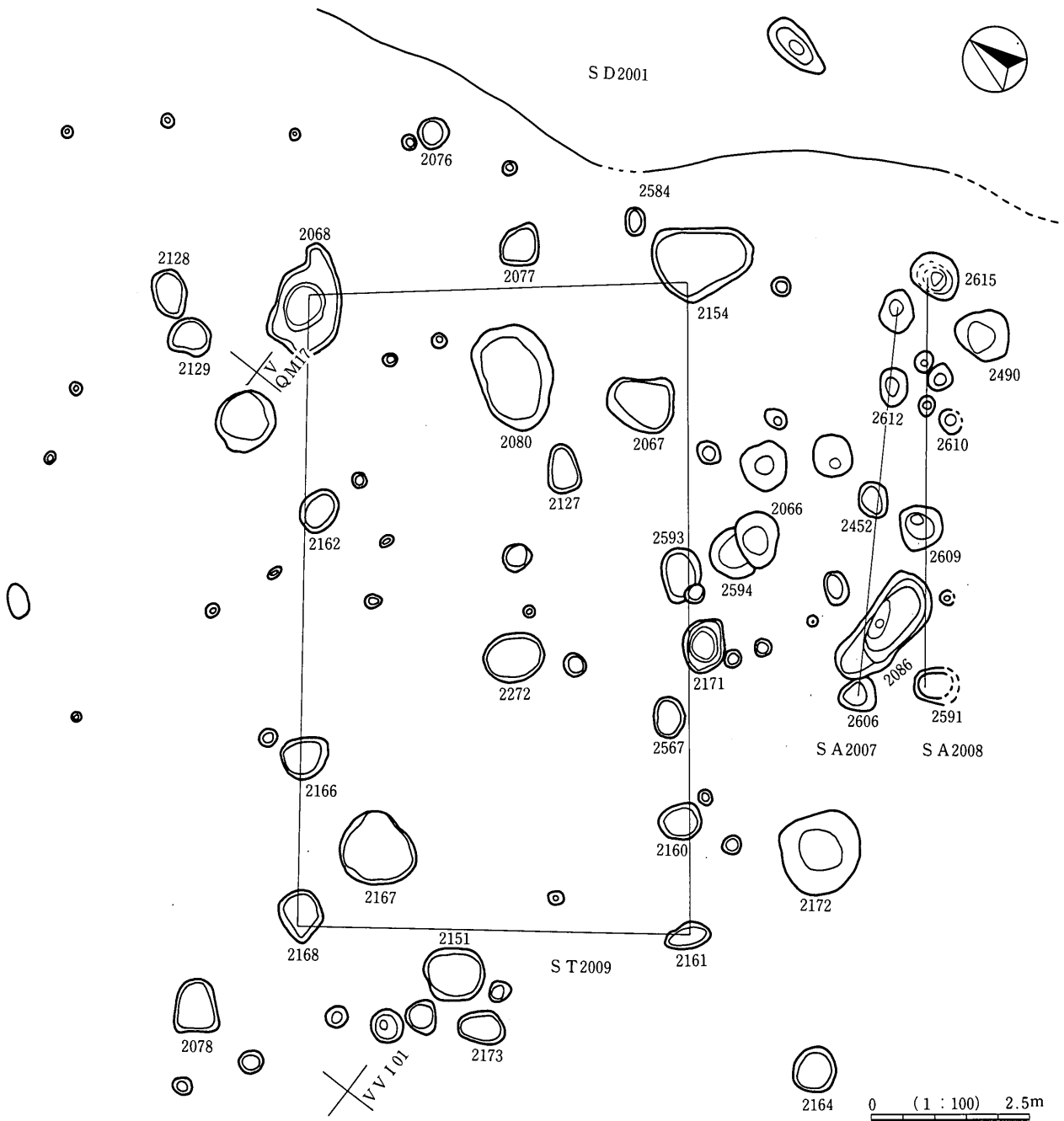
S D1016区画内の北東部では規模の大きな建物跡S T2009、その南に柱穴列S A2007とS A2008を整理段階で認定した。その周辺では構築物として把握できなかったものの、形状から柱穴跡の可能性があると思われるS K2128・2129・2078・2164・2171・2173・2066・2490・2077・2076・2067が散在する。S T2009、S A2007・2008ともに認定に不安を残し、この周辺での調査段階の建物跡認定の検討が不十分なことから、これらの土坑がS T2009等に関連する可能性もある。しかも、柱穴跡と思われる土坑が比較的近接することからも、ここでまとめて扱うことにした。なお、この周辺は中世の館に関連すると見られる建物跡が重複している。しかし、中世の建物跡も整理段階で認定したもので、必ずしも断定しきれないところがあり、一部には古墳時代の柱穴跡を誤認している可能性もある。ちなみに、中世と推測した柱穴跡は中世遺物の出土が認められなかったものの、石を出土する特長的があり、しかも中世S D2001とほぼ一致する方向に配列すると看取されたことを根拠としている。

#### S K2066 ⑤-2区 VQN20 (第61図)

S T2009南側に位置する。調査では南半分がS K2066として先行調査され、後に西半分がS K2594として調査された。調査所見からするとS K2594がS K2066に切られる2基の土坑の切り合いであるが、S K2594の平面形はS K2066と類似し、しかも底面の標高もまったく同じであることから同一土坑内の埋土の違いを誤認したものと考え、S K2594を欠番としてS K2066に統一した。また、調査ミスで同一の遺構番号を中世柱穴跡にも重複して付したが、こちらは整理時にS K2087に変更した。平面形はS K2594を合わせると長軸138cm、短軸72cmの楕円形を呈し、S K2066とされた部分のみならば、70cm前後の不整形となる。断面形は検出面からの深さ約26cm前後のU字型を呈する。ただし、検出段階では本土坑上部には浮いた状態の土師器の集中が検出されており、本来は35cm以上の深さとなると思われる。埋土はS K2066部分では上層に焼土・炭化物が入る黄褐色土に灰褐色土が混じる土、下層に薄い炭化物・焼土の混じらない同層、最下層に灰層が主体となる層がある。S K2594部分はブロック状の砂質粘土を混じる土である。遺物は土師器破片があり、S K2066とした部分からは総重量3180g、S K2594とした部分からは10g得られている。また、口縁部の遺存度区分は5/8までの破片が見られるBである。本跡は底面の灰層を重視すれば何らかの廃棄にかかわる土坑とも思われるが、周囲の土坑との関係や形状からすると柱を抜いた痕跡とも思われる。

#### S K2067 ⑤-2区 VQO19 (第62図、P L 8)

S T2009南辺ラインに近接した場所ながら、若干内側に入った場所に位置する。長軸104cm、短軸84cmの南側がやや膨れた楕円形を呈し、柱穴跡とすると規模の大きな部類に属する。断面形は壁がほぼ垂直で底面が平坦となる方形で、検出面から底面の深さは80cmを測る。埋土は2層に分層され、上層が炭化物を多く含む暗褐色土であり、下層が炭化物を余り含まない暗褐色土である。遺物は総重量6440gの土師器がある。個々の土器の出土標高の記録がないため、詳細な出土層位については明らかでない。写真記録からみ



第60図 S T2009、S A2007・2008周辺の柱穴跡分布

ると上層から中位にかけて礫若干・土師器が出土しており、下層では土師器の出土は少ないようである。この土坑から出土した土師器の口縁部遺存度区分は口縁部6/8以上の残存個体を含むCで、底面上に土器、中位以上では炭化物・土器の出土が顕著な土が認められた。本土坑は大量の土器・炭化物が多く含まれる点から廃棄土坑の可能性もあるが、位置的にはS T2009の南辺の柱穴跡に該当する可能性があり、土器・炭化物の出土が上部であることを考えると柱を撤去した後に廃棄土坑として利用、あるいは周辺の廃棄行為で発生した破片が混入したと考えられる。

**S K2076** ⑤-2区 VQN16・17 (第61図)

S T2009東側に位置する。平面形は直径43~50cmのやや不整形の円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面が平坦な方形の断面形である。埋土は2層に分層され、上部に炭化物を多く含む黒褐色土が薄く載り、主体を占めるのは炭化物を少量含む暗褐色土である。遺物は土師器破片が290gと少量得られたのみである。これ

らの遺物は少量の礫と共に埋土2層から出土している。遺物から古墳時代の所産で、形状から柱穴と思われた。

#### S K 2077 ⑤-2区 VQO18

S T 2009の東辺ラインの東側に近接して位置する。平面形は長軸68cm、短軸56cmの楕円形で、検出面からの深さは6cmと非常に浅い。埋土は炭化物を大量に含む黒褐色土の単層である。出土遺物は総重量100gの僅かな土師器小片があるに過ぎず、口縁部の遺存状態の区分も3/8までの破片しか認められないAである。形状からは柱穴跡とは考えにくく、炭化物集中としたほうが良いと思われる。しかし、位置的にはS T 2009に関連した柱穴跡の可能性も残される。積極的に柱穴跡とは断ずることができないものの、関連する可能性もあるのでここに掲載した。

#### S K 2078 ⑤-2区 VQH19 (第62図、P L 8)

S T 2009北西部に位置する。本跡とS K 2173を結ぶラインはS T 2009西辺と約1.5m離れて平行し、このラインに直交するS K 2129を結ぶラインもS T 2009北辺とは約1.7m離れて平行する。このことからS K 2173・2129やS T 2009と関連すると思われるが、具体的な構造や関係はわからなかった。平面形は長軸82cm、短軸68cmの西側が膨れる不整楕円形を呈し、壁はほぼ垂直で底面が平坦な方形の断面形である。検出面から底面までの深さは37cmを測る。埋土は炭化物を少量含む暗褐色土の単層である。遺物は総重量1250gの土師器があり、口縁部の遺存度区分はBである。埋土は分層されていないが、大型破片は上部から出土している。

#### S K 2085 ⑤-2区 VQF08 (第61図)

S T 2009北西部に若干離れて位置する。厳密にはS T 2009とは関連しないと思われるが、位置的に近いため、ここで扱う。平面形は長軸52cm、短軸43cmの円形で、断面形は方形となり検出面からの深さ37cmを測る。埋土は暗褐色土の単層で中位より口縁から頸部の大型破片が出土した。土器は重量260gで口縁部遺存度区分はCである。ただし、これは口縁部の遺存が良好な破片が含まれるためであって略完形品を含むものではない。形状から柱穴跡と捉えた。

#### S K 2127 ⑤-2区 VQL19

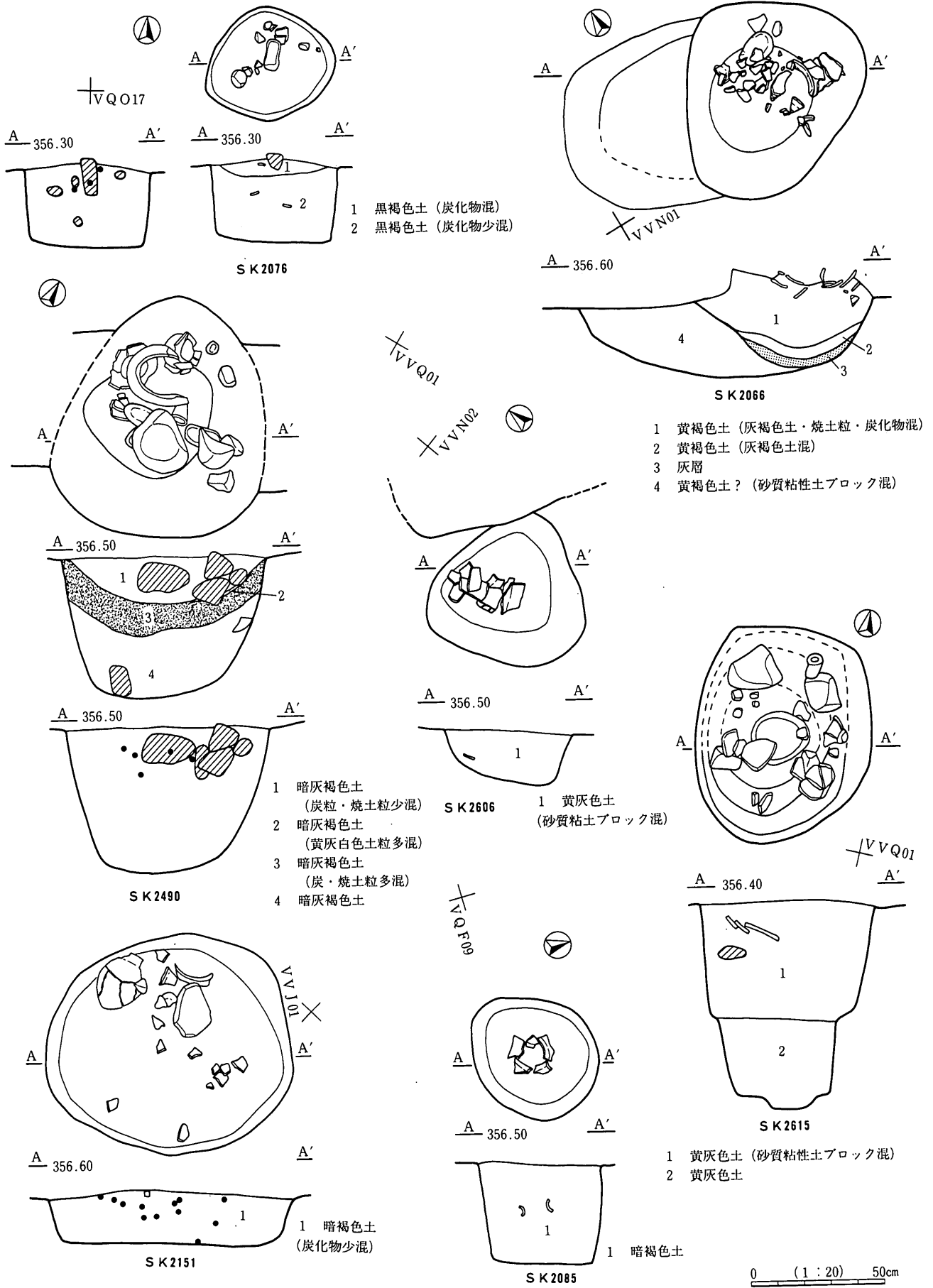
S T 2009範囲内に位置する。長軸72cm、短軸45cmの楕円形を呈し、壁はほぼ垂直で底面が平坦となる長方形の断面形である。検出面からの深さは44cmを測る。埋土は上層の一部に炭化物を多く含む暗褐色土、下層の大部分が炭化物を余り含まない暗褐色土である。出土遺物は非常に少なく、総重量約185gの僅かな土師器小破片とミニチュア土器1点が得られたに過ぎない。性格は子細不明であるが、配置場所や周囲の柱穴跡の形状比較から柱穴跡と考えた。時代的な根拠は弱いだが、出土遺物は古墳時代の所産で占められる点や周辺の中世柱穴跡とは形状が異なることから消極的ながら、古墳時代の所産と考えた。

#### S K 2128 ⑤-2区 VQN16 (P L 9)

S T 2009の北東隅の柱穴跡S K 2068の北側に位置し、S K 2129と隣接する。平面形は長軸76cm、短軸54cmの楕円形を呈し、壁はほぼ垂直に近い逆台形の断面形を呈する。検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土は下部に暗褐色土があり、上部に炭化物を大量に含む暗褐色土、炭化物を含むにぶい黄褐色土、炭化物を含む黒褐色土、黄色褐色土砂層がある。遺物は総重量約1160gの土師器があり、埋土上層から多く検出されている。しかし、破片が多く、口縁部遺存度区分は3/8までの遺存しか認められないAである。本土坑は形状から柱穴跡の可能性があり、S K 2129とは隣接することからも関連すると思われる。

#### S K 2129 ⑤-2区 VQL16 (第62図、P L 9)

S T 2009の北側にS K 2128と隣接して位置する。本跡とS K 2078を結ぶラインはS T 2009に平行し、相互に関連すると思われる。平面形は直径56cm前後の不整円形を呈し、壁はほぼ垂直で底面が平坦な方形の断面形を呈する。埋土は大きく3層に分層され、底面上には炭化物を若干含む黒褐色土が厚く堆積し、中位には炭化物を大量に含む黒褐色土がみられる。この2層上面から完形の土器がつぶれた状態で検出され



第61図 S A2007・2008、S T2009周辺の柱穴跡

ており、その上部に土器上部の僅かな範囲に暗褐色土がレンズ状に入り込む。出土遺物はこの略完形になる1個体を含めて土師器総重量約4065gが得られ、口縁部遺存度区分はCである。他には珪質頁岩製砥石1点がある。なお、土師器は土坑最上部で出土したため、一部は検出時に削平した可能性がある。本土坑は位置や形状から柱穴跡と思われ、柱穴跡廃絶後に炭化物・土器が入ったと推測される。

**S K 2151** ⑤-2区 VVJ01 (第61図、P L 9)

S T 2009南西側に近接して位置する。平面形は直径80~90cmの円形で、壁はほぼ垂直で底面は平坦な浅い方形の断面形となる。検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土は炭化物を少量含む暗褐色土の単層である。遺物は南西部で土師器と比較的大きめの礫が一つが出土したが、他は小破片が散在的に検出されたに過ぎない。出土した土師器は総重量950gあり、大型破片も含まれるが、接合作業では口縁部4/8・5/8までの破片しか認められない口縁部遺存度区分Bである。規模がやや大きめで柱穴跡とするには問題が残るが、S T 2009周辺では類似規模の柱穴跡もあるため、ここで扱った。

**S K 2164** ⑤-2区 VVK04 (第85図、P L 10)

S T 2009の南西側にやや離れて単独で存在し、S A 2007の延長先にもあたる。ただし、その中間には井戸跡S K 2172が存在し、他の柱穴跡も見られないなど直接関連はないと思われる。平面形は直径63~69cmの円形を呈し、断面形は東側底面がやや深い逆台形である。東側の深い部分で検出面からの深さは20cmである。埋土は大量の炭化物を含む暗褐色土の単層で、上部を中心に土器が集中的に出土した。土師器は約1260gあり、口縁部遺存度区分はCである。このなかで略完形となる甕は表土除去の際に一部を削平してしまっている。形状や規模からは柱穴跡と推測したが、単独で存在するため断定はできない。

**S K 2171** ⑤-2区 VVM01 (第62図、P L 10)

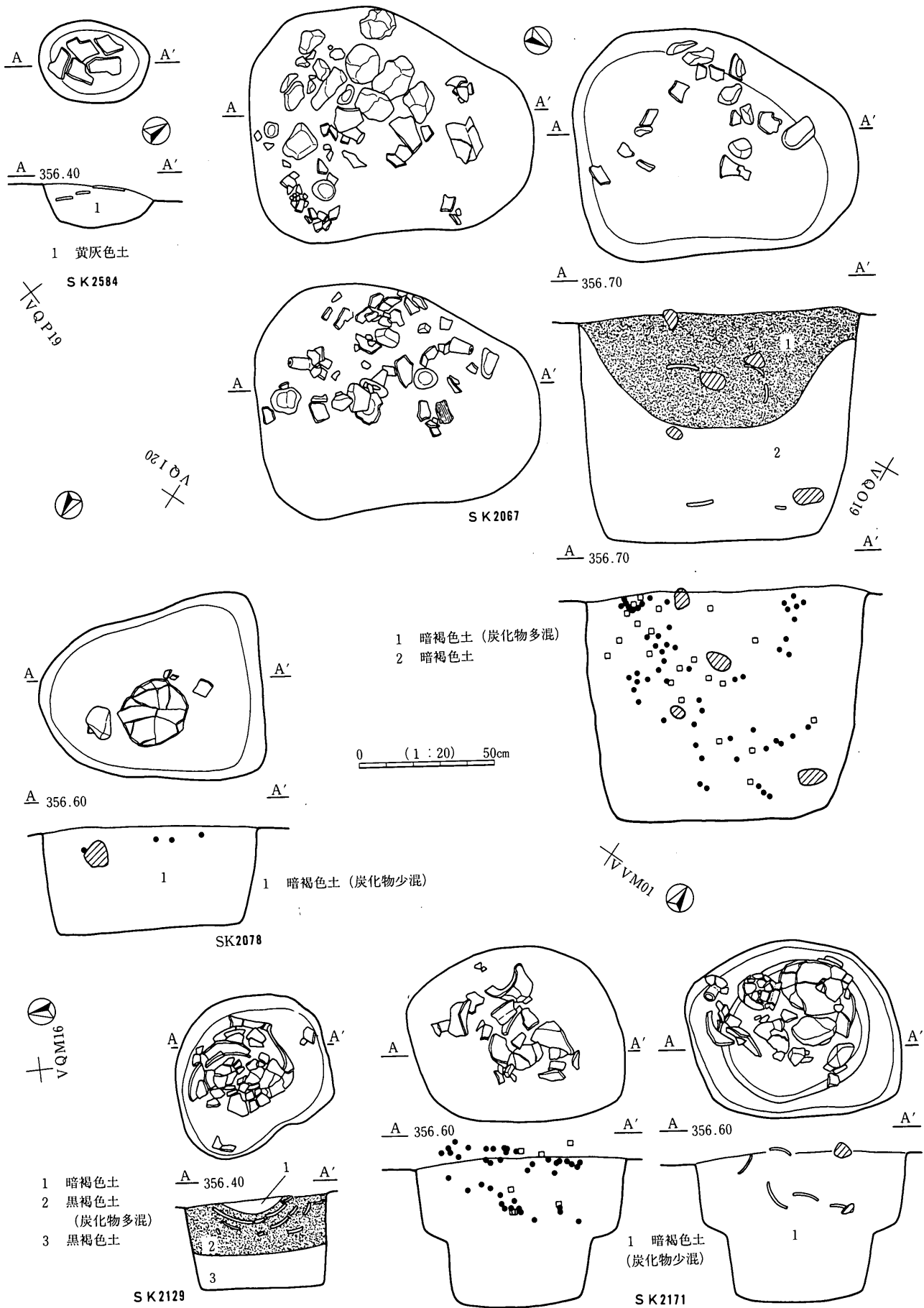
S A 2009の南辺ラインに接するように位置する。平面形は長軸77cm、短軸64cmの不整楕円形を呈し、検出面から26cmのところではテラスを形成して、中央部が直径50cmほどの円筒形にさらに落ち込む。検出面から底面までの深さは52cmを測る。埋土は炭化材も少量含む暗褐色土の単層で、埋土上部から中位にかけて総重量4720gと多量の略完形・破片の土師器が礫若干と共に出土し、口縁部遺存度区分はCとなった。これらの土器出土から廃棄土坑とも考えたが、建物跡に近接しており、形状・規模からも柱穴跡の可能性があると考えた。

**S K 2173** ⑤-2区 VVJ02

S T 2009西辺中央部のやや離れた位置にある。本跡とS K 2078を結ぶラインと直交するS K 2078-2129を結ぶラインは、いずれもS T 2009の西・北辺から約1.5~1.7m離れて平行することから、これらの土坑と共にS T 2009と関連すると思われる。S T 2009西辺中央付近に位置することからS T 2009の柱穴跡とも考えたが、東辺の対応する位置にあるS K 2077が積極的に柱穴跡と捉えられなかったために、本跡はS T 2009に含めなかった。平面形は長軸72cm、短軸46cmの楕円形を呈し、断面形は浅い長方形で検出面からの深さは20cmを測る。埋土は炭化物を若干含む灰褐色土の単層である。遺物は僅か約295gの土師器が全体に破片で散在的に出土したのみで、口縁部遺存度区分もBである。

**S K 2490** ⑤-2区 VVP01 (第61図、P L 16)

S T 2009の南側、S A 2008に近接して位置する。形状から柱穴跡と想定したが、建物跡とは組めなかった。なお、調査時に⑤-2区の調査区壁際に設定した排水用の溝で上部を部分的に破壊してしまっている。平面形は78~88cmのやや不整形な円形を呈し、断面形はU字状で、検出面から底面までの深さは54cmを測る。埋土は4層に分層され、底面上には略完形土器・大型破片を含む暗灰褐色土の4層、中位には炭化物・焼土を多く含む暗灰褐色土の3層があり、その上部の東よりの部分に薄い黄灰白色粘土粒を多く含む暗灰褐色土の2層、最上部には礫を数点含む暗灰褐色土がある。出土遺物は土師器約1230gがあり、口縁部遺



第62図 S T 2009周辺の柱穴跡



存度区分も6/8以上の破片が見られるCである。本土坑は形状から柱穴跡と考えたが、周囲の土坑との関連は明らかにできなかった。

**S K 2584** ⑤-2区 VQO19 (第62図)

S T 2009東側に位置する。平面形は長軸40cm、短軸30cmの楕円形で断面は浅いU字状を呈して検出面からの深さ16cmを測る。埋土は黄灰色土の単層で比較的大型破片が集中して出土した。しかし、これらの土器は整理時までには紛失してしまった。形状から柱穴と考えた。

**B** その他の柱穴跡と思われる土坑

**S K 1021** ⑤-1区 IIIYR19 (第63図)

S D1016区画内西部に位置する。平面形は直径64cmの円形で、断面形はU字状を呈して検出面からの深さ約40cmを測る。埋土は5層に分層され、中位の2層と底面の5層は薄い炭層である。出土遺物は200gの土師器破片が得られたのみである。

**S K 1042** ⑤-1区 IIDS11・DT11 (第63図)

S D1016区画西外側にS K1041に近接して位置する。平面形は直径70cm前後の円形で、断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約54cmを測る。埋土は赤褐色土を主体とし、上部にわずかに灰褐色土が見られる。出土遺物は少なく、下層から礫1点と土器片が75g得られたに過ぎない。古墳時代の所産とする根拠は埋土以外にはなく、時期判断に不安を残す。形状からは柱穴の可能性があると捉えた。

**S K 1060** ⑤-1区 IIEH12 (第63図)

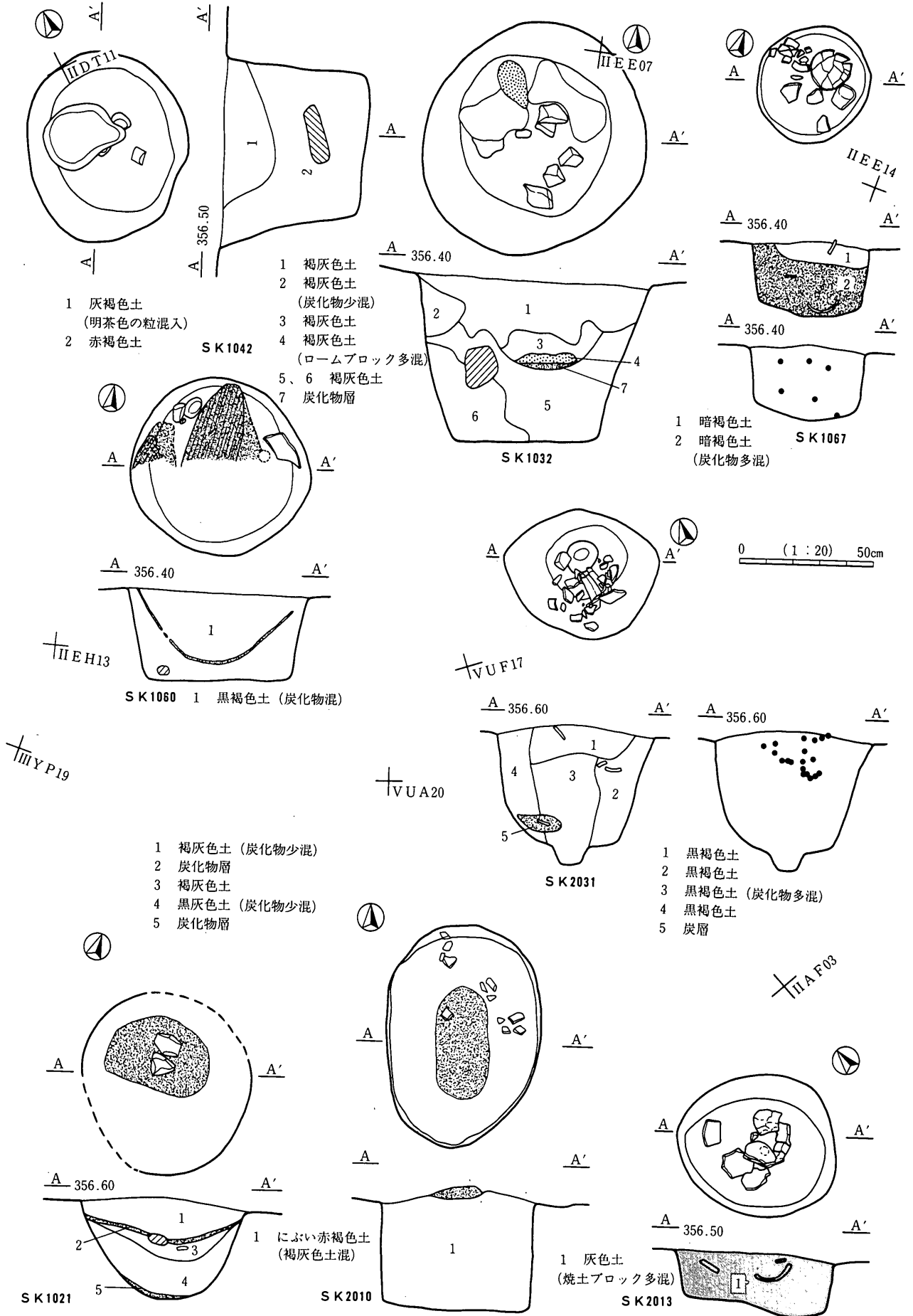
S D1016区画の西外側のS D1007を挟んでS K1067と対峙する位置にある。第1面では見逃し、第2面で検出した。平面形は直径66cm前後の円形を呈し、壁はほぼ垂直で底面が平坦な方形の断面形を呈する。検出は2面であるため浅いが、本来の深さは50cm前後と思われる。埋土は炭化物を含む黒褐色土で、中位に薄い炭層がレンズ状に入る。この炭層は平面で検出したところ並列する薄い板材数枚が炭化したものであることが判明した。遺物は土師器小片75gが得られたのみである。S K1067と関係すると見受けられたことや炭層の検出から古墳時代の所産と推測した。埋土中位で検出された炭化物の解釈に問題を残すが、形状から柱穴の可能性があると捉えられ、位置や形状が類似するS K1067とS D1007を挟んで対峙し、しかもこの位置がS D1016区画内を貫く通路の想定位置に一致することからS D1007を横断するための施設の可能性がある。

**S K 1067** ⑤-1区 IIEE13 (第63図)

S D1016区画の西外側のS D1007脇にあり、S K1060とはS D1007を挟んで丁度対峙する位置にある。第1面で見逃し、ダメ押し面とした第2面で検出した。平面形は直径43cm前後の円形を呈し、断面形は壁が垂直となるU字状を呈する。埋土は2層に分層され、主体は下層の炭を多く含む暗褐色土であり、上層に薄い炭をあまり含まない暗褐色土が入る。遺構の規模はあまり大きくはないが、2層中で若干の標高差を持ちながら比較的多くの土器が得られ、700gを量る。形状からは柱穴の可能性があり、形状の類似や位置からS K1060と関連すると思われる。遺跡を貫く通路がS D1007と交差する部分に設置された施設と思われるが、埋土下部で多くの土器、炭化物が出土した点は問題が残る。

**S K 2010** ⑤-1区 VUA20 (第63図)

S D1016区画内西北部に位置する。長軸82cm、短軸60cmの楕円形の平面形を呈し、壁はほぼ垂直で底面が平坦な方形の断面形である。検出面からの深さは40cmを測る。埋土はにぶい赤褐色土に褐灰色土のまじる土の単層で、検出面にあたる最上面には焼土・炭化物層が載る。出土遺物は非常に少なく、わずかな土師器小片が得られたに過ぎない。古墳時代の所産とした根拠は最上面の炭・焼土層の存在のみなので、時期認定に不安も残る。



第63図 柱穴跡 1 (SK 1021・1032・1042・1060・1067・2010・2013・2031)

**S K 2013** ⑤-1区 IVAE03 (第63図、P L 5)

S D1016区画内西北部に位置する。直径52~60cmの円形を呈し、断面形は方形である。検出から底面の深さは24cmを測る。埋土は焼土ブロックを大量に含む灰色土の単層で、遺構の規模は小さいながらも壺1個体分830gが破片で出土している。形状から柱穴跡の可能性はある。

**S K 2020** ⑤-1区 IVAF03

S D1016区画内北西部に位置する。長軸60cm、短軸44cmの楕円形の平面形で、検出面から底面の深さ16cmを測る浅い逆台形の断面形を呈する。埋土はやや砂質の灰色土で、土師器小破片340gが得られた。土師器の出土から古墳時代の所産で、形状から柱穴であろうと推測した。

**S K 2031** ⑤-1区 VUF16 (第63図、P L 5)

S D1016区画内北西部、調査地区⑤-1区の東端に位置する。直径50~60cmのやや不整形な円形を呈し、断面はU字状で、柱痕部分の底面が一段落ち込む。検出面からの深さは50cmを測る。埋土は4層に分層され、1層が黒褐色粘土、2層が大量の炭を含む黒褐色土、3層が黒褐色土で、4層が部分的な炭化物のブロックである。このうち1・2層が柱痕で3層が柱周囲を埋めた土と思われる。出土遺物は土師器破片1355gがあり、一部柱痕にかかって3層の南側にまとまっていた。形状や埋土から柱穴跡と思われるが、本土坑が⑤-1区の調査地区東端に位置することもあり、周囲の関連する柱穴については確認できていない。

**S K 2105** ⑧-1区 IVAQ11

S D1016区画内南西部中央よりに位置する。本跡はS K2197完掘後に検出され、本跡がS K2197に切られると思われるので古墳時代の所産と考えた。平面形は直径50~66cmの円形で、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは約30cmである。埋土は暗褐色土の単層で、出土遺物は重量185gの土師器がある。形状から柱穴跡と思われたが、周囲の土坑との関連は不明である。

**S K 2169** ⑤-2区 VUN11

S D1016区画内の中央、北寄りに位置する。平面形は直径44~37cmの円形で、断面形は方形を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。埋土は黒褐色粘土が混じる暗褐色粘土の単層で、遺物は埋土上層を中心に検出された総重量165gの僅かな土師器がある。この僅かな土師器の出土から古墳時代の所産としたが、根拠は弱い。周囲の類似した土坑と関連するものと思われる。

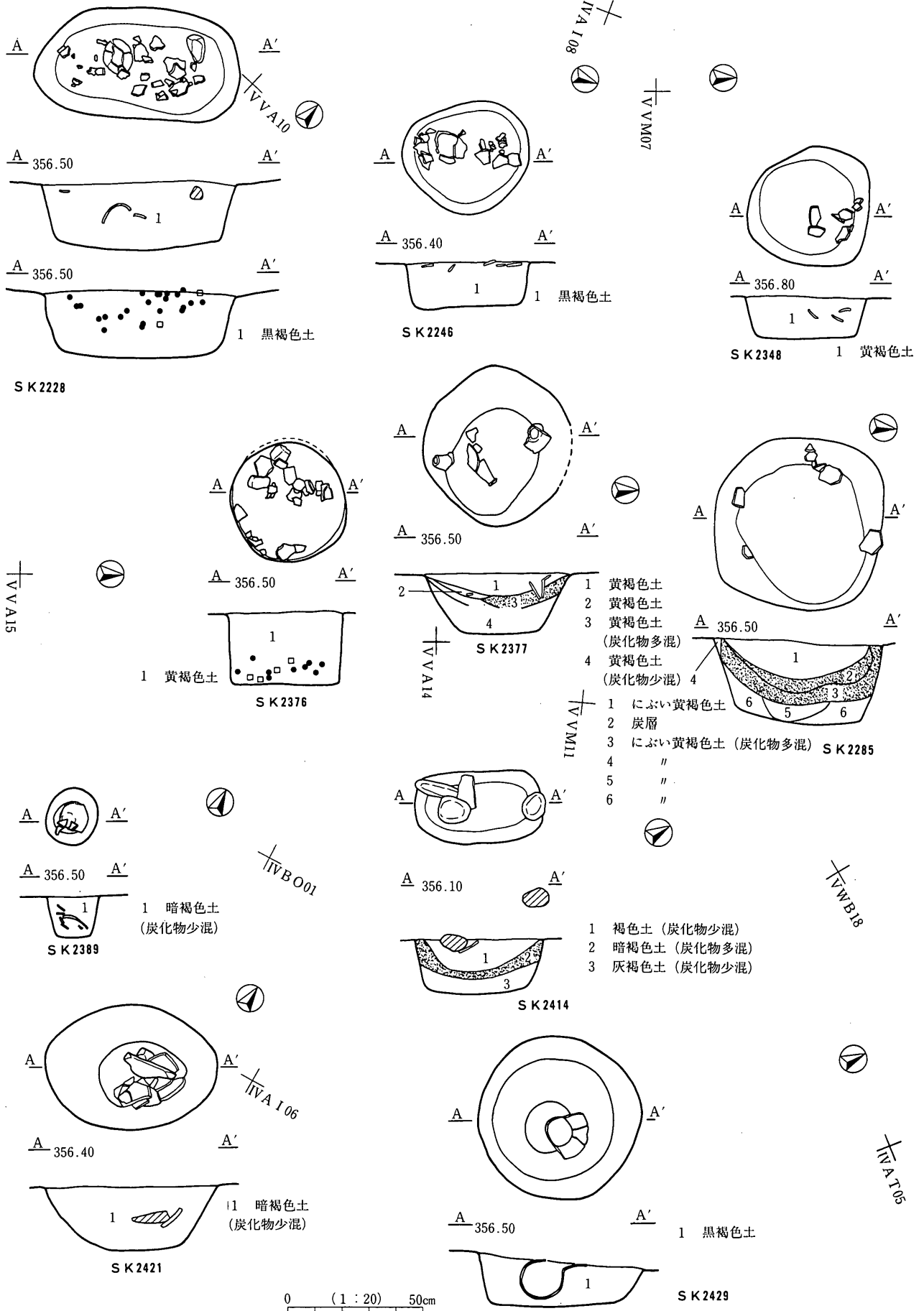
**S K 2178** ⑤-2区 VVD02 (P L10)

S D1016区画内北東部の中央よりに位置し、周囲には類似した遺構がなく、ほぼ単独で存在する。平面形は長軸58cm、短軸45cmの楕円形を呈し、検出面から6cm前後掘り込まれたところで一旦平坦面を形成し、底面中央がさらに直径22cm前後の円筒型に2段に落ち込む。検出面からもっとも深いところで14cmを測る。埋土は黄灰色の単層で埋土上部中央に小礫が多数検出された。遺物は重量1440gの土師器の小破片が僅かに得られたに過ぎない。埋土や僅かな土器から古墳時代の可能性があると考えたが、礫を多数出土した土坑は近世と中世の土坑に多い傾向からすれば、古墳時代と断定するのに不安がある。

**S K 2228** ⑤-2区 VUT10 (第64図、P L13)

S D1016区画内の北東部中央よりに位置する。平面形は長軸75cm、短軸40cmの楕円形を呈し、断面形は浅い長方形を呈する。底面は平坦で検出面からの深さは25cmを測る。埋土は黒褐色土の単層で、埋土中から重量1600gの土師器破片が得られ、なかには小型丸底土器の大型破片も含まれる。ただし、口縁部の破片の残存具合では4/8~5/8までの破片しか見られず、口縁部の遺存状態の区分はBである。従って、完形土器の廃棄ではなく、土器の破片が入ったと見られる。規模から柱穴の可能性があると考えられ、周囲にある時期不明とされた柱穴状の土坑との関連も注意される。

**S K 2246** ⑧-1区 IVAI07 (第64図)



第64図 柱穴跡 2 (S K 2228・2246・2285・2348・2376・2377・2389・2414・2421・2429)

S D1016区画内南西部中央よりに位置する。平面形は直径40～48cmの不整楕円形を呈し、断面形は長方形で、検出面から底面までの深さは16cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は530gの土師器破片があり、埋土上層から比較的集中して出土し、接合作業の結果、略完形にまとまった。規模が小さい点や形状から柱穴跡と考えられ、周囲にも散在する同様の土坑と関連して構築物を構成する可能性もある。しかし、中世の掘立柱建物跡が存在する付近にあたるため、周囲の柱穴跡も年代を決定できなかったものも多く、具体的な構築物は認定することはできなかった。

**S K 2285** ⑧-2区 VVL10 (第64図)

S D1016区画内南東部東よりに位置する。平面形は径62cm前後の隅丸方形、断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土は6層に分層され、埋土下部と壁際には炭化物を含むにぶい黄褐色土ブロック土があり、同質の土層が炭層を挟んで3～6層に分層されている。その上部に炭化物主体の2層、最上部にはにぶい黄褐色土の1層が入る。遺物は土師器の破片が1270g得られ、遺構内から散在的に出土している。埋土に炭化物層が認められたことや土師器の出土から古墳時代の所産で、規模から柱穴跡の可能性があると考えた。

**S K 2348** ⑧-2区 VVM06 (第64図)

S D1016区画内南東部に位置する。平面形は90×86cmの円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは約15cmほどである。埋土はにぶい黄褐色土の単層で出土遺物には高坏1個体分の破片約35gが出土している。埋土及び少量ながらの出土遺物から古墳時代の所産と推定したが、時期認定に不安が残る。また、柱穴跡としたものの、規模がやや大きめで柱穴跡以外の可能性も残される。周囲では南側に類似形態の土坑があるが、これらの土坑は時期不明で本跡との関係は明らかでない。

**S K 2351** ⑧-2区 VVI10

S D1016区画内の南東部に位置する。平面形は直径22cm前後の円形を呈し、断面形は逆台形となる。検出面から底面までの深さは14cmを測る。埋土は黄褐色土の単層である。出土遺物は土師器大型破片60gがあるのみである。埋土からは古墳時代の所産、形状から柱穴と推測される。本土坑西側には類似した柱穴状の土坑が散在しているが、建物跡などの構築物は認定できなかった。

**S K 2367** ⑧-1区 IVAQ11 (第 図)

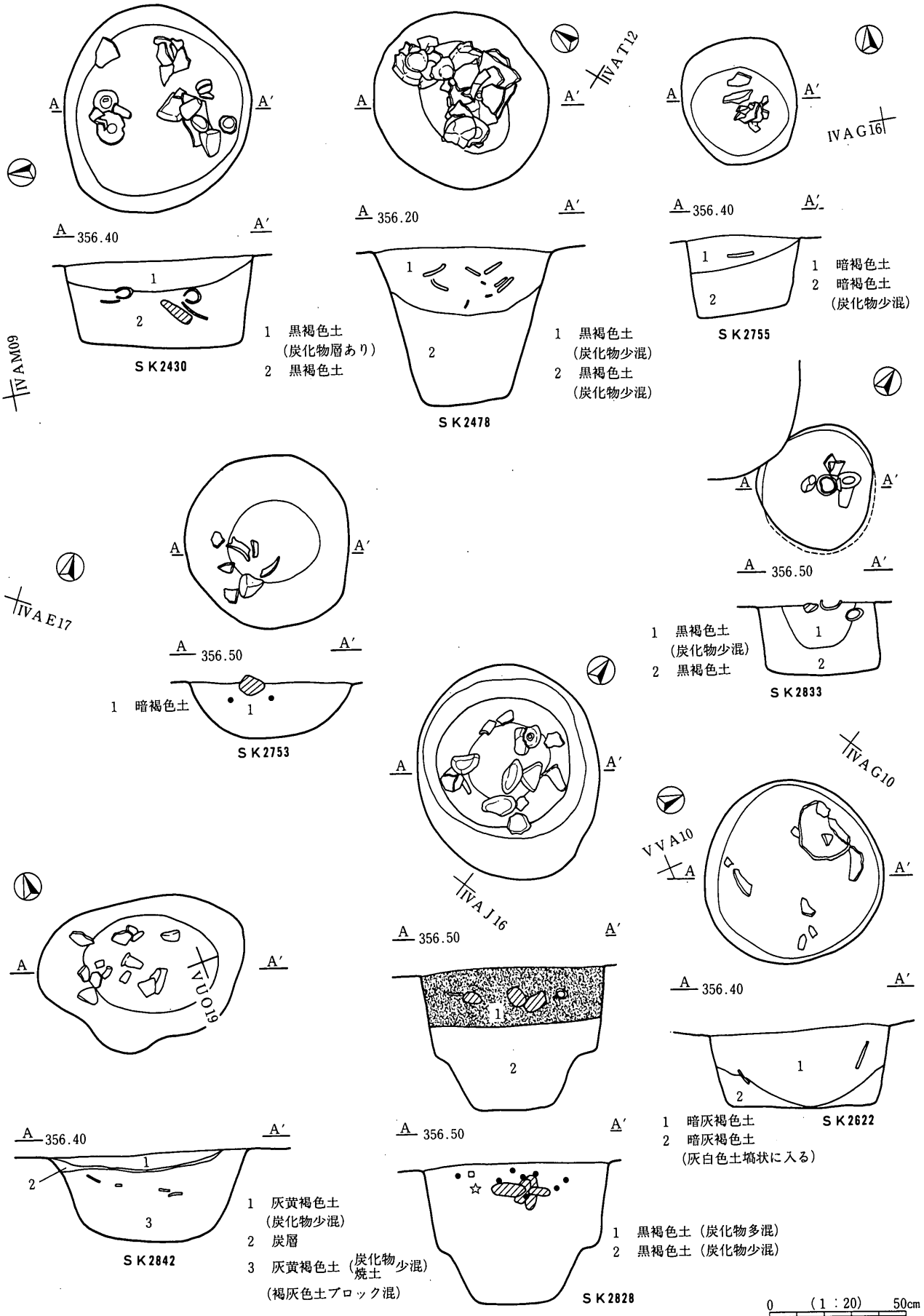
S D1016区画内の南西部、S D1016よりに位置し、S K2197の調査後に検出された。平面形は22×18cmの円形を呈し、検出されたS K2197底面からの深さは約14cmである。埋土はにぶい黄褐色土の単層で出土遺物はない。S K2197は埋土に炭化物を多く含むことから古墳時代の所産と考えられ、このS K2197に切られると見られることから本跡は古墳時代の所産と考えた。さらに、周囲には規模が一回り大きなS K2015、さらに東側に若干離れてS K2477があるが、関連は不明である。

**S K 2376** ⑧-2区 VUT14 (第64図)

S D1016区画内南東部の中央よりに位置する。平面形は直径45cmの円形で、検出から底面までの深さは27cmを測る。埋土は黄褐色土の単層で、底面近くに多数の土師器破片を出土した。これらの土師器破片は825gあるが、出土分布は散在的であり、接合作業でもあまり接合しなかった。形状や規模から柱穴跡と考えられ、周囲には類似形態のS K2377がある。

**S K 2377** ⑧-2区 VUT13 (第64図)

S D1016区画内南東部の中央よりで検出された。平面形は直径55cm程度の円形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは22cmを測る。埋土は上部のみ記録があり、4層に分けられている。すなわち、埋土中位には炭化物を含む4層のにぶい黄褐色土、その上に同質の炭化物を大量に含む3層と炭化物ブロックを少量含む2層、さらに上面には炭化物を少量含むにぶい黄褐色土がある。遺物は土師器710gと



第65図 柱穴跡3 (SK 2430・2478・2622・2753・2755・2822・2828・2833・2842)

頁岩製の砥石1点があり、高坏の破片が散在的に1層下部前後から出土している。本土坑は形状から柱穴の可能性があり、近接するS K 2376とは規模や平面形が類似している。

**S K 2389** ⑧-2区 IVAT01 (第64図)

S D 1016区画内の南東部南よりに位置する。平面形は直径20cmの円形で、断面形は深い逆台形となる。検出面からの深さは20cmを測る。埋土は炭化物粒子を多少混入する暗褐色土の単層で、埋土下部に高坏の杯部が伏せられた状態で出土している。出土遺物はこの高坏破片など土師器85gが得られている。形状から柱穴と思われ、周囲にある類似した土坑と組み合せて建物等を構成するものと思われる。しかし、具体的な建物等の認定には至らなかった。

**S K 2414** ⑧-2区 VWA13 (第64図)

S D 1016区画内の南東部の南東隅、S D 1016内側脇にあたる傾斜面で検出された。平面形は長軸48cm、短軸28cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形となる。検出面から底面までの深さは22cmを測る。埋土は3層に分けられ、底面上には炭化物を少量混入する灰褐色土の3層、中位には炭化物を大量に含む暗褐色土の2層、最上面に炭化物を少量と土器・礫が混じる褐色土の1層があり、この内1層からは拳大の礫が数点検出されている。出土遺物は僅かな土師器の破片205gがある。本土坑は形状からは柱穴跡の可能性はあるが、周囲の土坑との関連は不明である。

**S K 2421** ⑧-1区 IVAH06 (第64図)

S D 1016区画内の南西部中央よりに位置する。北側にあるS K 2328と重複するが、前後関係は明確にできなかった。平面形は長軸64cm、短軸45cmの楕円形を呈し、断面形はU字状である。検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土は炭化物が点在する暗褐色土の単層で、埋土上面には土師器小片が集中的に検出された。出土遺物は土師器580gがある。形状からは柱穴跡と思われたが、周囲にある類似形態の柱穴跡と思われる土坑との関係は不明である。

**S K 2429** ⑧-1区 IVAS05 (第64図、P L 16)

S D 1016区画内の南西部の東側に位置し、第1面で見逃し第2面で検出した。平面形は直径60cmの円形を呈し、断面形は浅い逆台形となる。第2面から底面までの深さは17cmを測るが、第1面からの深さは32cm前後と推測される。埋土は黒褐色土の単層で、土坑中央部で小型壺の略完形品がやや倒れた状態で検出されている。出土遺物は500gの土師器がある。本土坑は出土遺物から古墳時代の所産で、形状から柱穴跡と考えた。しかし、周囲にある類似土坑との関係は把握できなかった。

**S K 2430** ⑧-1区 IVAM09 (第65図、P L 16)

S D 1016区画内の南西部に位置する。第2面で検出したが、第1面の見逃しと思われる。本跡はS T 2015に関連する柱穴跡と思われるが、他の柱穴跡とはやや様相を異にするのでここでも扱うことにした。切り合いは本跡がS D 2014を切る。平面形は75~78cmの円形を呈し、断面形は浅い逆台形を呈する。第2面から底面までの深さは33cmを測るが、第1検出面からの深さは60cm前後と推定される。埋土は2層に分層され、上部には炭化物層を含む1層の黒褐色土、下部には炭化物の混入があまりみられない2層の黒褐色土がある。出土遺物は土師器の破片が2190gと比較的多く出土し、そのほとんどが2層の上部からの出土である。これらの土師器はあまり接合するものがなく、口縁部破片でみると半分前後の4/8・5/8までの残存しかみられないBであった。本土坑は構築から若干の時間差をもって土師器破片が廃棄され、最後には炭化物が廃棄されたと思われる。

**S K 2448** ⑧-1区 IVBG08

S D 1016区画内南東部の南西よりに位置する。第2面で検出したが、第1面の遺構の見逃しと思われる。切り合いは西側をわずかにS K 2449に切られる。平面形は直径65cm前後の円形を呈し、断面形は底面が東

によった逆台形を呈する。第2面からの深さは42cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物は僅か20gの土師器が得られたに過ぎない。形状からは柱穴の可能性もあるが、深すぎる点で問題がある。

**S K 2478** ⑧-1区 IVAS11 (第65図、P L16)

S D1016区画内南東部の南西よりに位置する。第2面で検出したが、第1面の遺構の見逃しと思われる。平面形は直径60～66cmの円形を呈し、断面形は逆台形となる。第2面からの深さは58cmを測る。埋土は2層に分層され、下層に炭化物粒子を微量含む上層より黒味の強い黒褐色土、上層に炭化物を多少含む黒褐色土がある。出土遺物は土師器破片4405gとミニチュア1点があり、土師器は2層から検出されている。接合作業の結果では、口縁部遺存度区分はBである。ただし、第2面で検出したために中位の土器片が重機掘削の際に削平された可能性もある。出土遺物から古墳時代の所産と推定され、形状からは柱穴と考えた。しかし、第1面からの深さがかなり深く、問題が残る。周囲の土坑との関係では北西側にS K2477がある以外は判然としない。

**S K 2622** ⑤-2区 VVA09 (第65図、P L17)

S D1016区画内北東部の西よりに位置する。平面形は直径66cmの円形を呈し、断面形は逆台形となる。検出面からの深さは30cmを測る。埋土は下層の灰褐色土の2層と、灰白色土が細かい塊状に入る1層に分層された。出土遺物は土師器破片780gがあり、2層を中心に大型破片がみられた。しかし、整理段階の接合でも略完形にはならなかった。本土坑は出土遺物から古墳時代の所産と推定され、形状からは柱穴跡の可能性があると考えた。周囲には関連しそうな柱穴跡は見当たらない。

**S K 2749** ⑦-2区 IVAJ16

S D1016区画内の南西部南よりに位置し、S K2750と並列する。平面形は直径66cm前後の円形を呈し、断面形は底面がやや不整形なU字状を呈する。検出面から底面までの深さは22cmを測る。調査記録では埋土が黒褐色土の単層ながら、周囲の地山との境が不明瞭と記載され、認定に問題が残る。出土遺物は65gの土師器しかない。形状からは柱穴の可能性があると考えたが、埋土が地山と類似することから遺構かどうか不安もある。近接して検出されているS K2828とは類似する。

**S K 2750** ⑦ IVAJ16

S D1016区画内の南西部南よりに位置し、S K2749と並列する。平面形は直径43～53cmの楕円形ぎみの円形を呈し、断面形は浅い逆台形となる。検出面から底面までの深さは6cmと浅い。埋土は黒褐色土であり、周囲の地山との境が不明瞭である。出土遺物は焼けた獣骨細片(種・部位不明)が若干あるのみである。S K2749同様に遺構でない可能性もあるが、検出状況を尊重し、形状から柱穴跡の可能性があると捉えた。S K2749とは形状や埋土が類似する。

**S K 2753** ⑦-2区 IVAE16 (第65図、P L19)

S D1016区画内の南西部、南西隅でS K2752に隣接して位置し、S D2015を切っている。平面形は直径60～63cmの円形を呈し、断面形は逆台形となる。検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土は黒褐色土の単層で、地山との境が不明瞭であった。土師器の破片470g、焼けた獣骨細片(種・部位不明)が僅かに検出された。土坑認定に不安も残るが、土師器の出土から古墳時代の土坑と考え、性格は形状から柱穴の可能性があると考えた。

**S K 2755** ⑦-2区 IVAE16 (第65図、P L20)

S D1016区画内の南西部、南西隅でS K2745に隣接して位置し、S D2015を切っている。平面形は直径42～46cmの円形を呈し、断面形は方形となる。検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土は上下2層に分けられ、上層は暗褐色土、下層は上層より黒味の強い暗褐色土である。出土遺物は土師器破片490g、焼けた獣骨細片(種・部位不明)若干がある。土器は1層下部から比較的集中して出土している。出土土



器から古墳時代の所産と推定され、形状からは柱穴と考えたが、周囲の類似土坑と合わせて建物跡等は認定できなかった。

**S K 2828** ⑦-2区 IVAI14、AJ14 (第65図、P L 21)

S D 1016区画内の南西部の南西隅よりに位置する。平面形は直径66～80cmの円形を呈し、検出面から30cm前後掘り込まれたところで一旦テラスを形成し、そこから土坑中央部が直径48cm前後の円筒形に2段に掘り込まれる。検出面から底面までの深さは50cmを測る。埋土は上下2層にわけられ、下部には炭化物粒を少量含む暗褐色土、上部には炭化物を多く含む黒褐色土がある。このなかで1層中からは礫が若干と管玉、土師器の小破片2010g、ミニチュア土器1点、種子(モモ核2点)、焼けた獣骨細片(種・部位不明)僅少が採取されている。出土土器や管玉の出土から古墳時代の所産と推定される。形状から柱穴と考えたが、周囲にはS K 2749・2750があるのみで、具体的な建物跡などは認定できなかった。

**S K 2833** ⑦-2区 IVAG09 (第65図、P L 22)

S D 1016区画内の南西部に位置し、本土坑の西端をS K 2647に切られる。平面形は直径42～46cmの不整円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面が平坦となる。方形の断面形となり、検出面からの深さは26cmを測る。埋土は2層に分層され、埋土の主体を占める黒褐色土の2層と、上面からU字状に入る炭化物を混入する黒褐色土の1層がある。1層は柱痕の可能性もあるが詳細は明らかでない。出土遺物は土師器590gがあり、土坑中央部の1層中に礫若干と高坏脚が2点ほど出土している。出土土器から古墳時代の所産と推測され、形状からは柱穴と判断した。周囲の類似形態の土坑との関連は明らかにしえなかった。

**S K 2863** ⑩-2区 VWA15

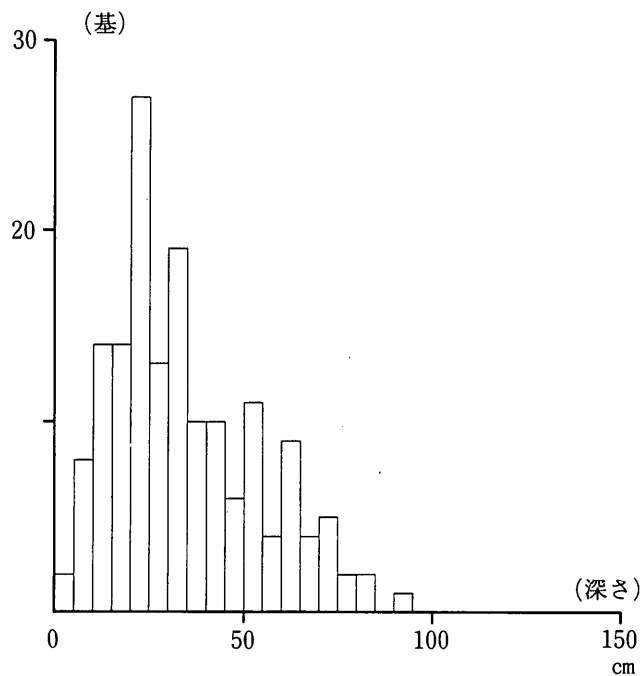
S D 1016区画内の南東部の南東隅に位置する。平面形は直径46～48cmのやや方形に近い円形を呈し、断面形はU字状で検出面からの深さは70cmを測る。埋土は大量の炭化物と褐色土ブロックも含む黒褐色土の単層で、底面近くから土師器の破片が散在的に出土している。出土遺物には土師器8265gとガラス小玉1点がある。土器や大量の炭化物を含む特徴から古墳時代の所産と推定され、形状からは柱穴と思われる。具体的な周囲の土坑との関連は明らかにできなかったが、⑧-2区南端に散在的に検出されている柱穴跡との関連するかもしれない。

**S K 2870** ⑩-2区 VVO06

S D 1016区画内南東部の東よりに位置する。平面形は長軸80cm、短軸59cmの不整楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは30cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物は土師器の破片が105gと少量得られたのみである。出土土器から古墳時代の所産と推定される。形状から柱穴跡の可能性があるとと思われるが、周囲には類似遺構がみられず、詳細は不明である。

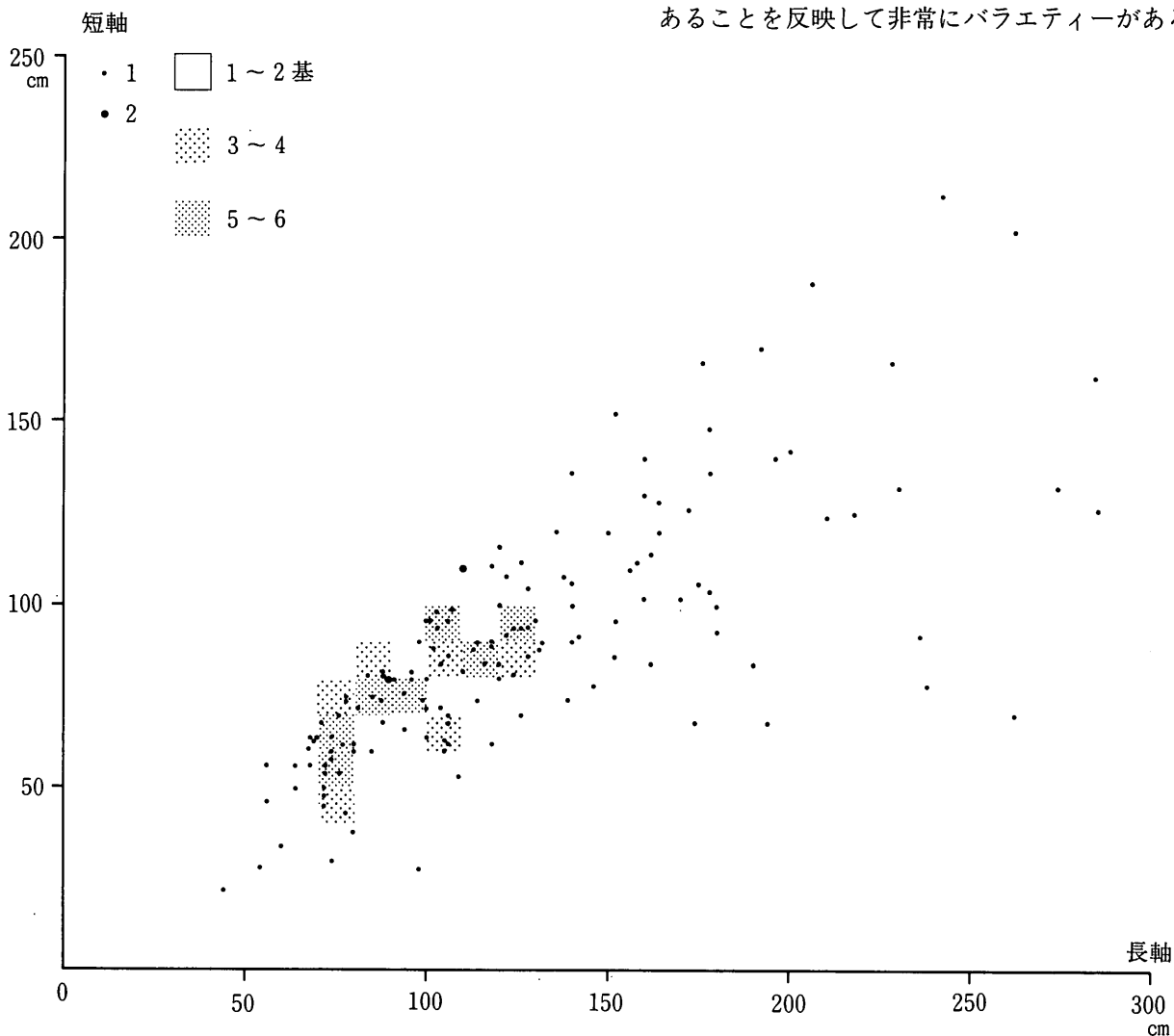
(4) その他の土坑

本項の冒頭で述べたように土坑は単一の性格ではないと仮定し、形態・配列から柱穴跡と井戸跡を抽出してみた。しかし、それ以外の土坑については具体的な性格を明らかにできず、ここに一括して扱うものである。なかには大量の土器と炭化物・焼土が含まれる特長を備えた廃棄土坑と分類できそうな土坑があるが、具体的に識別できなかった。これは廃棄土坑が形態的な特長よりも出土遺物量や出土状況によって特長づけられると考えられるものの、柱穴跡・井戸跡でも同様の出土状態がみられ、しかも土坑間の比較でも土器出土状態や出土量で明確な差異を看取できなかったことがある。もちろん、土器や炭化物の廃棄は特定の土坑を構築して行われる場合と、柱穴・井戸跡の廃絶時に2次利用したものの2つのケースが想定できなくもない。しかし、個別にみると土器出土量も出土状態も多様であるため一定の基準で識別できなかった。なお、隣県では本遺跡と類似した遺構が散見されるが、廃棄土坑と積極的に捉えられた場合と



土坑として一括されている場合があるようである。もちろん、地域毎の遺跡様相の違いによって土坑の捉え方も異なっている傾向はあるようで、北陸地方では掘立柱建物跡で構成される遺跡や平地式・竪穴住居跡が組み合う集落内で類似した土坑が見られるようだが、特別廃棄土坑と認定はされないようである。しかし、竪穴住居跡が普遍的な地域にあっては、このような土坑自体が少なく、特別視される傾向があるようだ。こうした理由からここでは廃棄土坑の可能性のあるものや、性格不明の土坑、さらに井戸・柱穴跡の可能性はあるが断定できなかった土坑、遺構かどうかの認定に不安を残すものを含めることにした。以下にその他として扱った土坑の一般的な傾向についてみておくことにしたい。

まず、平面形と規模であるが、多様な土坑があることを反映して非常にバラエティーがある。



第66図 その他の土坑の深度・規模グラフ

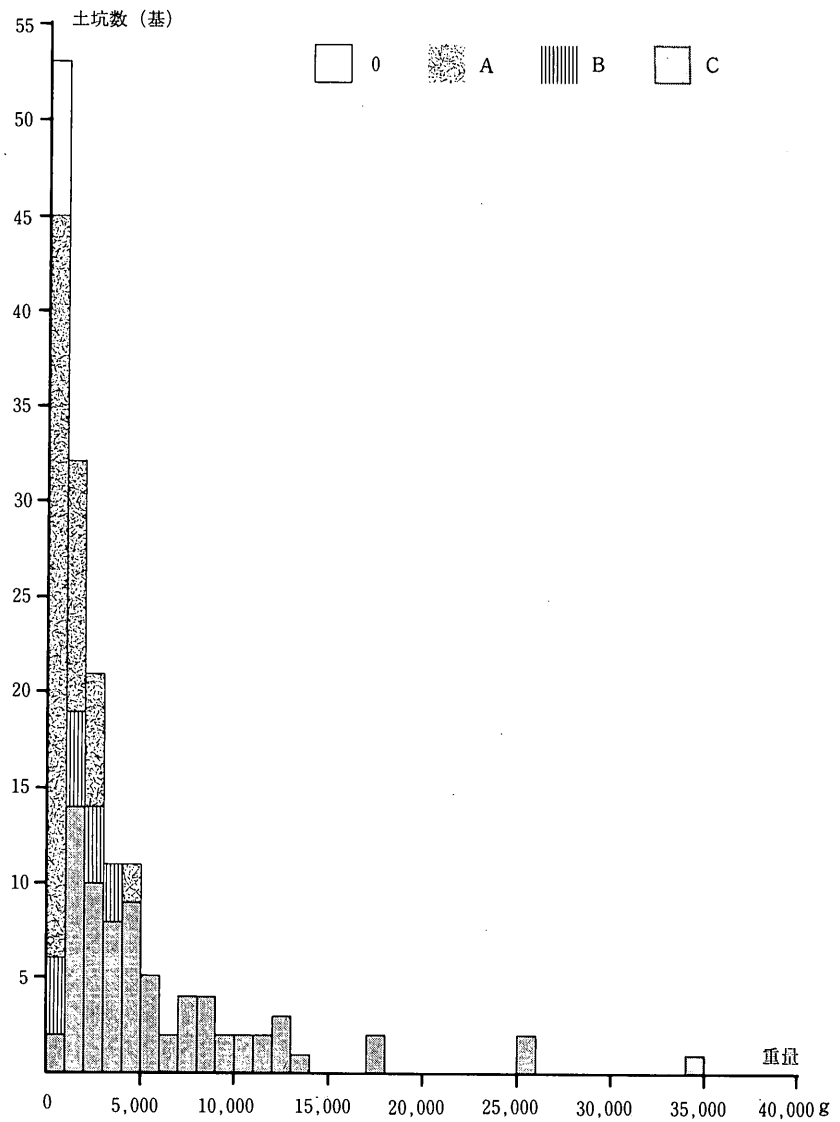
平面規模の最大はS K 2208の長軸285cm×短軸126cm、あるいはS K 2748の285cm×126cmで、最低はS K 2256の64×50cmである。最も多いのは80cm内外～130cm前後で、直径70cm以下は非常にわずかである。長軸70cm以内の土坑が少ない理由は、柱穴跡の可能性のある土坑として除外したためであり、掘り込みが浅く柱穴跡とは考えにくい土坑のみをここに含めたことによる。なお、井戸跡の平面規模は長軸100～150cm、短軸60～140cmが多く、最も数が多い規模範囲にほぼ重なる。このように平面規模は多様であり、とても1種の土坑として括れるものではないが、土坑の規模グラフからすれば80cm内外～130cm前後、140cm前後から200cm前後、それ以上に区分され、さらに楕円形と円形の2種があるようにもみられる。しかし、境は曖昧で厳密な区分は難しいと思われ、規模の違いの意味も十分検討できなかった。

土坑の検出面からの深さは土坑深度／土坑数グラフでみると中心的な深さは30～40cmのところであり、その前後では土坑数を減ずる。検出面からの深さ80cm以上は井戸跡と捉えて除外し、ここではS K 2039、S K 2086、S K 2744などの平面形が長楕円形で、井戸跡とは考えにくい土坑のみを含めたため、80cm以上のものは少ない。なお、⑧-1区の見逃し遺構確認面である第2面検出土坑のいくつかは第1面からの深さ80cmを越える可能性がある。S K 2440・2444・2445・2446・2447・2449・2482などが該当するが、これらの土坑周囲では中世井戸跡も見逃されているため、第1面の設定が高すぎた不安がある。そのため、積極的に井戸跡とせず、土坑深度／土坑数グラフにも加えていない。一方で、S K 2346・2482・2745のように井戸認定の80cmに達しないものの、形態的や規模的には類似し、井戸跡の可能性のある土坑もある。

出土遺物は多様で、土器を中心にみると最大はS K 2203の25335gで最低は0gである。出土土器量／土坑数のグラフを作成してみると、土器出土量の分布では幅があるが、全体的に出土土器量の少ない土坑が多く、出土量が多いほど土坑数を減少させる単純な傾斜を示す。すなわち、最も土坑数が多いのは1000g以下で、3000gまでに急速に土坑数を減少させ、それ以上は減少率が低下し14000gまでは多少の増減があるが一定数の土坑が見られる。それ以上の土器出土量が確認できるものはわずかで散在的となる。特定重量で土坑数が増加する部分も認められないため、土器出土量の数値からは廃棄土坑を特定できなかった。土器出土量別に口縁部の遺存度区分と対比させてみると、口縁部の遺存状態が3/8以下のものしか認められないAは1000g以下に圧倒的に多く、3000g以下まで主体となる。そして4000g台で2基あるが、それ以上は見られない。これに対して5/8までの口縁部破片が見られるBは4000g以下までにみられ、1000g単位で区切った各ランクで量的に大きな増減が見られない。6/8以上の口縁部破片が含まれるCは1000gから最大までみられるが、1000g以下は非常にわずかで2000g台で最も数が多く、それ以上は土坑数の比率に合わせて土坑数も減少していき、5000g以上の場合ではほぼCで占められる。以上からみると、全体的に土器出土重量を増すにしたがって、Cで占められる比率が高く、A・Bの比率が減少する傾向はある。しかし、出土土器量が4000g以下にもCが認められ、2000g台でCが多い点は注意される。口縁部遺存度区分Cは土坑へ直接土器が廃棄、あるいは遺棄の可能性があるかと仮定したが、土器出土重量が少なくとも直接廃棄、あるいは遺棄されたものがあると考えられる。こうしてみると、直接廃棄、遺棄される土器の量は必ずしも決まっていたわけではなく、多様なケースがあると想像できる。ただし、これは柱穴跡・井戸跡とした土坑でも認められる傾向で、ここで扱う土坑に特有のあり方でもない。

次に本遺跡に特長的に認められた炭化物と土器の含まれ方に注目してみたい。各土坑の土器出土状態を、少量破片が散在する場合をP1、大量の破片・完形土器が入る場合をP2、完形土器が主体的に入る場合をP3とし、さらに炭化物が薄い層として入るものをC1、大量の炭化物が含まれる場合はC2、炭化物が全体的に散在して認められる場合をC3に区分し、焼土はF、そのブロックはFB、灰はAS、礫はS、炭化物も土器も顕著でない場合は○として底面からの堆積順序を配列してみた。なお、堆積順序で前後関係を示す場合は→、同時の可能性があると若干時間差もあるようにみられる場合は≧、同時は＝として記

号化した。もちろん、調査では分層観点や層の捉え方が統一的でなく、土器出土状態も出土した土器が図化記録に取られているとは限らず、分類も感覚的に区分したところがある。また、遺物出土状況図に記載された土器は少ないが、実際に得られた土器出土量を計測するとかなりの量であり、しかも口縁部の遺存状態が良好なものが含まれる土坑も一部に認められる。こうした例では出土状況の区分が行えないことになった。したがって、すべてにわたって厳密な区分が行えたわけではないが、数種類に分類できる可能性は窺えた。すなわち、土器と炭化物が顕著な場合（底面上23基、埋土中15基）、炭化物が顕著な場合（底面上6基、埋土中14基）・薄い炭化物層が見られる場合（15基）、土器のみが顕著に見られる場合（底面上21基、埋土中12基）、土器と炭化物出土層の間に間層をもつ場合（1基）、間層を挟んで土器が出土した場合（2基）、土器も炭化物も顕著でない場合（多数）である。以下に種類別に傾向をみる。



第67図 その他の土坑の土器出土重量

①炭化物・土器が顕著に認められる場合

炭化物が多く含まれ（C 2）る上、大量の土器が直接廃棄され（P 2・P 3）、なおかつ両者の間に間層がない場合である。こうした状態が底面上で見られる場合と、底面上には土器も炭化物も顕著でない土層があって埋土中にこの関係が見られる場合がある。このあり方は井戸跡などでも見られている。ここで扱う土坑では前者のほうが若干多い。この両者の違いの意味は明らかでないが、前者はほぼ土坑構築から時間を経ずに土器が焼却を伴って廃棄された場合で、後者は土坑構築から若干の土が入った後に土器が焼却を伴って廃棄された場合と思われる。ただし、土坑構築から底面上の堆積土が形成される実際の時間幅は不明なので、両者の間に明確に区別しうるだけの時間差があったかどうかは定かでない。なお、時間差の幅は不明ながら炭化物と土器廃棄がきわめて近い時間に行われたと考えられるが、炭化物と土器廃棄が行われた後も継続的に土器が廃棄された状態が確認できる土坑は少ない。

①a 底面上に土器と炭化物の大量出土が見られる土坑

C 2 ≥ P 3 → ○ (2444)

P 2 = C 2 ≥ P 2 S → ○ (2843)

- |  |  |
|--|--|
| $C 2 \geq C 2 = P 2 S \rightarrow \bigcirc$ (2745)                               | $P 2 = C 2 \rightarrow P 2 \rightarrow \bigcirc$ (2878)      |
| $P 2 \geq C 2$ (2323)  | $P 2 = C 2 \rightarrow P 1$ (2003)                           |
| $C 2 = P 3 \geq F \geq P 2$ (2203)   | $FB = P 2$ (2361)  |
| $P 2 = C 2$ (2432・2148?)   | $C 3 \geq P 2$ (2387)  |
| $P 2 = C 2 \rightarrow \bigcirc$ (2201)  | $C 2 \rightarrow C 2 = P 2 \geq C 2$ (2017)                  |
| $C 2 \geq F \rightarrow P 2 S$ (2346)  | $C 2 \rightarrow C 2 = P 2$ (2027)                           |
| (備考) $C 1 \cdot FB \geq P 2 ? \rightarrow \bigcirc$ (2112)                       | $C 1 FB \geq AS \geq C 1 \rightarrow \bigcirc$ (土器不明) (2403) |
| $(\bigcirc \rightarrow) C 1 \geq (F \geq C 1) = P 2 \rightarrow \bigcirc$ (2210) | $C 2 \rightarrow \bigcirc S$ (土器不明) (2445)                   |
| $P 2 = (C 3 ?)$ (2331)   | $C 2 \rightarrow \bigcirc$ (土器不明) (2871)                     |

このなかで口縁部遺存度区分のAとなるものはSK2331・2387、Bは2003・2148でそれ以外はCである。出土土器量ではSK2017・2148が1000g台、SK2003・2133・2432が2000g台、SK2323が3000g台でそれ以外は5000gを越える。なお、検出面からの深さでみるとSK2148が12cmと最も浅く、SK2101が22cm、SK2017が24cm、SK2323・2432・2387・2361が30cm台で、それ以外は40cmを越える。SK2148は浅いため土坑か疑問が残るが、それ以外は掘削深度に差はあるものの、ほぼ確実に掘り込みをもつ土坑と捉え得る。また、浅い土坑については上部が削平されている可能性があるため、細かく炭化物や土器の出土状態を分けることは必ずしも適当でないのかもしれない。

なお、大量の炭化物出土(C2)とは認められないが、薄い炭化物層と焼土ブロックが含まれたり、炭化材片が含まれることからここに帰属する可能性のある土坑として備考に挙げたSK2112・2210・2331がある。土器出土量と口縁部遺存区分はそれぞれSK2112が13450gで口縁部遺存度区分C、SK2210が2440gでB、SK2331が1240gでCとなる。検出面からの深さは20~40cmなので、確実に掘り込みをもつ土坑と捉えうる。このなかでSK2210は底面上に土器も炭化物も顕著でない薄い土層があるが、土坑構築からあまり時間を経ないで土器が廃棄された所産と捉えた。また、逆に土器の出土記録がないために出土状態の区分ができないが、土器出土量や遺存度からも炭化物と土器を廃棄したと思われる土坑としてSK2403・2445・2871がある。SK2403は土器重量5085g、SK2445は5415g、SK2871は3340gであり、いずれも口縁部の遺存度区分はCである。上記以外で、ここへ含められる可能性がある土坑としてSK2410がある。この土坑は炭化物・焼土粒が上層に若干含まれるが、上部が削平されているために炭化物が廃棄されていると断定できなかったものである。

①b埋土中に土器と炭化物の大量出土が見られる場合

底面上には炭化物も土器も顕著でない土層が見られ、その上に炭化物と土器出土が顕著な層が認められる場合であるが、次のような種類がある。

- |  |   |
|--|---|
| $\bigcirc \rightarrow P 2 \rightarrow C 2 \geq P 2$ (1046)                           | $\bigcirc \rightarrow C 2 = P 2 \geq C 2 \rightarrow \bigcirc$ (2874)             |
| $\bigcirc \rightarrow (FB) P 2 = C 2 \rightarrow P 1$ (2258・2014)                    | $\bigcirc \rightarrow C 2 = P 2$ (2156・1050・2751)                                 |
| $\bigcirc \rightarrow C 2 = P 3$ (2608)  | $\bigcirc \geq P 2 = C 2 \rightarrow P 2 ?$ (2208)                                |
| $P 3 \rightarrow C 2 = P 2$ (2482)   |   |
| $\bigcirc \rightarrow P 1 \rightarrow C 2 FB = P 2 S$ (2744)                         |   |
| (備考) $\bigcirc \rightarrow P 2 \rightarrow C 1 \rightarrow \bigcirc \geq P 1$ (2086) | $\bigcirc \rightarrow C 1 \rightarrow \bigcirc \geq C 1 \geq P 2 \geq C 1$ (1037) |

$\bigcirc \rightarrow P 2 \geq C 1 F \rightarrow \bigcirc$ 、 $\bigcirc \rightarrow P 2 \geq C 1 \rightarrow \bigcirc S$  (2251・2865)  $\bigcirc \rightarrow C 1 = P 2 \rightarrow AS \rightarrow \bigcirc$  (2748)  
土器出土量はSK2608で1740g、SK2482で2495g、SK2751が2745g、SK2014・1050が3710・3320gでそれ以外はすべて5000g以上である。口縁部の遺存区分はSK2608がBになる以外はすべてCである。このグループでは検出面からの深さが相対的に深いものも多く、最も浅いSK2482で30cm、SK2156で40

cm、S K2258で44cmでそれ以外は60cm前後が中心で最深はS K2744の84cmである。なお、炭化物の出土状態は薄い炭化物層（C1）と思われたが、焼土が含まれたり、土器出土と近接してセットになる可能性がある土坑として、備考にあげたS K1037・2086・2251・2748・2865がある。それらの土器出土重量と口縁部の遺存度区分はS K1037が3330gでC、S K2086が11440gでC、S K2251が1390gでA、S K2748が9510g、S K2865が4460gでCである。なお、S K2748は炭化物や焼土ブロックを含む3層の形成途中で炭化物層と土器の集中出土が見られるが、3層の形成が短期に行われたものか、炭化物層や土器の集中出土と関連するか断定できなかったため、底面に若干埋土が形成された後に土器や炭化物が入ったと捉えた。短期に形成されたとすれば、①aに区分される可能性がある。検出面からの深さはS K2086のみが検出面からの深さ78cmであるが、ほぼ30～40cm内外に集中する傾向がある。なお、S K2482は底面の3層と中位の炭化物を大量に含む2層で土器が出土しているが、3層と2層では出土土器の入り方が異なり、2つの契機に分離できる可能性も残される。

### ②炭化物のみが顕著に出土した土坑

次に炭化物のみが顕著にみられる場合である。炭化物のみが顕著（C2）、もしくは土器片が散在的（P1）にみられる場合には以下の種類がある。ここでも底面直上で見られる場合、底面上にあまり炭化物が顕著でない埋土の上に炭化物が大量に入る場合がある。また、ここではC1であっても焼土ブロック（FB）、灰（AS）が認められた場合も含めた。

#### ②a 底面上で炭化物が顕著に出土した土坑

C2 → ○ (2871)

C2 = P1 (2004・2197)

C2 = P1 → P1 (2449)

(C2 ? →) ○ → C2 = P1 (2202)

FB ≥ C1 ≥ P1 ≥ FB (2325)

例は少ない。土器の出土量はS K2449が140g、S K2202が170gしかないが、S K2325で2000g代、それ以外は3000g～5000g台である。口縁部の遺存度区分はS K2197・2004・2202・2325・2449がAである以外はCである。検出面からの深さはS K2325が10cm、S K2197が16cm、S K2004・2202が20cmと浅いが、他は30cm以上の深さとなる。このなかでS K2004・2325・2197は土器出土量は少ないわけではないが、口縁部遺存度区分がAであり、掘り込みの浅さからしても炭化物と土器が直接廃棄されたとはいえない。なお、S K2325は炭化物は薄い炭層で大量に認められているわけではないが、焼土ブロックを多数含むことからここへ含めた。なお、S K2403・2445・2871は焼土や炭化物が認められたものの、土器の出土状態の記録がない。しかし、土器の出土量や遺存度からすると土器と炭化物が廃棄された可能性が高く、①のC2 = P2に類するあり方と考えるとここには含めなかった。また、S K2202は底面上に炭化物を含む小ブロックが見られ、中位には炭化物があまり顕著でない土層、上面に炭化物が顕著な土層が入る。中位にあまり炭化物が顕著でない土層が入るが、底面上の炭化物を含むブロック土から、埋土間の時間差はあまりないと考えてここへ含めた。したがって、炭化物の廃棄された土坑と考え得るのはS K2197・2004とS K2202・2449であり、さらに明瞭な深い掘り込みが確認できるのはS K2449・2202に限定されてしまうことになる。やはり、炭化物のみが底面に廃棄される例は非常に少ないと考えられる。

#### ②b 埋土中に顕著な炭化物出土が認められる土坑。

P1 → C2 = P1 (2025)

○ → C2 F (2182)

○ → AS → P1 (1031)

○ → C2 → ○ → C1 → P1 S (2312)

○ → FB → ○ (2192・2189)

○ → C2 ≥ P1 (2121・2123・2126)

○ → C2 = P1 (2268)

(備考) ○→C 3→○ (2345・2390) P 1 S→C 3?→P 1 (2390)

○→C 3?→○ (2747)

土器出土量はS K2268・2312が3520g、S K2123が2510g、S K2121が2150gで残りは1000g台以下である。口縁部の遺存度区分はS K1031・2121・2268がC、S K2312・2126がBである以外はすべてAである。一般的に土器の出土量が膨大と表現しうる土坑はない。しかも相対的に出土土器が多くと、口縁部の遺存状態は悪いか、口縁部の遺存状態が良くとも出土土器量が少ない、あるいは土器の出土量も遺存状態も悪いものと認められる。ここに帰属するとみられる土坑は一定数あり、②aが少数である点とは対称的である。ただし、検出面からの深さを比較してみると、S K2025が54cm、S K2312が46cm、S K2390が35cmである以外は20cm代が最も多く、炭化物が出土した層位は相対的に上面に近いものが主体である。この傾向は土坑の深さと一致するものの、②aの浅い土坑と類似しているともいえる。

なお、大量の炭化物出土ではなく、ほかの埋土より目立つ炭化物が含まれると記録されるなど、ここに関連すると思われる土坑にはS K2345・2390・2747がある。S K2345は土器重量2710gで口縁部遺存度区分はC、S K2390が960gでA、S K2747が810gでAである。このなかでS K2345は他土坑に切られて部分的な残存であり、本来は土器廃棄も併せて行われた可能性もある。

### ③土器のみの顕著な出土が見られる土坑

次には土器の出土のみ顕著(P 2、P 3のみ)で、大量の炭化物(C 2)が認められない土坑である。これも底面上でみられる場合と、埋土中位以上で見られる場合がある。ただし、土器が底面上で顕著に見られるとした土坑は単層で土坑の掘り込みが浅いものもある。

#### ③a底面上もしくは単層で土器の顕著な出土がみられる土坑

P 3 (S K2194)

P 2→○(C 3?) (S K2410)

P 2→C 1→P 1 (S K2406)

P 2→○(S K2005・2058)

P 2、P 2? (2098・2102・2103・2108・2120・2154・2183・2187・2195・2255・2290・2340・2363・2413・2422・2758)

種類はあまり多くないが、一定の数は認められる。S K2195は土坑の認定自体に問題を残し、S K2410は上層に若干炭化物・焼土粒が含まれるが、上部が削平されて炭化物の廃棄について判断が下せなかった。また、S K2422は大形破片が散在的に出土したと記録されるが詳細不明である。土器の出土は一定の層に集中するものが多く、S K2047と2330は2回の廃棄が行われたと想定して除外した。一方でS K2363のように単層埋土内で散在的に土器がみられるものもある。土器の出土量はS K2108の9065gを最大とし、S K2005の7120g、S K2406の6540g、S K2410・2187・2102の4000g代、S K2413・2758の3000g代と続き、他は2000g代以下となる。口縁部の遺存度区分はAがS K2120・2194・2255で、Bが2151・2340・2758、それ以外がCである。このなかでS K2120・2194・2410については浅い土坑であることに加えて土器出土が上面であるため、削平をうけて本来の遺存度区分ではない可能性がある。特にS K2120・2194は出土状態から本来はCやBであった可能性がある。したがって、土器出土量が極端に多くないかわりに遺存度の高い破片が含まれる傾向があるといえる。なお、検出面からの深さがS K2194・2255が8.5cm、S K2102・2108・2183・2290が10cm台と非常に浅いものがあり、これらは遺物集中に近い存在かもしれない。また、口縁部遺存度区分でBとなるS K2340・2758はいずれも平面規模が80cm前後で深さ20cm代という共通性がある。それ以外は深さ20cm代よりも深いものである。

#### ③b埋土中で顕著な土器出土が見られる土坑

○→P 3?(P 2) (2167)

○≥P 2≥○ (2259)

○→P 2→○→C 1 (2039)

○→P 2 (2023・2119・2153・2291・2832)

○→P 2 (S) →○ (2299・2302・2831)      ○≥P 2 →○ (2378)

土器出土量はS K 2039の17420 gを最大とし、続いてS K 2299が12880 g、S K 2831の6110 g、S K 2119・2291・2302の4000 g台、S K 2259・2378の2000 g台があり、それ以外は1000 g台以下で、最低はS K 2167の950 gである。口縁部の遺存区分はS K 2023がA、S K 2153がB、他はCである。このなかでS K 2023が検出面からの深さが7 cmと極端に浅く、それ以外は26 cm以上の深さとなる。S K 2023は土坑底面と土器との間に間層があると捉えたが、遺物集中に近い存在で、むしろ底面上に土器が認められる部類に加えるべきかもしれない。また、S K 2378も同様に最下層で少量ながら土器出土もみられるので、底面上から土器出土が見られる例に加えるべきなのかもしれない。

#### ④顕著な炭化物出土と土器出土の間に間層が認められるもの

炭化物が大量に含まれる(C 2)と土器散在(P 1)の間に間層が含まれる場合は1例のみある。土器は小破片が散在的で口縁部の遺存区分もAである。土器の出土をあまり顕著な出土例と区分しないならば、炭化物のみが顕著に見られる②bに加えるべきかもしれない。

P 1 S →○→C 2 (S K 2280)

土器出土量は2070 gで口縁部遺存区分はAである。このS K 2280は隣接した中世の井戸跡に切られ、部分的な残存である。また、土器出土状態は小破片が散在的とみられるが、図の記録ではやや大形の破片も見られるため別に扱った。しかし、類例の少なさからも②bに含められる可能性は高い。

#### ⑤間層を挟んで土器が出土した土坑

P 2 →○→P 2 (S K 2047?)

P 2 = C 2 →○→P 2 (S K 2330)

2例しかなく、両者の様相が異なるなど、分類に不安がある。S K 2047は土層の記録がなく、炭化物の出土状況について不明である。写真記録などから炭化物はあまり含まれないと捉えた。S K 2330は埋土が分層されていないが、土器出土状況の記録では上下の2つの集中が認められる。土器出土量はS K 2047が8880 g、S K 2330が4700 gで口縁部遺存度区分はいずれもCである。S K 2047では上部で出土した土器は遺存状態は良好な個体がわずかに得られたもので、集中的な廃棄ではない。下部とは接合していない。S K 2330は上部では高坏・器台・小型丸底などの小型品、下部では甕や壺など出土器種を違えており、相互に接合するものは見られない。なお、S K 2330では下部の土器出土周囲に炭化物が多く含まれると記録されており、下部は炭化物と土器の廃棄と捉えられる可能性がある。

#### ⑥薄い炭化物層のみが認められる土坑

この例には以下の種類がある。底面上にある例は4基のみで、それ以外は埋土の中位以上である。

(A S) C 1・C 1 →○ (2282・2286・2303・2314・2362)

○→C 1 →P 1 →○ (2060)

○≥C 1 (2120・2333)

○→C 1 (C 1?) →○ (1019・2440)

○→P 1 →C 1 →○ (1055)

○→C 1 = P 1 (1035)

P 1 →C 1 →○ (1032)

○→C 1 (2019)

P 1 →C 1 (2322)

土器の出土量はS K 2120で2380 gを最大とし、ほとんどが1000 g台以下である。口縁部の遺存度区分はS K 2322がC、S K 2333がBである以外はすべてAであり、基本的に土器の出土量も少なく、遺存度も低いもので占められている。検出面からの深さは50~60 cm前後のS K 1019・1032・2060・2440と、20 cm以内のそれ以外の土坑に分かれる。土器出土量が少なく、口縁部遺存度区分Aが多いことは②b類に近いが、大量に炭化物が含まれる②のようなあり方と比べると、薄い炭化物層が認められる場合は随分様相が異なる。薄い炭化物層(C 1)を大量に炭化物を含む場合(C 2)と区別した理由もそこにあるが、上記のような土坑の深さの差異と炭化物層のあり方からすると類似した契機ではなく、多様な形成過程があると思



われる。浅く底面上に炭化物層が見られる例は炭化物集中に近く、深い土坑で埋土中で見られる例は混入の可能性はある。こうした観点から③bのS K1037・2039・2312・2406は薄い炭化物層が認められるが、本類には含めなかった。

#### ⑦土器も炭化物も顕著でない土坑

小破片が出土したのみか、炭化物が顕著に見られない土坑である。出土記録がなく土器出土状況が不明なものも含まれるが、土器の出土量が少ない土坑はほとんど含まれると思われる。調査記録から推測されるものを列挙しておく。ほとんどが混入と思われ、遺構へ直接土器や炭化物を廃棄した例は少ないと思われる。

○→P 1、○→P 1→○ (2879・2049)

P 1→○ (2054)

P 1 (1034・1041・1056・2016・2018・2026・2030・2032・2035・2048・2052・2053・2061・2079・2080・2104・2109・2152・2188・2196・2198・2209・2212・2256・2287・2298・2311・2317・2339・2342・2355・2357・2360・2374・2382・2401・2412・2480・2512・2593他)

以上の様相をまとめておく。目立った土器出土が見られる土坑には炭化物を伴う場合とそうでない場合の2者がある。さらにそれぞれ、底面上で土器が確認される場合と埋土中で認められる場合があるが、基本的には前者のほうが若干多い。しかし、いずれも共通するのは土器の出土状態は一定の層位に集中するものが多く、埋土中に万弁なく出土することは意外と少ない。このことからすると廃棄・遺棄・混入の識別は別としても土器が入る契機は比較的まとまっていると推測でき、さらに炭化物の入り方の違いによって焼却を伴う場合と、そうでない場合があると考えられる。ただ、埋土中と底面上に入る違いの意味についてはよくわからず、両者が土坑構築と廃棄の時間差のあり方の違いとできるかわからない。

また、炭化物を中心的に出土するのは埋土中が多いようにみられるが、相対的に浅い土坑が多く、両者は類似している可能性もある。そうした場合にはあまり時間差として分ける理由はないのかもしれない。何れにしろ、上記のように多様な炭化物と土器出土のあり方が見られることは、さまざまな廃棄行為の過程、あるいは土坑への入り方が異なる状況を反映している可能性はある。

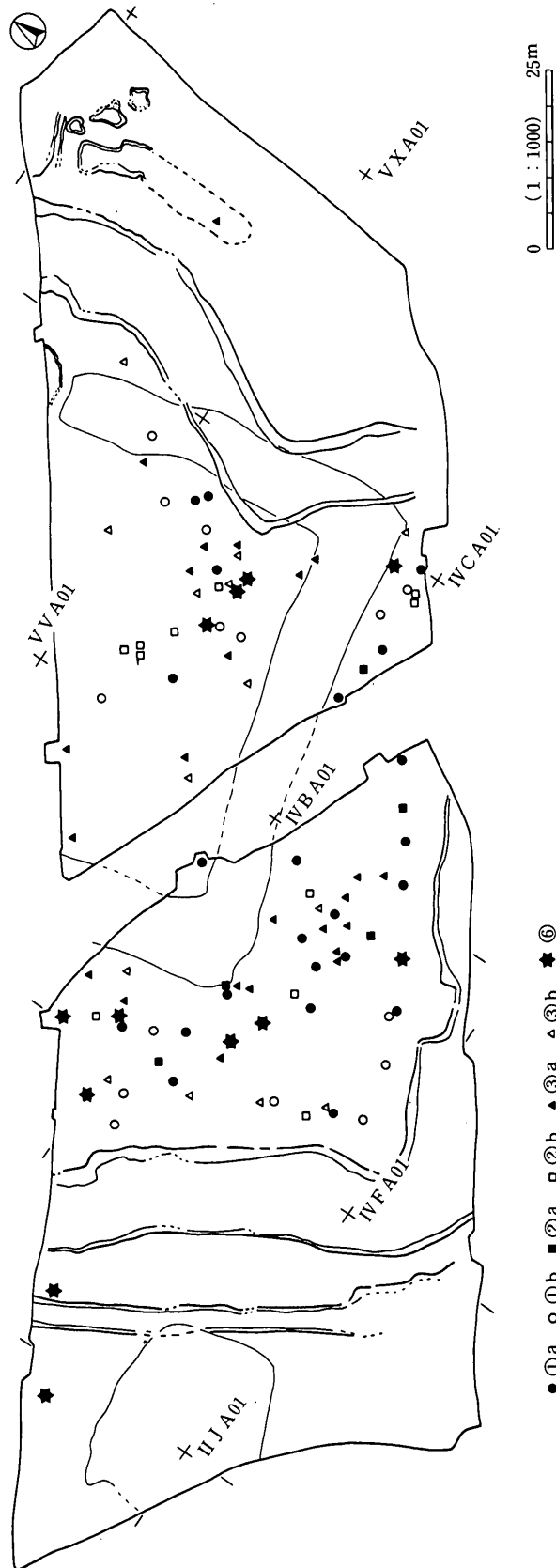
最後に遺跡内での分布をみておく。ここで扱う土坑は単一の性格とは思われなため、分布にもあまり規則性が認められないようであるが、一部に一定の傾向が把握できそうなところもある。まず、全体を概観してみると、S D1016区画内の北東部では圧倒的に数が少ない。それに対して、他の北西部、南西部、南東部では一定数分布する。さらに子細にみると、S D1016の岸縁辺に一定間隔で規則的に配置されている様相と、⑤-1区南辺から⑤-2区南辺を結ぶライン周辺で長軸方向をそろえる長楕円形の土坑が並列する様相が特長的に見られる。これらの土坑は、一見ランダムに配置するようにみえるなかで比較規則的な配置となっている。特にS D1016岸縁辺には井戸跡も規則的に配置されており、遺跡全体の計画性のなかで構築されていることが指摘できると共に、ここで扱った土坑の一部と井戸跡には一定の関係があるとも見られる。ただし、⑤-1区南辺から⑤-2区南辺を結ぶライン周辺に井戸跡は検出されず、井戸跡とは異なった分布を示す場所もある。また、この長楕円形の土坑配置からS D1016区画内がさらに東西方向に通るラインで分割されている可能性が看取できる。しかも、このラインの西側延長先にはS D1016の底面中央部で杭が検出された場所に一致し、ここに橋脚状の施設があってS D1016内外をつなぐ通路が存在したと推測できる。したがって、特長的に見られる長楕円形の土坑配置は通路によって分割された空間の縁辺に配置されるものであって、区画された空間の隅に配列される点ではS D1016区画内の縁辺部に沿って配置されるものと同様と考えられる。

S D1016区画内でも内部に入った⑤-1区東部のS K2047、県道下部分のS K2843、⑧-2区西側のS K

2098・2378などのやや変則的な位置に長軸を南北方向に取る長楕円形の土坑が検出されている。このなかで、県道下で検出されたSK2843、あるいはSK2098の軸方向をそのまま南に延長すると、⑧-1区の土坑の分布が希薄な帯状の空間に一致する。ここにも通路状の施設が想定できるのかもしれない。こうしてみると、SD1016区画内は最低東西につなぐラインと⑧-1区東端を通るラインによって3ないし、4つの空間に分割されている可能性が指摘できる。

この規則的な配置を示す土坑とは別に、細分化された空間の中央部に位置する土坑があるが、⑧-1区で顕著に認められる。⑧-1区の場合では浅く規模の大きな土坑が多く、細分された空間縁辺にある土坑とは形態的にも異なる傾向がある。ただし、この⑧-1区は他の調査地区よりも検出面が若干高いこともあり、土坑認定に不安が残る。これ以外の場所をみると、⑧-2区では中央部が中世の館堀SD2001に切られて内部にある土坑の様相は不明瞭であり、⑤-1区では⑧-1区同様に浅い土坑がいくつかあるが、土坑の形態が異なり、⑤-1区では比較的小規模なものが多い傾向がある。

以上の分布状況から土坑の性格は単一ではないものの、分布上ではいくつか規則性を示す配置が看取され、それらによってSD1016区画内が更に細分されていた可能性が想定できる。詳



第68図 その他の土坑炭化物・土器出土状況分類別分布

細は後述するが、概略ではS D1016区画内は大きく3～4の空間に通路によって分割され、その小空間の縁辺に配置される土坑と中央部に配置される土坑があると見られる。前者には比較的掘り込みの深い土坑、あるいは長楕円形になる土坑が特長的に見られ、後者は各空間ごとに若干様相が異なり、⑤-1区では掘り込みの浅い小規模な土坑、⑧-1区では掘り込みの浅く大きめの土坑、あるいは円筒形の土坑が配置されている。やはり、ここで扱う土坑もさらに数種類に区分でき、それが機能的な差異を表現しているのだろうか。しかし、全体の傾向は指摘できても、個別の土坑では遺構の認定の問題や性格が特定できないなどの問題があって区分することは難しい。

次に土坑埋土の炭化物・土器出土の区分ごとの分布をみてみたい。先に①炭化物と土器が顕著に見られる土坑、②炭化物のみが顕著に出土した土坑、③土器のみが顕著に出土した土坑、④炭化物と土器出土の間に間層が認められる土坑、⑤薄い炭化物層が見られる土坑、⑥土器小破片のみ出土した土坑に区分し、前3者ではそれぞれ底面上と埋土中で見られる場合があった。このなかで④は1例のみ、⑤は炭化物集中、あるいは炭化物が混入によるもので⑥に近い可能性があった。したがって、ここでは①～③を中心にみてみることにしたい。まず、①の場合ではS D1016縁辺もしくはS D1016区画内で細分された空間の中央に分布するものがある。このなかで⑧-1区ではS D1016区画内で分割された空間中央部に分布するものが多い。また、底面上で見られる①aと埋土中に見られる①bの分布上の差異はあまりない。炭化物のみが顕著に見られる②の例はS D1016の縁辺もしくは内部の分割された空間の境周辺に見られ、そのなかでもS D1016の南縁辺東側に比較的集まる傾向が指摘できる。また、③の土器が顕著な土坑はS D1016区画内の西側縁辺、もしくは東側縁辺、さらに⑧-1区の中央部側、あるいは⑤-1区の中央部側で多く認められる傾向がある。このように、区分した種類ごとに分布域が異なる傾向も指摘できるが、⑧-1区ではあらゆる種類が錯綜した状態で分布すると認められる部分もあり、上述したようなS D1016縁辺や内部の分割された空間の縁辺に分布する土坑と、分割された空間中央にある土坑との機能差を不明瞭にしている要因のひとつになっている。しかし、一方で種類別に分布のあり方が異なる様相を示すと見られるところもあり、S D1016区画内の南西隅にあたる⑦-2区ではS D1016の脇に井戸跡が並列し、その内側には炭化物が顕著に見られる土坑、あるいは土器と炭化物が顕著に見られる土坑が分布し、さらにその内側には炭化物があまり顕著でなく土器のみが顕著な土坑が見られる。したがって、一部には炭化物と土器の出土状態から区分される種類ごとに規則的な配置を示すところもあるようである。ただし、他の区域では明瞭に区分できず、必ずしも断定的な様相とはできない。なお、これらの土器・炭化物のあり方による区分を出土土器年代から比較すると、必ずしも時期ごとに一定の傾向が看取されないようである。したがって、上記の区分は時期差ではなく、何らかの廃棄行為の差異として認められる可能性のほうが高いのではないかと思われる。

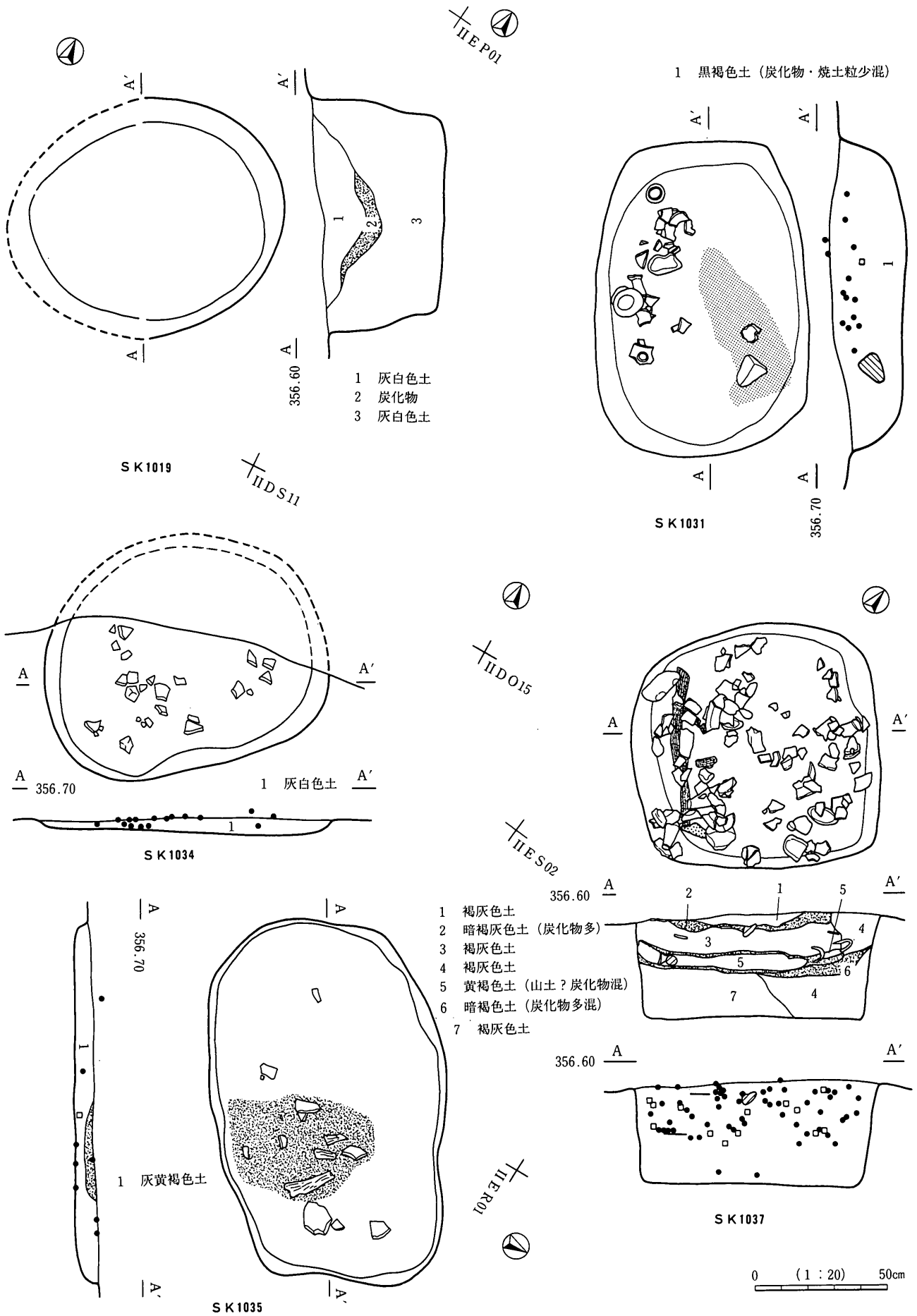
#### S K1019 ⑤-1区 IIER10 (第69図)

S D1016区画の西外側に位置する。⑤-1区調査区壁際に設定したトレンチで土坑西側半分は削平してしまった。平面形は直径約96cm前後の円形を呈すると思われ、断面形は壁が垂直で底面が平坦な方形となる。検出面から底面までの深さは約50cmである。埋土中位に薄い炭層をもち、その上下は灰白色土である。出土遺物は土師器破片1015gが得られている。

#### S K1031 ⑤-1区 IIEQ01 (第69図、P L 3)

S D1016区画内の北西部、S K1025に隣接して位置する。平面形は長軸120cm、短軸80cmを測る楕円形で、断面形は壁が直で底面は平坦な方形を呈する。検出面からの深さは24cmを測る。埋土は焼土・炭を含む黒褐色土の単層で、埋土中に灰土のブロック層が入る。遺物は土器が土坑西側に比較的集中して出土した。出土遺物は1295gの土師器破片があり、口縁部の遺存度区分はCである。

#### S K1032 ⑤-1区 IIED07



第69図 SK1019・1031・1034・1035・1037

S D1016区画西側外、S D1007に隣接して位置する。平面形は直径88～81cmの円形で、断面形は逆台形を呈して検出面からの深さは約60cmを測る。埋土は7層に分層された。最下層には褐灰色土が堆積し、その上の中位には薄い炭層、黄褐色土ブロックが入り、最上層には褐灰色土が入る。最下層の褐灰色土中では焼礫を含む数点の礫が出土した。また、中位にブロックで見られた黄褐色土は遺跡外より持ち込まれたものと思われたが、具体的な性格は不明である。出土遺物は総重量170gの土師器小片があり、口縁部の遺存度区分はAである。埋土から古墳時代の所産と推定したが時期認定に不安がある。

**S K1034** ⑤-1区 IIDN15 (第69図)

S D1016区画西外側に位置する。⑤-1区の調査開始時のトレンチに掛かって検出し、北半分はトレンチで削平した。残存部から直径約90cmの円形か楕円形の平面形を呈すると思われ、断面形は非常に浅いトライ状で深さ6cm程度である。埋土は灰白色土の単層で、土師器265gの小破片が得られたのみである。口縁部の遺存度区分はAである。非常に浅く、土坑と認定しうるか疑問も残る。

**S K1035** ⑤-1区 IIER01・YR20 (第69図)

S D1016区画内北西部、S K1033西側に隣接する。平面形は長軸131cm、短軸88cmの楕円形を呈する。検出面からの深さ約10cmと非常に浅い。埋土は灰黄褐色土が大半を占め、土坑中央部から南西にかけての上部に炭層が認められた。遺物はこの炭層周辺を中心に小片が散在的に検出された土師器65gがある。非常に浅いため、土坑ではなく凹地地形、もしくは炭化物集中に近い遺構の可能性もある。

**S K1037** ⑤-1区 IIES01 (第69図 P L 4)

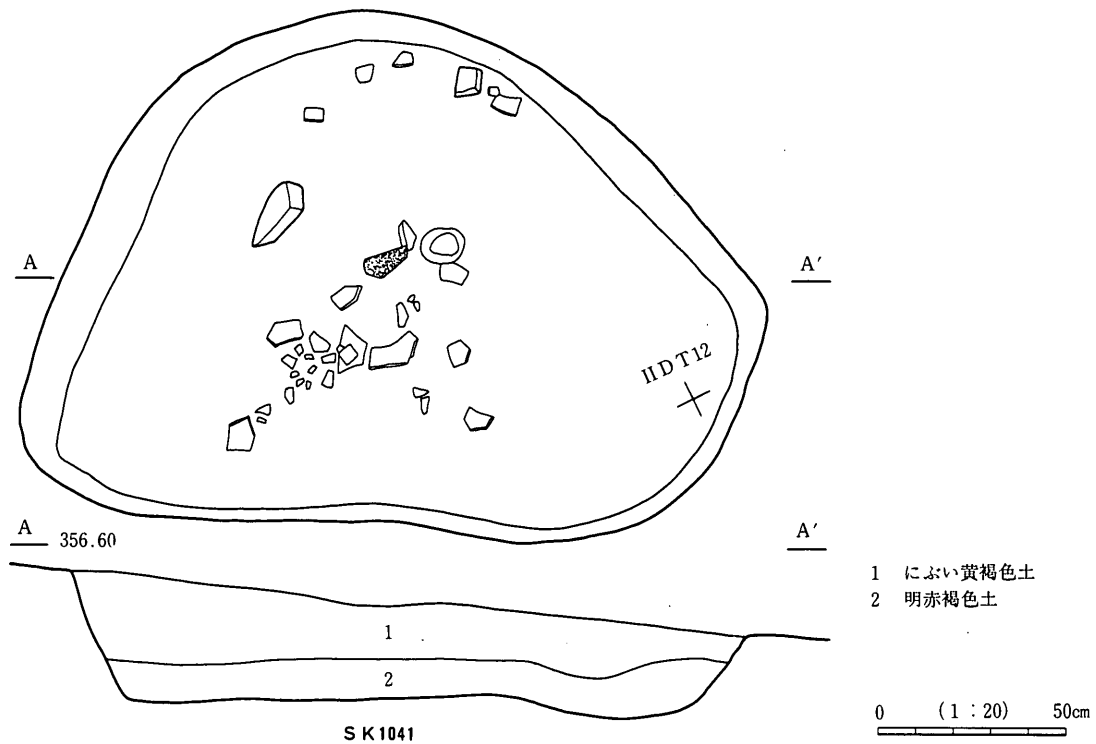
S D1016区画内西北部、S K1046北側に位置する。平面形は1辺約90cmの隅丸方形を呈し、壁は垂直で、底面は平坦な方形の断面形である。埋土は10層に細かく分層され、底面上には褐灰色土を基調として若干色調の異なる10・9層があり、その上部に部分的な暗灰褐色土がある。中位には薄い炭層・炭化物を含む黄褐色土・炭層が載るが、黄褐色土は遺跡内の基本土層には見られない粘土で遺跡外から搬入された可能性がある。その上には黄褐色ブロックを含む褐灰色土を基本としてやや色調が異なる3・4層があり、その上に炭層がレンズ状に入る。そして最上層には褐灰色土が載る。土器は2層の上部炭層から黄褐色土の6層にかけて多く包含されていた。しかし、完形になるものではなく、破片で出土したものである。出土遺物には土師器3330gと鹿角小片1点(生骨・加工痕なし)がある。土器の口縁部遺存度区分はCである。炭化物層は薄い層状に認められるが、間にはさまる黄褐色土では炭化物が多く含まれることから土器とほぼ同時に炭化物が廃棄されたと想定し、土器と炭化物を多く含むタイプに分類した。

**S K1041** ⑤-1区 IIDS11 (第70図 P L 4)

S D1016区画西側外に位置し、非常に検出しにくい土坑であった。平面形は長軸178cm、短軸148cmの不整形な楕円形を呈する。検出面からの深さは34cmを測り、断面形は逆台形となる。埋土は上下2層に分層され、上層はにぶい黄褐色土、下層は明赤褐色土である。遺物は上層のみから破片が散在的に出土したが、ほぼ1個体にまとまる。土器の重量は775gのみながら、口縁部の遺存度区分はCである。埋土が上層と下層では色調が極端に異なり、しかも遺物は上層のみで出土していることからすれば、下層は掘りすぎた可能性もある。本遺構は土坑と認定されうるか不安が残り、凹地状の地形、もしくは遺物集中に近い可能性も考えられる。なお、遺物出土状況は小破片が散在的に検出された例としたが、1個体にまとまる可能性があることから土器のみが顕著に見られる例に分類すべきなのかもしれない。

**S K1046** ⑤-1区 IIES03 (第71図 P L 4)

S D1016区画内西北部に位置し、北側にS K1037がある。平面形は長軸196cm、短軸140cmの南側が膨らむ楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦な逆台形の断面形を呈し、検出面からの深さ66cmを測る。埋土は5層に分層され、最下層ににぶい黄褐色粘土層の5層、その上には薄い炭層4層、さ

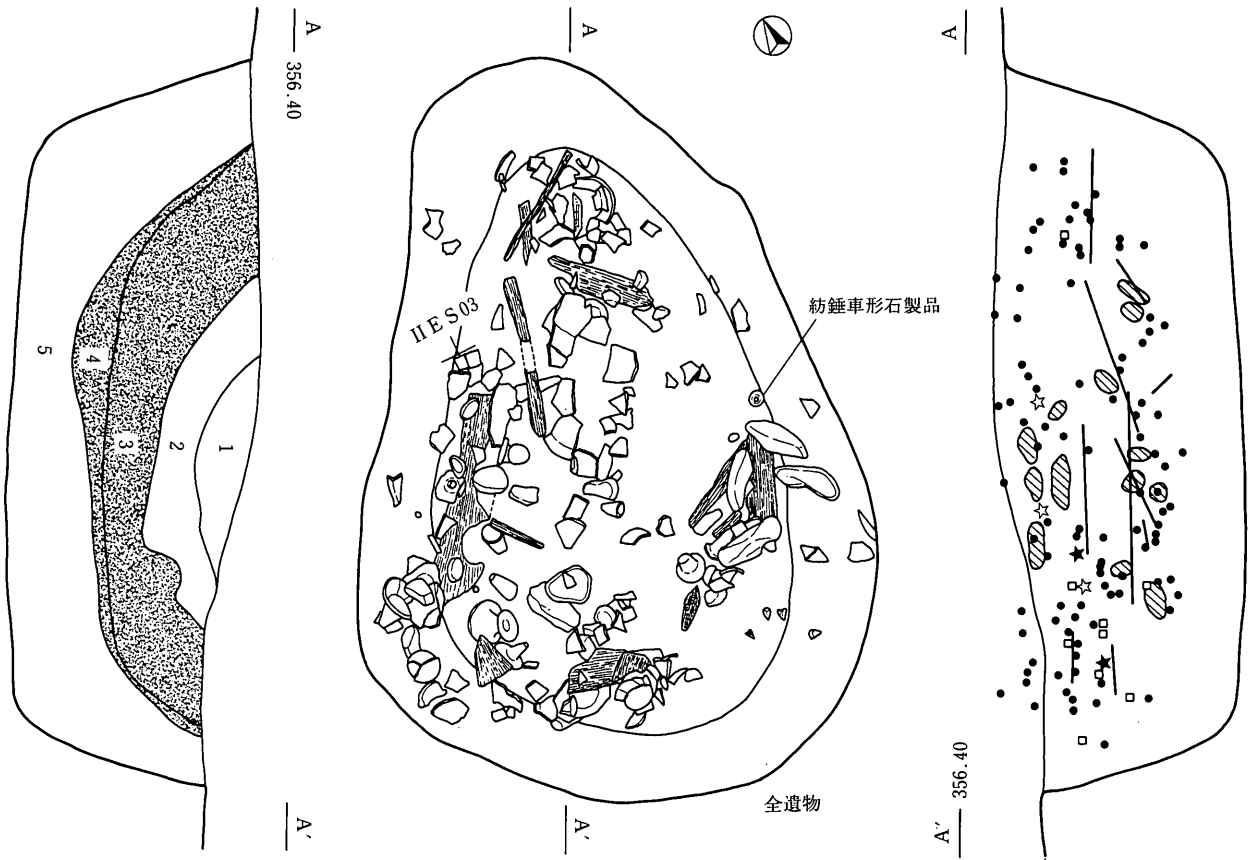


第70図 SK1041

らに多量の焼土ブロックと炭化物からなる3層が載る。その上には焼土粒・炭化物の含まれ方から分層された灰黄褐色土の1・2層がある。出土遺物は土師器破片8070g、ミニチュア土器1点、材、紡錘車形石製品、種子（モモ核1点）などが出土している。土器の口縁部遺存度区分はCである。遺物は1～4層では土坑の壁際を中心として完形の器台・小型丸底土器数点と破片・紡錘車形石製品・礫が出土し、5層では若干底面から浮いたところで材と土師器破片が北西部を中心にまとまって出土している。このことより、5層の堆積途中で土器が廃棄され、その後、焼土炭を伴う廃棄が行なわれたと推測される。4層は薄い炭化物層とされるが上面の焼土層と連続するため、4層以上はほぼ同一時期の焼却行為に伴う埋土と捉えられよう。ただし、5層の廃棄と4層以上の廃棄の具体的な時間差は不明であるため、土器と炭化物廃棄が顕著な例に分類した。また、4層以上では完形土器も見られるが、ほとんどは破片出土が多く、破損後の廃棄の所産である可能性が高い。なお、焼土層は本跡内で生成されたものか、2次的な埋め戻しなどで入ったものかは断定できなかったが、4層の炭化物層があることから後者の可能性がある。

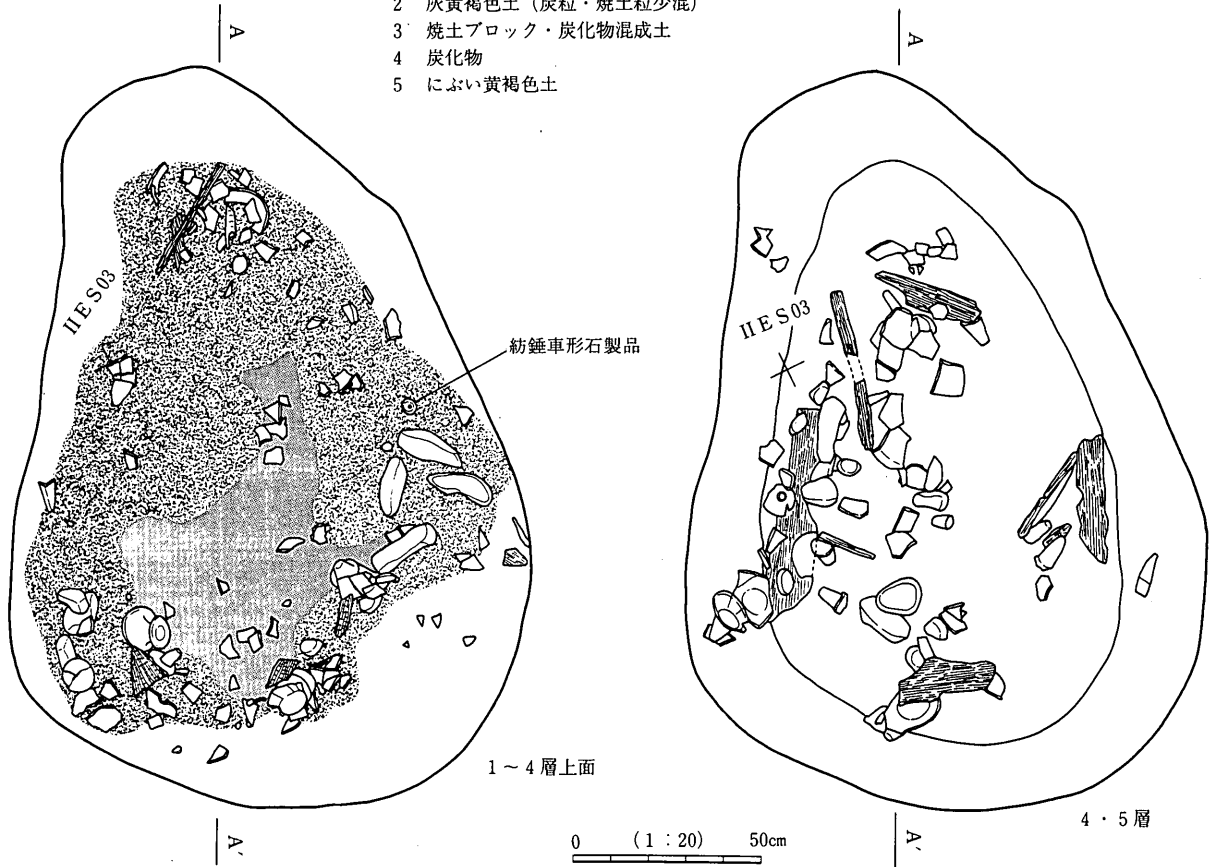
#### SK1050 ⑤-1区 IIEP03・04 (第72図 PL4)

SD1016区画内北西部に位置し、上部は近世以後のSD1013・1014に切られる。平面形は南北102cm、東西88cmのやや隅の丸い方形を呈する。壁はほぼ垂直、底面は平坦となり、断面形は箱形である。検出面から底面の深さは60cmを測る。埋土は5層に分層された。最下層には炭を含む黒褐色の粘土層があり、その上部に炭を多量に含む褐灰色土が北東側から入る。その上には赤黄褐色土・炭化物を多量に含む黒褐色土が載り、最上層には炭化物を多く含み、礫も多数含まれる灰黄褐色土が載る。全体的に炭化物が多量に含まれるが、そのなかで中位の2層と最上層の1層がもっとも目立つ。また、3層の赤黄褐色土は遺跡内の基本土層には見られない土で遺跡外から搬入された可能性がある。遺物は土師器3320gと土玉1点、凝灰岩製砥石1点、焼骨小片（種・部位不明）が出土している。土器は全体に破片で出土しているが、上部の1～2層に集中し、最下層での土器出土は少ない。口縁部の遺存度区分はCである。本跡は炭化物が顕著で形状や多量の土器出土から廃棄土坑と思われる。その廃棄のしかたは土坑が構築後に底面上の埋土が形



S K 1046

- 1 灰黄褐色土
- 2 灰黄褐色土 (炭粒・焼土粒少混)
- 3 焼土ブロック・炭化物混成土
- 4 炭化物
- 5 にぶい黄褐色土



第71図 S K 1046

成され、その後に焼土・炭化物を伴って土器が廃棄されたものと思われる。この様相から埋土中位で炭化物と土器の廃棄が見られる種類としたが、最下層でも炭化物が含まれるため、埋土下層と中位の土器出土層とはあまり時間差がないのかもしれない。また、完形品の出土が見られないことは破損した後の廃棄の可能性が想定されよう。

**S K 1055** ⑤-1区 IIEQ02 (第72図 P L 4)

S D 1016区画内北西部に位置する。長軸96cm、短軸72cmの楕円形の平面形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは約60cmを測る。埋土は5層に分層され、最下部の5層が黒灰色粘土、その上部には3層の褐灰色土が入り、3層下部から5層上面に掛けて黄褐色粘土ブロックと礫が入る。そして、3層の上には薄い炭層と1層の黒褐色土がレンズ状に入る。3層下部で見られた黄褐色土は遺跡内の基本土層にみられない粘土で遺跡外から搬入された可能性がある。また、上部の2層炭層と1層は廃絶後の凹地に入った土層であろう。出土遺物は土師器破片2300gと支脚破片1点が出土した。土師器は3層を中心に出土し、口縁部の遺存度区分はCである。しかし、口縁部の遺存度の比較的高い遺物も見られるが、口縁部以外はほとんど残存しないものがあり、直接廃棄されたものかは明らかでない。また、炭層が廃絶以後の所産と推定される。性格は不明である。

**S K 1056** ⑤-1区 IIET02

S D 1016区画内の北西部に位置する。平面形は長軸56cm、短軸46cmのやや円形に近い楕円形を呈し、検出面からの深さ約16cmと浅い。埋土は焼土粒・炭化物を含む褐灰色土の単層で、出土遺物は僅か50gの土師器しかない。口縁部遺存度区分はAである。焼土粒や炭化物を含む埋土から古墳時代の所産と判断したが、掘り込みが非常に浅いことなどから土坑ではない可能性もある。

**S K 2003** ⑤-1 IVAA05・AB05 (第73図、P L 5)

S D 1016区画内西部に位置する。長軸218cm、短軸125cmの楕円形の平面形を呈し、東側が浅い底面を形成し、西側が一段深く落ち込む。検出面からの深さは東側で約10cm、西側は約54cmである。埋土は上下2層に分層され、上層は東側テラス部分から西側上層に分布する炭を多く含む灰褐色土で、下層は西側の落ち込み部分を中心として分布する炭を大量に含む黒褐色土である。調査記録では上下層ともに炭化物を多く含むと記録されるが、埋土の色調は上下層では大きく異なる。調査域内では炭化物が多く含まれるために黒色や黒褐色に近い色調となるものがあるため、上層よりも下層のほうが炭化物が多いのではないかと推測した。遺物は材と土師器破片2155g、ミニチュア土器1点、種子がある。土師器は破片で出土して完形品の出土は見られない。口縁部遺存度区分もBである。上層で小破片、底面近くで破片が比較集中して出土した。土坑内では直接焼けた焼土面は確認されず、土坑外で生成された炭と共に土師器破片が廃棄されたと考えられる。

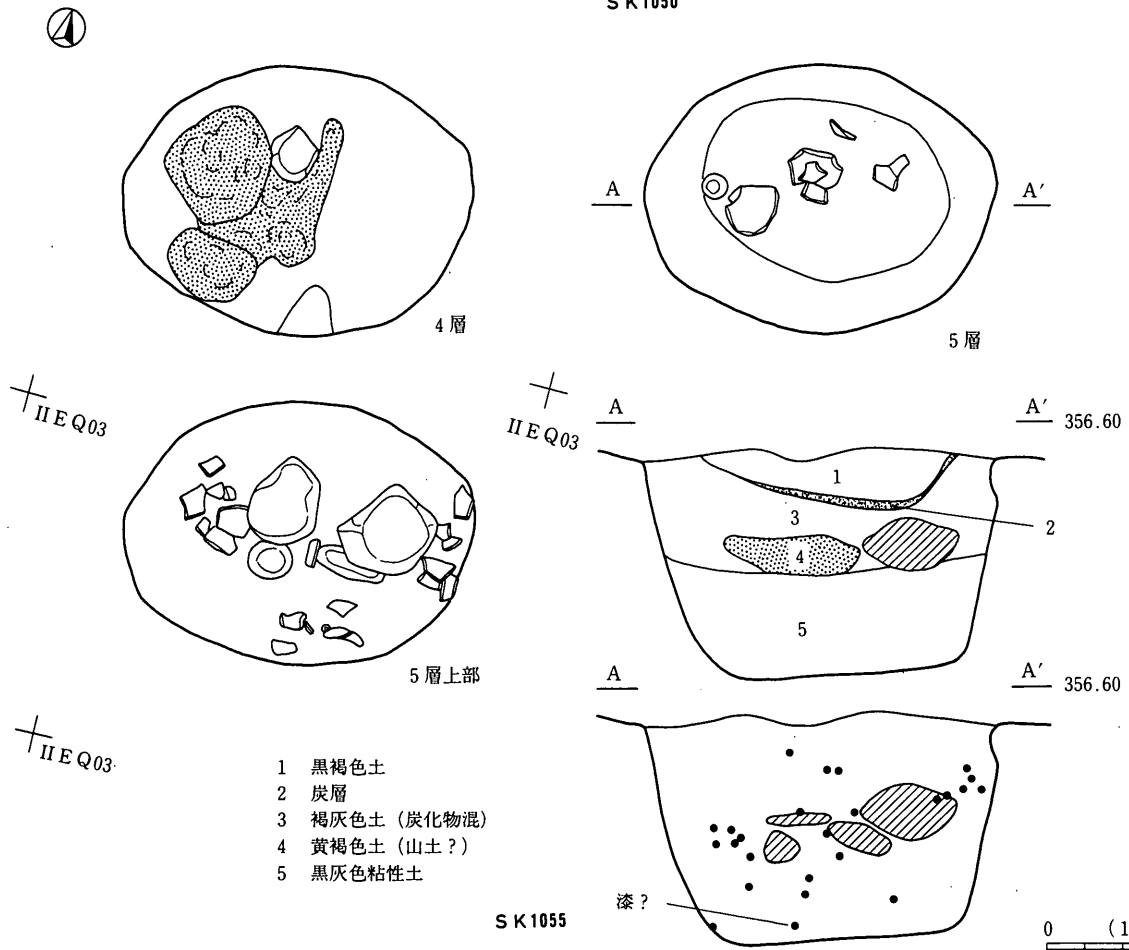
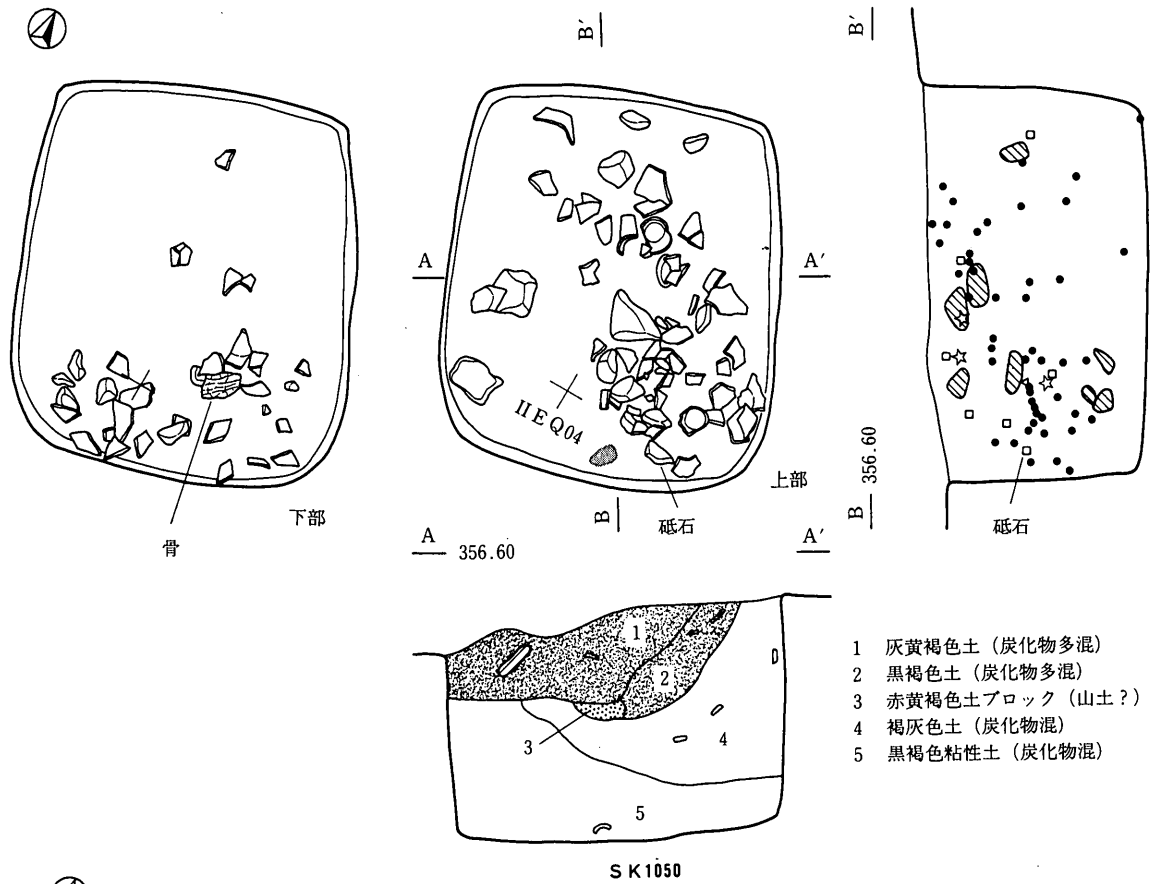
**S K 2004** ⑤-1区 IVAB03・04 (第73図、P L 5)

S D 1016区画内西部S K 2003北側に位置する。長軸274cm、短軸132cmの長楕円の平面形を呈し、深さは検出面から10～20cmと浅い。埋土は大量の炭を含む土の単層で、土より炭のほうが多い。遺物は土師器破片5540gが散在的に出土し、種子も出土している。土器の口縁部の遺存度区分はAである。土坑内部では直接被熱を受けて赤化しているところは見られず、埋土に含まれる多量の炭化物が土坑内で形成されたか明らかにしえなかった。掘り込みが非常に浅いので炭化物集中に近い可能性もあるが、炭を大量に含む埋土により平面形の認定には誤認はなかったと考えられ、平面形の明瞭さからは浅い土坑と考えたほうが良いと思われた。具体的な性格は不明である。

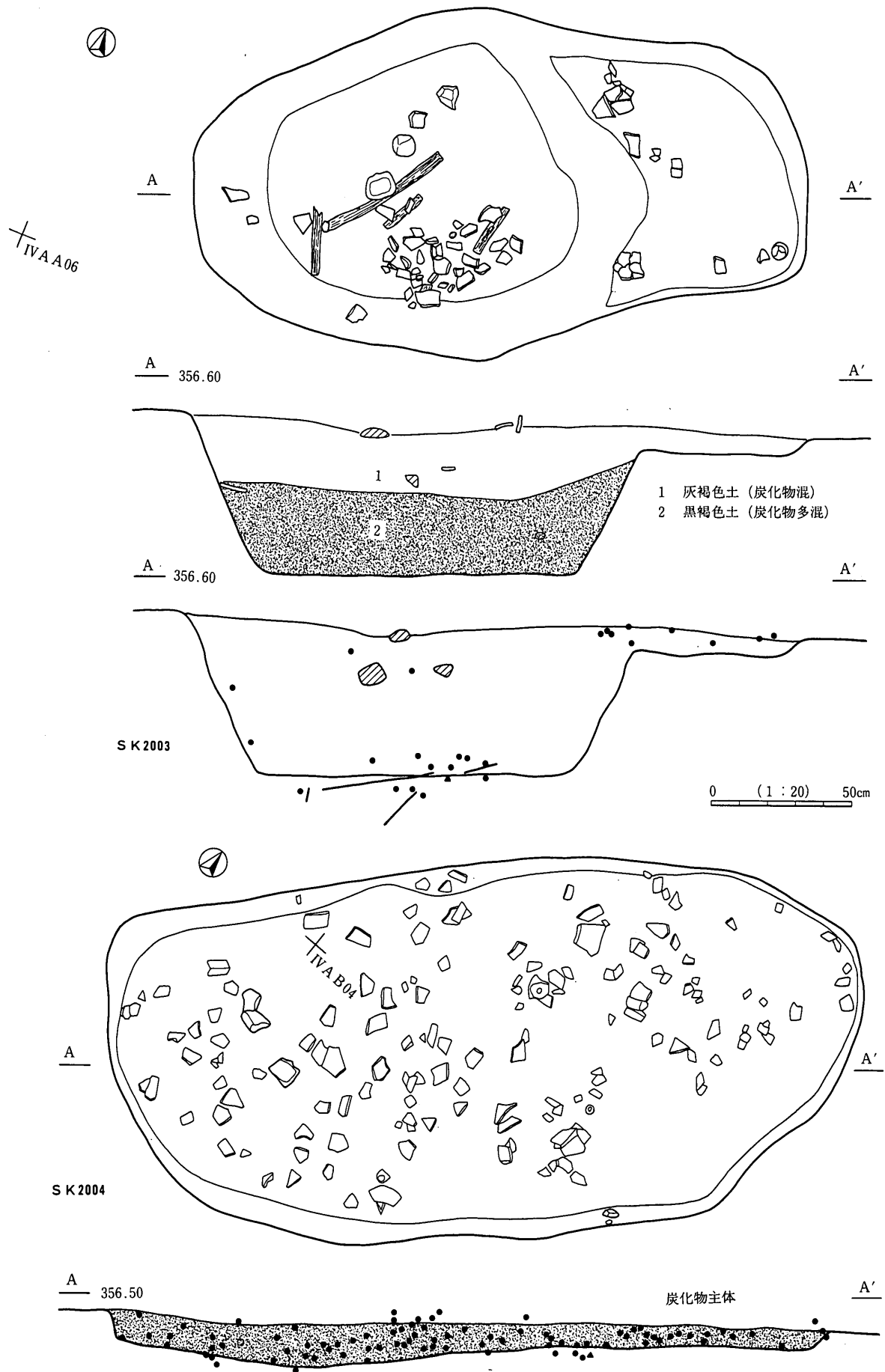
**S K 2005** ⑤-1区 VUD16 (第74図、P L 5)

S D 1016区画内西北部に位置し、調査では埋土の違いから本土坑がS K 2006を切ると判断されたが、形





第72図 S K1050・1055



第73図 SK2003・2004

状からするとS K2006は本土坑の一部である可能性が高い。S K2005とされた部分は長軸111cm、短軸89cmの楕円形となるが、S K2006を含めた場合はほぼ径115cm前後の円形になる。断面形は逆台形となり、検出面からの深さは73cmを測る。S K2005の埋土は3層に分層され、最下層に炭粒と土器を多量に含む灰黄褐色土、中位に土器・炭化物をわずかに含む灰黄褐色土、上層が土器・炭化物を少量含む黒褐色土がある。S K2006とされた部分は黒褐色土の単層で、底面がS K2005の2層に達するため、埋土のずれから別の土坑と判断されたのである。遺物は最下層の3層から多量の土師器が破片で7120g、S K2006とされた部分からは30gで合計7150gが得られた。破片の出土ながら土器の口縁部遺存度区分はCである。土師器がまとまって出土したことからは廃棄土坑の可能性はある。

#### S K2014 ⑤-1区 IVAC02・AD02 (第74図、P L 5)

S D1016区画内北西部に位置する。長軸76cm、短軸76cmの楕円形の平面形で、断面形は方形に近い逆台形を呈する。底面は平坦で検出面からの深さは54cmを測る。埋土は4層に分層され、最下面に炭化物を含む灰褐色土、その上部に部分的な焼土ブロックが入り、中位には大量の炭化物で構成される黒褐色土、上層に炭化物を大量に含む灰褐色土がある。遺物は小破片で散在的ながら比較的多くの土師器が得られ、出土量は3760gで、口縁部の遺存度区分はCである。大量ではないが焼土ブロックがあり、大量の炭化物の出土からも土坑構築からしばらくして土器や炭化物が廃棄されたと思われる。ただし、底面上の土層でも炭化物が認められており、4層の堆積と炭化物や土器の廃棄はあまり時間差はないのかもしれない。

#### S K2016 ⑤-1区 VUC19 (第75図、P L 5)

S D1016区画内北西部に位置する。直径110cm前後の円形の平面形を呈し、壁はほぼ垂直で底面は平坦な方形の断面形を呈する。検出面から底面の深さは50cmを測る。埋土は極赤褐色砂土の単層である。出土遺物には土師器があり、埋土全体に破片が散在的に出土しているが、下部では比較的集中する。出土土師器重量は2640gで、口縁部の遺存度区分はCである。土器から古墳時代の所産と考えられる。埋土中に炭化物はあまり目立たない。

#### S K2017 ⑤-1区 IVAE04 (第75図、P L 5)

S D1016区画内北西部に位置する。平面形は長軸64~76cmのやや楕円形ぎみの円形で、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは24cmと浅い。埋土は2層に分層され、底面上には炭化物層があり、その上面には炭化物粒や焼土粒を含む灰褐色土が入る。出土遺物は略完形の甕の他に土師器破片があり、総重量1960gで、口縁部の遺存度区分はCである。土器は1層を中心に出土し、炭化物の廃棄と前後して土器が廃棄されたと思われる。

#### S K2018 ⑤-1区 VUA16 (第75図)

S D1016区画内北西部で類似した形態のS K2019と並列し、S D2002に北端が切られる。平面形は長楕円形を呈すると思われる、長軸は残存部で118cm、短軸は89cmを測る。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは15cmを測る。埋土は褐灰色土の単層であるが、地山との区別が非常につきにくかった。遺物は獣骨しかなく、土器がまったく出土していない。土坑の認定と時期認定に問題を残す。凹地地形の可能性もある。

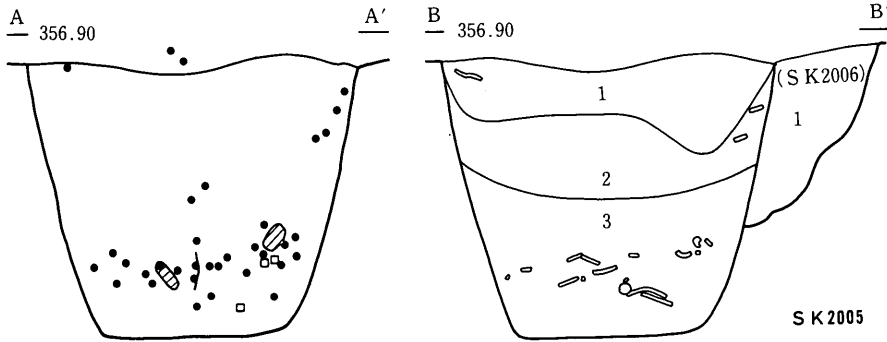
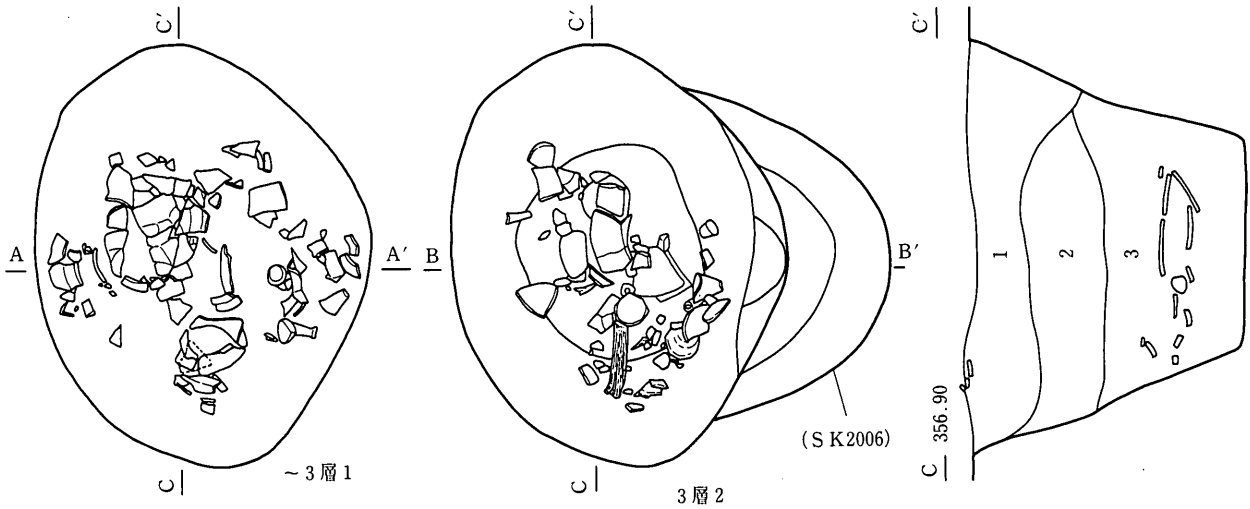
#### S K2019 ⑤-1区 VUA16 (第75図)

S D1016区画内北西部、形態的に類似するS K2018と並列し、S D2002に本跡北端が切られる。平面形は長楕円形を呈すると思われる、長軸は残存部で146cm、短軸は78cmを測る。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは15cmである。埋土は上層の薄い炭化物を含む黒褐色土、下層の褐灰色土の2層に分層された。遺物は土師器小破片が295g出土したのみで、口縁部の遺存区分はAである。本土坑は上層に炭化物が含まれていたことから古墳時代の所産と推測したが、それ以外は古墳時代とする根拠は薄い。また、非常に浅いことや、埋土が地山との識別が難しかったS K2018と類似している点からも凹地地形の可能性はある。

VUE16



VUE16

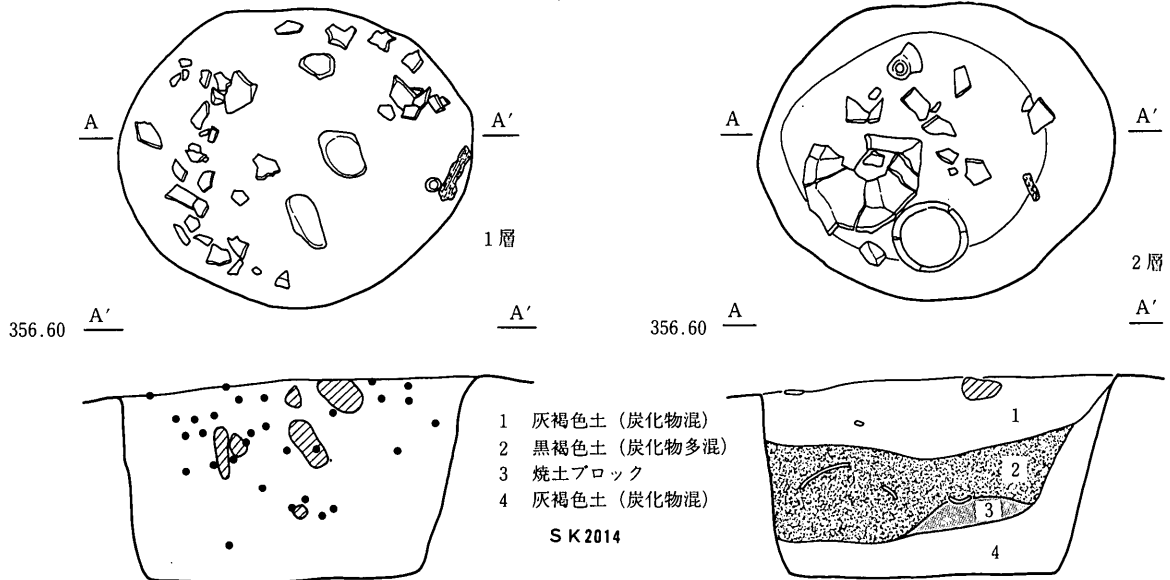


- SK2005
- 1 黒褐色土
  - 2 灰黄褐色土
  - 3 灰黄褐色土 (炭粒・土器片多混)
- (SK2006)
- 1 黒褐色土

VAD02



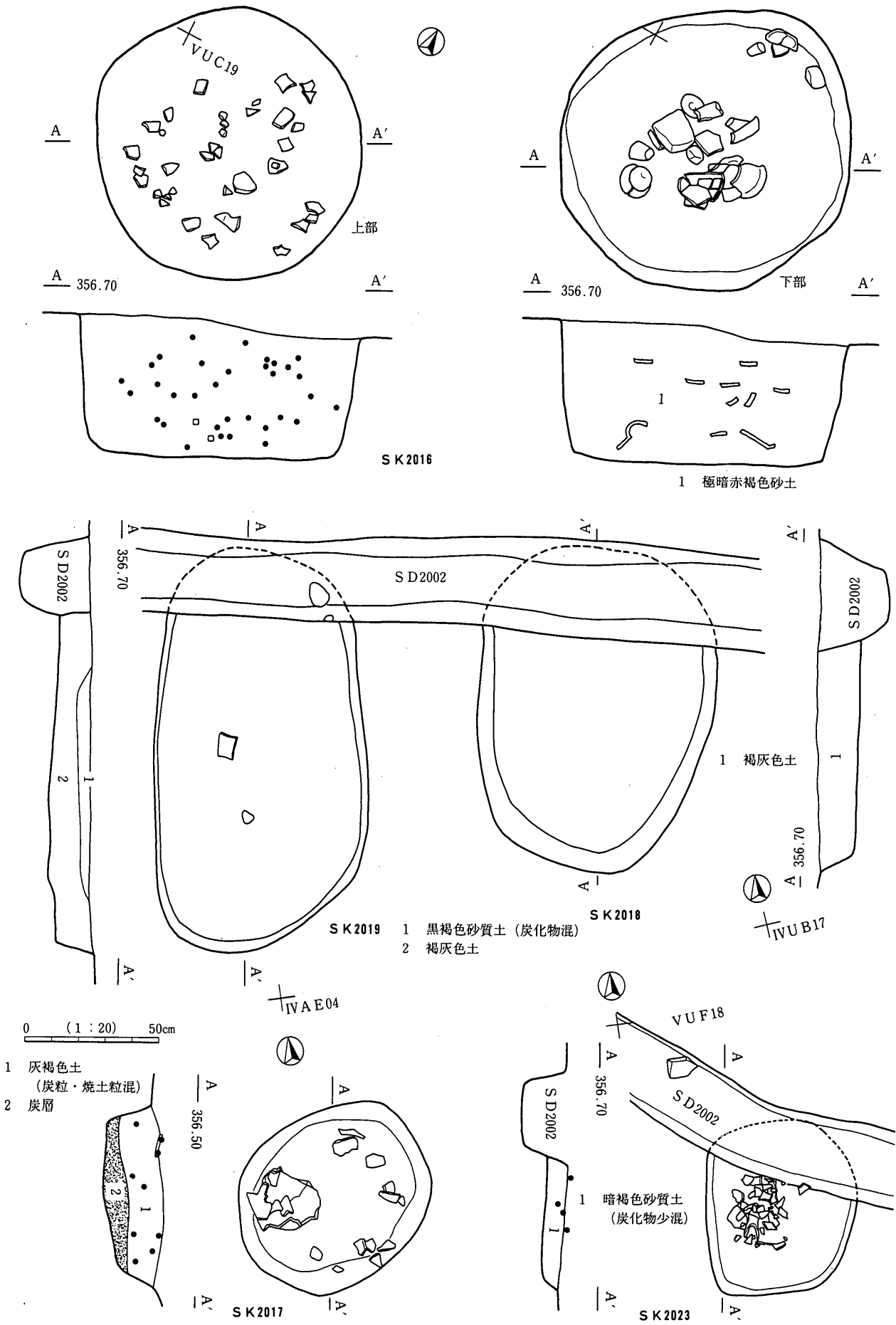
VAD02



- SK2014
- 1 灰褐色土 (炭化物混)
  - 2 黒褐色土 (炭化物多混)
  - 3 焼土ブロック
  - 4 灰褐色土 (炭化物混)

0 (1:20) 50cm

第74図 SK2005・2014



第75図 SK2016・2017・2018・2019・2023

**S K 2023** ⑤-1区 VUF08 (第75図)

S D1016区画内北西部に位置し、北側をS D2002に切られる。残存部で南北64cm、東西は56cmを測る方形に近い楕円形の平面形を呈し、検出面から底面の深さは7cmと非常に浅い。埋土は暗褐色の砂質土で、埋土中央の上部で土師器破片が比較的集中的に出土している。遺物は土師器破片790gとミニチュアがある。口縁部の遺存度区分はAである。本跡は掘り込みが非常に浅く、土坑ではなく凹地地形か遺物集中に近い可能性がある。

**S K 2025** ⑤-1区 VUB19 (第76図)

S D1016区画内北西部に位置する。長軸124cm、短軸81cmの楕円形の平面形で、壁はほぼ垂直、底面は平坦となり、断面形は方形を呈する。検出面からの深さは54cmである。埋土は2層に分層され、上層は炭化物を大量に含む黒褐色土で、下層は炭化物を少量含む暗褐色土である。遺物は土師器1555gがあり、口縁部の遺存度区分はAである。全般的に破片で散在的に出土するが、一部に口縁部を欠損しながらも大型の破片も認められ、1層下部から2層上部にかけて集中するところもある。底面上にはあまり土器も炭化物も顕著でない土層が堆積し、その後、炭化物と破片が入ったと思われる。

**S K 2026** ⑤-1区 IVAE01 (第76図)

S D1016区画内北西部に位置する。長軸94cm、短軸66cmの楕円形の平面形を呈し、壁はほぼ垂直で底面が平坦な長方形の断面形を呈するが、検出面からの深さは15cmと非常に浅い。埋土は若干の炭化物を含む灰色の砂質土で、埋土の北東部から土師器破片が集中して出土している。土師器は970g得られ、口縁部の遺存度区分はAである。浅いため、凹地状地形の可能性も残る。

**S K 2027** ⑤-1区 VUB20・UC20 (第76図、P L 5)

S D1016区画内北西部に位置し、S K2060の端をわずかに切っている。平面形は長軸126cm、短軸70cmの長楕円形を呈する。壁は若干斜めで、底面は平坦となる逆台形の断面形を呈し、検出面からの深さは約46cmを測る。埋土は3層に分層され、最下層には多量の炭化物と砂質土からなる土層、中位には炭化物・焼土を多量に含む黒色土、上層には炭化物を多量に含む黒色土がある。遺物は土師器12575gと材、管玉1点が出土したが、ほとんどは2層以上からの出土である。また、材は北西壁際に沿って出土した。土師器は比較的完形になるものが見られ、一部は重機による表土除去の際に削平してしまっているが、口縁部の遺存度区分はCである。埋土は炭化物の含み方や土器の出土状態で分層されたが、全般的に炭化物を含む共通点があり、埋土間や土坑構築と廃棄の時間差はあまりないと思われる。

**S K 2030** ⑤-1区 VUB20・UC20 (第76図)

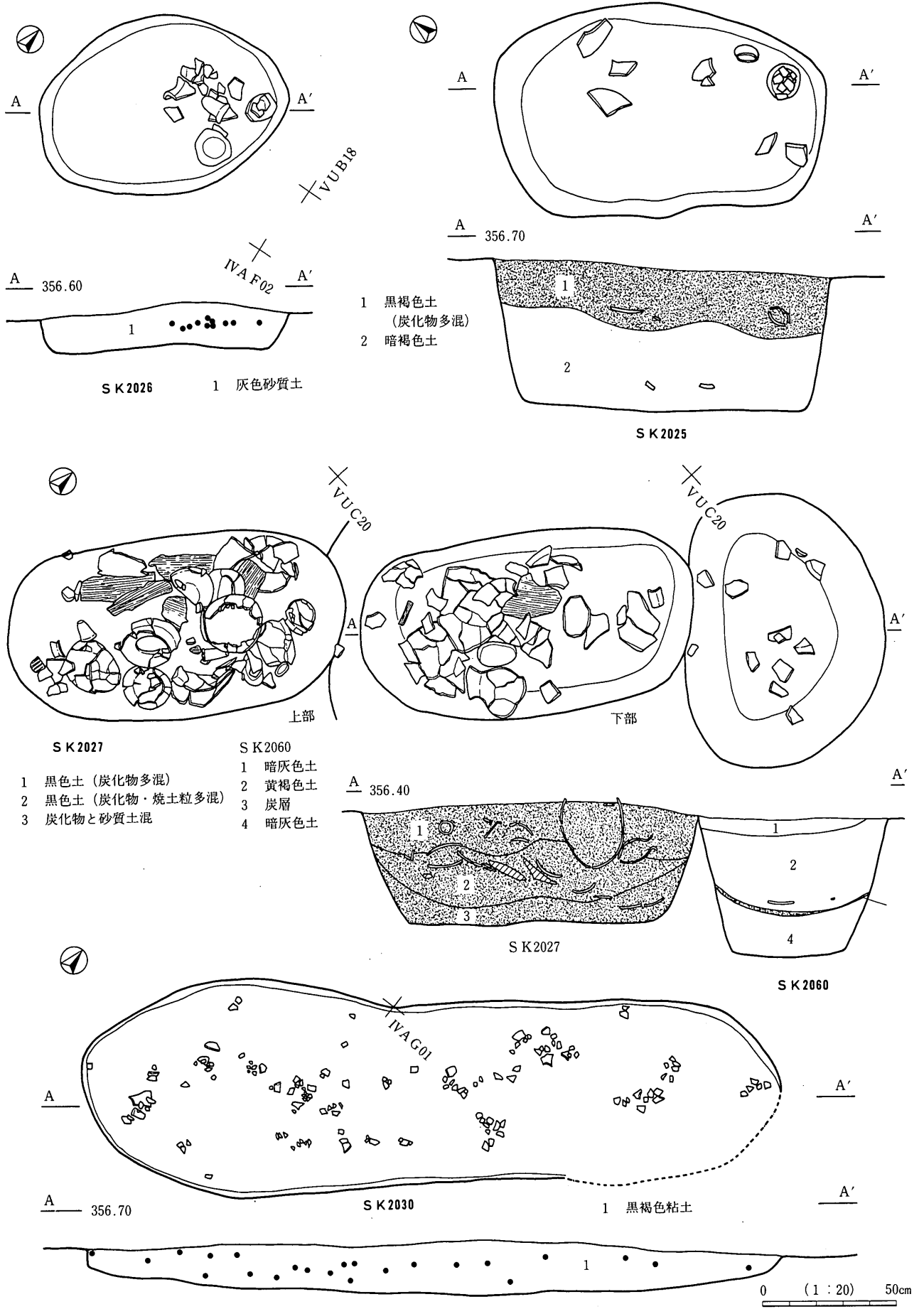
S D1016区画内北西部に位置する。長軸262cm、短軸70cmの長楕円形を呈し、壁の立ち上がりはやや不明瞭ながら、底面は平坦である。検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は黒褐色土の単層で、周囲の土層との境は不明瞭である。全体的に土師器が散在的に490g出土し、口縁部の遺存度区分はAである。浅い点から土坑とするよりも凹地地形の可能性もある。

**S K 2032** ⑤-1区 VUB17

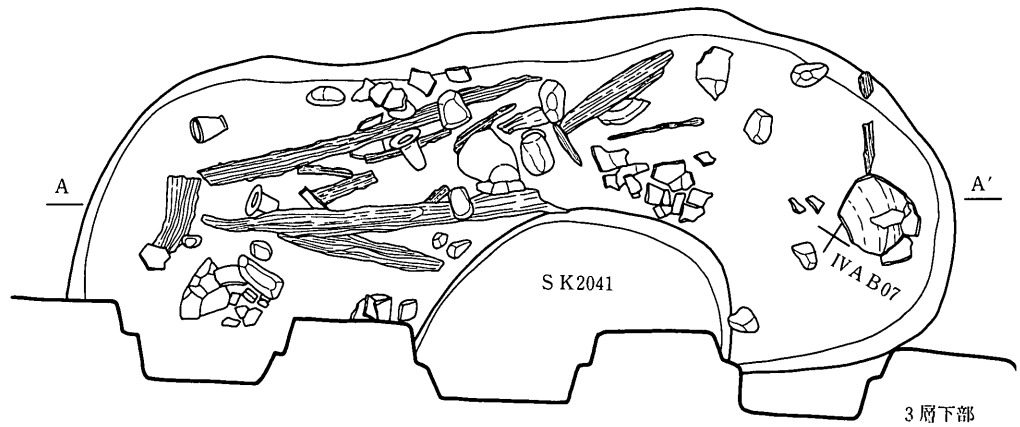
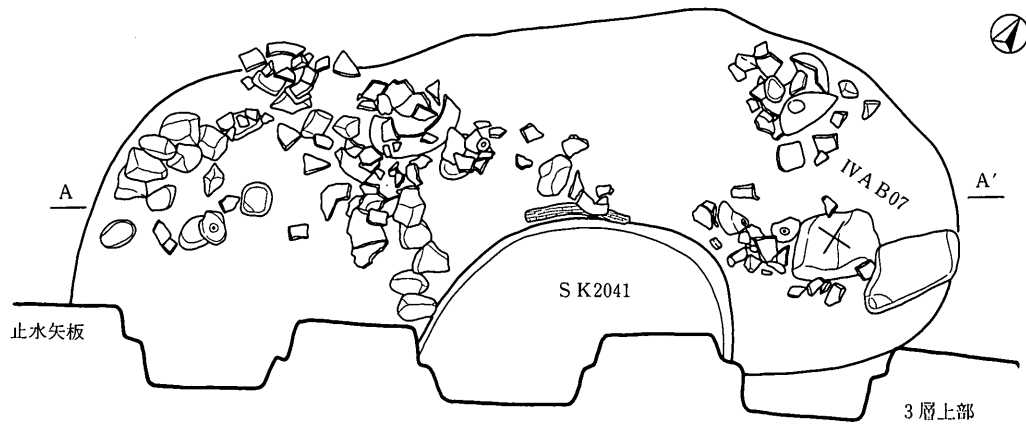
S D1016北西部に位置し、土坑南東部は攪乱で破壊されている。長軸は158cm、短軸は残存部で90cmを測り、ほぼ楕円形の平面形を呈すると思われる。検出面からの深さは28cmを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は記録ミスで不明である。遺物は土師器170gが得られたのみで、口縁部の遺存度区分はAである。土坑の性格は不明である。

**S K 2035** ⑤-1区 VUB15 (第78図、P L 5)

S D1016区画内北西部、⑤-1区東端に位置する。平面形は長軸162cm、短軸84cmの楕円形を呈す。壁はほぼ垂直で、底面は平坦な長方形の断面形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。埋土は記録がなく、



第76図 SK 2025・2026・2027・2030・2060



356.80 A

A'

- 1 褐黄灰色土  
(炭化物・黄褐色土ブロック混)
- 2 赤黄褐色土
- 3 褐灰色土

356.70 A

A'

0 (1:20) 50cm

S K2039

第77図 S K2039



不明である。遺物は土師器の小片1580gが得られたのみで、口縁部の遺存度区分はAである。土師器の出土から古墳時代の所産と推定したが、性格は不明である。

**S K 2039** ⑤-1 IVAA07 (第77図、P L 6)

S D1016区画内北西部に位置し、⑤-1区南壁際で周囲に打設された止水用矢板にかかって検出された。大部分は⑤-1区内に納まり、隣接した⑦-2区ではわずかな残存部を検出したのみである。平面形は長軸236cm、短軸92cmの長楕円形を呈し、壁はほぼ垂直で底面が平坦な長方形の断面形である。埋土は3層に分層され、上層に1層の褐黄灰色土、2層の赤黄褐色土がレンズ状に入り、2層下部には厚さ1cmの炭層が広がる。3層は埋土の大部分を占める土層で大量の土器を含む褐灰色土である。遺物は大量の土師器があり、重量は17420g、口縁部の遺存度区分はCである。他には材があり、3層を中心として若干の礫と共に割り材状の細長い材が長軸方向にやや不規則に並列して出土している。また、土師器の出土状態は破片で全体に散っているが、3層の中位に比較的集中する。したがって、分層されなかったが、底面直上には土器の出土が顕著でない部分があり、3層の中位で土器が集中的に廃棄され、さらに同質の土が上面を覆うとみられる。その上には薄い炭化物層が認められているが、これは土器廃棄後に入ったもので、混入ではないかと思われる。3層中位で土器が比較的集中する様相については3層が分層できていないため、時間差がないか、あるいは人為的な埋め土の可能性も想定できる。人為的な埋め土とすれば、底面直上では土器出土が顕著でないものの、土器廃棄は土坑構築とあまり時間差がない可能性もある。いずれにしろ、本土坑は炭化物を伴わずに土器や材が廃棄されたと思われる。

**S K 2047** ⑤-1区 VUD19 (第78図、P L 6)

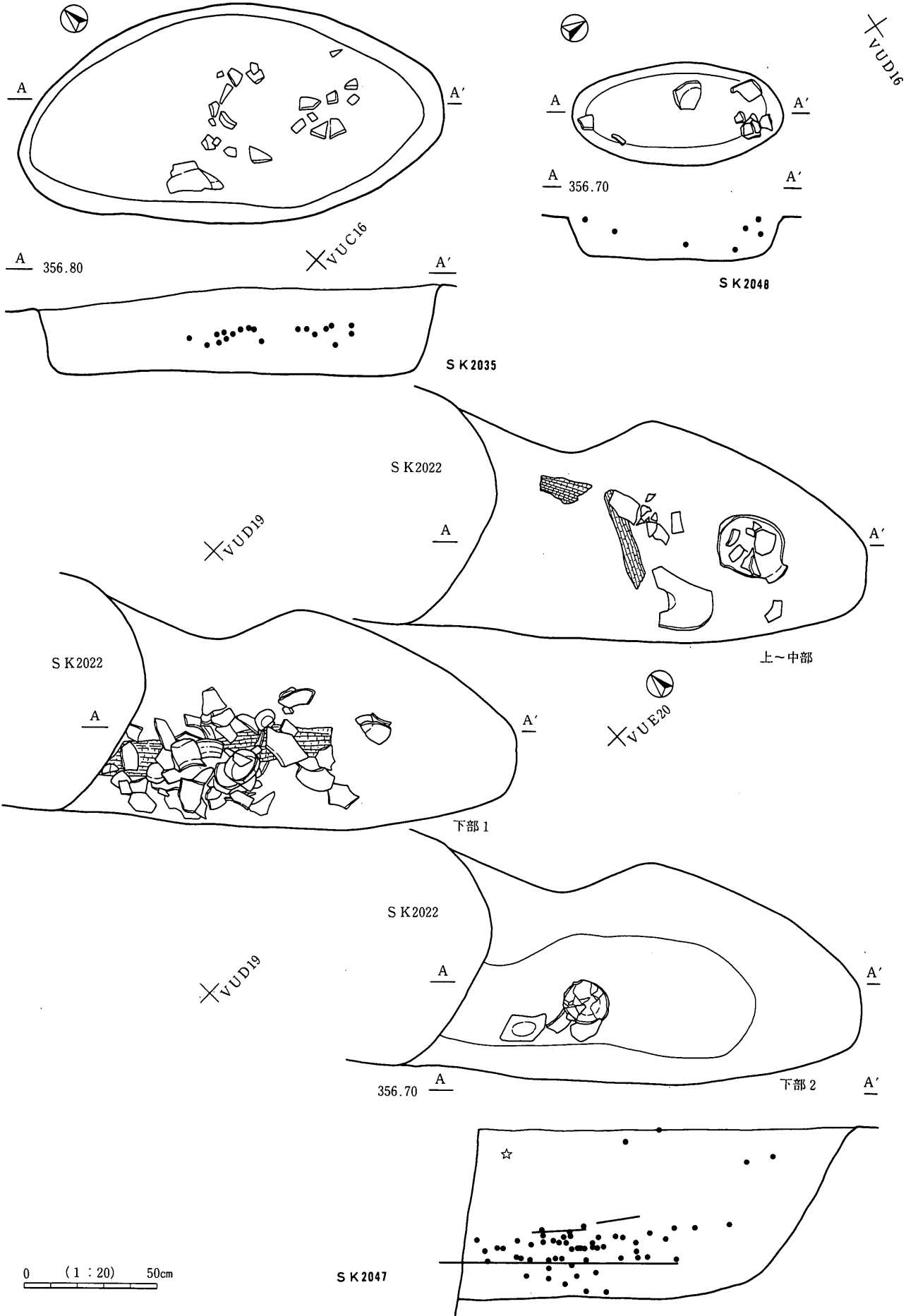
S D1016区画内北西部に位置し、北側を中世井戸のS K2022に切られる。規模の詳細はわからないが、長軸は残存部で170cm、短軸は80cmを測り、平面形は長楕円形を呈すると思われる。壁は若干斜めに掘り込まれ、底面は平坦な逆台形の断面形である。検出面からの深さは74cmを測る。土層図記録がないため、埋土の詳細は不明である。土器は上層で略完形品が1点、底面近くで破片が集中して出土した。相互に接合する破片はなく、大きく2回の契機で土器が入ったとみられる。下層出土の土器は、底面直上で若干の破片が散在し、その上に板状の材、その上には多数の破片が集中して出土している。出土遺物は多量の土師器があり、その総重量は8880gある。他には材、焼けたへら状骨角器片1点、検出面で出土した白玉1点がある。土器の遺存度区分はCである。本土坑は埋土の記録がないため、炭化物層の有無は不明であるが、大量の土器が廃棄された土坑と思われ、その廃棄は土坑構築からあまり時間を経っていないと思われる。そして、上層で再び土器が廃棄されたと思われるが、上部の土器は量が少なく、集中的な廃棄とは見られない。なお、上層の土器が入る間の時間差は不明である。

**S K 2048** ⑤-1区 VUD15・16 (第78図)

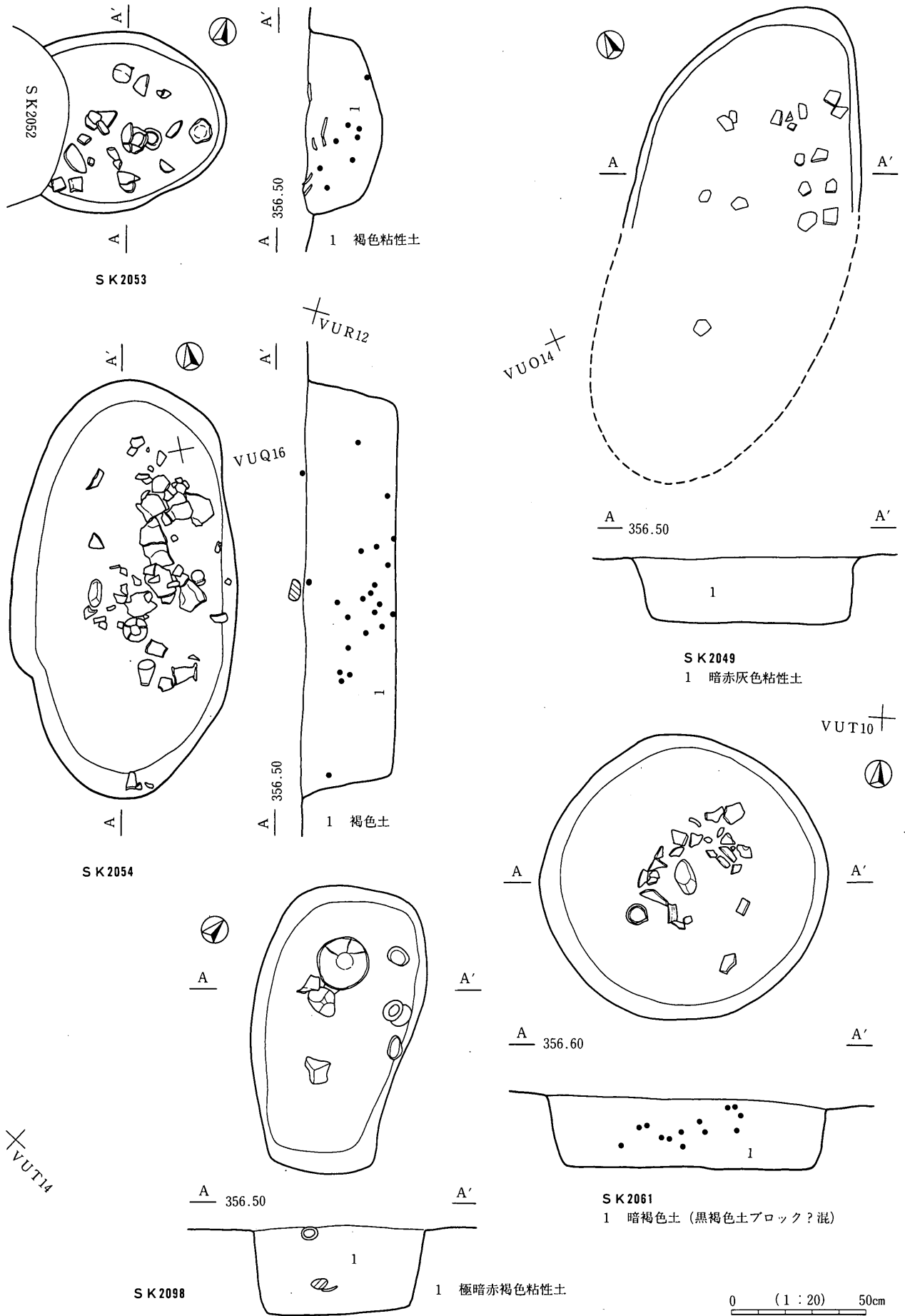
S D1016区画内北西部に位置する。平面形は長軸80cm、短軸38cmの楕円形を呈し、壁は若干斜めに掘り込まれ、底面は平坦な逆台形の断面形を呈する。検出面からの深さは約16cmと浅い。埋土は記録がなく、不明である。遺物は土師器破片785gと加工痕が残る生の鹿角小片1点がある。土器は破片が全体に散在的に出土し、口縁部の遺存度区分はAである。性格は不明である。

**S K 2049** ⑤-2区 VUP14 (第79図)

S D1016区画内中央部北よりに位置し、本土坑は⑤-2調査区西端に当たったため、土坑西側は排水を兼ねるトレンチで破壊してしまった。残存部からは北東-南西方向に長軸をとる楕円形を呈すると思われ、長軸は残存部で84cm、短軸は84cmを測る。断面形は壁がほぼ垂直で底面が平坦な長方形を呈し、検出面から底面の深さは約24cmを測る。埋土は極赤灰色粘土の単層で、土師器小破片490gが散在的に出土している。土師器の口縁部遺存度区分はAである。土師器の出土から古墳時代の所産であろうと推測したが、性



第78図 SK2035・2047・2048



第79図 SK2049・2053・2054・2061・2098

格は不明である。

**S K 2052** ⑤-2区 VUQ11・12

S D1016区画内の中央北より位置し、S K2053と切りあうが前後関係は記録がなく不明である。平面形は81～84cm前後の円形を呈し、断面形は隅の丸い逆台形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。埋土はにぶい橙色粘土に灰褐色土が混じる単層である。遺物は490gの僅かな土師器しかない。埋土が中世の土坑とも異なり、土器の出土からも古墳時代の所産であろうと判断した。性格は不明であるが、形状はS K2053に類似する。

**S K 2053** ⑤-2区 VUQ11 (第79図、P L 6)

S D1016区画内の中央部北よりに位置し、S K2052と切りあうが、前後関係の記録がなく不明である。平面形は74～60cm前後の円形を呈し、断面形は隅丸の逆台形を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。埋土は褐灰色の単層である。遺物は土師器の破片が全体に散在的に出土し、960g得られた。口縁部の遺存度区分はBである。土師器の出土からは古墳時代の所産と推測した。性格は不明であるが、形状はS K2052に類似する。

**S K 2054** ⑤-2区 VUP13 (第79図、P L 6)

S D1016区画内の中央部北よりに位置する。平面形は長軸をほぼ南北方向にとる楕円形を呈し、長軸152cm、短軸86cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、検出面からの深さは34cmを測る。埋土は褐色土の単層で、散在的に土師器破片が出土した。出土遺物は重量3085gの土師器とミニチュア1点がある。土師器は比較的多いが、口縁部の遺存区分はBで接合するものは少ない。性格は不明である。なお、土器の出土状態は小破片が散在的のみみられたが、大型破片の出土に区分したほうが良いかもしれない。

**S K 2056** ⑤-2区 VUL10、UM10

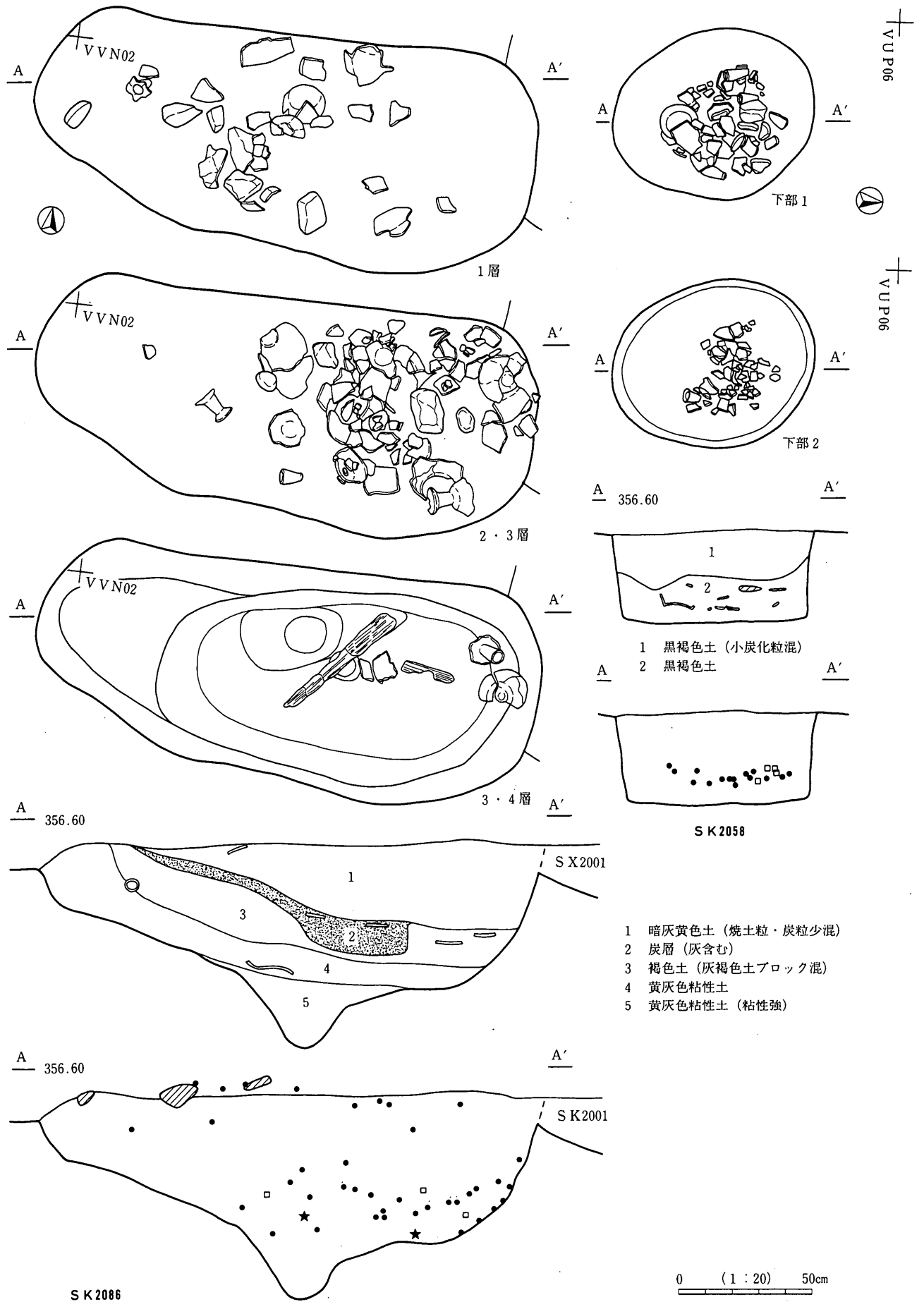
S D1016区画内の中央北よりに位置する。直径103～94cmのやや不整形の円形を呈し、断面形は浅い逆台形を呈する。検出面からの深さは15cmである。埋土は黄灰色土の単層であり、全体に散在して土師器小破片が含まれる。遺物は土師器小破片555gがある。口縁部の遺存度区分はAである。出土遺物や埋土から古墳時代の遺構と思われるが、性格は不明で凹地地形の可能性もある。

**S K 2058** ⑤-2区 VUP08 (第80図、P L 7)

S D1016区画内の中央北側に位置する。長軸77cm、短軸62cmの楕円形に近い円形を呈し、壁は垂直で底面が平坦な長方形の断面形を呈する。検出面から底面までの深さは34cmを測る。埋土は上下2層に分層され、上層が小炭化物粒を含む黒褐色土、下層が黒褐色土である。遺物は総重量2770gの土師器があり、口縁部の遺存度区分はCである。これ以外に弥生、古代、中世の土器がわずかにあるが、隣接したS K2057でも同様に出土しており、その量がわずかなことから混入の可能性が高い。なお、土師器は2層で比較的大型破片が見られた。したがって、土坑構築からあまり時間を経ない段階で土器が廃棄されたものと思われる。性格は不明である。

**S K 2060** ⑤-1区 VUC19・20 (第76図)

S D1016区画内北西部に位置し、南西端部を僅かにS K2027に切られている。長軸99cm、短軸74cmの楕円形の平面形を呈し、断面形は逆台形を呈して検出面から底面までの深さは50cmを測る。埋土は4層に分層され、底面上には暗灰色土、その上に薄い炭層、黄色褐色土が入り、最上部には暗灰色土が載る。このうち、2層にあたる黄褐色土は粘性の強い土であり、遺跡外から搬入されている可能性がある。また、炭層は炭化物が廃棄されたというよりも、周囲の炭化物が入り込んだ2次的な所産と思われる。遺物は2層を中心として610gの土師器破片が散在的に出土している。土器の口縁部遺存区分はAである。本跡はS K2027に切られることや古墳時代の土器出土から古墳時代の所産と推測されるが、その性格は不明である。



- 1 暗灰黄色土 (焼土粒・炭粒少混)
- 2 炭層 (灰含む)
- 3 褐色土 (灰褐色土ブロック混)
- 4 黄灰色粘性土
- 5 黄灰色粘性土 (粘性強)

第80図 SK2058・2086

**S K 2061** ⑤-2区 VUS10 (第79図)

S D1016区画北東部中央寄りに位置する。直径107~99cmの円形の平面形で、壁はほぼ垂直で底面が平坦な長方形の断面形を呈する。検出面から底面の深さは27cmを測る。埋土は暗褐色土に黒褐色土が混じる単層であり、人為的な埋め戻しの可能性がある。遺物は土師器破片1380g得られ、土坑の中央部に比較的集中していた。しかし、そのほとんどが接合せず、口縁部遺存度区分はBである。本土坑は古墳時代土師器の出土から古墳時代の所産と考えられるが、その性格は不明である。

**S K 2079** ⑤-2区 VQR12

S D1016区画内北東部中央寄りに位置する。直径88~74cmの円形の平面形で、検出面から底面の深さは20cmを測る。全体の形状はトライ状である。埋土は褐灰色の粘性の強い土の単層で遺物は特に出土していない。性格は不明で、埋土から古墳時代の可能性があると捉えたが、確定的でない。

**S K 2086** ⑤-2区 VVN02 (第80図、P L 8)

S D1016区画内北東部のS T2009南側に位置し、S K2606を切り、S X2002を切ると思われる。非常に検出しにくい土坑であったため、いくつか試掘溝を入れて平面形を確定した。また、S X2002は調査時に切られるとされたが、S X2002の土器が本土坑重複部分では土器が散布しないことや、S X2002が遺物集中に近い存在である可能性もあり、こうしたことから整理では切り合いが逆ではないかと推測した。平面形は長軸190cm、短軸84cmの長楕円形を呈する。壁はやや斜めに掘り込まれ、底面は東側へ傾斜している。また、底面上では柱穴状の小規模な落ち込みがあり、底面は検出面から56cmであるが、この柱穴状の落ち込み部分を含めると78cmを測る。埋土は5層に分層されている。底面上には5層の粘性のやや強い黄灰色粘性土、4層の黄灰色粘性土、3層の灰褐色ブロックを含む褐色土、2層の炭化物層、1層の暗灰黄色土である。炭化物層を薄い炭化物層に分類したが、1層では焼土粒も検出しており、炭化物の廃棄に近いかもしれない。また、4層と5層はあまり差が明瞭でなく、ほぼ同一の土層の可能性もある。出土遺物は総重量11440gの土師器と僅かな材がある。3層前後でもっとも多く出土し、下層では若干の礫、底面近くからは材の出土も認められた。土器の口縁部遺存度区分はCである。土坑内の堆積状態からは土坑構築後に5・4層が堆積し、土器、炭化物の順で廃棄されたと思われる。廃棄されたのは炭化物層からみると東側からと思われる。なお、底面の柱穴状の落ち込みは本土坑が破壊した柱穴の残骸なのか判然としない。

**S K 2098** ⑤-2区 VUT13 (第79図、P L 8)

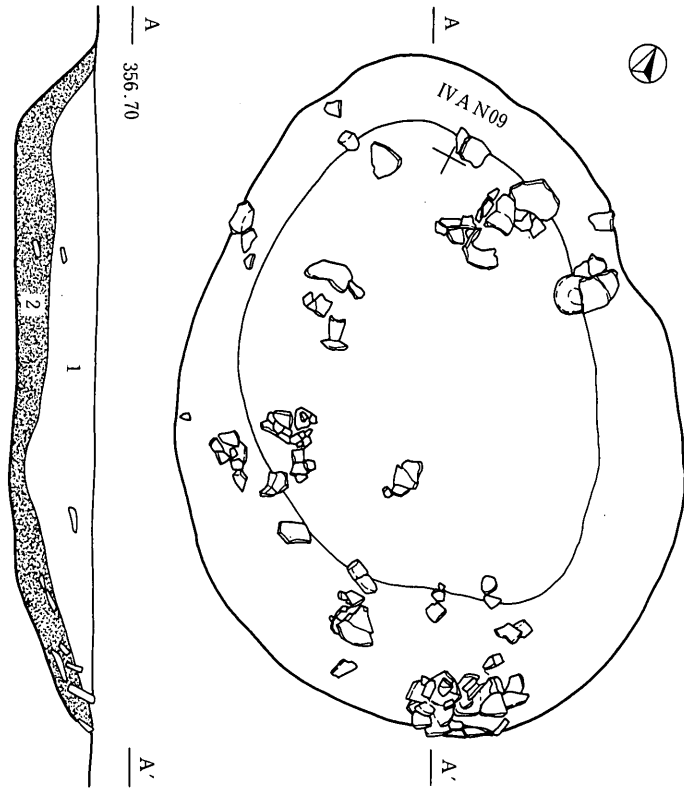
S D1016区画内中央北寄りに位置し、⑤-2調査地区東南端に当たる。平面形は長軸106cm、短軸62cmを測る楕円形の平面形を呈し、長軸はN-35°-W方向となる。壁はほぼ垂直、底面は平坦な方形の断面形を呈する。底面は検出面から32cmほどを測る。埋土は極暗赤褐色粘土の単層である。遺物は総重量1075gの土師器があり、高坏や小型丸底土器が検出されている。口縁部の遺存区分はCである。性格は不明であるが、量は少ないものの土器が廃棄された可能性がある。

**S K 2101** ⑧-1区 IVAM09・AN09 (第81図)

S D1016区画内南西部中央よりに位置し、S D2014を切る。長軸178cm、短軸136cmの楕円形の平面形を呈し、断面形は浅い逆台形を呈して検出面からの深さ22cmを測る。埋土は2層に分層され、上層に炭化物を若干含む暗褐色土、下層に炭化物を大量に含む黒褐色土がある。出土遺物は重量5670gの土師器が得られ、口縁部の遺存度区分はCである。土器は2層の壁際に破片が散在し、特に南壁際では比較的まとまって出土している。堆積順序は土器と炭化物が入った後に、小破片が入ったと思われる。大量の炭化物の出土と大量の土器出土からは廃棄土坑とも考えられるが、掘り込みが浅く、凹地地形の可能性もある。

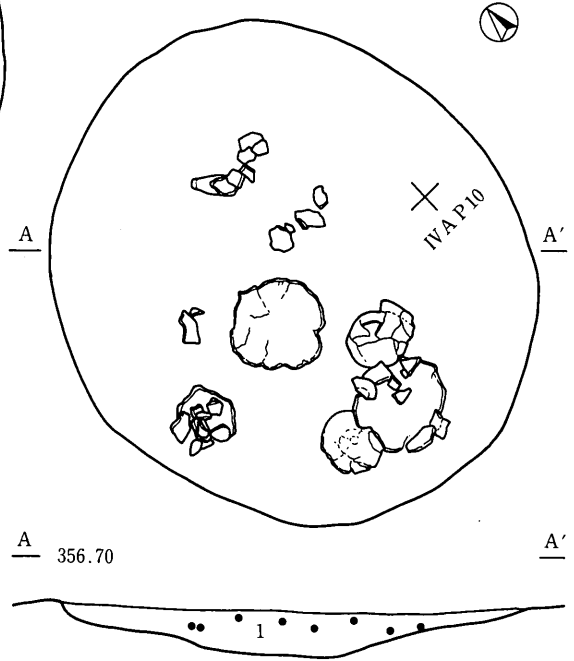
**S K 2102** ⑧-1区 IVAO09・10 (第81図)

S D1016区画内南西部中央よりに位置し、S D2015を切る。直径120~132cmの円形の平面形を呈し、立



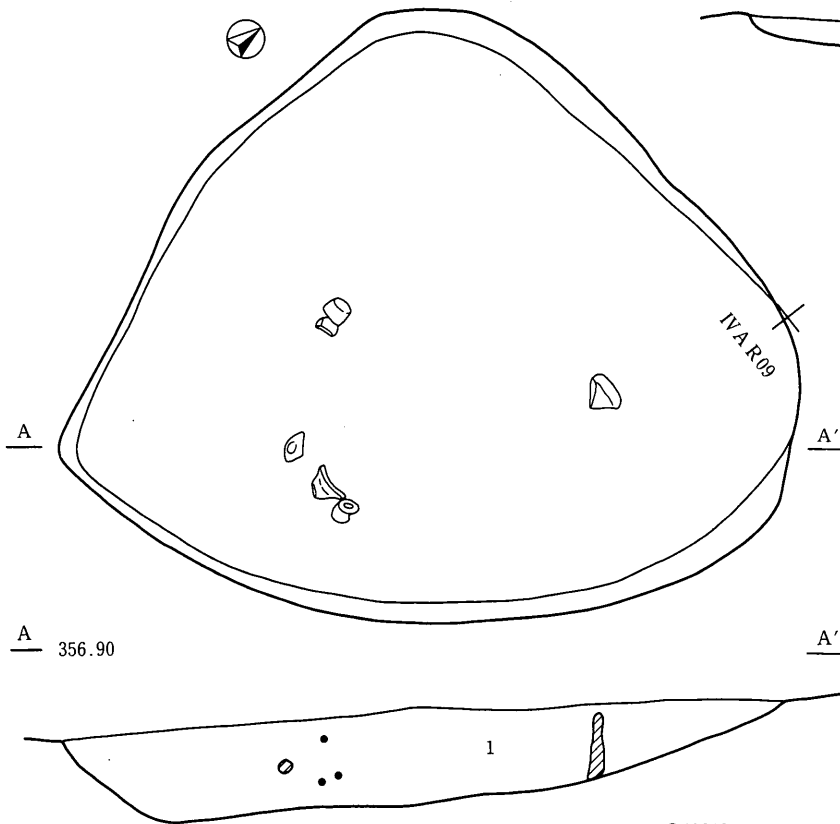
SK2101

- 1 暗褐色土 (炭化物混)
- 2 黑色土 (炭化物多混)



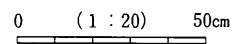
SK2102

- 1 暗褐色土 (炭化物混)



SK2103

- 1 黑褐色土



第81图 SK2101·2102·2103

ち上がりが不明瞭な土坑である。検出面から底面までの深さは約12cmと非常に浅い。埋土は炭化物を多少含む暗褐色土の単層である。出土遺物は土師器が4050g得られ、比較的遺存度の高い土器が含まれて口縁部の遺存度区分はCである。炭化物が含まれるが、炭化物が廃棄された状態とはみられず、土器を中心に廃棄されたと思われる。形態からは浅い凹地地形の可能性もある。

#### S K 2103 ⑧-1区 IVAQ09 (第81図)

S D 1016区画内南西部中央よりに位置し、S K 2198・2212、S D 2015を切る。平面形は直径176~166cmの不整円形で、立ち上がりが緩やかな逆台形の断面形を呈する。検出面から底面までの深さは約22cmと浅い。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は散在的な破片で出土した総重量1585gの土師器がある。口縁部の遺存区分はCである。土器出土量はあまり多くないが、口縁部遺存度の高い土器が含まれる。形状からは浅い凹地地形の可能性もある。

#### S K 2104 ⑧-1区 IVAT07・08 (第82図)

S D 1016区画内南西部中央よりに位置し、南東にはS K 2120が隣接する。平面形は長軸140cm、短軸100cmの楕円形の平面形となる。壁は若干斜めに掘り込まれ、底面は平坦で浅い逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され、両土層ともに黒褐色を呈するが、下層のほうが若干黒味が強い。上層を中心として礫と若干の土師器破片が散在的にみられた。出土遺物には土師器1000gと古代の須恵器、近世の陶磁器破片がある。古代・近世の焼物破片がわずかにみられるため、古墳時代の所産かまよったが、本土坑は近世S D 2018延長上に位置するため、混入した可能性があり、土坑の軸方向自体はS D 1016と直交する方向であることから古墳時代とした。性格は不明である。

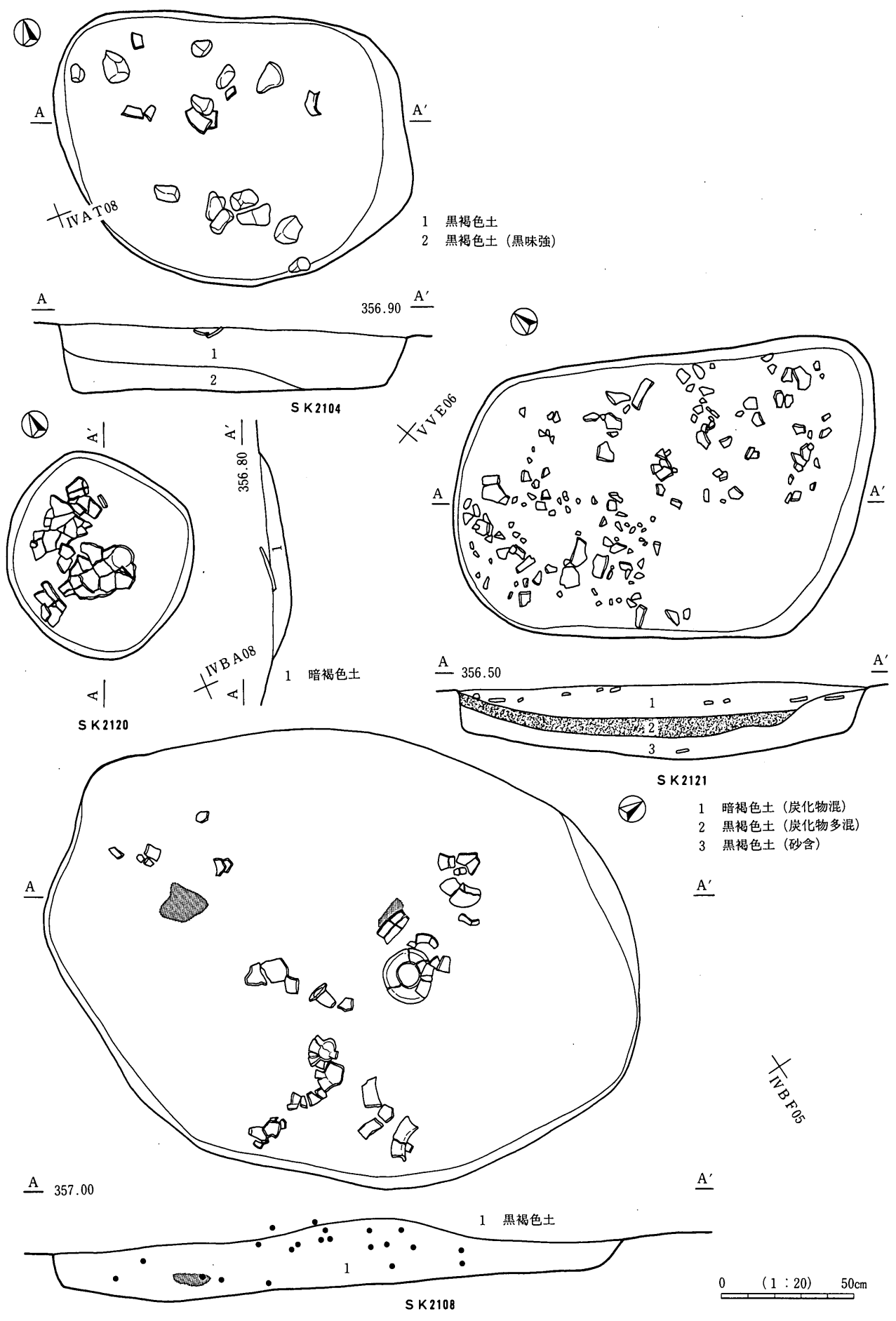
#### S K 2108 ⑧-1区 IVBE05 (第82図、P L 8)

S D 1016区画内中央南部に位置する。長軸228cm、短軸166cmの楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは16cm前後である。埋土は黒褐色土の単層で、ごく一部に焼土ブロックが含まれる。出土遺物には総重量9065gの土師器と、生の獣骨小片がある。土師器は埋土全体に散在的に破片で出土したものが多く、接合作業後では口縁部の遺存度区分はCとなった。土器のみの廃棄と思われる、部分的な焼土ブロックは炭化物をあまり顕著に含まない点から混入の可能性が高いと考えた。ただし、形態的には土坑ではなく、凹地地形に近い可能性もある。このことは周囲で遺物集積が多く認められている点からも推測される。

#### S K 2112 ⑧-1区 IVAQ08・AR08 (第83図)

S D 1016区画内中央部南の古墳時代土坑が多く密集する部分に位置し、S K 2198・S D 2015を切り、S K 2213・2200に切られる。平面形は東西方向が242cm、南北方向が212cmの方形を呈する。壁は若干斜めに掘り込まれ、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面の深さは36cmを測る。埋土は5層に分層され、底面上西壁際には黒褐色土、その上から底面上にかけて部分的に炭化物を大量に含む黒色土と焼土ブロックが散在的に認められた。その上部の大半は2層の黒褐色土と1層の暗褐色土で占められる。堆積順序は底面上にわずかな堆積土が見られた後に、焼土と薄い炭化物層が入る。出土遺物は土師器が総重量13450gと他に僅かな古代焼物がある。土師器は出土量が多いものの、図記録に取られたものは少なく、出土状況の詳細は不明である。残された図記録からは埋土下部の出土が多く、南壁際には比較的大型破片が認められる。口縁部の遺存度区分はCである。古墳時代土坑の多くはS D 1016と類似した軸方向を取るなかで、本土坑は平面形が隅丸方形で辺方向は条里方向に近い東西南北に一致する点で特異な存在となっている。古代の土器の出土も考えれば、古墳時代ではない可能性もあるが、古代の土器が僅かであることや古墳時代の土器が圧倒的に多いことから古墳時代の可能性があると考えた。また、形状からすれば竪穴建物跡の可能性もあるが、断定できなかった。





第82図 SK2104・2108・2120・2121

**S K 2113** ⑧-1区 IVAS10

S D 1016区画内の南西部に位置する。長軸104cm、短軸84cmの楕円形の平面形で、断面形は浅い逆台形を呈す。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは12cmを測る。埋土は炭化物を少量含む暗褐色土の単層である。出土遺物は古墳時代の土師器破片が1540gあり、口縁部の遺存度区分はAである。埋土中から散在的に出土している。この他に混入と思われる弥生土器と古代の土器片がわずかにある。消極的ながら遺構形態が他時代には見られないものであることや、出土遺物から古墳時代の所産と考えた。性格は不明である。

**S K 2119** ⑧-1区 IVAQ06・07 (第84図、P L 9)

S D 1016区画内南西部南よりに位置し、南側にはS K 2112が隣接する。平面形は長軸174cm、短軸168cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦であるが、中央に柱穴状の浅い窪みが検出されている。深さは検出面から42cm、中央の窪みの底面までは52cmを測る。埋土は上下2層に分層され、上層は炭化物を少量含む暗褐色土、下層はやや粘性のある黒褐色土である。出土遺物には総重量4100gの土師器、混入と思われる僅かな弥生時代、あるいは古代の土器がある。これらの土器は礫とともに埋土2層位上部の中央部と南西壁際を中心としてまとまっている。破片が主体ながら、比較的完形に近いものも認められており、口縁部の遺存度区分はCである。土器の出土状況と合わせると、一定の土層堆積がみられた後に土器が廃棄されたと考えられる。

**S K 2120** ⑧-1区 IVAT07 (第82図、P L 9)

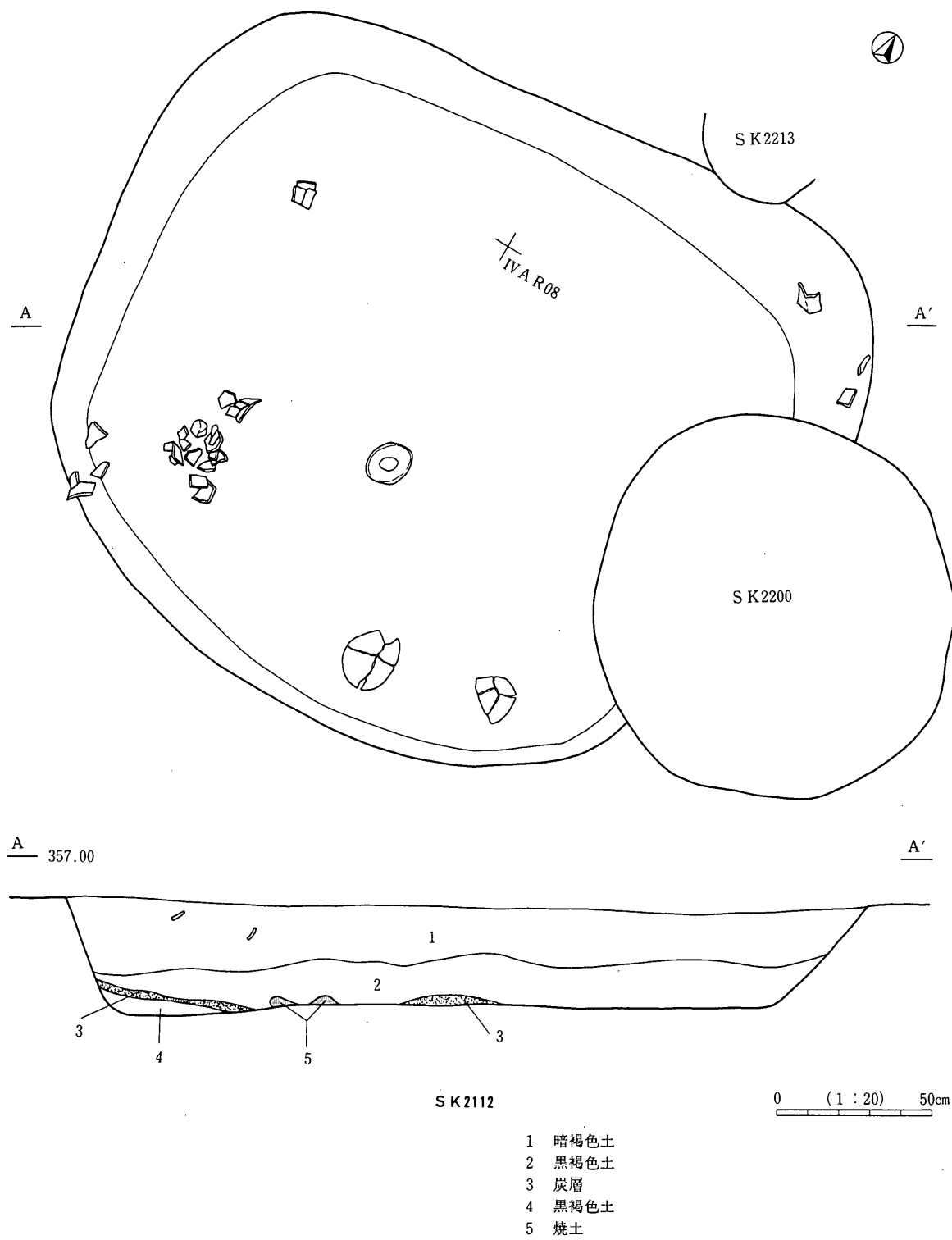
S D 1016区画内の南西部南よりに位置し、隣接してS K 2216がある。平面形は南北156cm、東西148cmのやや菱形に近い形態となり、断面形は立ち上がりが不明瞭な浅い凹地状を呈する。検出面からもっとも深いところで14cmを測る。埋土は炭化物を多少含む暗褐色の単層である。この埋土上部では比較的まとまって土師器が出土している。出土土師器の重量は2380gあり、口縁部の遺存度区分はAである。しかし、土器出土レベルが高いため、表土掘削時に土器の一部は削平した可能性があり、本来はもっと遺存度が高いと思われる。形状からは凹地地形、あるいは遺物集中に近いと思われる。

**S K 2121** ⑤-2区 VVE06 (第82図、P L 9)

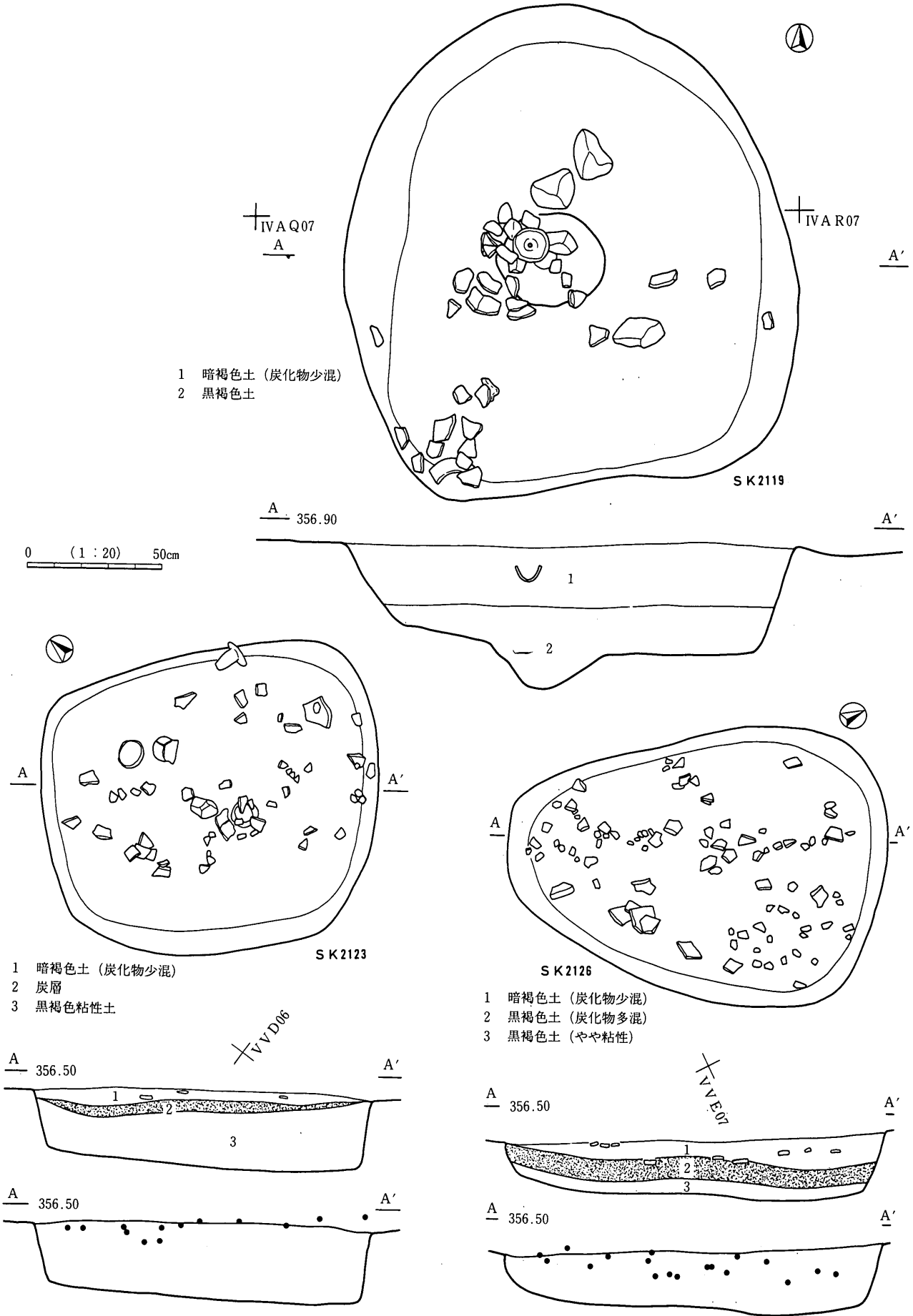
S D 1016区画内北東部の中央よりに位置し、近接してS K 2123・2126がある。また、S T 2010の範囲とはわずかに重複する。平面形は長軸160cm、短軸102cmの楕円形を呈し、壁はやや斜めで、底面はほぼ平坦ながら中央が若干くぼむ。断面形は浅い逆台形となり、検出面からの深さは26cmを測る。埋土は3層に分層され、底面上には黒褐色の粘性に富む土、中位に炭化物を大量に含む黒褐色土、上層に炭化物を若干含む暗褐色土がある。遺物は総重量2150gの土師器があり、比較的上部に集中して破片で出土したが、口縁部の遺存度区分はCとなった。これは一部に遺存状態の良好な破片が含まれるためであり、全体的には小破片が主体である。堆積状態からは土坑構築後に一定の埋土が入り、その後、炭化物と土器が入ったと想定される。そのあり方は隣接したS K 2123・2126と類似する。

**S K 2123** ⑤-2区 VVD05 (第84図、P L 9)

S D 1016区画内北東部の中央よりに位置し、近接してS K 2121・2126がある。平面形は長軸126cm、短軸112cmのやや隅丸方形に近い楕円形を呈する。壁はほぼ垂直で底面は平坦な浅い長方形の断面形を呈し、検出面からの深さは29cmを測る。埋土は3層に分層され、上層に薄い炭化物を若干含む暗褐色土とその下の炭化物を大量に含む層があり、その下の大部分は黒褐色の粘土層で占められる。遺物は総重量2510gの土師器があり、上層を中心として破片で全体に散在して出土している。接合して完形になるものはみられておらず、口縁部の遺存度区分はAである。形状や土器の出土状態は隣接するS K 2121・2126に類似しているが、口縁部の遺存状態からみるとS K 2126とは異なる様相もある。本土坑は土坑構築後に一定の埋土が入り、その後、土器破片と炭化物が入ったと思われる。



第83図 SK2112



第84図 SK2119・2123・2126

**S K 2126** ⑤-2区 VVD06 (第84図、P L 9)

S D 1016区画内北東部の中央よりに位置し、近接してS K 2121・2123がある。平面形は長軸140cm、短軸106cmの北側がやや膨れる楕円形を呈する。断面形は壁が若干斜めに掘り込まれ、底面は平坦ながら若干凹凸がある。検出面から底面までの深さは26cmを測る。埋土は3層に分層され、底面上には黒褐色粘土、中位には炭化物を大量に含む黒褐色土、上層には若干の炭化物を含む暗褐色土がある。遺物は総重量1640gの土師器があり、口縁部遺存度区分はBである。これらの土師器は1層を中心に小破片が散在的に出土しており、その出土状況はS K 2121・2123と類似する。本土坑も土坑構築後に一定の埋土が入り、次に炭化物、前後して土器が入ったと思われる。

**S K 2148** ⑤-2区 VVE08 (第85図、P L 9)

S D 1016区画内北東部の中央よりに位置し、北側を僅かに中世のS K 2145に切られる。平面形は長軸128cm、短軸105cmの楕円形である。断面形は浅い長方形を呈し、検出面からの深さは12cmと浅い。埋土は単層であるが、土質の記録がないため詳細は不明である。調査所見の記録には土器の集中した部分周辺は炭化物層があり、それ以外は全体に炭化物粒子が混入するとされる。出土遺物には総重量1245gの土師器があり、土坑中央部の埋土上部を中心に出土している。口縁部遺存度区分はBである。埋土記録の不明瞭さから堆積状態は断定できないが、炭化物と土器が廃棄されたと考えた。形状は非常に浅く、凹地地形可能性もある。

**S K 2152** ⑤-2区 VQS10・QT10 (第85図)

S D 1016区画内北東部の東端に位置し、隣接してS K 2063A・Bがある。直径64~68cmの円形の平面形を呈し、壁は垂直で底面が平坦となる方形の断面形である。検出面からの深さは13cmと浅い。埋土は粘性の強い灰褐色土の単層で、総重量130gの僅かな土師器破片が出土したに過ぎない。出土土器からは古墳時代の所産の可能性があると推測したが、断定はできない。平面形態は柱穴跡に類似するが、浅過ぎるため柱穴跡とは認定しなかった。性格は不明である。

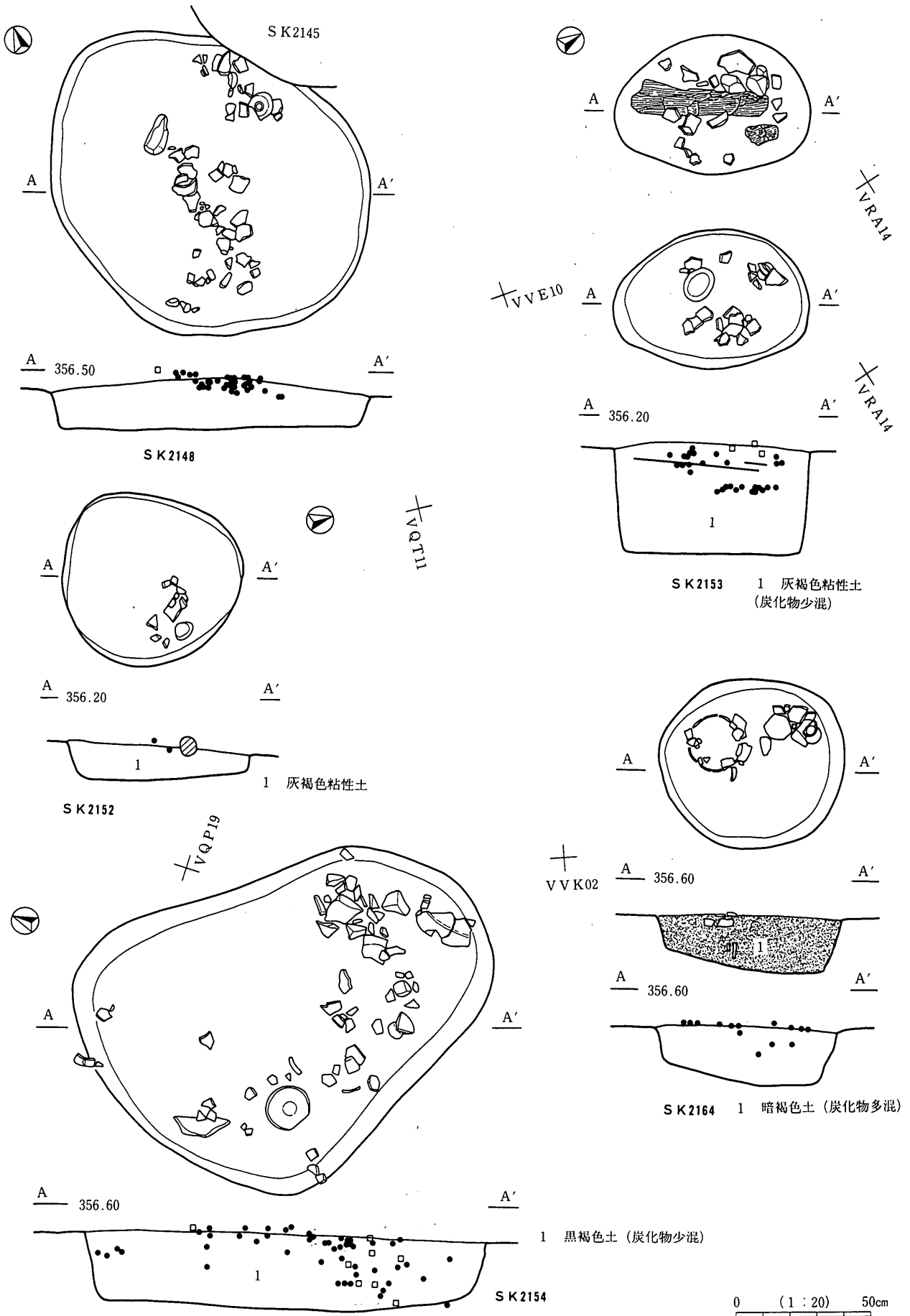
**S K 2153** ⑤-2区 VQT14 (第85図、P L 9)

S D 1016区画内北東部の東端に位置し、北側に隣接してS K 2063がある。調査時には同一遺構にS K 2123と2153の番号が振られたが、整理段階ではS K 2153として統一した。土坑の形状は長軸72cm、短軸50cmの楕円形の平面形を呈し、断面形は壁がほぼ垂直、底面が平坦となる長方形である。検出面から底面までの深さは38cmを測る。埋土は炭化物を含む粘性の強い灰褐色土の単層で、埋土上部では板材がほぼ水平にあり、この板材付近で土師器破片が出土している。土師器は総重量1810g得られ、比較的大型の破片もみられたが、散在的である。口縁部の遺存度区分はBである。これらの土師器は埋土中位以上から出土しており、土坑構築後に一定の埋土が入り、やがて土器が入ったと思われる。

**S K 2154** ⑤-2区 VQO18 (第85図、P L 10)

S D 1016区画内の北東部東端に位置し、S T 2009の南東隅の柱推定位置に一致する。柱抜き取りによって規模が拡大したのか、複数土坑の切り合いも考えられる。断定できなかったのでここで扱う。平面形は長軸150cm、短軸120cmの楕円形、断面形は壁が垂直で底面が平坦な長方形である。検出面からの深さは26cmを測る。埋土は炭化粒を若干含む黒褐色土の単層で、遺物は南西壁際では埋土上部に散在し、東部では埋土下部にも入り込む。また、東部では礫が集中して検出されている。出土遺物は総重量1205gの土師器破片と凝灰岩製砥石1点がある。土師器は小破片が多いものの、一部には口縁部の遺存状況が良好なものが含まれる。接合後の口縁部遺存度区分はCである。土器のみが破片で廃棄されたものではないかと考えられる。

**S K 2156** ⑤-2区 VUT06 (第86図、P L 10)



第85図 SK2148・2152・2153・2154・2164

S D1016区画内の中央北寄りに位置し、北側はS K2155に切られる。平面形は長軸113cm、短軸88cmの楕円形を呈し、検出面から約22cmのところ一旦底面を形成し、中央部が50～42cmの円形に2段に掘り込まれる。もっとも深いところで検出面から40cmを測る。埋土は4層に分層され、底面上の円形の落ち込み内は4層の暗オリーブ灰色、その上部は3層の黄灰色土がある。その上には炭化物・灰・焼土の混合する2層、さらに焼土や炭化物を混入する黄灰色土が入る。このなかで1・3層の黄灰色土は遺跡内では見られない異質な土で、遺跡外から運び込まれた可能性もある。遺物は高坏、甕、器台などの土師器が総重量5455gと混入の可能性が高い馬歯片などが得られた。土師器は1～2層を中心に多数の破片、あるいは略完形品もみられた。口縁部遺存度区分はCである。その他に炭化材も出土している。本土坑は底面の円形掘り込みを注視すれば、本来は柱穴跡で、柱抜き取り後に炭化物や土器が廃棄されたとも考えられるが、周囲の類似した土坑と配列が組めなかったことや、上面の規模が大きいことからここで扱った。

#### S K2167 ⑤-2区 VQJ19・20 (第86図)

S D1016区画内の北東部に位置し、他遺構との直接的な切りあいはないが、S T2009の範囲内にあり、同時存在は考えにくい。平面形は南北120cm、東西116cmの不整楕円形を呈し、断面は逆台形を呈する。底面は平坦で検出面からの深さは28cmである。埋土は黒褐色土の単層で、土坑北側に完形の壺が正位で出土している。出土遺物は重量950gの土師器がある。出土量は多くないが、口縁部の遺存度区分はCである。これらの土器は土坑北側の上部から集中して出土した。略完形の甕が単体に近い状態で出土した類例は周囲のS K2166・2162・2160・2129で認められ、このなかでS K2166・2162・2160はS T2009の柱穴跡と捉えた。近接した土坑で類似した土器出土状態が認められることは注目される。なお、土坑では一定の埋土が形成された後に上層を中心として土器が入ったと思われる。

#### S K2170 ⑤-2区 VUK10 (第86図、P L10)

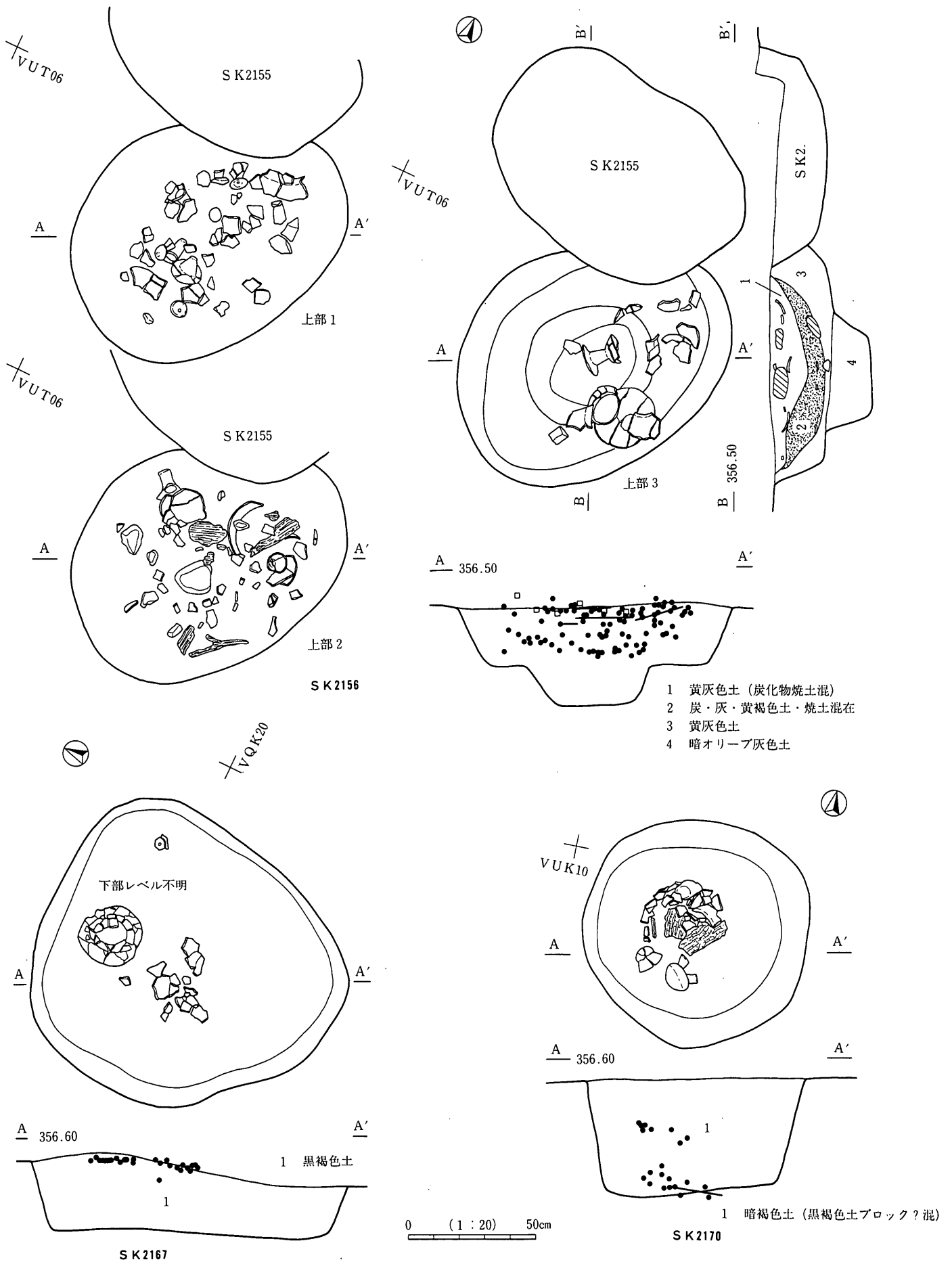
S D1016区画内の中央、北寄りに位置する。平面形は直径88cm前後の円形を呈し、壁が垂直に掘り込まれ、底面が平坦な浅い長方形の断面形となる。検出面からの深さは44cmを測る。埋土は黒褐色土が混じる暗褐色土の単層で、底面上には不整形の板状の材があり、その周辺に略完形の小型丸底土器が数点と土師器破片が一定範囲内で集中して出土した。遺物は重量1110gの土師器、若干の弥生土器、材があり、土器の遺存度区分はCである。S A2011のライン延長上に本土坑は位置し、S A2011を構成する柱穴跡の可能性もある。特に土器出土状況を見ると出土範囲は非常に限定されており、この部分が柱痕、もしくは柱掘り抜き痕とも考えられなくはない。しかし、全体の形態がS A2011を構成する柱穴跡とは大きく異なるため、S A2011には含めず、ここで扱った。

#### S K2182 ⑧-1区 IVAM15・AN15 (第87図、P L10)

S D1016区画内南西部の南より、S D1016の南辺の台形状突出部に近い地点にある。平面形は直径152cm前後の円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。底面は平坦で、検出面からの深さ約20cmを測る。埋土は4層に分層され、下部には黒褐色土が一様にみられ、その上部の南西側に大量の炭化物と若干の焼土粒を含む暗褐色土、東側に焼土を含まない暗褐色土、中央に焼土ブロックを含む暗褐色土がある。遺物は土師器の破片1310gがあり、出土状況の図記録はないものの、少量の炭化材・礫と共に2～4層にかけて散在的に出土した所見が得られている。これらの土師器はあまり接合せず、口縁部の遺存度区分もAである。本土坑は構築後に一定の埋土が形成され、その上で炭化物や焼土が廃棄されたと思われる。

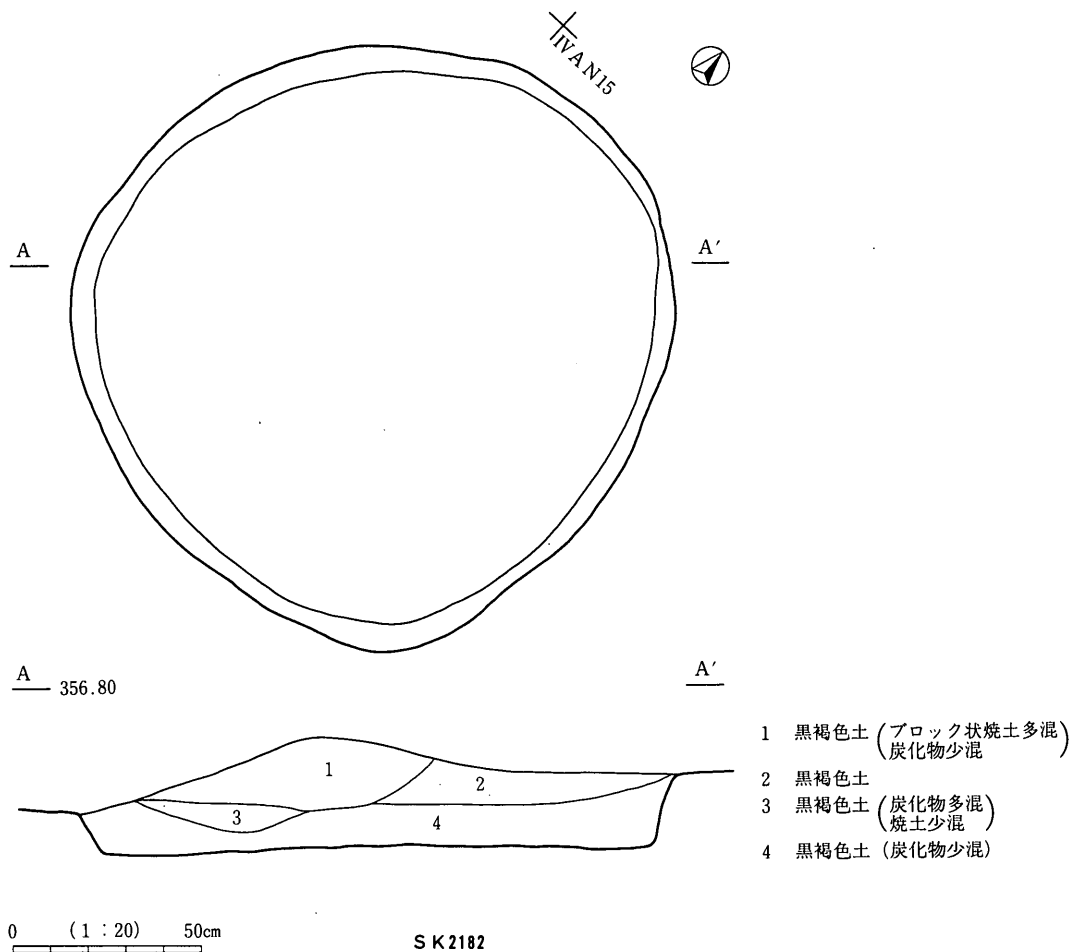
#### S K2183 ⑧-1区 IVAO04・A005 (第88図、P L11)

S D1016区画内南東部の中央よりに位置する。平面形は長軸122cm、短軸92cmの楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。検出面から底面までの深さは17cmと非常に浅い。埋土は上下2層に分層され、上層が炭化物を若干含む暗褐色土、下層がやや黒味が強い暗褐色土である。遺物は土師器が2680gあり、口縁部



第86図 SK2155・2167・2170





第87図 SK2182

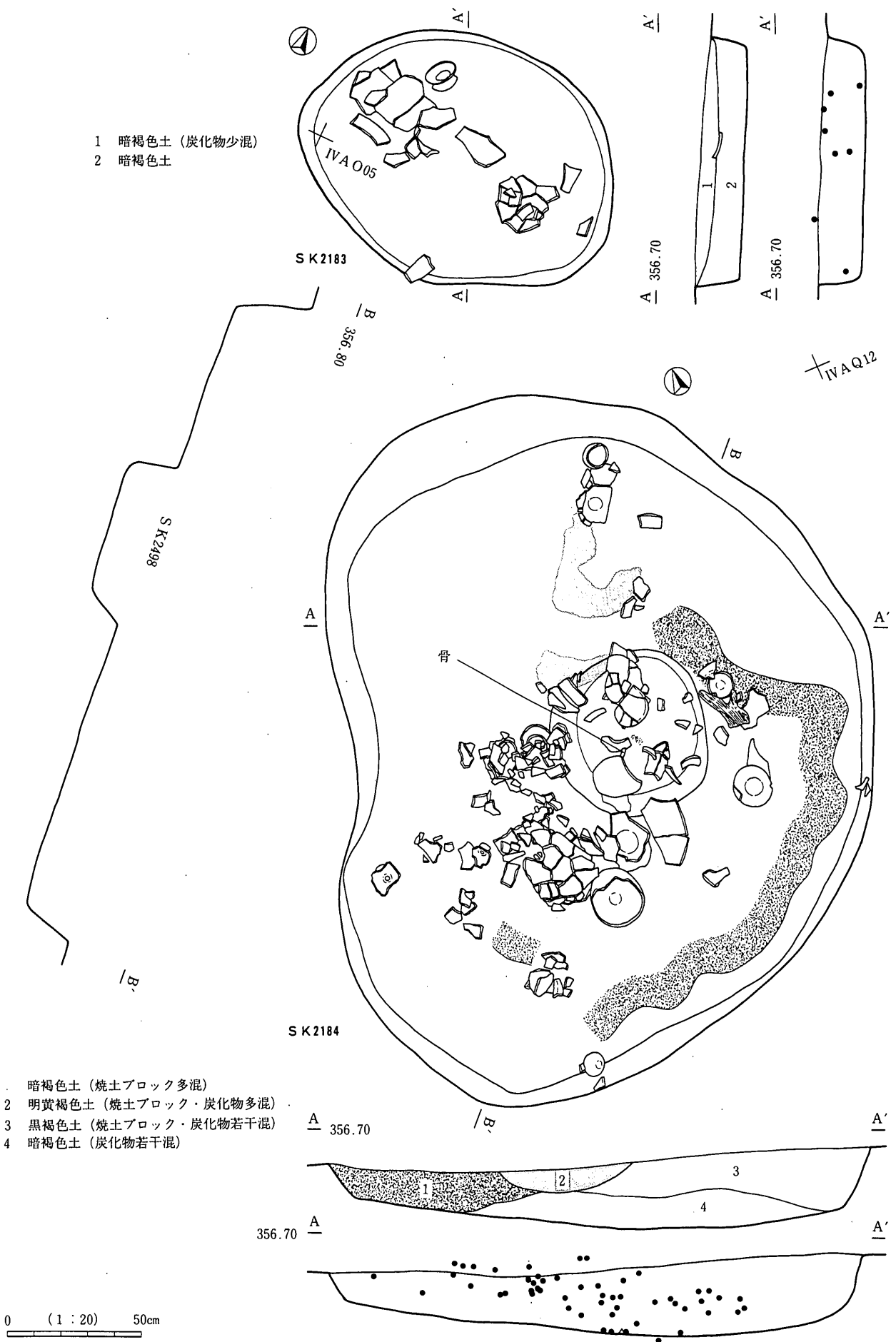
の遺存度区分はCである。土坑が浅く、土器も土坑埋土中の特定レベルに集中しないため、土坑ではないかもしれない。

**SK2184** ⑧-1区 IVAQ12 (第88図、PL11)

SD1016区画内の南西部南よりに位置する。見逃し遺構確認の第2面では柱穴状の掘り込みSK2498と井戸跡としたSK2480が検出された。SK2498は重複する上面に土器が集中的に出土しているため、本土坑が切ると判断された。SK2480については調査順序からすれば、SK2480が本土坑に切られることになるが、平面形の確定が難しく、小規模な試掘溝を入れて確定した経過からすると断定はできない。平面形は長軸262cm、短軸202cmの不整形な楕円形を呈し、断面形は東側がやや深い逆台形となる。検出面からの深さは東側で26cmを測る。この底面中央ではSK2498とされた直径56cm前後の円形の落ち込みがあり、この底面の深さは検出面から44cmを測る。埋土は4層に分層され、下部には炭化物若干を含む暗褐色土、その上部東側に焼土・炭化物を若干含む黒褐色土、西側に焼土多数を含む暗褐色土がみられる。そして埋土上面にはレンズ状に入る小規模な焼土・炭化物多数を含む黄褐色土がある。出土遺物には重量11035gの土師器と土玉1点がある。土師器は土坑中央部の焼土を多く含む土層から出土し、東側底面の埋土が形成された後に焼土と共に土器が廃棄されたと思われる。口縁部遺存度区分はCである。本土坑の性格は不明であるが、掘り込みが浅いため、凹地地形や遺物集中の可能性はある。

**SK2187** ⑧-1区 IVAS18 (第89図)

SD1016区画内南西部の南よりに位置し、SD2015、SK2317・2199を切り、SK2200に切られる。平面形は東西206cm、南北188cmの隅丸台形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは36cmを測る。底面



第88図 S K 2183・2184・2498

は平坦である。形状は隣接したSK2112に類似する。埋土は上下2層に分層され、両者とも暗褐色で下層のほうがやや黒味を帯びる。出土遺物は4030gの土師器が採取されており、このほかに古代の須恵器破片が少量ある。土器口縁部遺存度区分はCである。本土坑は比較的大量の土師器が得られているため、古墳時代の所産と推定したが、辺方向が東西南北に一致することや、僅かながら古代の遺物も出土している点で問題を残す。なお、調査記録に残された出土土器は一部のみである。性格は不明である。

#### SK2188 ⑧-1区 IVAS06 (第90図)

SD1016南西部の中央よりに位置し、北側をSK2185に切られている。平面形は南北方向が残存部で78cm、東西方向は110cmを測るやや不整形の円形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは26cmを測る。埋土は上下2層に分層され、両方とも暗褐色土で上層のほうがやや黒味を帯びる。出土遺物は1090gの土師器破片が得られたのみで、接合しない破片が多く、口縁部遺存度区分はAである。SK2185に切られる所見から古墳時代の遺構と推測されるが、性格は不明である。

#### SK2189 ⑧-1区 IVAR05・06 (第93図)

SD1016区画内南西部の中央よりに位置し、SD2014を切っている。平面形は長軸170cm、短軸102cmの長楕円形を呈する。断面形は浅い長方形を呈し、検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土は2層に分層され、主体は1層の暗褐色土で、中位に薄い2層が入る。この2層の土層所見では黒褐色土と記載される一方で、断面図の図中では焼土と記載されている。ここでは断面図中の記載を尊重して焼土と理解し、埋土形成時に焼土が入ったと捉えた。遺物は1010gの土師器と管玉1点が出土している。土器の口縁部遺存度区分はAである。性格は不明で、時期認定にも不安がある。

#### SK2192 ⑧-1区 IVAK09 (第90図)

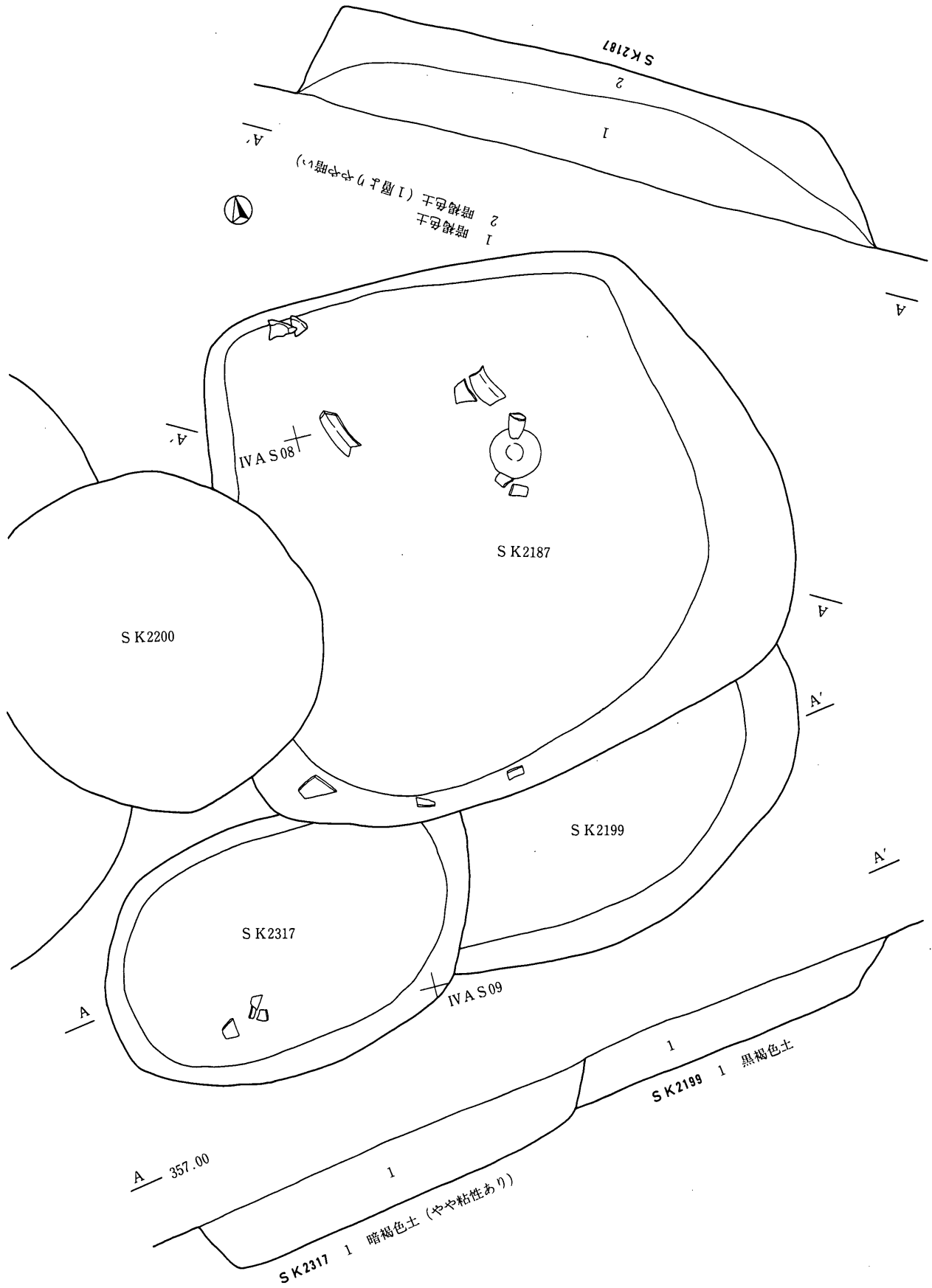
SD1016区画内南西部に位置し、見逃し遺構確認の第2面では重複する位置に柱穴状のSK2487・2486が検出されたが、切りあい関係は不明である。平面形は長軸164cm、短軸128cmの楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形で検出面から底面までの深さ20cmを測る。埋土は4層に分層され、底面上から壁際にかけてにふい黄褐色土が一様にみられ、その上の南部には黒褐色土と焼土層が部分的にみられた。さらに上層は暗褐色土で覆われる。出土遺物は重量115gの土師器破片があるが、全体に散在的に出土した。接合するものも少なく、口縁部遺存度区分はAである。焼土や少量ながら出土した土器から古墳時代の所産と推定したが、性格は不明である。なお、本土坑は埋土中に焼土をもつが、部分的なのでブロックと思われる。

#### SK2194 ⑧-1区 IVAP08 (第90図、PL11)

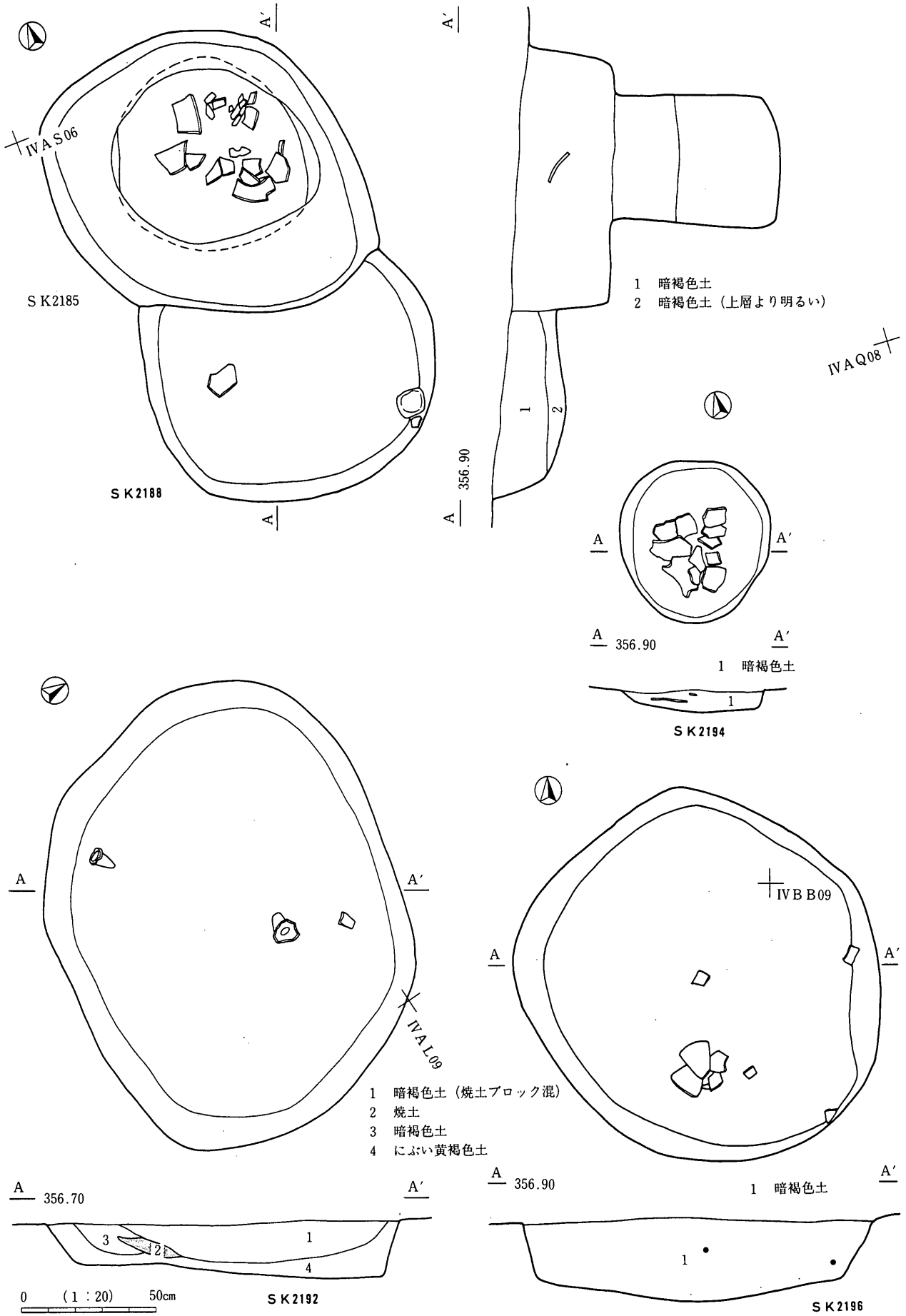
SD1016区画内南西部に位置する。平面形は直径56cm前後の円形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは8cmと非常に浅い。埋土は暗褐色土の単層で埋土中より土師器破片が集中して出土している。出土した土師器重量は1420gで口縁部遺存度区分はAである。掘り込みが非常に浅く、その性格は子細不明である。なお、土器は上部から出土しており、本来はもっと遺存度が良好であったが表土掘削の際に削平してしまった可能性がある。したがって、完形に近い土器が廃棄されたと捉えられ、掘り込みの浅さからも遺物集中に近い可能性がある。

#### SK2195 ⑧-1区 IVBA09

SD1016南西部の南よりに位置し、北側はSK2196に切られ、南側には第2面検出のSK2442がある。調査ではSK2196から連続して入れられたトレンチによって土坑と判断されているが、調査記録は遺物出土分布から推定された土坑の範囲と断面図のみであり、土坑認定に不安がある。断面形は検出面からの深さ22cmで逆台形の断面形である。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物は2865gの土師器、わずかな弥生土器と混入と思われる古代の土器がある。口縁部遺存度区分はCである。北側がSK2196に切られる所見から古墳時代の所産と考えたが、SK2442とほぼ重複する位置にあたることからSK2442と同一の遺構



第89図 SK2187・2199・2317



第90図 SK2188・2192・2194・2196

の可能性も残される。ここでは断定できなかったためS K2442とは別に扱うことにした。

**S K 2196** ⑧-1区 IVBA09・BB09 (第90図)

S D1016区画内南西部の南よりに位置し、S K2165を切る。平面形は直径136～140cmの円形を呈し、断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は土師器の破片1420gがあり、土器の口縁部遺存度区分はAである。性格は不明で、土師器の出土から古墳時代の可能性があると判断したが、根拠は弱い。

**S K 2197** ⑧-1区 IVAQ11・AR11

S D1016区画内南西部南よりに位置し、S K2316に切られ、重複する位置にあるS K2105・2367との切り合い関係は不明である。また、調査では極一部の壁しか確認されておらず、実際に把握できたのは底面のみである。土坑の認定に問題を残している。土坑とされた範囲の平面形は長軸232cm、短軸176cmの不整形な楕円形を呈する。一部に残存する壁は垂直で、底面は平坦ながらやや凹凸があり、検出面からの深さは16cmを測る。埋土は炭化物を多く含む黒褐色土の単層である。出土遺物には4570gと大量の土師器があり、埋土中に散在して検出されている。しかし、土器出土量の多さのわりに接合せず、口縁部の遺存度区分はAである。形態的にも土坑の認定には問題もあり、炭化物集中に近い可能性もある。また、近接するS K2184は形状や規模は本土坑に類似している。

**S K 2198** ⑧-1区 IVAQ08・09 (第93図)

S D1016区画内南西部に位置し、北側をS K2112、南側をS K2103に切られる。隣りには類似した形状のS K2218がある。南北方向は残存部で72cm、東西方向が100cmを測り、残存部の形状から平面形は楕円形を呈すると思われる。断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは48cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物は土師器破片1930gが得られ、土器の口縁部遺存度区分はAである。性格は不明で、出土遺物は少ないながらS K2112・2103に切られるところから古墳時代の可能性があると推測した。

**S K 2199** ⑧-1区 IVAS08 (第89図)

S D1016区画内南西部に位置し、S K2187・2317に切られて極一部しか残存しないため、全体形は不明である。残存部では東西140cm、南北62cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは15cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物は土師器の破片60gのみがあり、遺構全体で散在的に出土した。性格は不明であり、遺構の切り合いから古墳時代の所産と推定したが、切り合う土坑自体の年代に問題を残し、本土坑も断定はできない。

**S K 2201** ⑧-2区 VVJ20 (第91図、P L11)

S D1016区画内南東部に位置する。⑧-2区の調査区西壁にかかって検出され、後に拡張した。平面形は長軸100cm、短軸80cmを測る楕円形で、断面形はU字状を呈し、検出面から最も深い部分で60cmを測る。埋土は3層に分けられ、底面上には焼土・炭化物を含む3層の暗褐色土、その上に炭化物を大量に含む2層黒褐色土、最上層には褐色土が入る。遺物は土師器が5790g得られ、口縁部の遺存度区分はCである。これ以外にはわずかな弥生土器、混入の可能性のある中世の土器がある。土器は2層を中心に礫と共に大形破片が集中し、3層は小破片が出土している。大量の炭化物や土器出土の中心は2層であるが、3層も焼土・炭化物が含まれ、あまり2層と時間差がないと思われる。したがって、土坑構築から間もなく、炭化物と土器が廃棄されたと思われる。

**S K 2202** ⑧-2区 VVL20 (第93図)

S D1016区画内南東部に位置する。平面形は直径76～84cmの不整形円形を呈し、断面は中央が低くなるU字状である。検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土は3層に分層されたが、1層の炭化物・焼土粒を大量に含む黒褐色土と2層の黒褐色土を主体とし、3層は底面上に部分的にみられる1層のブロック

土である。遺物は重量170gの僅かな土師器の破片が出土しているのみである。口縁部遺存度区分はAである。焼土や炭化物の出土は古墳時代の土坑に多く見られる特長のひとつなので、土器出土量は少ないものの、古墳時代の所産と推定した。なお、埋土の堆積状態は、底面上に小規模な炭化物を含むブロックがあるが、その上には炭化物があまり顕著でない土層が入り、最上層に炭化物を含む土層が入る。ことからブロックとなる3層は混入でないとするれば、3～1層はあまり時間差がないと思われ、ほぼ土坑構築からあまり時間を経ないで炭化物が廃棄されたと思われる。性格は不明である。

#### SK2203 ⑧-2区 VVN20 (第91図、PL11)

SD1016区画内南東部に位置する。平面形は長軸104cm、短軸72cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは52cmを測る。埋土は3層に分層され、底面上には炭化物・焼土粒を含む黒褐色土、中位には焼土層、上層に炭化物を若干混入する暗褐色土がある。出土遺物には重量25235gの土師器と支脚破片1点があり、土師器の口縁部遺存度区分はCである。1層では略完形土器を含む土器多数が集中的に出土し、最下層からも若干出土する。概略の埋土堆積順序は炭化物→焼土→土器廃棄の順と思われるが、あまり埋土の堆積時間差はないと思われ、炭化物と土器が若干前後しながらもほぼ同時に廃棄されたと思われる。

#### SK2208 ⑧-2区 VVR19・20、VS19 (第92図、PL12)

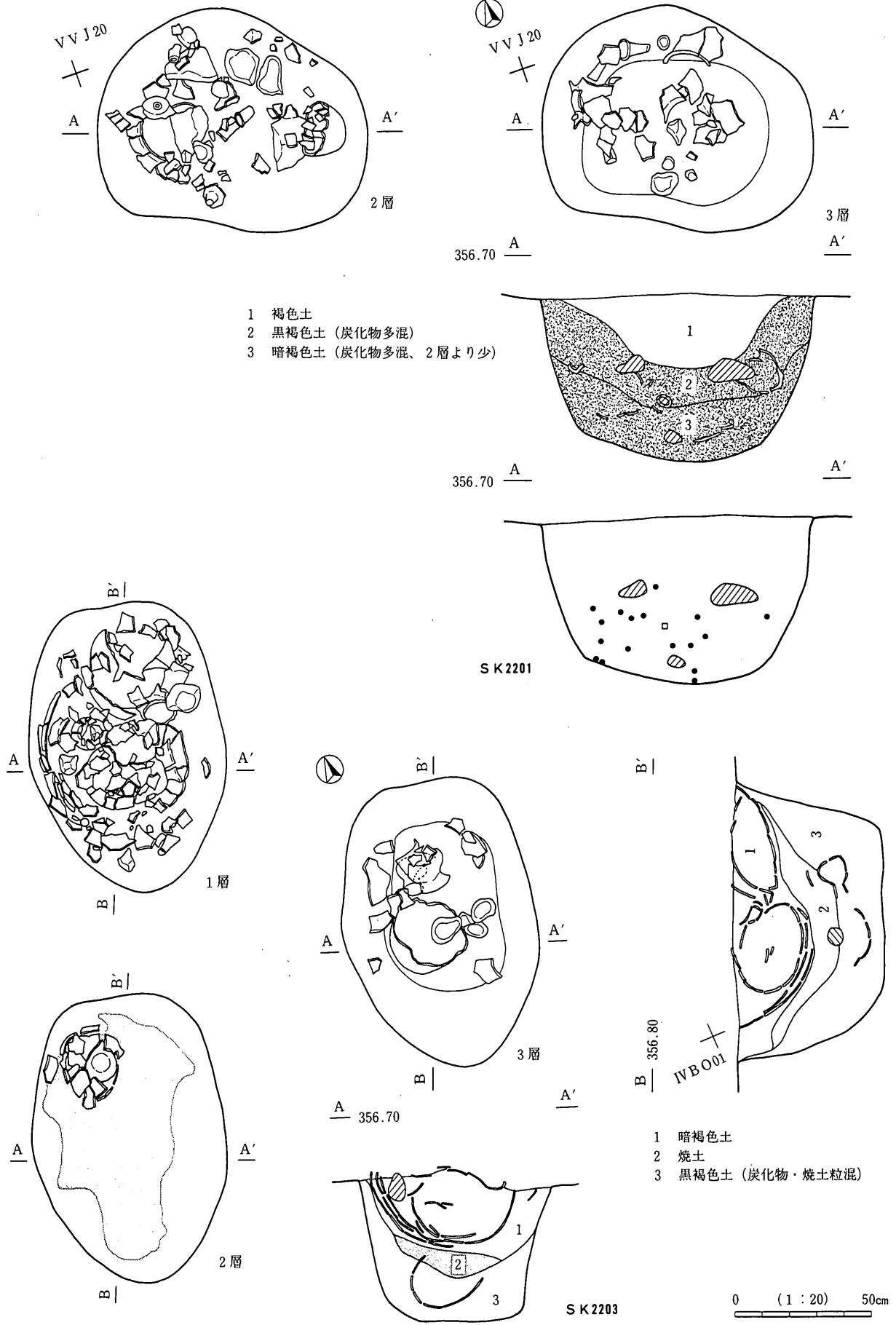
SD1016区画内南東部隅に位置し、SK2345を切り、SK2312・2313・2390に切られる。平面形は長軸285cm、短軸126cmの隅丸長方形を呈し、断面形は壁が垂直で、底面が平坦となる長方形である。検出面から底面までの深さは70cmを測る。埋土は5層に分層され、底面上には5層の炭化物粒を若干含む灰褐色土があり、その上の長辺壁際に同様な4層の暗褐色土が部分的に入る。この4層・5層上の中央部には炭化物と灰層が互層状態となる3層が入り、その上には焼土粒子を多く含む2層、最上層には周囲の土と類似した暗褐色土が入る。出土遺物は17250gの土師器破片とミニチュア1点、支脚破片3点がある。土師器は埋土中央部の2層下面から5層上面にかけて多く出土している。破片が散在するなかに、略完形と認められる大形破片がいくつか集中的に出土している。口縁部の遺存区分はCである。これ以外に混入の可能性のある古代・中世の土器がわずかにある。土坑の形態や大量の土器出土から廃棄土坑と推測される。堆積順序は土坑構築後に4・5層が入り、それに前後して3層の炭化物や土器が廃棄されたと考えられる。なお、5層は地山との識別が難しかったが、炭化物・土器片の散在から遺構埋土であると判断された。また、3層では多量の円礫が土器と一緒に混在して出土している。

#### SK2209 ⑧-2区 VVS18・19 (第93図、PL12)

SD1016区画内南東部に位置し、南には隣接してSK2208がある。平面形は長軸85cm、短軸60cmの楕円形を呈し、断面形は浅いトライ状である。底面は凹凸があり、南側が若干くぼむ。最深部でも検出面からは10cmと非常に浅い。埋土は微量の炭化物・焼土粒を含む暗褐色土の単層で、土師器小破片が散在的に出土した。土器は総重量515gが得られ、口縁部の遺存度区分はAである。本跡の形態からは土坑ではなく凹地状の地形の可能性もある。

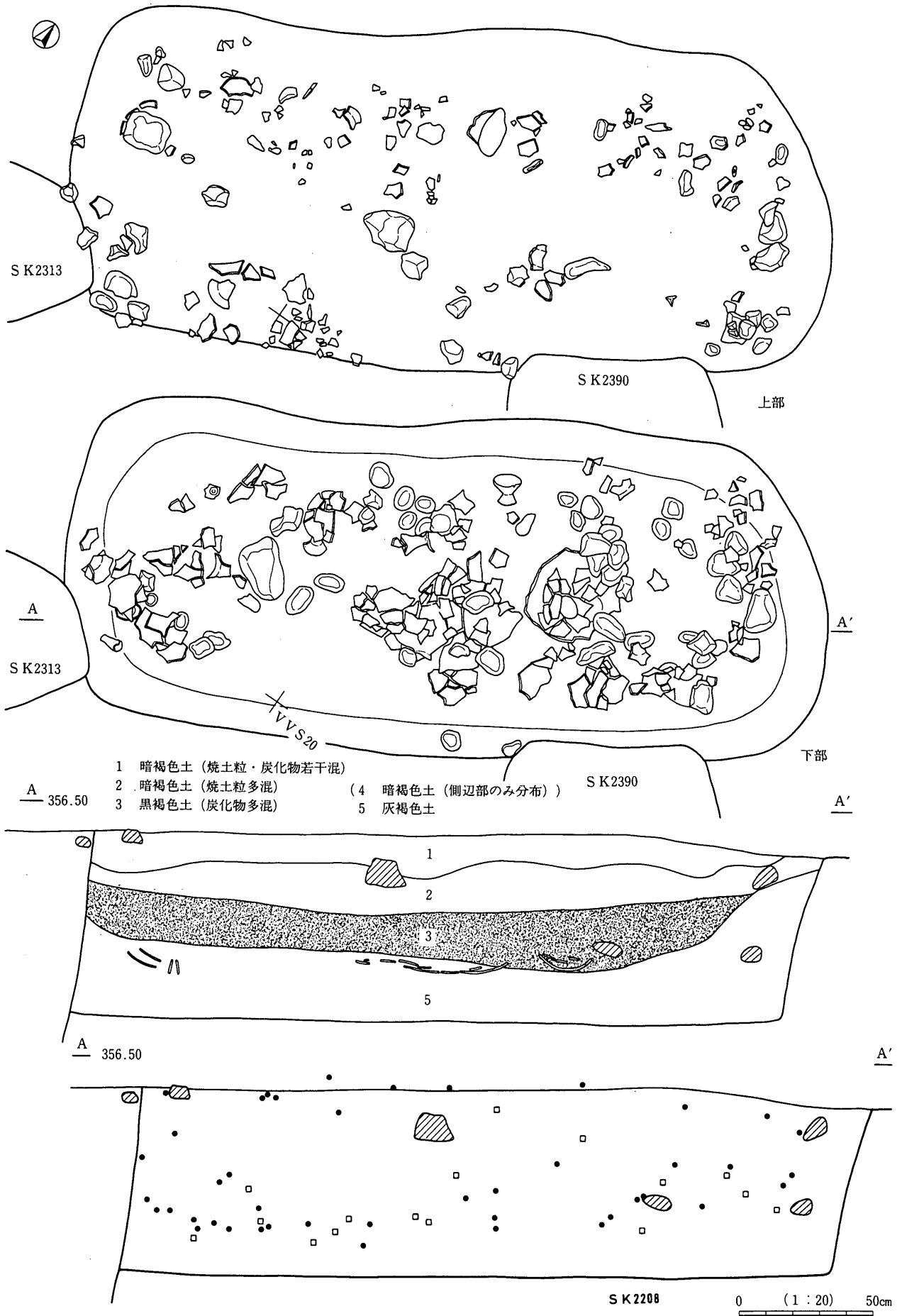
#### SK2210 ⑧-2区 VVP19 (第94図、PL12)

SD1016区画内南東部に位置する。平面形は長軸118cm、短軸90cmの隅丸長方形を呈し、断面形は壁が垂直に掘り込まれる長方形である。底面は平坦ながらも東側へ傾斜しており、検出面から底面の最深部までは30cmを測る。埋土は5層に分層され、底面上には5層の灰色粘土、4層の炭化物層、3層の焼土ブロック層、2層の炭化物層といった層厚の薄い土層が堆積し、その上面を厚さ20cm前後の暗褐色土が入る。出土遺物は2440gの土師器破片があり、口縁部の遺存度区分はBである。これ以外に混入と思われる近世の陶磁器破片1点がある。土師器は1層に散在的ながら2層前後で円礫とともに集中して検出された。底面

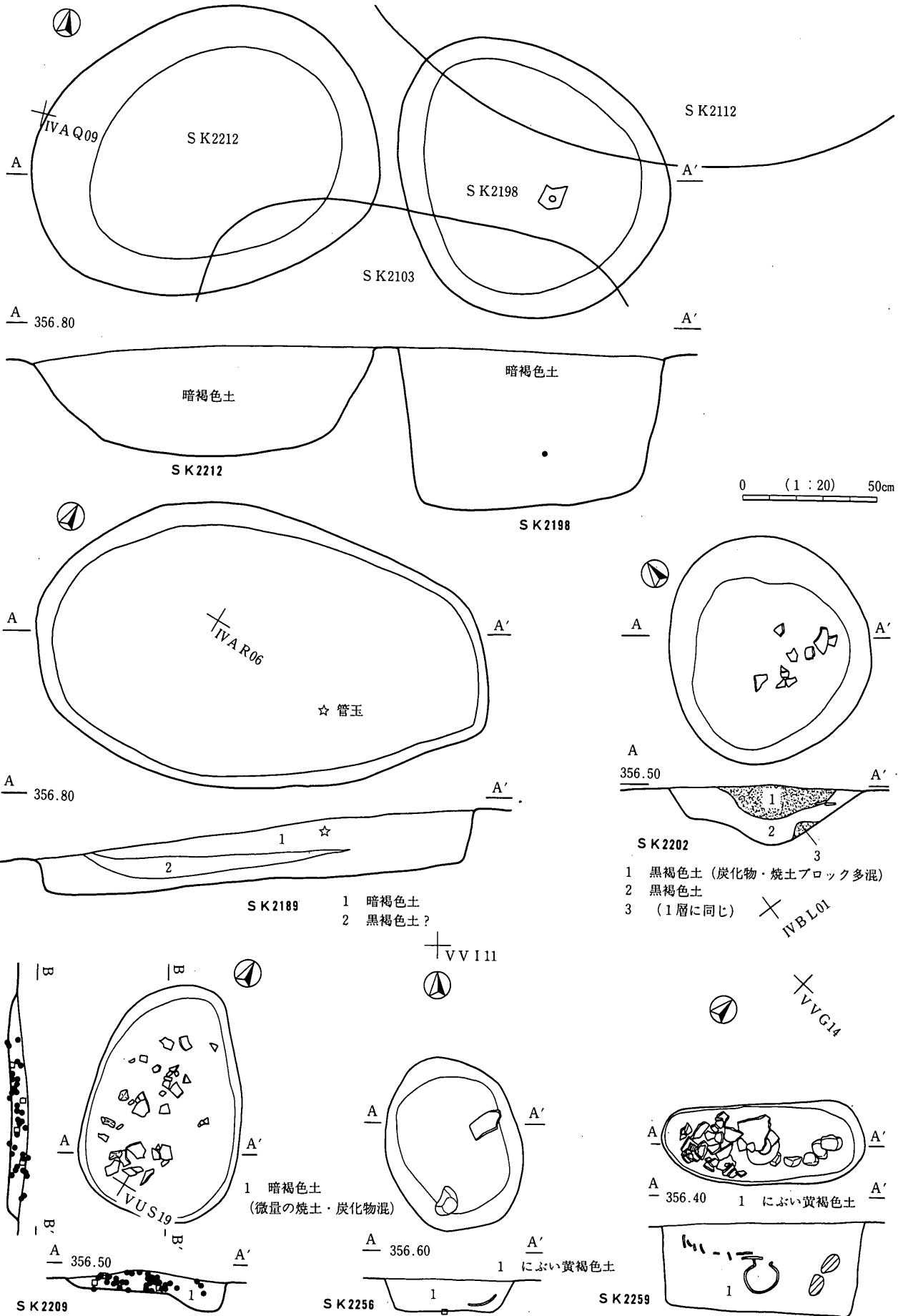


第91図 S K2201・2203





第92図 SK2208



第93図 SK2189・2198・2202・2209・2212・2256・2259

上の5層は炭化物・土器は顕著でないが、非常に薄いため、土坑構築からあまり時間を経ないで炭化物と土器が廃棄されたとみられる。また、炭化物層と焼土ブロック層の堆積順序からは土坑内で成生されたものではない可能性がある。なお、1層が埋め戻し土かどうかは不明である。

**S K 2212** ⑧-1区 IVAQ08・09 (第93図)

S D 1016区画内南西部の中央よりに位置し、S D 2015を切り、S D 2103に切られる。平面形は長軸106cm、短軸は残存部96cmの楕円形を呈する。断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは38cmを測る。埋土は暗褐色土の単層であり、遺物は620gの土師器小破片がわずかに得られたのみで、口縁部の遺存度区分もAである。これ以外には弥生土器がわずかにある。土坑の性格は不明で、時期はS K 2103に切られる所見から古墳時代の所産と判断した。なお、形状は隣接したS K 2198と類似する。

**S K 2251** ⑧-2区 VVI09 (第94図、P L 13)

S D 1016区画内南東部の中央よりに位置する。平面形は長軸106cm、短軸70cmの楕円形を呈し、断面形は長方形である。底面は平坦で、検出面からの深さは42cmを測る。埋土は8層に分層されているが、土層の説明記録がなく、子細不明である。ただし、全体はにぶい黄色褐色を基調とし、埋土上部の2層に炭化物が多く認められ、3層が山砂とも思われる黄褐色土とされる。また、4層の上下には薄い炭層が確認されている。遺物は1390gの土師器がある。土器は炭化物を多く含む2層、山砂と思われる3層よりも下部で破片が出土し、特に土坑下部では礫と共に散在的ながら多く出土している。土器の口縁部遺存度区分はAである。また、土器は上層の炭化物を多く含む土層より先行して入ったと思われる。したがって、子細不明なところはあるが、土坑構築から8～6層が堆積した後に土器と炭化物、黄褐色土が入ったと思われる。これらの土器は炭化物に若干先行して廃棄された可能性があるが、ほぼ類似した時間内であると思われる。ただ、土器の遺存度が低く、直接的な土器廃棄と認め得るか問題は残る。

**S K 2255** ⑧-2区 VVG11・12、VH11・12 (第94図、P L 13)

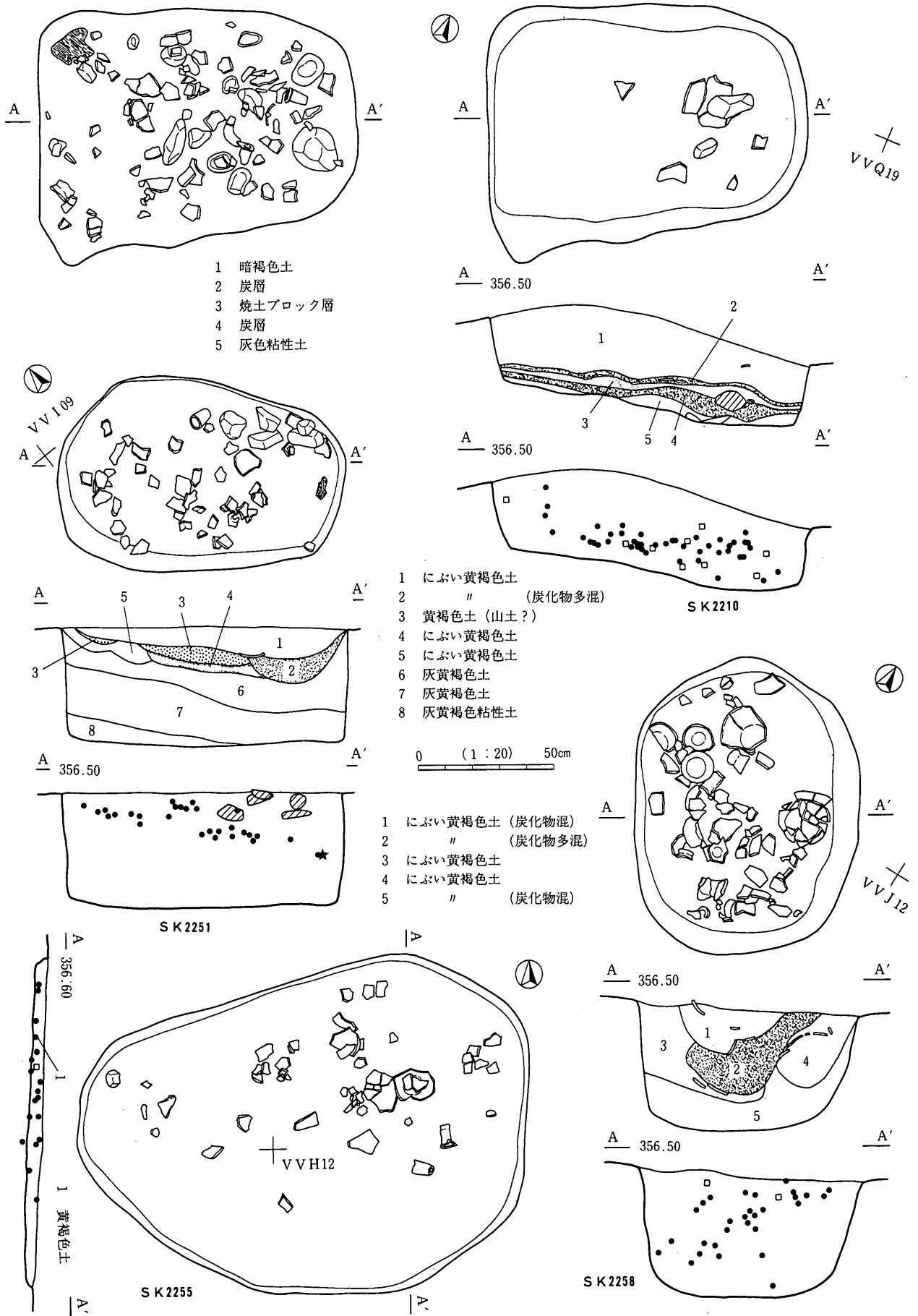
S D 1016区画内の南東部中央よりに位置する。平面形は長軸164cm、短軸120cmの楕円形を呈し、検出面から底面までは5cm前後と非常に浅い凹地状の遺構である。埋土は黄褐色土の単層で、底面に焼土ブロックと炭片が若干見られている。出土遺物には1570gの土師器の破片、焼けていない獣骨小片(種・部位不明)があり、土師器は埋土全体に破片が散在するように出土している。接合作業の結果では口縁部遺存度区分はAである。本土坑は浅いことから土坑ではなく、凹地状の地形か、遺物集中の可能性はある。

**S K 2256** ⑧-2区 VVI11 (第93図)

S D 1016区画内の南東部中央よりに位置する。平面形は長軸64cm、短軸50cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形である。底面は平坦で検出面からの深さは12cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層で炭片が含まれる。遺物は土師器の破片90gと礫1点のみである。埋土から古墳時代の所産と推定したが、土坑の性格は不明である。浅いため、土坑ではなく、凹地地形か遺物集中の可能性もある。

**S K 2258** ⑧-2区 VVI12・VJ12 (第94図、P L 13)

S D 1016区画内の南東部東よりに位置し、南側にあるS K 2342を切る。平面形は長軸110cm、短軸82cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは44cmを測る。埋土は5層に分層されたが、ほぼ褐色土を基調とし、底面上の5層、中位の2層、上層の1層には炭化物が含まれる。特に2層には焼土ブロックが含まれ、もっとも炭化物の含有量が多い。出土遺物には6440gの土師器破片があり、埋土中位からの出土が多い。調査時にもほぼ完形と認められる土器があり、口縁部遺存度区分はCである。本土坑では構築以後、5層の堆積があって、やがて2層を中心として土器と焼土や炭化物の廃棄が行なわれているとみられる。この廃棄後に埋め戻されているかは不明であるが、焼土ブロックが含まれる点からはその可能性が高い。



第94図 S K 2210・2251・2255・2258

**S K 2259** ⑧-2区 VVG14 (第93図、P L13)

S D1016区画内の南東部に位置する。平面形は長軸74cm、短軸30cmの細長い楕円形を呈し、断面形は長方形である。底面は平坦で、検出面からの深さは34cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層であり、埋土西側上部から中位にかけて一定レベルに集中的に土師器破片がみられ、その延長の土坑中央部には略完形の土器が正位で出土した。北東側には円礫が集中的に検出されている。出土遺物は2550gの土師器があり、土器の口縁部遺存度区分はCである。埋土は分層されていないが、土器出土状態からは土坑構築以後に一定の埋土が入り、その後、集中的に土器が入ったとみられる。

**S K 2268** ⑤-2区 VVG07 (第95図、P L13)

S D1016区画内の南東部中央よりに位置する。平面形は直径68~71cmの円形を呈し、検出面から16cmほどの深さで一旦底面を形成し、中央部がさらに直径50cm前後の円筒形に2段に掘り込まれる。もっとも深い底面から検出面までは26cmを測る。埋土はテラス状となる付近で上下2層に分層された。上下両層ともに黄灰色土を基調とし、上層には砂質土が均一に入る。出土遺物には3520gの土師器がある。土器はほとんど上層の1層からの出土である。比較的大形の破片も認められ、口縁部の遺存度区分はCである。このことから比較的完形、略完形を含む土器廃棄があったと推定される。本土坑はあまり炭化物の存在は顕著でなく、上層に土器のみが集中的に入ったとみられる。形態的には柱穴跡の可能性もある。

**S K 2280** ⑧-2区 VVK08 (第95図、P L13)

S D1016区画内の南東部東よりに位置し、南側は中世の井戸跡S K2350に切られる。平面形は東西80cm、南北は残存部で60cmを測り、隅丸方形か長方形を呈すると思われる。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは38cmを測る。埋土は4層に分層され、底面上に4層の炭化物を若干含むにぶい黄褐色土、その上には炭化物を少量と山砂ブロックを含むにぶい黄褐色土の3層、ブロックからなる灰白色?土の2層、大量の炭化物を含むにぶい黄褐色の1層である。遺物は2070gの土師器の破片があり、底面近くで破片が礫と共に出土し、口縁部の遺存度区分はAである。底面近くで土器出土が多く、その上には埋め戻しの可能性がある埋土が見られることから上層の炭化物と土器は別の契機の所産と捉えたが、土器出土状況の記録からすると小破片が散在的に出土したとも見られ、炭化物が中心的に廃棄された可能性がある。

**S K 2282** ⑧-2区 VVL09

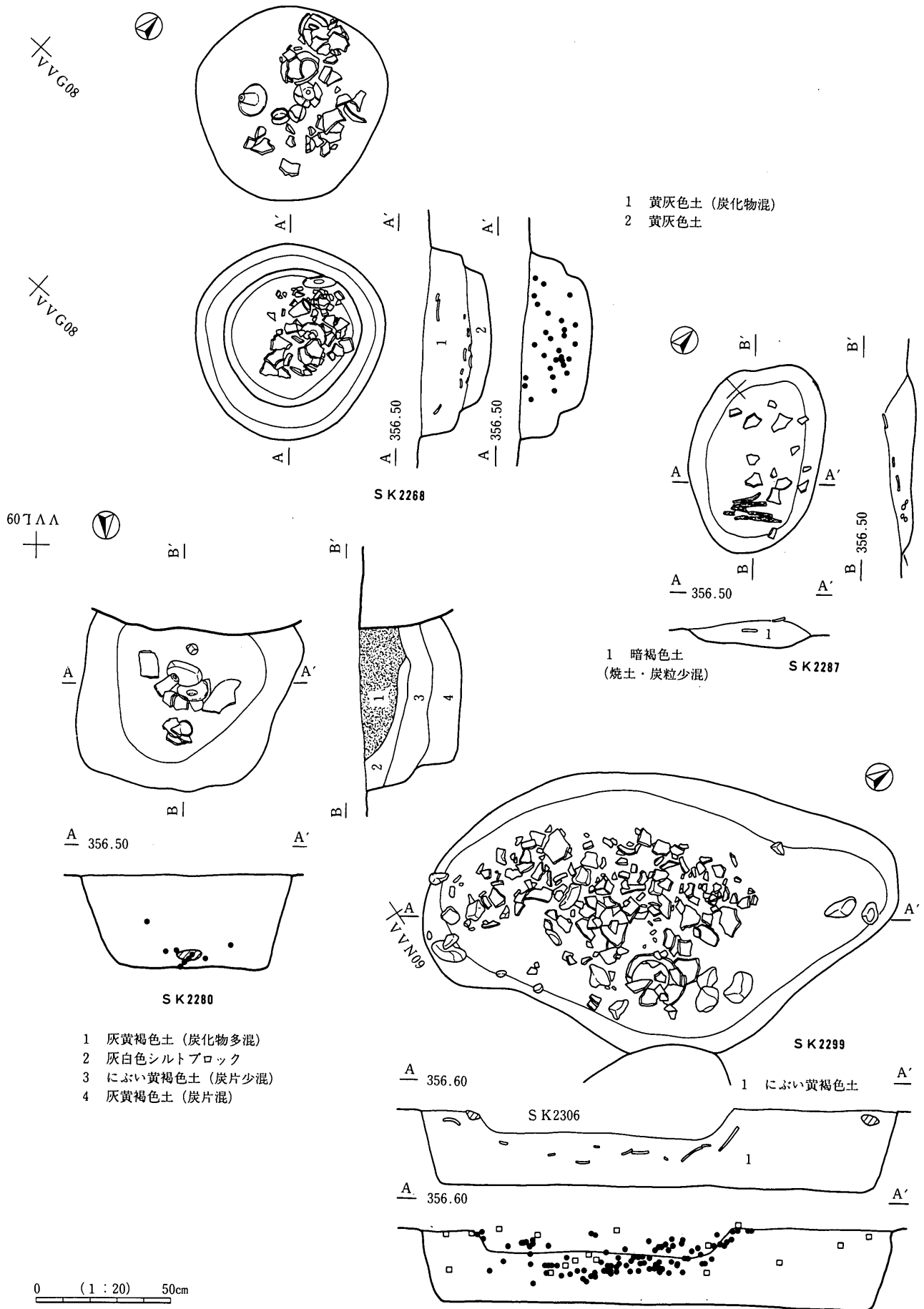
S D1016区画内南東部の東よりにS K2280と隣接して位置する。平面形は直径90~98cmの円形を呈し、断面形はU字状となる。検出面から底面までの深さは26cmを測る。埋土は2層に分層され、底面上に薄い灰層があり、上部はにぶい黄褐色土で埋められる。出土遺物は古墳時代の土師器小破片がわずか270g得られたのみで、口縁部の遺存度区分もAである。埋土から古墳時代の所産と推定した。性格は不明ながら、灰層が認められる点からは火所に関連した施設か、灰を捨てた土坑と推測される。

**S K 2287** ⑧-2区 VVT18 (第95図)

S D1016区画内の南東部東よりに位置する。平面形は長軸72cm、短軸48cmの楕円形を呈するが、検出面から底面まで5cmと非常に浅い。掘り込みは不明瞭で底面は凹凸が目立つ。埋土は焼土・炭化物粒を若干含む暗褐色土の単層であり、破片は全体に散在して出土している。出土遺物は380gの土師器破片が得られ、口縁部の遺存度区分もAである。遺構の形状からは土坑というより、凹地地形の可能性もある。

**S K 2290** ⑧-2区 VVK06 (第96図)

S D1016区画内の南東部東よりに位置し、北西部をS K2344に切られている。平面形は長軸210cm、短軸124cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは10cmと非常に浅い。埋土はにぶい黄褐色土の単層であり、出土土器は土坑の南側に破片が散在的に出土しているが、それ以外に目立つ破片はない。出土土器は1050gで、口縁部の遺存度区分はCである。掘り込みが浅い点や、周辺炭化



第95図 SK 2268・2280・2287・2299

物集中や地表面の存在が確認できたSK2874の存在からすれば、凹地地形の可能性がある。

#### SK2291 ⑧-2区 VVK06 (第96図、PL13)

SD1016区画内の南東部東よりに位置し、本土坑周辺には炭化物散布が見られた。平面形は長軸128cm、短軸94cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈す。底面はほぼ平坦で検出面から底面までの深さは26cmを測る。埋土は若干の炭化物を含むにふい黄褐色土の単層である。出土遺物には4015gの土師器があり、口縁部の遺存度区分はCである。これらの土器は埋土上層からの出土が多く、一部には大型破片が含まれる。表土掘削で削平されて、本来はより遺存状態の良好な破片が含まれる可能性がある。また、本土坑周囲には炭化物が散布する状況が確認されたが、埋土中ではあまり顕著な炭化物は認められておらず、直接関連すると断定できなかった。

#### SK2298 ⑧-2区 VVO09 (第96図)

SD1016区画内の南西部に位置し、西側をSK2297に切られる。平面形は残存部で長軸96cm、短軸80cmの楕円形を呈し、底面は平坦で検出面からの深さ8cmと浅い。埋土はにふい黄褐色土の単層で土器破片が南西部に集中して出土した。出土土器は総重量430gで口縁部の遺存度区分はAである。浅過ぎるため、凹地地形の可能性が高い。

#### SK2299 ⑧-2区 VVN08・VN09 (第95図、PL14)

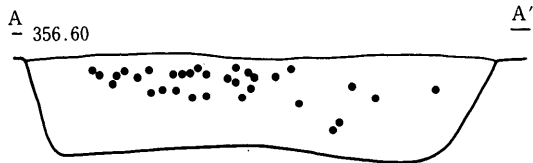
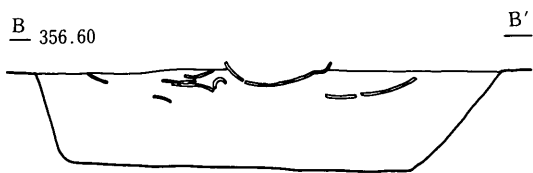
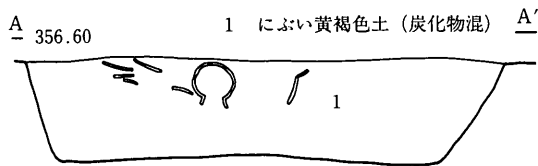
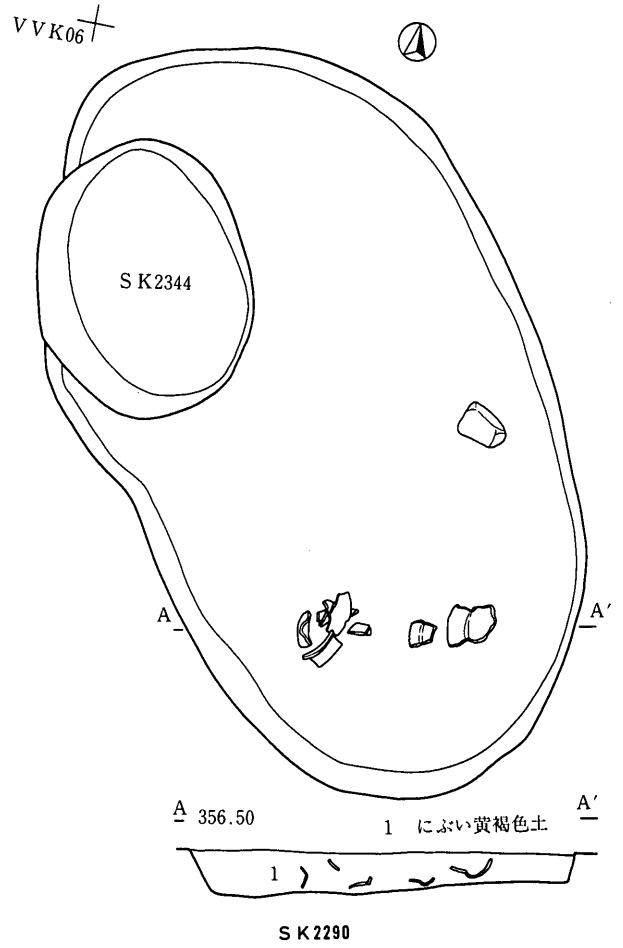
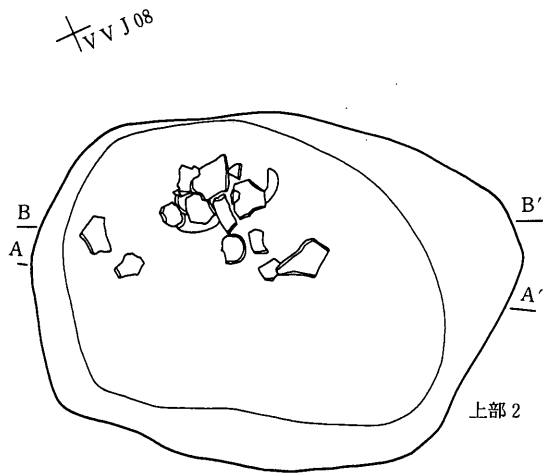
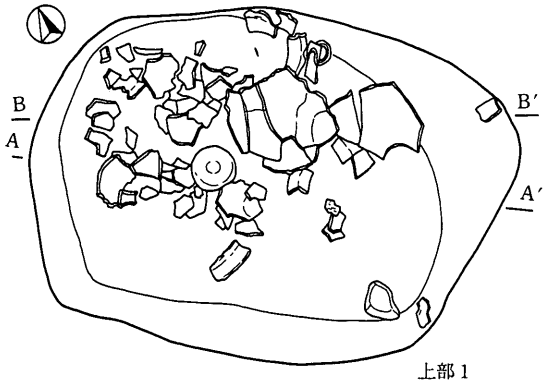
SD1016区画内の南東部東よりに位置し、SK2297に切られる。上面に入れ子状に検出された浅いSK2306は本土坑を切るSK2297を切るため、本土坑とは別の遺構と認定した。平面形は長軸178cm、短軸104cmの楕円形を呈すると思われる。ただし、これは土器の密集出土範囲北側に同レベルで出土した礫を含めて土坑範囲と認定したものであるが、土器の密集出土した長軸120cm、短軸60cmの楕円形部分が本来の土坑範囲の可能性が高い。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは28cmを測る。埋土はにふい黄褐色土の単層で、埋土上層の一定レベルでレンズ状に土師器破片が集中して検出されている。出土遺物には土師器12880gがあり、口縁部の遺存度区分はCである。他にはミニチュア土器1点がある。土師器は礫と共に大量に出土して遺存度区分もCながら、完形になるものはない。なお、埋土は分層されていないが、土器出土状態からは土坑構築から一定の埋土が入った後に、土器が集中的に廃棄されたと思われる。

#### SK2302 ⑧-2区 VVL09 (第97図、PL14)

SD1016区画内の南東部東よりに位置する。平面形は長軸114cm、短軸90cmの不整形な隅丸長方形を呈し、断面形は壁が垂直にやや近い逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは45cmを測る。埋土はにふい黄褐色土の単層で埋土下部には一定のレベルに土師器破片が集中して出土した。出土遺物は4920gの土師器があり、口縁部遺存度区分はCである。これらの土器は量が多いながらも、破片が礫とともに一定レベルで集中的に出土したものである。炭化物はあまり顕著にみられず、堆積状況からすると、土坑構築から若干の埋土が入り、やがて土器が集中的に廃棄されたと思われる。ただし、廃棄の仕方は完形土器を埋納するというよりも、破片を廃棄したのものであると推測される。なお、これらの土器の上面を覆う埋土については人為的に埋められたものかは不明である。

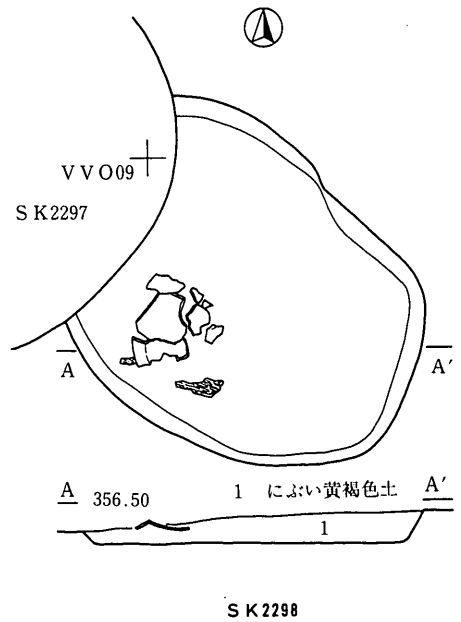
#### SK2311 ⑧-2区 VVR20・VS20

SD1016区画内南東部の南東隅に位置し、SK2312・2407に切られる。平面形は長軸が残存部で88cm、短軸で68cmを測る楕円形を呈すると思われる。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは5cmと非常に浅い。埋土の記録は一切なく不明である。出土遺物は古墳時代の土師器小破片が僅か55g得られたのみで、口縁部の遺存度区分もAである。僅かながら古墳時代の土師器が出土していることや、古墳時代と推定されるSK2312に切られることから古墳時代の所産と捉えた。しかし、形態的に浅すぎることから土坑ではなく凹地地形の可能性が高い。



SK2291

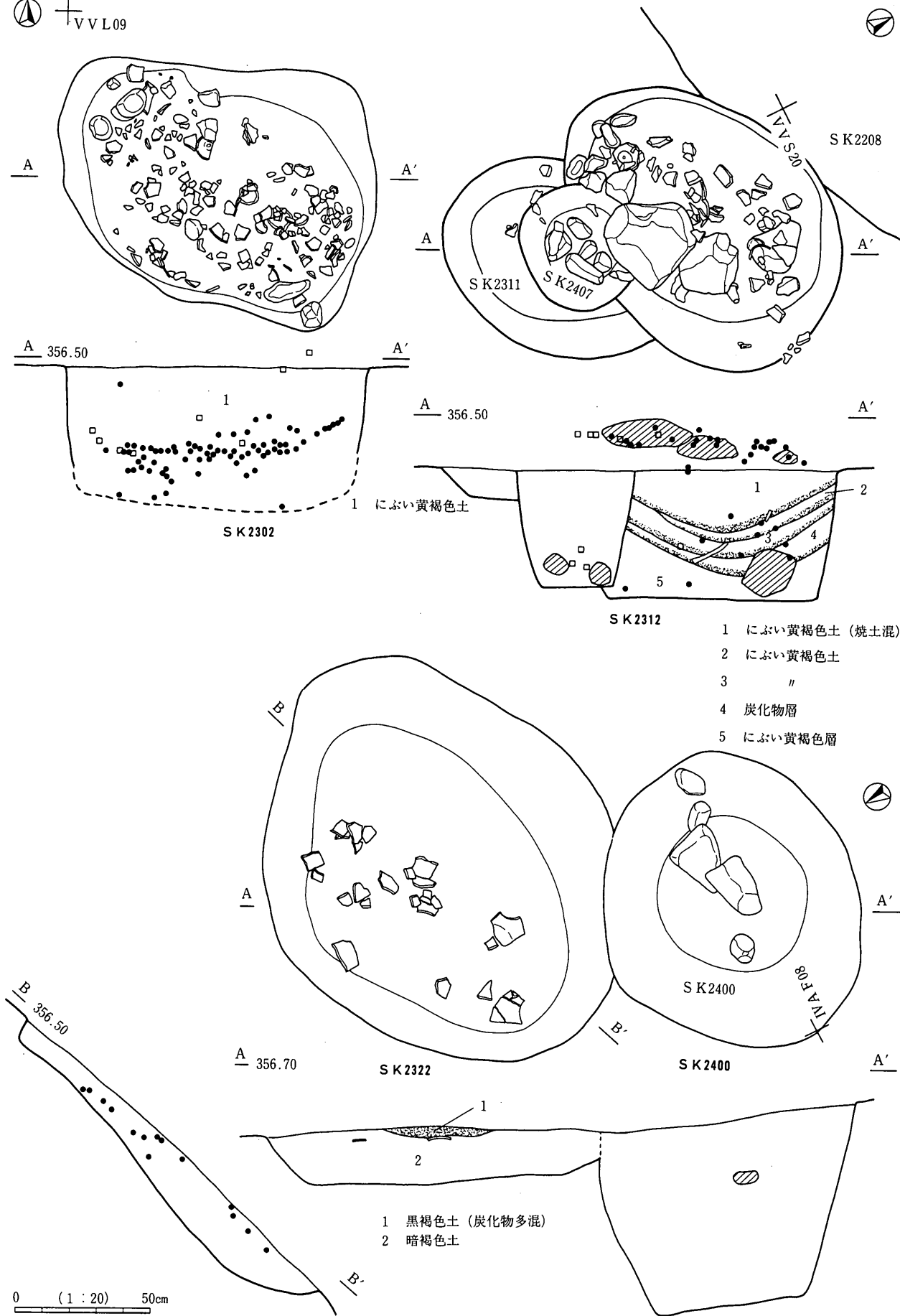
0 (1:20) 50cm



第96図 SK2290・2291・2298



⊕ VVL09



第97図 SK2302・2312・2322

**S K 2312** ⑧-2区 VVR20・VS20 (第97図)

S D 1016区画内の南東部の南東隅に位置し、S K 2407に切られ、S K 2311・2208を切る。平面形は長軸116cm、短軸84cmを測る楕円形で、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは46cmを測る。埋土は炭化物・土器の含まれ方や薄い炭層によって5層に分層された。底面上には5層の地山と類似したにぶい黄褐色土、その上に4層の炭化物層、土器片を若干含む3層、土器を含まない2層、再上部に焼土と土器破片を含む1層がある。これらの土層はすべて中央が低くなるレンズ状の堆積を示す。また、調査時に5層は掘りすぎと判断されたが、埋土中に含まれる礫の標高を照合したところ5層に含まれるものがあるため、この層を埋土の一部と判断した。検出時の1層上部では人頭大の礫や小礫と一緒に土器破片が散在的に出土し、埋土中位から下部にかけても礫と土師器が散在的にみられた。出土土師器は3520gあるが、口縁部の遺存度区分はAである。土器は若干上面に集中する傾向があるものの、埋土中全体に散在的であり、土坑構築から5層が入り、その後、炭化物が廃棄され、あとは徐々に薄い炭化物層を含みながら埋没し、最後に礫を入れて埋められている可能性もある。土器はこの間に混入したものだろう。炭化物が集中的に廃棄された土坑と捉えた。

**S K 2317** ⑧-1区 IVAR08 (第89図)

S D 1016区画内の南東部中央よりに位置し、S K 2199を切り、S K 2187に切られる。平面形は長軸142cm、短軸92cmの楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形を呈する。埋土はやや粘性を帯びる暗褐色土の単層で、土師器の破片を散在的に含む。出土遺物は土師器1000gがあり、口縁部の遺存度区分はAである。出土土器や古墳時代としたS K 2187に切られることから古墳時代の所産と推定した。性格は不明である。

**S K 2322** ⑧-1区 IVAF07 (第97図、P L 14)

S D 1016区画内の南西部に位置し、S K 2400に切られる。平面形は長軸160cm、短軸130cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形となる。底面は西側が若干深く、検出面から底面までの深さは18cmを測る。埋土は暗褐色土を基調とし、埋土最上面には炭化物を多く含む黒褐色土が僅かにみられた。出土遺物は土師器破片1220gがあり、口縁部の遺存度区分はCである。この他には混入の可能性のある古代の土器片が僅かにある。なお、土器は土坑全体に散在的に出土し、特定場所や層位に集中する様相は見られない。本土坑は掘り込みが浅く、凹地地形の可能性もある。また、調査でS K 2400が本土坑を切るとされたが、S K 2400は形態的に中世の井戸跡に類似し、白磁破片の出土も見られたことやS K 2400との切り合う部分が僅かであることなどから調査時の所見は誤りであると考えた。

**S K 2323** ⑧-1区 IVAJ10・AK10 (第98図、P L 14)

S D 1016区画内南西部に位置し、S D 2014を切っている。平面形は長軸126cm、短軸94cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは39cmを測る。埋土は炭化物を多く含む黒褐色土の単層である。出土遺物は土師器3880gが得られ、口縁部の遺存度区分はCである。土坑西側の底面上では完形個体がほぼつぶれた状態で出土している。本跡は土器と炭化物が土坑構築から時間を経ないで廃棄されたと思われる。

**S K 2325** ⑧-1区 IVAI04 (第98図)

S D 1016区画内の南西部中央よりに位置し、北側を中世のS D 2001に切られる。平面形は北側を切られるため子細不明であるが、南北は残存部で100cm、東西は120cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは10cmである。埋土は焼土を大量に含む暗褐色土で、埋土中に薄い炭層が見られる。出土遺物は土師器の破片が散在的に出土し、総重量2485g得られている。土器の口縁部遺存度区分はAであり、ほとんど接合していない。古墳時代の土器出土と焼土が含まれる特長から古墳時代の所産と推定した。浅いので焼土跡、あるいは遺物集中に近い遺構かもしれない。

**S K 2330** ⑧-1区 IVAS03 (第98図、P L14)

S D1016区画内の南西部の中央よりに位置する。平面形は長軸81cm、短軸72cmの楕円形に近い円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは50cmを測る。埋土は炭化物を含む暗褐色土の単層で、炭化物は下層のほうに多い傾向が認められた。出土遺物は土師器4700gがあり、口縁部の遺存度区分はCである。なお、他に混入と思われる中世の土器が僅かにある。土器は略完形品が埋土上層と底面上にわかれて出土した。上部では高坏・器台・小型丸底土器を中心とし、下部では甕・壺を中心とする器種が異なる傾向が見られ、相互に接合するものは見られなかった。埋土は隣接するS K 2244と類似しており、関連する可能性がある。

**S K 2331** ⑧-2区 VVL07 (第98図、P L14)

S D1016区画内の南東部の東よりに位置する。平面形は直径74～64cmの楕円形に近い円形を呈し、断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは22cmを測る。埋土は炭化材片を含むにぶい黄褐色土の単層で、埋土の南よりで多数の土師器が礫と共に集中的に検出されている。出土した土師器は1240gあるが、すべて破片であり、口縁部の遺存度区分はAである。また、埋土中では勾玉が1点出土している。本土坑は土器片が廃棄された土坑と捉えたが、埋土中の炭化材片が炭化物を含むあり方に類似するか判断がつかなかったため、積極的に炭化物が廃棄されたとは捉えなかった。

**S K 2333** ⑧-2区 VVM06 (第98図)

S D1016区画内の南東部東よりに位置し、調査区周囲に巡らせた排水兼用トレンチにかかって一部破壊した。そのため平面形や規模の詳細は不明であるが、南北方向は92cm、東西方向は残存部で48cmを測り、楕円形、もしくは不整形円形の平面形を呈すると思われる。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは17cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層で、埋土上部で高坏の破片が比較的集中して出土したが、それ以外は僅かな破片が得られたのみである。出土土師器は845gあり、口縁部の遺存度区分はBである。ただし、トレンチで破壊したため本来の遺存度はもっと良好であった可能性がある。土器が上層から集中的に出土していることから埋土が一定入った後に、土器が集中的に入ったと思われる。しかし、近接したS K 2874の所見から周辺の検出面は本来の地表面に近いと想定されたことから、掘り込みの浅さを考えると凹地地形の可能性も残される。

**S K 2339** ⑧-2区 VVO12 (第99図、P L15)

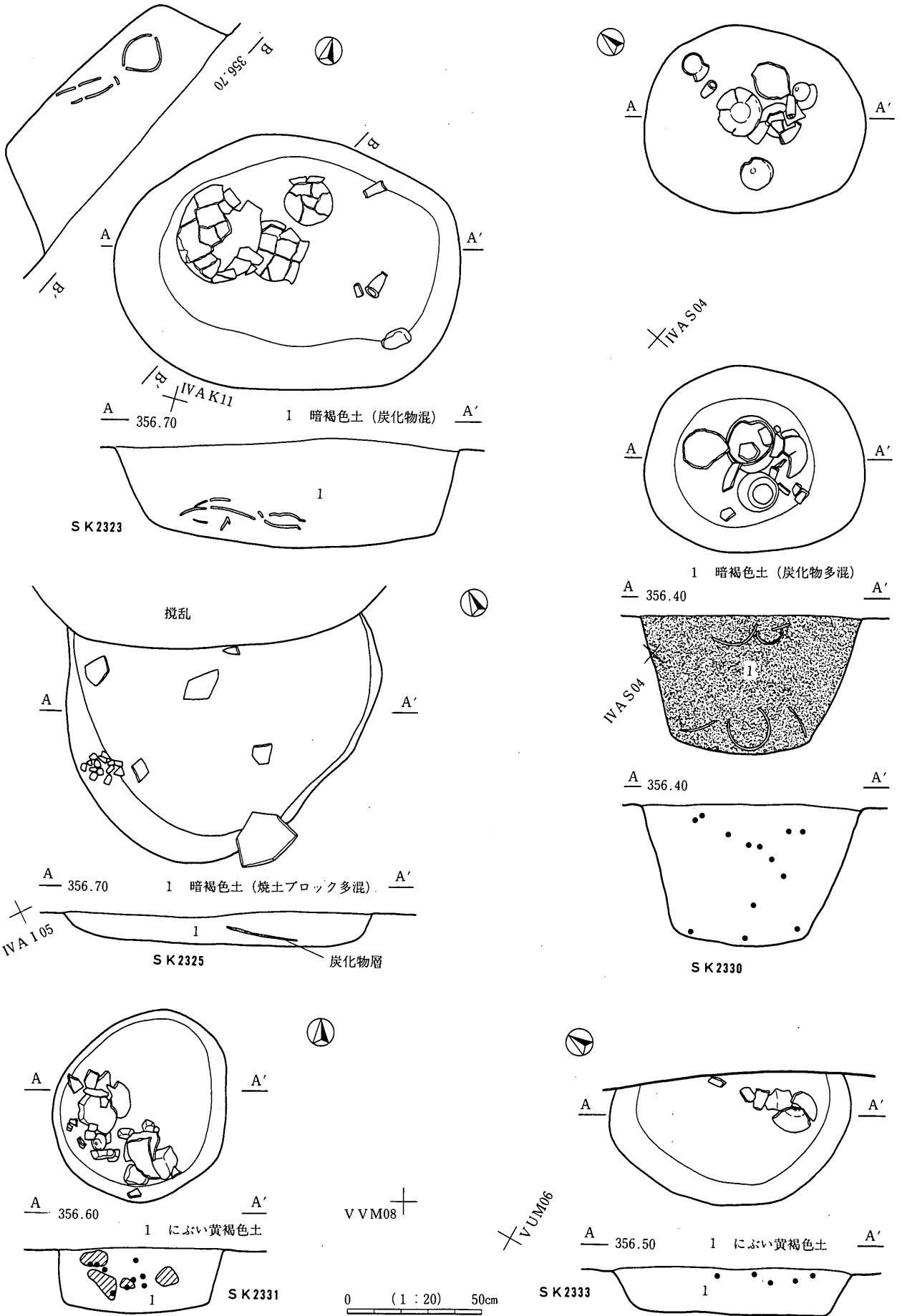
S D1016区画内の南東部東よりに位置し、隣接してS K 2340がある。平面形は長軸106cm、短軸68cmの楕円形を呈し、断面形は長方形である。底面は平坦で検出面からの深さは13cmと浅い。埋土はにぶい黄褐色土の単層で、若干の炭化物と土師器破片を混じり込んでいる。出土遺物には土師器の小破片260gと支脚破片1点が得られたのみで、口縁部の遺存度区分もAである。土器の破片は土坑の中央西より周辺に破片ながら集中的に検出されている。出土遺物や埋土から古墳時代の所産と推定したが、不安が残る。また、隣接するS K 2340とは形状が類似するが、性格は不明である。

**S K 2340** ⑧-2区 VVO12・13 (第99図、P L15)

S D1016区画内の南東部東よりに位置し、隣接してS K 2339がある。平面形は長軸96cm、短軸82cmの楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形となる。底面は平坦で検出面からの深さは20cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。遺物は土師器が総重量800g得られ、口縁部の遺存度区分はBである。これらの土師器破片は土坑の西半分に破片が散在的に礫と共に検出された。本土坑は隣接したS K 2339とは形態が類似している。

**S K 2342** ⑧-2区 VVI12

S D1016区画内南東部に位置し、S K 2258に切られる。平面形は長軸72cm、短軸54cmの楕円形を呈し、



第98図 SK 2323・2325・2330・2331・2333

断面形は浅い逆台形を呈する。検出面からの深さは最も深いところで14cmを測る。埋土は炭化物が散在するにふい黄褐色土の単層で、この炭化物の散布から土坑の平面形を認定した。出土遺物は非常に僅かで土師器破片が60g採取されたに過ぎず、口縁部の遺存度区分もAである。埋土の特徴と、本土坑を切るSK2258が古墳時代の所産と思われるため、古墳時代の所産であろうと推定した。性格は不明であるが、掘り込みの浅さからも炭化物集中や凹地状の地形の可能性もある。

#### SK2343 ⑧-2区 VVH12

SD1016区画内の南東部に位置する。平面形は長軸60cm、短軸34cmの楕円形を呈し、断面形は浅い長方形である。埋土は褐色土の単層である。出土遺物は土師器の破片が僅かに5g得られたに過ぎない。古墳時代の所産とする根拠は非常に希薄であり、性格は不明である。ただし、周辺にあるSK2259とは形状が類似し、両者を結ぶラインは古墳時代の建物跡の軸方向に近いものである。

#### SK2345 ⑧-2区 VVR20

SD1016区画内の南東部南よりに位置する。SK2313・2208に切られ、残存部は長軸94cm、短軸72cm前後で、平面形は楕円形を呈すると思われる。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは43cmを測る。埋土は6層に分層され、最下層に6層の黒褐色土、その上には炭化物・焼土粒を混入する5層の黒褐色土、その上部壁際に4層の暗灰黄褐色土、中位には炭化物粒子を少量含む灰黄褐色土、その上には炭化物を大量に混入する2層の黒褐色土、最上層には炭化物・焼土粒を混入する灰褐色土がある。このなかで2層と5層は炭化物が顕著、もしくは混入するもので、上下に位置する1・3層は間層となる。出土遺物は土師器2710gあるが、検出当初SK2208との境が不明瞭なために一括して取り上げてしまったものがある。口縁部の遺存度区分はCであるが、他の遺構に切られるため本来はより遺存度が良好な破片が含まれる可能性がある。したがって、残存部からは炭化物が廃棄された土坑と捉えたが、本来は併せて土器廃棄された可能性もある。SK2208に切られることなどから古墳の所産と推定したが、性格は不明である。

#### SK2346 ⑧-2区 VVT19、WA19 (第99図、PL15)

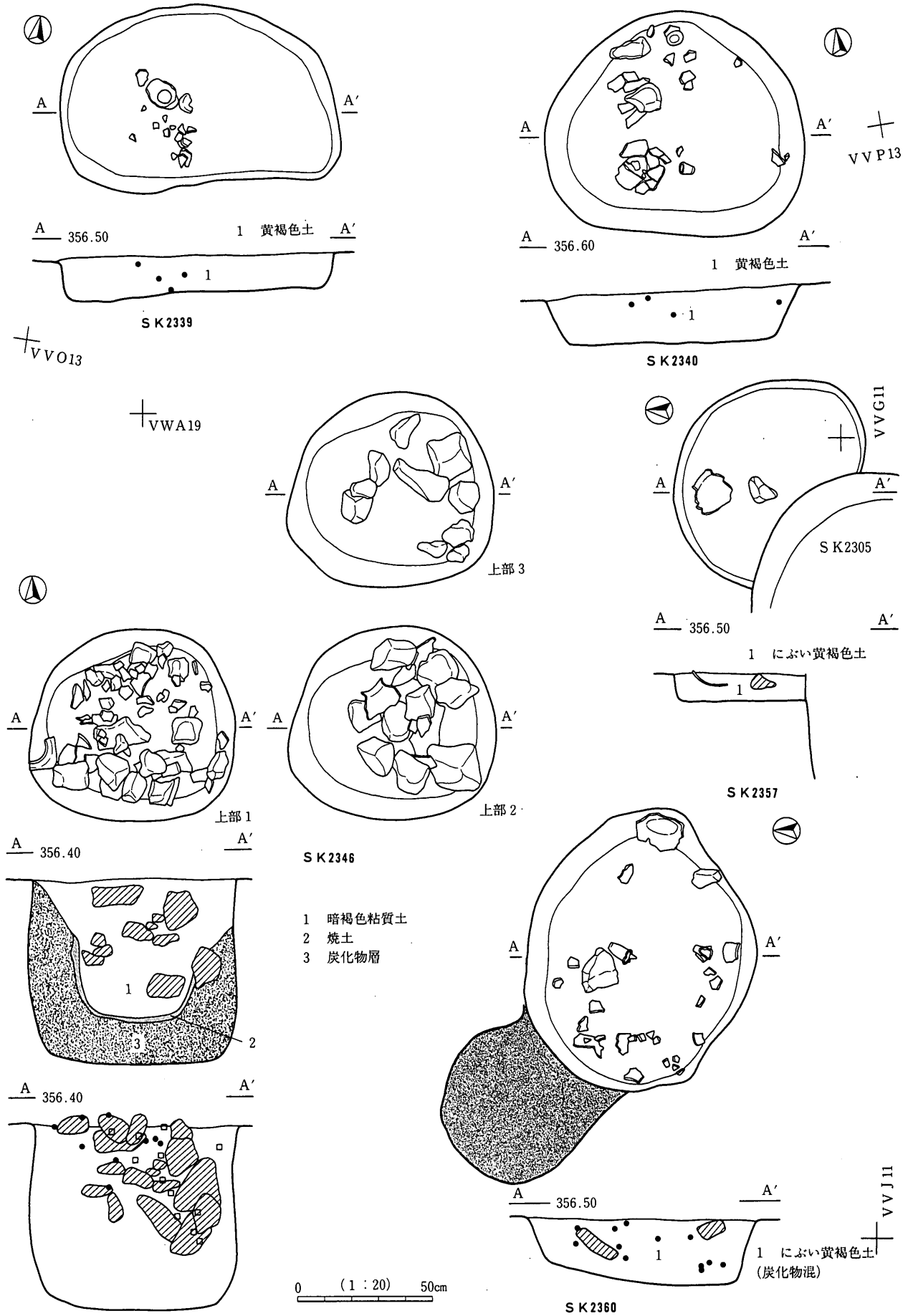
SD1016区画内の南東部、SD1016へ続くと思われる傾斜際に位置する。平面形は直径70~76cmの円形を呈し、断面形は方形で、全体の形状は円筒形となる。検出面から底面までの深さは68cmを測る。埋土は3層に分層され、底面上には炭化物層がU字状に入り、その上部中央付近に薄い焼土層がみられる。そして上層は炭化物・焼土粒を少量含む暗褐色土が覆う。出土遺物は1層を中心に出土し、土師器の破片が5730g得られた。その大半が礫に混じって検出されたものである。なお、土器の口縁部遺存度区分はCである。他には骨片が得られている。出土遺物や炭化物層が認められる特長から古墳時代の所産と推定したが、埋土上層に多数の礫が投げ込まれている様相は遺跡内でも特異である。土坑の形状は井戸跡に類似するものの、浅いため井戸跡とは捉えなかった。炭化物が廃棄され、その後土器や礫が廃棄されたと思われる。

#### SK2357 ⑧-2区 VVF10 (第99図)

SD1016区画内の南東部中央よりに位置し、南西側はSK2305に切られる。平面形の子細は不明であるが、長軸74cm、短軸は残存部で63cmを測り、楕円形を呈すると思われる。断面形は長方形を呈し、検出面からの深さは10cmと浅い。埋土は白色シルトブロックを若干含むにふい黄褐色土の単層である。出土遺物には375gの土師器があり、口縁部の遺存度区分はAである。出土土器と埋土から古墳時代の所産であろうと推測したが、浅いことから凹地地形の可能性もある。

#### SK2360 ⑧-2区 VVJ11 (第99図、PL15)

SD1016区画内の南東部に位置する。検出時には北西部外側に遺物の散布がみられ、土坑の切りあいが想定された。しかし、精査の結果では掘り込みが確認されず、土坑の切り合いではないと判断された。平面形は長軸106cm、短軸86cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは24cm



第99図 SK 2339・2340・2346・2357・2360

を測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層で炭化物と土師器破片が散在的に含まれる。出土した土師器は1090gあり、口縁部の遺存度区分はAである。本土坑は炭化物も認められているが、顕著でなく、土器の出土量もあまり多くない。これらの様相から土器・炭化物が廃棄された土坑とは捉えなかった。

**S K 2361** ⑧-1区 IVAH05 (第100図、P L15)

S D1016区画内の南西部中央よりに位置する。平面形は南北101cm、東西96cmのやや方形に近い円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。底面は南側に若干傾斜し、検出面からの深さは32cmである。埋土は焼土ブロックを多く含む暗褐色土を主体とし、底面上に部分的な焼土がみられた。出土遺物は7490gの土師器があり、略完形や大型破片が集中的に出土している。口縁部の遺存度区分はCである。底面上の部分的な焼土は1層の焼土ブロックと同様の所産と思われ、土器と共に廃棄されたものと思われる。

**S K 2363** ⑧-1区 IVAH08、AI08 (第100図、P L15)

S D1016区画内の南西部中央よりに位置する。平面形は直径80~88cmの楕円形ぎみの円形を呈し、断面形はU字状を呈する。検出面から底面までの深さは54cmである。埋土は炭化物を少量含む黒色土の単層で、出土遺物は土師器の破片2780gがあり、口縁部遺存度区分はCである。これ以外に弥生土器片が若干ある。近接したところではS K 2401・2361・2329・2363とはほぼ一定間隔で直線的に配列するようにもみえるが、他土坑は規模が大きく、柵列跡や建物跡とは認められない。なお、調査記録では土器が土坑内の上・下部に別れて出土するようにみられるが、図化された遺物は一部と思われ、出土状態の仔細は不明である。

**S K 2374** ⑧-2区 VVA15 (第100図)

S D1016区画内の南東部中央よりに位置する。平面形は長軸86cm、短軸63cmの楕円形を呈し、断面形は浅い皿状である。底面は平坦で検出面からの深さは6cmである。埋土は黄褐色土の単層で埋土中には礫と土師器破片が散在的に出土し、505g得られている。出土遺物から古墳時代の所産と思われるが、掘り込みが浅く凹地地形の可能性はある。

**S K 2378** ⑧-2区 VUS14 (第100図)

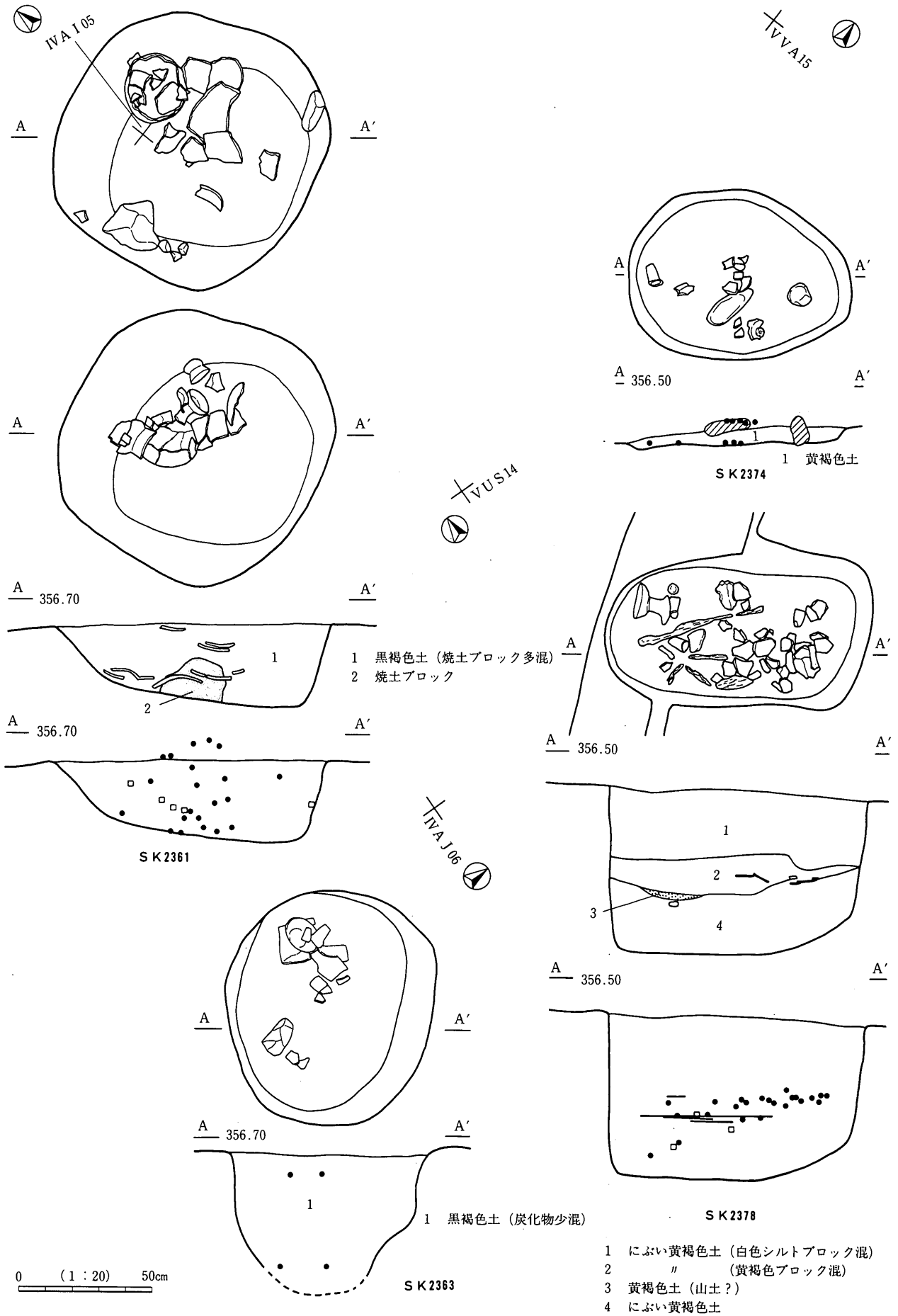
S D1016区画内の南東部中央よりに位置する。⑤-2区と⑧-2区の境にあたり、⑤-2区の排水用のトレンチで部分的に破壊した。平面形は長軸100cm、短軸64cmの楕円形を呈する。断面形は壁が垂直で、底面は北側がやや深い方形を呈し、検出面からの深さは62cmを測る。埋土は4層に分けられ、底面上には4層の溶脱を受けた粘土層、その上に部分的にみられる山砂とも思われる薄い黄褐色粘土の3層、黄褐色土・にぶい黄褐色土ブロックを含む2層、白色ブロックを含む黄褐色土の1層である。遺物は土師器2585gと棒状の材があり、土師器は2層中から棒状の材と共に一定レベルに集中して出土し、4層からは土器出土が少く、破片のみ出土した。口縁部の遺存度区分はCである。炭化物層はみられず、土坑構築から一定の埋土が形成された前後から土器が入り、さらに2層を中心として土器が廃棄されたと捉えられる。

**S K 2382** ⑧-2区 VVB12・VC12 (第101図)

S D1016区画内の南東部中央よりに位置する。平面形は長軸105cm、短軸63cmの楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは38cmを測る。埋土は炭化物片・黄褐色土ブロックを含む黄褐色土の単層で、少量の土師器破片が散在的に出土した。出土遺物は145gの土師器があり、口縁部の遺存度区分はAである。土坑の主軸方向や僅かな出土土器から古墳時代の所産と考えた。性格は不明である。

**S K 2386** ⑧-2区 IVBP01・02

S D1016区画内の南東部南よりに位置する。平面形は長軸114cm、短軸78cmのやや不整形な楕円形を呈する。掘り込みは浅く、底面には凹凸が目立つ。検出面からの深さは16cmである。埋土は炭化物や焼土を少量混入する暗褐色土の単層で地山との識別が難しかった。高坏の脚破片が1点100gのみ出土した。底面の凹凸が目立つ点や地山との識別の困難さからも遺構ではなく、凹地地形の可能性が高い。



第100図 SK 2361・2363・2374・2378



**S K 2387** ⑧-2区 VWA19 (第101図)

S D1016区画内の南東部南東隅に位置する。平面形は長軸105cm、短軸60cmの楕円形を呈し、断面形は北東側の底面が低くなる逆台形である。検出面からの深さは北東側で35cmを測る。埋土は炭化物や焼土が混じる暗褐色粘質土の単層であるが、埋土上部から中位にかけて円礫と土師器破片が多く出土している。土師器破片は2860g得られたが、口縁部遺存度区分はAである。これらの土器の出土レベルの詳細な記録がないため、土器出土状況の詳細は不明である。一部の記録からは上層に集中する傾向があり、また、埋土中に焼土粒や炭化物が含まれる記述から、炭化物と共に埋土中に土器が廃棄された可能性がある。

**S K 2390** ⑧-2区 VVS19 (第101図)

S D1016区画内の南東部南東隅近くに位置し、S K 2208を切っている。平面形は長軸90cm、短軸80cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは45cmを測る。埋土は3層に分けられ、下半に炭化物粒子を若干含む暗褐色土の3層、中位に焼土・炭化物粒子がやや多い黒褐色土の2層、上部の暗褐色土の1層である。遺物は土師器960gあり、1層で破片、3層の底面近くで土師器破片と礫が出土している。土師器は完形・略完形になるものは認められず、口縁部の遺存度区分はAである。本土坑は埋土中位に炭化物や焼土粒が目立ったが、廃棄の所産が断定できなかった。

**S K 2401** ⑧-1区 IVAH04 (第102図)

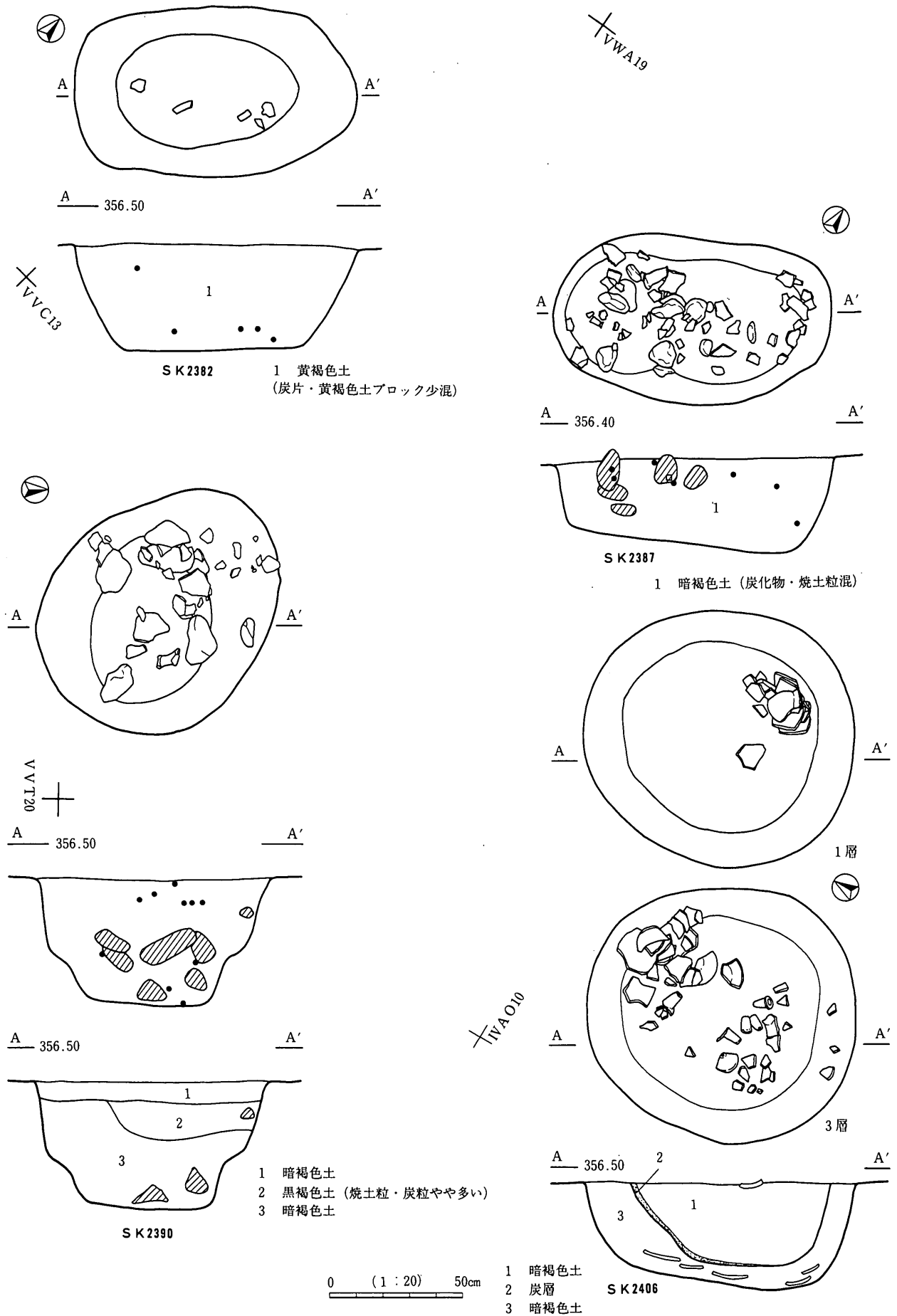
S D1016区画内の南西部、中央よりに位置する。平面形は長軸160cm、短軸140cmの不整形円形を呈する。壁は斜めに掘り込まれ、底面は平坦で検出面からの深さは20cmを測る。埋土は2層に分層され、上層には粘性が強く乾燥すると固く締まる焼土ブロックを多く含む灰黄色土、下層は砂の感触が強い黒褐色土である。遺物は小破片で散在的に出土した古墳時代の土師器2290gがあり、口縁部の遺存度区分はBである。他には古代の須恵器、中世の焼物若干など混入品と思われる土器もある。本跡は古墳時代の土師器が出土したことや、焼土ブロックが含まれる点から古墳時代の所産と推測したが、埋土がやや異質であることや古代の土器が混じる点から不安がある。性格は不明である。

**S K 2403** ⑧-1区 IVBI05・06 (第102図、P L15)

S D1016区画内の南東部西よりの南部に位置し、隣接して遺物集中S Q 2013がある。検出は見逃し遺構確認の第2面である。平面形は長軸200cm、短軸142cmの楕円形を呈する。断面形は逆台形で、検出面からの深さは70cmを測る。埋土は5層に分層され、底面上にはブロック状に点在する焼粘土の5層、底面全体を覆う炭化物層の4層、その上部の薄い灰層の3層、その上に炭化物層の2層、最上部に中位以上を占める暗褐色土の1層である。出土遺物は4層を中心に土師器の破片が多数得られ、総重量は5085gである。これ以外に混入と思われる僅かな弥生土器、近世の陶磁器破片がある。口縁部遺存度区分はCである。本土坑は遺物の出土状況の記録がないため、土器の出土状態は子細不明である。炭化物は土坑内部で生成されたか断定はできないが、土坑構築からあまり時間を経ないで炭化物・焼粘土が廃棄され、それに伴って土器が廃棄されたと捉えた。隣接するS Q 2013とは関連があると思われる。

**S K 2406** ⑧-1区 IVAO10 (第101図、P L16)

S D1016区画内の南西部に位置し、S D 2014を切る。調査では入れ子状に検出されたS K 2368は整理段階で同一の遺構と認定し、本土坑へ含めた。平面形は直径96~102cmの円形を呈する。断面形は逆台形で、検出面からの深さは40cmを測る。埋土は3層に分層され、底面上には3層の暗褐色土、その上を覆う薄い炭層の2層、さらにその上面を覆う暗褐色土の1層がある。出土遺物にはS K 2368とされた部分で土師器破片2405g、S K 2406とされた部分で4135gの合計6540gがある。これらの土師器は1層上面では小破片、3層の底面上には多数の土師器破片が集中的に検出された。口縁部遺存度区分ではCである。これらの出土遺物から古墳時代の所産と推定され、土坑構築後に土器が廃棄され、次に薄い炭化物層、さらに土器が



第101図 S K 2382・2387・2390・2406

散在的に入ったと思われる。薄い炭化物層については大量の炭化物が入り込む場合とは様相が異なり、混入の可能性があるかと捉えて土器廃棄された土坑と捉えた。

**S K 2410** ⑧-2区 VVQ13・VR13 (第103図)

S D1016区画内の南東部に位置する。中世 S D2001底面上で検出され、上部はかなり削平を受けていると見られる。平面形は長軸175cm、短軸106cmの隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形となる。残存部で確認できた深さは30cm前後であるが、S D2001の検出面から想定すると80cm前後の深さになると思われる。埋土は3層に分けられ、底面上には2層のブロックをわずかに含む3層の暗褐色土、埋土中位に若干の炭化物・焼土粒の混じる2層の褐色粘土層、最上部に褐色砂質土と灰白色粘土、若干の炭化物・焼土粒を混じり込んだような1層がある。出土遺物は土師器が4135gがあり、主として3層中より礫若干を伴って出土した。土器の口縁部遺存度区分はCである。本土坑では土坑構築から間もなく土器が廃棄されたと思われる。上部には炭化物粒や焼土粒を若干含む埋土が見られ、炭化物が廃棄されている可能性も窺える。

**S K 2413** ⑧-2区 VVN08・VO08 (第103図)

S D1016区画内の南東部の東端に位置し、⑧-2区の調査区境近くで検出したため一部排水トレンチで破壊した。平面形は長軸120cm、短軸80cmの楕円形で、断面形は長方形を呈して検出面からの深さは22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。遺物は比較的大量の土器があり、総重量3880gである。埋土全体に散在的に礫若干と共に出土したが、一部に完形土器が含まれる。口縁部の遺存度区分はCである。炭化物はあまり顕著に含まれておらず、土器のみを廃棄していると思われる。

**S K 2422** ⑧-1区 IVAI05 (第103図、P L16)

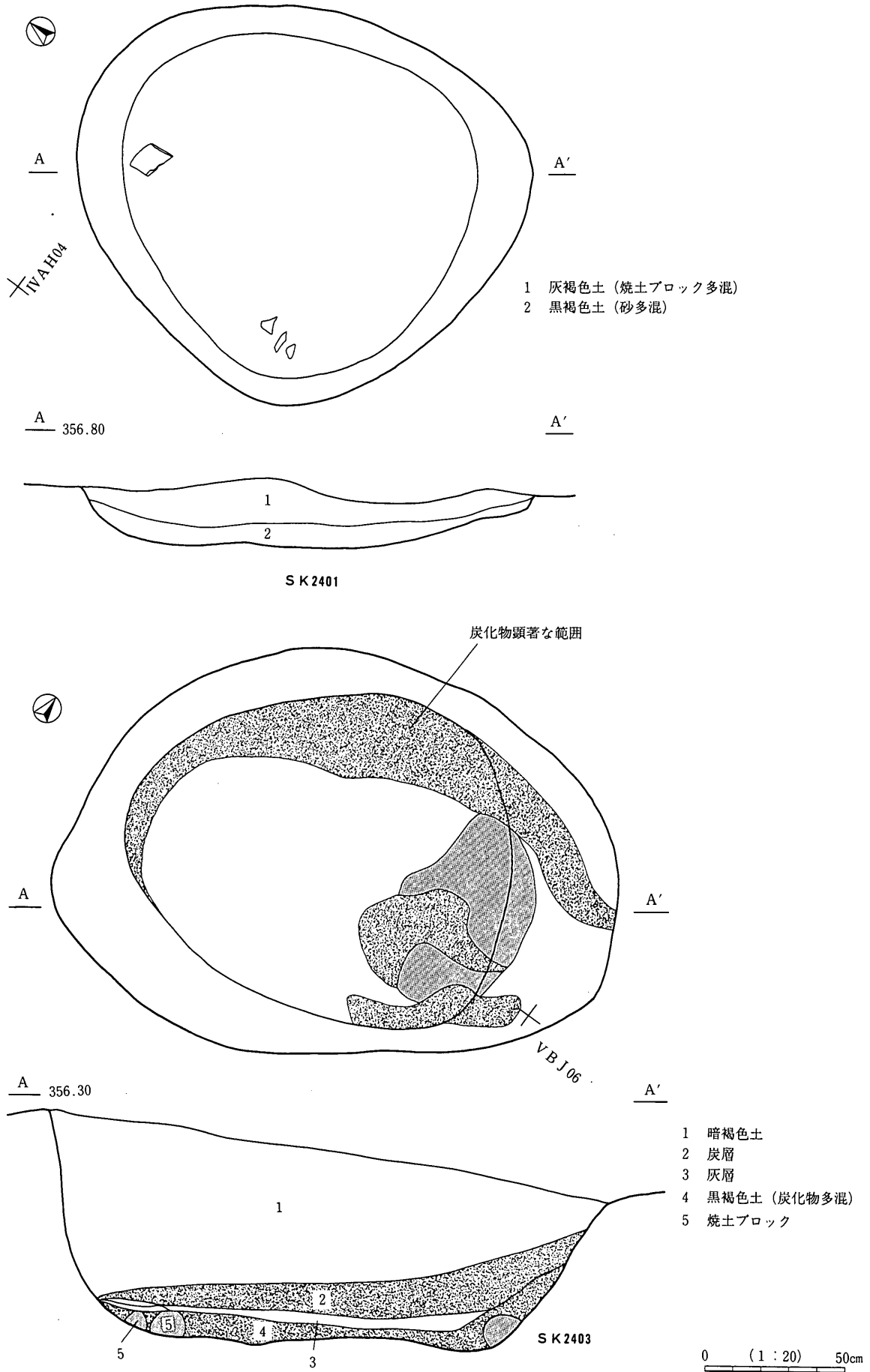
S D1016区画内南西部の中央よりに位置する。第2面で検出し、第1面の見逃しと思われる。第1面では一部重複する位置にS K2329が検出されているが、S K2329の検出状況から、本土坑が切られるものと思われる。平面形は長軸118cm、短軸62cmの楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形を呈する。検出時の底面までの深さは42cmを測るが、第1面からの深さはおよそ79cm前後と推定される。埋土は少量の黒褐色土ブロックが混入する暗褐色土で、上部ほど炭化物が多くみられる傾向がある。出土遺物には土師器1635gがあり、口縁部遺存度区分はCである。土器は埋土の上部と底面近くの2か所で破片が出土しているが、いずれも完形品が集中的に廃棄されたとはみられず、大形破片が廃棄されたかと捉えた。また、炭化物は上層ほど多く含まれる傾向があるが、明瞭な炭化物廃棄とは断定できず、土器のみの廃棄と捉えた。

**S K 2432** ⑧-1区 IVAO10 (第103図)

S D1016区画内南西部の南よりに位置し、第1面で見逃して第2面で検出した。平面形は直径82～88cmの円形で、壁は垂直に掘り込まれて底面が平坦となる方形の断面形を呈する。全体的に円筒形である。第2面から底面までの深さは36cmを測るが、周辺の第1面との標高差を比べると50cmあり、そのまま単純に計算すると第1面からの深さは80cm以上になる。しかし、他地区に比較して第1面と第2面の標高差の開きが大きく、調査ミスの可能性も残される。埋土は炭化物・焼土が混じる暗褐色土の単層であり、埋土下部から高坏や器台破片が集中的に出土した。土器は2180gで口縁部の遺存度区分はCである。埋土と土器出土状況から土坑構築からあまり時間を経ないで土器と炭化物などが廃棄されたかと捉えた。性格は不明で井戸跡の可能性はあるが、断定できなかったのでここで扱った。

**S K 2439** ⑧-1区 IVAQ14 (第104図)

S D1016区画内の南西部、南よりに位置する。第1面で見逃し、第2面で検出した。東側をS K2440に切られ、平面形は南北方向104cm、東西方向は残存部で72cmを測り、楕円形もしくは長方形を呈すると思われる。第2面からの深さは30cmであるが、第1面の標高から類推すると本来は74cm前後と推定される。埋土は炭化物を若干混入する暗褐色土の単層であり、出土遺物は全く見られない。古墳時代の所産と思わ



第102図 S K 2401・2403

れるS K2440に切られるため、古墳時代の所産と推定した。性格は不明である。

#### S K2440 ⑧-1区 IVAQ14 (第104図)

S D1016区画内の南西部、南よりに位置し、第2面で検出したが、第1面の見逃しと思われる。西側にあるS K2339を切り、北西部を中世のS K2478に切られる。平面形は長軸130cm、短軸96cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形となる。第2面からの深さは50cmで、第1面からの深さは単純に計測すると95cmとなる。しかし、この周辺では中世の井戸跡も見逃されていたことを考えると、第1面がかなり高く設定されていた可能性もあり、他地区と対比しうる深さは不明である。埋土は3層に分けられ、底面上には炭化物を若干混入する暗褐色土の3層、その上には炭化物を縞状に含む灰黄褐色土の2層、最上部には暗褐色土の1層が見られる。出土遺物は土師器の破片795gが得られているが、ほとんどが2層からの出土で、3層からもわずかに得られている。これらの土師器は小破片が多く、口縁部遺存度区分はAである。出土遺物から古墳時代の所産と思われ、検出面からの深さを考えれば、井戸跡の可能性もある。しかし、この周辺の第1面の設定が高すぎる問題があるため、断定できずにここへ含めた。

#### S K2444 ⑧-1区 IVBB10・11 (第106図、P L16)

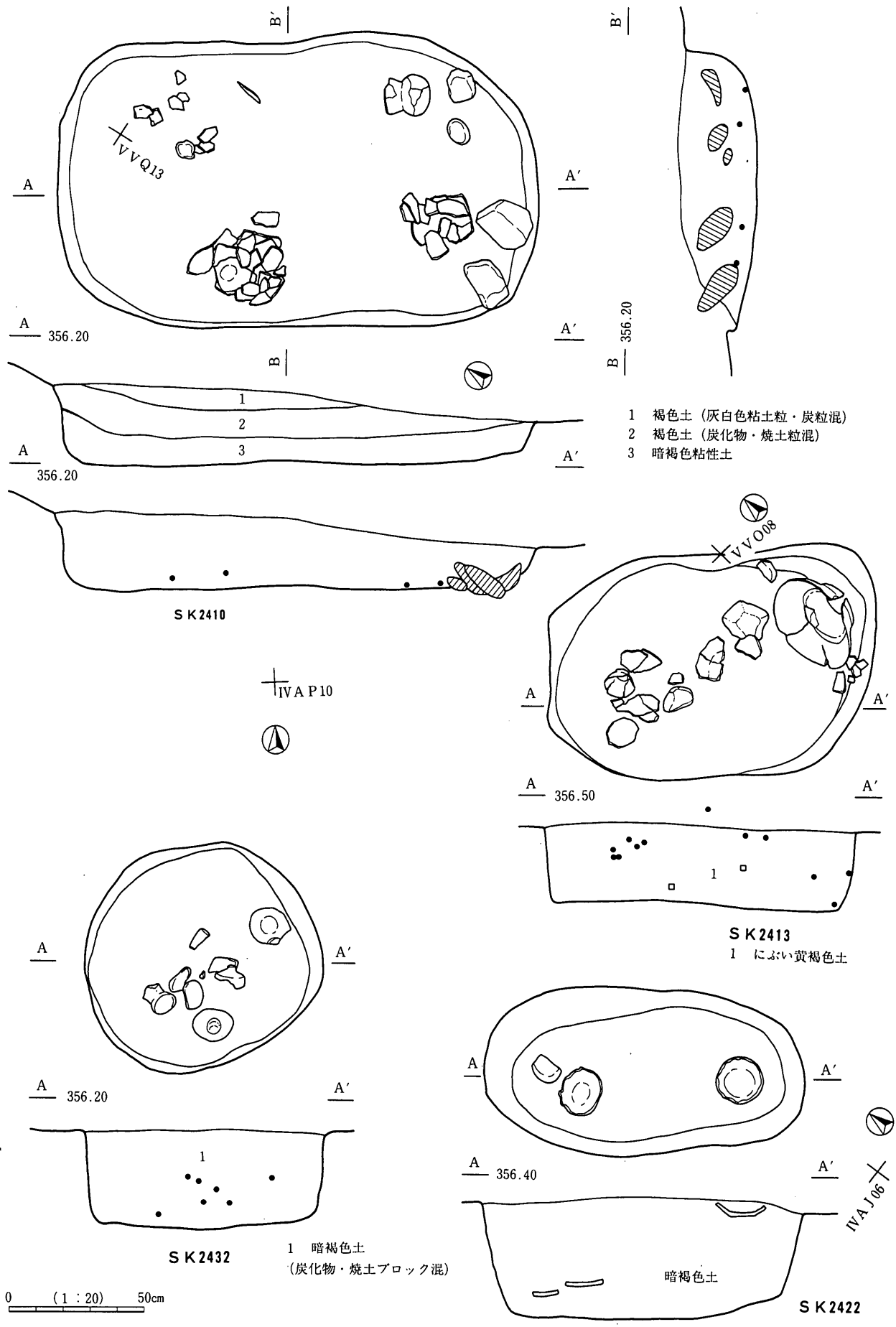
S D1016区画内南西部の南東よりに位置する。第2面で検出されたが、第1面の見逃しと思われる。平面形は長軸230cm、短軸132cmの長楕円形を呈し、西側に若干くびれる部分がある。検出当初はこの形態から2基の土坑の切り合いの可能性も想定されたが、長軸方向に入れたトレンチによって単一の土坑であることが確認された。断面形は逆台形となり、第2面からは58cmを測るが、第1面からは92cm前後になると推定される。埋土は2層に分層され、上層には炭化物を少量含む暗褐色土の1層、底面上には層厚が10cm前後の炭化物を主体とした2層がある。遺物は12755gの土師器があるが、調査記録には西端の底面上の完形の壺1点と材若干、完形の壺近くの勾玉が1点が記録されているのみで、多くの土師器の出土状況は不明である。口縁部の遺存度区分はCで、炭化物と共に土器が廃棄されたと思われる。深さからは井戸跡の可能性はあるが、第1面の設定が高すぎることや平面形態から井戸跡ではないと考えた。

#### S K2445 ⑧-1区 IVBD10、BE10 (第104図)

S D1016区画内の南東部、南西よりに位置する。第2面で検出したが、第1面の見逃しと思われる。同じ第2面内で検出されたS K2492が本土坑を切る。平面形は長軸158cm、短軸112cmの楕円形を呈し、断面形は底面から壁の立ち上がりが緩やかなトライ状を呈する。第2面から底面までの深さは32cmを測るが、第1面からは80cm前後となる。ただし、周辺の第1面の設定が高すぎた可能性があり、他地区の第1面に対比される深さは不明である。埋土は2層に分層され、底面上には薄い炭化物を多く含む2層の黒褐色土、その上には炭化物を少量含む暗褐色土が入る。出土遺物は土師器5415gとかなり多数あり、出土状況の記録がないため出土状況は不明であるが、炭化物と共に土器が廃棄されたと捉えた。口縁部の遺存度区分はCである。井戸跡の可能性もあるが深さに問題がある。

#### S K2446 ⑧-1区 IVBE10、BF10 (第105図)

S D1016区画内の南東部、南西よりに位置する。第2面で検出したが、第1面の見逃しと思われる。平面形は長軸139cm、短軸74cmの長楕円形を呈し、断面形は東側が低いU字状となる。第2面から底面までの深さは48cmを測るが、第1面からは96cm前後となる。この土坑も第1面の設定標高に問題があり、他地区の第1面に対比される面からの深さは不明である。底面上には薄い灰黄褐色土、その上面には炭化物を少し含む1層の黒褐色土がある。出土遺物は非常に少なく、土師器の破片が620g得られたに過ぎない。口縁部の遺存度区分はAである。僅かな土器出土と他の時代の土坑とは形態が異なることから古墳時代の所産と捉えたが、断定はできない。また、深さからすれば井戸跡の可能性もあるが、第1面の設定が高すぎたと思われることなどからは断定できない。



第103図 SK 2410・2413・2422・2432

**S K2447** ⑧-1区 IVBE10、BF10 (第104図)

S D1016区画内の南東部、南西よりに位置する。第2面で検出したが、第1面の見逃しと思われる。平面形は直径104～106cm前後の不整形円形を呈し、断面形はU字状となる。第2面から底面までの深さは70cmを測るが、第1面からは120cm前後となる可能性もある。埋土は2層に分層され、底面上に褐灰色粘質土、その上面に暗褐色土がある。出土土器は非常に少なく310g得られたに過ぎず、1～2層から破片が散在的に出土したものである。口縁部の遺存度区分もAである。本跡は検出面からの深さからすれば井戸跡の可能性はあるが、帰属時期が判然とせず、古墳時代と断定はできない。

**S K2449** ⑧-1区 IVBG08・09 (第105図)

S D1016区画内南東部の南西よりに位置する。第2面で検出したが、第1面の見逃しと思われる。東側のS K2448を切り、第1面のS Q2007は本土坑上部を覆う。平面形は長軸180cm、短軸93cmの楕円形を呈し、断面形は壁の立ち上がりが緩やかな逆台形を呈する。第2面からの深さは32cmを測り、第1面からは90cm前後の深さになるが、本土坑周辺の第1面の設定が高すぎた可能性があり、他地区と比較できる深さは不明である。埋土は上下2層に分けられ、底面上には炭化物を大量に含む黒色土、上層には黒褐色土が入る。出土遺物は145gと少量の土師器が得られたのみであり、口縁部の遺存度区分もAである。上面が古墳時代土師器の集中となるS Q2007に覆われ、炭化物の出土からも古墳時代の所産と捉えた。深さからすると井戸跡の可能性もあるが、帰属時期に不安があることや、平面形態の比較からも井戸跡とは断定できなかった。なお、本土坑では炭化物が廃棄されたと推定される。

**S K2482** ⑧-1区 IVAN15 (第105図、P L17)

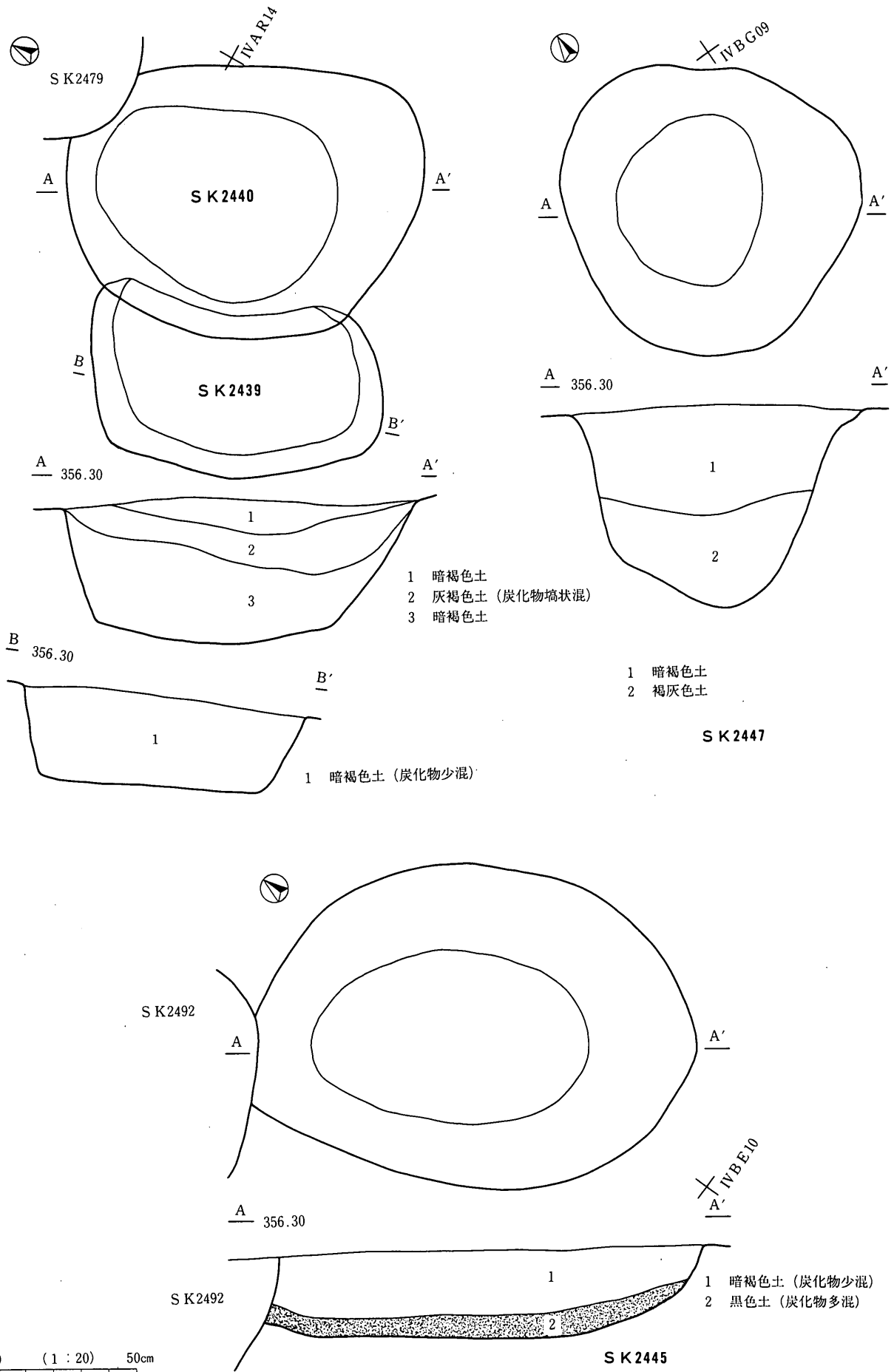
S D1016区画内南東部の南よりに位置する。第2面で検出したが、第1面の遺構の見逃しと思われる。調査区周囲に設定した縄文時代の遺構確認と土層観察用のトレンチでかなり破壊してしまい、土坑の一部が残存するのみである。また、第1面では重複する位置にS K2182があるが、S K2182検出時の所見に従えば本土坑はS K2182に切られることになる。平面形は不明であるが、残存部は南北90cm、東西72cmを測る。断面形は深い逆台形となり、第2面からの深さは70cmである。単純に第1面からの深さとするとも109cm前後となる。埋土は3層に分けられ、底面上には3層の粘性の強い黒褐色土、中位には層厚10cm前後の炭化物を大量に含む2層の黒褐色土、最上部には黒褐色土がある。出土遺物は土師器2495gがあり、口縁部の遺存度区分はCである。土器は2～3層にかけて集中的に出土し、特に底面上には略完形の甕が横倒し状態で出土している。出土遺物からも古墳時代の所産と思われ、第1面が高過ぎたとしても、第2面からの深さからは井戸跡の可能性が高いと思われる。しかし、平面形が不明なこともあり、井戸跡に含めずここで扱った。なお、本土坑は、土器が2～3層で集中的に出土したことから両者にはあまり時間差がないと判断し、底面上に炭化物と土器が廃棄されたと捉えられる。

**S K2512** ⑤-2区 VUP04・05 (第106図、P L17)

S D1016区画内の北東部の調査区壁にかかって検出され、南半分は調査区壁周囲にいたトレンチで破壊してしまった。そのため平面形や規模など詳細不明である。残存部分では長軸190cm、短軸92cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形となる。検出面からの深さは30cm前後を測る。埋土は炭化物粒を含む粘性の強い灰褐色土の単層であり、埋土中に土師器の小破片が多数検出されている。出土遺物には土師器2035gあるが、整理でもあまり接合するものが見られず、口縁部の遺存度区分はAである。

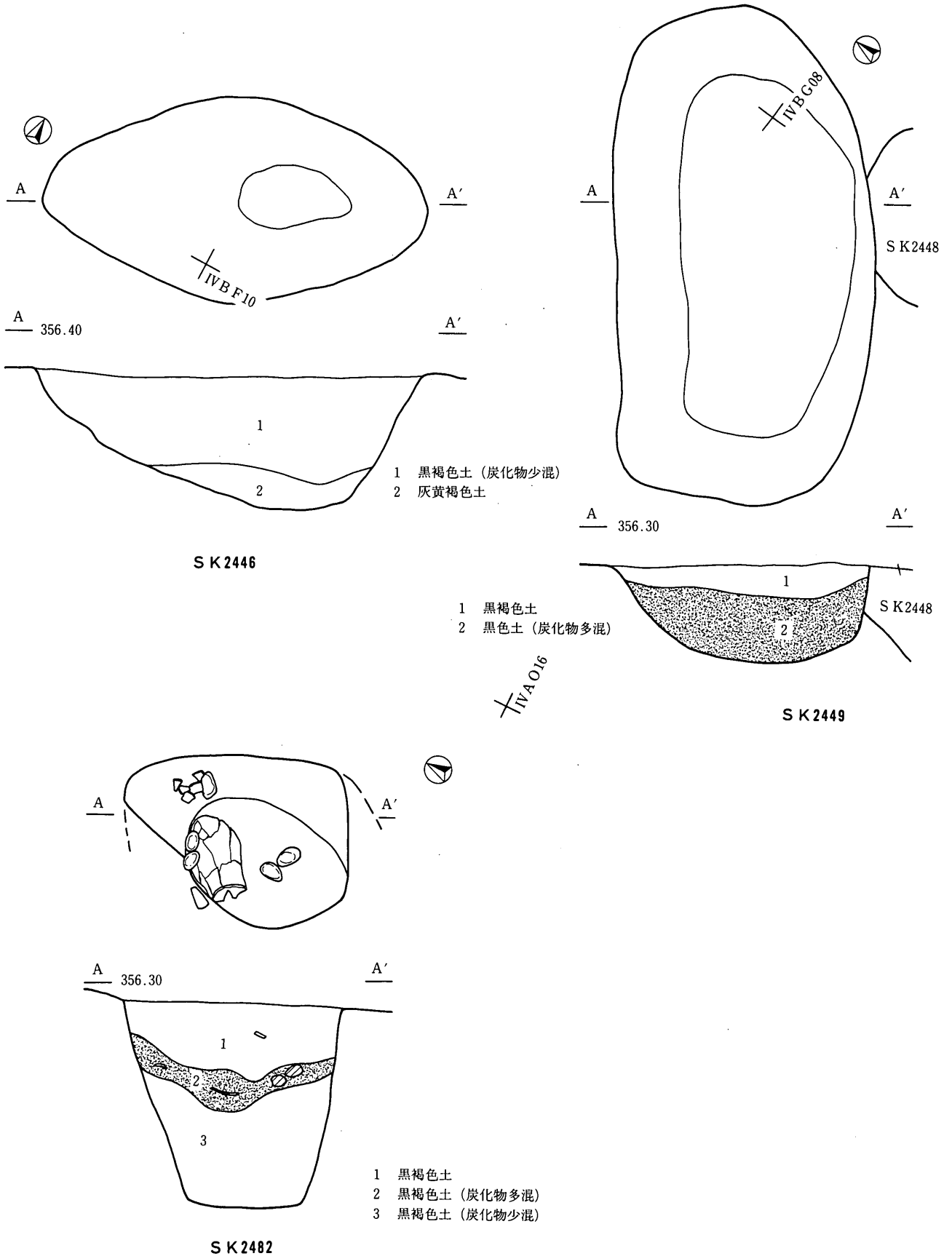
**S K2608** ⑤-2区 VQQ18 (第107図、P L17)

S D1016区画内の北東部に位置し、中世の館堀S D2001底面上で検出され、上部はかなり削平されているとみられる。平面形は長軸109cm、短軸53cmの長楕円形を呈し、断面形は底面から壁の立ち上がりが緩やかなU字状を呈し、底面には直径20～30cmの小規模な円筒形の浅い落ち込みがある。この円筒形の落ち込

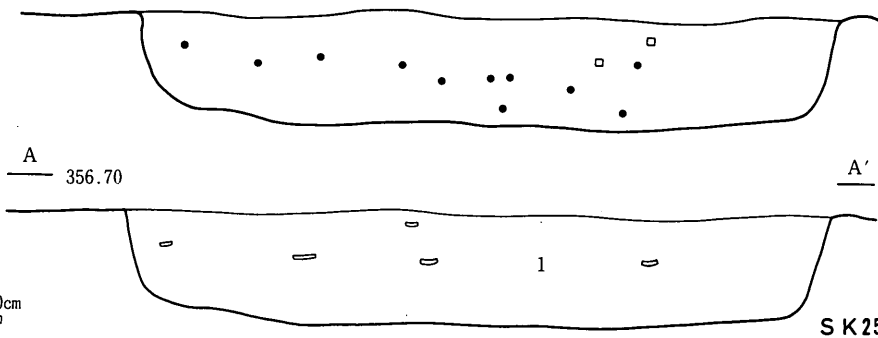
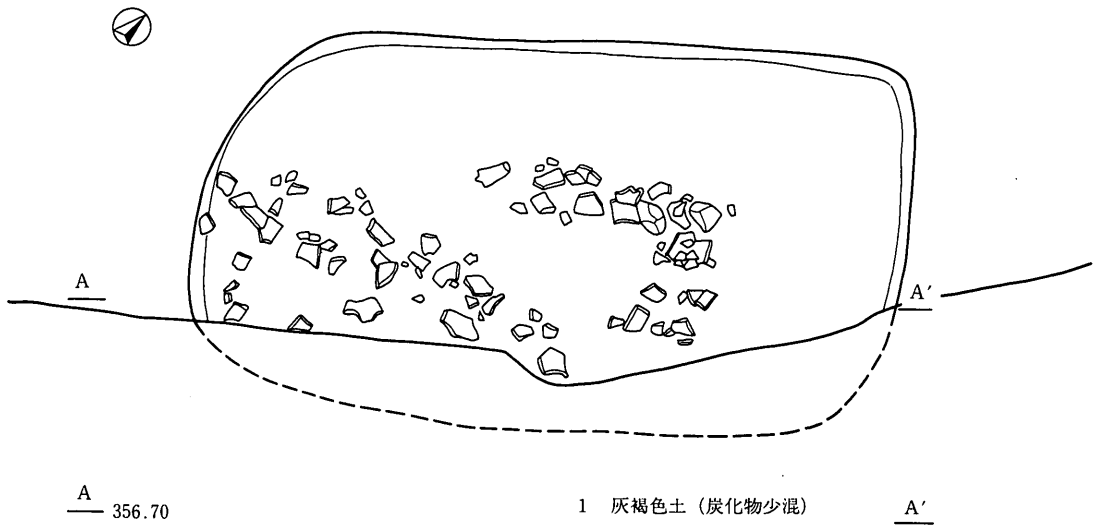
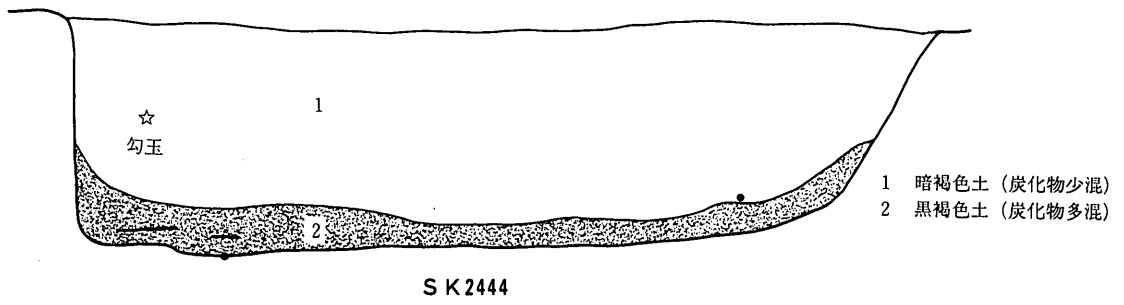
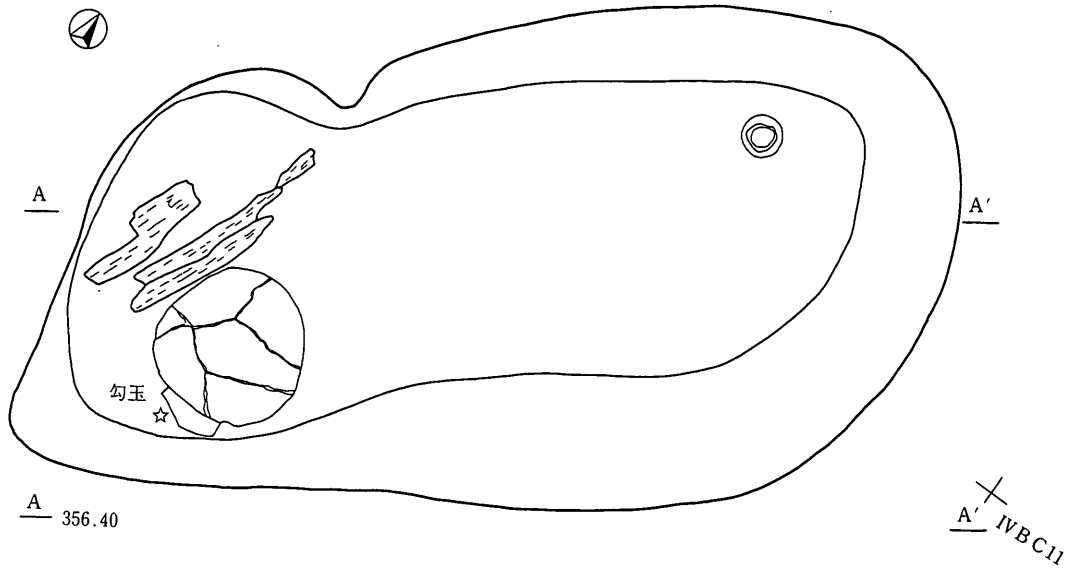


第104図 SK2439・2440・2445・2447





第105図 SK2446・2449・2482



0 (1:20) 50cm

第106図 S K 2444・2512

みから検出面までの深さは55cmを測るが、S D2001内側検出面までとすると約78cmと推測される。埋土は3層に分けられ、下から黄灰色粘土ブロックを混入する黄灰色土の3層、炭化物層の2層、最上面に炭化物を混入する薄い灰黄褐色土の1層である。1層下部の南側に1個体分と思われる大形破片がまとまって出土しており、北側には長楕円形の礫が散在的ながら数点出土している。また、埋土の2層にも土師器の破片と礫若干が認められた。このことから土坑構築以後、埋土3層が形成され、さらに炭化物と土器が廃棄されたと思われる。出土した土師器は1740gあり、口縁部遺存はBである。なお、1層でまとまって出土した土器は本来は完形であったが、S D2001構築の際に削平された可能性もあるので、本来の遺存度はより高かった可能性がある。出土土器や炭化物の存在から古墳の所産と推定される。性格は不明であるが、底面の円筒形の落ち込みを重視すれば柱穴跡の可能性もある。しかし、平面形態や周囲に類似遺構が見られないことからすれば、積極的に断定できない。

**S K 2744** ⑦-2区 IVAF18・AG18 (第108図、P L18)

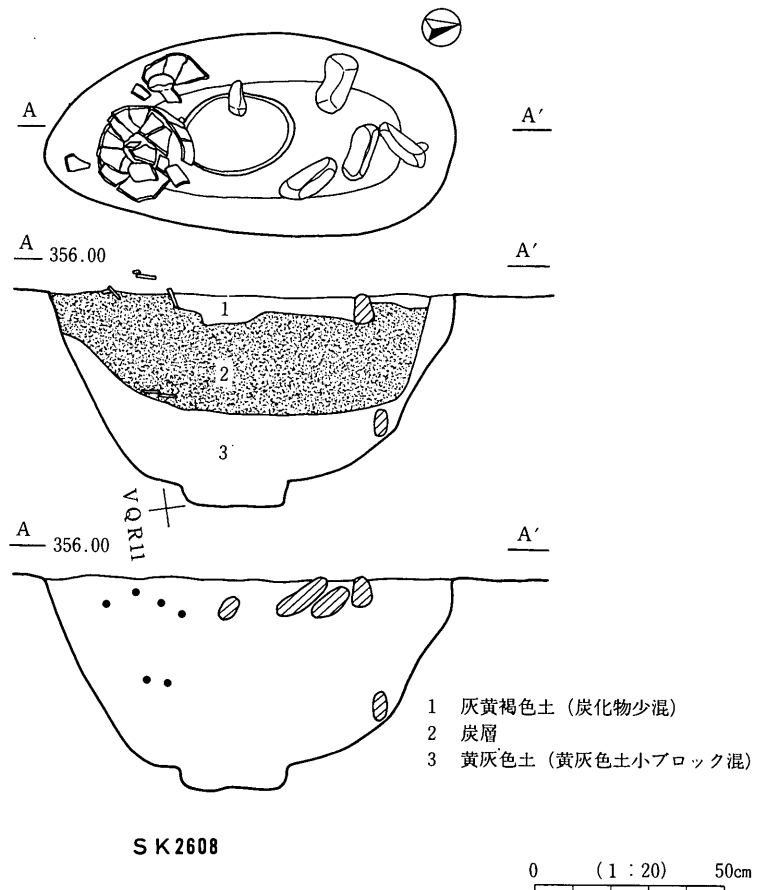
S D1016区画内の南西部、西よりに位置する。S K2827とは上端部が接するが明確な切り合いとは認められなかった。平面形は長軸194cm、短軸68cmの長楕円形を呈し、断面形は底面が細くなる逆台形を呈する。

検出面から底面までの深さは84cmを測る。

埋土は3層にわけられ、底面上には灰色粘性土の3層、中位下半には灰色粘土ブロックを混入する黒褐色土の2層、上半には多量の炭化物と焼土ブロックを含む黒褐色土の1層がある。

出土遺物は土師器8600g、高坏転用羽口?、ミニチュア土器1点、種子(モモ核多数・オニグルミ13点・モミ少量)、焼けた獣骨細片(種・部位不明、一部加工品含む)若干がある。土器は埋土1層下部から2層にかけて礫若干とともに出土し、口縁部遺存度区分はCである。本土坑は出土遺物や炭化物・焼土を含む特徴から古墳時代の所産と推定される。深さからは井戸跡とも思われるが平面形が幅の狭い長楕円形であるため、井戸跡としなかった。

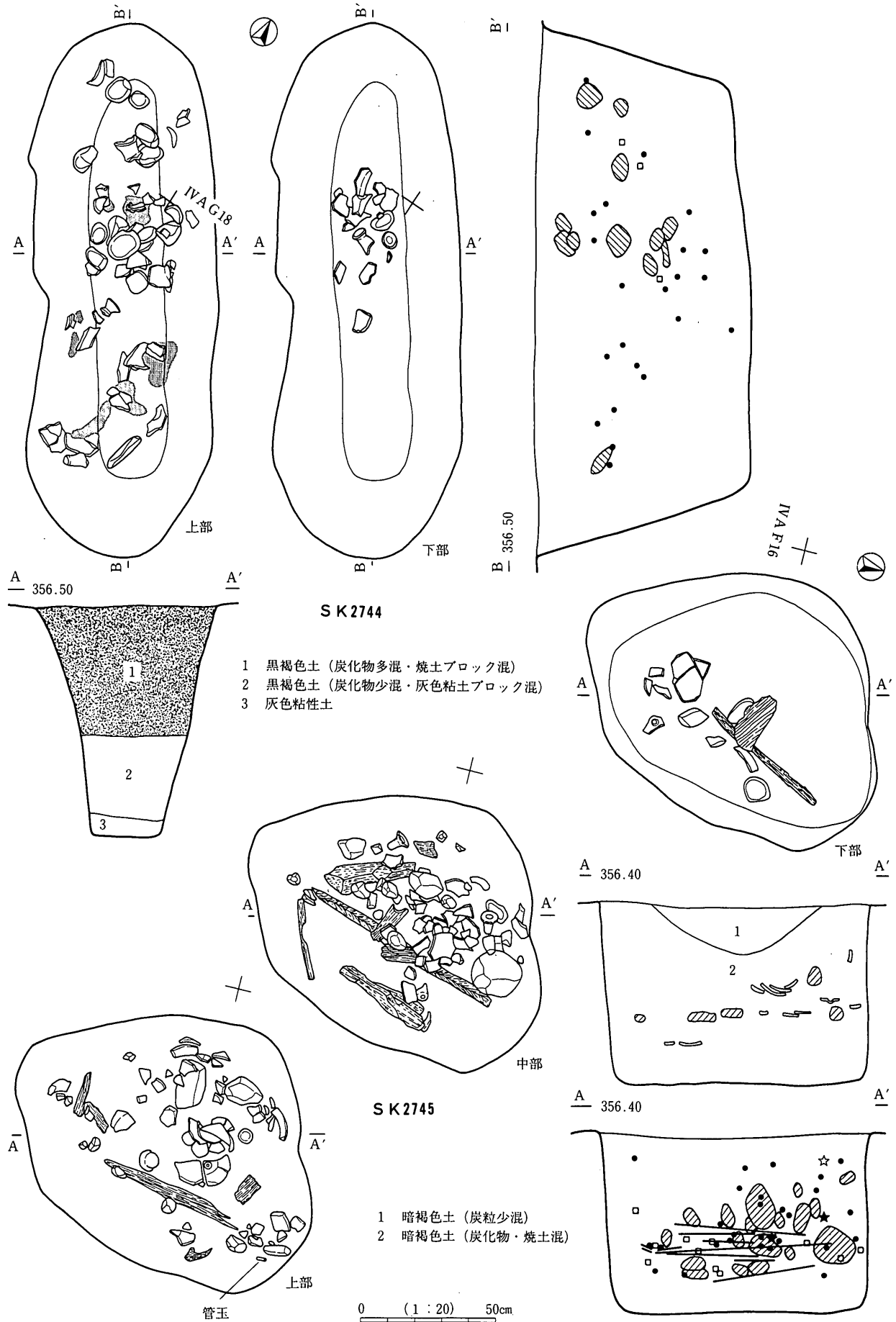
なお、本土坑は土坑構築から3・2層が堆積し、その後に集中的に土器と炭化物が廃棄されたと思われる。周辺の類似土坑にS K2751がある。



第107図 S K2608

**S K 2745** ⑦-2区 IVAF18・AG18 (第108図、P L18・19)

S D1016区画内の南西部西よりに位置し、S D2015を切る。S K2832との関係は調査ミスで不明である。平面形は長軸124cm、短軸94cmの不整楕円形を呈し、壁は垂直で底面が平坦な長方形の断面形である。検出面から底面までの深さは68cmを測る。埋土は2層に分けられ、上層に薄い黒褐色土、下層に大部分を占める炭化物焼土粒を含む暗褐色土がある。遺物のほとんどが2層から出土し、底面から若干浮いた埋土下部



第108図 SK2744・2745

に礫と共に土器・木材が集中して出土している。出土遺物には土師器8370gと高坏転用羽口?、土錘、材、種子(モミ少量)・焼けた獣骨細片多数(種・部位不明)がある。土器は破片で出土したものが多く、接合後の口縁部遺存度区分はCである。したがって、本土坑へは略完形・完形が破片として廃棄されたと推測され、しかもそれは焼土や炭化物の廃棄と前後すると思われる。なお、土器は底面から若干浮いたところに集中しているが、埋土は分層できておらずあまり時間差はないと考えられる。また、礫が土器とほぼ同じ高さで集中することからは意図的な廃棄で、埋め戻しされている可能性がある。材は棒状を呈するが、加工痕は認められない割り材状のものである。深さが井戸跡基準に若干足りないため井戸跡とは断定しなかったが、その可能性は残される。

#### S K 2747 ⑦-2区 IVAD14・AE14 (第109図、P L 19)

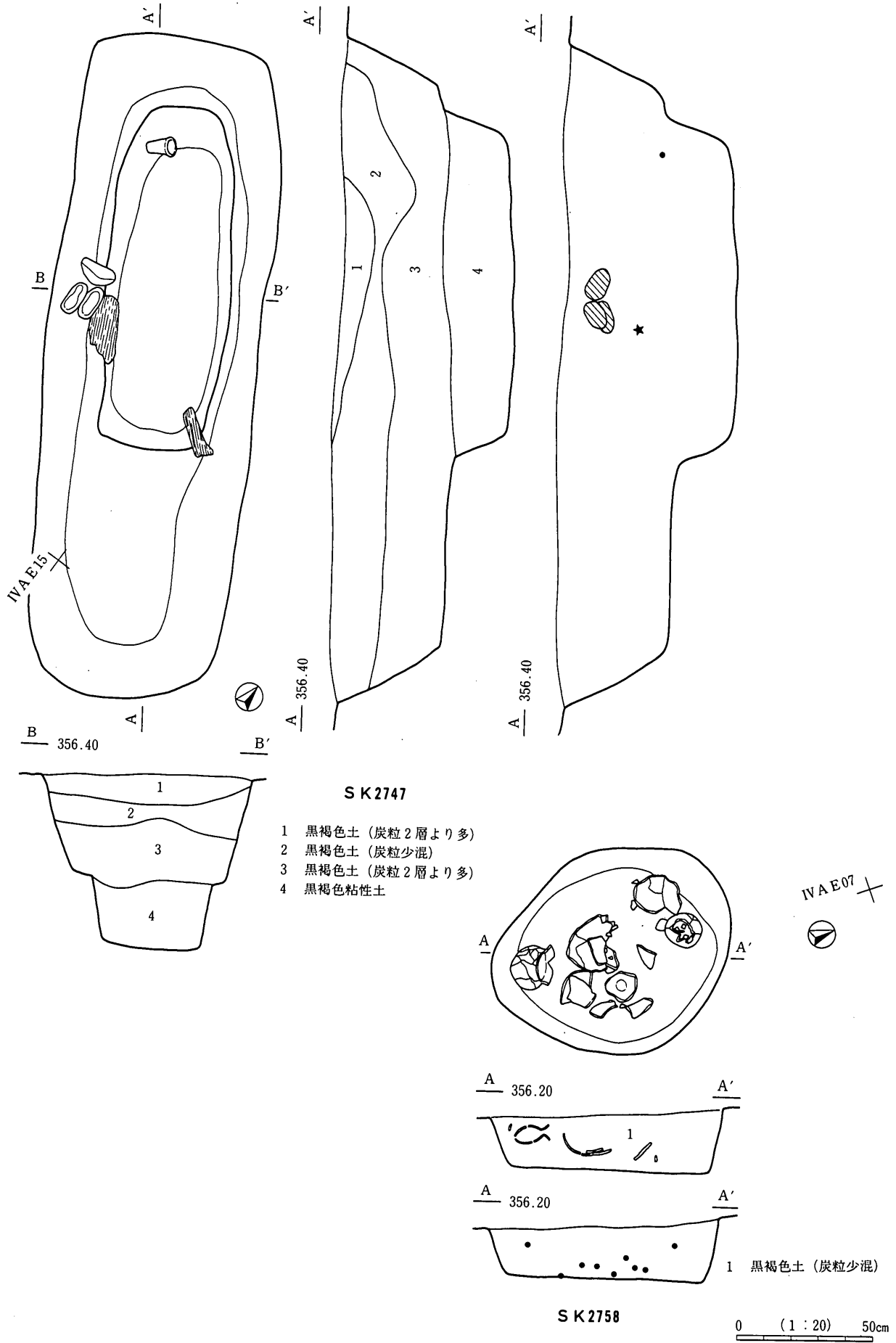
S D 1016区画内の南西部西よりに位置し、S D 2014を切る。平面形は長軸238cm、短軸78cmの細長い隅丸長方形を呈し、断面形は検出面から40cmほど掘り込んだところで一旦平坦面を形成し、北側がさらに長軸124cm、短軸48cmの長方形に深さ22cmほどの規模で2段に掘り込まれる。検出面から最も深いところで62cmを測る。この底面上の長方形の掘り込みは土坑平面形と一致しており、切り合いではなく同時に構築されたとと思われる。しかし、その意味は明確にできなかった。埋土は4層にわけられ、下から底面の長方形落ち込み内に入る黒褐色の粘質土の4層、炭化物を2層よりも多く含む黒褐色土層の3層、炭化物を少量含む黒褐色土層の2層、炭化物が2層より多い黒褐色土の1層である。あまり顕著な炭化物の廃棄は認められず、土器も散在的である。出土遺物は非常に少なく、土師器810g、礫若干と材、種子(モミ少量・メロン類1点)、焼けた獣骨細片(種・部位不明)が若干、骨鏃1点が出土した。本土坑は埋土の特長と形態から明らかに古墳時代の所産と断定できると思われるが、形状は本遺跡内でも例をみない特異なもので、性格は不明である。なお、周辺の平面形のみ類似する土坑にはS K 2744・2751がある。

#### S K 2748 ⑦-2区 IVAD11・12、AE12 (第110図、P L 19)

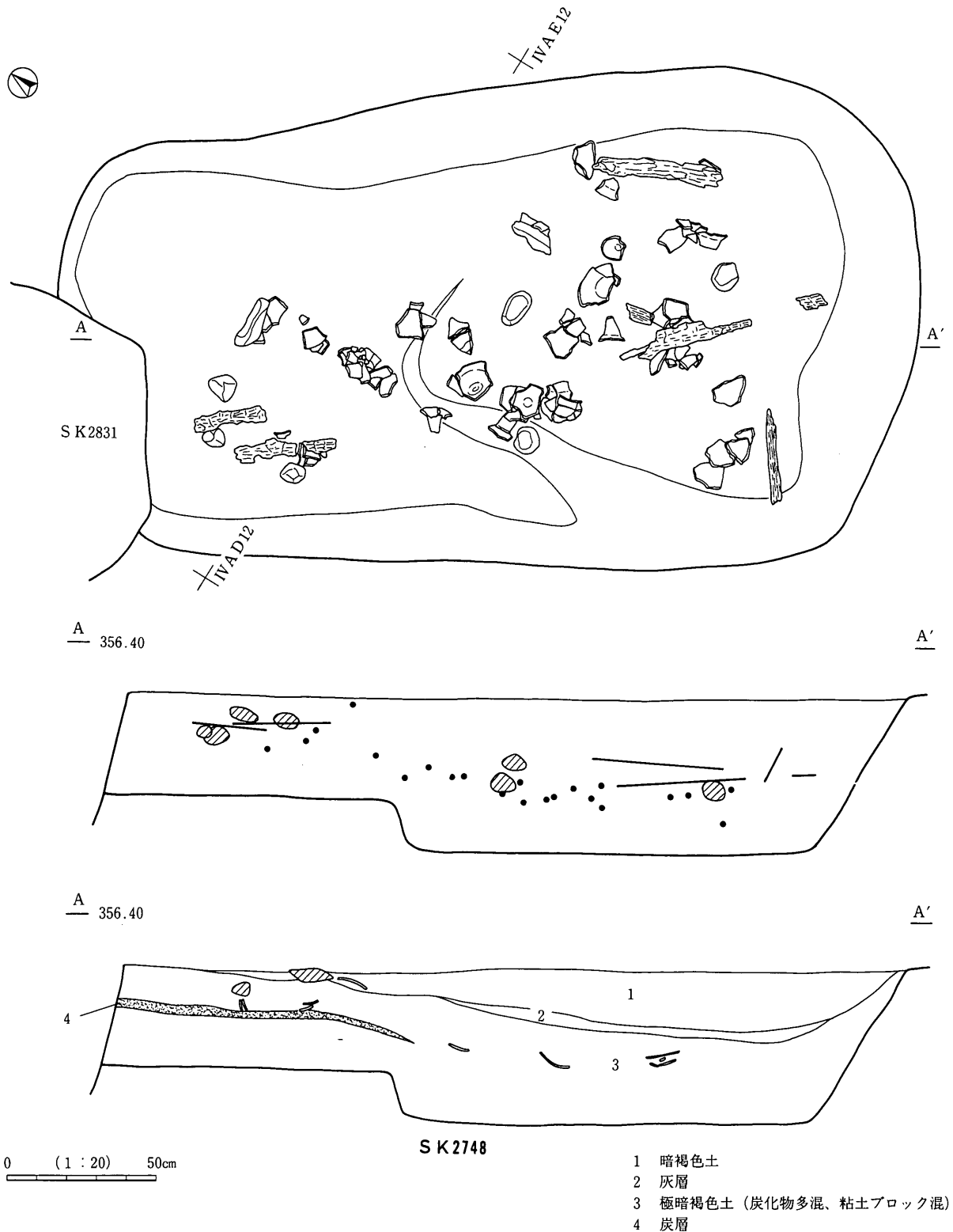
S D 1016区画内の南西部西よりに位置する。北側のわずかな部分をS K 2831に切られ、上部を中世の柱穴跡S K 2792・2793・2748が切っている。平面形は長軸284cm、短軸162cmの隅丸長方形を呈する。底面は南側が一段深く掘り込まれて段を形成し、底面の最も深い部分から検出面までの深さは52cmを測る。埋土は4層に分層され、底面上から多くの炭化物と焼粘土塊を含む黒褐色土の3層、3層中の西側に入る薄い炭層の4層、3層上にある黒褐色土の灰層の2層、炭化物焼土粒子を若干含む暗褐色土の1層である。出土遺物は土師器9510g、ミニチュア土器1点、材、種子(モミ僅か・モモ核7個)、焼けた獣骨細片(種・部位不明)若干がある。土師器や材の多くは3層中位の炭化物層に前後する高さに集中して出土している。材は土坑と同じ軸方向に並ぶものが多く、土師器は破片ながら土坑の中央部周辺で多く検出されている。出土土師器の口縁部の遺存度区分Cである。土器の出土レベルは炭化物層に前後する段階と思われるが、3層に炭化物粒や焼土ブロックが見られる点からすれば3層の形成が短期であったと思われ、埋め戻しの途中のある段階で土器や炭化物が廃棄されたと考えられる。一方で3層の炭化物や焼土ブロックが周囲に散在していたものとすれば、土坑構築以後に3層が形成され、その後に土器や炭化物が廃棄されたことになる。いずれにしろ、埋土の時間差を明らかにできなかったので断定できないが、堆積状態からは一定の埋土形成後に土器が廃棄されたと捉えられる。

#### S K 2751 ⑦-2区 IVAJ17、AK17 (第111図、P L 20)

S D 1016区画内の南西部の南端に位置し、中世のS D 1008に半分削平されている。平面形は子細不明であるが、長軸は206cm、短軸は残存部で80cmを測り、長楕円形を呈すると思われる。断面形は壁の立ち上がりが緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは58cmを測る。埋土は上下2層に分層され、下半部には炭化物を若干含み、粘土がブロック状に入る黒褐色土の2層、上部に炭化物を多く含む暗褐色土の1層があ



第109図 SK2747・2758



第110図 SK2748

る。出土遺物は土師器7245g、羽口、少量の種子(オニグルミ30点)、焼けた獣骨細片(種・部位不明、一部歯片含む)、骨鏃1点がある。土師器は1層と2層の境前後から多数出土しており、破片が全体に散在して出土している。口縁部遺存度区分はCに分類された。なお、SD1008に半分削平されているため、本来の土器出土量は上記の数字を大きく上回るとされる。本土坑は大量の炭化物・土師器の出土が上層に集中し、土坑構築以後に2層が形成され、さらにそこへ炭化物と土器が廃棄されたと思われる。2層はブロック土を含むことから埋め戻された可能性があるが、断定はできなかった。また、土師器が破片出土であ

ることから破片の廃棄もしくは、廃棄時に破片になったものと思われる。

**S K 2758** ⑦-2区 IVAD07・AE07 (第109図、P L 21)

S D 1016区画内の南西部に位置し、隣接してS K 2648がある。平面形は長軸92cm、短軸75cmの不整円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは24cm前後を測る。埋土は炭化物を少量含む黒褐色土の単層である。出土遺物は土師器3450gと種子（モミ僅か）があり、埋土下部を中心に略完形の甕や大型の破片が出土している。口縁部の遺存度区分はCである。出土遺物からも古墳時代の所産と思われるが、性格は不明である。土坑が浅く単層であるため、土坑へ土器のみが廃棄されたと捉えた。

**S K 2831** ⑦-2区 IVAC12、AD12 (第112図、P L 22)

S D 1016区画内の南西部に位置し、S K 2748を切り、中世の柱穴S K 2800に切られる。平面形は長軸180cm、短軸100cmの楕円形を呈し、断面形は検出面から30cm掘り込んだところで一旦テラスを形成し、中央部で長軸146cm、短軸74cmの楕円形に2段に掘り込まれる。検出面から底面までの深さは63cmを測る。埋土は上下2層に分かれ、上部にはレンズ状に入る炭化物粒子若干を含む暗褐色土、下部の主体は炭化物粒子を若干、ブロック土を含む黒褐色土が占める。出土遺物は土師器6410gと材、種子（モミ僅少、他に種不明若干）、焼けた獣骨細片（種・部位不明）若干がある。土器や材は検出面から30cmほど下にあるテラスとほぼ同じ高さの2層中に多く集中する。破片の出土ながら接合作業後では口縁部の遺存度区分はCとなった。また、材は加工されたものではなく割り材状のものが多く、本土坑は顕著な炭化物層は認められておらず、土坑構築から一定の埋土が形成され、埋土中位へ集中的に礫や材、土器片が廃棄されたものと捉えた。

**S K 2832** ⑦-2区 IVAF15 (第112図、P L 22)

S D 1016区画内の南西部に位置し、S K 2745と接するように重複するが、切りあい関係は調査ミスで不明である。平面形は長軸128cm、短軸86cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは40cmを測る。埋土は炭化物や焼土粒を少量含む黒褐色土の単層で、所々に焼土のブロックがみられる。出土遺物には土師器1640gや高坏転用羽口？、材、種子（モミ多数・モモ核1点・メロン類10点・ブドウ4点・カナムグラ1点・サンショウ1点・ミズキ1点）、焼・生獣骨細片（種・部位不明）若干がある。土器や材はほとんどが埋土上部からの出土である。土師器は破片で散在的に出土したが、接合後の口縁部遺存度の区分はCとなった。材は柄もしくは形代である。土坑構築から一定の埋土が形成され、そこへ土器を廃棄したと思われるが、あまり時間差はないかもしれない。

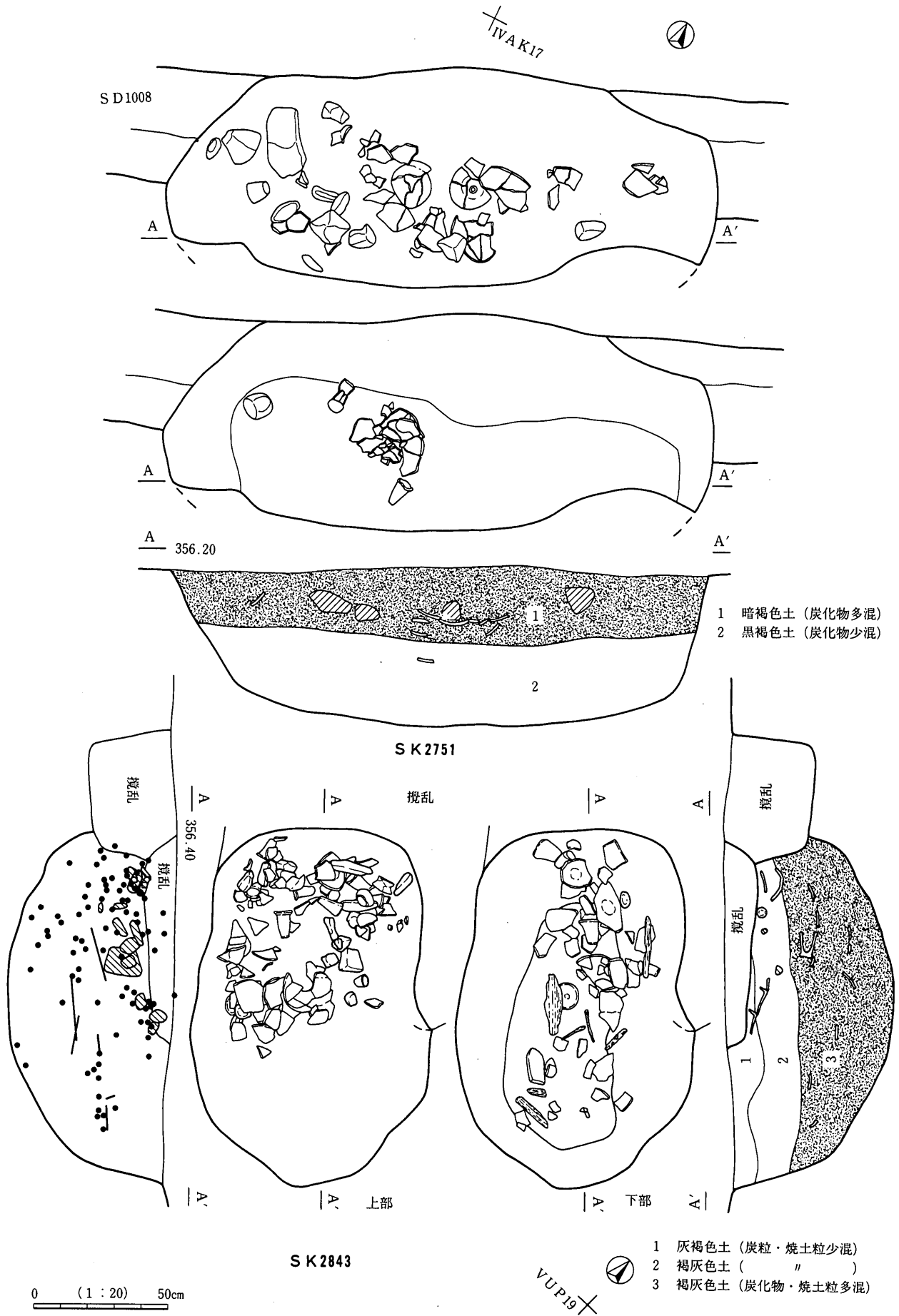
**S K 2843** 県道下 VUO18・19 (第111図、P L 22)

S D 1016区画内の南西部の北東よりに位置し、県道下部分の追加調査で検出された。北西上部が現代の攪乱で乱されているが、土坑の中位以下は残存していた。平面形は長軸132cm、短軸90cmの楕円形を呈し、断面形は壁の立ち上がりが緩やかなU字状である。検出面からの深さは62cmを測る。埋土は3層にわけられ、下から埋土の主体を占める炭化物や焼土粒を多く含む褐灰色土の3層、中位に3層よりやや色調が暗い褐灰色土の2層、上面に灰黄褐色の1層がある。出土遺物には土師器破片7285gと僅かな材、種子（モミ1点・ブドウ1点）、白玉1点が得られている。土師器は集中しながらもほとんどが1～3層にかけて破片で出土し、接合作業の結果では口縁部遺存度区分はCであった。材は割り材と思われるもので小破片が3層から散在的に出土した。本土坑は土坑構築からあまり時間を経ないで炭化物と土器が廃棄されたとと思われる。また、1～2層からも土器が出土しているが、継続的な廃棄か、埋土自体が短期の所産かは明らかにできなかった。

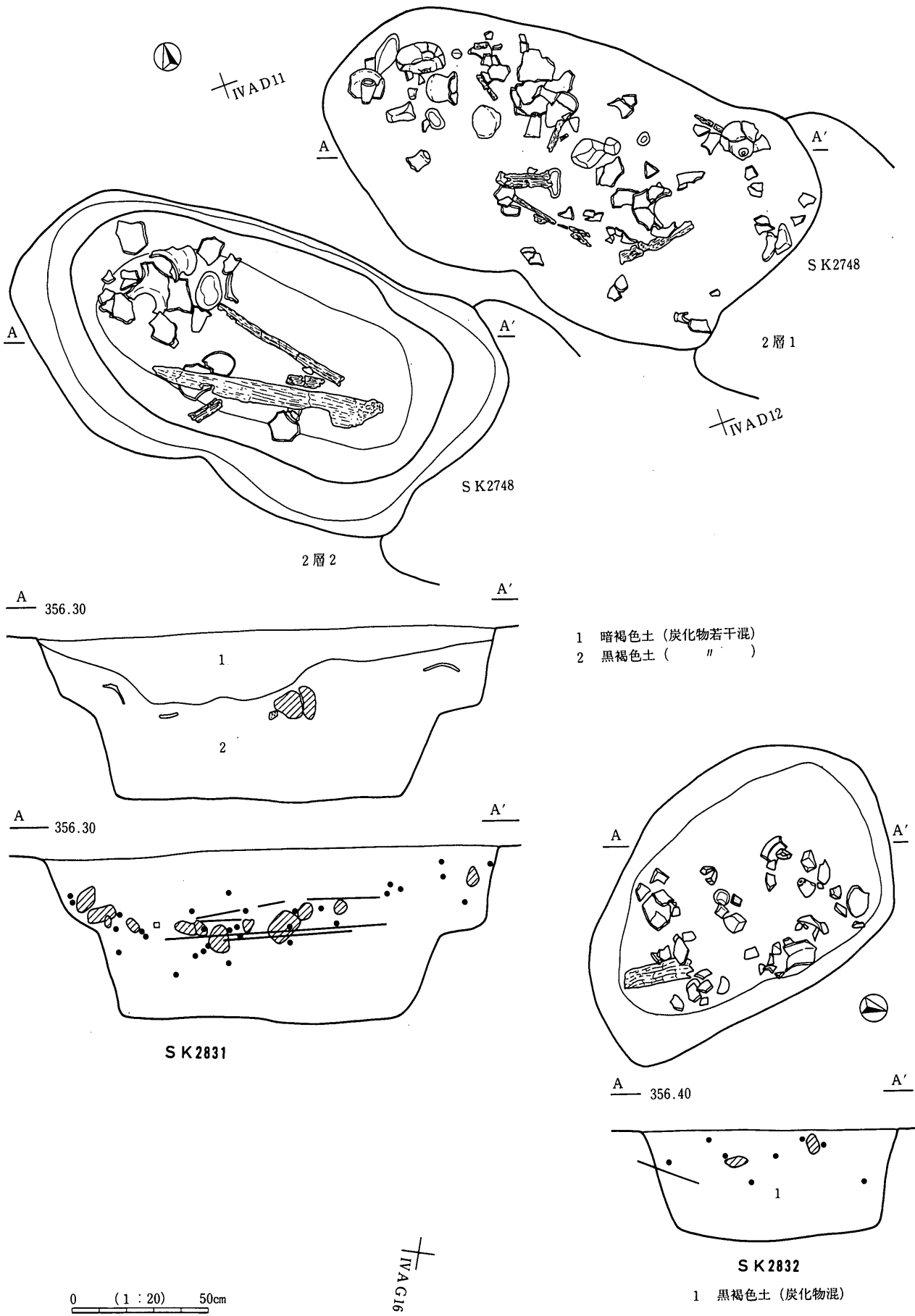
**S K 2865** ⑩-2区 VWB17 (第113図、P L 22)

S D 1016区画内の南東部の南東隅に位置する。平面形は長軸138cm、短軸108cmの不整楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは40cmを測る。埋土は5層に分層され、下から5層の黒褐色砂





第111図 SK2751・2843



第112図 SK2831・2832

質土、4層の炭化物・灰色砂質粘土ブロックを混入する黒褐色砂質土、3層の炭化物層、2層の灰白土、1層の暗褐色ブロック・炭粒を混入する黒褐色土である。このなかで1層からは拳大の礫が多数出土し、礫の間で管玉が出土した。土師器の大形破片や材は4層周辺から出土しており、土坑構築から5層が形成された後に土器・材の廃棄があり、その後炭化物層が形成、やがて最後に礫が廃棄（埋め戻し？）される順序と推測される。出土遺物には土師器4460gや材若干、他にモミ少量、焼けた獣骨細片（種・部位不明）若干、骨鏃（破片）、管玉1点がある。土器は口縁部遺存度区分はCである。

#### S K 2868 ⑩-2区 VRL13・14

S D1016区画の東外側のS Q2016南端付近に位置し、S Q2016を精査後に検出した。平面形は1辺60cm前後の方形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは32cmを測る。埋土は暗褐色土が大部分を占め、上面に炭化物を多く含む黒色土が薄く載る。出土遺物には土師器660gがあるが、埋土の中央からは略完形の小型の壺が出土し、口縁部の遺存度区分はCである。土器は埋納で、上部の薄い炭化物層はS Q2016起源と思われる。形状や規模は柱穴跡に類似するが、周囲に古墳時代の土坑がまったく認められず、単独で存在することから柱穴跡とは断定できない。性格は不明である。

#### S K 2871 ⑩-2区 VVO03（第113図）

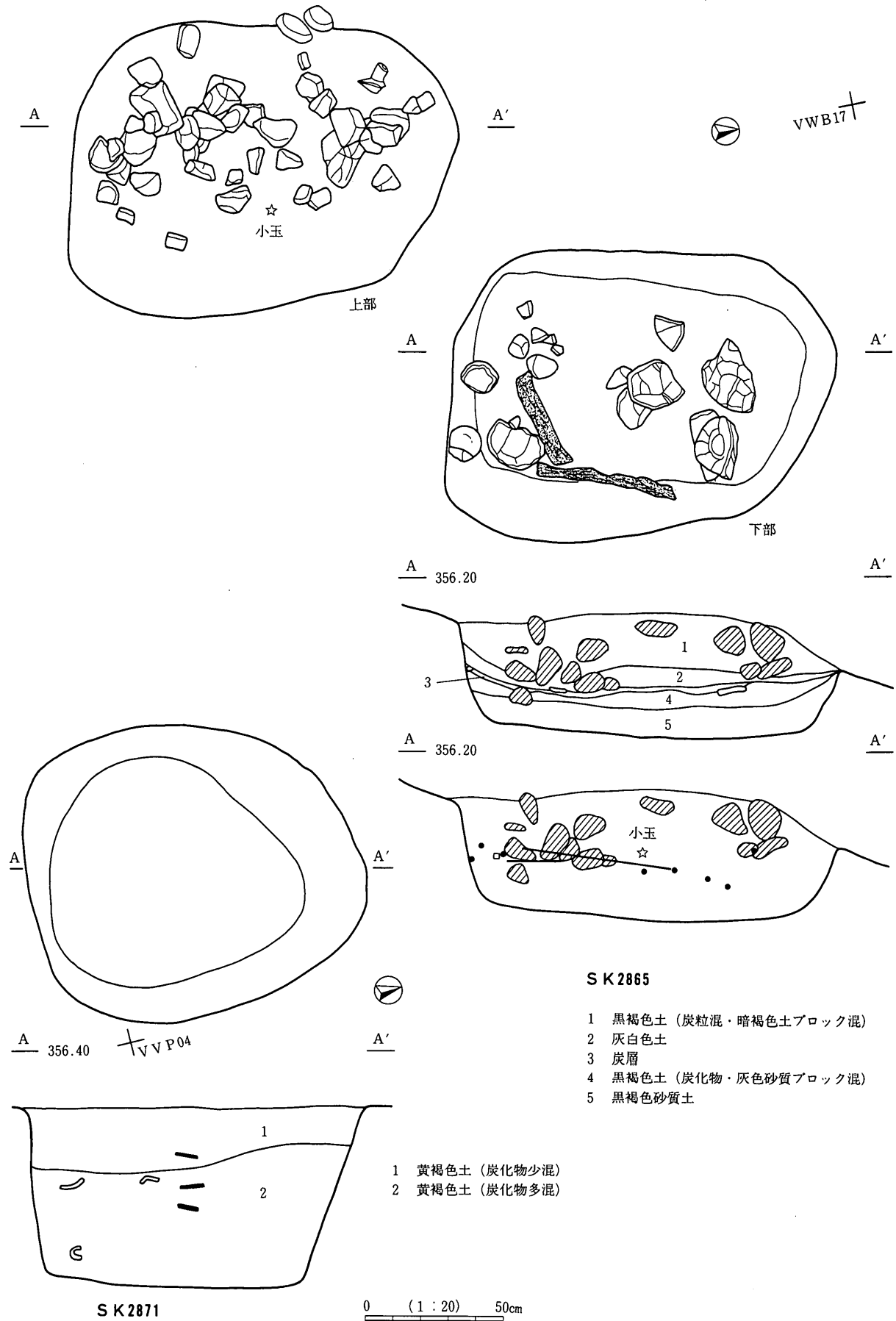
S D1016区画内南東部の東よりに位置する。平面形は長軸122cm、短軸108cmの不整楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは64cmを測る。埋土は上下2層にわけられ、上層に少量の炭化物を含む黄褐色土、下層に多量の炭化物を含む黄褐色土がある。出土遺物には土師器の破片3340gと白玉2点があり、土器の口縁部遺存度区分はCである。これらの土器は平面出土記録がなく、出土状況が不明であるが、土層図からは1～2層上部で出土しているようである。したがって、本土坑は土坑構築からあまり時間を経ずに炭化物と土器が廃棄された可能性がある。形態的には井戸跡に類するが、あまり深くないため断定はできなかった。

#### S K 2874 ⑩-2区 VVN05（第114図、P L23）

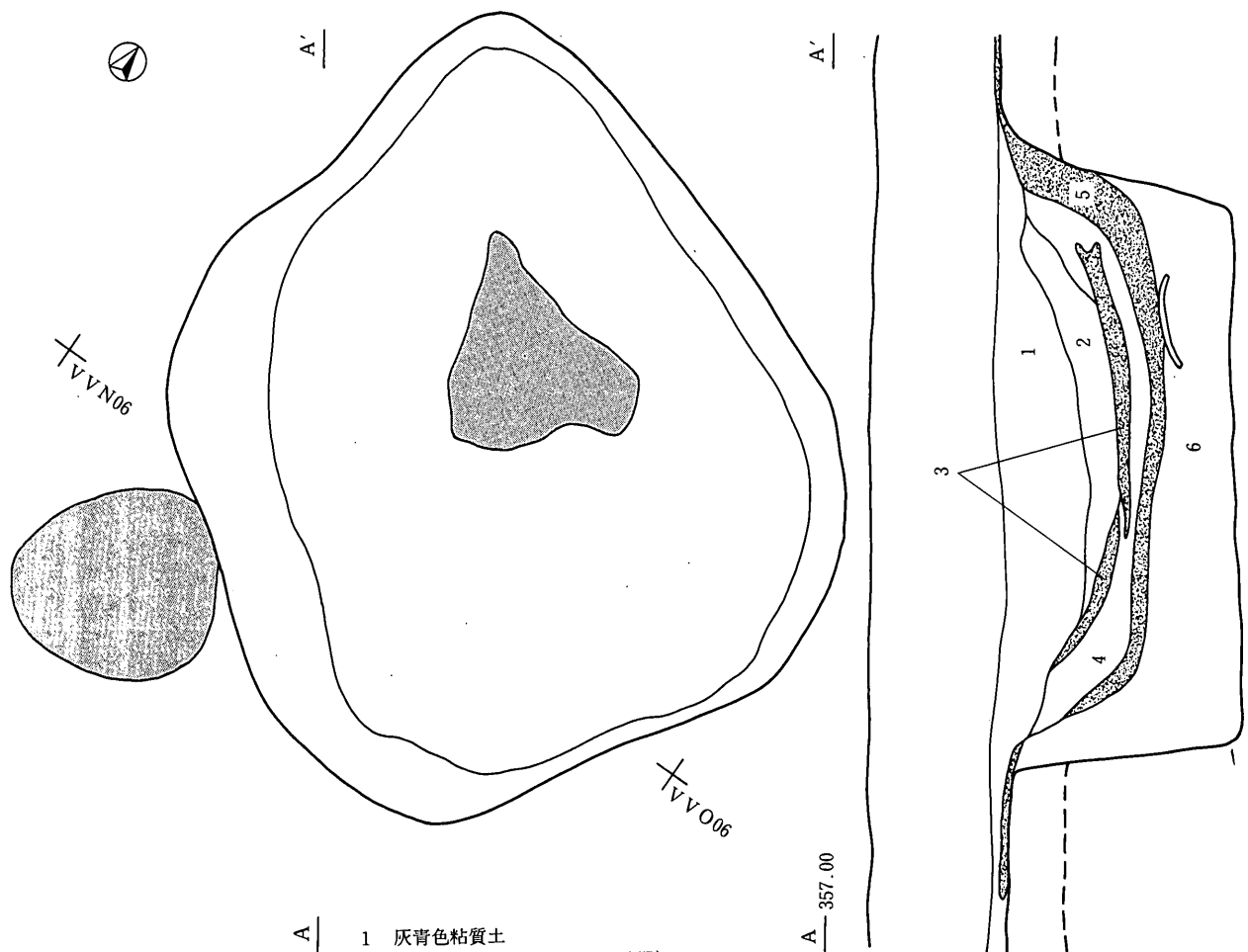
S D1016区画内南東部の東よりに位置する。平面形は東西192cm、南北170cmの不整形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは60cmを測る。埋土は6層にわけられ、下から6層の炭化物・焼土を比較的多く含む暗褐色粘質土、5層の炭化物層、4層の6層と同質層、3層の炭化物と焼土に若干の土を含む混土炭層、2層の炭化物焼土粒子を含む褐色粘質土、1層の若干の炭化物を含む灰青色粘質土である。この土坑で注目されるのは5層の炭化物層が土坑外に水平に延びていることが観察されたことである。このことから、本土坑周辺では古墳時代の生活面が残存し、それは検出面より15cm前後上面にあたることが判明した。また、この土坑に近接して焼土跡が確認されたことから、土坑埋土の炭化物層が土坑周辺で火を焚いた後に土坑内へ入った可能性も窺えた。埋土の4層までと焼土・炭化物を含む2層との間には間層が認められており、炭化物などの混じりが少ないことからこれはブロック土のような存在で、2層との間にあまり時間差がない可能性がある。出土遺物は土師器の破片10325g、ミニチュア土器1点、土錘1点があり、3～5層前後に集中する。口縁部遺存度区分はCである。本土坑は土坑構築後、6層が形成され、その後、炭化物と土器が廃棄されたと思われる。そして、さらに炭化物が入り込んだと思われる。なお、3層前後の埋土中央で焼土塊が検出された。

#### S K 2878 ⑩-2区 VVP04（第115図、P L23）

S D1016区画内南東部の東よりに位置し、上面をS D2019に切られる。平面形は長軸152cm、短軸96cmの不整楕円形を呈するが、長軸114cm、短軸96cmの楕円形の平面形の北東部が三角形状に突出する形態にもみえる。断面形は北東部の突出する部分がテラス状に浅く、南西側が逆台形状に深くなる。検出面から底面までの深さは76cm、テラス状になる部分は30cm前後を測る。埋土は3層にわけられ、下から炭化物層とな

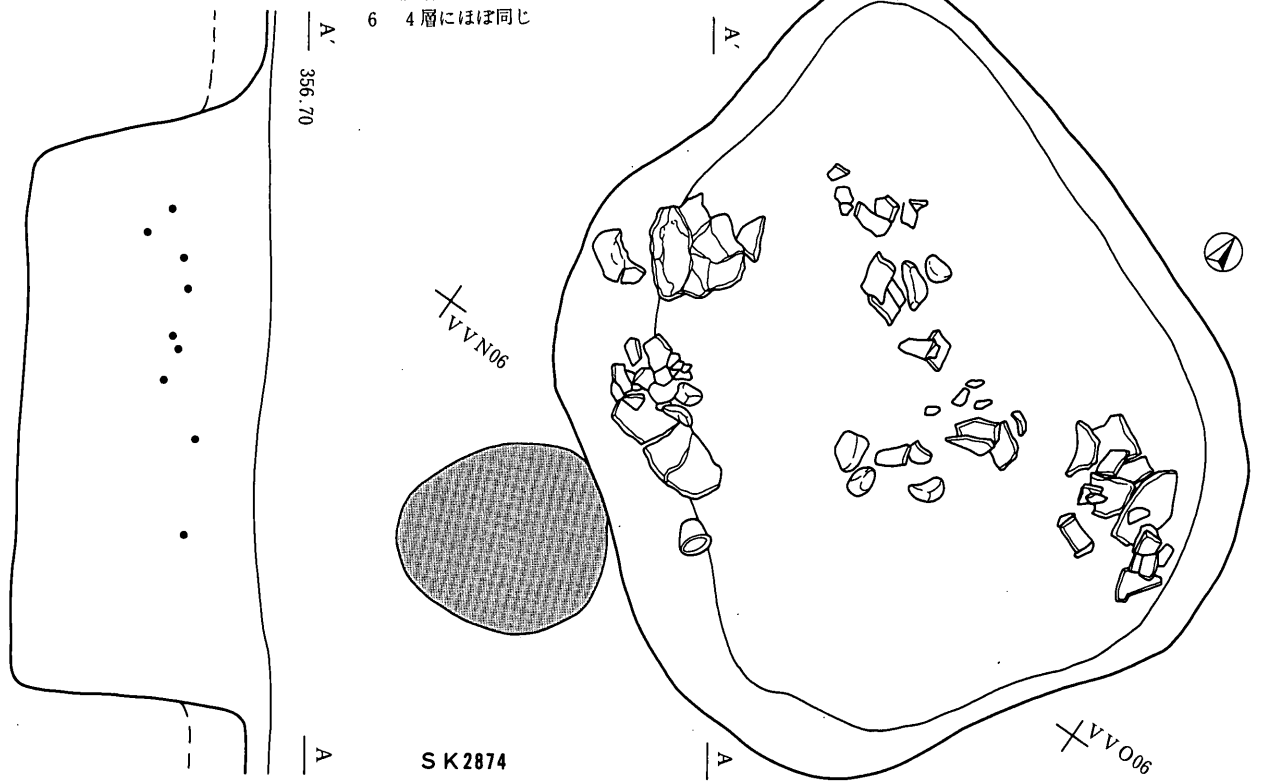


第113図 SK2865・2871



- 1 灰青色粘質土
- 2 褐色粘質土 (炭化物・焼土粒混)
- 3 炭化物・焼土に若干の土を含む混土炭層
- 4 暗褐色粘質土 (炭化物・焼土ブロック多混)
- 5 炭層
- 6 4層にはほぼ同じ

0 (1:20) 50cm



第114図 S K2874

る3層、炭化物が若干混じる黒褐色土の2層、炭化材が下部に入る暗褐色土である。このなかで土器は1層下部の炭化材上面からと3層から出土している。出土遺物には土師器破片10100g、石釧1点、馬歯片1点がある。土師器は口縁部遺存度区分はCであり、1層では破片が多く散在的であるが、3層では破片ながら中央部に比較的集中する。また、1層から出土した滑石製の石釧はSD1016出土のものと接合した。なお、本土坑出土の馬歯片は上層からの出土であり、本跡の上面に重複する礫集中とされた古代のSD2019の所産である可能性がある。本土坑は廃棄土坑と思われ、構築されて間もなく炭化物と土師器破片が廃棄され、その上に黒褐色土、炭化材と土器破片が入った可能性がある。ただし、1層と3層との時間差は不明である。

#### SK2879 ⑩-2区 VVO04・05 (第115図、PL23)

SD1016区画内南東部の東よりに位置する。平面形は長軸114cm、短軸74cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは68cmを測る。埋土は4層にわけられ、下から黒褐色土の4層、暗褐色土の3層、黒褐色土の2層、褐色土ブロックを混入する暗褐色土の1層である。これらの埋土には全体的に炭化物が若干含まれる。出土遺物は土師器破片1195g、帰属が判然としないが本土坑出土と思われる焼けた獣骨細片僅少がある。土師器は上下の土層を問わず礫と共に散在的に出土している。口縁部の遺存度区分はCとなった。

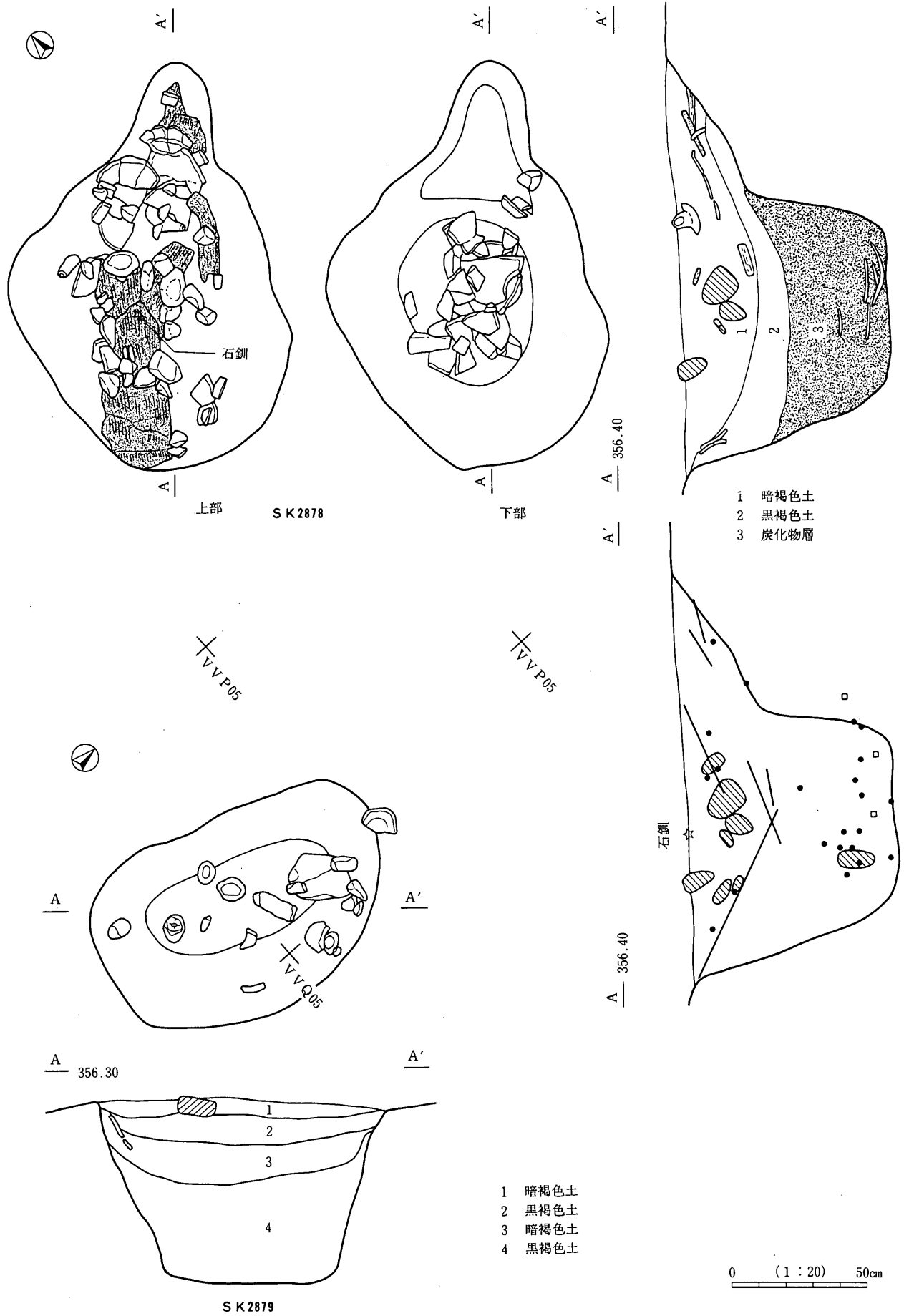
### 3 溝跡

微高地域中央部で検出された古墳時代の溝跡には特殊遺構群を構成するSD1016・1007と、詳細な時期は不明ながらそれに先行する可能性があるSD2014・2015・1059～1061・2022がある。SD1016は本遺跡中心部の土坑群を取り巻く大規模な溝跡であり、SD1007はその西側にはほぼ平行して位置する。それに対して、SD2014・2015・1059～1061・2022は位置が全く異なり、一部はSD1016・1007と切り合う。このなかでSD2014とSD2015は微高地上の南側を直線的に平行して走り、SD1016南西部脇で一旦立ち上がる。その立ち上がったSD1016対岸延長先のほぼ対峙する位置にSD1059～1061があり、これらの溝跡はすべて関連するものと捉えた。SD2022は他の溝跡とは離れて位置し、遺構自体では直接年代を知る根拠は得られなかったが、SD2014・2015と走行方向が類似する点から関連する可能性があると考えた。上記のような溝跡の関係により、先行する可能性があるSD2014・2015・1059～1061・2022を先に取り上げ、その後にSD1007とSD1016を記述する。

#### SD2014 ⑧-1・⑦-2区 IVAD16～BB02 (第116図)

SD1016区画内南部にSD2015と平行して位置する。調査は⑧-1、⑦-2区に分割して実施し、⑦-2区では第1面で検出したが、⑧-1区では立ち上がりが第1面よりも下層にあるとされ、第2面で検出している。検出面所見の違いは⑦-2区は前年度の排土圧で上層が傷んでいたことや、⑧-1区は他の調査地区よりも検出面が高く、見逃された土坑が多数あったことから、どちらが正しいとも判断がつかない。しかし、隣接した⑧-2区で関連すると思われるSD2015の検出状況からすると、第1面で検出される遺構と思われる。他遺構との切りあいはSK2101・2118・2189・2218・2323・2430・2431・2747に切られ、本溝跡が切る遺構はない。なお、西端は⑦-2区のSD1016脇で一旦立ち上がるが、その延長先のSD1016対岸にあるSD1059、平行して位置するSD2015は本溝跡に関連すると思われる。

溝跡はN-56° - E方向に直線的に走り、西端は⑦-2区のSD1016と隣接するSD1008脇付近で立ち上がる。東端は⑧-1区調査区東壁までしか確認されていないが、⑧-1区と⑧-2区境付近で中世のSD2001に切られると思われる。その延長先は⑩-1区では検出されていないので⑧-2区内のSD1016区画内で収束すると思われる。調査で確認できた長さは約45.6mである。幅は約90cmで一定しており、断面形はU字状で



第115図 SK2878・2879

検出面からの深さは約30cmを測る。底面は比較的平坦である。埋土は炭化物粒を含むにふい黄褐色土の単層で、出土遺物には弥生土器195g、古墳時代土師器破片2245g、磨製石鏃1点など僅かである。遺構の時期については⑧-1区では古墳時代土坑に切られ、出土遺物は弥生時代の磨製石鏃しか見られなかったことから弥生時代の所産であろうと捉えられた。その一方で⑦-2区内では、本溝跡西端の立ち上がりの中世のSD1008土橋に一致している点や立地場所が⑦-1区の微高地縁辺をめぐる古代の溝と類似する点から、古墳時代以後の所産の可能性も考えられ、調査段階では遺構年代について確定できなかった。整理段階では改めてSD2014と切り合う⑧-1区のSK2101やSK2323を検討した結果、土坑の土器出土状態からもSD2014は明らかに古墳時代の土坑に切られる所見に誤りはないと判断された。従って、少なくとも特殊遺構群が構築される以前の所産と断定されたが、上限については詳細は不明である。少量ながら土師器が出土したことから古墳時代の可能性もあるが、本溝跡を切る土坑出土土器との型式的な検討も不十分で断定はできない。

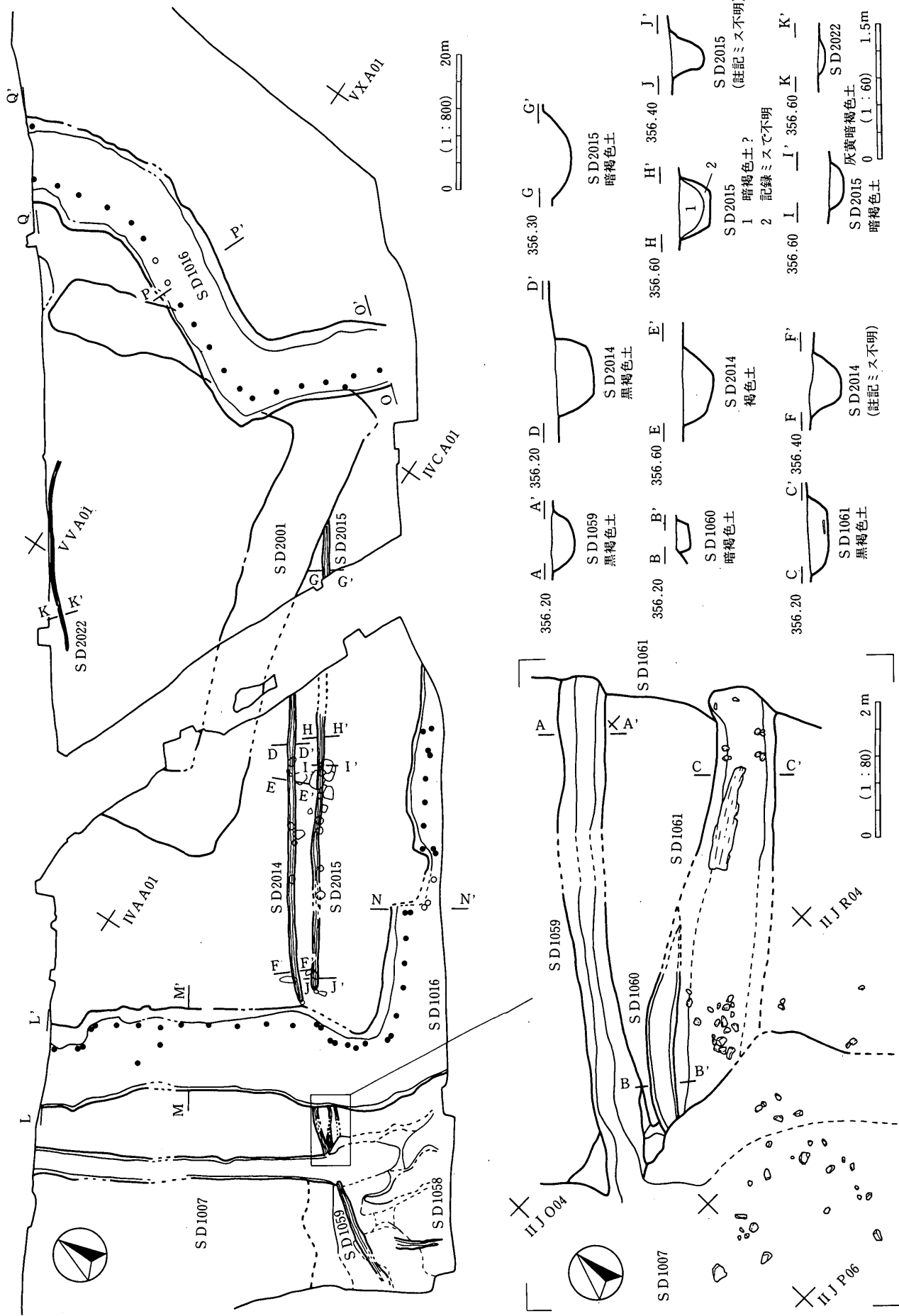
溝跡の性格は不明であるが、走行方向が直線的で、微高地域に設定されていることから何らかの区画施設と考えられる。具体的には他の溝跡との関係によって、いくつかの解釈が成り立つが、溝跡同士の関係の捉え方に不確定要素があるため詳細は不明である。本溝跡がSD1059と関連するならば、SD2015の延長に一致するSD1060・1061とSD1059が切り合う可能性があるため、本溝跡とSD2015は時期差となる。つまり、SD2014とSD2015は2本がセットでは存在しない。また、類似した方向となるSD2022が関連した微高地北側の区画を示す遺構と考えるならば、SD2014・2015と一体で何らかの区画を構成するとも見れる。ただし、SD2022の時期が明らかでないことや、SD2022が浅いなどの形状の違いもあり、即断はできない。また、SD1059と連続しないならば、SD2015とは同時存在した可能性も残される。そうした場合には2本セットで機能する溝跡と捉えられる。

なお、本溝跡は古墳時代の特殊な遺構群に先行する所産ながら、中世のSD1008、SD1016と一致したあり方も認められる。まず、SD1008の南西土橋、あるいはSD1016の南西隅付近と本溝西端立ち上がり場所が一致するが、このために⑦-2区では本溝跡がSD1016、あるいはSD1008を意識したもので、古墳時代よりも後出すると考えた。しかし、SD1008はSD1016廃絶後の凹地地形をトレースしたと捉えられるので、上記の一致は微高地の地形的な制約による偶然の所産と考えられる。また、SD1016とは厳密には同じ走行方向でないが、類似した方向で直線的に走る点、さらにSD2014が設定されている範囲がSD1016区画内で収束する点は関連も想定される。ただし、SD1059と本溝跡が一連の遺構ならば上記のような関係は認められないことになり、SD1008の場合同様に地形に規定された偶然の一致であると考えられる。また、SD2014が直接連続せず一旦立ち上がる点を重視するならば、SD1016区画に先行して本溝跡に見られる土地区画が存在したとも想定できるが、これはSD1059や地形との関連の捉え方にも曖昧さがあるため断定はできない。

#### SD2015 ⑦-1・⑧-1・⑧-2区 IVAE16～BD04 (第116図)

SD1016区画内の南部にSD2014とほぼ平行して位置する。西端はSD2014同様にSD1016に隣接したSD1008脇でたちあがるが、SD1016対岸の延長先にはSD1060・1061があり、配置関係からは関連する可能性がある。調査は⑦-2区、⑧-1、⑧-2区の3地区に分割して行われた。なお、⑧-2区ではSD2020とされたが、配置位置から本溝跡の延長先と判断して本溝跡に含めた。初年度の⑧-1区ではSD2014と同様に立ち上がりは第1面より下層にあるとされ、見逃し遺構確認のための第2面で検出されたが、それ以外の地区では1面で検出されている。本溝跡もSD2014同様に調査地区ごとに検出面の所見が食い違うが、⑧-1区の検出面が他の調査地区よりも高く、第2面で見逃された古墳時代土坑が多数検出されていることを考えると、SD2014同様に検出は第1面であると考えられる。他の遺構との切り合いでは古墳時代や中





第116図 微高地域古墳時代溝跡分布とセクション図

世のSK2102・2103・2112・2187・2193・2198・2200・2212・2249・2406・2653・2695・2694・2745・2752、SD2001に切られ、SK2315・2250との関係は重複位置に調査第2面のトレンチを入れたために切りあいが直接確認できていない。しかし、他遺構との関連やこれらの土坑の検出状況からすれば、SK2315・2250が本溝を切ると推定される。形状はSD2014に平行してN-56°-E方向で直線的に走り、全体で約70mを検出した。西端は⑦-2区のSD1008土橋付近で立ち上がり、東端はSD2001に切られる。⑩区では検出されなかったのではSD1016区画内部で収束すると思われる。幅は⑧-2区でやや広く約1mを測るが、他の地点は約60cm前後である。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは約30cm前後である。位置もさることながら形状、規模もSD2014と類似している。埋土は大部分が炭化物粒を含む暗褐色土の単層である。⑧-1区や⑦-2区では出土遺物はないが、⑧-2区のSD2020とされた部分では古墳時代土師器30g出土している。

本溝跡は調査時から平行するSD2014と関連があると捉えられていたものの、SD2014同様に各地区で時期の所見が異なっていた。しかし、整理段階では本溝と切り合う⑧-1区のSK2102は古墳時代の土器を多出しており、切り合いの誤認はないと思われた。さらに、SK2102底面は明らかに本溝の上部にあることから本溝跡は古墳時代の土坑群より先行すると捉えられた。その上限については僅かながら古墳時代の土師器が出土した点から古墳時代と考えたが、量が少なく、詳細は不明である。これらのことはSD2014の所見とほぼ同様である。また、性格は不明であるが、本溝跡の様相からしてSD2014と類似したものと考えられる。

#### SD1059 ⑦-2区 IIJJ13~JQ01 (第116図)

⑦-2区の低地境西南縁辺部に位置する。東端はSD1016に切られる部分から確認され、緩やかに傾斜する地形を斜めに横断して西端は調査区外へ延びる。低地部分に残存した暗褐色土(平安時代水田耕作土相当層?)を除去したところで検出したが、検出地点が微高地寄りの浅いところに位置するため、古墳時代の基本土層は残存しておらず、その関連は不明である。本溝跡はSK1146・1147、SD1016に切られる。走行位置からするとSD1060・1061、SD1007と切り合うと思われるが、切り合う部分に第1面でトレンチを入れてしまったため、直接切り合いは確認できなかった。なお、本溝跡と関連が想定されるSD1060は後述するようにSD1007に切られると思われるので、本溝跡も同様と思われる。

調査区内で確認された長さは約27.4mで、幅は高台側がやや狭く54cmを測り、低地よりが幅広く最大128cmを測る。断面形は底面からの立ち上がりが緩やかな逆台形となり検出面からの深さは26cm程である。埋土は黒褐色土の単層で、出土遺物は古墳時代の土師器が総重量130gと弥生土器10gある。これらの土器については混入の可能性もある。本溝跡は低地で検出されたが、SD1016対岸ではほぼ延長される位置にあるSD2014は関連すると思われる。本溝の性格は明らかでないが、時期は古墳時代の微高地中央部の特殊遺構群が形成される以前の所産と思われる。

#### SD1060・1061 ⑦-2区 IIJO04~JR02 (第116図)

⑦-2区の低地境西南縁辺部に位置し、上記のSD1059に隣接する。SD1061はSD1016に切られる部分からN-51°-E方向に直線的に走る溝跡でSD1007と重複する地点で不明となる。SD1060はそのSD1061の北側に緩やかなカーブを描いて重複し、検出段階ではSD1061と同一の溝跡と思われたが、SD1061境側に立ち上がりが確認されたことやSD1061と底面の標高が異なることから別の溝跡と捉えた。この2本の溝跡はほぼ重複する位置にあることから関連した溝跡と思われ、さらにSD1016の東側延長先にあるSD2015も同様と思われる。SD1060・1061相互の関係については調査途中で2本の溝跡と判明したために直接切り合いを確認できていないが、深いSD1061の埋土が分層されていないことからSD1061が新しいと思われる。他遺構との切り合いではSD1016に東側を切られ、西端はSD1007・1059と重複すると

思われるが、切り合い関係は直接確認できていない。しかし、S D1007との関係についてはS D1060埋土中の所産と思われる礫がS D1007交差付近の底面上で散在的に検出されたので、S D1061がS D1007に切られると推測される。また、S D1059との関連はわからないが、位置関係からすると本溝の西側延長先はほぼS D1059に重なる可能性がある。

このように東西端部が不明で、確認できた長さはS D1061でも6 mほどである。断面形はS D1060が幅36cmで逆台形を呈し、検出面からの深さ17cm、S D1061は幅86cm前後で断面形は逆台形を呈し、検出面から26cmを測る。埋土はS D1060が暗褐色土、S D1061が黒褐色土の単層である。出土遺物はS D1061から土師器の破片が総重量810 g得られた。なお、S D1061では底面上で木皮状の薄い材破片と西端を中心として礫が多数検出されている。本溝跡の性格については不明であるが、遺跡内の他の溝跡との関係からはS D2015と関連すると考えられる。構築時期については調査時に⑦-1区の西側低地境で検出された古代の溝跡群との類似から古代の所産であり、S D1016に切られるようにみえるのもS D1016が凹地として残存したことによると推測したが、整理段階では上記のようにS D1016・1007に切られると判断されたことや、S D2015と対応する可能性があることから微高地域の土坑を中心とする遺構群が構築された以前の所産であると考えた。なお、上記のようにS D2015と本溝跡が関連するとするならば、本溝跡とS D1059との関係からはS D2014とS D2015は時期差となる。

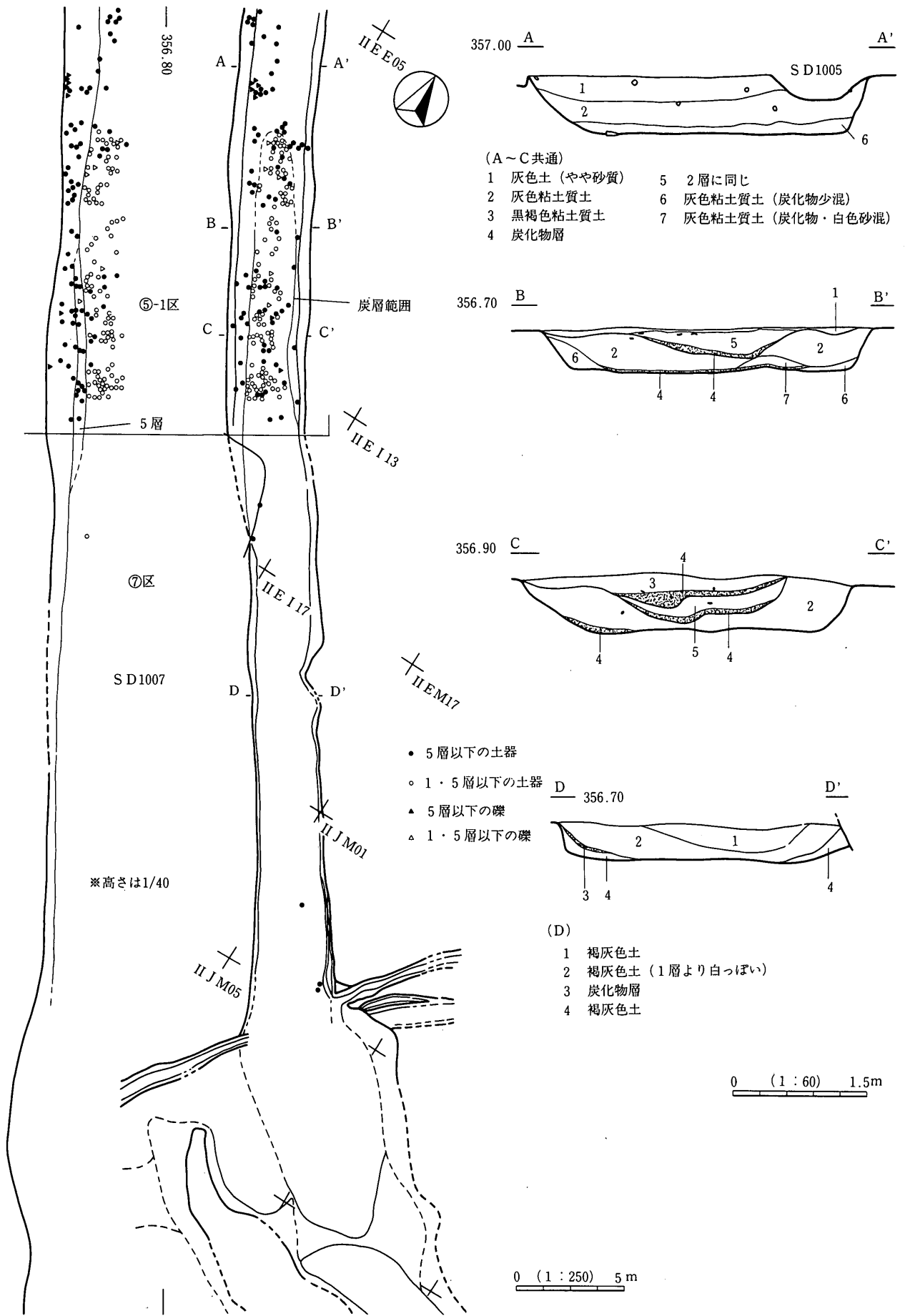
#### S D2022 ⑤-2区 VU007~QG19 (第116図)

S D1016区画内の北東部、調査区北壁際で第1面で検出された溝跡である。本溝跡は出土遺物がまったくないことなどから時期は特定できなかった。しかし、走行方向は古墳時代のものに近く、なかでもS D2014・2015に近いと思われたことや、本溝跡を切るS A2013のS K2265が古墳時代の所産と推測されたことから、消極的ながらS D2014・2015に近い時期の所産であろうと推測した。切り合いはS K2265・2159、S D2019に切られる。また、先端で検出されたS K2140との関係は不明である。溝跡の形状はN-55° - E前後の方向に若干カーブを描きながら直線的に走り、長さは約29mを測る。検出時には範囲がやや不明瞭であり、溝跡が浅いこともあって東西端部は不明瞭に立ち消える。幅は約40cm、断面形は浅い逆台形で検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層である。出土遺物はまったくない。本溝跡の性格は不明であるが、S D2014・2015と走行方向の類似からは何らかの関連も想定できる。ただし、本溝跡のみが他の溝跡とは離れて検出されていることや、溝跡自体が浅いこともあり断定は躊躇される。

#### S D1007 ⑤-1・⑦-2区IIEB07~JN06 (第117~118図、P L36)

S D1016西辺の外側に平行する溝跡で、⑤-1と⑦-2区に分割して調査した。本溝の両端とも調査区外へ延びるが、南端の⑦-2区の低地境では先端が曖昧である。切り合いは本溝がS K1004・1009・1010・1013・1086・1107・1109・1111・1112・1146、S D1005・1006・1019、S G1001に切れ、S X1001とは接するものの直接切り合いは認められなかった。また、⑦-2区の低地境でS D1059・1060・1061、S Q1004と重複し、その関係は調査ミスで直接確認できなかったが、状況証拠からはS D1059・1060・1061を切る可能性がある。S Q1004についてはS Q1004自体が単一契機の所産か不明なので、その関係は明らかでない。

本溝跡はS D1016西辺の西側に平行してN-32° - W方向に直線的に走り、調査域内では南端の低地にかかる部分まで最低約47.5mの長さを確認した。南端については東側のS D1016側の立ち上がりは明瞭に把握できたものの、西側の低地側の立ち上がりが判然としない。これは後代の耕作で破壊された可能性もあるが、本溝跡が微高地部の区画を意識したものとすると、低地内までは延長されていないとも考えられる。幅は約3.7m前後、断面形は台形を呈し、検出面からの深さは約50cm前後を測る。底面は細かな凹凸があるものの、全体的にはほぼ平坦で緩やかに東側の低地へむかって傾斜する。埋土は⑤-1区中部以南の最下層に炭層や灰色粘土、⑦-2区で黒色粘土が部分的に認められるが、全体的に埋土中層には褐灰色土が認



第117図 SD1007遺物出土分布とセクション

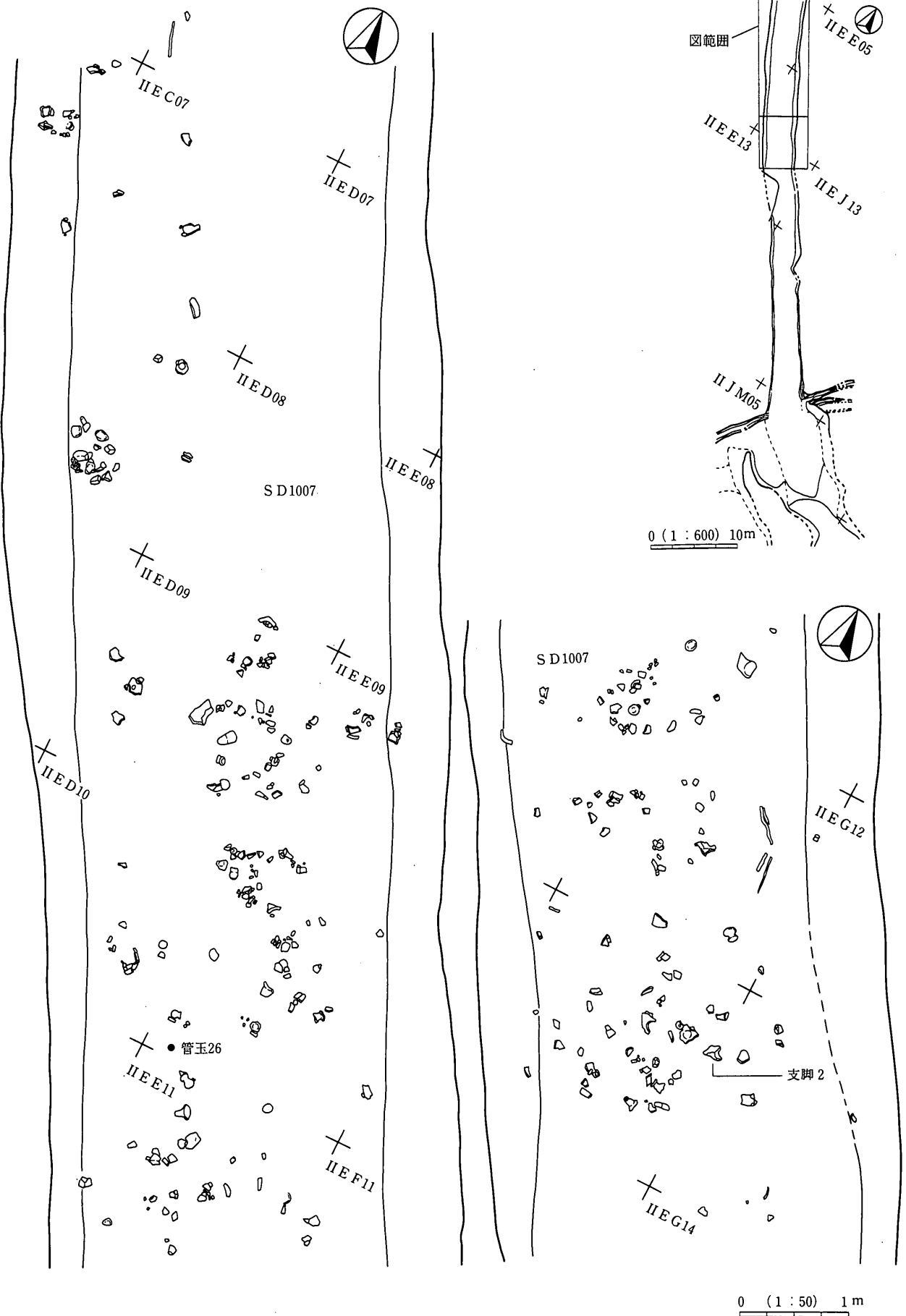
められ、その上層には⑤-1区南部から南にかけてひろがる薄い炭層がある。なお、⑤-1区内では褐灰色土を挟んで2枚の炭層が認められるところもある。最上層には灰褐色土があり、⑤-1区中央部ではこの土層上面に古代の水田耕作土に相当するとみられる暗褐色土が部分的に分布する。以上のように基本的に埋土の構成はS D1016と類似するが、S D1016最下層のような粘土層が認められず、S D1016よりは乾燥していたと思われる。また、全域が褐灰色土を基調としながらも、その間には部分的なものを含めて合計3枚の炭化物層が認められている。この内、最上層と下層の炭層は部分的なものであるが、中層の炭層は⑤-1区からそれ以南に広範囲にみつき、S D1016中層の炭層に対応する可能性がある。

出土遺物は重量73768gの土師器と材・管玉・ミニチュア土器・支脚・転用羽口の他に、混入と思われるわずかな弥生土器、古代の須恵器・灰釉陶器、中世の内耳鍋破片・銅銭・漆椀、近世陶磁器がある。古代以後の焼物や漆椀・銅銭は柱穴などの見逃し、あるいは混入によると思われる。古墳時代の土師器は本溝出土遺物の多数を占めるが、破片で接合しないものが多い。第118図は本溝内で調査時に図に記録された比較的大型の破片と思われる土器の分布であるが、⑤-1区に土器が偏在している傾向が看取される。これは⑤-1区と⑦-2区の調査時の記録する土器の選択の違いも考慮しなくてはならないが、土器の総重量をみると調査面積が大きい⑦-2区の出土土器重量は8950gに対して、調査面積の狭い⑤-1区は約44930gで土器出土重量は明らかに⑤-1区のほうが突出する。また、⑤-1区内でも中層の炭層が広がる範囲以南で多くの土器が出土しているのに対して、炭化物層のみられない北部では非常に出土がまばらである。したがって、本溝跡は完形土器の廃棄は見られないにしろ、⑤-1区内でも南部周辺に土器が偏在する傾向が指摘できる。この部分で破片が集中して出土した理由については明らかにできなかったが、この部分がS D1016区画内で通路とも推測されたライン延長上にあたることは注意される。なお、出土層位は上部の炭化物層以上から出土したものが多く、最下層からも散在的に出土している。

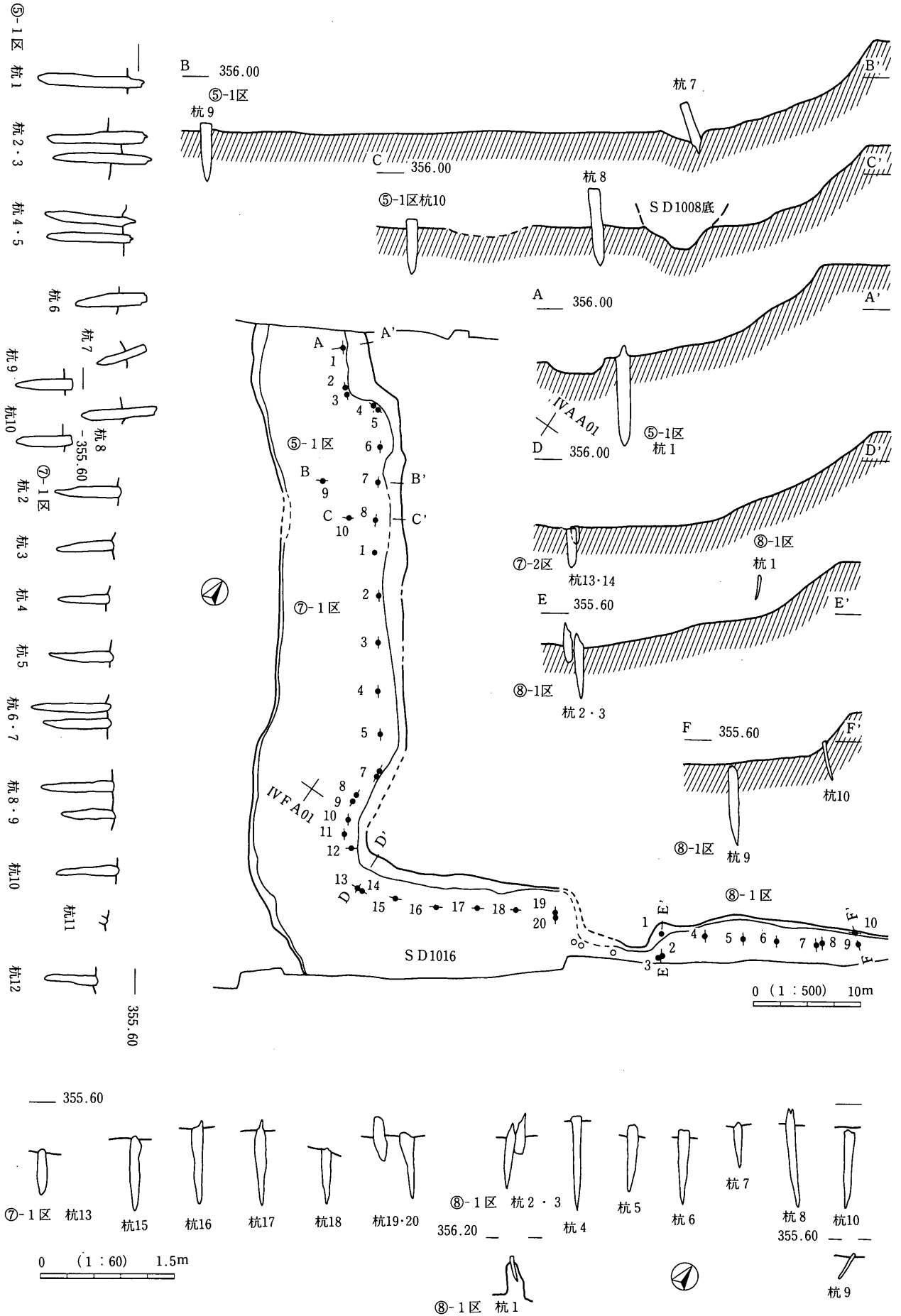
本溝跡はS D1016と平行して位置することから、古墳時代の特殊な遺構群に関連した遺構と思われる。ただし、S D1016は土坑群を取り巻いているが、本溝跡は西側のみに位置し、低地境周辺では不明瞭となってしまう。このことから本溝跡は西側に続く微高地と遺構群を区切る施設であったと推定される。特に、S D1016区画内から続く通路が西側に延長されている可能性があり、そのために西側を区切る意識が強調されているとも考えられる。なお、この通路想定ライン上では本溝を挟んで柱穴の可能性のあるS K1067・1060が対峙しており、何らかの施設を構成すると思われる。

#### S D1016 ⑤-1・⑦-2・⑧-1・⑩-1・⑤-2区 (第119図、P L24~35)

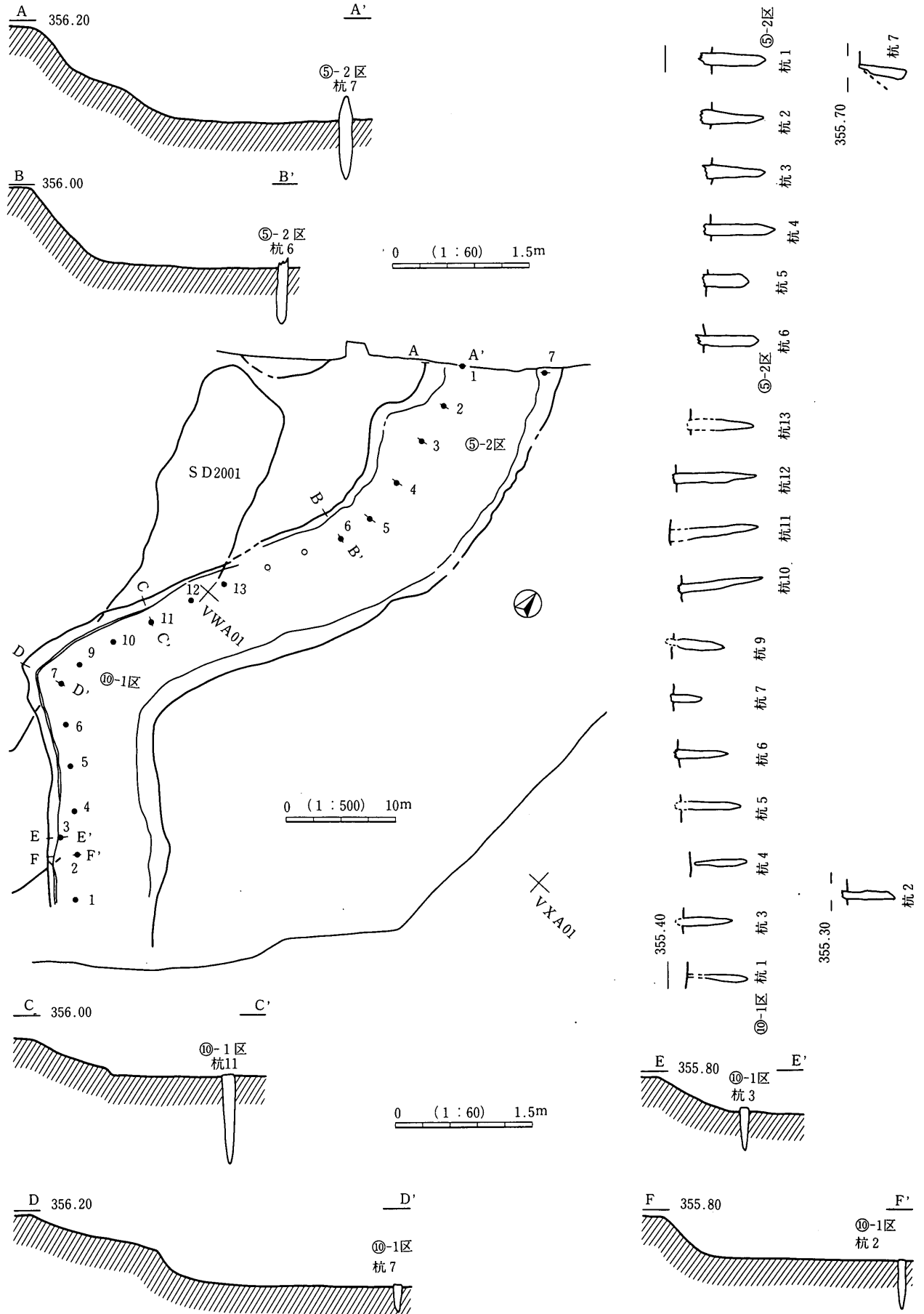
微高地中央部の土坑群を囲む大溝で、⑤-1・⑦-2・⑧-1・⑩-1・⑤-2区の5地区に分割して調査された。各地区の検出面は第1面であるが、後代まで凹地として残存したため、埋土上部には古墳時代以後の土層も認められた。切りあいはS K1039・1040・1094・2062・2626・2864・2625・2629・2627・2628・2881、S D1001・1002・1003・1008・1010・1011・1012・2007・2011・2029・2031・2036・2037・2038・2039・2040・2041に切られ、S D1059・1060・1061を切っている。これ以外では走行方向や位置からS D1007は本溝と同時存在と思われ、S D2014・2015はS D1059~1061と関連するならば、本溝跡に先行する可能性がある。調査は⑤-1区で初めて本溝跡の存在が確認され、未経験の遺構であったため試行錯誤の内に調査が進められ、所見が加わる度に調査方法も変化していった経過がある。そのため調査方法には一貫性がないうところも生じてしまった。しかし、基本的な手順は上層遺構の調査終了後に試掘溝を入れて土層を確認し、全域内でほぼ共通して認められた炭混じりの木材包含層まで重機で掘り下げ、以後は遺物出土状況の記録を取りながら精査を繰り返していくものであった。この流れのなかで調査方法が変化したのは遺物の出土状態の記録方法と取り上げ方法であった。例えば、初年度調査の⑤-1・⑧-1区では目立った主な遺物を図化して取り上げ、図化しない遺物は⑤-1区では溝の走行方向にあわせて6分割、⑧-1区では2m四方



第118図: S D1007⑤-1区遺物出土状況



第119图 S D 1016西边杭断面图



第120図 SD1016東辺杭断面図



のグリッドごとに取り上げた。また、⑤-2区では木製遺物以外は調査期間の制約があったために、図記録を取らずに一括して取り上げた。次年度の⑦-2・⑩-1区では、土器と炭化物の廃棄場所と廃棄時期の特定を課題として、主な土器の出土地点を図記録に取りながら、基本的に2 m四方のグリッドと層別に土器を取り上げることにした。しかし、⑦-2区では土層が複雑で面的にうまく把握できなかったため、層別には土器を取り上げず、⑩-1区のみ層別取り上げを実施した。なお、小玉類などの微細な遺物については⑩-1区で水洗を実施したが、他地区では肉眼で識別できたもののみを取り上げた。葉や種子・枝等の植物遺体については全域で肉眼で識別できたものを一部サンプルとして採取した。このように一定の基準で遺物を取り上げていないため、本遺跡で採取された遺物の質にも粗密がある。

本溝跡は調査区内で⑤-1～⑦-2区を南北方向に走る西辺、⑦-2区内で直角に折れて⑧-1区へ続く南辺の一部、⑤-2～⑩-1区をやや蛇行しながら南北方向に貫く東辺が確認された。この検出状況から本溝跡は微高地の比較的広い平坦地部分を取り巻くと思われる、溝跡の設定されている場所は西辺は微高地がくびれる部分にかかって微高地を横断し、南辺は低地境に近い場所、東側は微高地内でも地形が若干落ち込む地形変換点にあたる。北辺については調査区外にあると思われるが、北側隣接地を圃場整備に伴って長野市教育委員会がトレンチ調査したものの、この調査では確認されなかった。このように本溝跡は土坑群を取り巻く区画施設と思われるが、詳細にみると各辺ごとに形状が異なって均一な造りではない。西・南辺は直線的に走り、⑦-2区内の屈曲部もほぼ直角であるが、東辺は北側が大きくカーブを描いて⑩-1区内で鈍角に屈曲し、南側が直線的となるやや変則的な形状である。調査域内のS D 1016が区画する規模は、南北方向は60 m以上としかわからず、東西方向は最大約118 mである。区画する範囲の平面形はこのように東西辺で形状が異なるため、定型的な形とは断定しにくい。仮に西・東辺の形状の違いはいずれかが意図された形でもう一方が変則的な形態と考えるならば、東辺が意図された形とする場合では全体の形は前方後円墳形、西・南辺を意図された形とすると北東部が突出した方形とみられる。ただし、地形との関連でみると、西辺が微高地を直線的に横断するのに対し、東辺はS D 1016の内側と外側で高低差が認められることから地形に合わせていると思われる。したがって、地形を無視した西・南辺が本来意図されたプランで、基本的には方形プランを基調とする可能性が高い。さらに、このような溝形態にみられる東西辺の違いは、他にも台形状の突出施設の配置場所と数、出土遺物種別分布、本溝跡の外側の遺構の違い、溝底面上の杭列のあり方にも認められている。また、遺跡内での遺構のあり方で東西の違いがみられることから、単なる溝形態の違いにとどまらず、本遺跡を貫く空間意識の違いや機能差にも関連したものであると考えられる。

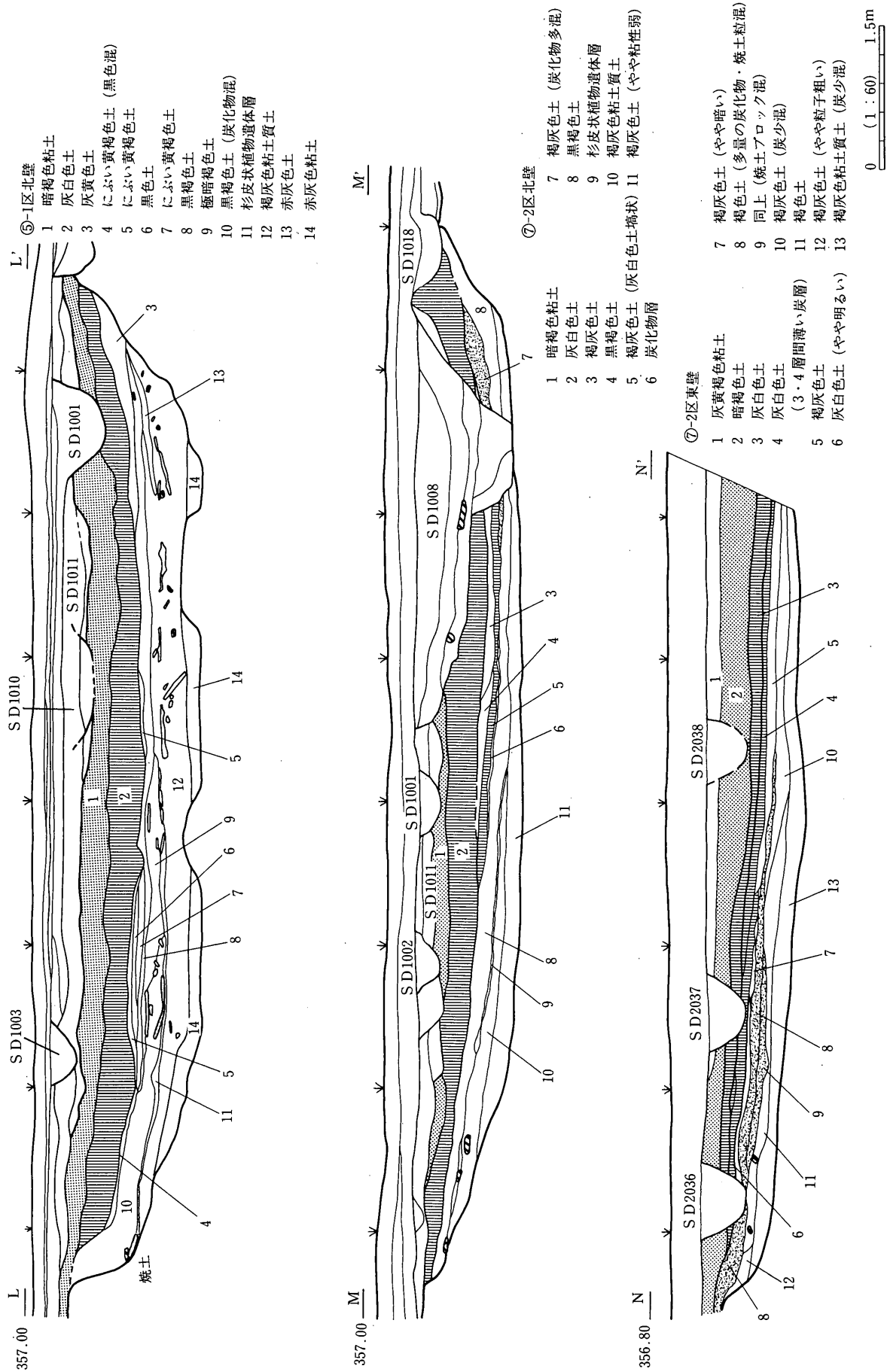
なお、溝各辺の内側には台形状の突出部が確認され、西辺では⑤-1区北側と⑦-2区屈曲部付近に各1か所、南辺は⑦-2区・⑧-1区境周辺に1か所、東辺では⑤-2区調査区北壁付近にもその可能性があるところが1か所ある。この台形状の突出部の規模はほぼ一定しており、基部の幅が約10 m前後で溝側へ約4 m程突出する。配置の規則性については明らかにできなかったが、配置数を比較すると西・南辺のほうが多い傾向が認められる。この突出部の機能は明らかでないが、古墳時代の豪族館などでも見られるものと形態的には類似する。台形状突出部上の施設については、西辺側は中世S D 1008に切られるため不明で、⑤-2・⑧-1区では特別遺構は確認されていない。なお、本溝跡の内側岸近くの底面上に杭列が打設されており、西辺の突出部では屈曲部に2本杭が並列して打たれるが、⑤-2区北側の台形状突出部のみは屈曲部に平行せず、緩やかなカーブを描いて直線的に打設される違いがある。

溝の幅は約10～13 mとほぼ一定しており、断面形は緩やかなU字状を呈して検出面からの深さは約1～1.2 m前後を測る。底面は著しい凹凸が認められるが、全体的にみると西・東辺の中央部がやや高く、それぞれ北側・南側へ傾斜する。この溝内の施設としては上述したような溝跡の内側岸から2～3 m離れた底面上に岸に平行するように打設された杭列がある。この杭は掘り込みを伴わず、打ち込まれたものであ

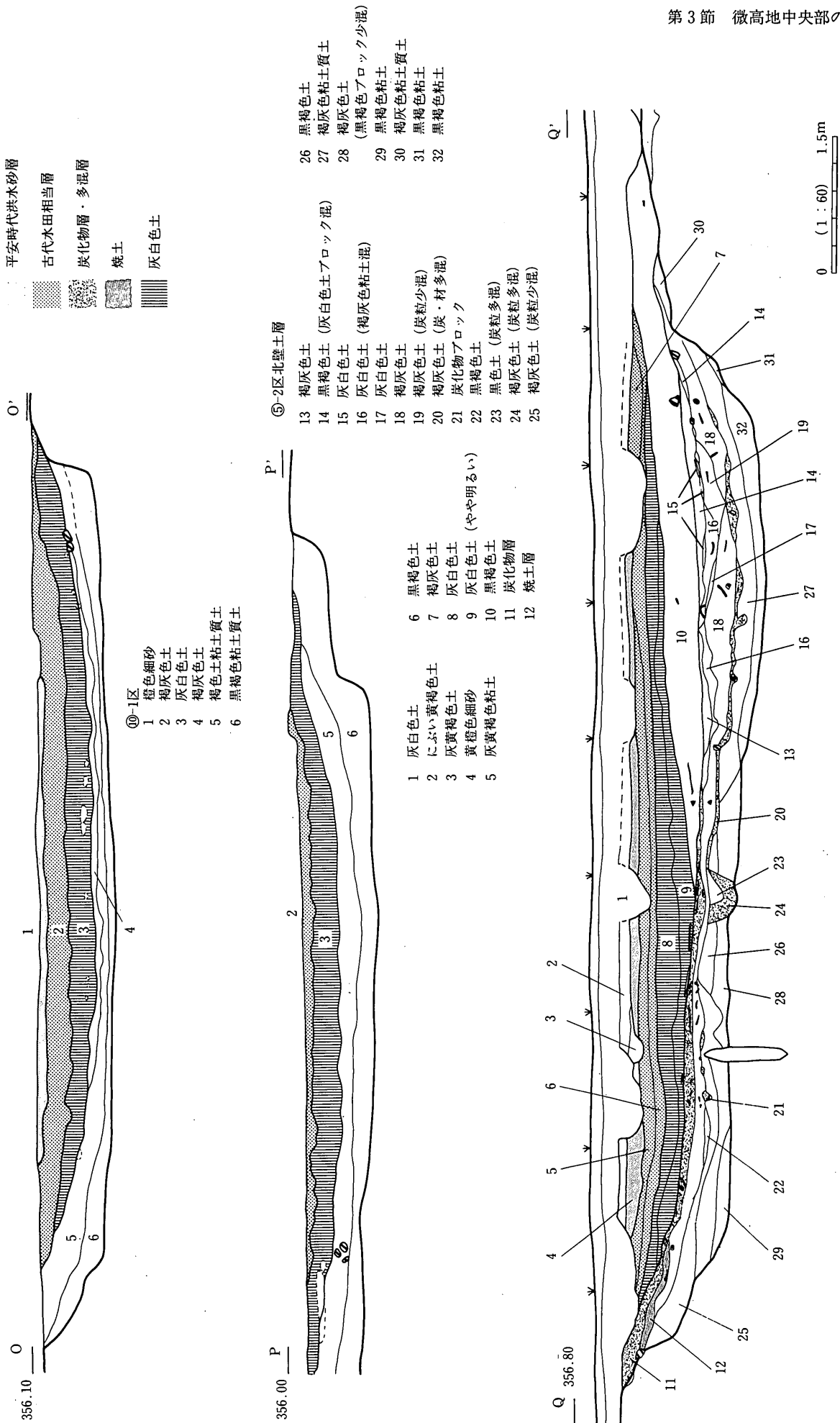
るが、約3.2～4.4mの一定間隔で直線的に配置し、台形状の突出部はほぼトレスするように屈曲して、西・南辺の台形状突出部の折れ曲がる角に2本並列して打たれている。この杭の性格は明らかでないが、杭と岸の間には埋め土や特殊な施設は確認できなかったため護岸等の施設の一部とは考え難い。また、杭の間隔が非常に長いことや、杭本来の長さは不明ながら突出部の角に当たる部分では2本並列されることからすると、杭をつなぐ横材が存在した可能性が想定され、むしろ柵か柱列に近い施設ではなかったかと推定される。この杭列は構築されなおされた形跡は認められず、1回のみ構築と思われる。また、⑤-1区南部の溝中央部で杭が2本、⑤-2区北側の外側壁際に杭が1本検出されているが、これらは内側の岸に沿って打設された杭列とは異なって、不規則な配置となっている杭である。このなかで⑤-1区の溝中央の底面上で確認された杭2本は橋脚状の施設になる可能性があり、この杭の延長先のS D1016区画内では土坑分布がまばらな帯状の空白地、さらにS D1016区画外側もS D1007を挟んで2基の柱穴状の土坑が配置するラインに一致し、通路の存在を推測させる。⑤-2区北側の場合は同様にS D1016内側とS Q2016をつなぐ施設とも思われるが、調査区際で検出されたため、詳細は不明である。なお、⑦-2区および⑤-2区の外岸側で拳大の礫が多数出土したが、埋土中で散在的に出土したもので壁に直接貼りつけられておらず、葺石などの施設とは認めがたい。その性格は明らかでない。

埋土は溝跡の規模が大きく、広域に渡ることや調査地区ごとの記録者の分層観点の違いがあって共通した土層として把握されていない。しかし、共通する鍵層、あるいは類似した土層が認められる。全域に共通する埋土の傾向をみると底面上に粘土質土、その上部に炭化物・木材を多量に含む土層、その前後に複数の薄い灰白色・黒褐色土、この上部に厚い灰白色～灰褐色土が載る。

上記の埋土のなかで底面上にみられる粘土質土が本遺跡が営まれた時の所産と思われる。地区ごとに灰白色粘土や炭層、色調のやや異なる粘土層をはさむなど様相は異なるが、全体的に下層が暗褐色、もしくは暗めの褐灰色を呈し、その上部に灰色の強い褐灰色粘土質土が載る傾向がある。しかもこの粘土質土は全体的に西側のほうが厚く認められる。この粘土質土の上部前後から部分的に薄い灰白色土や暗褐色・黒褐色土の堆積があるが、そのなかに⑤-2区では薄い炭化物層、⑤-1～⑦-2区では褐灰色土の上部に杉皮状の植物遺体層が認められた。⑤-2区の炭化物層はS D1016東外側の北部、S Q2016近くに厚く分布しており、S Q2016との関連も想定できる。また、⑤-1・⑦-2区で認められた植物遺体層は外岸脇のみ確認されたが、最も厚いのは⑤-1区の北側である。この部分では杉皮状の薄い植物遺体が重なったように堆積し、不規則に細い枝が多数挟み込まれている。検出当初は建物の屋根材を廃棄したと推測したが、分布範囲が岸にそって広がることなどからは別のものと思われる。しかし、性格は明らかにできなかった。これらの土層の上には各調査地区に共通し、広範囲にわたる大量の材を含む炭化物層が認められ、部分的に焼土を伴う箇所も確認されている。この炭化物を伴う大量の材が検出された層は場所により上下に薄い灰白色・黒褐色・褐灰色土の堆積土が入るが、炭化物が多く認められる点は共通し、しかも材の一部が炭化物しているものもある。その都度廃棄された材が滞水状態のなかで浮遊して集積した所産というよりも、遺跡内各所でほぼ共通して大量の焼却を伴う材の一括廃棄によって形成された可能性がある。なお、類似した大規模な炭層は西辺外側のS D1007、東辺外側のS Q2016、小規模な炭化物層はS D1016区画内部の土坑埋土にも認められ、本遺跡の古墳時代遺構に共通する焼却を伴う廃棄行為のひとつと思われる。この材・炭化物層より上層では土器出土が散在的で量も少ないことからこの層が遺跡廃絶時の所産と推測し、これより上層については重機で掘削した。材・炭化物出土層の上部には薄い灰白色・黒褐色・褐灰色土が数枚認められるところもあるが、その上は一様に厚い灰白色～白色の強い褐灰色の粘性の弱い土層で覆われる。この灰白色を基調とする土層はS D1016全域で認められほぼ共通する鍵層となっている。この土層は低地域の古墳時代水田層にあたる灰褐色土層に類似しており、古墳時代の洪水堆積土ではないかと推測される。



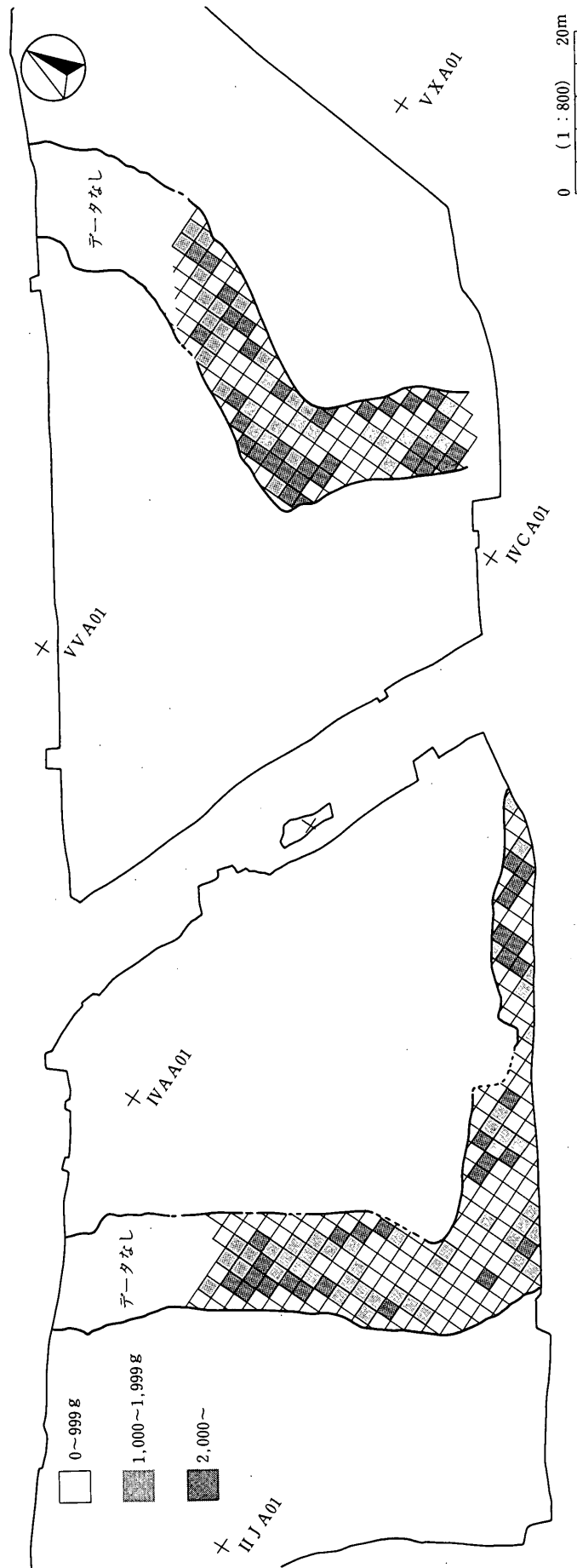
第121図 SD1016セクション1



第122図 S D1016セクション2

ただし、水田では耕作で鋤込まれたためか、純粋な洪水堆積土としては認められていない。この土層の堆積年代の詳細は明らかでないが、水田域での土層対比からすると下限は古墳時代も後期には下らないと思われる。S D 1016埋土の灰白色を基調とする土層の上は古代の水田耕作土層に対比される暗褐色粘土を基調とする土層となり、この上に部分的に平安時代の洪水砂層もみられる。この層以上の埋土は古墳時代の所産ではないが、S D 1016の古代以後の様相について触れておく。本溝跡は廃絶した後も窪地として残存するようで、中世館外堀S D 1008西・南辺が本溝跡岸に沿って構築されていることから、中世館時代までは何らかの地形変換点として意識できるような形で残存していたものと思われる。ところが、近世（近世末期）にはS D 1016範囲に関係なく水田耕作土で覆われているため、この段階ではほとんど埋没しきっていたと思われる。また、古代以後～中世の間では西・東辺の利用状況が異なっており、西側では中世S D 1010～1012、続いてS D 1008が構築されるが、東辺では古代以後の遺構が認められず、中世のS D 2007もS D 1016を横断するため、東辺のほうが早目に埋没していた可能性がある。

なお、本溝跡は非常に規模が大きく、その構築に伴って排出された掘削土がどのように処理されていたかが調査時からの大きな疑問であった。整地土として利用された可能性も考えたが、遺跡内部で



第123図 S D 1016グリッド別土器出土土重量分布

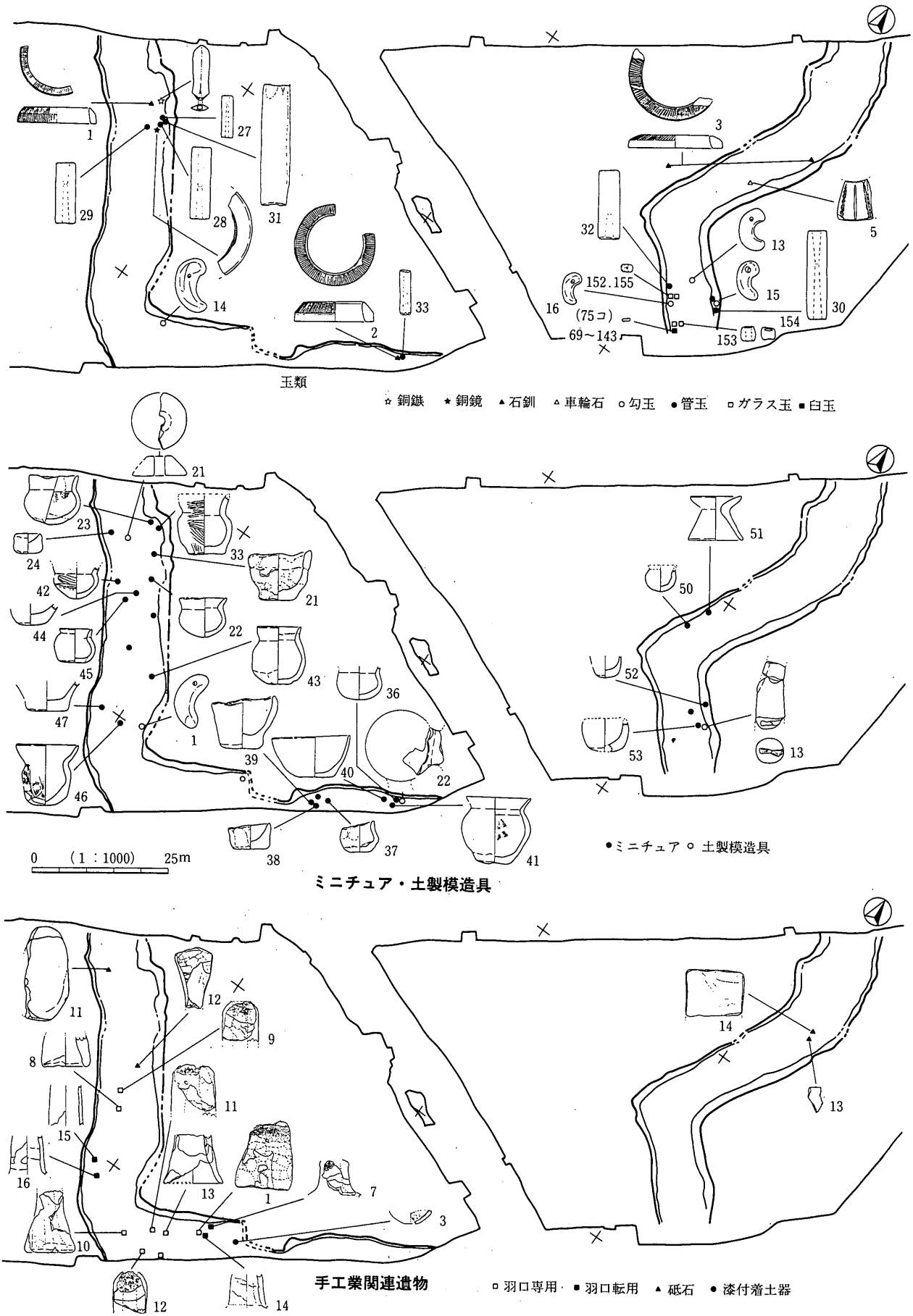
は対比できる層は確認されなかった。また、S D1016区画内側の古墳時代土坑とS D1016内側の岸とは4 m前後の空白部分があるが、とても狭すぎて土塁状に土を盛り上げられることは不可能と思われた。このように溝掘削土の処理方法は遺跡内の様相をみる限り全く不明であると言わざるを得ない。残る可能性は調査範囲外へ伴出された可能性であるが、これについては搬出された理由、その利用方法の解明を含めて、今後周辺部調査の際の問題として残される。

出土遺物は大量の古墳時代の土師器をはじめとして、玉類・石釧・車輪石、砥石、鏡・銅鏃、羽口・ミニチュア・土製模造具・土錘・漆付着土器・異形土器・支脚、各種獣骨・鹿角、割材・板材・鋤・鍬・鎌柄・砧・かご・桜皮・櫛などの木質遺物など多量の遺物が出土している。自然遺物ではモモ核・ヒョウタン・各種種子、葉や枝・ヨシ様の葉・木皮などがあり、これ以外には何に使用されたのか不明ながら、多数の拳大の礫が出土している。これらの遺物の出土状態は多様であり、さまざまな契機にS D1016に廃棄・遺棄されたと思われる。また、場所ごとに出土が偏る遺物も見られ、遺跡内の空間利用のあり方が反映されているところがある。そこで、ここでは煩雑ながら遺物の種別に出土状態を概観し、後に全体の出土傾向についてまとめてみたい。なお、遺物種としては土師器・ミニチュア土器・石製品・手工業関連遺物・玉類（金属製品）・木質遺物を取り上げる。

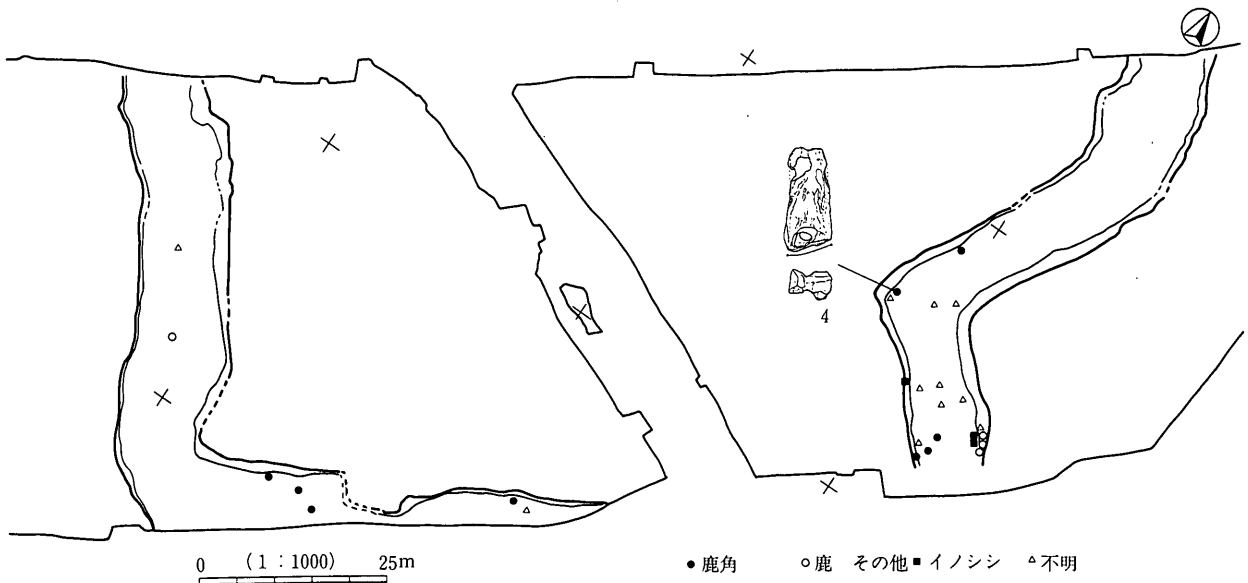
まず、土師器であるが、S D1016から出土した古墳時代の土師器総重量は約1022kgで微高地域で得られた土師器の約1/3が本溝跡の出土である。遺存状態は本溝跡出土品については口縁部の遺存状態の計測を行っていないため詳細は明らかでないが、調査時の出土状態からは遺存状態が良好な略完形品も見られているが、破片で出土したものが多く、調査での遺物取り上げ方法は上述したように調査地区ごとに異なっているために単純な比較はできないが、⑦-2・⑩-1区ではいくつか特徴的な出土状況が知られた。まず、全体の土器出土状態からみると、⑩-1区では溝中央部は少なく、溝の両岸近くに集中する傾向がある。これは⑤-2区を除く大型破片を図化して取り上げた地点でも同様の傾向が認められているが、⑦-2区の場合は若干異なり、内側の岸より溝中央側のほうが出土土器量が多い。これはS D1016内側岸際に中世の外堀の構築に伴って削平を受けているためと考えられ、上記の傾向を否定するものではない。さらに、⑤-1区などでは岸際に均等に土器が分布するのではなく、特定場所に集中する傾向も認められている。このような例は他の地区でも認められており、土器はS D1016内側から特定場所へ直接廃棄される場合もあったと認められる。一方でS D1016外側の岸で土器が出土する場合については、⑩-1区で外側岸脇にある遺物集中S Q2016からの混入を想定しえるが、その他の地点は不明である。また、溝中央部まで土器が散在して検出されている地点として⑩-1区の屈曲部があるが、この部分は溝の屈曲部にあたることなどからも何らかの特殊な背景が想定できるのかもしれない。

次にミニチュア土器であるが、S D1016からは42点得られ、今回の調査で得られたミニチュア土器の約40%にあたる。一括で取り上げられた土器のなかから採取されたものもあり、すべての出土地点を明らかにできてはいないが、出土地点を特定できるものから分布をみると⑤-1～⑦区は比較的多いものの散在的で、⑧-1区や⑩-1区は特定場所に集中する傾向がある。ただし、単純な出土数で比較してみると明らかに西辺のほうが多い。このミニチュア土器は石釧・車輪石・銅鏃・銅鏡の出土地点とは異なる分布を示しており、玉類とは別の契機で本溝跡へ入ったと推定される。そして、出土量の多さからすると本溝跡に特徴的な遺物と認め得る可能性がある。特に、⑧-1区のように集中的に出土したものもあり、何らかの意図、あるいは特定の契機で使用されたものが廃棄・意図的に入れられたか、2次的に移動した可能性が想定される。しかし、一方では各辺での出土状態の違いが見られることから一律同じ行為によるとはできないのかもしれない。

次に土製模造具であるが、あまり数は多くないものの、土製勾玉、杵状土製品、紡錘車形土製品、連結



第124図 SD1016出土各種遺物出土分布



第125図 SD1016 骨・骨角器出土分布

小型丸底土器などがある。この内、⑩-1区外岸付近で出土した杵状土製品は、類似品が隣接したS Q 2016で集中的に出土しており、混入の可能性がある。それ以外は出土の背景の詳細は不明である。なお、魚網の錘は2点採取されている。

砥石は出土数量は非常に少なく、一定の傾向を見いだすことはできないが、⑤-1区、⑦-2区、⑩-1区の各辺で出土している。遺跡全体での砥石出土分布をみても散在的である点と同様なのかもしれない。次に手工業に関連するとみられる羽口や漆付着の小型丸底土器であるが、羽口は専用と転用と思われるものを含めて17点、漆付着土器は2点得られた。ほとんどが⑦-2区南西コーナー周辺に集中して検出されており、遺跡全体の出土分布をみてもこの⑦-2区周辺に集中する点と一致する。したがって、この⑦-2区周辺で手工業生産が行われ、ここからSD1016へ廃棄されたと推測される。

玉類・石製腕飾類・銅鏡・銅鍍金属製品は単体で出土した場合と、複数のものが集中する場合が見られる。西辺中央の⑤-1区で管玉・石釧・銅鏡・銅鍍が比較的近接して出土し、⑦-2区コーナー東側で滑石製勾玉1点、⑧-2区の南辺中央の土層観察用ベルト内で石釧・管玉各1点、⑩-1区南部では管玉・小玉・ガラス小玉、東辺中央の⑩-1区で石釧・車輪石が出土している。このSD1016埋土は土坑ほど丁寧に精査されておらず、しかも埋土をフルイにかけていないため、見逃された玉類も多いと思われる。なお、石釧・車輪石・銅鏡・銅鍍はほとんど土坑では出土が認められず、本溝跡に特徴的な遺物である。したがって、本溝跡の玉類出土数は多いが、それは遺構の規模が大きいことによるばかりでなく、意図的に入れられたものもあると思われる。特に石釧・車輪石・銅鏡・銅鍍がSD1016の西・南・東辺のほぼ中央にあたる地点から集中的に出土している点は示唆的である。この出土分布からは本遺跡の範囲に対する祭祀が、この遺跡をめぐるSD1016で象徴的に行われている可能性を示すと思われる。なお、石釧・車輪石・銅鏡はいずれも破損し、各地点で石釧1点が含まれる点は共通するが、近接して出土した玉類の組み合わせや数は異なっている。この違いはどのような背景によるのか明らかでないが、このなかで⑧-1区の石釧周辺で出土した管玉は本遺跡で唯一の片側穿孔である。従来指摘されているように後出的とされるならば石釧の遺棄年代は遺跡の廃絶時期に近いかもしれない。また、石釧・車輪石・銅鏡が破壊された場所や契機について



ては明らかにしえなかったが、この経過を考える上で興味深い所見が得られた。それは、S D 1016東辺出土の滑石製石釧が、出土地点にほど近いS K 2878で出土したものと接合したのである。この意味するところは十分理解することはできなかったが、石釧の破壊行為がS D 1016区画内で行われ、そこからS D 1016内へ投棄されたと推測できる。このようなS D 1016区画内への特殊品の廃棄行為の存在からは、S D 1016区画内が特別な空間と意識され、しかもS D 1016がこの空間の境界施設として意識されていたことを示していると思われる。

管玉・勾玉・白玉については石釧・車輪石・銅鏡・銅鏃出土地点に近接して出土した場合と単独で出土した場合など多様で、出土の背景も一律ではないと思われる。しかし、石釧・車輪石・銅鏡・銅鏃とは出土地点が重複しない場合もあることから別の契機や行為の主体者がかかわる場合もあった可能性がある。また、管玉については石釧と近接して出土する場合が認められるが、勾玉・白玉・ガラス小玉は石釧と近接して出土する例は見られない。このことから、玉類の種類別に使用方法や、意味が異なることも考えられる。なお、出土玉類でつぶられていたと思われるのは⑩-1区南部で集中的に出土した白玉のみで、他はつぶられた状態ではないと思われる。

次に木質遺物である。本溝内からは大量の木質遺物が出土している。その種類は枝状の自然木、割材、製品、加工材、カゴ、桜の皮、竖櫛など多岐に渡る。詳細は木製品のところで触れているので、そちらのほうを参照していただくこととして、ここでは出土状態を中心に触れる。本溝跡での木製品の出土状態は種類ごとに層別と平面分布のあり方が異なる。厳密な層別に把握されていないものの、相対的にS D 1016廃絶時の所産と推測された大量の炭化物を含む層前後で割材の出土がもっとも多く、製品や加工材、桜皮、カゴ類はそれよりも下の粘土質土から出土する傾向がみられた。上層の割材はS D 1016が滞水状態にあるとすれば出土層位が直接廃棄時期を示さないことになるが、集中して出土した層前後では炭化物が多く検出され、部分的に炭化している割材も含まれる。しかも、炭化物層に近い位置で焼土層が確認されている地点もあることから上層割材の多くは遺跡廃絶前後に焼却を伴って廃棄されたと推測できる。それに対して製品や加工材・桜皮・カゴについてはより下層で出土が認められることに加えて、炭化するものは調整具・紡織具の一部以外はほとんどみられない。このことから廃棄の契機が異なると推測される。次に平面分布をみると、製品の多くが西辺から出土し、東辺ではほとんど出土していない偏在が認められる。その理由は判然としないが、これもS D 1016区画内の空間利用のあり方の違いが反映されたものであると考えられる。

調査時ではS D 1016出土の割材は遺跡廃絶時に建物を破壊して廃棄した所産と考えていたが、整理で木取りのあり方や木表面に調整痕が確認されない材が多いことから木材加工で排出された屑（残材）が含まれると結論づけられた。しかも、これらが層位的な位置から遺跡廃絶時の所産とみられたことから、木材加工は遺跡の構築時ではなく廃絶直前に行われたことになり、S D 1016内での割材出土分布からすると木材加工が遺跡内各所で行われた可能性も出てくる。この推測通りに遺跡廃絶直前に、わざわざ木材加工を行ったとするならば、やや奇異に思われる。もちろん、S D 1016区画内の東辺北部では板状の材が多く出土し、隣接した場所でS T 2009が推定されたことを考えれば、建物破壊に伴う材を廃棄した可能性も残り、すべての割材を単純に加工の所産とはできないところもある。

骨・種子は調査時にはあまり注意せず、肉眼で識別できたもののみ採取された。したがって、大型のものに限られることになり、小型の骨破片や種子は見逃されている可能性が高い。溝跡内で採取された骨は全部で71点あるが、これ以外に採取後の管理が悪く、破損してしまったものや、調査記録にはあるが紛失してしまったものがある。この出土骨のなかで加工品と認められたのは骨鏃15点、切断痕を残すニホンジカ角がある。また、骨鏃を除くと火を受けたと思われる骨は少数であり、大部分が火を受けていない生の

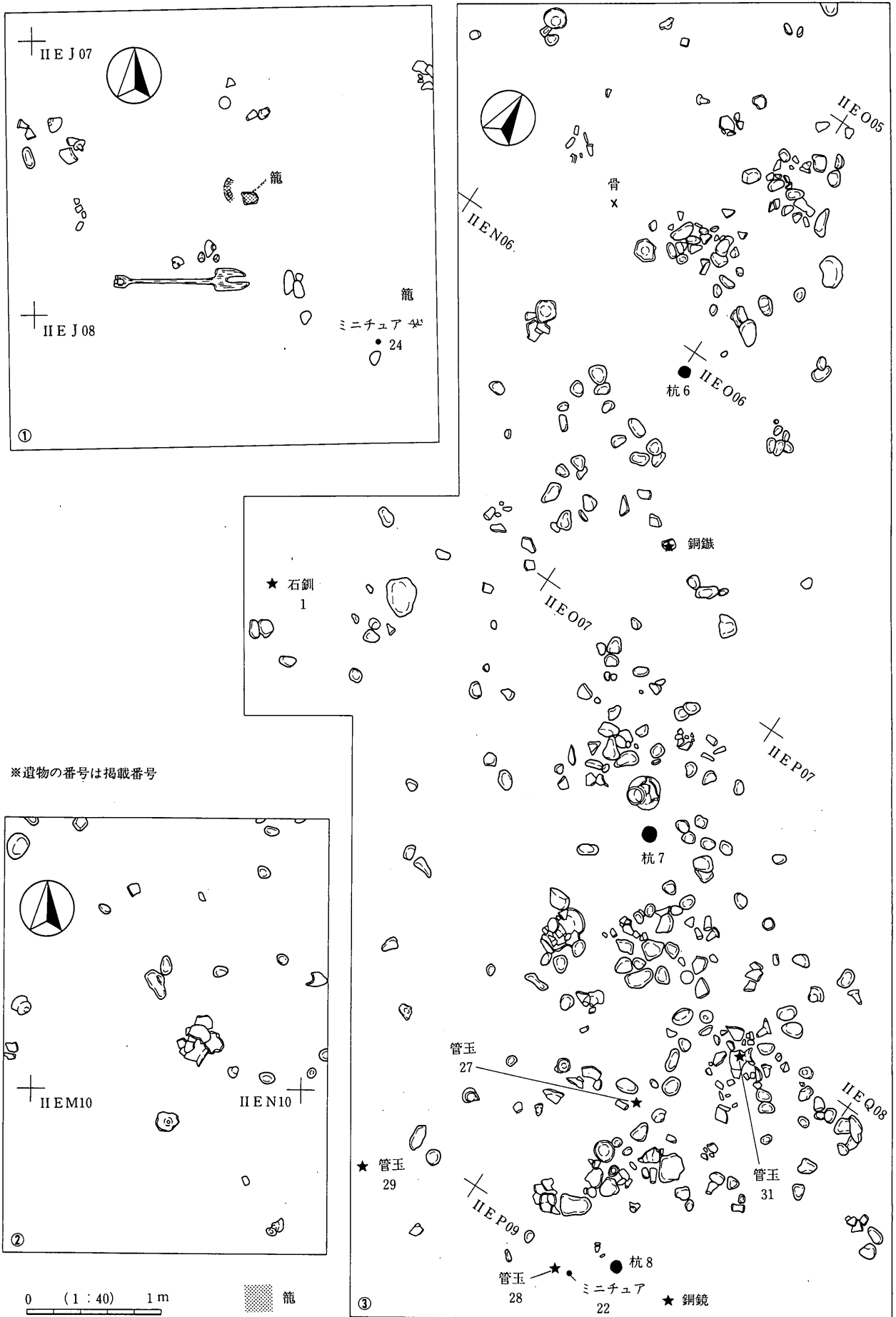


骨である。これらの骨の出土層は厳密に特定できないが、炭化した木材の出土層位より下で出土したものが多く、骨のなかで種が特定できたものは30点あり、ニホンジカ25点、イノシシ4点、カモシカ1点である。骨は部位が異なる場合、1個体かどうかの判断が難しく、単純な数的な組成比率として示すことはできないが、ニホンジカの占める率が高いことは窺える。このニホンジカの部位では角が15点、ほかは足や歯、顎などの破片であり、角の占める率が高い。出土分布はそのほとんどが詳細な出土地点の記録がないため、詳細不明であるが、各地区で出土している。種子はモモ核、スモモ、ヒョウタン類、オニグルミ、トチ、ウリ、オニビシなどが採取された。モモ核の出土数がかつても多いが、これも肉眼で識別できた目立ったもののみを採取していることによるものである。また、種子は出土地点・層位の記録を取らずに取り上げたので、出土状態は不明である。なお、これ以外に植物の葉や杉皮状の植物遺体が出土している。葉は小破片で、全体の形が識別できるものはない。杉皮状のものは⑤-1～⑦-2区のS D 1016西岸脇に集中して検出され、部分的に細い枝を挟み込んで薄い層を成している。この杉皮状の性格や種類を特定できておらず、子細不明である。出土層位からするとS D 1016の廃絶時期より以前と思われる。

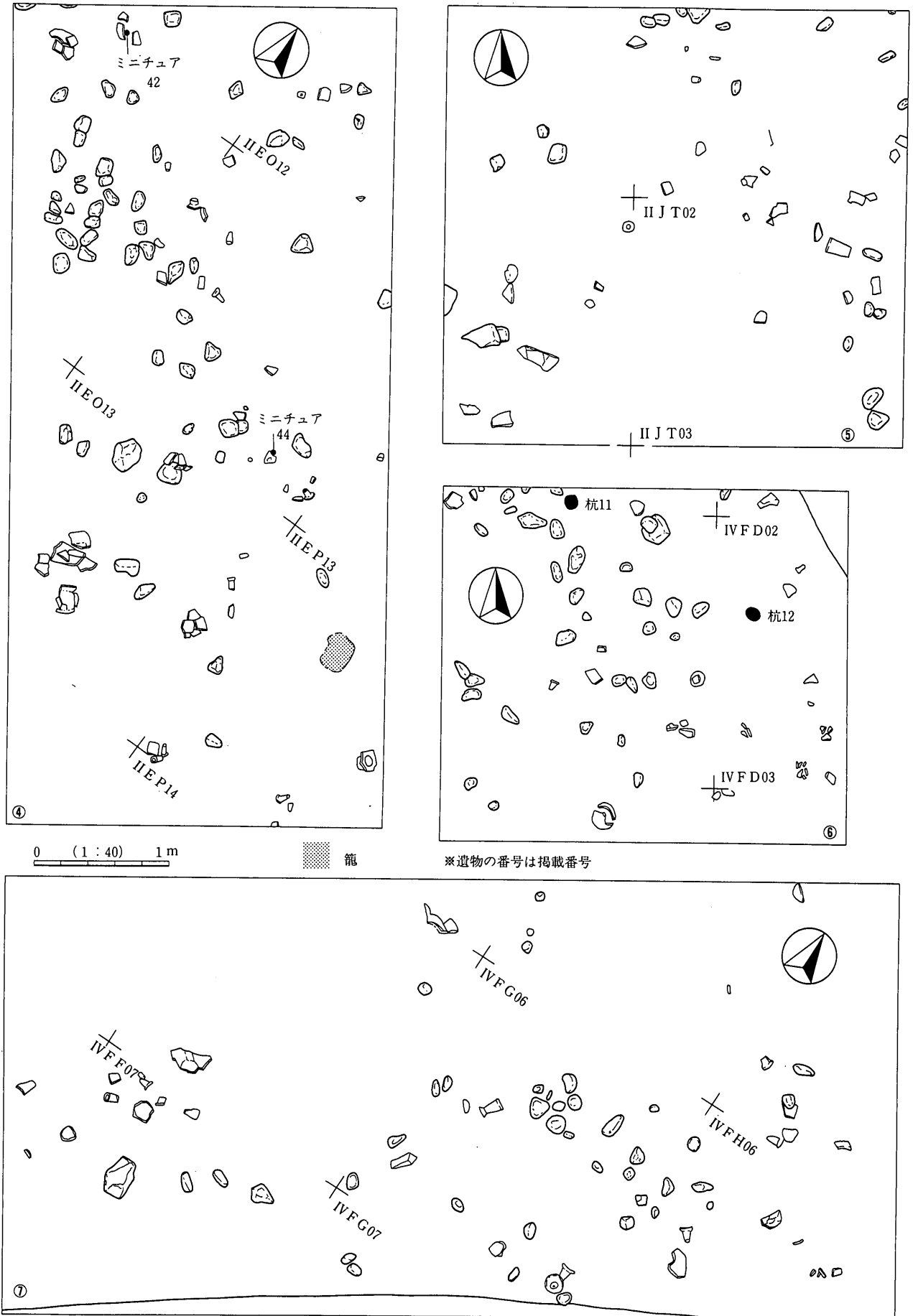
以上のように遺物の出土状況は多様で、本溝跡に入った背景も多様なケースが想定できる。そのなかで、大きく本溝跡に特徴的な遺物で、直接結びついて遺棄されている可能性が指摘できるのは石製腕飾類・銅鏡・銅鏃があり、ミニチュア土器や土器の一部もそうした所産である可能性がある。それ以外は本溝跡に特徴的な遺物ではない。また、遺物は遺物種ごとに出土地点の偏在が認められるが、各種遺物種毎の使用・廃棄の契機が異なることや、本溝跡区画内の場所ごとの空間利用のあり方の違いを反映していると見られる。しかし、割材以外は廃棄された時期が特定できなかったものも多く、土坑・遺物集中へ廃棄される場合との違いについては十分明らかにすることはできなかった。

最後に本溝跡の性格についてまとめておきたい。本溝跡は古墳時代の遺構群の最も中核的な部分を区画する施設と思われたが、大きく2つの意識が窺える。ひとつはS D 1016区画内をきわめて特殊な空間とする境にあたる点で、石釧・車輪石・銅鏡・銅鏃の出土分布の規則性から推測される。そして、もう一点は同じ溝でありながら、場所によって様相が異なる点である。特に⑤-1・⑦-2・⑧-1区までの西辺側と⑤-2・⑩-2区の東辺での差異は、溝の形状、台形突出部の配置、底面の杭列のあり方、遺物の出土状態などさまざまな面で認められる。このような場所ごとに異なる様相を現出した背景にはS D 1016区画内が均一の空間ではなく、場所ごとに利用のされ方、空間の意識のされ方が異なっていたと考えられる。出土遺物のあり方の違いについては遺跡存続時期内の活動の違いと見られるが、溝跡の形態や杭列の配置などは構築当初から計画されていた遺跡の基本設計にかかわるものとみられる。特に、後者に関連して西辺の⑤-1区で橋脚とも考えられる杭が溝中央部で検出され、しかもその延長先は土坑分布がまばらな帯状の空間が認められることから、少なくとも西側に入口があったと推測できる。また、S D 1016区画内の北東部では最も大きな建物跡と思われるS T 2009が存在し、その東側のS D 1016外側にある遺物集中S Q 2016がS D 1016区画内の北東部との関連のなかで設定されている可能性があることから、ここが中核的な場所になると思われる。つまり、西側がオモテ（正面）、東側がウラ（中核部分）になるのではないかとと思われる。このように、S D 1016は特殊な空間を区切り「中心と周縁」を分ける機能をもつことに加え、遺跡内の空間の「オモテウラ」の意識が反映されて形態や平面形が決定されたと思われる。

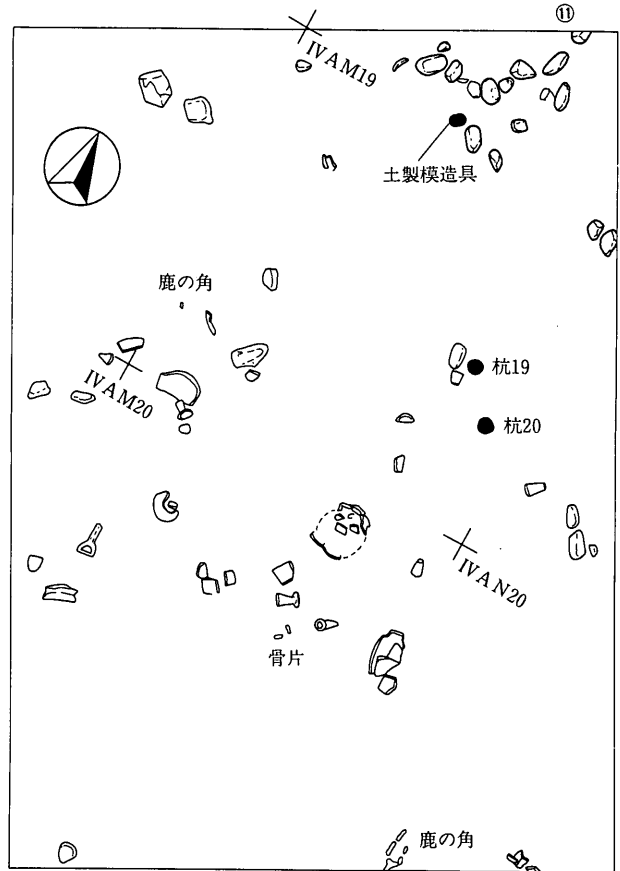
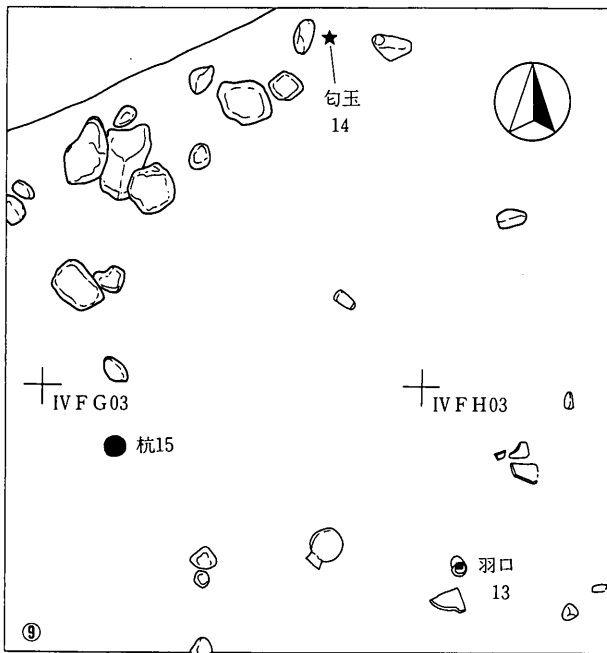
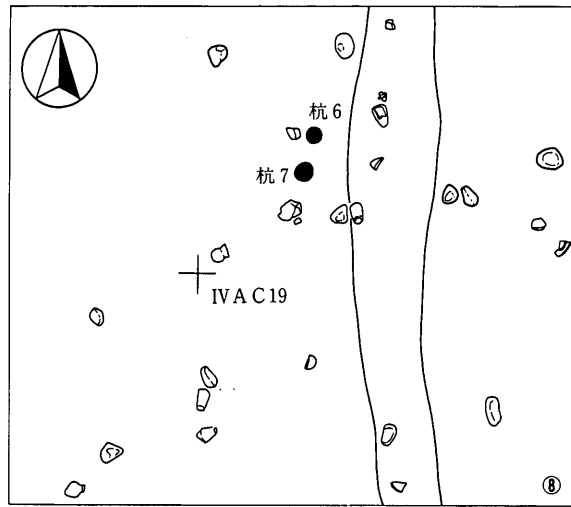
なお、本報告以前に溝区画範囲の平面形から遺跡の性格に関する評価がいくつか提示されている。全体の形を前方後円墳形とみると葬送儀礼にかかわる祭祀跡と見られる可能性が出てくるし、全体の平面形が方形を基調とすると従来知られるような首長層の館跡と見られる可能性もでてくるので、溝区画の平面形の評価は慎重にならざるをえない。本報告では断定ができないものの、地形との関係から一部地形に合わせながらも方形を基調とする可能性を提示しておく。



第127図 S D1016主要土器等出土状況 1

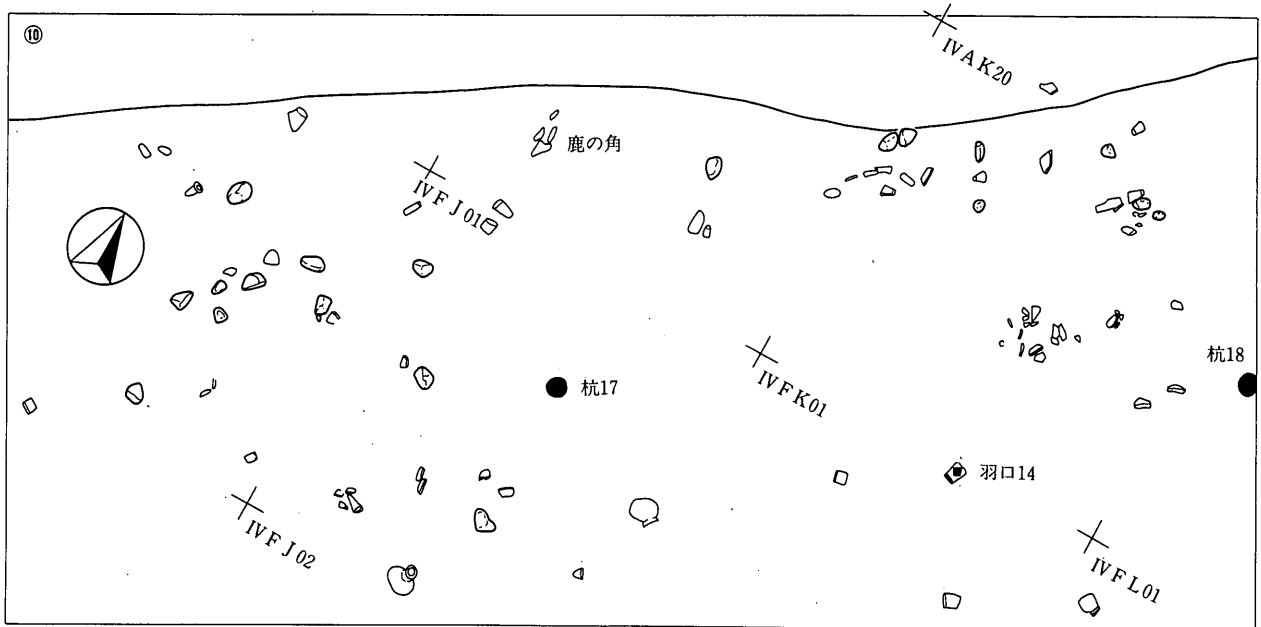


第128図 S D1016主要土器等出土状況2

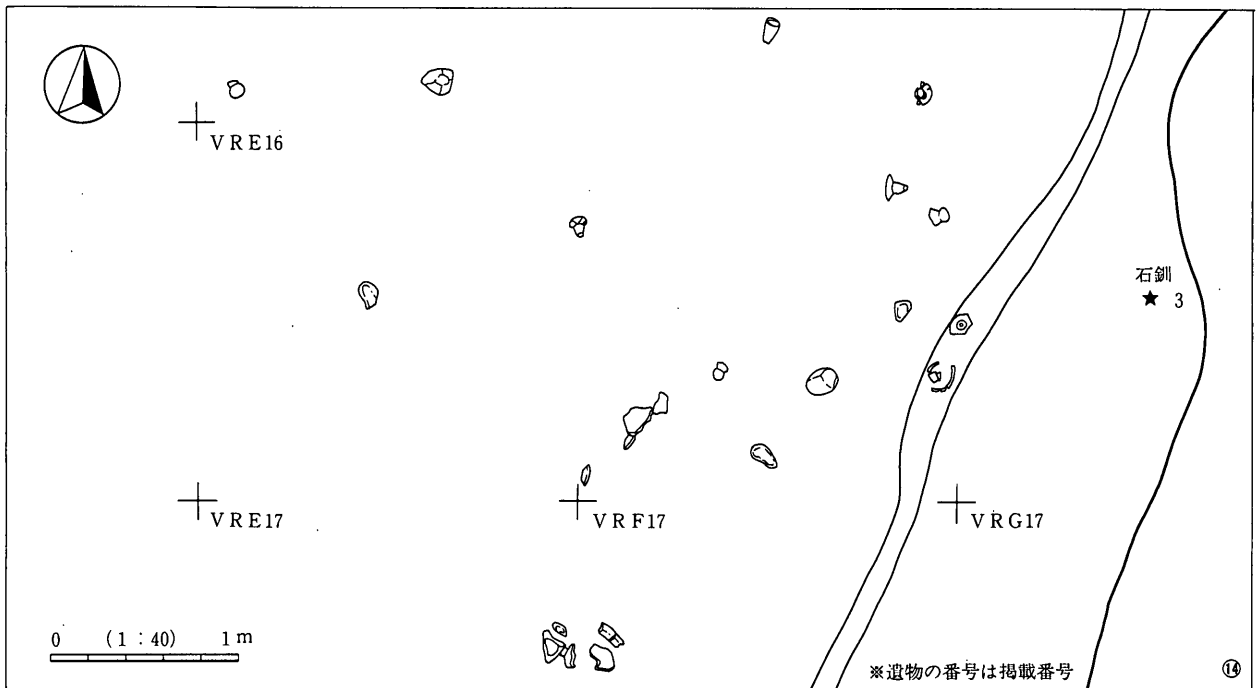
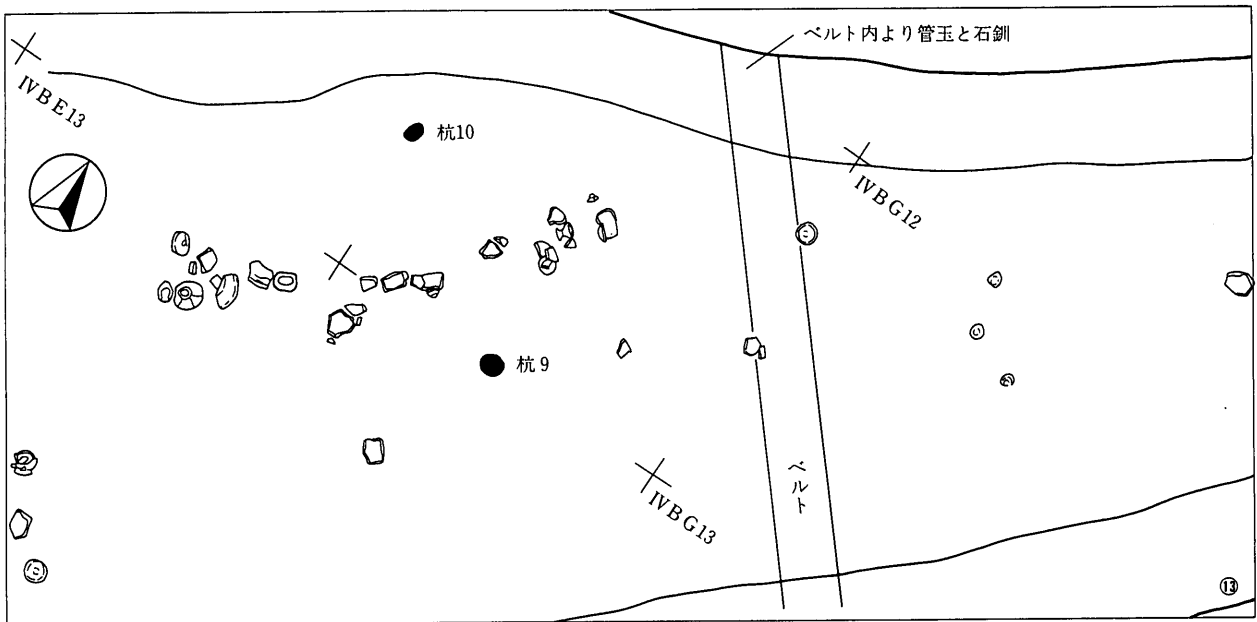
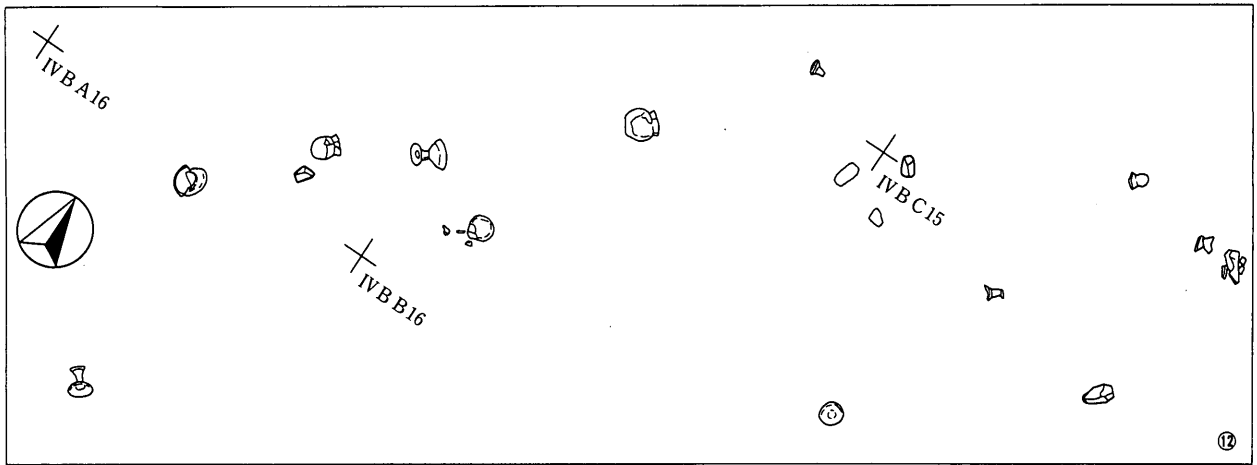


※遺物の番号は掲載番号

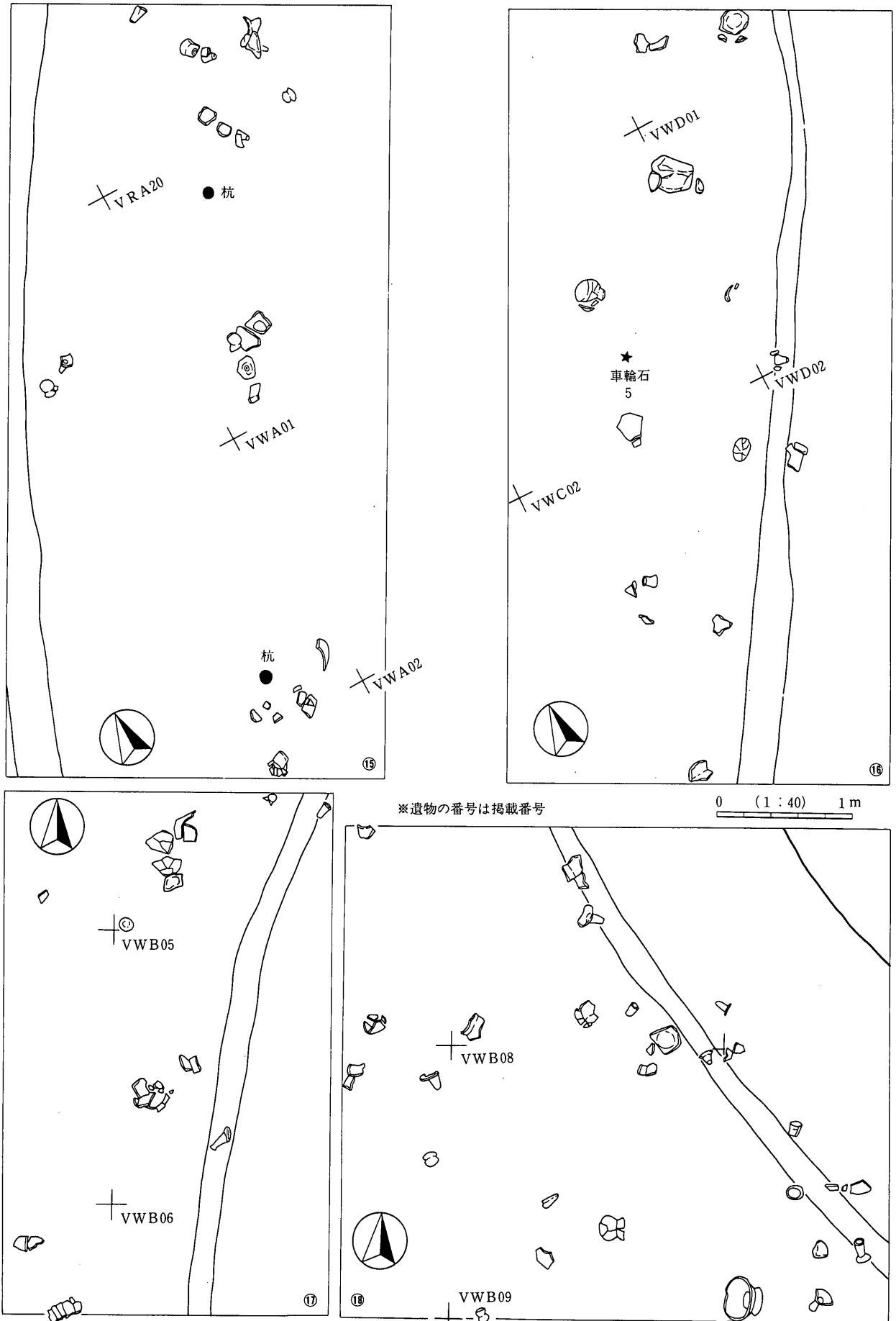
0 (1:40) 1m



第129図 S D 1016主要土器等出土状況 3

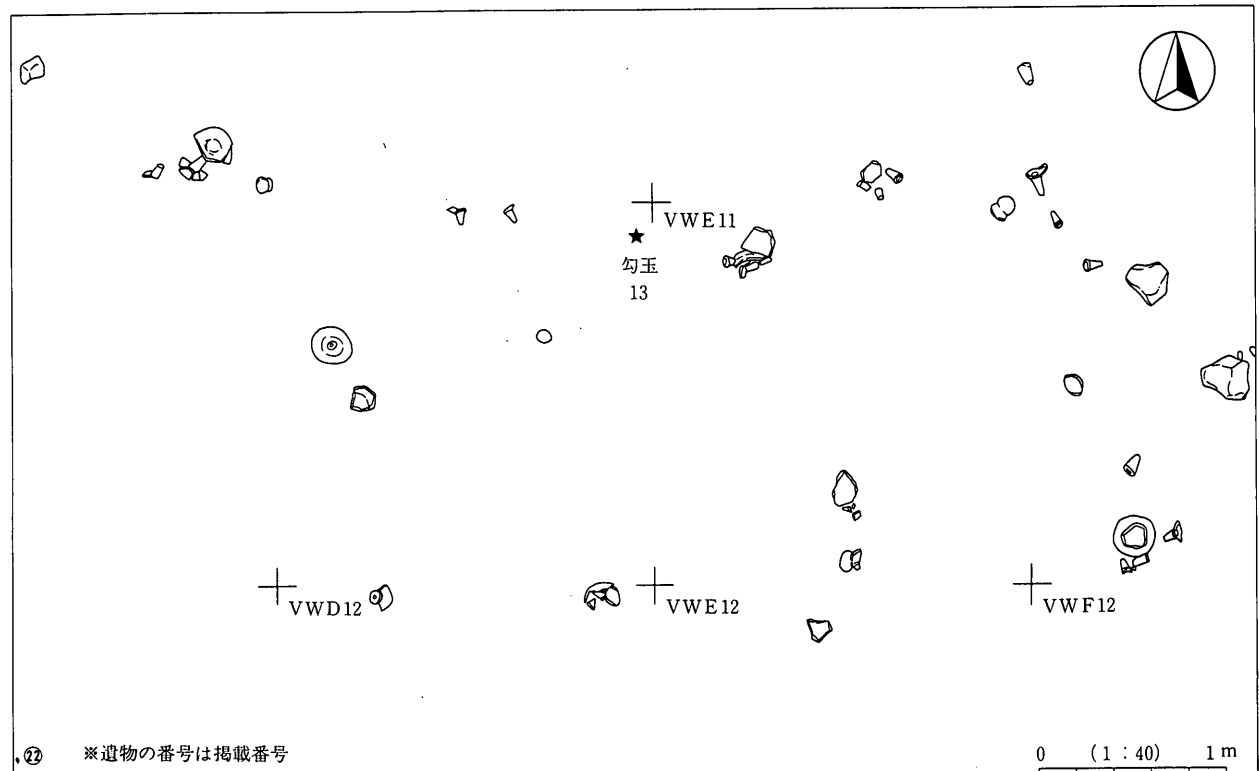
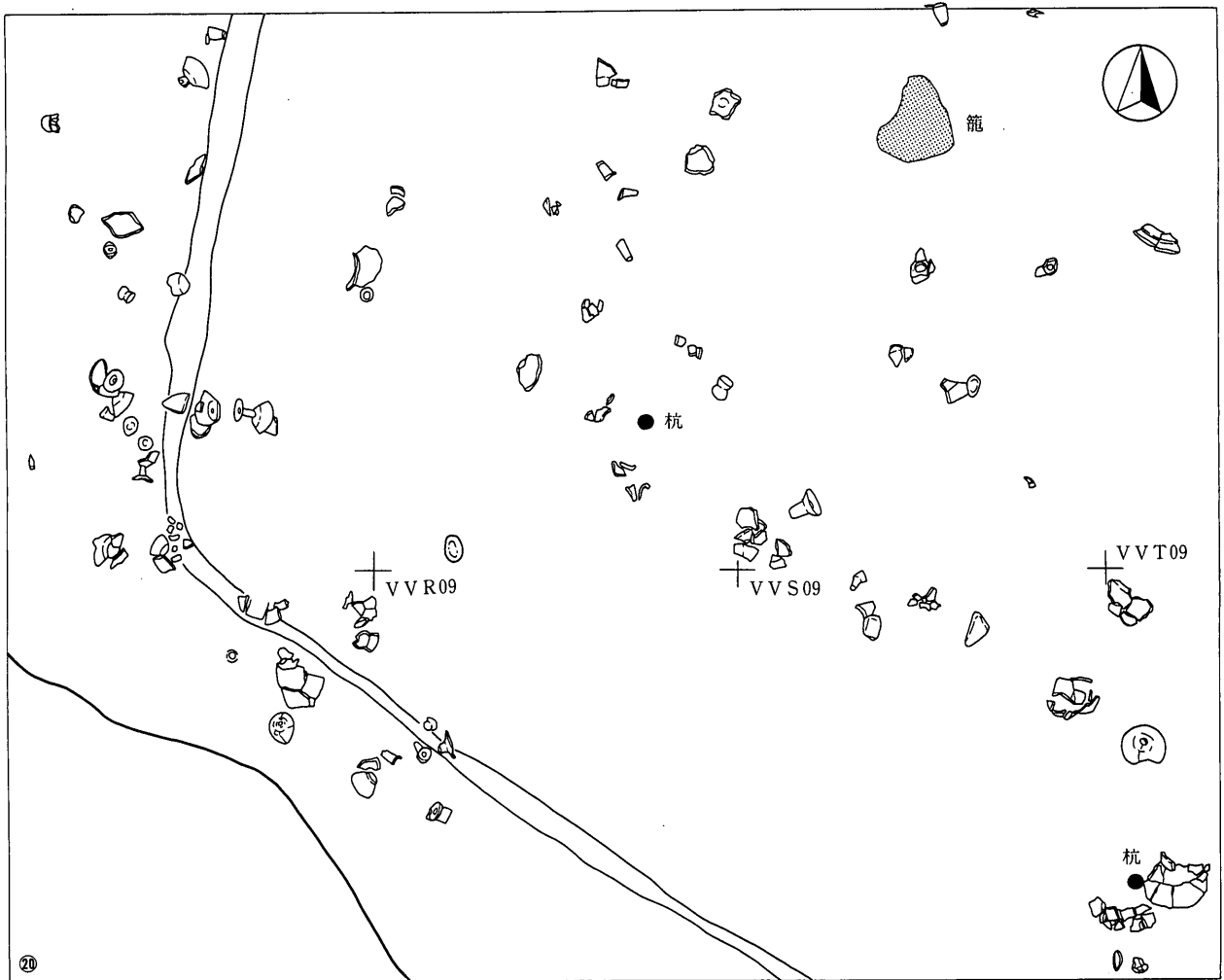


第130図 S D1016主要土器等出土状況 4



第131図 SD1016主要土器等出土状況 5

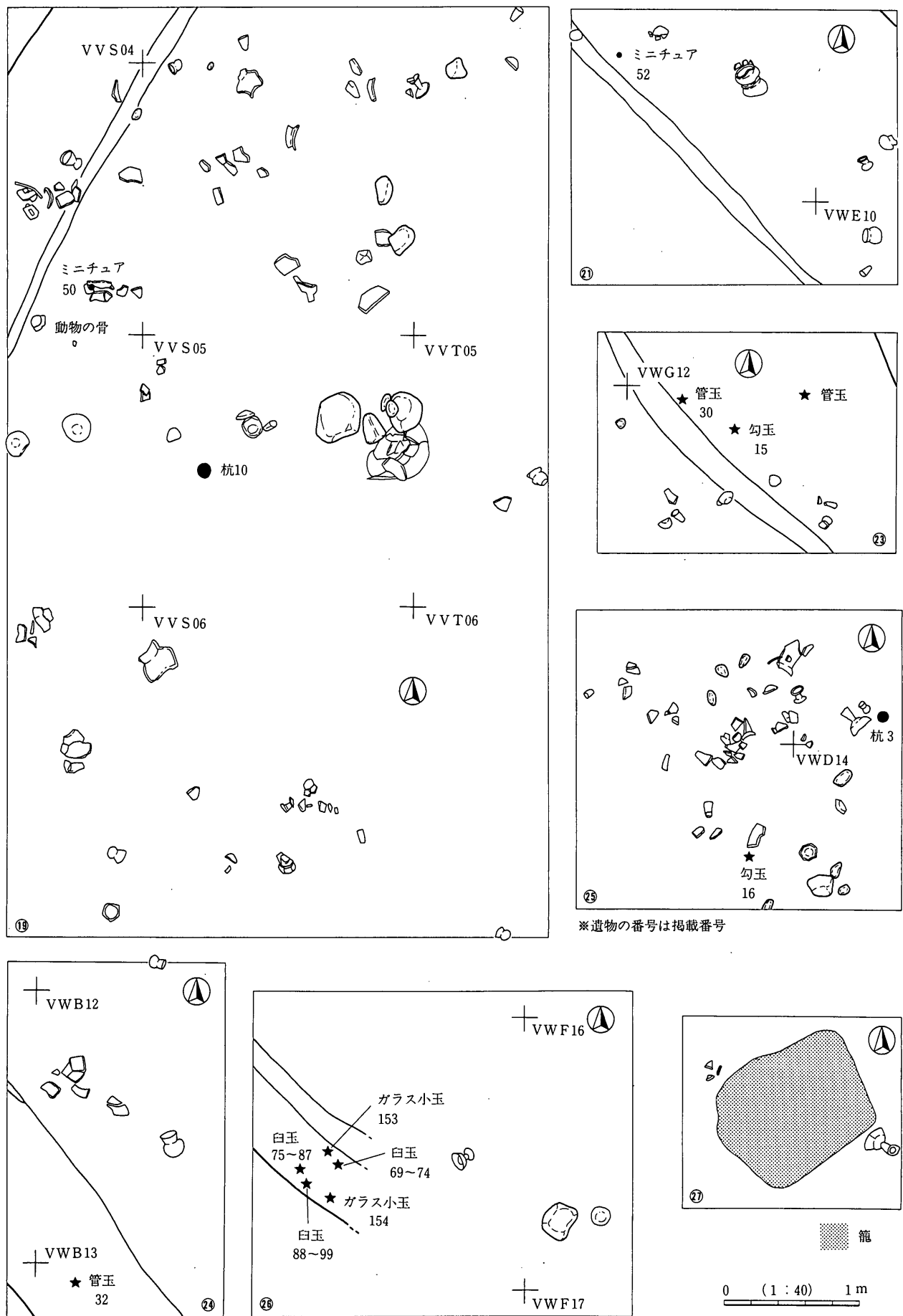




② ※遺物の番号は掲載番号

0 (1:40) 1m

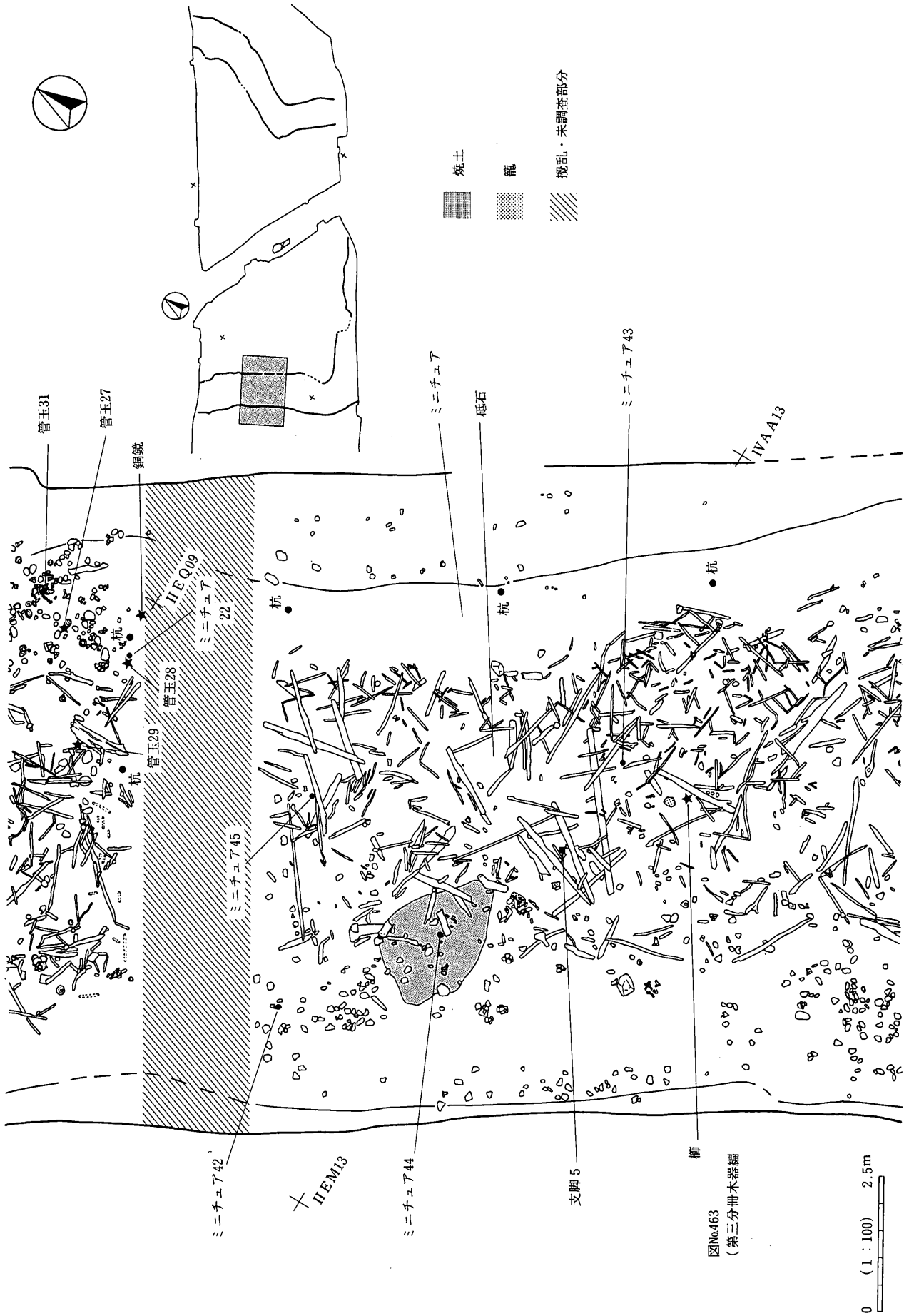
第132図 S D 1016主要土器等出土状況 6



第133図 S D1016主要土器等出土状況 7

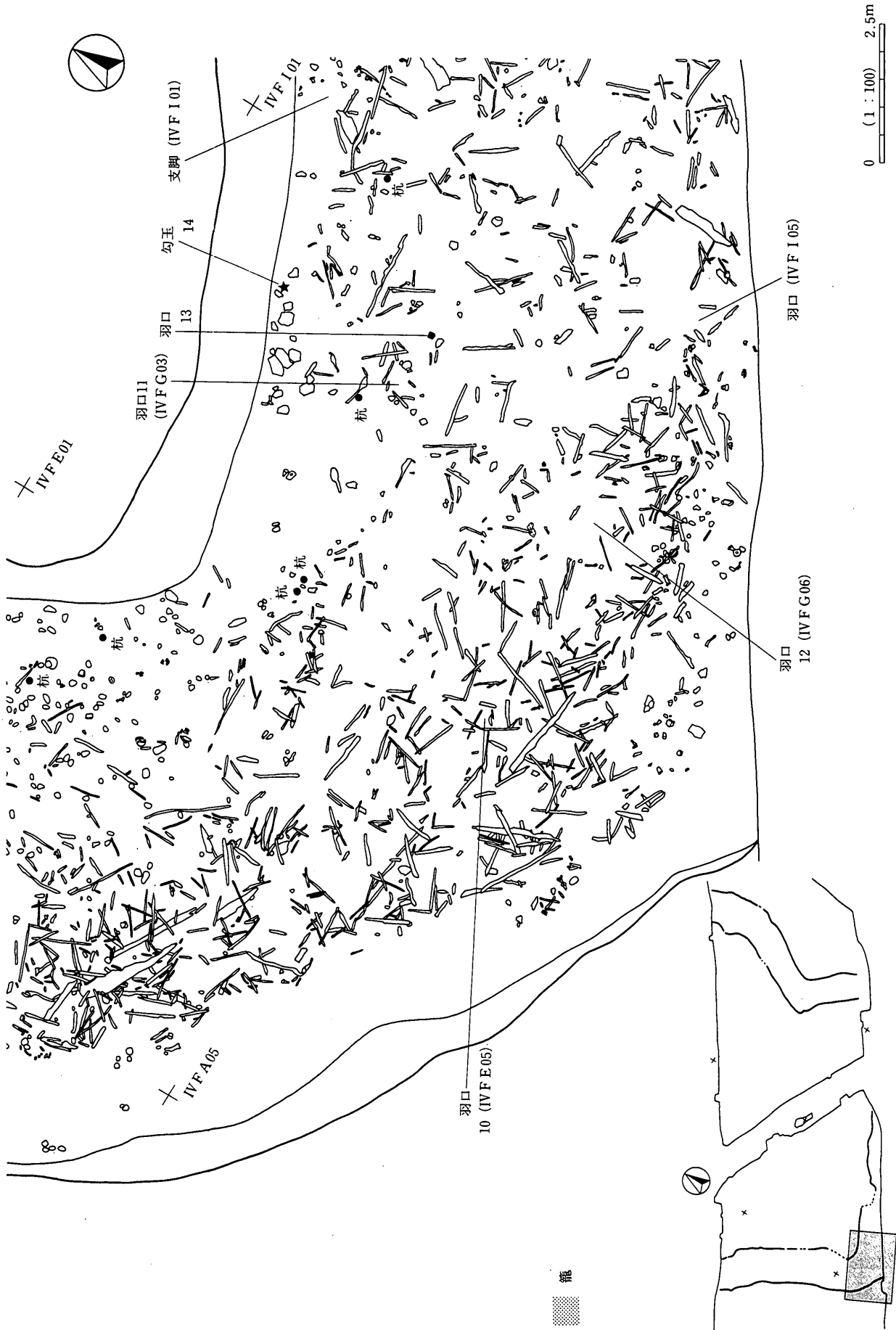


第134図 SD1016遺物出土状況1 (遺物の番号は掲載番号)

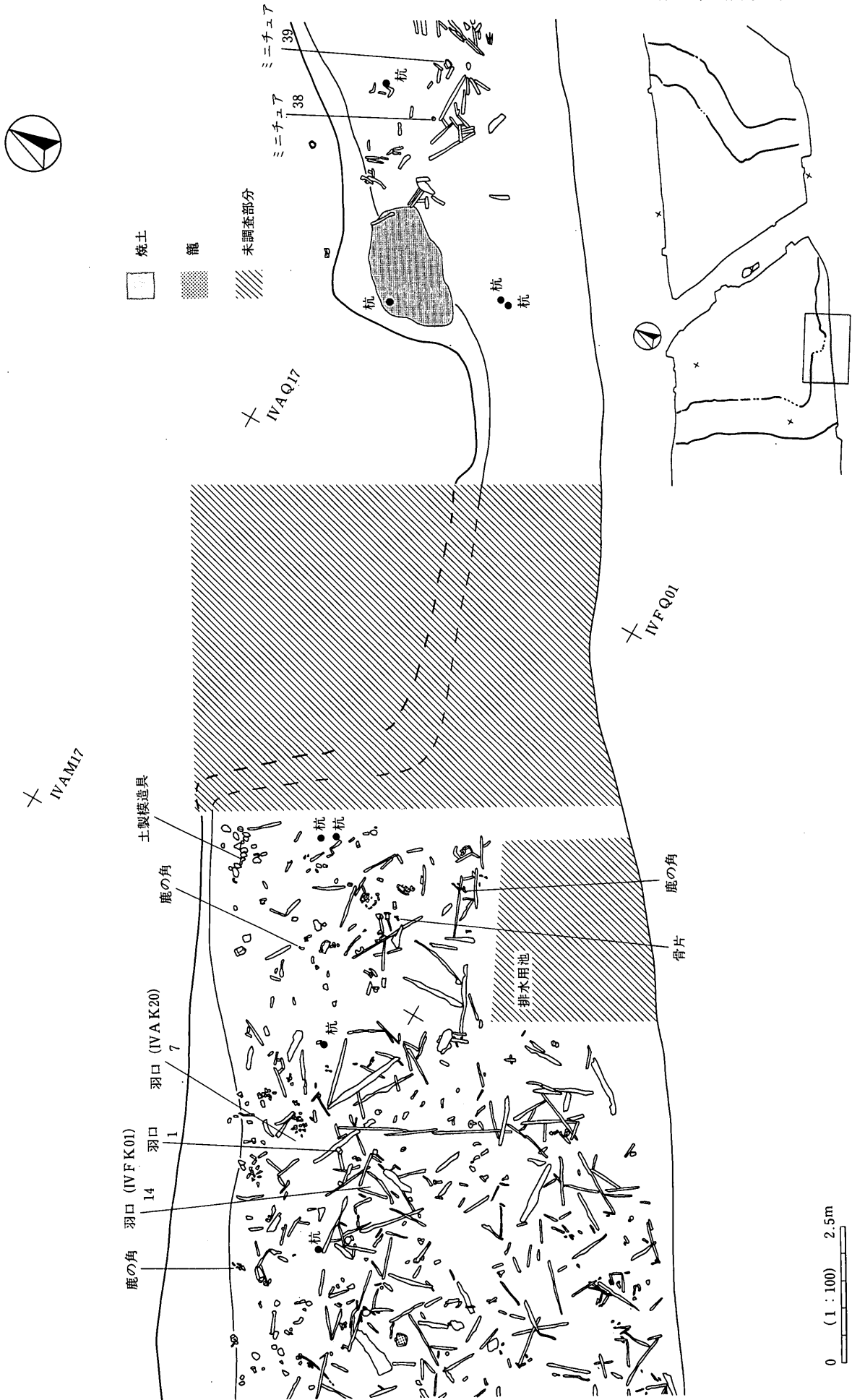


第135図 SD1016遺物出土状況2 (遺物の番号は掲載番号)





第137図 S D1016遺物出土状況 4 (遺物の番号は掲載番号)



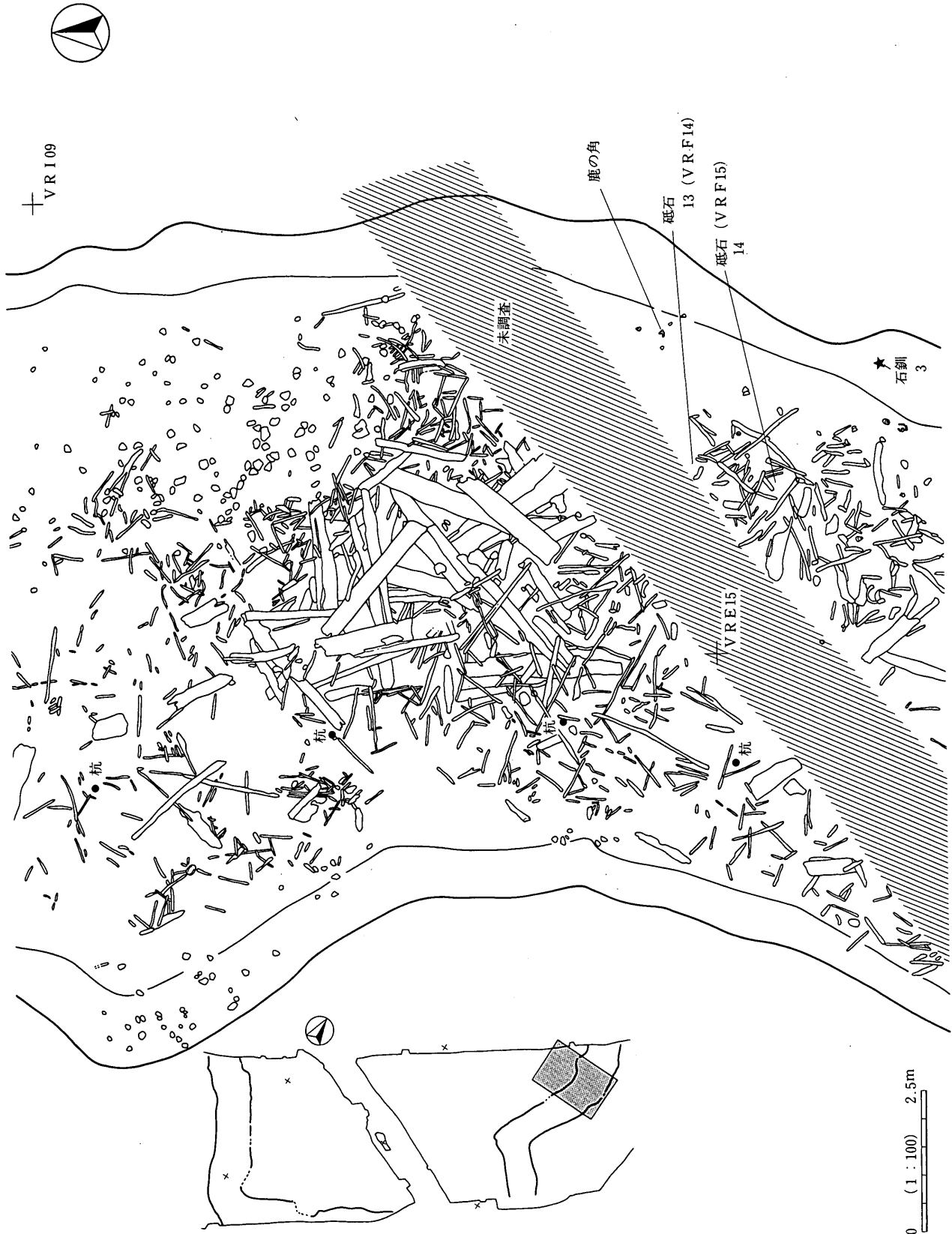
第138図 S D I016遺物出土状況 5 (遺物の番号は掲載番号)







第140図 SD1016遺物出土状況7 (遺物の番号は掲載番号)



第141図 SD1016遺物出土状況8 (遺物の番号は掲載番号)



第142図 S D1016遺物出土状況9 (遺物の番号は掲載番号)



第143図 SDI016遺物出土状況10 (遺物の番号は掲載番号)



第144図 SD1016遺物出土状況11 (遺物の番号は掲載番号)

## 4 遺物集中

調査時に掘り込みを伴わない土器や炭化物が集中的に検出され、遺物集中と認定された遺構がある。これらの遺構は検出された状態によって認定されたもので、性格を規定してはいない。そのため土器や玉類といった遺物のみの集中もあれば、炭化物、あるいは遺物と炭化物が組み合うものなど多様な形態が含まれる。しかも、掘り込みを伴わないので遺構自体の範囲や単位も明瞭でない。このように遺物集中とされた遺構は認定に曖昧さを残すため、遺構と断定しにくいものや他の遺構との区別が困難なものが多い。例えば、遺物集中とされたなかに土坑の誤認と思われる遺構があり、土坑として調査されたが浅すぎて遺物集中や焼土跡に類似するものもある。しかし、整理では検出された状態の違いの意味については明らかにできなかったため、調査で遺物集中とされた遺構と、整理で遺物集中と考えられる遺構を加えて報告することにした。整理で新たに遺物集中と認定した基準は必ずしも厳密なものでないが、土坑の遺構番号が付されながらも掘り込みが不明瞭なもの、調査で掘り込みが確認されなかったものであり、遺構番号は調査時のまま使用した。

ここで扱う遺物集中についてみると、微高地中央部では調査地区⑧-1、⑧-2区を中心に小規模なものが分布し、S D1016区画の東側外に規模の大きなS Q2016がある。なお、遺物集中に類似するが、判断のつかなかった遺構には掘り込みの浅い土坑S K1034・1035・2004・2023・2030・2045・2102・2108・2120・2148・2182・2183・2184・2189・2197・2209・2255・2287・2290・2298・2322・2325・2339・2357・2374と性格不明遺構S X2002がある。また、調査で遺物集中とされたS Q2013は土坑の誤認、S Q2007も土坑の見逃しや土坑埋土の土器が耕作等によって移動した所産、S Q2003も焼土跡とできる可能性がある。なお、S K2300・2303・2307・2358、S K2360やS K2348の隣接地ではS K番号が振られたものの、掘り込みが確認できなかった遺構がある。調査記録でも遺物等の散布と記されているが、範囲のみが記録されて内容が不明であるため、ここでは除外した。以下には小規模な遺物集中、S Q2016の順で述べる。

**S Q2001** ⑧-1区 IVAO07、AP07 (第145図)

S D1016区画内の南西部の北寄りに位置し、S D2014の上面で検出された。中央に炭化物が分布し、その南側には散在する少数の拳大の礫、北側には比較的大形の土器片が集中的に検出されている。土器は完形品がつぶれたというより、破片が若干集中するものである。

**S Q2002** ⑧-1区 IVAN08 (第145図)

S D1016区画内の南西部に位置する。長軸126cm、短軸104cmの楕円形の炭化物集中であり、出土遺物は古墳時代の土師器破片と砥石・鉄滓、中世の焼物がある。鉄滓は中世の焼物と共に混入したものと思われる。中世の遺物も認められるため、古墳時代の所産と断定できるか不安もある。

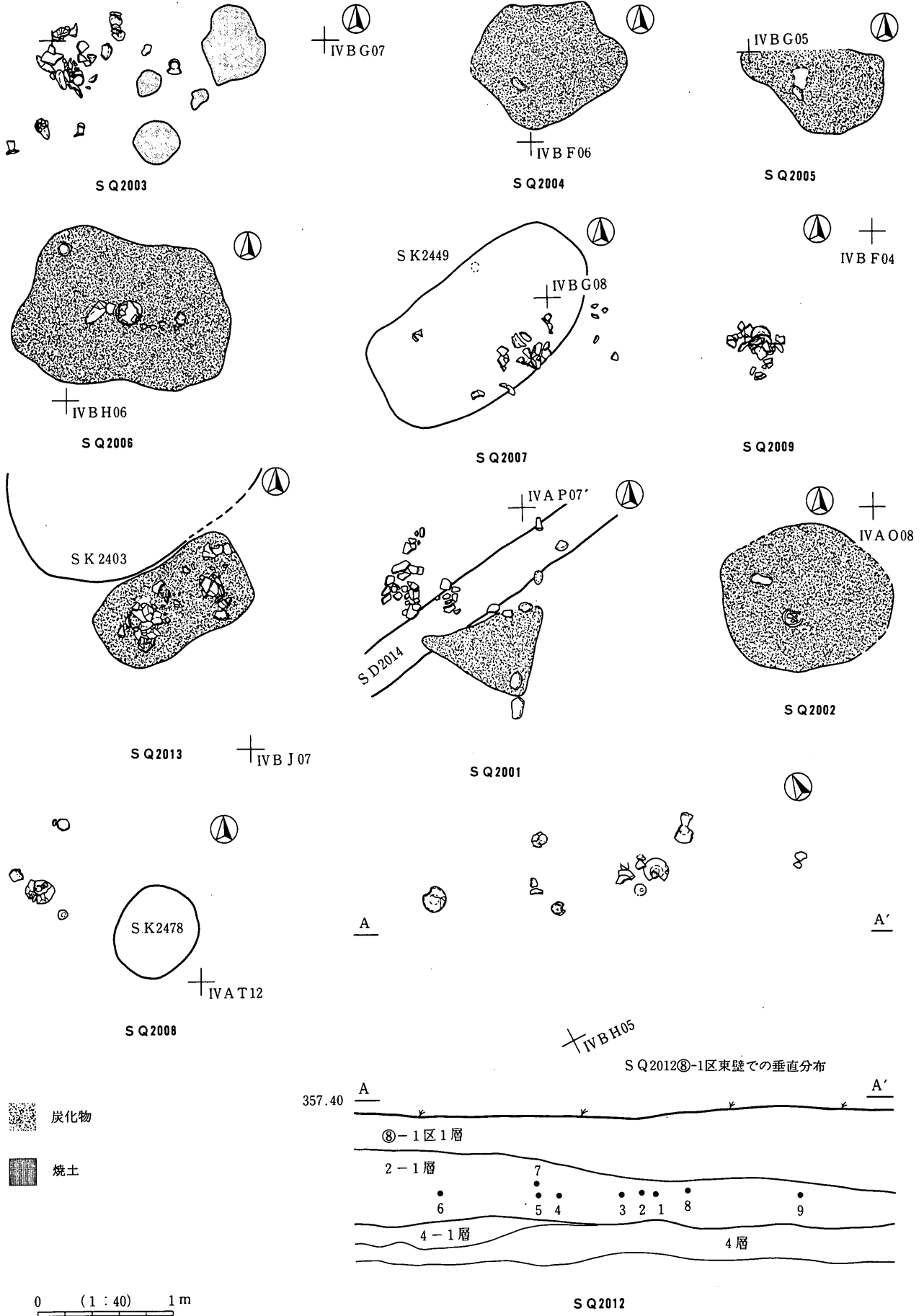
**S Q2003** ⑧-1区 IVBF07 (第145図、P L37)

S D1016区画内南東部の南西隅に位置する。東西約2m、南北約1.2mの範囲に焼土跡と土器が集中的に検出された。焼土跡は東側に4か所認められ、北からそれぞれ58×46、18×18、14×14、35×32cmの規模で楕円形・不製楕円形を呈する。出土遺物には土師器と支脚破片1点がある。土師器は焼土跡の北西側に拳大の礫と共に大形破片がまとまって出土しているが、完形になるものはない。これらの遺物は焼土跡と関連すると思われるが詳細は不明である。

**S Q2004** ⑧-1区 IVBE06、BF06 (第145図)

S D1016区画内南東部でも中央よりに位置し、南にはS Q2003が位置する。平面形は長軸115cm、短軸92cmの不整楕円形を呈する炭化物集中である。遺物は土師器の破片がある。

**S Q2005** ⑧-1区 IVBG05 (第145図)



第145図 微高地中央部の遺物集中1

S D1016区画内南東部の南西隅に位置し、西にはS Q2004が隣接する。北側をトレンチで破壊してしまったため、平面形や規模の詳細は不明であるが、ほぼ不整楕円形を呈する炭化物集中と推測される。その規模は東西110cm、南北方向は残存部で60cmを測り、中央部には焼粘土塊がある。出土遺物には土師器破片が多数あるが、出土状況は記録されていない。

**S Q2006** ⑧-1区 IVBH05 (第145図)

S D1016区画内南東部の南西隅に位置し、西にはS Q2004、東にはS Q2012がある。長軸161cm、短軸は115cmの不整楕円形の範囲に炭化物が検出されたもので、掘り込みが確認できなかったことから遺物集中とした。中央に土器破片と礫が検出されている。

**S Q2007** ⑧-1区 IVBF08・BG08 (第145図、P L37)

S D1016区画内南東部の南西隅に位置する。東西約1.5m、短軸1mの範囲に土器片が集中すると見られ、炭化物は伴わない。第1面で検出されたが、下面の見逃し遺構確認の第2面では重複する場所にS K2448・2449が検出されている。そのため、本遺物集中はこれらの土坑に帰属する可能性もある。なお、土器は破片が散在的に出土し、完形品はみられない。

**S Q2008** ⑧-1区 IVAS11 (第145図、P L37)

S D1016区画内南西部の南よりに位置する。南北50cm、東西1mの範囲に大形破片を含む壺底部や高坏破片、小型丸底土器などが出土した遺物集中である。第1面で検出されたが、見逃し遺構確認の第2面で南隣接地点にS K2478が検出され、関連すると思われる。

**S Q2009** ⑧-1区 IVBE04 (第145図、P L37)

S D1016区画内南東部の南西隅に位置し、⑧-1区調査区東壁際で検出された。ほぼ40cm四方の範囲内に土器破片が集中して検出されたもので、炭化物や焼土は検出されていない。性格は不明である。

**S Q2010** ⑧-1区 IVAS11 (第146図)

S D1016区画内南西部の南よりに位置し、隣接してS K2113がある。長軸63cm、短軸42cmの不整形を呈する範囲の炭化物集中で、東側1.6m延長先のS D2018脇には同様の炭化物集中が検出されている。両者は距離的にも近く、検出状態が類似しているので関連する可能性が高いと思われる。遺物は土器破片が少量出土した。

**S Q2011** ⑧-1区 IVAK10 (第146図)

S D1016区画内南西部、S D2014の上面に位置し、隣接してS K2323がある。本跡は30cm四方ぐらいの範囲に土器破片が数点集中して出土したもので、遺構と認めうるかは問題がある。

**S Q2012** ⑧-1区 IVBG05・BH05 (第145図、P L37)

S D1016区画内の南東部、南西隅にある。⑧-1区東壁にかかって土器の大形破片が検出されたため、後に調査区壁側を拡張したが、東側の広がり範囲は明らかにできなかった。なお、調査区壁の土層図と合わせると遺物出土層位は⑧-1区の2(2-1)層下部に該当する。ここでは略完形の高坏や器台が点在して検出され、他の遺物集中とは様相が異なる。何らかの活動に伴った土器が使用時のまま放置された可能性もあるが、断定はできない。

**S Q2013** ⑧-1区 IVBI07 (第145図、P L37)

S D1016区画内の南東部の南西隅に位置し、隣接してS K2403がある。見逃し遺構確認の第2面で検出されたもので、第1面で見逃した土坑底部の残存の可能性はある。平面形は長軸114cm、短軸66cmの隅丸長方形で、内部には大量の炭化物と、それに混じって土師器の破片が出土している。

**S Q2014** ⑧-1区 IVAI07 (第146図、P L37)

S D1016区画内の南西部に位置する。平面形は直径94~100cmの円形を呈する炭化物の集中で、土師器の





破片も併せて検出された。土師器は小破片で散在的に出土し、それぞれ別個体と思われる。

**S Q 2015** ⑧-1区 IVAI07 (第146図、P L 37)

S D 1016区画内の南西部、S K 2362の東脇に位置し、直径30cm前後の範囲に土師器破片が集中する。下部では掘り込みは確認されなかったため遺物集中とした。土器は破片が多数集中し、ほぼ1個体にまとまると思われた。なお、隣接して位置する遺物集中として扱ったS K 2362は関連する可能性もある。

**S Q 2017** ⑤-2区 VVL02、VM01・02 (第146図)

S D 1016区画内の北東部に位置する。本跡はS T 2009南西側の井戸跡S K 2172の東側に広がる土器集中で、広範囲に土師器破片が散在して検出された。なお、S F 2004は本跡と重複し、隣接するS K 2172で検出された上層の薄い数枚の炭層や土器破片も関連する可能性がある。出土遺物は大量の土師器や砥石、白玉が1個出土している。

**S Q 2020** ⑧-1区 IVAO11 (第146図)

S D 1016区画内南西部に位置する。第1面で検出された小玉類の集中であり、整理段階でS Q 2020とした。南側にはS K 2184があるが、玉類出土地点の下部では掘り込みが確認されていない。出土した玉は5点のみで滑石製の棗玉1点、白玉1点、スカイブルーのガラス小玉3点である。これらの玉類周囲の土はふるいにかけていないため、実際の玉数は詳細不明である。いずれも小玉であり、滑石製白玉とガラス小玉が組み合わさって使用されていた可能性もある。

**S K 2286** ⑧-2区 VVI09

S D 1016区画内南東部に位置する。検出時に長軸70cm、短軸60cmの楕円形の範囲に炭片が散布すると認められたが、土坑の可能性も想定してS K 番号が振られた。しかし、精査したところでも掘り込みは確認できず、遺物集中であると認定された。遺構番号は調査時のまま使用した。

**S K 2335～2337** ⑧-2区 VVI・VJ07 (第147図)

S D 1016区画内の南東部に位置する。検出時に土坑(S K) 番号が個々に付されたが、調査でも下面に掘り込みが確認されず、炭化物の散布・集中と認められた。配置関係はS K 2291を取り巻いて長軸220×180cmの範囲にS K 2337とされた炭化物散布範囲があり、その北西に長軸140×短軸80cmの楕円形のS K 2336とした部分が付属する。さらにその延長先にS K 2335とした炭化物集中がある。S K 2335は調査区境の排水用トレンチで破壊したため全容は不明であるが、確認できた範囲は長軸100cm以上、短軸100cm前後の楕円形となる。切り合いはS K 2335がS K 2334に切られ、S K 2337はS K 2304に切られる。なお、S K 2337はS K 2291を取り巻くようにみえるが、S K 2291埋土では炭化物が顕著に認められておらず、関連は不明である。

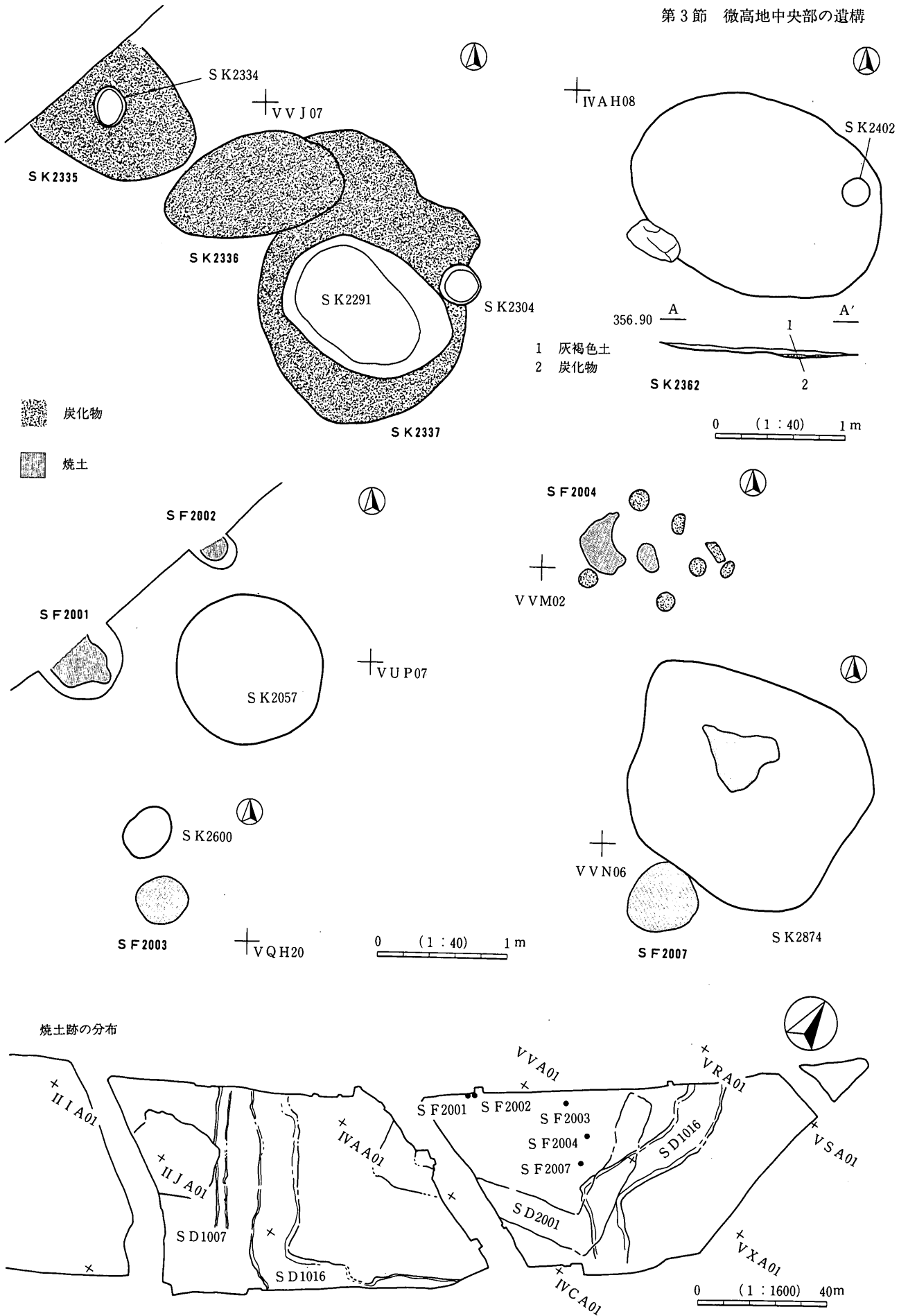
**S K 2362** ⑧-1区 IVAH08 (第147図)

調査時には土坑として番号が付されたが、明瞭な掘り込みを伴わない炭化物集中、あるいは凹地地形と思われる。S D 1016区画内南西部に位置し、隣接してS Q 2015がある。長軸約190cm、短軸約140cmの楕円形の平面形を呈し、掘り込みが不明瞭な浅いくぼ地状となる。上部には粘性のない灰褐色土、下部に炭化物(灰)層が認められ、この炭化物層の下から柱穴状のS K 2402が検出されている。土師器の破片が散在的に出土しているのみである。

**S K 2373** ⑧-2区 VVB13

S D 1016区画内南東部に位置する。検出作業中に炭片の散布が認められたことから土坑と想定されてS K 番号が振られた。しかし、精査の結果では掘り込みが確認できず、炭化物の散布する遺物集中と考えられた。規模は70×64cmの不整形な円形を呈する。断面等の調査記録がなく、詳細不明である。

**S Q 2016** ⑤-2・⑩-1区 VM-23・24・25、R-3・4・5・8・9・10・13・14・28・19(第148～156



第147図 微高地中央部の遺物集中3・焼土跡

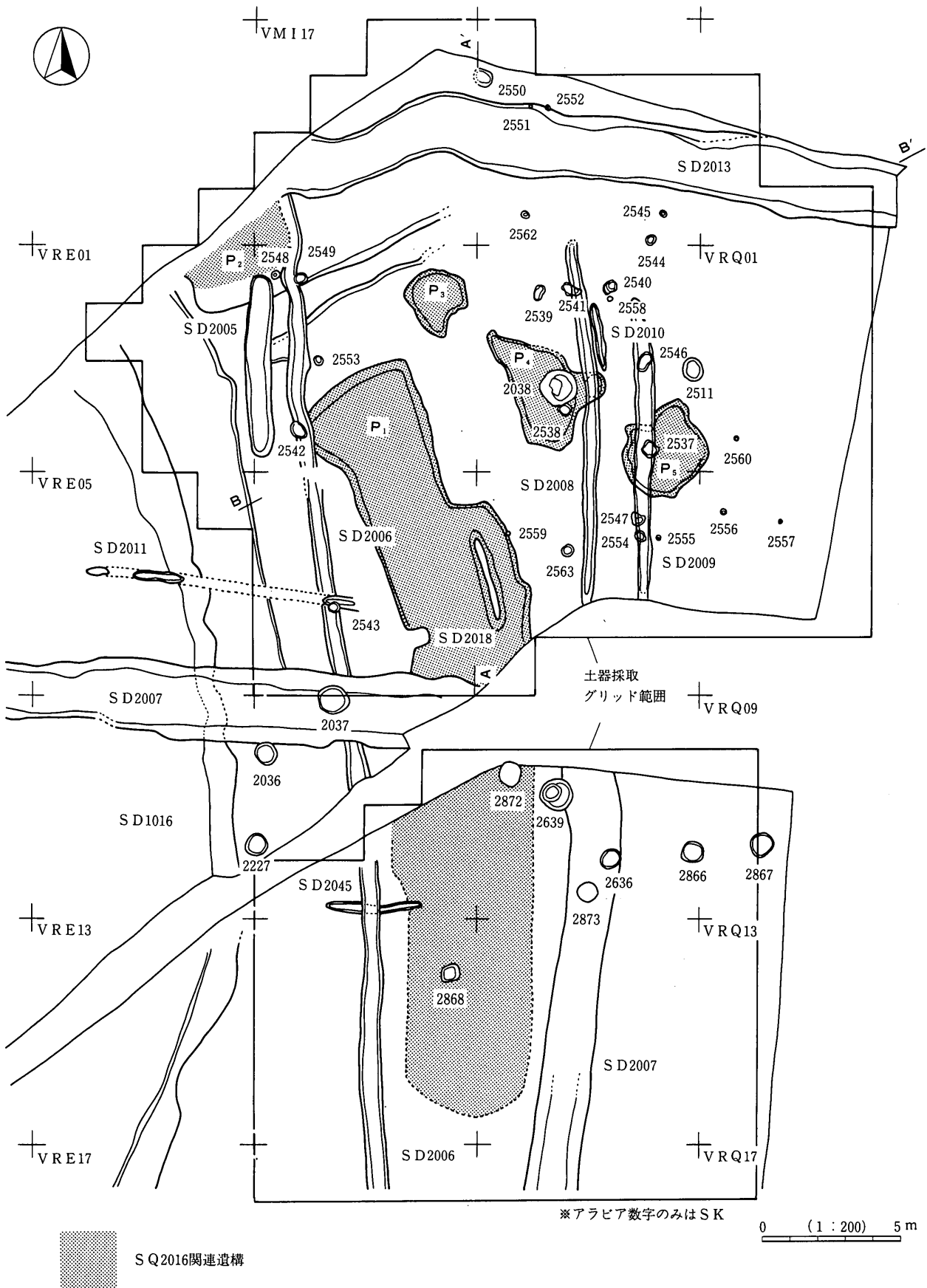
## 図・PL38・39)

微高地東端、S D1016東外側に位置し、⑤-2区と⑩-1区に年度を越えて分割調査された。初年度の⑤-2区では、東端部周辺を検出作業中に大量の土師器が出土し、何らかの遺構が存在すると想定されたが、形態が全くわからなかった。そこで、部分的な試掘溝を入れたところ細長い溝状の掘り込み（P1）が確認され、溝跡（P1）を中心としてその周辺に土器が散布すると考えられるようになった。しかし、この時点では検出土層の評価が固まっていなかったことや、散布範囲が曖昧であったため、周辺に散布する遺物の性格は明らかでなかった。次に土器散布範囲をつかむために試掘溝を延長したところ、焼土や大量の炭化物を伴う土器包含層が確認され、この包含層はP1の立ち上がりを超えて広域に分布することが判明した。ところが、S Q2016の構造が判明したのが調査終了に近い頃であったために、個々の土器出土状態を図化記録せずに2m四方の調査グリッド別に層ごとに土器を取り上げることにした。この作業を繰り返すなかでP1から離れるに従って遺物密度が減じ、さらにP1以外にもいくつか不整形な掘り込みが存在することが判明した。なお、初年度の内部検討会ではS Q2016が大量の炭化物・焼土を伴う遺物集中であり、そのあり方はS D1016や土坑と類似するものの、規模の大きさからみれば土坑のような個別の契機で生成された遺構ではなく、遺跡全体にかかわるものと推測された。翌年の⑩-1区調査では⑤-2区から連続する部分がかかると予想され、前年度同様に2m四方の調査グリッドごとに遺物を採取する方法が取られた。しかし、出土土器量は前年度ほどではなく、中心は⑤-2区にあることが知られた。また、⑤-2区ではS D1016脇に平行する溝状のP1が検出されていたが、⑩-1区では延長先でほぼ一致する炭化物集中が確認されたのみであった。なお、遺構番号のS Q2016は整理で新たにつけたものであり、底面で検出された掘り込みはS Q2016に関連する施設と捉えてP1・P2・・・と呼称することにした。

遺物集中という性格からも範囲は曖昧であるが、⑤-2・⑩-1区東端部付近での切り合いはS Q2016の1層上面でS K2035とS D2007～2010及びS D2013、1層下面検出のS D2005・2006に切られる。なお、S Q2016完掘後に検出された柱穴状のS K2511・2537～2560・2562・2563は、直接切り合いは確認されていないが、土坑配列が条里地割方向と見られることや、分布範囲西限がS D2006と一致していることから条里施行後の所産と判断した。そのため、これらの土坑は第1分冊の微高地域の古代遺構のところで扱った。また、S Q2016完掘後に不整形な掘り込みがいくつか確認されているが、埋土や配列状況からS Q2016に伴うと考え、整理でP1～5とした。これらの掘り込みはS Q2016内で一括調査され、個別に土層断面図の作成や土器採取は行っていない。さらに、⑩-1区ではほぼ重複してS K2868が検出されているが、下面で検出されているのでS Q2016に先行するか、掘り込みと類似時期の所産と思われる。

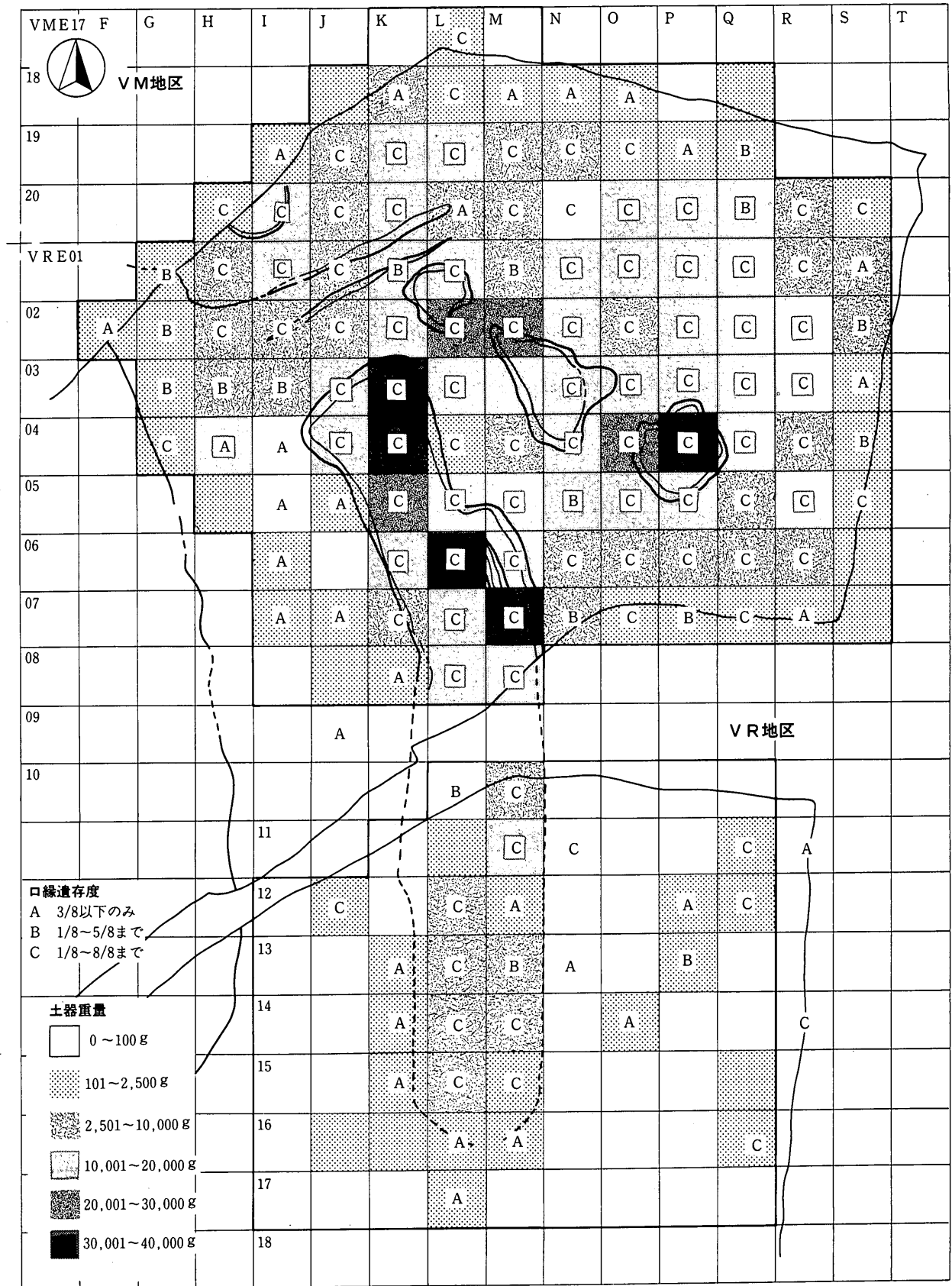
上述したようにS Q2016の捉え方は調査の進行によって変化したが、最終的に遺物の散布のあり方からひとつの遺物集中と認定した。S Q2016は他の遺物集中とは異なり、複数の層から構成されると共に、付属する施設と考えられる掘り込みもいくつか確認されている。そこで、S Q2016の様相については層的な様相、遺物出土状況などの平面的な様相、さらに底面で検出された掘り込みに区分して記述する。

まず、土層であるが、基本的に⑤-2区を標準として3層に大別された。上面の暗褐色土の1層、その下に大量の炭化物・焼土と土器を含む黒褐色もしくは黒色土の2層、さらに⑤-2区S D1016寄りのみに分布する褐灰色土を間層とした薄い炭化物層の3層である。3層の下は古墳時代遺構検出面となる褐灰色土である。周辺土層との対比や条里坪境となるS D2005・2006の検出状況から1層は水田域の古代水田耕作土に相当し、2層が部分的に灰・焼土層も認められるS Q2016の主体をなす土層、3層は土器の廃棄が行われる以前の土層と考えられる。このなかで2層は単一層と捉えられているが、部分的に数枚の灰・焼土層が認められている。これらの部分的な灰・焼土層は詳細な土層図が作成されなかったので、一部の写真記録でしか確認できず、詳細な分布や枚数は明らかでない。また、2層と3層の間に部分的に挟まる間層は



第148図 SQ2016と周辺の遺構図





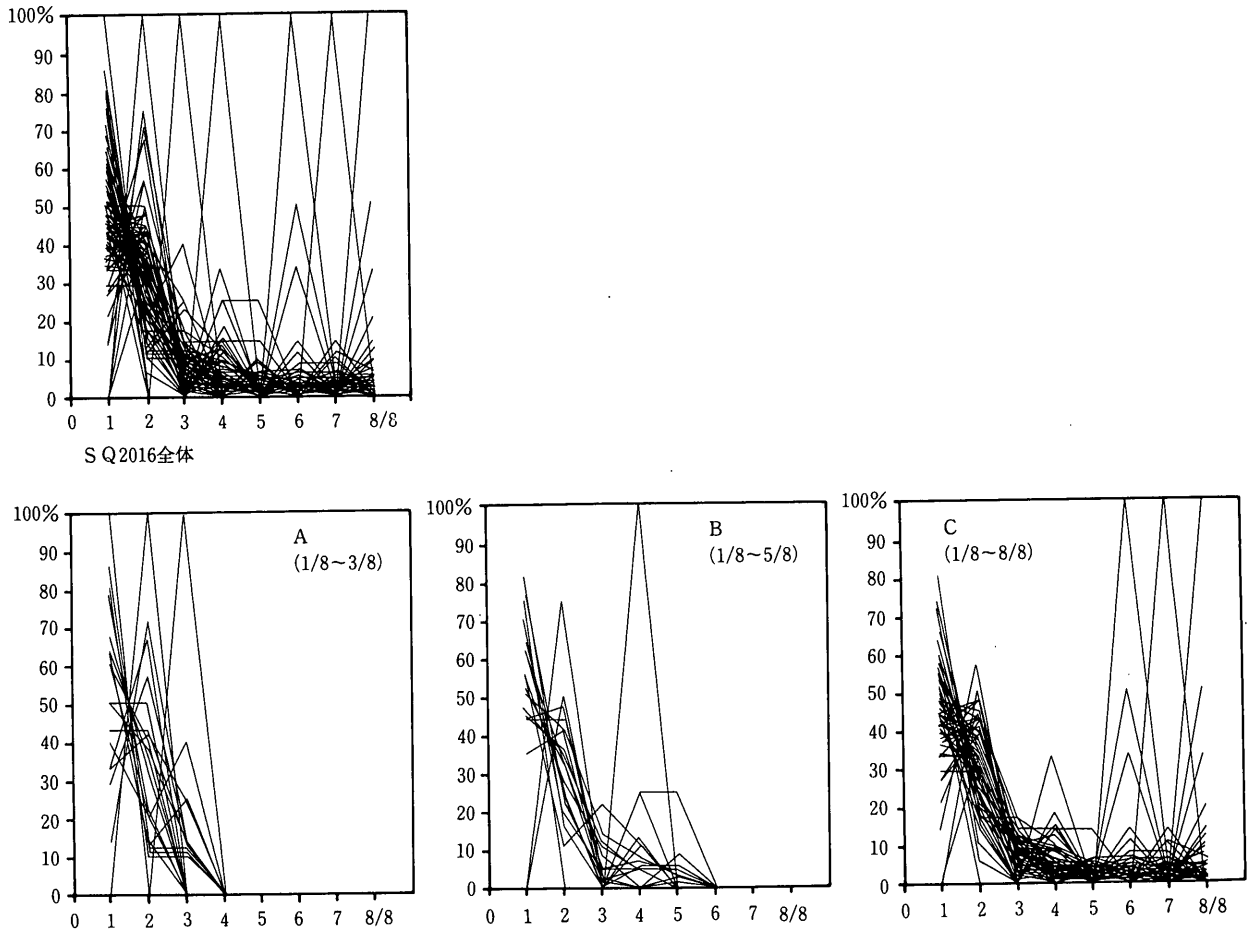
第150図 SQ2016グリッド別出土土器重量と口縁遺存度分類分布

S D1016よりのみ分布し、洪水による堆積土というよりS D1016掘削土の流れ込み、あるいはS Q2016のP 1構築後の流れ込みと思われる。層別の土器出土量は1層が少量、3層が非常に僅かで、1層から出土した土器は耕作で巻き込まれた遺物、2層がS Q2016の主体、3層がS Q2016が形成される以前の土器と考えられる。各土層の分布は第149図に示した。

次に遺物の出土状況である。出土遺物は古墳時代の土師器、土製模造具やミニチュア土器、転用羽口と思われる脚先端が発泡した高杯脚、支脚、土錘、筒形石製品、玉類、骨類、砥石などがある。これ以外に古代の耕作土からの紛れ込みと思われる古代焼物、あるいは混入と思われる中世焼物も僅かながら出土している。遺物採取方法は上述したように2 m四方の調査グリッド別に取り上げ、採取を実施した範囲は約730m<sup>2</sup>である。この範囲で採取された土師器重量は総計1051630gで約1 tとなる。これに古墳時代の土師器と思われるが、小破片や磨滅したために識別不能な破片の重量142825gを加えると合計1194455gとなり、さらに切りあう近世・中世・古代の遺構に入り込んだ土器量を加えると上述した重量をはるかに上回る土器が存在したと見られる。ちなみに、この土器重量は本遺跡で得られた古墳時代土師器の総重量の約1/3に該当し、ほぼS D1016出土土師器重量に匹敵する。また、総重量から割り出した単純な1 m<sup>2</sup>あたりの平均重量は約1440gと少量であるが、実際の出土分布には粗密がある。すなわち、土師器出土重量/グリッド数グラフでみると100g以下のグリッド数が突出し、1000gまでの出土重量のグリッドも一定数みられる。そして、20000gまではグリッド数をやや減じながらも一定数あり、それ以上は散在的で、最大は1グリッド出土重量が約39200gである。この様相を平面分布でみると、全体的に⑤-2区のP 1・3～5付近がもっとも多く、周辺にいくにしたがって重量を減じていく傾向を示すなかで、部分的に点的な粗密が認められる。口縁部の遺存度（個別口縁部破片が8分割したなかでどの位の割合残存するかを計測し、それをグリッド別の百分率にしたもの）と重ねてみると、口縁部6/8～8/8まで遺存する比較的完形に近い破片が含まれるグリッドが多く、周辺部ほど遺存度の低いグリッドが認められる傾向がある。さらにこの傾向のなかでも、部分的に口縁部の遺存状態が良好でないグリッドが分布する。このことは調査時に確認できた出土状態で破片出土が多く、完形品が置かれた状態で出土したと認められなかった点と関連すると思われる。また、口縁部6/8～8/8遺存の個体の接合関係をみても、特定グリッド内のみで口縁部6/8～8/8となったものも多いものの、複数グリッドに渡って接合しているものも見られる。このことから、使用時のまま放置されたものではなく、破片や完形土器が投棄されたと思われる。また、出土分布に粗密があることから廃棄場所としての範囲が緩やかに意識されていながらも、複数回、あるいは近似時期の複数の廃棄行為が集積して形成された可能性がある。なお、整理では2 m四方のグリッドごとに接合作業を行い、器種別に分類した後にさらに8 m単位ごと、さらに全体で接合をみたが、完形になったものは少なかった。これは破片や破損した後に廃棄された可能性を補強すると考えられるが、接合作業は出土量が膨大すぎて完全とはいえないこともあり、断定はできない。

土器以外ではミニチュア土器と土製模造具が特長的に認められている。ミニチュア土器は1遺構としてはS D1016について出土量が多く、土製模造具は遺跡内で最も多く出土したが、この2種の遺物は異なった分布状況を示す。ミニチュア土器は落ち込みP 2～5の外側に弧を描くように分布するが、土製模造具はP 1北端からP 3・4中間をつなぐライン上に直線的に分布する。このことから両者は廃棄された契機が異なると思われる。この様相はS Q2016が1回の土器廃棄で生成されたものではなく、複数回にわたる廃棄の集積と思われることに関連する。なお、ミニチュア土器・土製模造具以外の玉類や筒形石製品・土錘・転用羽口の可能性があるもの・支脚は出土量が少なく一定の出土分布の傾向は見出し難いが、土製模造具の出土分布のあり方に近いように思われる。また、骨は比較的多く採取されたが、ほとんどが火を受けて細片化しており、種の識別ができたものはニホンジカ、クマ、イノシシのみである。これ以外に骨鏃



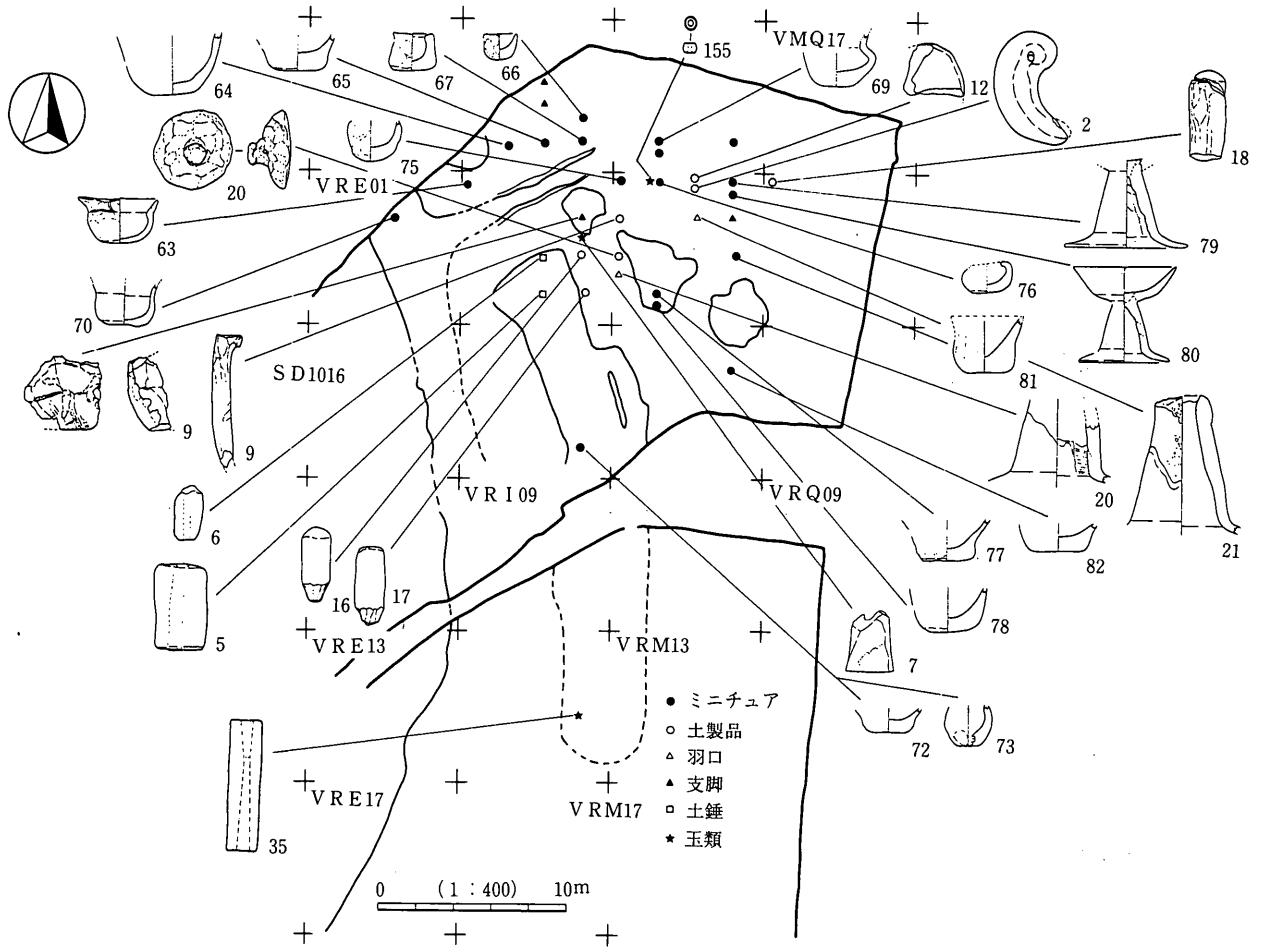


第151図 SQ2016グリッド別口縁遺存度比率の比較

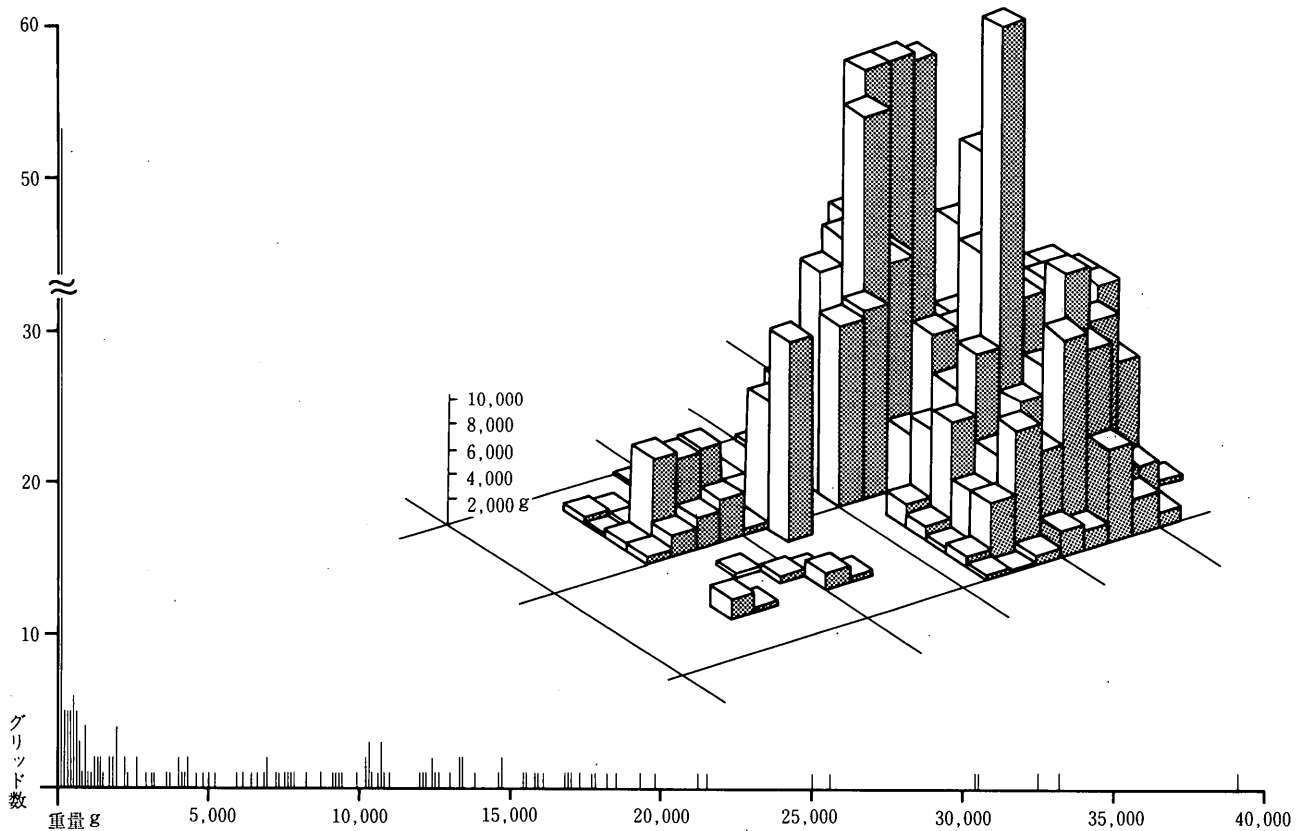
1点、鹿角の加工途中の未製品が出土した。

多様な遺物と共に、大量の土器が焼土や炭化物を伴って出土するあり方は土坑やSD1016と類似する。しかし、ミニチュア土器・土製模造具の存在や、その分布状況に差異が見られるように質的に異なる廃棄を窺わせる遺物もあり、同一のものとは見られない。また、SQ2016への廃棄にいたる行為自体にもミニチュア土器と土製模造具の分布の違いのように多様な種類や契機があったと思われる。

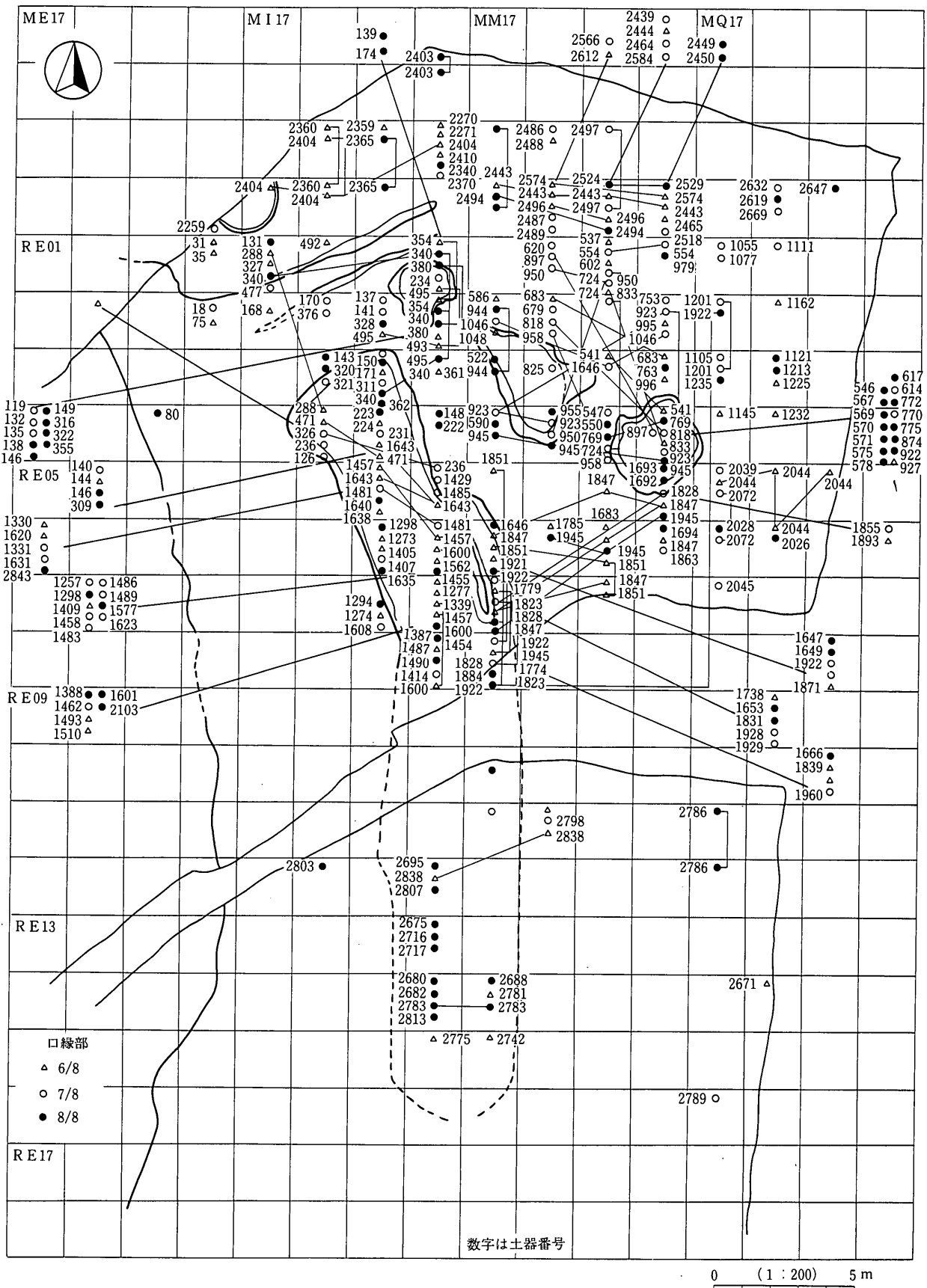
次にSQ2016完掘後に確認された掘り込みであるが、これらは形状からP1とP2～5までの2種にわけられる。P1はSD1016脇に平行して位置する細長い溝状の落ち込みで、⑤-2区では比較的明瞭な掘り込みが確認されたが、⑩-1区ではその延長先で炭化物散布範囲として認められたのみである。規模は⑩-1区の炭化物散布範囲を含めると幅約4.2m、長さ約27mで、⑤-2区では東南側に幅約1.1m、長さ約1.5mほどの小規模な溝を付属させる。⑤-2区内の断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは北側が約27cm、南側が浅く14cm前後である。埋土は最下面に3層が入り込み、SQ2016で大量に土器が廃棄される以前に構築されたことが知られる。また、2層中には数枚の小規模な焼土・灰層が確認され、複数回の焼却が行われたと推測された。これに対してP2～5は小規模な不整形の掘り込みで、P1北～東側を取り巻くように弧を描いて分布する。規模はP2が調査区壁に掛かって東西規模が不明なものの、1辺は約4.2m深さ20cm、P3が2.4m×2.1m深さ15cm、P4が4.8m×3.2m深さ14cm、P5が3.5m×3.1m深さ11cmである。P3～5の埋土や掘り込み面は記録がないため明らかでないが、SQ2016の2層を中心とすると思われる、3層は認められないと共に、P3では3層を切っている。P2に関しては調査区壁にかかったために土層



第152図 S Q 2016特殊品出土分布



第153図 S Q 2016グリッド別出土土器重量分布



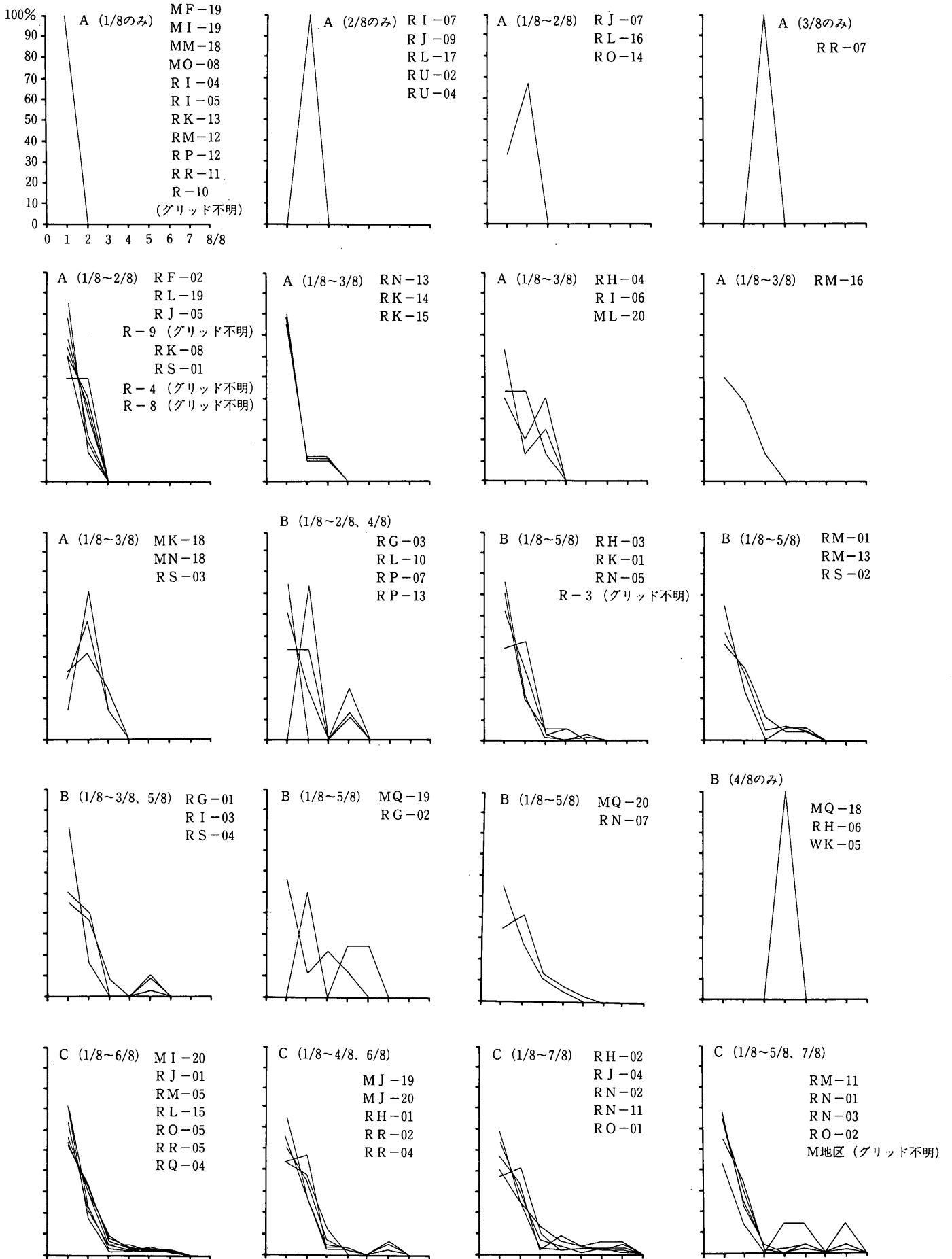
第154図 S Q 2016口縁6/8以上残存破片接合分布状況

が記録されており、P 2は2層下面まで立ち上がり、埋土中に薄い焼土層がある。このP 2埋土の下部には炭化物を多く含む土層があり、調査記録ではS Q2016の3層に該当するとされた。しかし、ほど近いP 3は上述したように土層の平面分布からは3層を切っているとみられ、しかもP 2内の3層とされた土層には間層が認められていない。調査時には炭化物層としての類似性から3層と誤認してしまった可能性があり、P 2埋土の炭化物を多く含む土層は直接3層に対比できないと思われる。このように調査所見には不十分なところがあるが、3層を含むP 1は3層を切るP 3に先行し、いずれも2層の堆積中、もしくはそれ以前に生成されたものと捉えられる。さらに、P 2～5の配置場所や形態の類似性からはP 2～5が継続的に構築されたもので、あまり長期にわたる時間差はないと思われた。なお、S Q2016の2層下面ではP 1北側からP 2とP 3中間をつなぐラインの畦状の盛り上がりが見出されているが、検出土層からすると古墳時代の所産と思われるものの、性格は明らかでない。疑似畦畔の可能性も考えたが、この場所が水田化されるのは近世になってからであり、水田に関連した遺構とは思われない。また、古代において1層が薄いために2層まで耕作が達して形づくられた土地区画に関連する疑似畦畔のような遺構とも考えたが、走行方向が条里方向と一致せず、しかも条里坪境となるS D2005・2006に切られるため肯首できない。

以上より、本跡は土器の出土状態からみても使用時のまま放置されたのではなく、焼却を伴う廃棄行為によって形成された遺構と想定できる。しかも、遺物の状況範囲からひとつの遺物集中と認定されたものの、廃棄行為はこの場所を特定しながらも複数回にわたる可能性が想定される。その根拠としてはS Q2016の2層中では複数の小規模な焼土や灰層が数枚検出されていることや、土器出土重量分布は単純な傾斜を示さず土器出土量の多いグリッドが点在すること、さらに掘り込みにも時間差が想定されることなどを挙げうる。個別の行為に付随する遺物や廃棄行為の単位については十分明らかにできなかったが、掘り込みP 1～5からすると時間と共に廃棄のされ方が変化した可能性が窺える。掘り込みP 1～5は2層の形成される以前の古い段階に構築され、なかでもP 1が他のP 2～5に先行すると思われた。さらに、各掘り込みの位置や形態に注視してみると、P 1はS D1016脇に平行するように設定されているのに対し、P 2～5はS D1016から離れた場所にP 1を取り巻くように弧を描いて配置される。時間の経過とともに掘り込みを伴う廃棄から伴わない廃棄へと変化したことが想定でき、掘り込みを伴う段階でもS D1016脇から次第に東側の低地側へ遺物分布が拡大していくと共に、P 1のようにS D1016に沿う形で設定されていたものが、後にはP 1北側を中心としてP 2～5が弧状に構築されていく変化だと思われる。また、この弧状にP 2～5が分布するあり方はミニチュア土器の出土分布も一過しており、ミニチュア土器は掘り込みP 2～4が設定された段階か、それに後続する段階の所産と思われる。

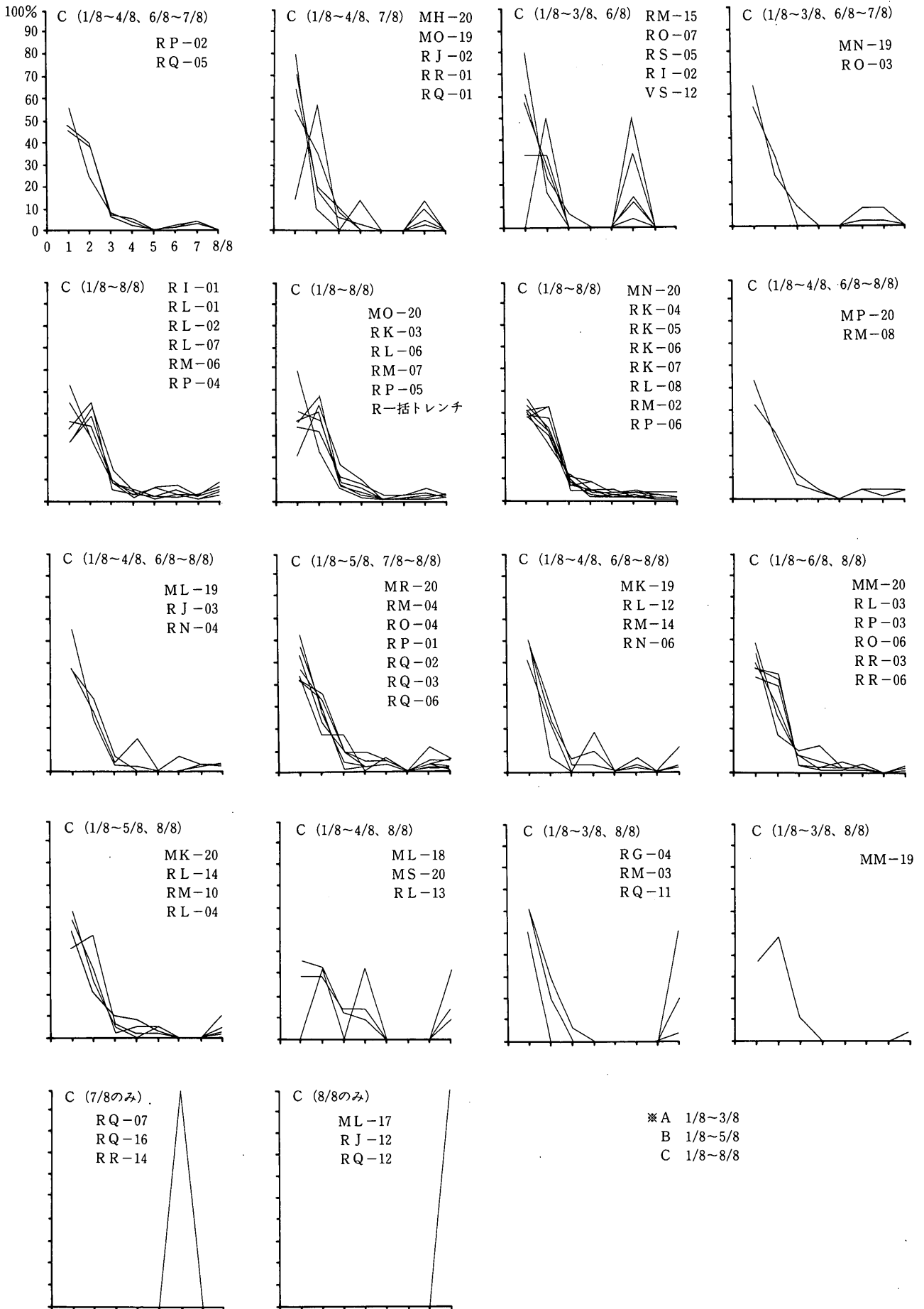
この変遷をまとめると次のようになろう。まず、S D1016に沿う形で細長い土坑状の掘り込みP 1が設定され、この設定前後に3層の炭化物層が形成されたと思われる。その形成契機は明らかでないが、土器が顕著に認められないことから草木などの焼却によるものであろうか。そして、このP 1を中心に遺物廃棄が行われ、やがてその周囲にも拡大していった。このなかで掘り込みP 2～5が構築され、これに前後するか、あまり時間を経ない段階でこれらを覆うように2層の土器廃棄とミニチュア土器の廃棄・使用があったのであろうか。この変遷はあくまでも遺構からみた推測で土器から検討されたものではない。なお、S Q2016自体が設定された時期は特定できないが、隣接した⑤-2区調査区壁にかかったS D1016の土層で埋土中位にS D1016外側（S Q2016側）に厚くなる炭化物層が認められ、この炭化物層がS Q2016に関連して形成されたとするならば、S Q2016は遺跡が形成された当初から存在したのではなく、途中のある段階で設定されたと考えられる。

なお、調査で明らかにできなかったこととして、S Q2016で検出された大量の炭化物がどのような形状の材で、どのような経過で焼かれたかの問題がある。この問題はS Q2016で行われた廃棄行為が焼却を伴っ



第155図 S Q2016グリッド別口縁遺存度比率グラフ1

第2章 遺 構



第156図 SQ2016グリッド別口縁遺存度比率グラフ2

ている点で、廃棄の中心的な位置を占める器物の種類に関連する。しかし、具体的に焼却された器物は特定できず、結果的に廃棄を行う元の行為の内容も明らかにできなかった。また、S D 1016でも焼却、あるいは焼却した材の廃棄が行われた可能性があるが、S D 1016を越えてわざわざS Q 2016に持ち込んで廃棄した必要性については大きな疑問として残る。S D 1016の場合では炭化物・炭化材、部分的に炭化した木材の廃棄が遺跡廃絶時に行われている可能性が想定されたが、S Q 2016での焼却はそれよりも以前の遺跡が存続している時期に行われている可能性がある。つまり、S D 1016で行われた焼却を伴う廃棄とは別の性格で、契機も異なると思われる。この点でひとつの憶測を示すと、S Q 2016の廃棄のされ方の変遷のなかで最も古い中心的な廃棄場所はP 1であり、その後P 2～5が設定されたと考えれば、廃棄はS D 1016側から開始され、その外側へ順次拡大していったことになる。このことからすると、S Q 2016はS D 1016区画内との関係から設定されたと考えられ、特に距離的に近いS D 1016区画内北東部とは何らかの形で連絡していた可能性が高い。また、S D 1016区画内北東部は遺跡内で最も大きいと思われるS T 2009が想定され、この北東部のS D 1016縁辺では中世の館内堀S D 2001に切られるとはいえ、あまり顕著な土器廃棄の土坑が見られないこと、さらにこの部分の井戸跡には顕著な炭化物を伴う土器の廃棄が見られないことなども関連するのかもしれない。つまり、他地区では類似した焼却を伴う土器廃棄行為は井戸跡や土坑で行われたが、北東部の空間ではS Q 2016が専属の廃棄場所として設定されていたとも考えられなくもない。このことはS D 1016区画内でも北東部が特殊な場所であることを示すことになるが、いくつか事実認定にも問題を残すため、あくまでも現時点での推測の1つである。

## 5 焼土跡

S D 1016区画内では焼土跡がいくつか検出された。いずれも掘り込みのない焼土面のみの検出で、伴う遺物がほとんど認められないことから古墳時代と断定する根拠は弱い。しかし、S K 2874脇で検出された焼土跡はS K 2874埋土内から外へ炭化物層が延びる同レベルで確認されている。この例から遺構検出面は古墳時代の地表面に近い位置と類推されるので、焼土跡の多くが古墳時代の可能性が高いと考えた。検出された焼土跡はS D 1016区画内で5基あるが、いずれも規模が小さい。また、火の使用が想定される類似遺構に炭化物集中や焼土を伴う遺物集中があるが、その区別は調査時の判断によるもので、差はあまり明瞭でない。よって、ここでは扱う焼土跡は調査で認定されたものを中心とする。なお、本遺跡では土坑・溝跡の埋土中に炭化物や焼土ブロックが多く認められたものがあるが、これらは個別遺構に含めて扱った。

### S F 2001 ⑤-2区 VU007 (第147図)

S D 1016区画内の北東部中央の北寄りに位置し、S K 2057の北西側に近接してS F 2002と並列する。検出された場所が⑤-2区北側調査区境周辺にあたったため、一部を排水用の溝で破壊してしまったが、確認できた規模は東西約40cm、南北は残存部で約38cmを測る。平面形は不整形であるが、平面記録では焼土面の周囲に土坑状の円形の輪郭が記入されている。この輪郭表現するものは浅いくぼ地状の輪郭か、炭化物散布範囲かは記録がなく不明である。何らかの火を使用した痕跡と思われるが、具体的な性格は不明である。近接するS F 2002と関連すると思われる。

### S F 2002 ⑤-2区 VU006 (第147図)

S D 1016区画内の北東部中央の北寄りに位置し、S K 2057の北側にS F 2002と並列する。検出された状態はS F 2001に同じであり、一部を排水用の溝で破壊してしまった。確認できた規模は東西約20cm、南北は残存部で約10cmほどで、ほぼ円形の平面形を呈すると思われる。調査記録は平面図しかなく、本跡もS F 2001同様に焼土面を取り巻いて周囲に円形の輪郭が記入されている。何を表現したものか不明である。本焼土跡は何らかの火を焚いた痕跡と推測される以外に性格は不明である。なお、S F 2001とは位置的に

近接するため、関連すると思われる。

**S F 2003** ⑤-2区 VQI20 (第147図)

S D1016区画内の北東部、S T2009の西側に位置する。直径40cmほどの円形の小規模な焼土跡で、掘り方を伴わず、火床面のみが確認された。形態が類似したり、関連が想定される遺構はなく、ほぼ単独の存在である。何らかの火を用いた痕跡と思われるが、具体的な性格は不明である。

**S F 2004** ⑤-2区 VVM02 (第147図)

S D1016区画内北東部、S T2009南西部のS Q2017の範囲内に位置する。周囲には小規模な炭化物集中が散在し、40×40cmの不整形と20cm前後の楕円形の2か所の焼土面に別れて検出された。これらは関連した遺構と考えられるが、場所的に重なるS Q2017との関連は不明である。なお、近接するS K2172では埋土の上部に数枚の薄い炭化物層が認められているが、本焼土跡に関連する可能性もある。

**S F 2007** ⑩-1区 VVN06 (第147図、P L23)

S D1016区画内の東側、S K2874に隣接して検出された焼土跡で、整理段階でS F2007とした。S K2874は⑩-1区調査区壁にかかって検出され、周辺には旧地表面が残存していることや、土坑内で層状にみられた大量の炭化物が土坑周辺で生成されたものであることがうかがえた。この地表面と思われる層位で拡張したところ本跡が検出され、S K2874に関連する焼土跡ではないかと考えられた。焼土跡は58×50cmの円形を呈する小規模なものである。なお、S K2874では埋土中でも焼土ブロックの集中が検出されている。

## 6 性格不明の遺構

調査時に性格不明とされ、S Xと冠された遺構が2基ある。ひとつはS D1007の北西部に隣接するS X1001であり、もうひとつはS D1016区画内の北東部、S D1016脇で検出されたS X2002である。ここではこれらを一括して報告する。

**S X 1001** ⑤-1区 IIEA07~EB08 (第157図、P L36)

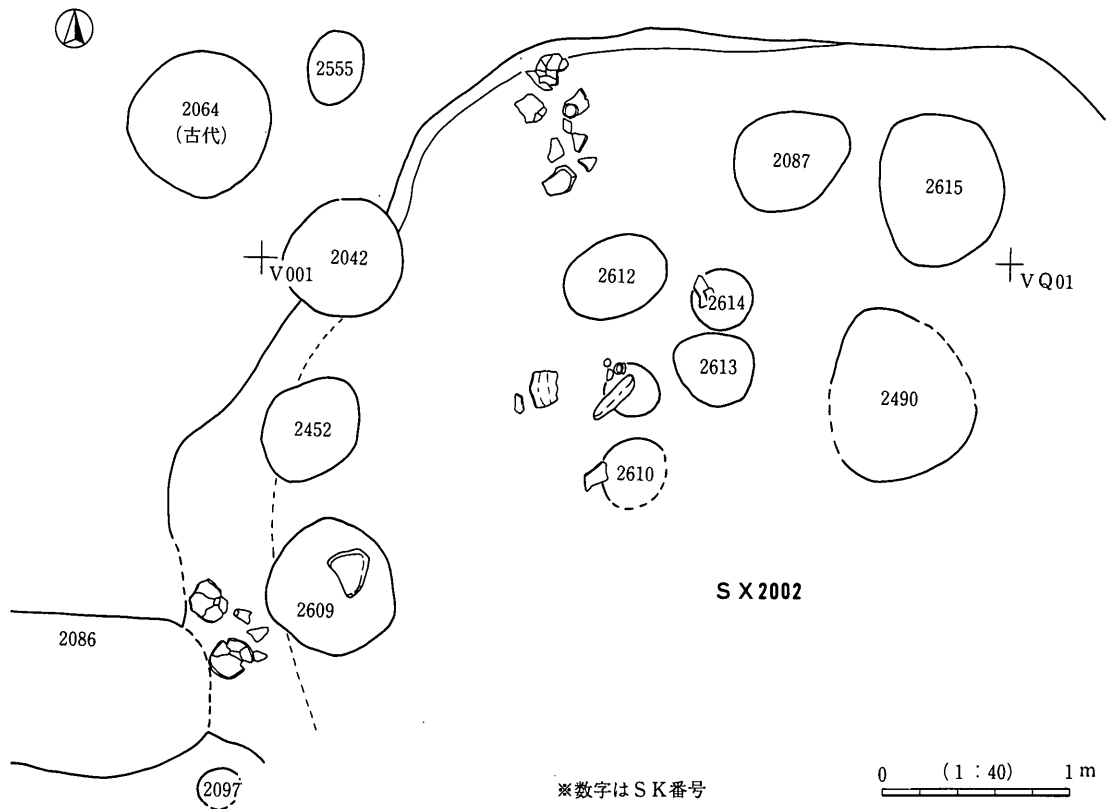
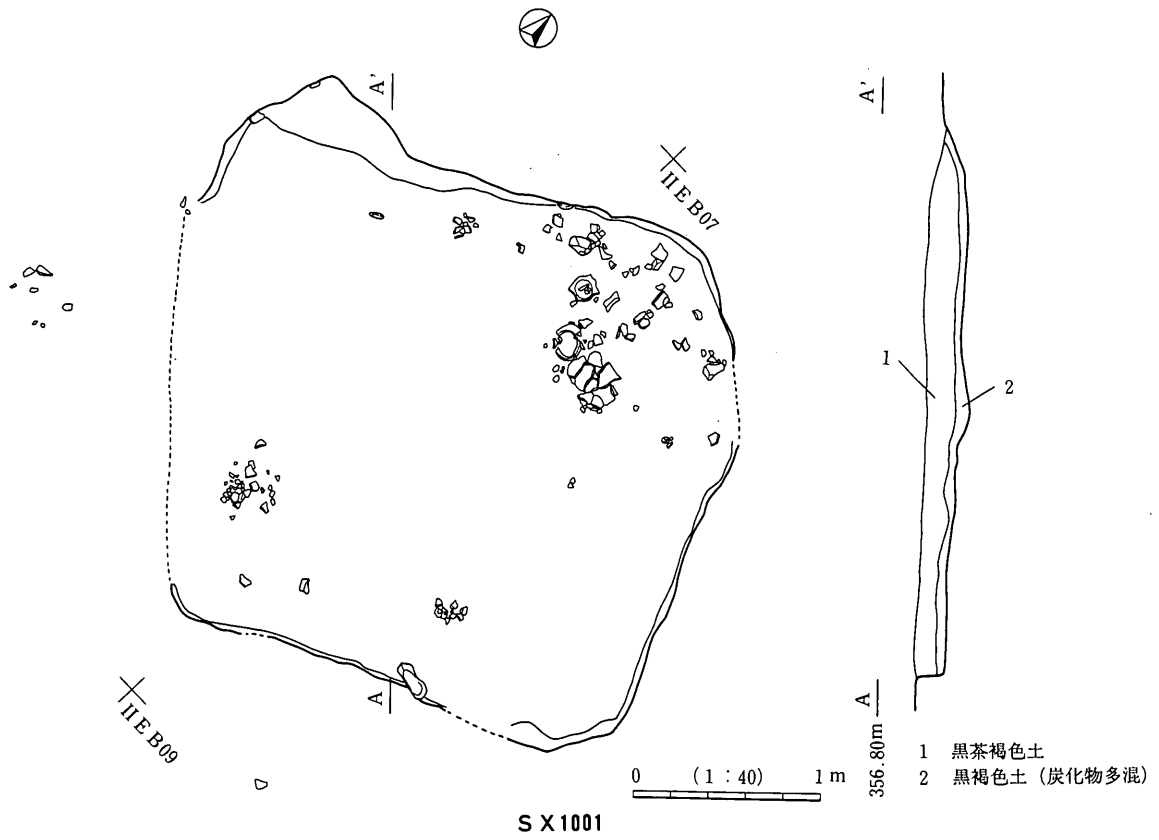
S D1016区画の西外側、S D1007に隣接して位置する。S D1007とは接するものの、切り合いは確認されない。検出時には炭化物の散布などから遺構の存在が推定されたが、検出面では平面形を確定しきれず、いくつか試掘溝を入れたところで底面上に薄い炭化物層を確認し、その範囲及び試掘溝の所見から平面形を確定した。しかし、西部は炭層が薄く、散在的に含まれるようにしか確認できなくなるため、西辺の範囲は不明瞭となった。平面形は西辺を明らかにできていないが、南北約270cm、東西約300cmのやや不整形な方形を呈すると思われる。壁はほぼ垂直ながら北西部は斜めで、底面は検出面からの深さ20cmほどのところにあり、ほぼ平坦で軟弱である。この底面上では柱穴や炉跡などの施設はまったく検出されていない。埋土は上層の黒茶褐色土と底面上の炭層及び炭化物を多く含む黒褐色土に分層された。出土遺物は比較的多く、北東隅周辺で土器が集中して検出されている。なお、調査メモでは部分的に焼けた土が認められると記載されているが、その場所は記録がなく不明である。遺構の性格は平面形態からすれば竪穴建物跡とも思われるが、詳細は不明である。

**S X 2002** ⑤-2区 VVO01~QQ20 (第157図)

S D1016区画内の北東部のS T2009の南東部に位置する。S A2007・2008としたS K2452・2612・2609・2615の他にS K2042・2086・2087・2452・2490・2610・2611・2613・2614と切り合いになるが、2042・2609・2490は明らかにS X2002を切ると判断された以外の切り合いは明確でない。また、S K2086はS X2002に切られるとされたが、S K2086自体の平面形の認定が検出当初困難であったことや土器の出土がS K2086の脇までしか分布しないことからすると、切り合いは逆であった可能性がある。

南辺は⑤-2区調査区南壁外へ連続するものの、隣接した⑩-1区では検出されず、東側はS D1016に続く





第157図 SX1001・2002

傾斜地で浅く立ち消える。規模は東西約570cm、短軸は確認範囲で約200cmである。底面は比較的平坦であり、壁は高台側となる北辺で斜めに20cmほど掘り込まれる。埋土は焼土粒や炭化物を多く含む褐灰色土の単層で、焼土や炭化物、土器は上部ほど多く、下部ほど少ない傾向があった。出土遺物には土器があり、散在的に検出されているが、大形の破片も含まれる。この遺構は検出段階で焼土や炭化物の散布から認定された遺構であったが、焼土や炭化物の散布以外では平面形の認定が難しいところがあった、形態からはS D1016へ向かって傾斜する部分に設けられた削平地とも考えられるが、平面形の検出に曖昧さがあることや土器や炭化物・焼土の出土が上部に多いこと、底面上で土器が出土せず、施設も検出されないなど遺構なのか疑問も残る。特に、土器の散布や焼土が検出されたあり方はすぐ西側に隣接するS Q2017との類似点もあり、遺物集中と捉えられる可能性がある。

## 第3章 遺物

### 第1節 古墳時代前期の土器群の分類

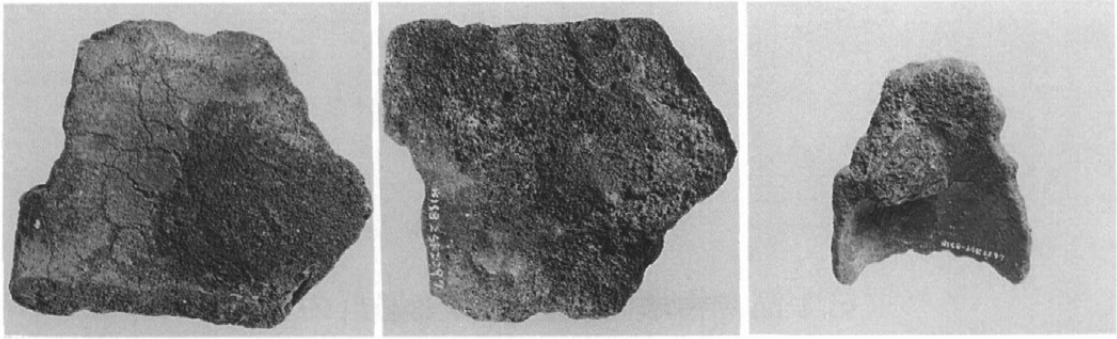
#### 1 土器分類の前提

本遺跡から出土した膨大な数量の土器群には、その出土状況からみて一般集落からの残された、もしくは捨てられた遺物とは異なった条件、要因が加わっていることが明らかである。その条件、要因とは土器利用の方法にかかわることであり、遺跡の性格そのものに起因する。土器の残存状況は一見すると完形個体が多数看取されるが、実際には小破片が大多数を占め、土器表面は劣化が著しく、土器整形の最終段階である表面調整が明瞭に観察できない個体が多数ある。これは本遺跡の立地条件、遺物廃棄の過程、方法などに依拠するところであるが、精製土器群の細部磨き調整などの識別が困難であり、土器分類にあたっては、これらの条件を考慮した。土器分類の目的としたところは、①時間枠の位置付け ②大・小地域の特性抽出による集団の把握 ③器種・組成からの遺跡の性格（階層・介在する人物） ④機能、用途の解釈等である。まず土器の形態分類にあたりその名称や用途について若干の整理をする。

『土器が容器である』ことを否定することはできないが、容器＝土器ではないことは、近年各地で出土資料が増加している木製容器・漆器・金属容器などの資料によって具体的に示されている（宇野隆夫1996、田嶋明人1996）。土器は容器としての機能が第1である（松本完1986）が、多くの研究者が指摘するごとく土器のもつ役割は単なる容れ物だけではなく、その用いられる場（空間）によって異なった意味が付加される（註1）。つまり土器は日常生活用具の形質をもちながらも、副葬品であったり、祭祀の道具、運搬の道具、文字に代わる道具など様々な役割をもっているわけである。外見からこの役割の違いを区分・分離する事は困難であり、ましてや祭祀空間で用いられた容器は当時の人々の精神的世界を反映する複雑さがある。しかし、土器製作の段階では容器をどういう空間で用いるか目的をもって製作していたであろうことは間違いなく、それこそが土器の本来的な機能だとも言え、今後は土器の機能からの分類も必要である。本址出土の土器は出土状況から日常生活用具とは異なる機能があったことは間違いなく、限定された特殊空間のなかでの機能を負わせるべきであり、そのことが土器の形態にも反映されている（都出1974「儀器化した土器、石製品は古い形を保守的にとどめることがある」など）と考えられる。

以上のことを念頭に入れ多量に出土した土器群に対し以下の方法で分類を行うこととした。分類は『形式・型式・様式』の概念に照した視点で、種々の土器群をまとめていくことが妥当かと考え、形態、技法などからの器種の分類を主とした。また用語については弥生時代から古墳時代の土器群を扱う場合に特定の器種にあてる名称（用語）に混乱がある（加納俊介1991など）ので、ここでは1. 器類－器種を総括する名称、従来から用いられていた用途が類推される名称として、土器全体の形態の特長を観点とした分類。2. 器種－同一器類内の形式分類で、口縁・胴部形態を観点とした分類。3. 技法－各器種の各部位の接合、穿孔などの特長を観点とした分類を試みた。

出土土器が多量であったため全ての個体を図示・掲載できなかったが、作図にあたっては各部位の径が1/8以上残存したものを対象に網羅し、その中から選択して図版として掲載した。各遺構の掲載土器に



第158図 2次焼成により発泡した土器片 (S K2297出土壺) (S ≒ 1/2)

関しては観察表を参考にされたい。

## 2 掲載土器 (第209~418図)

本節で取上げる土器は、祭祀域出土の古墳時代前期の土器を主とし、補足資料として水田域から出土した弥生後期から古墳時代に帰属する土器を扱う。古墳祭祀域出土の土器群の主体は東日本では資料の希薄な古墳前期後半の所謂布留式併行期の土器である。布留式段階の土器がこれだけ多量に出土した遺跡はなく今後様々なかたちで検討が加えられる資料と考えている。

多量に出土した土器のなかから本書に掲載した土器は、土坑216基からの出土品1887点(001~1887)、祭祀域を巡る大溝S D1016からの出土品1588点(2001~3588)、その他の溝からの出土品120点(3589~3708)、微高地縁辺の低地境の土器集中SQ2016からの出土品1495点(4001~5495)、その他の土器集中などからの出土品231点(5496~5726)、検出面及び後世の遺構からの出土品232点(5801~6033)の総点数5553点である。これら土器の扱いは、実測の段階で器の1/8以上残存するものを全て作図し、土坑出土土器は全て図版とし、溝、土器集中区などの遺構出土土器は高杯脚部を除いて全て掲載した。従って各遺構出土土器の器種組成率は径の1/8以上の個体数を対象として掲載図版から導きだすことが可能である。検出面及び後世の遺構内から出土した土器は口縁部の残存する個体を中心に作図し、約1/3程度を掲載した。観察表は掲載した土器についてのみ作成し、図中に表現できなかった土器の状況のみを記載した。また観察表の収納番号は各遺構別の通し番号であり、実見の際の照合番号となる。

## 3 器種分類

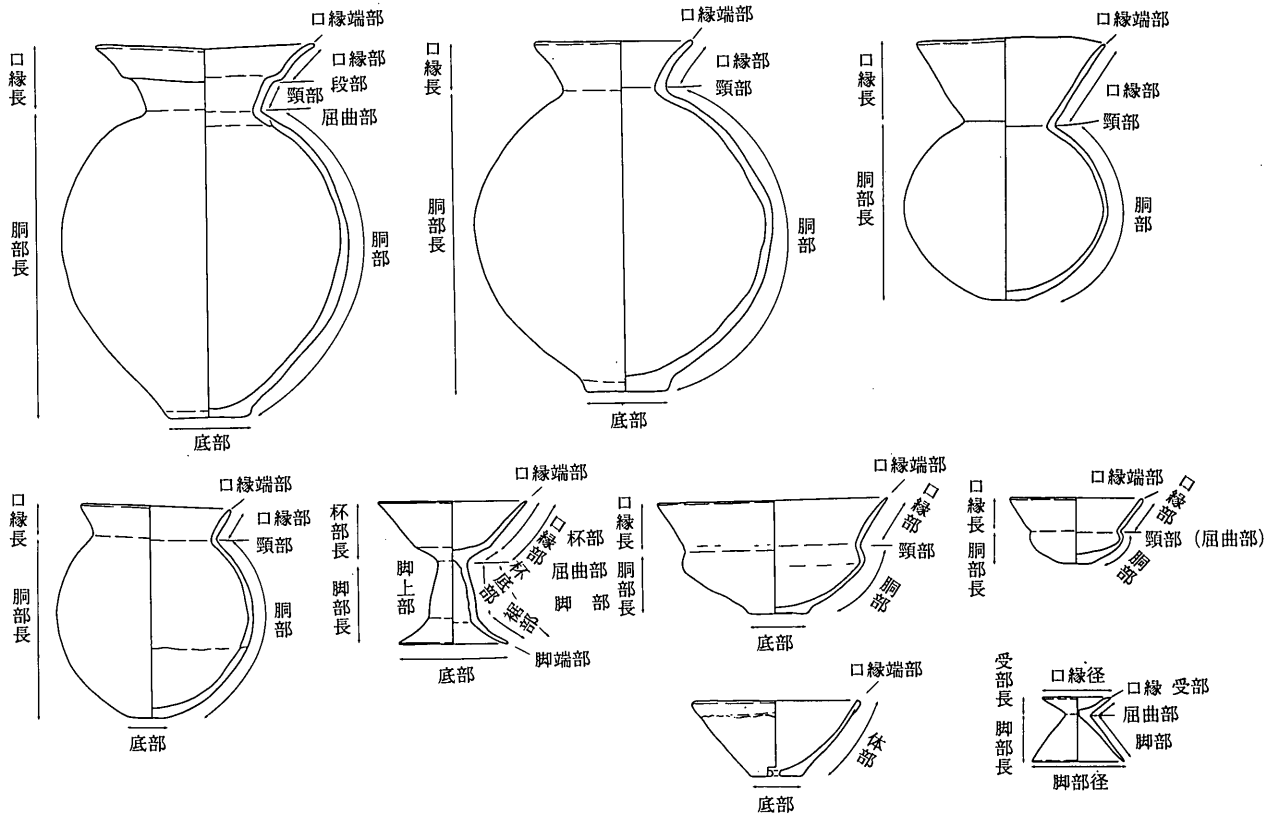
### (1) 器類

土器の器形からその用途が類推される基本的な分類として器類という名称を設けた(加納1991)。従来の分類名称では器種を統括する用途名称分類である。本遺跡出土土器の器類は、壺形土器、甕形土器、高杯形土器、小型丸底形土器、鉢形土器、器台形土器、ミニチュアがある。壺と甕、小型丸底と鉢・小型甕については以下に詳細を記述したが口径と口縁長、口縁長と胴部径の比率、器高、口径の大小によって分類した。

用途は従来の貯蔵、煮沸、供献といった日常生活用途として解釈せざるをえないが、壺以下の各器類の機能は、この祭祀域のなかで使用が完結した祭祀具と見ている。

### (2) 器種

器形・小形式として同一器類を細分した名称として用いた。細分にあたっては口縁・胴部・底部の形態の特長を抽出し、容量、技法などを加味した。器種細分に用いた記号は全体形状を観点とした相違からの



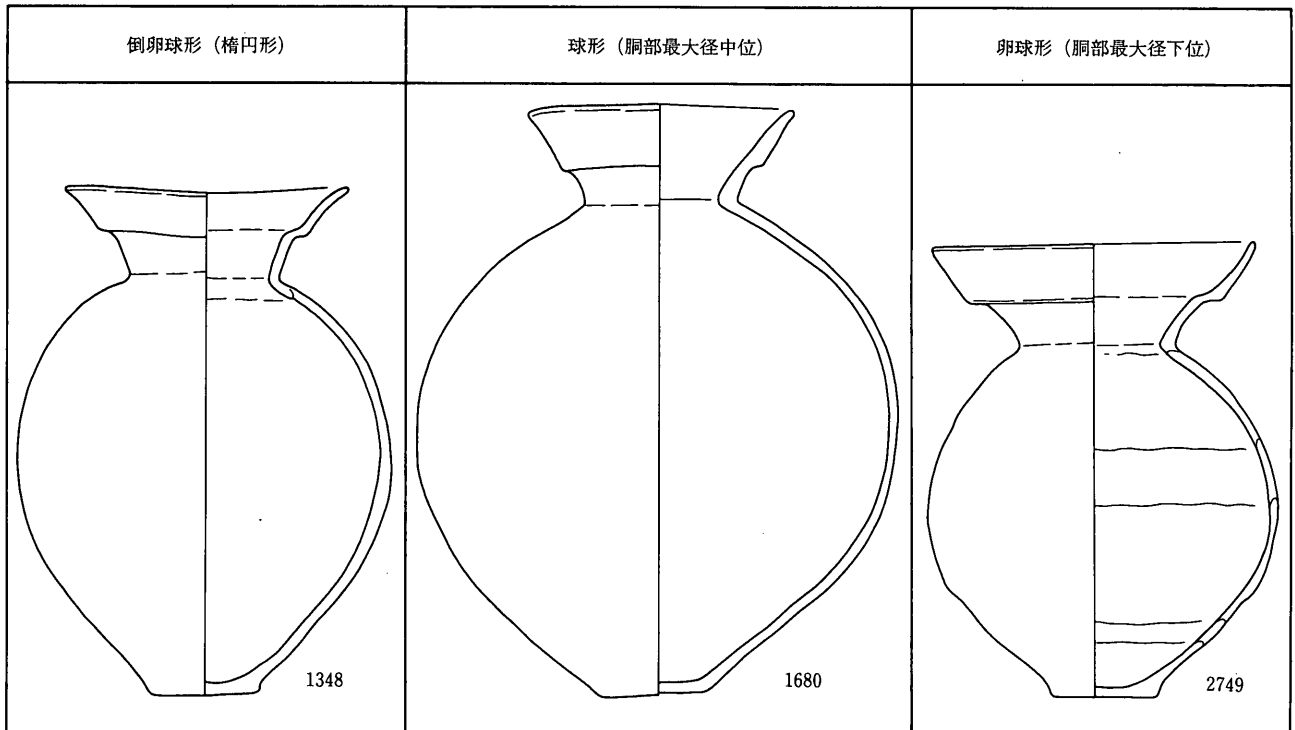
第159図 土器の部位名称

分類をローマ字記号の大文字A・B・C…で、全体形状に準じる形態、技法を観点とした細分をアラビア数字の1・2・3…で、口縁部の微細形態を観点とした細分をローマ字記号の小文字のa・b・c…で、底部・脚部の形態を観点とした細分をカタカナのア・イ・ウで、容量を観点とした細分をSS・S・M・L・LLで、各器種の接合技法を観点とした分類を○内アラビア数字の①・②・③…で表記した。以下に各器類及び器種分類の概要を述べる。

#### ア 壺形土器（以下壺と呼称する）（第160～163図）

壺は口縁部の形態によって二重口縁壺、広口壺、直立口縁壺に分類され、容量によって特大型、大型、中型、小型に分類される。広口壺は甕と極めて近似した形態のものがあり、壺か甕かという用途名称（器類）を適切に付することが難しい。最終整形痕の観察から前者にミガキが、後者にハケもしくはケズリが多用される傾向にあるが外形は同一である。また使用痕跡でも、いくつかの壺の内外器壁には炭化痕や炭化物の付着が認められ、明らかに「煮炊き」の用途と判断された。そこで壺か甕かの分類では従来からの感覚的な指標を加味して、口径と頸部径（屈曲部径）の比率、口径と口縁長の比率から求め、壺は口径に対して頸部径が2/3以下（口径×2/3≧頸部径）で、口縁長の4倍を超えない口径（口縁長×4>口径）をもつ器形に限定した。つまり壺の外観は頸部が締め、屈曲部から比較的長い口縁部が外傾する形状となる。また装飾性の強い口縁部や入念なミガキが最終整形として残る器も壺とした。

整形はヘラミガキが基本であるが、ハケ、ケズリを施すものも見受けられ、二重口縁壺では頸部、口縁部に装飾を施すものもある。底部は輪台技法によるドーナツ底や粘土円盤からの輪積みで、平底を基本とする中・大型壺、ケズリにより丸底と平底となる中・小型壺がある。



(1:4)

第160図 壺A類の胴部形態

#### A 器種分類 壺A類（二重口縁壺）

頸部と口縁部に段を作り粘土帯を付加して口縁部を作る壺を指す。従来から複合口縁、折り返し口縁、有段口縁と呼称されていた壺を一括した。有段部の成形技法によって7種類、接合技法によって3種類に細分した。口縁形状は外傾、外反、内湾する3者がある。胴部は最大径が中位にある楕円形状のものと同球形のものがある。壺A類は古墳時代前・中期の指標となる器種であるが本遺跡出土品の大半は、器壁が厚く有段部の接合突出を残さない形態である。

A 1類 有段部が内外面とも明瞭で、水平もしくは外傾する一定幅の段部がある形態。口縁段部外側もしくは下方に僅かに突出部をもつものもある（2001・2248）が、有段部外面端部は丸味を帯びている。口縁部の微細形態によって大きく外反するA 1 a類、内湾するA 1 b類、外傾もしくは直立するA 1 c類に細分する。口縁端部はやや尖り気味に丸くなるものが大半であるが、A 1 a類とA 1 c類には口縁端部がナデにより面取りが施されるA 1 ㊦類とA 1 ㊧類がある。A 1類のうち口縁高（口縁長）が頸部長に比して長い器種（0172）をA 1'類とした。胴部と頸部の屈曲部、口縁部に装飾粘土帯を付すもの（0912・0913・0914・0915・0916・2006、0061）、胴部上半に突起を貼り付けたものがある（1437）。

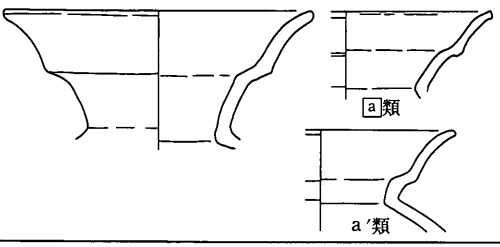
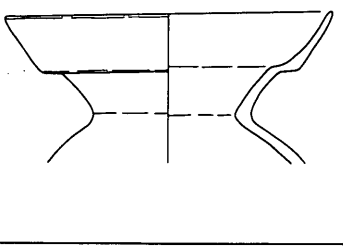
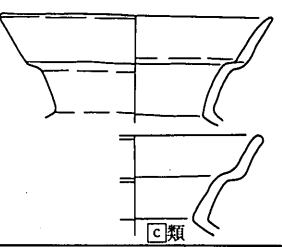
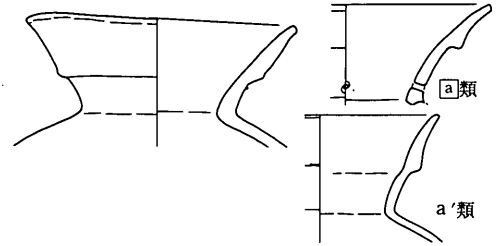
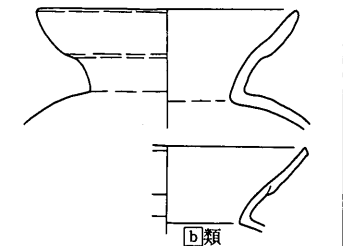
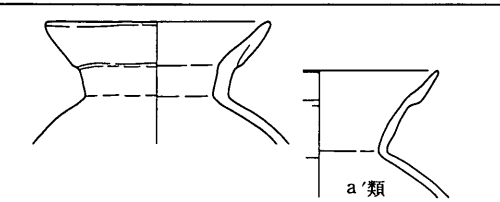
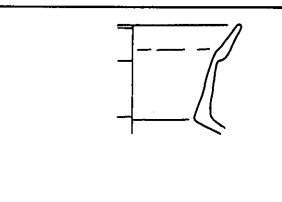
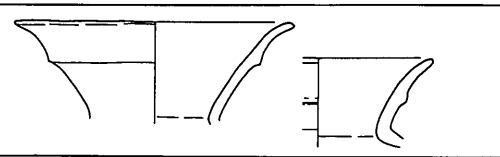
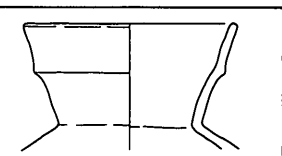
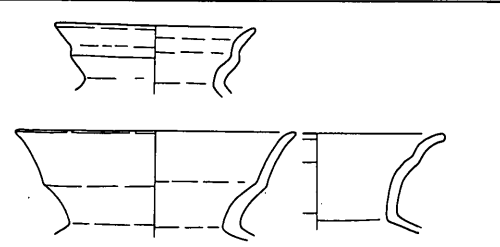
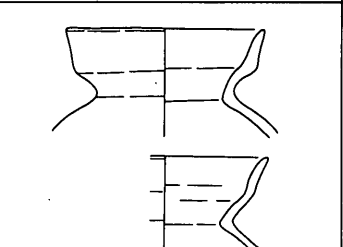
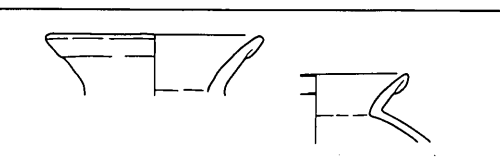
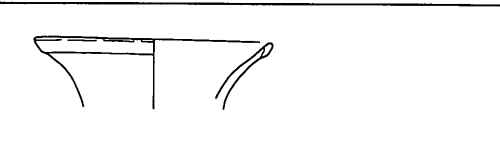
A 2類 外面有段部が明瞭で口縁部との接合部の外面が肥厚し、口縁端部はやや尖り気味となる形態。有段部が肥厚垂下するものもある（0886・2015）。接合部内面に弱い稜線が残るものもあるが直線形状で外反する。口縁部の形態によって外反するA 2 a類と内湾するA 2 b類に分類され、それぞれに口縁端部が面取りされた形態（A 2 ㊨類、A 2 ㊩類）がある。胴部上半、頸部に穿孔したものがある（0554）。

A 3類 頸部が比較的長く直立・外傾し、有段部から屈曲外反する形態。外面は段部が肥厚し、内面はやや内湾気味に外反する。口縁部は短く口縁端部は先鋭形状となる。頸部、口縁部に棒状の粘

土帯を付したものがある (0808・1119)。

A 4 類 頸部、口縁部が直線形状で外反・外傾し接合部外面のみ僅かに肥厚 (突出) する形態。接合部内面には弱い稜線が残るものもあるが不明瞭である。口縁端部はやや尖り気味に丸い。口縁形態から外反する A 4 a 類、口縁部が屈曲して直立する A 4 b 類がある。A 2 類とは口縁部器壁の肥厚の有無、頸部と口縁部との接合部において口縁部を肥厚させない器種として区分した。

A 5 類 頸部と口縁部の接合は明瞭であるが、外傾する頸部に外面肥厚 (突出) しない口縁部が付加さ

	a 類 (外反口縁)	b 類 (内湾・内傾口縁)	c 類 (外傾口縁)
A 1			
A 2			
A 3			
A 4			
A 5			
A 6			
A 7			

第161図 壺A類器種分類

れる形態。口縁部接合技法はA 4類と同一である。口縁部が湾曲して大きく外反するA 4 a類と直立するA 4 b類に分類される。

A 6類 頸部・口縁部が直線形上で外反し、有段部が口縁端部の外面折り返しにより肥厚する形態。口縁端部は丸いかもしくは先鋭状となる。

A 7類 頸部・口縁部が直線形上で長く外反し、口縁端部を僅かに外面肥厚し短い有段部をもつ形態。

#### 壺B類 (広口壺)

口縁部が胴部から「く」の字に屈曲し、外反・外傾する形態。胴部は最大径が中位もしくは下位にある楕円形もしくは卵球形となる。底部は広く、縁辺が肥厚し外に突出するものもあり、平底、上げ底である。整形は口縁部が縦・横方向のミガキ、胴部が縦・斜め方向のミガキを基調とするがハケとミガキ、ハケのみの整形を残すものがある。口径・胴径、口縁長と器高の比率から3種類に分類した。

B 1類 口縁長が口径の3倍程度でやや長めに外反・外傾する形態。口縁端部は強いナデによって器壁が薄くなり細く尖り気味である。口縁部の微細形態の差から、直線気味に外反・外傾するB 1 a類、屈曲部が肥厚し口縁端部が強いナデによって「コ」の字状に屈曲外反するB 1 b類、口縁端部がナデによって面取りされ平坦となるB 1 c類に分類される。B 1 a類とB 1 b類の分類基準は微妙な部分を残し、技法的には同一である。壺では最も多く見られた器種である。Mサイズには丸底がある。

B 2類 口縁長が短く外反する形態。屈曲部の肥厚が著しく胴部は横に幅広の扁平球形になる。

B 3類 口径、頸部径が器高、胴径に対して大きい形態(頸部径 $\times 2 >$ 胴径)。甕と壺の中間の形態となる。胴部は最大径が中位にある楕円形となる。口縁部形態によって外反・外傾するB 3 a類、内湾するB 3 b類がある。中型(M)があり、このサイズは口縁部だけで甕との分類を明確にすることはできない。

#### 壺C類 (直立口縁壺)

口縁部が長く胴部から屈曲して直立気味に開く形態。口縁端部はナデにより先鋭外反する。胴部は最大径が中位にあり球形となる。整形は胴部横位・斜位方向のミガキを基調としいる。

#### 壺D類 (小型壺)

器高及び口径が20cm以下の壺を小型壺とするが、器高では14~17cm、口径では10cm前後が大半を占める。口縁と胴部形態から4種類に、口縁部微細形態、底部形態からそれぞれ数種類に分類した。

D 1類 口縁長が器高に対し長く(口縁長 $\times 4 >$ 器高)、胴部から鋭く屈曲し口縁が開く形態。屈曲部内面には接合の突出部が残存するものもあり稜線は明瞭である。器壁は薄く最終整形は縦・横・斜め方向の緻密なミガキを基調とし、精製土器群と認識される。胴部はほぼ球形となるが、扁平球となるものも数個体ある。口縁端部は尖り気味であるが、口縁形態から外反・外傾するD 1 a類、内湾するD 1 b類、直立するD 1 c類に分類される。底部はそれぞれの器種に丸底(ア類)、平底・上げ底(イ類)がある。底部にはケズリを残すものも多く、平底も極めて小さいことから器台とセットで使用されたと考えられる。1665の壺結合土器の上部はD 1 a類である。

D 2類 口縁長が器高に対して短く(口縁長 $\times 4 \leq$ 器高)、胴部から鋭く屈曲して口縁が開く形態。器壁は薄く最終整形は縦・横・斜め方向の緻密なミガキを基調としている。胴部は球形もしくは最大径を下半にもつ下膨れ形態となる。口縁端部は尖り気味であり、口縁形態から外反・外傾がするD 2 a類、内湾するD 2 b類、直立するD 2 c類に分類される。このうちD 2 c類は器壁がやや厚く粗雑な作りである。底部はそれぞれの器種に丸底(ア類)、平底(イ類)があるが、丸底には底部器壁を肥厚させたものがある。4267は、口縁端部を受口状尖鋭化させた個体で、



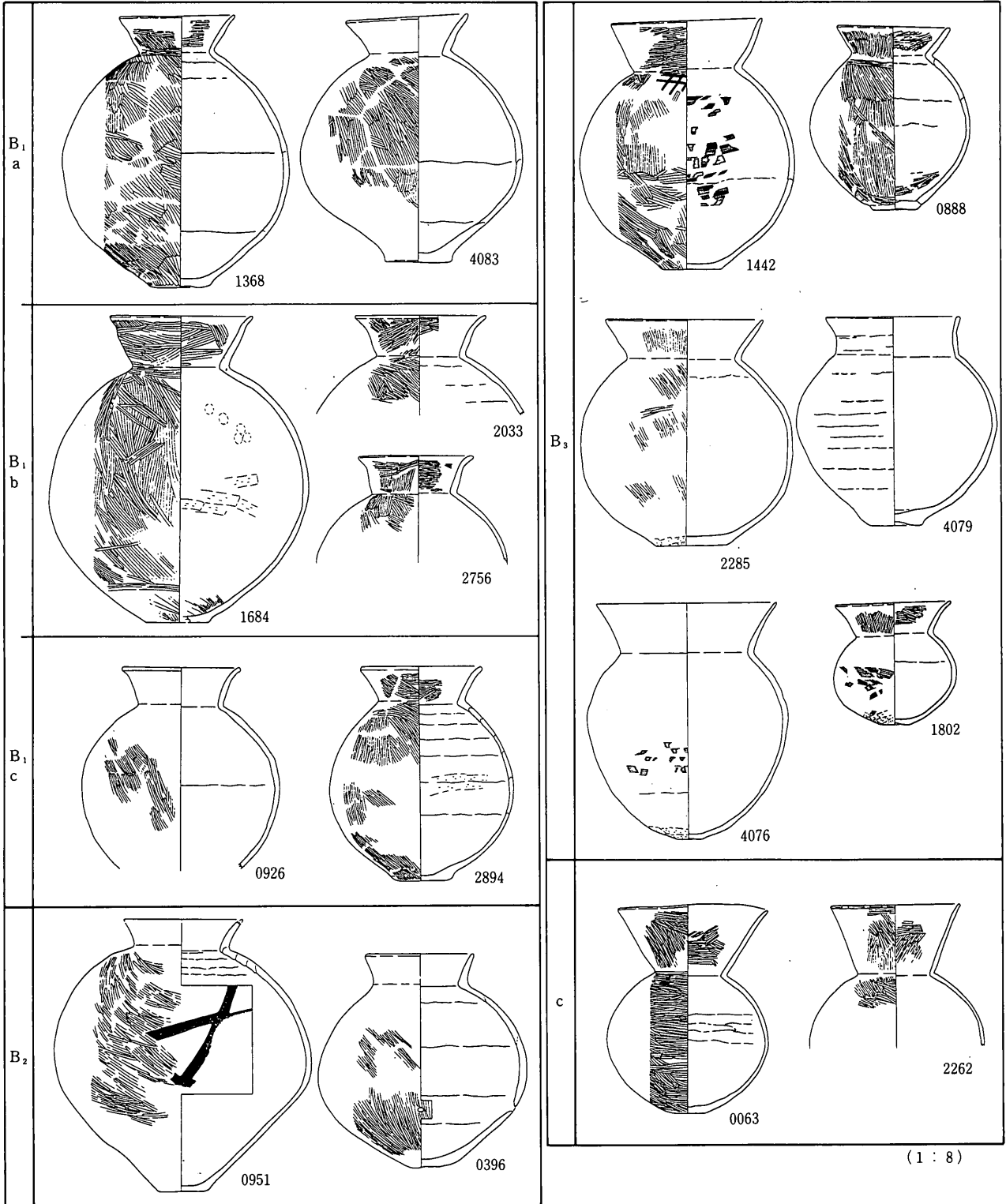
肩部が緩やかに湾曲する甕に近似する形態であるが、本器種として分類した。

D 3 類 口径が容器の最大径となり、口縁長がほぼ胴部の1/2と長い形態。小型丸底と壺の中間形態となる。口縁部は内湾し、底部は丸底を意識した平底で器壁は厚い。

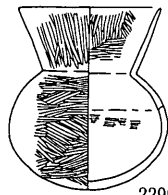
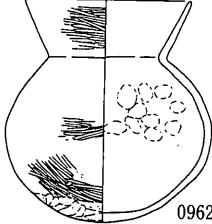
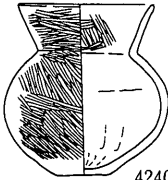
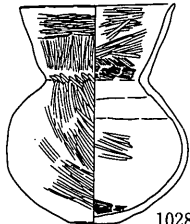
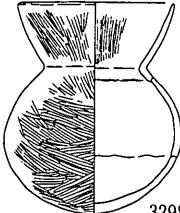
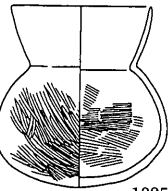
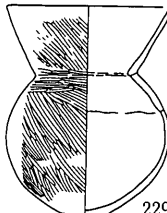
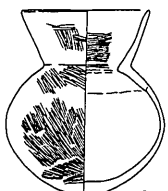
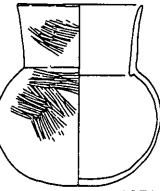
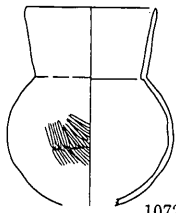
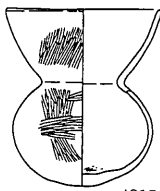

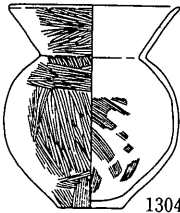
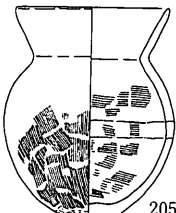
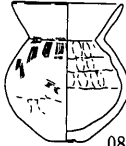
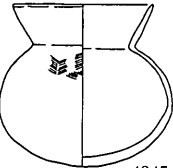
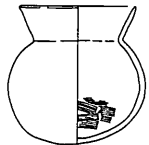
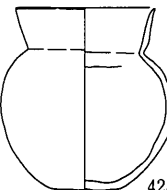
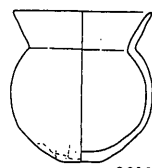
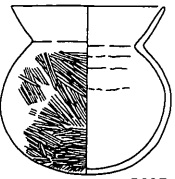
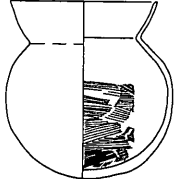
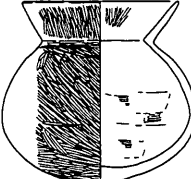
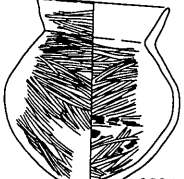
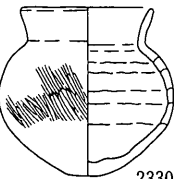
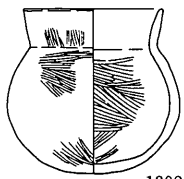


D 4 類 壺B類の小型形態で最小で口径5.0cm、器高8.2cmとなる。全て底部の広い平底である。

B・壺A類の口縁接合技法 (第164図)

壺A類の口縁部接合には、①屈曲頸部に幅広い口縁部粘土帯を上面付加する技法、②頸部上端側面に幅



第162図 壺B・C類器種分類

	丸底 (ア類)		平底 (イ類)	
D <sub>1</sub> a	 2299	 0962	 4240	 1028
D <sub>1</sub> b	 3298	 1325	 2292	 4213
D <sub>1</sub> c	 1071	 1072	D <sub>3</sub>  4215	 1665
D <sub>4</sub>	 1304	 2053	小型 (S S)  0812	
	丸底 (ア類)		平底 (イ類)	
D <sub>2</sub> a	 4245	 4247	 4242	 3600
D <sub>2</sub> b	 5607	 0081	 2761	 0534
D <sub>2</sub> c	 2330	 1308	小型 (S S) D <sub>2</sub> 類  0126	
			 2061	

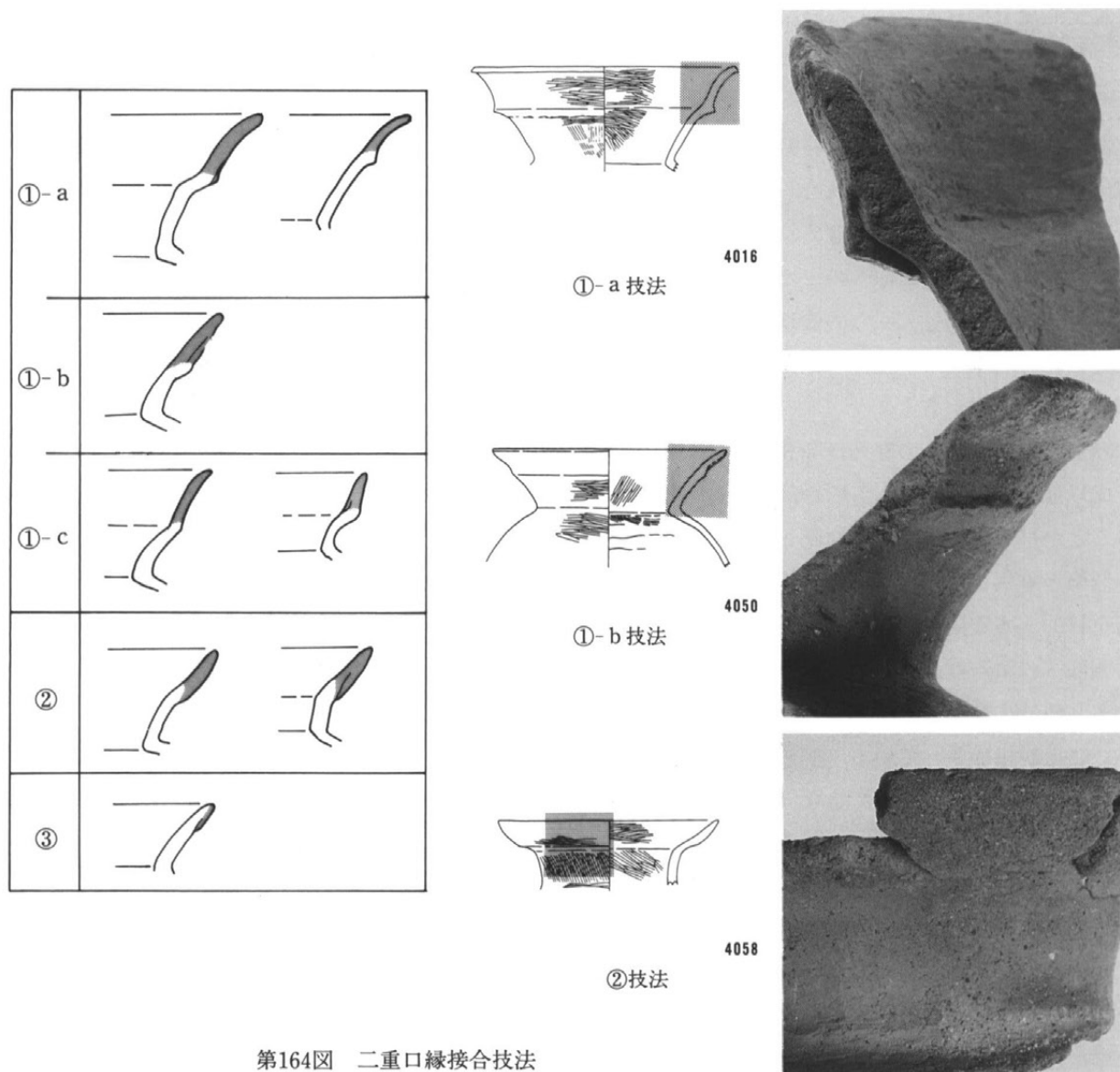
(1 : 6)

第163図 壺D類器種分類

広い口縁粘土帯を付加する技法、③口縁部を折り返して粘土帯を幅狭く付加する技法がある。このうち①の技法には段部外面に更に粘土帯を付加し段部を肥厚させる技法（①-a）や段部から口縁端部にかけて幅広く粘土帯を付加し口縁を肥厚させる技法（①-b）、頸部上面付加後に頸部の外面突出を丸く仕上げ有段部の突出を完全に消去する技法（①-c）がある。A1類には①-a技法、A2a類には①-aと②技法、A2b類には②技法、A3類には②と③技法、A4類には①技法、A5類には①-c技法、A6・7類には②と③技法が用いられている。

C 装飾と穿孔（第165・166・167図）

壺A類を主体として口縁部・頸部・胴部上半に粘土の貼り付けや沈線、穿孔による文様、赤彩が残され壺が29点あり、壺B・D類には祭祀用具として解釈されている（関根1994など）胴部中位から下半に穿孔された土器が4点出土した。装飾された器種ではA類が最も多く、主として胴部と頸部の屈曲部に粘土帯が付されていた。装飾文様・穿孔の内訳は、口縁部への棒状浮文4点<0061・1119・2889・5997>、頸部への棒状隆帯文1点<0808>、胴部と頸部（口縁部）の屈曲部への隆帯文11点<0912・0913・0914・0915・0916・0959・2006・2027・3592・5993・5994>、胴部上半への突起、隆帯文3点<1437・1441・3596>、胴部上半への沈線・線刻文3点<2066・4191・4268>、頸部・胴部上半への複数穿孔6点<0554・0780・



第164図 二重口縁接合技法

4190・4191・5807・5992>、器面への赤彩2点<1403・2066>、胴部への単一穿孔5点<0396・0966・4269・4273・2714（丸底か）>である。これらの装飾文様を有する土器には出土地点が偏在するものがある。

口縁部への棒状浮文は壺A類に1～2本を単位とする紐状の粘土を4カ所に貼り付けている。この装飾を付した壺は破片資料で口縁部以外の器形は不明である。

頸部への縦位隆帯文は太い粘土帯を1カ所に貼り付け、容器の正面観を表現したかに見えるが、壺A類への類似した隆帯文は栃木県花の木町遺跡（後藤1987・1992）などいくつかの遺跡で出土例があり、壺を覆う籠の一部を粘土で模したものと考えられる。

屈曲部への隆帯文は上記壺の他に粘土帯をそのまま貼り付けた甕<2944>にも施文され総計12点となるこの隆帯文には指頭で強く押捺し凹凸を付けたもの<0912・0914・0915・0916・0959・2006・5994>、ハケ状工具もしくは篋状工具で斜めに刺突して縄目を模したもの<0915・3592・5993>、断面角状の粘土帯に刻みを付したもの<2027>がある。この装飾文が付された壺はS K 2207から集中して出土し、S D 1016、検出面以外からの出土が皆無であることから、壺A類のなかでも特殊な機能あるいは特定集団・個人の所有形態が反映された文様と見ることができる。

胴部上半へ粘土突起が付された2点は壺A類とB類であるが、同一位置に同形状の突起があり両者ともS K 2492出土である。屈曲部隆帯文と同様に特殊な機能、特定集団・個人の所有形態の現れとみることができる。同様の突起は隣接する篠ノ井遺跡群高速道地点SB7255（長野県埋文センター1997）から出土しており注目される。

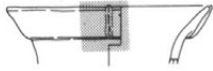
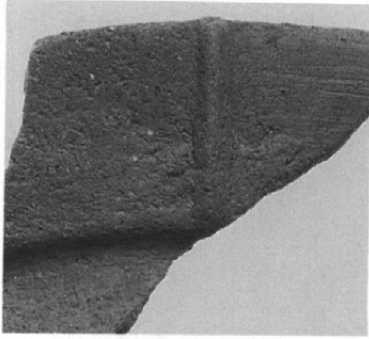
沈線・線刻文のうち2066・4191は『擬似櫛描T字文』ともいうべき文様であり、弥生後期の箱清水式土器に通有の櫛描T字文を棒状もしくは篋状工具を用いた太い沈線で描いている。2066には赤彩が施され箱清水式土器を模したことが窺え、擬似櫛描文の部分は欠損しているが赤彩された壺B類1403も同様に模倣とされる。これらの器面へのミガキ手法による赤色塗彩技法は弥生後期の土器群と変わらない。線刻文が残る4268は口縁部を欠くため壺D類とするほか詳細は不明であるが、胴部に2段にわたる篋描きの鋸歯文が施されている。この模様類例は千葉県神門3号墳出土の二重口縁壺にあり、本資料もこれに類する器形になる可能性がある。

頸部・胴部上半への穿孔は2孔一対となる0554・4190・5807・5992と複数ある0780がある。この穿孔が焼成以前なのか以後であるのかは明確に観察されなかったが、内外面の器壁が薄いことや孔内に擦れがあることから焼成後の穿孔と判断される。口縁部に穿孔がある二重口縁壺の類例は埼玉県鷲山古墳などにあり装飾と解釈されるが、本資料の穿孔は小さく頸部に集中することから装飾とするより釣り下げ、複数連結を目的とする用途があったと考えられる。

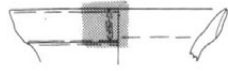
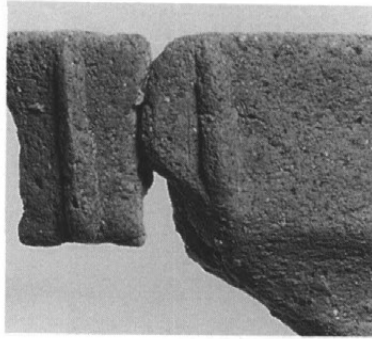
胴部への単一穿孔された壺5点の内器形が確認できる資料は、壺B 2類<0396>と壺D類<4269>のみであり他は小型品ということ以外は口縁形態など詳細は不明である。小孔を穿つ壺は有段口縁の小形壺に多いことが指摘されている（関根1994）が本遺跡には該当する資料がなく、土坑出土資料も2点で本器種の機能にかかわる解釈はできない。5点のうち焼成前穿孔された壺は4269で他は器壁を内側から打ち欠いた際にできた凹みが観察され、焼成後の穿孔とされる。穿孔小型壺の出土は僅かに5点であり出土状況からもその用途を探る手掛かりがない。

#### イ 甕形土器（以下甕と呼称する）（第168～172図）

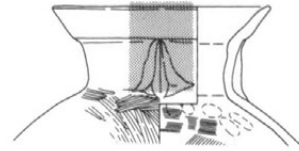
甕は最も多く出土した器類で、出土土器の31%を占め、ことにS D 1016からの出土が多く34%であった。分類は口縁、胴部、底部の形態により7種類に細分された。主体を占めていた甕の口縁は胴部上端から「く」の字に屈曲外反・外傾する形態であるが、口縁の長短、外反度・端部など細部の形状は多様である。この



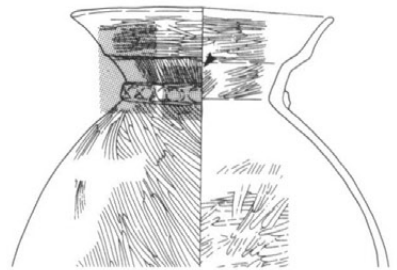
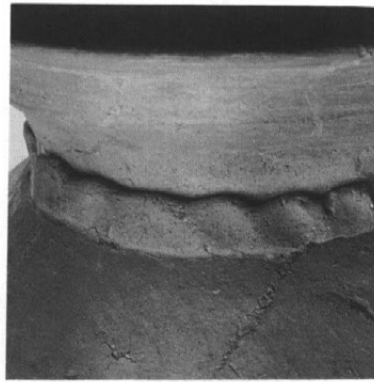
1119



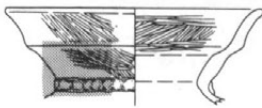
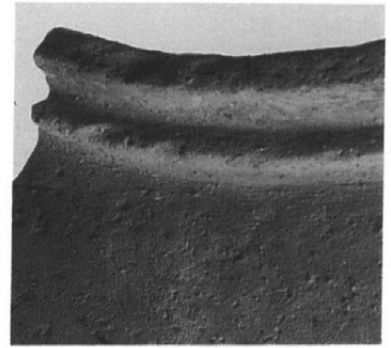
2884



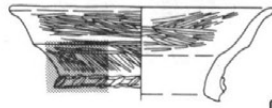
0205



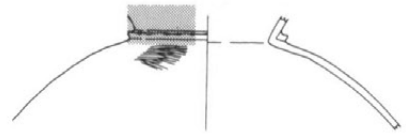
0912



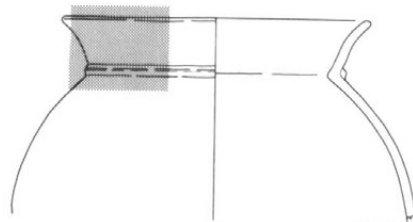
0914



0913

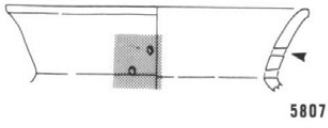
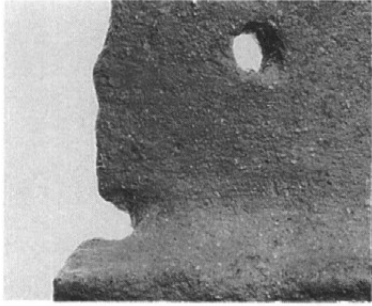


2027

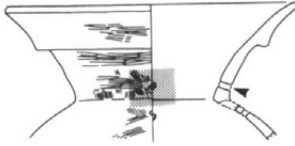


2944

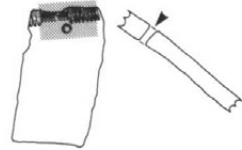
第165図 口縁、頸部装飾 (2944は甕)



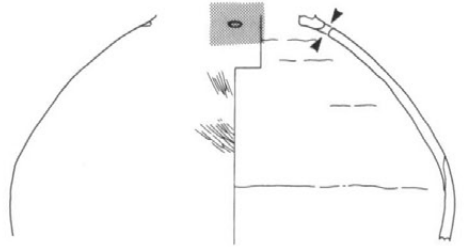
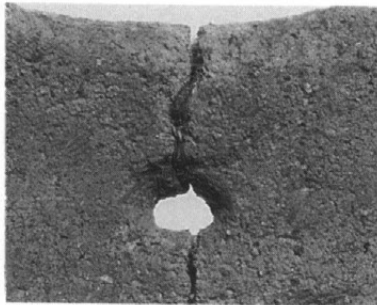
5807



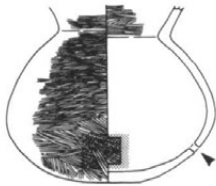
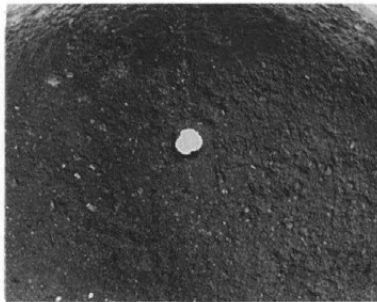
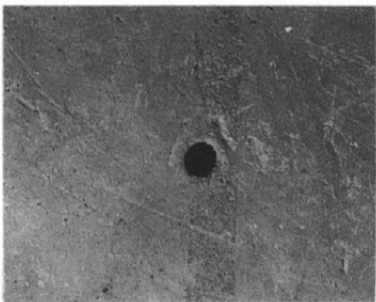
0551



4191



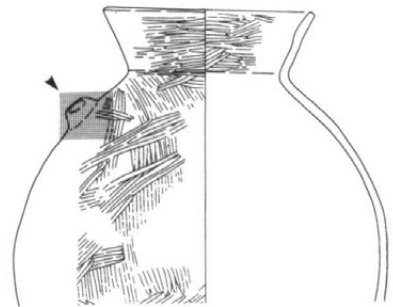
0777



4269



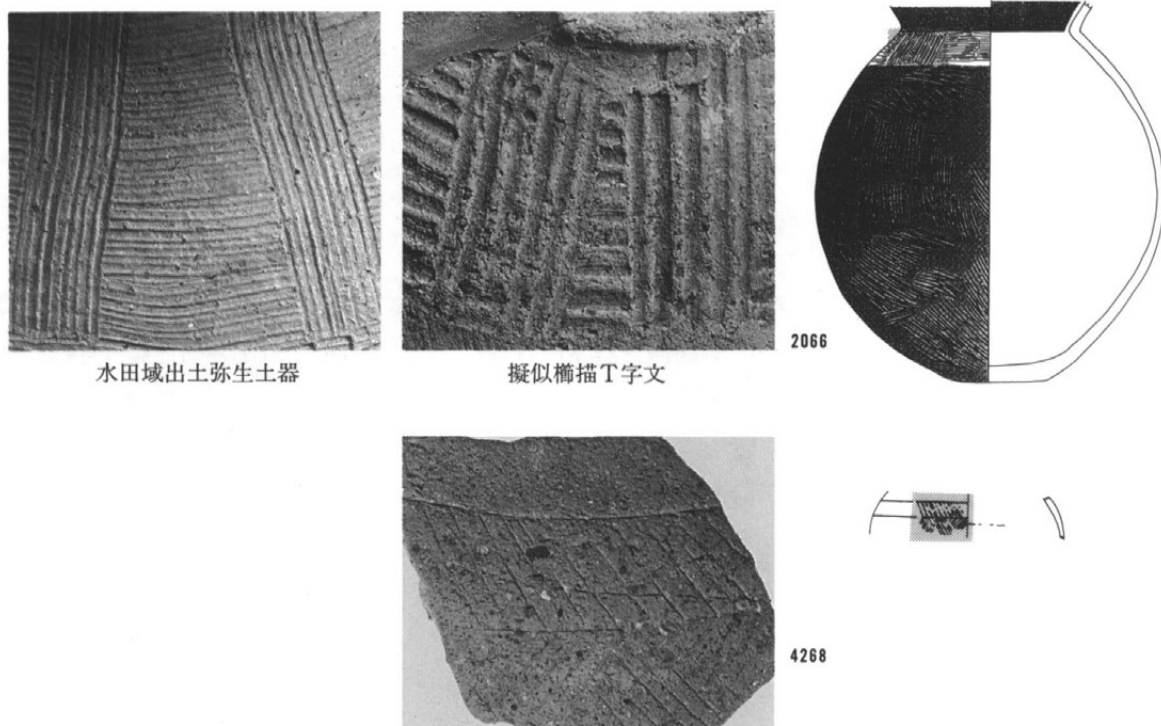
4273



1438

第166図 壺の穿孔・突起





第167図 胴部上半装飾文様

「く」の字口縁の範疇で細分した「コ」の字口縁以外では、内湾、受口、「S」字状口縁が僅かにあるがいずれも完存する資料に欠け、全体形状や整形の特長は断片的に確認される程度であった。したがって本器類の器形（胴部形態）分類は「く」の字に外傾・外反する口縁甕のみによるものである。

胴部形態は球形または縦長の楕円形、卵球形で、胴部最大径が器高より短い縦長形態（胴径<器高）と器高と同一もしくは器高より短い横長形態（胴径 $\geq$ 器高）に大きく分類され、器高と胴径、胴部最大径の位置によって変化する器形を観点として細分した。

底部形態では平底（ア類）と丸底（イ類）、台付（甕E類）がありそれぞれに器壁の厚薄がある。底部形態の違いは口縁・胴部形態容量の分類と必ずしも相関関係にはならず、A1類を除いて全ての器種に丸底と平底の両者がある。ただし平底でも大径と小径があり後者の多くは底部付近へのケズリが頻繁であることから小径平底は丸底化を指向しているものといえる。底部は丸底傾向の形態と平底を持続させる形態がありそこには用途、機能の違いがあったものと推察される。

整形はハケとケズリ、ナデが多用され、この3種の技法が基調となっているが、外面と口縁部内面にミガキを施した甕もある。緻密なミガキを残す甕は、形態上甕に分類したが用途は壺と認識した方がよいものがある（1054・2953など）。口縁部内面と胴部下半外面へのミガキは弥生後期以来の伝統的な在地技法で、このミガキが施された甕がいくつかある。ハケは外面胴部上半から口縁部にかけて顕著に残存し、縦もしくは左上りの斜め方向への調整が基調となるが、胴部上半への横方向のハケはなく、方向性に統一性がない。ケズリは胴部下半から底部、胴部内面上半に残存し一部ナデとケズリの判別が困難な痕跡もあった。甕の器壁は胎土から在地以外と認識された特徴的な破片数点を除いて大半が厚く、ケズリによって著しく薄くしようという技法の意図は窺えない。ケズリは肩部の内面成形や底部の丸底化あるいは丸底近似形態の成形に用いられている。ナデは各部位に見られるが、その強弱によって口縁部形状を変化させ、湾曲、屈曲、尖鋭、面取りなど多様な形態をつくりだしている。これらのほかに肩部内面、底部には指頭痕が観察された。容量に関しては後述するが器高と胴部最大径から5種類に分類した。器高29cm以上を超

大型甕 (LL)、器高もしくは胴部最大径が20cm以上を大型甕 (L) とし、器高14cm以上を中型甕 (M)、胴部最大径9cm以上を小型甕 (S) とし、9cm以下を超小型甕 (SS) とし、これら容量によって形態差が見られる。

#### A 器種分類

##### 甕A類 (「く」の字口縁甕) (第168図)

胴部と口縁部の屈曲が明瞭で内面に稜がある甕。胴部最大径はほぼ中位にあり球形または縦長の楕円形、卵球形となるが、胴部最大径が器高より短く (胴径 > 器高)、胴長より長い (胴径 > 胴長) 形態。口縁形態は外反・外傾・直立があるが口縁長の長短、端部の形状は多様である。本器種の細分は胴部形態を1義的に、口縁形態を2義的に分類した。胴部形態は最大径の位置と胴部下半の形態で2種類に、口縁形態は長さによって大きく2種類に区分し、その中を更に微細形態で4種類に区分した。口縁形態の長短は口縁長と口径の比率からおおよそ求め、口縁の長い形態I類 (口縁長  $\times 5 >$  口径)、短く肥厚させた形態II類に区分した。II類口縁甕には内傾・内湾する形態があり、全体の器壁が厚くケズリが多用され粗雑な成形が目立つ。I・II類口縁の分類はA・B・Cの甕に共通した分類となるが、II類口縁甕は器種に偏りが見られる。I・II類口縁それぞれに、直線形状で外傾・外反する口縁 (a類)、胴部から一旦直立気味に屈曲し端部付近で強いナデによって鋭く外反させ断面形が「コ」の字形状となる口縁 (b類)、外面もしくは内面を肥厚させ端部を短く外反させる口縁 (c類) に細分され、この他にa類とb類の中間的な口縁 (ab類) が多数ある。端部形態では丸く仕上げたものが大半であるが、尖鋭形態、平坦に面取りをした形態も散見される。

A1類 胴部最大径が中位よりやや上にあり、胴部下半から底部付近まで胴が張らずに緩く湾曲し倒卵球形になる形態。口縁部は長く外傾するIa類、口縁端部が僅かに屈曲するIab類と、短く外傾するIIa類がある。底部は平底 (ア類) だけである。容量は中型甕以上である。

A2類 胴部最大径がほぼ中位にあり胴部最大径が胴長より長く (胴部最大径 > 胴長)、胴部下半が膨らみ球形または楕円形になる形態。胴部下半の内面成形 (ハケ・ナデ) によってより丸みをもたせる形態とA1・3類と同様に緩い湾曲形状で底部に達する形態 (A2'類) の2者が見られたが、差異が微妙であったため明確に分類できなかった。最も多く出土した器種で口縁部はIa類が主体となりIb、Ic、Iab類がある。整形では全器種のなかでミガキを施したものが最も多くあった。底部は平底と丸底があるが器厚差が多様で、平底には凹底もある。甕E類 (台付き) に分類した胴部形態は本器種Ic類にあたる。

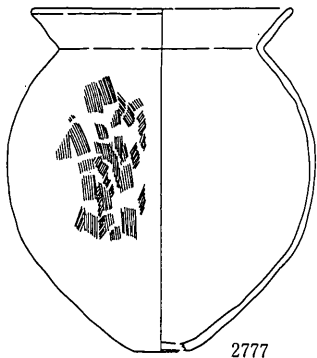
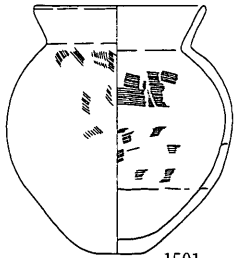
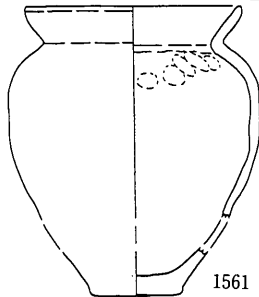
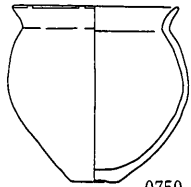
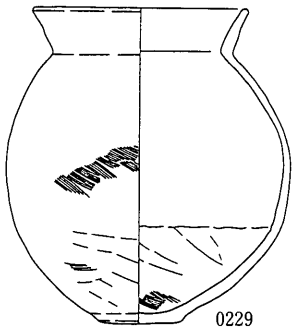
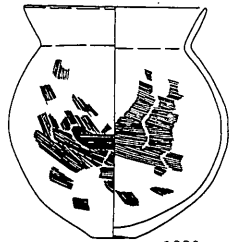
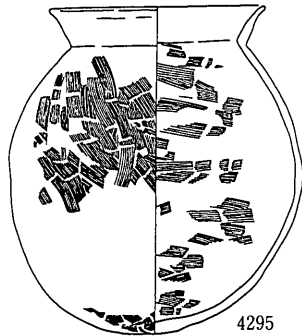
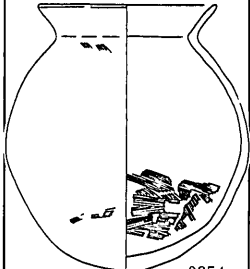
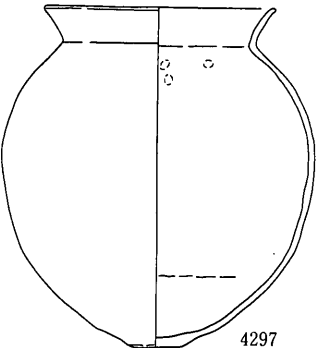
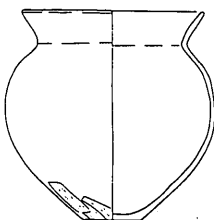
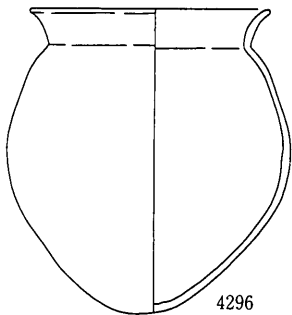
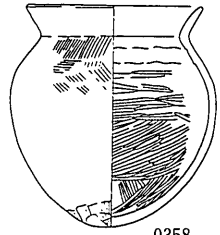
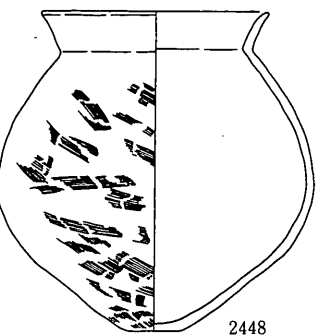
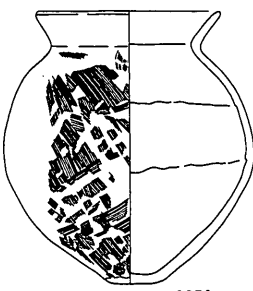
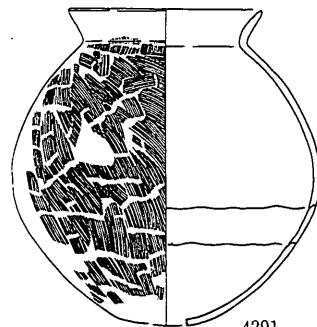
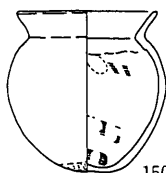
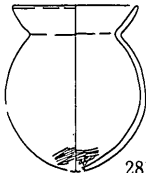
A3類 胴部最大径がほぼ中位にあり、最大径の位置を起点とし肩部がなで肩、胴部下半が膨らまずに底部に達する縦長の算盤玉形態となる。A2類は胴部中位形態が長胴気味の湾曲となるのに対し本器種は胴径最大部が明瞭である。底部は器壁の薄い小型平底と丸底である。本器種に分類された容量は大型甕が主体となる。

##### 甕B類 (「く」の字口縁甕) (第170図)

胴部最大径が胴長より短い (胴径  $\leq$  胴長) 長胴化した形態。甕A類が長胴化した形態としてとらえられる。口縁部形態と底部形態ともに甕A類と同様に細分されるが、完存する底部形態は平底が主体である。

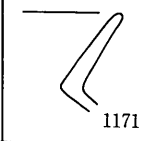
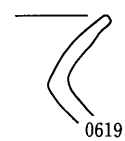
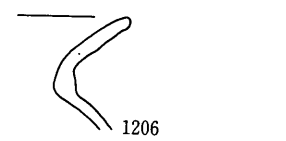
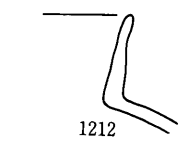
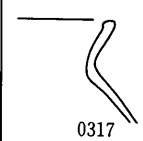
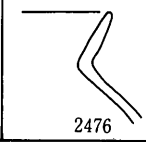

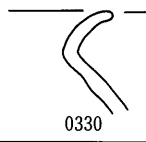
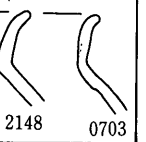
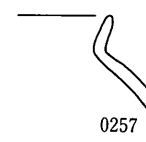
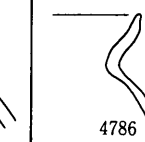
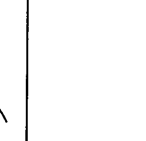
B1類 胴部最大径が中位にあり、底部まで湾曲形状で膨らみ長楕円形となる形態。胴部上半の口縁屈曲部は緩く湾曲してなで肩形態となる。口縁部はA1類と同様にIa・Ib・Ic・Iab類があり、底部は平底を主体としている。容量は大型と中型でも大きめが主体となる。本器種はA2類の長胴形態として捉えられる。

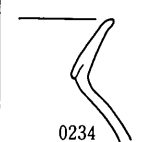
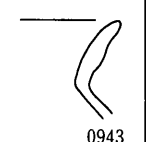
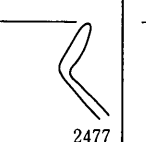



	I類口縁平底		II類口縁平底	
	大型 (LL・L)	大型・中型 (L・M)	大型 (L)	中型 (M)
1				
			I類口縁丸底	
A 2	大型 (LL・L)	大型・中型 (L・M)	大型 (L)	大型・中型 (L・M)
				
A 2'				
	A 3			
		小型 (S) 平底	小型 (S) 丸底	
A 2 類				

(1 : 6)

第168図 甕A類器種分類

	a類		b類 (a b類)			a'類	内湾 I
I類	 1171	 0619	 1206			 1212	 0317
II類	 2476	 0837	 0330	 2148	 0703	 0257	 4786

C類 (外反)		C類 (内湾)	
 0234	 0943	 2477	 0318

第169図 甕形土器口縁分類

B 2類 胴部最大径が中位にあり、胴部下半から底部付近まで胴が張らずに直線気味に緩く湾曲する楕円形になる形態。口縁部は長く外傾する I a類、I b類、肥厚する I c・a b類があり、底部は完存する資料では平底だけである。容量は大型甕しかない。甕D類(台付き)に分類した1171の胴部形態は本器種の I a類に属する。本器種はA 3類の長胴形態として捉えられる。

B 3類 胴部最大径が中位にあるが胴部の張りが下半まで続き「カプセル」形状に似た長楕円形になる形態。口縁部は I a・I a b類のほか II a・II c類と内湾する口縁がある。底部は丸底もしくは丸底近似形態である。容量では大型と中型の比較的大きめのものとなる。

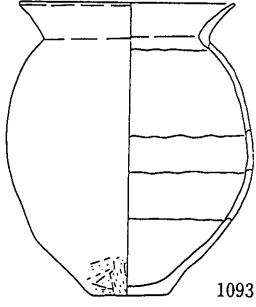
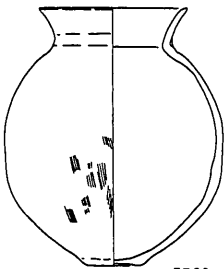
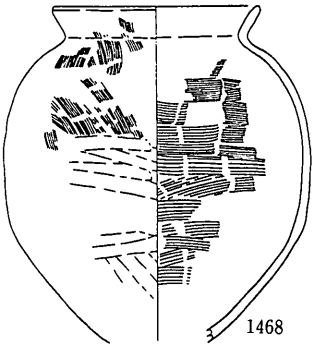
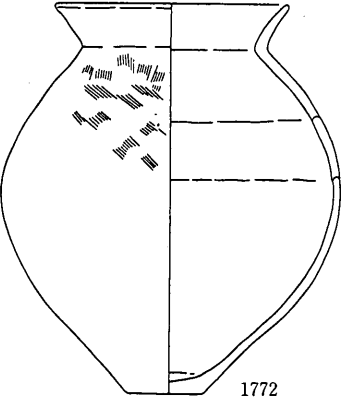
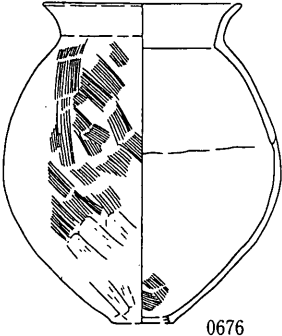
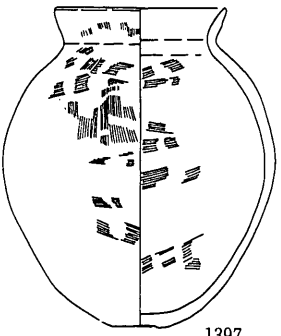
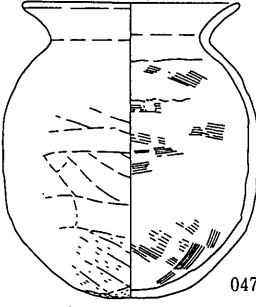
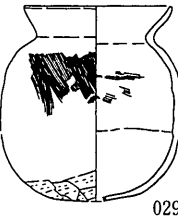
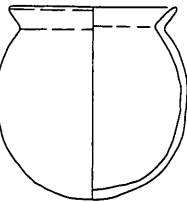
甕C類 (「く」の字口縁甕) (第171図)

胴部最大径が器高とほぼ同一 (胴径≒器高) もしくは器高を上回る長さ (胴径≧器高) で横長の扁平球形となる形態。容量によって形態が異なり中・小型甕は微細形態が多様である。胴部から頸部の形態で2種類に細分される。口縁は甕A類と同様に分類されるが直立気味に外反する形態が定量あり、小型甕にはII類口縁が際立って多くなる。整形では厚い器壁の中・小型甕にミガキが施されるものがあり、壺の小型品、小型丸底、鉢と微妙な分類となる。

C 1類 胴部最大径がほぼ中位にあり、短い口縁が直立、外反・外傾する形態。口縁端部は強いナデによって器壁が薄くなり細く尖り気味である。口縁部は I b・I c・I a b類、II a・II a b・II c類がある。II類口縁には胴径がやや上位にあり肩部が張る形態がある。甕E類 (台付き) に分類した3074の胴部形態は本器種の I a類、2823は本器種の II a類に属す。

C 2類 胴部はほぼ球形で頸部径が小さく締まって胴径の  $1/2 \sim 3/4$  の長さとなる形態。口縁は外反・外傾し、短口縁の壺に近似する。口縁形態は I a・II a類である。甕E類に分類した1222の胴部形態は本器種の I a類にあたる。

甕D類 (第172図)

	I類口縁		II類口縁
	大型 (L・L)	大型・中型 (L・M)	
B1類	 1093	 5560	 1468
B2類	 1772	 0676	 1397
B3類	 0471	 0297	 3059

(1:6)

第170図 甕形土器器種分類2 (甕B類)

胴部最大径よりも口径が長いもしくはほぼ同一となる(胴径 $\leq$ 口径)形態。中型甕以下の器種で、超小型甕は全て本器種に分類される。胴部の形態により2種類に区分されるが、超小型甕は形態が近似し比較的粗雑な成形である。口縁部は中・小型甕にI類があるが主体はII類口縁となる。底部は平底と丸底があり平底は丸底が潰れた形態、丸底はやや尖り気味となる形態がある。本器種の容量S・SSは整形にミガキを多用することから甕以外の器類(ミニチュア)の可能性もある。

D1類 胴部最大径が上位にあり扁平な倒卵球形になる形態。中・小型甕がI類、超小型甕がII類に属す。口縁形態はII a類が主体となり外面肥厚した内湾気味実II c類、I a・I b・I a b類形態がある。

D2類 胴部最大径が下位にあり卵球形もしくは長楕円形となる形態。口縁形態はD1類と同じであるが中型には内湾形態がある。超小型の底部平底形態は極めて粗雑な作りである。

	I類口縁大型 (LL・L)		I類口縁大型 (L)	II類口縁大型 (LL・L)
	平底	丸底		
C1類	4310	1310	2383	2118
C2類	2474		2783	0257

(1 : 6)

	中型 (M)		小型 (S)	
	平底	丸底	平底	丸底
I類口縁	3049	3051	3054	3055
II類口縁	2499	2507	2815	3061

(1 : 6)

第171図 甕C類器種分類

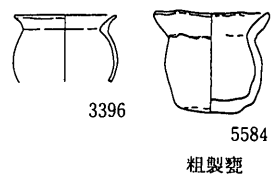
甕E類 (台付き甕) (第172図)

甕底部に脚が結合した形態。全体形状が確認できる甕は僅かに3点で、胴部と脚部を含めても20点の出土で組成率は極めて低い。胴部形態はすでに記述した通り多様で、甕A・B・C類全てがあり、本器種に胴部形態が制約されていないことがわかる。脚部の形態は脚部は「ハ」の字に開く形態 (E1類)、と内湾して開く形態 (E2類) があり、両者の脚端部は丸みをおびた形状となる。この2者のほかに脚端部を内面に折り返し平坦に面取りされる形態 (E3類) が4点 (1883・3412・3632・3633) あり、「S」字状口縁台付甕の脚部になる。E3類を除いた胴部形態が丸底・平底の各器種として存在することと脚部の形態が粗製器台F類と近似することから、甕と器台が結合した形態と見ることができる。

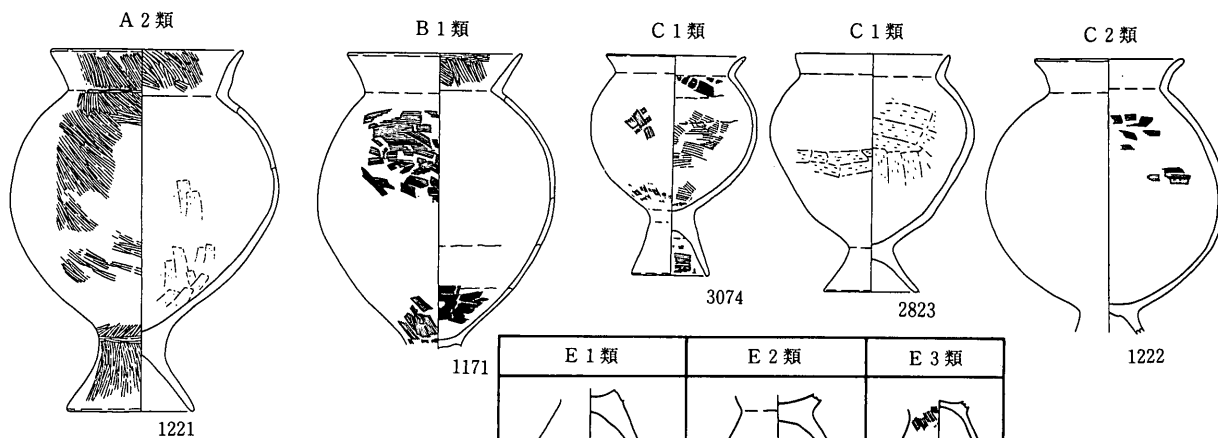
甕F類 (直立短口縁長胴甕)

全体形状は不明であるが、胴部上半はなで肩形状で、口縁が短く内湾気味に直立する形態。胴部内面に

	中型 (M)	小型 (S)	超小型 (SS)
D1類	1055	0623	3397
		2512	2503
D2類	1281	1754	2817
		3402	



(甕D類) (1:6)



E 1類	E 2類	E 3類
3078	1385	3632
3076		3412

(甕E類)

F類	0230	1614	1565
G類	4783	2514	4783

(1:6)

第172図 甕D・E・F・G類器種分類

は輪積みと指頭痕が顕著に残存する。口縁端部は丸く II a・II c 形態である。

#### 甕G類（長胴異形甕）（第172図）

全体形状は不明であるが口縁部と胴部の区分が不明瞭で、短い口縁部が屈曲し口径よりやや大きな胴径胴部に筒状に長くなる形態。口縁は折り返しにより肥厚させ、短く屈曲外反した形態となる。頸部内面には稜があり胴部には輪積み痕、外面には指頭痕が顕著に残る。口縁形態は有孔鉢の成形と同一であることから底部が穿孔されている可能性がある。

#### その他の甕

A～G類に分類した以外に多様な口縁部形態があり、なかには系譜の確認できる口縁がある。少量であったことと全体形状が不明であったため器種名称は付さなかった。形態から系譜の確認できる口縁は8点あるが、いずれも口縁部の摩滅した破片であるため整形の詳細は不明である。3631・4785は東海西部地域に系譜をもつ「S」字状口縁台付甕、0317・1101・6005は畿内地域の布留甕、0392は山陰地域の有段口縁甕、3602は山陰もしくは北陸西部地域の有段口縁甕、6004は山陰もしくは近江地域の受口状口縁甕である。この他に口縁が肥厚し内湾形態となるものがいくつかあり、布留系の甕とすることができる。

### B 甕の容量（第173図）

甕の容量は器高と胴部最大径から、超大型甕（LL）、大型甕（L）、中型甕（M）、小型甕（S）、超小型甕（SS）の5種類に分類した。容量によって形態差が見られることは器種分類で記述したとおりである。

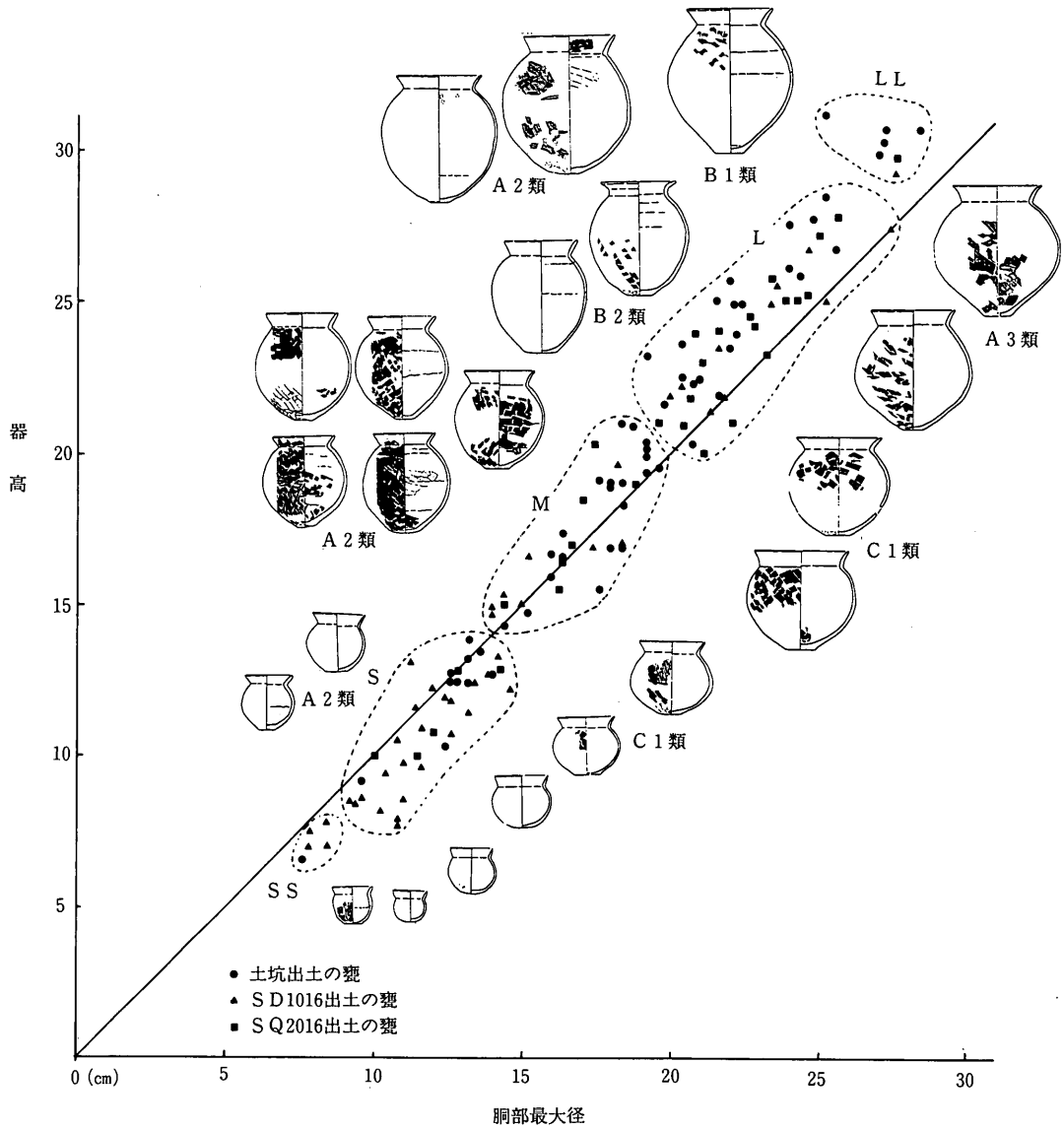
甕容量の測定は藤村東男など（藤村1981・都出1982・小田木1991）の方法が適切と考えるが、ここでは器種の分類に視点を当てているので、数式による容量計算は割愛し、先の論功から胴部最大径と器高が容量と相関関係にあることが確認されているので、この2つの関係から容量分類を試みた。

超大型甕（LL）は器高29cm、胴部最大径25cm以上の容量とし、甕A・B・E類にある。大型甕（L）は、器高20cm以上で29cm未満、胴部最大径20cm以上で26cm未満の容量としたが、器高24cmに分布が希薄となり大型の大と大型の小とすることもできる。甕C類は大型甕から少量存在するが、主体は甕A・B類である。中型甕（M）は器高14cm以上で21cm未満、胴部最大径14cm以上で20cm未満の容量とした。器高18cmで分布が希薄となりLに近い容量甕とSに近い容量甕に偏りがみられ、この容量を境として縦長形態である甕A類から横長形態である甕C類に移行していく。小型甕（S）は器高8cm以上で14cm未満、胴部最大径9cm以上で14cm以下の容量とした。甕A類は容量の減少とともになくなり、甕C・D類が主体を占める。超小型甕（SS）は器高8cm、胴部最大径9cm以下の容量とした。甕C・D類以外にない。容量からみた器種分類では容量Mを境に形態が大きく変化していることがわかり、甕A類と甕C類は用途が異なることを意味している。つまり縦長形態の甕の用途の下限が15cm、横長形態の上限が20cmである。

甕容量についての分析では都出比呂志が弥生時代から古墳時代前期の甕を対象として畿内V様式に大型甕の衰退という画期を見出し（都出1982）、小田木治太郎が奈良盆地の古墳時代開始前後の甕から小型甕が欠落し容量が斉一化される傾向にあると分析（小田木1991）するなどの時期的な差異が導きだされている。この点に関しては本址出土土器前後の時期の容量分析が不十分であるため今後の課題としたい。

### C 底部形態と技法（第174図）

底部形態についてはすでに器種分類の項で平底と丸底の2者があり、平底には丸底を指向する形態があることを述べたが、更に技法的な特徴を抽出することとする。平底には壺と同様に輪台技法により凹み底となる形態（ア1類）と粘土円盤からの輪積みによる扁平底の形態（ア2類）がある。丸底には外面にハケ、内面に指圧痕を顕著に残し器壁が極めて薄い形態（イ1類）と内面に強いナデ、ハケを施し器壁が厚



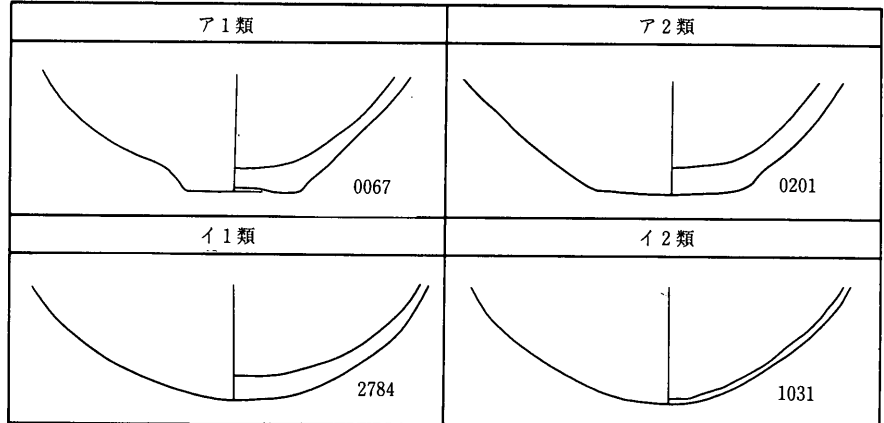
第173図 甕形土器の容量

著に残している。イ2類は粘土円盤から輪積みされた底部付近を内面からナデ等によって押し広げている。ア類からの丸底への転化は外面をケズリもしくはハケによって器壁を減じている。底部周辺に残されケズリは底部の縮小化、丸底化を意図した成形で用途が反映されている見られる。丸底主としてイ2類とア類からの転化が多くイ1類は少量である。底部形態の違いはA1類を除く器種と容量全てにあり丸底は傾向が際立つが一方で平底形態を維持する器種も存続している。

ウ 高杯形土器（以下高杯と呼称する）

高杯は杯部下位に稜があり口縁部が外傾・外反して開き、脚部下位（裾部）が屈折して「ハ」の字に開く形態が主体を占める。従来から畿内系高杯、和泉式高杯と呼称されてきたものであるが、本書では屈折脚高杯とする。これら屈折脚高杯は部位の微細形態において多様な形式差があり、杯部の形態で5種類、脚部の形態で4種類に分類され、また脚部の接合技法で5種類に分類される。高杯は円筒形の柱状脚部で、杯部との接合部が厚いことから脚部の残存率は非常に高かった。高杯が全器種に占める割合は23%で、土坑内出土土器では、25%にのぼる。

整形は杯部内外面とも縦・斜め方向のミガキで、脚部外面は縦方向のミガキが主体を占めるが、緻密な横方向のミガキを施す個体も数点あった。脚部内面は輪積痕を残すもの、ケズリによって器壁を整えたもの、強いナデによって器壁を整えたものがあった。



(1:4)

第174図 甕形土器の底部形態

#### A 器種分類 (第175図)

杯部は脚部接合部である下半を円盤状に作り、口縁

部を上部に付加する2段成形によって製作されている。このため近似した形態となり分類上微妙な問題を残すが、脚部接合付近の杯部下半と口縁部の接合部の形態、口縁部の微細形態によって細分した。主として屈曲部の有無、杯部の深さと口径などを観点とした。脚部は全て柱状の脚上半部から屈折して裾部が「ハ」の字に開く形態であり、柱状部・裾部の形状と屈折部の位置を観点として分類した。

##### 高杯杯部A類

杯下半部と口縁部の屈曲が明瞭で、脚接合部から屈曲部（稜部）までの外面形状は緩く外傾もしくは水平に開き、内面形状も水平となる形態。杯下半部面は比較的広く、脚接合部から屈曲部の高さ（杯下半部長）がほとんどない。本器種が最も多く出土し、口縁部の形態で3種類に細分した。

**A1類** 口縁部が比較的長く開く形態。屈曲部から大きく外反するA1a類、緩く外傾するA1a'類、内湾するA1b類がある。A1b類は杯下半面が広（稜径が大きい）く、口縁部が鋭角に開く形態である。A1a・A1b類は器壁が薄く口縁端部が先鋭化するのに対し、A1a'類には器壁が厚く口縁端部が丸く仕上げられているものがある。

**A2類** 杯部の深さ（以下杯深とする）が口径に比べ浅く（杯深×4<口径）、稜径が大きく杯下半部は水平に開き、杯部が扁平となる形態。口縁部が外反・外傾するA2a類と内湾するA2b類がある。A1a類には口縁端部を強く外反させるもの、A2b類には口縁部と杯下半部との接合部が下方に突出する形態のものがある。

**A3類** 杯深が口径に比べ極端に浅く（杯深×5<口径）、口縁部が内湾する形態。A2b類の内面稜線が明瞭であったのに対し本器種は湾曲形状となる。

##### 高杯杯部B類

杯下半部と口縁部の屈曲が明瞭で、脚接合部から屈曲部（稜部）までの外面形状は大きく外傾し、口縁部が鋭角に開く形態。脚接合部の位置から上部に屈曲部があり（杯下半部長が長い）、稜径は口径に比べ小さい。脚接合部は肥厚するものも多く、杯下半部の内面形状は水平もしくは湾曲する。

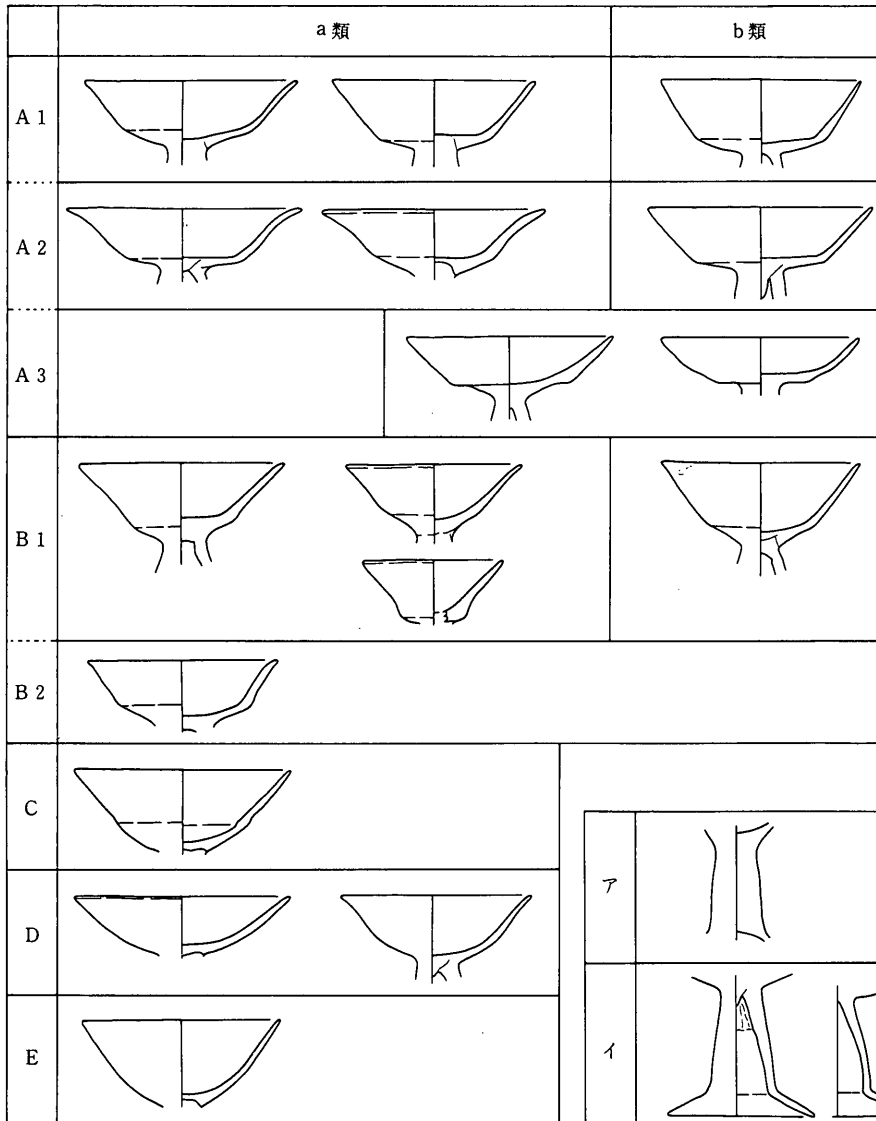
**B1類** 口縁部が長く開き、杯深が深い（杯深×3>口径）形態。口縁部が外反するB1a類と外傾気味に内湾するB1b類がある。

**B2類** 口縁端部が強く外反し、杯下半部と口縁部の内面屈曲が湾曲する形態。B1類に比べ杯深が浅い。

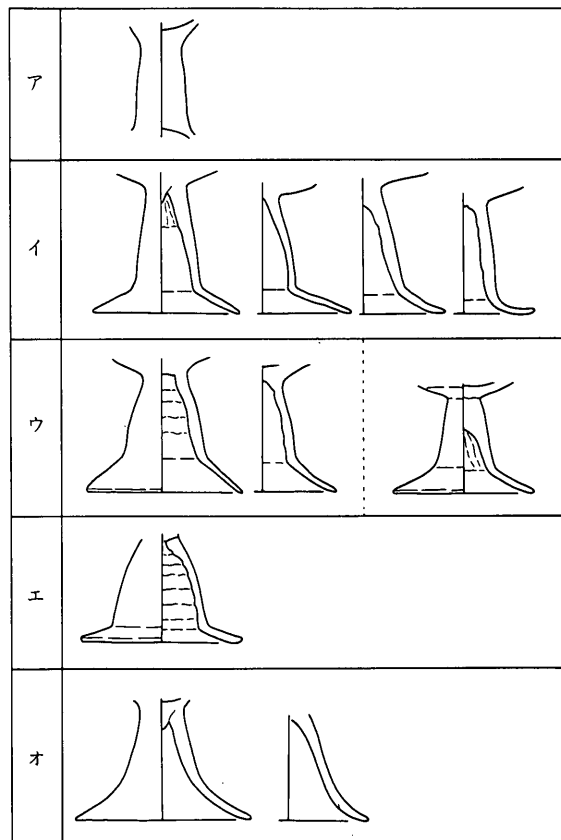
##### 高杯杯部C類



杯下半部と口縁部の接合部は明瞭であるが、屈曲せず下半部の外傾形状のまま口縁部が開く形態。口縁部接合が下半部内側に付加されたため、口縁部が内面に、下半部が外面に突出して稜をなしている。



第175図 高杯杯部器種分類 (1:6)



第176図 高杯脚部器種分類 (1:6)

### 高杯杯部D類

杯下半部と口縁部に稜がないか、もしくは接合部が不明瞭で屈曲が弱く湾曲した皿・椀形態となるもの。口縁端部は丸く仕上げたものと先鋭化させ強く外反するものがある。杯深が比較的浅い形態（D1類）と深い形態（D2類）があり、後者の形態には微妙な稜が残る。

### 高杯杯部E類

杯下半部と口縁部が一体化し杯深が深く鉢形態となるもの。口縁端部は外反気味に開く。

### 高杯脚部ア類

破片資料であるが柱実柱状となり同径の細長い柱状部に裾部が付加される形態。裾部が残存していないため全体形状・整形は不明であるが柱状脚の古い型式が想定され、裾部が短く屈折して開く形態になると考えられる。本器種には杯部E類が付加されたものと予想される。

### 高杯脚部イ類

脚上半柱状部が直線気味に開く円錐形態と下位がやや膨らみ紡錘形に近い形態のものがあるが、明瞭に識別できないため一括した。裾部は柱状部下位から大きく屈折して比較的長く開く形態である。中実と中空の両者がある。整形は多様であるが本器種のみ脚部横方向のミガキが用いられていた。

イ1類 柱状部が裾部に比べ長い形態（裾部長×4 < 脚部長）。裾部の微細形態で外傾・外反するもの（イ1a類）、外反湾曲し端部が強く跳ね上がるもの（イ1a'類）、内傾するもの（イ1b類）があるが、差異は微妙である。本器種には全ての杯部器種が付加されている。

イ2類 柱状部が裾部に比べ短い形態（裾部長×4 ≥ 脚部長）。裾部は外傾・外反して開くものが大半であるが、端部が強く跳ね上がるものもある。本器種には杯部が内湾するA1b・B1b類の杯部が付加されている。

### 高杯脚部ウ類

脚上半柱状部が膨らみ紡錘形となり、裾接合部が高位に位置し直立気味に開く形態。器壁が厚く内面には輪積を残している。本器種にはB1a類が付加されている。

### 高杯脚部エ類

杯接合部から裾接合部にかけて釣鐘形に膨らみ、比較的短い裾部が水平に付加される形態。器壁が厚く内面整には輪積が残る。本器種と杯部が接合した資料はないが、杯深の深い椀形の杯部が想定される。

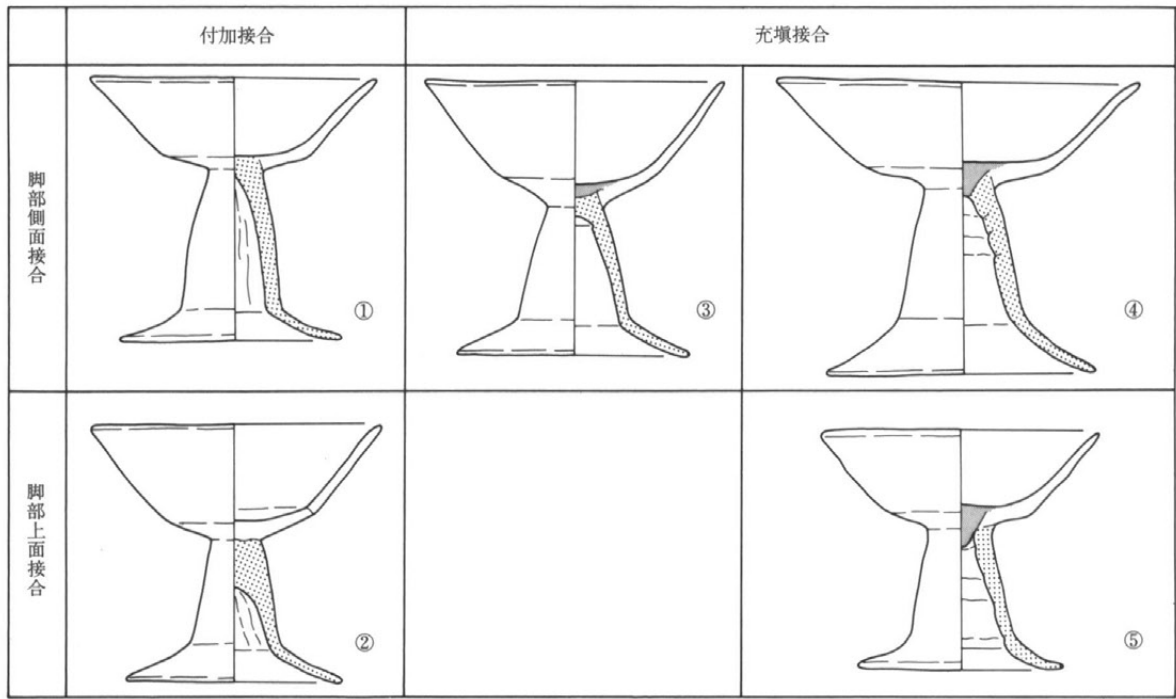
### 高杯脚部オ類

脚上半部と裾部の屈折が不明瞭で杯接合部から端部まで緩やかに「ハ」の字に開く形態。本器種と杯部が接合した資料はないが、椀形もしくは口縁端部が外反屈折する鉢形の杯部が想定される。

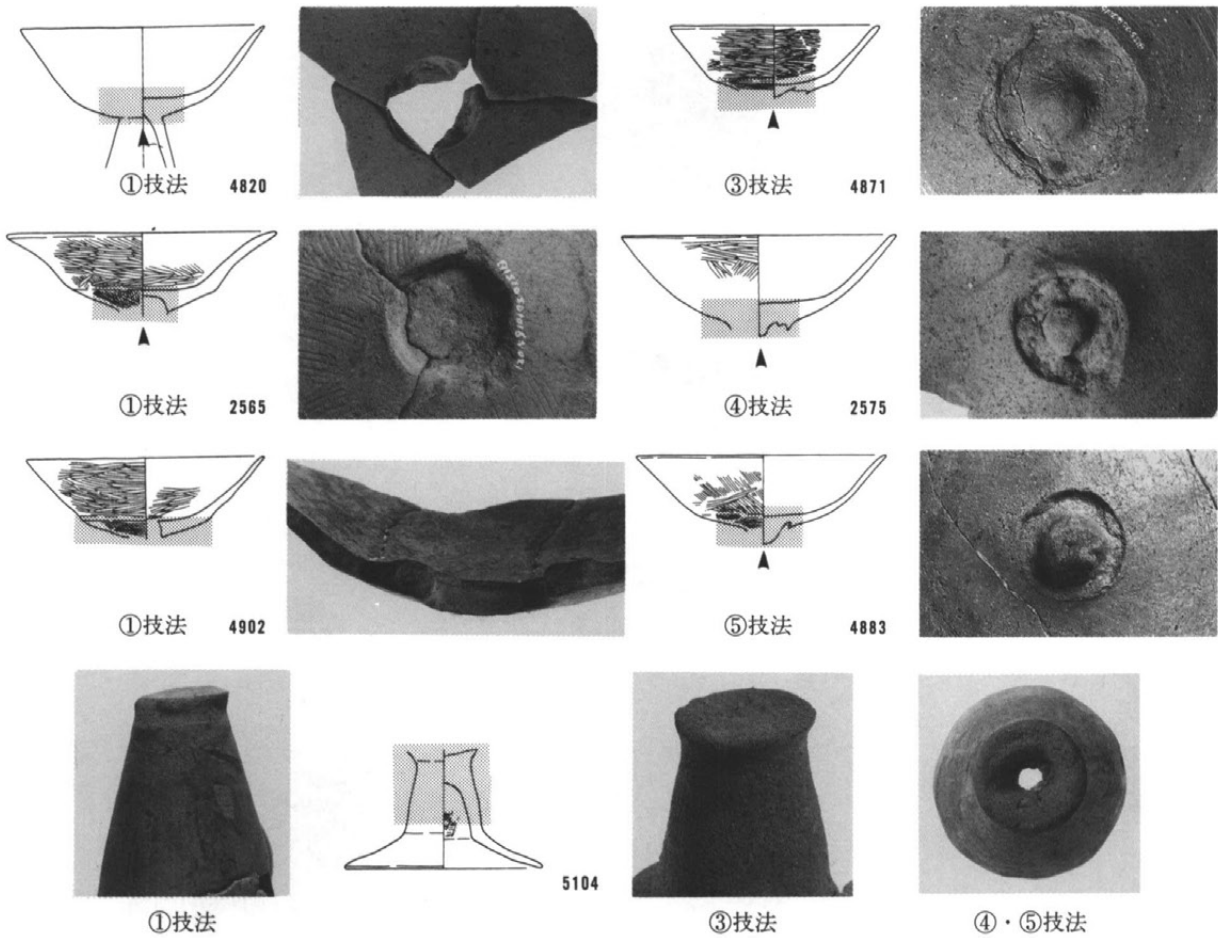
## B 接合技法と整形（第177・178図）

高杯は複数の破損状況から杯部と脚部とを別成形して両者を接合し調整整形する2段成形が基本であり、更に杯部と脚部もそれぞれ口縁部と杯下半部、柱状部と裾部の接合から成形されていることが確認された。

本遺跡出土の高杯は接合部から折損した杯部と脚部の接合面の観察から接合技法が付加法と充填法に区分され、脚部への杯部接合面の違い、充填の違いによって5種類に分類された。①は脚部側面に杯部を付加する技法で脚部上面が杯底部となる技法。②は脚部上面に杯部を付加する技法。③は脚部側面に杯部を付加し、更に杯底部に粘土を充填する技法である。この①・②・③は脚部を杯部底面もしくは底面付近まで上部閉塞（中実）して製作することが前提となり、中実柱状脚はこのいずれかに分類される。中空の上部閉塞脚で残存する脚部は少量であったが横ミガキ、内面ケズリなどの整形が施された比較的精緻な高杯にこの技法が多く用いられていた。④・⑤は中空脚に杯部上面から粘土を充填する技法である。④は脚部側面接合、⑤は脚部上面接合であり、杯部外面には充填した粘土突起が明瞭に残されている。



(1 : 5)



第177図 高杯杯部と脚部の接合技法